日本プロレタリア文学大系

6

三一書房

責任編集　平野謙　蔵原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

6

弾圧と解体の時代　上

文化連盟の成立から中日戦争の開始

三一書房

第六巻「弾圧と解体の時代」（上）

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第六巻目次

I 小説

II 評論・声明書

III 詩・短歌・俳句

詩

短歌

俳句

I 小説

党生活者

小林多喜二

一

洗面所で手を洗っていると、丁度窓の下を第二工場の連中が帰りかけたとみえて、ゾロゾロと板草履や靴バキの音と一緒に声高な話声が続いていた。

「まだか?」

その時、後に須山が来ていて、言葉をかけた。彼は第二工場だった。私は石鹸だらけになった顔で振りかえって、心持眉をしかめた。――それは、前々から須山との約束で、工場から一緒に帰ることはお互避けていたからである。そんな事をすれば、他の人の眼につくし、万一のことがあった時は一人だけの犠牲では済まないからであった。ところが、須山は時々その約束を破った。そして「やアあまり怒るなよ」そんなことを云って、人なつこく笑った。

須山はどっちかと云えば調子の軽い、仲々愛嬌のある、憎めないたちの男だったので、私はその度に苦笑した。が、今は時期が時期だし、私は強い顔をみせたのである。それに今日これから新しいメンバーを誘って、何処かの「しるこ屋」に寄る予定にもなっていた……。が、フト見ると、ひょうきんな何時もの須山の顔ではない。私はその時私たちのような仕事をしているもののみが持っているあの「予感」を咄嗟に感じて、――「あ直ぐだ」と云って、ザブザブと顔を洗った。

相手にそれと分ったと思うと須山は急に調子をかえて、「キリンででも一杯やるか」と後から云った。が、それには一応何時もの須山らしい調子があるようで、しかし如何にも取ってつけた只ならぬさがあった。それが直接に分った。

外へ出ると、さすがに須山は私より五六間先きを歩いた。工場から電車路に出るところは、片方が省線の堤で他方が商店の屋並に狭められて、細い道だった。その二本目の電柱に、背広が立って、こっちを見ていた。見ているような見ていないようなイヤな見方だ。私は直ぐ後から来る五六人と肩を並べて話しながら、左の眼の隅に背広を置いて、油断をしなかった。背広はどっちかと云えば、毎日のおきまり仕事にうんざりして、どうでもいいような物ぐさな態度だった。彼等はこの頃では毎日、工場の出と退けに張り込んでいた。須山はその直ぐ横を如何にも背広を小馬鹿にしたように、外開きの足をツン、ツンと延ばして歩

いてゆく。それがこっちから見ていると分るので、可笑しかった。

電車路の雑沓に出てから、私は須山に追いついた。彼は鼻をこすりながら、何気ない風に四囲を見廻し、それから、

「どうもおかしんだ……」

と云う。

私は須山の口元を見た。

「上田がヒゲと切れたんだ……」

「何時だ？」

私が云った。

「昨日。」

ヒゲは「予備線」など取って置く必要のない男だとは分っていたが、

「予備はあったのか？」と訊いた。

「取っていたそうだ。」

彼の話によると、昨日の連絡は殊の外重要な用事があり、それは一日遅れるかどうかで大変な手違いとなるので、S川とM町とA橋この三つの電車停留所の間の街頭を使い、それもその前日二人で同じ場所を歩いて「此処から此処まで」と決め、めずらしいことにはヒゲは更に「万一のことがあったら困る」というので、通りがかりに自分から安全そうな喫茶店を決め、街頭で会えなかったら二十分後にしようと云い、しかも別れる時お互の時計を合わせたそうである。「ヒゲ」そう呼ばれているこの同志は私達の一番上のポストにいる重要なキャップだった。今迄ほぼ千回の連絡をとったうち、（それが全部街頭ばかりだったが）自分から遅れたのはたった二回という同志だった。我々のような仕事をしている以上それは当然のことではあるが、そういう男はそんなにザラには居なかった。しかもその二回というのが、一度は両方に思い違いがあったからで、時間はやっぱり正確に出掛けて行っているのである。モウ一度はその日の午後になってから時計に故障があったことを知らなかったからであった。他のものならば一度位来ないとしても、それ程ではなかったが、ヒゲが来ない、予備にまで来ないという事は私達には全く信ぜられなかった。

「今日はどうなんだ？」

「ウン、昨日と同じ処を繰りかえすことになっているんだって。」

「何時だ。」

「七時――それに喫茶店が七時二十分。で俺はとにかくその様子が心配だから、八時半に上田と会うことにして置いた。」

私は今晩の自分の時間を数えてみて、

「じゃ、オレと九時会ってくれ。」

私達はそこで場所を決めて別れた。別れ際に須山は「ヒゲ、がやられたら、俺も自首して出るよ！」と云った。それは勿論冗談だったが、妙に実感があった。私は「馬鹿」と云った。が彼のそう云った気持は自分にもヨク分った。

――ヒゲはそれほど私たちの仲間では信頼され、力とされていたのである。私達にとっては謂わば燈台みたいな奴だと云っても、それは少しも大げさな云い方ではなかった。事実ヒゲがいなくなったとすれば、第一次の日からして私達は仕事をドウやって行けばいいか全く心細かった。勿論そうなればなったで、やって行けるものではあるが。――私は歩きながら、彼が捕まらないでいてくれればいいと心から思った。

私は途中小さいお菓子屋に寄って、森永のキャラメルを一つ買った。それを持ってやってくると、下宿の男の子供は、近所の子供たちと一緒に自働式のお菓子の出る機械の前に立っていた。一銭を入れて、ハンドルを押すとベース・ボールの塁に球が飛んでゆく。球の入る塁によって、下の穴から出てくるお菓子がちがった。最近こんな機械が流行り出し、街のどの機械の前にも沢山子供が群がっていた。どの子供も眼を据え、口を懸命に歪めて、ハンドルを押している。一銭で一銭以上のものが手に入るかも知れないのだ。

私はポケットをジャラジャラさせて、一銭銅貨を二枚下宿の子供にやった。子供は始めはちょっと手を引ッこめたが、急に顔一杯の喜びをあらわした。察するところ、下宿の子供は今まで他の子供がやるのを後から見てばかりいたらしかった。私はさっき買ってきたキャラメルも子供のポケットにねじこんで帰ってきた。

私は八時までに、今日工場に起ったことを原稿にして、明日撒くビラに使うために間に合わせなければならなかった。それを八時に会うSに渡すことになっている。私は押入の中から、色々な文書の入っているトランクを持ち出して、鍵を外した。――「倉田工業」は二百人ばかりの金属工場だったが、戦争が始まってから六百人もの臨時工を募集した。私や須山や伊藤（女の同志）などはその時他人の履歴書を持って入り込んだのである。二百人の本工のところへ六百人もの臨時工を取る位だから、どんなに仕事が殺到していたか分る。倉田工業は戦争が始まってからは、今迄の電線を作るのをやめて、毒瓦斯のマスクとパラシュートと飛行船の側を作り始めた。が最近その仕事が一段落をつげたので、六百人の臨時工のうち四百人ほどが首になるらしかった。それで此頃の工場では、話がその事で持ち切っていた。皆が「首になる」「首になる」と云うと、「会社では臨時工に首なんかモトモトある筈がない。かえって最初の約束より半月以上も長く使ってやっているじゃないか」と云った。事実約束よりも半月以上も長く働いたが、切ッぱつまった仕事ばかりなのでその間の仕事はとても無理なのだ。女工などは朝の八時から夜の九時まで打ッ通し夜業をして一円〇八銭にしかならなかった。夜の六時から九時までは一時間八銭で、しかも晩飯を食う二十分から三十分までの時間を、会社は夜業の賃銀から二銭或いは三銭

(わざわざ計算をして)差引いてさえいた。——飯を食っていたとき、私は云った、「すると、会社は職工というものが飯を食わないで働かせることの出来るものだッて風に考えているんだネ。」一緒に働いていた臨時工の一人が「ああそうだ……」と云った。その「ああそうだ」がよく出来ているというので、皆は笑った。会社は毎日の賃銀の支払に、四百人近くいる女工に一々その端数の八銭を、五銭一枚に一銭銅貨を三枚ずつつけて払った。それは大変な手間だったのだ。六時に退けても、そのために七時にさえなった。

「糞いまいましい! 八銭を十銭にしたら、どの位手間が省けるか知れねえんだ。何んならこッちから負けて、八銭を五銭にしてやらア。」皆は列のなかでジレジレして騒いだ。「金持の根性ッて、俺達に想像の出来ねえ位執念深いものらしい!」

ところが、臨時工の首切りの時に会社が一人宛十円ずつ出すという噂が立っていた。臨時工だから別に一銭も出さなくてもいい約束だが、皆がよく働いてくれたからというのが其の理由らしかった。それがどの程度の確実さがあるかどうか、とにかく皆は此処をやめると、又暫らくの間仕事に有りつけないので知らずにその事を当てにしていた。だが、晩飯の時間を賃銀から二銭三銭と差引いたり、何百人の人間を平気で一時間以上も待たして、一銭玉を三つずつ並べる会社が、何んで六百人もの人間に十円(大枚十円!)を出すものか。十円を出すという噂を立てさせているのには、明らかに会社側の策略がひそんでいるのだ。そんな噂を立てさせて、首切りの前の職工の動揺を防いで、土俵際でマンまとしてやろうという手なのだ。

それが今日工場で可なり話題になったので、私は明日工場に入れるビラにこの間の事情を書くことにした。一昨日入ったビラに、その前の日皆がガヤガヤ話し合った、賃銀を渡す時間を早くして貰おうというようなことがちゃんと出ていたために(事はそんな些少なことだったが)、皆の間に大きな評判を捲き起したのである。私は机の前に大きな安坐(あぐら)をかいた。

暫らくすると、下のおばさんが階段を上がってきた。「さっきは子供にどうも!」と云って、何時になくニコニコしながらお礼をのべて下りて行った。私たちのような仕事をしているものは、何んでもないことにも「世の人並のこと」に気を配らなければならなかった。下宿の人に、上の人はどうも変な人だとか、何をしている人だろうか、など思われることは何よりも避けなければならない事だった。今獄中で闘争している同志Hは料理屋、喫茶店、床屋、お湯屋などに写真を廻されるような、私達とは比べものにならない追及のさ中を活動するために、或る時は下宿の人達は又「世の人並に」意味のない世間話をしたり、お愛そを云うことが出来なければならない。が、そういうことに

なると私はこの上もなく下手なので随分弱った。この頃では幾分慣れては来ているが……。
私は「やァ、何ァに、少しですよ。」と、おばさんに云ってしまってから赤くなっていた。どうも駄目だ。

原稿用紙で精々二枚か二枚半の分量のものだったが、昼の仕事をやって来てから書くのでは、楽な仕事ではなかった。十円の手当のバク露のことをようやく書き終ると、もう七時を過ぎていた。私はその間何べんも手拭でゴシゴシ顔中をこすった。原稿の仕事をやると、汗をかくのだ。書き終えた原稿を封筒に入れ、表を出鱈目な女名前にして、ラヴ・レターに仕立て、七時四十分に家を出た。「散歩してきます」と云うと、何時も黙っているおばさんが、「行っていらっしゃい」と、こっちを向いて云った。効きめはあらたかだ。私は暗がりに出ながら苦笑した。何時ものように家を出ようとした時、「あんたはヨク出る人ですねえ」と、おばさんが云ったことがある。私はギョッとした。事実毎晩出ていたので、疑えば疑えるのである。私は咄嗟にドギついて、それでも「何んしろ、その……」と笑いながら云いかけると、「まだ若いからでしょう?」と、おばさんは終いをとって、笑った。私はそれで、おばさんはあの意味で云ったのではないことが分って安心した。
八時に会う場所は表の電車路を一つ裏道に入った町工場の沢山並んでいるところだった。それで路には商店の人たちや髪の前だけを延ばした職工が多かった。私は自分の出掛けて行く処によって、出来るだけ服装をそこに適応するように心掛けた。充分なことは出来なかったが、それは可なり大切なことなのだ。私達はいずれにしろ、不審訊問を避けるためにキチンとした身装(みなり)をしていなければならなかったが、然し今のような場所で、八時というような時間に、洋服を着てステッキでもついて歩くことはかえって眼について悪かった。で、私は小ざっぱりした着物に無雑作に帯をしめ、帽子もかぶらずに出たのである。
真直ぐの道の向うを、右肩を振る癖のあるSのやってくるのが見えた。彼は私を認めると、一寸ショー・ウインドーに寄って、それから何気ないように小路を曲がって行った。私はその後を同じように曲がり、それからモウ一つ折れた通りで肩を並べて歩き出した。
Sは私から一昨日入ったビラの工場内での模様を聞いた。色んな点を聞いてから、
「問題の取り上げは、何時でも工場で話題になっていることから出発しているのは良いは良いが、――それらの一歩進んだ政治的取上げという点では欠けている。」
といった。
私はびっくりして、Sの顔を見た。成る程と思った。私はビラの評判の良さに喜んで、それを今度は一段と高いところから見ることを忘れていたのだ。
「だから、つまりみんなの自然発生的な気持に我々までが

随いて歩いてるわけだ。日常の不満から帝国主義戦争の本質をハッキリさせるためには、特別の、計画的な、それになかなか専門的な努力が要るんだ――そいつを分らせることが必要なわけだ……。」

ビラは今迄に沢山出されてきた公式的な抽象的な戦争反対のビラの持っている欠点を埋めようとして、今度は逆に問題を経済的な要求の限度にとどめてしまう誤りを犯していると云った。得てそういう右翼的偏向は、大衆追随をしているので一応評判が良いものだ。従って「評判が良い」という事も、矢張り慎重に考察してみる必要がある。私達は歩きながら、そういう事について話した。

「気をつけるというので、今度は木と竹を継いだようになったら何んにもならない。逆戻りだ！　今迄僕等は眼隠しされた馬みたいに、もの事の片面、片面しか見て来なかったんだ。」

私たちはしばらく歩いてから、喫茶店に入った。

「ラブ・レターをあげるよ。」

私はそう云って原稿をテーブルの下の棚に置いた。――Sはクン、クンと鼻歌をうたいながら、ウエーターを注意しいしい、それをポケットへねじ込んだ。彼は、そして、「君の方からヒゲ（と云って、鼻の下を抑えて見せて。）につかないかな？」と訊いた。

私は工場の帰り須山から聞いたことを話した。Sはワザと鼻歌をクンクンさせながら、しかし眼に注意を集めて聞いていた。

「僕の方も昨日六時にあったが切れたんだ。」

私はそれを聞くと、胸騒ぎがした。

「やられたんだろうか……？」

と私は云った。が実は、いや大丈夫だと云われたいことを予想していた。

「ふむ、――」

Sは考えていたが、「用心深い奴だったからな。」と云った。

私達はどっちからでもヒゲにつく方からつけることにし、それから次の朝のビラの持ち込みの打ち合せをして別れた。

九時、須山に会うと、私はその顔色を見ただけで分った。然しそれでも、まだ全部が絶望だというわけではなかった。須山とも出来るだけの方法をつくして、ヒゲの調査をすることにした。そして直ぐ別れた。

私達は自分のアジト附近での連絡でなかったら、九時半過ぎには一切の用事をしないことにしている。途中が危険だからである。――私は須山とも別れ、独りになり帰ってくると、ヒゲのことが自分でも意外な深さで胸に喰い込んでいることを知った。私は何んだか歩くのに妙な心もとなさを覚えた。膝がゆるんで、息切れさえするようである。

――普通の境遇で生活をしている人には、こういう時の私のこんな現象が幾分の誇張とウソを伴っているとみるかも

知れない。然し外部からすべてを遮断され、個人的な長い間の友達とも全部交渉を断ってしまい、一寸お湯へ行くのにもウッかり出ることが出来ず、且つ捕まったら少くとも六年七年は行く身体では、頼りになるのは同志ばかりである。それは一人でも同志が奪われてみると、その間をつないでいた私達の気持の深く且つ根強かったことを感ずる。それがしかも私達を何時でも指導してきていた同志の場合、時にそうである。――以前ある反動的組合のなかで反対派として合法的に活動していた時は、同じことがあってもこれ程でもなかった。その時は矢張り争われず、日常の色々な生活がそれをまぎらしていたからであろう。

下宿には太田が待っていた。――私は自分のアジトを誰にも知らせないことにしていたが、上の人との諒解のもとに一人だけに（太田に）知らせてあった。それは倉田工業で仕事をするためには、どうしても専任のものを一人きめて、それとは始終会う必要があった。外で会っているのでは即刻のことには間に合わなかったし、又充分なことが（色色な問題について納得が行くようには）出来なかった。

太田は明日入れるビラについて来ていた。それで私はさっきSと打ち合わせてきたことを云い、明朝七時T駅の省線プラットフォームに行って貰うことにした。そこへSがやって来て、ビラを手渡すことになっていた。

急ぎの用事を済ましてから、私達は少し雑談をした。「雑談でもしようか」ニコニコそう云い出すと、「得意のやつが始まったな！」と太田が笑った。用事を片付けてしまうと、私は殆んどきまって「雑談をしようか」と、それも如何にも楽しそうに云い出すので、今ではそれは私の得意の奴という事になっていた。ところが、私は此頃になって、自分がどうして「雑談」をしたがるのか、その理由に気付いた。――私たちは仕事のことでは殆んど毎日のように同志と会っている。が、その場合私たちは喫茶店でも成るべく小さい声で、無駄を省いて用事だけを話す。それが終れば直ぐその場所を出て、成るべく早く別れてしまう。これと同じ状態が三百六十五日繰りかえされるわけである。勿論私はそういう日常の生活形態に従って、今迄の自分の生活の型を清算し、今ではそれに慣れている。然し留置場に永くいると、たまらなく「甘いもの」が食べたくなり、時にはそれが発作的な病気のように来るのがあるのと同様に、私の場合ではその生活の一面性に対する反作用が、仲間の顔をみると時には雑談をしようという形をかりて現れるのであるらしい。だが、この気持は普通の生活をしている太田には、何か別な極めて呑気な私の性格位にしか映っていないし、時々ビヤホールなどで大気焔を挙げられる彼には、私の気持に立ち入り得る筈がなく、時には残酷にも(!)雑談もせずに帰って行くことがあるのである。

太田は「雑談」をすると云って、工場の色々な女工さんの品さだめをやって帰って行った。彼は何時の間にか、沢山の女工のことを知っているのに驚いた。

「女工の惚れ方はブルジョアのお嬢さんのようにネチネチと形式張ったものではなくて、実に直接且つ具体的なので困る！」

そんなことを云った。

「直接且つ具体的」というのが可笑しいので、私たちは笑った……。

二

一度ハッキリと「党」の署名の入ったビラが撒かれてから、倉田工業では朝夕の出入が急に厳重になった。時期が時期だし、製造しているものが製造しているものなので、会社も狼狽し始めたのである。私の横で働いている女工が朝キャッといって駈け込んできたことがある。それは工場の出入の横に何時でも薄暗い倉庫の口が開いているが、女が何気なく其処を通ると、隅の方で黒い着物を頭からかぶった「もの」がムクムクと動き出したというのである。ところが、後でそれが守衛であることが分った。これなどからでも、彼等が如何にアワを食っているか分る。

戦争が始まって若い工場の労働者がドシドシ出征して行った。そして他方では軍需品製造の仕事が急激に高まった。このギャップを埋めるために、どの工場でも多量な労働者の雇入を始めなければならなかった。今迄はたった一人の労働者を雇うのにも厳重な調査をし、身元保証人をきめた上でなければ駄目だった。が、戦争が始まってからは、それをやっていることが出来なくなった。私たちはその機会をねらった。勿論この場合雇い入れるとしても、それは「臨時工」だし、それに国家「非常時」ということを名目としてドシドシ臨時工を使うことは、結局は労働者全体（工場から見れば本工を雇うときに）の賃銀を引き下げるのに役立つのである。だが彼奴等は自分たちの利害のこの両方の板挟みにあって、黒い着物を頭から引っかぶって見張りをしなければならないような馬鹿げた恥知らずの真似に出でざるを得ないのである。

黒い着物はどうでもよかったが、私には待ち伏せしている背広だった。私の写真は各警察に廻っている。私は勿論顔の形を変えてはいるが油断はならなかった。十三年前に写した写真が警察にあったために、一度も実際の人物を見たこともないスパイに捕まった同志がある。仲間のあるものは、私に全然「潜る」ことをすすめる。勿論それに越したことはないが、今迄の経験によると、工場の外にいてその組織を進めて行くことは百倍も困難であって、且つ百分の一の成果も挙がらないのだ。このことは工場にいるメンバーと極めて緊密な連繫がとれている場合にでも云えるのである。我々が「潜る」というのは、隠居するということでは勿論ないし、又単に姿を隠すとか、逃げ廻るということでもない。知らない人は或いはそう考えている。が若しも「潜る」ということがそんなものならば、彼奴等におい

なしく、捕まって留置場でジッとしている方が事実百倍も楽でもあるのだ。「潜る」ということは逆に敵の攻撃から我身を遮断して、最も大膽に且つ断乎として闘争するためである。——勿論仕事の遣り易さとか其他の点から我々が合法的であることは、モッと望ましい。だから私は太田などに云っている、出来るだけ永い間合法性を確保しろ、と。その意味から「潜る」というのは正しい云い方ではなく、私達は決して自分から潜っているのではなくて、彼奴等に潜らされているのに過ぎないのだ……。

そんな状態で、私は敵の前に我と我身の危険を曝らしているので、朝夕の背広には実に弱る。この頃そこに立っている背広が何時も同じ顔ぶれなのでよかったが、遠くから別な顔が立っている時には、自分は歩調をゆっくりにし、帽子の向きを直し、近付く前に自分の知っている顔であるかどうかを確かめる。この第一関門がパッスすると、今度は門衛の御検閲だ。然しそこはビラを持って入るものがこれに引ッ掛からないようにすることだった。太田はそれには女のメンバーを使っていた。太田によると「成るべく女のお臍から下の方へ入れると安全だ」った。彼奴等はまだそこを調べるほどには恥知らずになってはいないらしい。

次の朝、衣服箱を開けると、ビラが入っている！ 波のような感情が瞬間サッと身体を突走ってゆく。職場に入って行くと、隣りの女がビラを読んでいた。小学生のように一字一字を拾って、分らない字の所にくると頭に小指を入れて掻いていた。私を見ると、

「これ本当！」

と訊いた。十円のことを云っているのだ。

私は、本当も本当、大本当だろうと云った。女は、すると、

「襲いまいましいわネ。」

と云った。

工場では私は「それらしくない人間」として浮き上っている。私はビラの入る入らないに拘らず、みんなが会社のことを色々としゃべり合っている事についてはその大小を問わず、何時でも積極的に口を入れ、正しいハッキリした方向へそれを持ってゆくことに心掛けていた。何か事件があったときに、何時でも自分達の先頭に立ってくれる人であるという風な信頼は普段からかち得て置かなければならないのである。その意味で大衆の先頭に立ち、我々の側に多くの労働者を「大衆的に」獲得しなければならぬ。以前、工場内ではコッそりと、一人々々を仲間に入れて来るようなセクト主義的な方法が行われていたが、その後の実践で、そんな遣り方では運動を何時迄も大衆化することが不可能であることが分ったのである。

仕事まで時間が少し空いていたので、合に固まって話し合っている皆の所へ出掛けようとしていると、オヤジがやって来た。

「ビラを持っているものは出してくれ！」

みんなは無意識にビラを隠した。
「隠すとかえって為めにならないよ。」
オヤジは私の隣りの女に、
「お前、さ、出しな。」
と云った。
女は素直に帯の間からビラを出した。
「こんな危いものをそんなに大切に持ってる奴があるか！」と、オヤジが苦笑した。
「でも、会社は随分ヒドイことをしてるんだね、おじさん！」
「それだ――それだからビラが悪いって云うんだよ！」
「そう？　じゃやめる時、本当に十円出すの？」
オヤジは詰って、
「そんなこと知るもんか。会社に聞いてみろ！」
と云った。
「何時かおじさんだってそう云ってたんじゃないの！　あ、矢張りビラのこと本当なんだ！」
女のその言葉で、職場のものはみんな笑い出した。
「よオよオ、しっかり！」
誰かそんなことを云った。
オヤジは急に真ッ赤になり、せわしく鼻をこすり、吃ったままカンカンに出て行った。――それで私たち第三分室は大声をあげた。事は小さかったが、そのためにオヤジの奴め他のものからビラを取りあげるのを忘れて出て行ってしまった。

その日、仕事が始まってから一時間もしないとき、私は太田が工場からやられて行ったという事を聞いた。ビラを持って入ったことが分ったらしい。

太田は――何より私のアジトを知っている！

彼は前に、事があったら三日間だけは頑張ると云っていた。三日間とは何処から割り出したんだいと訊くと、みんながそう云っていると云った。その頃「三日間」というのが何故か一つのきまりのようになっていた。私はその時引き続き冗談を云い合ったが、フト太田の何処かに弱さを感じたことを覚えている。太田が捕まったときいたとき、私の頭にきた第一のことはこの事だった。

私の知っている或る同志は、自分と同居していたものが捕まったにも拘らず、平気でそのアジトに寝起していた。私や他のものは直ぐ引き移らなければ駄目だと云った。するとその同志は奇妙な顔をした。案に違わず五日目にアジトを襲われた。その時同志は窓から飛んだ。飛びは飛んだが足を挫いてしまった。彼は途中逃げられないように真裸にされて連れて行かれた。彼が警察の留置場に入って、前にやられた仲間を一眼見ると「馬鹿野郎！　だらしのない奴だ！」と怒鳴りつけた。ところがその仲間は、逆に自分がやられているのにのんべんだらりと逃げもしない「だらしのない奴」だと思い、相手にそう云おうと思っていたと

いうのである。後でその同志が出てきたとき、私たちは、だから云わないことじゃ無かったんだ、分っていて捕まるなんて統制上の問題だぞと云った。すると彼は、あいつ(前に捕まった仲間)がしゃべったからだ、一体一言でも彼奴等の前でしゃべるなんて「君、統制上の問題だぜ!」と云いかえした。事実その同志は取調べに対しては一言もしゃべらなかった。その同志にとってはしゃべるという事は始めから考え得られないことだったし従って他のものもしゃべるなどとは考えもしなかったので、「のんべんだらり」とアジトにいたのだ。私はこの時誰よりも一番痛いところをつかれたと感じた。アジトを逃げろと云ったのは、自分が若し捕まったら三日か四日目にアジトを吐くという敗北主義を自認していることになるのだが、これはおよそボルシェヴィキとは無縁な態度である。これはＡＢＣだ。その後私たちはその同志の態度を尺度とする規約を自分自身に義務づけることにした。が今あの頼りない太田を前にしては、私はこの良き意味での「のんべんだらり」をアジトで極め込んでいるわけには行かぬ。私は即刻下宿を引き移らなければならなかった。

それにしても、私は矢張りアジトは誰にも知らせない方がよかった。嘗つて、私達の優れた同志が「七人」もの人に自分の家を知らせ、出入りさせていた。その中には同志ばかりか単なる「シンパ」さえいた。そのためにその優れた同志はアジトを襲われた。――そんな例がある。私たちは世界一の完備を誇っている警察網の追及のなかで仕事を行っていることを何時でも念頭に置かなければならぬ。

ただ良かったことは、須山と伊藤ヨシのことを太田が知っていなかったことだ。私は仕事をうまく運ぶために彼に、二人が我々の信用していい仲間であることを知らせようと思ったことがあった。然しその時自分は後のことを考え、やめたのである。一つは弾圧の波及を一定限度で防ぐためであり、他は単に誰々がメンバーであるという慣れあいによって仕事をして行こうとする危険な便宜主義に気付いたからだった。

工場の帰りに私は須山と伊藤ヨシと一緒になり、緊急に「しるこ屋」で相談した。その結果、私は直ちに(今夜のうちに)下宿を移ること、工場は様子がハッキリするまで休むこと、残った同志との連絡をヨリ緊密にし、二段三段の構えをとることに決まった。「今日はまだ大丈夫だろう」とか、「まさかそんな事はあるまい」というので今までに失敗した沢山の同志がある。以上の三つの事項は「工場細胞」の決定として私が必ず実行することを申し合わせた。そして伊藤と須山は貰って来たばかりの日給から須山は八十銭、伊藤は五十銭私のために出してくれた。

須山は何時もの彼の癖で、何を考えたのか神田伯山の話を知っているかと私に訊いた。私は笑って、又始まったなと云った。彼の話によると、神田伯山は何時でも腹巻きに現金で百円はどんな事があろうと手つかずに(死ぬ迄)持

っていたというのである。それは、彼が人間は何時どんな処で災難に打ち当らないものとは限らない、その時金を持っていないばかりに男として飛んでもない恥を受けたら大変だと考えていたからだそうである。

「同じことだ、金が無くて充分の身動きが出来ないために捕まったとなれば、それは階級的裏切だからな！」

そう云って、彼は「我々は彼等の経験からも故訓を引き出すことを学ばなくてはならないんだ」と、つけ加えた。私と伊藤は、そういうことを色々と知っている須山の頭は「スクラップ・ブック（切抜帖）」みたいだというので笑った。

私は実にウカッに私の下宿に入る小路の角を曲がった。だが本当はウカツでもなんでもなかったのだろう。私は第一こんなに早く太田が私の家を吐こうなどとは考えもだに及ばなかったからである。私はギョッとして立ちすくんだ。二階の私の室には電燈がついている！　そして、その室には少なくとも一人以上の人の気配のあることが直感として来た。張り込まれていることは疑うべくもなかった。だが、室の中には色々と持ち出したいものがある。次の日から直ぐ差支えるものさえあった。――私は然しこの「だが」がいけないと、直ぐ思いかえした。

私には今直ぐと云えば、行く処はなかった。今迄の転々とした生活で、知り合いの家という家は殆んど使い尽してしまっていたし、そういう処は最早二度の役には立たなかった。私はまず何よりこの地域を離れる必要があるので、電車路に出ると、四囲を注意してから円タクを拾った。別に当ての無い処だったが、

「S町まで二十銭。」

と云った。

その時フト気付いたのだが、私は工場からの帰りそのまゝまだったので、およそ円タクには不調和な服装をしていた。――私は円タクの中で考えてみた。が、矢張り見当がつかない。私は焦り、イライラした。ただ、私には今まで一二度逃げ場所の交渉をして貰った女がいた。その女は私が頼むと必ずそれをやってくれた。女はある商店の三階に間借りして、小さい商会に勤めていた。左翼の運動に好意は持っていたが、別に自分では積極的にやっているわけではなかった。女の住所は知っていたが、女一人のところへ訪ねて行くのも変であったので、私は今迄用事の時は商会に電話をかけて、それで済ましていた。が、私には今その女しか残されていない、そんなことを考顧してはいられなかった。――私はS町で円タクを捨てると覚悟を決め、市電に乗った。

成るべく隅の方へ腰を下して、膝の上に両手を置いた。それから気付かれないように電車の中を一通り見渡してみた。幸いにも「変な奴」はいない。私の隣りでは銀行員らしい洋服が「東京朝日」を読んでいた。見ると、その第二

面の中段に「倉田工業の赤い分子検挙」という見出しのあるのに気付いた。何べんも眼をやったが、本文は読めなかった。――それにしても、電車というもののの ろさを私は初めて感じた。それは居ても立ってもいられない気持だ。

用心のために停留所を二つ手前で降り、小路に入って二三度折れ曲がり、又小路に入ったりしたので少し迷った。初めてではありそれに女のところへ行った。それを自分の手でたたいて店先にはお爺さんが膏薬の貼った肩を出して、そこを自分の手でたたいていた。上の笠原さんがいますか、と訊くと、私の顔を見て黙っている。二度目に少し大きな声を出した。すると、障子のはまった茶の間の方を向いて何か分らないことを云った。誰か腰の硝子からこっちを覗いた。

「さア、出て行きましたよ。」

内でうさん臭く云った。

私は、ハタと困ってしまった。何時頃かえるのでしょうかと訊くと、そんな事は分らんと云う。私の人相（身装）を見ているなと思った。どうにも出来ず、私はそこに立っていた。然し仕様がなかった。私は九時頃に又訪ねてみると云って外へ出た。出てから三階を見上げると、電燈が消えている。私は急にがッかりした。

夜店のある通りに出て本を読んでみたり、インチキ碁の前に立ってみたり、それから喫茶店に入って、二時間という時間をようやくつぶして戻ってきた。角を曲がると、三階の窓が明るくなっていた。

私は笠原に簡単に事情を話して、何処か家が無いかと訊いた。然し今迄彼女はもう殆んど知っている家は私のために使ってしまっていた。商会の女の友達も二三人はいるが、それはこッちの運動のことなどは少しも分っていないし、「それにみんなはまだ独り」だった。笠原はしきりに頭を傾げて考えていたが、矢張り無かった。時計をみると十時近い。十時過ぎてから外をウロつくのは危険この上もなかった。それに私はまだナッパ服のままなので、一層危険だった。女の友達なら沢山頼めるところがあるのだが、「君、男だから弱る」と笠原は笑った。私も弱った。然しいずれにしろ私は捕まってはならないとすればたった一つのことが残されていた。それを云い出すには元気が必要だったが。

「ここは、どうだろう……？」

私は思い切って云い出したが、自分で赤くなり、吃った。――人には大胆に見えるだろうが、仕方がなかった。

「…………！」

笠原は私の顔を急に大きな（大きくなった）眼で見はり、一寸息を飲んだ。それから赤くなり、何故かあわてたように今まで横坐りになっていた膝を坐り直した。

しばらくしてから彼女は覚悟を決め、下へ降りて行った。S町にいる兄が来たので、泊って行くからとことわって来た。だが、兄というのがどう考えても可笑しかった。彼女は簡素だが、何時でもキチンとした洋装をしていて、

髪は半断髪(?)だった。そこにナッパを着た兄でもなかった。彼女がそう云うと、下のおばさんは子供っぽい笠原の上から下を、ものも云わないで見たそうである。彼女はさすがに固い、緊張した顔をしていた。普通の女にとってただ男が泊るということでも、それは只事ではなかったのであろう。

そういう風に話が決まると、二人とも何んだか急にぎこちなくなり、話が途切れてしまった。私は鉛筆と紙を借り、次の日のプランを立てるために腹ン這いになった。即刻太田の補充をすること、太田の検挙のことをビラに書きいれて倉田工業の全従業員に訴えること。私は原稿を鉛筆を嘗め嘗め書いた。フト気付くと、女が自分から「もう寝ましょう」と云えないでいることに気付いた。それで、

「君何時に寝るんだい?」

と訊いてみた。

すると「大抵今頃……」と云った。

「じゃ寝ようか。僕の仕事も一段落付いたから。」

私は立ち上がって、あくびをした。

蒲団は一枚しか無かった。それで私は彼女が掛蒲団だけを私へ寄こすというのを無理に断って、丹前だけで横になった。電燈を消してから、女は室の隅の方へ行って、そこで寝巻に着換えるらしかった。

私は今迄(自分の家を飛び出してから)色々な処を転々として歩いたので、こういう寝方には慣れていたし、直ぐ眠れた。然し女のところは初めてだった。さすがに寝つきが悪かった。私はウトウトすると夢を見て直ぐ眼をさました。それが何べんも続いた。見る夢と云えば、追いかけられている夢ばかりだった。夢では大抵そうであるように、仲々思うように逃げられない。そして気だけが焦る。あ、あっ、あっ、あ、あ……と思うと、そこで眼が覚めた。

ジッとしていると、頭の片方だけがズキン、ズキンと鈍くうずいた。私は殆んど寝たような気がしなかった。そして何べんも寝がえりを打った。然し笠原は朝までただの一度も寝がえりを打たなかったし、少しでも身体を動かす音をさせなかったようである。私は、女が最初から朝まで寝ない心積りでいたことをハッキリとさとった。

それでも私は少しは寝たのだろう。眼をさますと、笠原の床はちゃんと上げられて、彼女は炊事で下に降りているのか、見えなかった。しばらくして、笠原は下から階段をきしませて上がってきた。そして「眠れた?」と訊いた。

「あ」と私は何んだかまぶしく、それに答えた。

下宿は笠原の出勤時間に一緒に出た。下のおばアさんは台所にいたが、その時手を休めて私の後を見送った。外に出るや否や、笠原は恰かも昨日からの心配事を一気に吐き出すように、

「あ——あ!」

と、大きな声を出した。それから「クソばばア!」と、そッとつけ加えた。

三

その夜Sに会ったとき、昨夜のことを話すと、そいつは悪いと云って、間借りの金を支度してくれた。私は家を見付けて置いたので、須山と伊藤に道具を揃えてもらって、直ぐ引き移ることにした。はじめ倉田工業と同じ地区にするのが良いか悪いかで随分迷った。同じ地区だと可なり危険性がある。然し他の地区ということになれば交通費の関係上困った。こんな場合は勿論他の地区の方がよかったが、然し警察は案外私が他の地区に逃げこんだと思っているかも知れない。だから彼奴等の裏をかいて、同じ地区にいるのも悪くないと思った。嘗ってこんな事がある。今ロシアに行っている同志のことであるが、その同志は他の同志が江東方面で活動している時は反対の城西方面に出没しているという噂を立てさせる戦術をとっているという話を聞くと、そいつは拙い、俺ならば江東にいる時には、かえって江東にいるという噂を立てさせると云ったそうだ。私はこの地区ではまだ具体的にはスパイに顔を知られていなかった、それに工場もやめたので経済的な根拠から同じ地区に下宿を決めることにした。

下宿はどっちかと云えば、小商人の二階などが良かった。殊にそれが老人夫婦であれば尚よかった。その人たちは私たちの仕事に縁遠いし、二階の人の行動には、その理解の限度がある。なまじっか知識階級の家などは、出入や室の中を一眼見ただけでも、其処に「世の常の人」らしからぬ空気を鋭敏に感じてしまうからである。然し、警察どもは小商人などのところへは度々戸籍調べにやって来て、無遠慮な調べ方をして行く代りに、門構でもあるような家には二度のところを一度にし、それもただ「変ったことがありませんか」位にとどめる。——今度の下宿はその中間をゆく家だった。おばさんはもと待合をしていたことがあるとか云って、誰かの妾をしているらしかった。

須山や伊藤から荷物を一通り集めて、ようやく落付くと私はホッとした。ただ下の室に同宿の人がいるのが欠点だった。それで、第一にその人がどんな人か知る必要があった。私は便所へ降りて行った。同宿の人の室の障子が開いて居り、その人はいなかった。私は何より本箱に眼をやった。これは私が新しい下宿に行って、同宿のある時に取る第一の手段だった。本箱を見ると、その人が一体どういう人か直ぐ見当がつくからである。——本箱には極く当り前の本ばかりが並んでいた。何処かの学校の先生らしく、地理とか、歴史の本が多かった。ところが、机の上に「日本文学全集」が載っていた。フト見ると、「片岡鉄兵」や「葉山嘉樹」などの巻頭の写真のところが展げられたままになっていた。然しその種の本はそれ一冊だけで、その他には持っていないらしかった。

僕たちの仲間で、折角移ってきたところが、その下宿の

主人が警察に勤めている人であったという例が沢山ある。が下宿の主人の商売がすぐ分るのはよい方で時には一ヵ月も分らないままでいることさえある。「御主人は何商売ですか」というこの単純な問いも、こっちがこっちだけに、仲々淡白には訊けないのだ。

私はおばさんにお湯屋の場所をきいて、外へ出た。第二段の調査のためである。まず毎日出入りする道に当る家並の門札を、石鹸とタオルを持った恰好で、ブラブラと見て歩いた。五六軒見て行くと、曲り角に「警視庁巡査――」の名札があった。然しそれは大きな邸宅の裏門に出ているので、大して心配が要らない。お湯屋から出ると、今度はその辺にある小路や抜け路を調べて帰ってきた。一般にこの市は（他の市もそうかも知れないが）奇妙なことには、工場街と富豪の屋敷街がぴったりくっついて存在しているということである。今度のところも倉田工業のある同じ地区にも拘らず、ゴミゴミした通りから外れた深閑とした住宅地になっていた。それにいいことには、深閑とした長い一本道を行くと直ぐにぎやかな通りに続いていることで、用事を足して帰ってきても、つけられているか居ないかが分ったし、家を出てしまえば直ぐにぎやかな通りに紛ぎれ込んでしまえるので、案外条件が良かった。

二階の私の室の窓は直ぐ「物干台」に続いていた。そして隣りの家の物干までには、一またぎでそこからは容易く別な家の塀が越せることが分った。私はそれで草履一足買ってきて、窓を開いたら直ぐ履けるように、物干台に置くことにした。ただ困ったことは、この辺の家は「巴里の屋根の下」のように立て込んでいるので、窓を少しでも開くと、周囲の五六軒の家の人たちやその二階などを間借りしている人たちに顔を見られる危険性があった。それらの家の職業がハッキリするまで、私は四方を締め切って坐り込んでいなければならなかった。それで私は世間話をするために、下へ降りて行った。世間話から近所の様子を引き出そうと思ったのである。

聞いてみると法律事務所へ通っている事務員、三味線のお師匠さん、その二階の株屋の番頭さん、派出婦人会、其他七八軒の会社員、ピアノを備えつけている此の辺での金持の家などだった。下宿を決めた夜のうちに、隣近所のことがこれだけ分ったということは大成功である。或いは口喧ましい派出婦人会だけを除くと、まず周囲はいい方と云わなければなるまい。

ただ、今までの経験で、アジトを襲われたり、アジトに変なことがあったりしたら直ぐ出掛けて行ける宿所を作って置かなければならない。どんなに安全そうに見えても、それは少しも何時までもの安全を意味してはいない。事実、私はこの前の前の下宿で、移ってから二日目だというのに、お湯へ行って帰ってくると、一本道で、下宿の前に洋服を着た男が立っているのだ。そこは一本道で、私はその男を発見したが、そこからは引ッ込みのつかないほど間近に来てし

まっていた。私は仕方なしに、身体をフラフラと振り、濡れ手拭を眼につくように垂らし、ウロ覚えの「幻の影をしたいて、はるばると……」を口笛で吹いて、下宿には入らずに通り過ぎた。洋服の男は私の方を見たようだったが、その見方は張り込んでいる見方にしては、何処か不審なところがあるように思われた。私は暫らく来てから振りかえってみた。が、男は未だ立って居り、こっちを見ている。私はその夜同志のところへ転げこんだ。その同志は経験のある同志で、第一にそんな張り込み方がないこと、第二に新しく移ってきて二三日もしないうちに、何等かの予備的調査もなくやってくるという事は有り得ないという判断から、次の日人を使って調べたら、何んでもないことが分ったが。とにかく即刻やってくる災害に対して即刻に応じ得れる第二段の構をして置くことが常に必要である。私は次の連絡のとき、笠原にこのことを依頼した。

仕事は直ぐ立ち直った。太田のあとは伊藤ヨシが最近メキメキと積極的になったので、それを補充することにした。弾圧の強襲が吹き捲っているときに、積極性を示すものは仲々数少なかったのだ。彼女は高等程度の学校を出ていたが、長い間の（転々としてはいたが）工場生活を繰りかえしてきたために、そういう昔の匂いを何処にも持っていなかった。この女は非合法にされてからは、いつでも工場に潜りこんでばかりいたので、何べんか捕まった。それが彼女を鍛えた。潜るとかえって街頭的になり、現実の労働者の生活の雰囲気から離れて行く型と、この伊藤は正反対を行ったのである。伊藤は警察に捕まる度に母親が呼び出され引き渡されたが、半日もしないうちに又家を飛び出し潜って仕事を始めた。母親はその度に「今度は行ってお呉れでないよ」と頼んだのだが。母親は、それで娘が捕まったから出頭しろという警察の通知が来ると喜んだ。そして警察では何べんもお礼を云って帰ってきた。三度目か四度目に家へ帰ったとき、伊藤は久し振りで母親と一緒に銭湯に行った。彼女はだんだん仕事が重要になって行くし、これからは今までのように容易く警察を出れることも無くなるだろうというような考もあったのである。それは陰ながらお別れであったわけである。ところが母親はお湯屋で始めて自分の娘の裸の姿を見て、そこへヘナヘナと坐ってしまったそうである。伊藤の体は度重なる拷問で青黒いアザだらけになっていた。彼女の話によると、そのことがあってから、母親は急に自分の娘に同情し、理解を持つようになったというのである。「娘をこんなにした警察などに頭をさげる必要はいらん！」と怒った。その後、交通費や生活費に困り、仕方なく人を使って母親のところへ金を貰いに行くと、今迄は帰って来なければ「金は渡せん」といったのに、二円と云えば四円、五円と云えば七八円も渡してくれて、「家のことは心配しなくてもいい」と云うようになった。「ただ貧乏人のためにやっているというだけで、

罪もない娘をあんなに殴ぐったりするなんてキット警察の方が悪いだろう」と母親は会う人毎にそう云うようになっていた。――自分の母親ぐらいを同じ側に引きつけることが出来ないで、どうして工場の中で種々雑多な沢山の仲間を組織することが出来るものか。このことに多くの本当のことが含まっているとすれば、伊藤などはそれである。未組織をつかむ彼女のコツには、私は随分舌を巻いた。少しでも暇があると浅草のレビュウへ行ったり、日本物の映画を見たり、プロレタリア小説などを読んでいた。そして彼女はそれを直ちに巧みに未組織をつかむときに話題を持ち出して利用する。(余談だが、彼女は人眼をひくような綺麗な顔をしているので、黙っていても男工たちが工場からの帰りに、彼女を誘って白木屋の分店や松坂屋へ連れて行って、色々のものを買ってくれた。彼女はそれをも極めて落着いてよく利用した。)

彼女は人の意見をよく聞く素直な女だったが、自分の今迄何十ぺんという経験のふるいを通して獲得してきた方法に対しては、石みたいに頑固だった。今このような女の同志は必要だった。殊に倉田工業の七〇%(八百人のうち)が女工なので、その意義が大きかったのだ。

私は倉田工業の他に「地方委員会」の仕事もしていたし、ヒゲのやられたことが殆んど確実なので、新たにその仕事の一部分をも引き受けなければならなかった。急に忙がしくなった。が、アジトが確立した上に、工場の生活がなくなったので、充分に日常生活のプランを編成して、今迄よりも精力的に仕事に取りかかることが出来た。

工場にいたときは、工場のなかの毎日々々の「動き」が分り、それは直ぐ次の日のビラに反映させることが出来た。今その仕事は須山と伊藤が責任を引き受けてやっている。最初私は工場から離れた結果を恐れた。ところが、須山たちと密接な組織的連繫を保っていることによって、浮き上がる処か、面白いことには逆に、離れてみて須山や伊藤や(そして今までの私も)眼先だけのことに全部の注意を奪われていて、常にヨリ一歩発展的に物事を見ていなかったと云える。実はある固定した枠内で蚤取眼を見張っているようで、非常に精細な見方をしていたということが分るのである。勿論それは私がヨリ展望のきく「地方委員会」などの仕事をしているというところから来ているが。従って、私は自分の浮き上りということを恐れる必要がないことが分った。

私がまず気付いたことは、八百人もいる工場で、四五人の細胞だけが懸命に(それは全く懸命に!)活動しようとしている傾向だった。それは勿論四五人であろうと、細胞の懸命な活動がなかったら、工場全体を動かすことの出来ないのは当然であるが、その四五人が懸命に働いて工場全体を動かすためには、工場の中の大衆的な組織と結合すること(或いはそういうものを作り、その中で働くこと)を具体的に問題にしなければならない。そのための実際の計

画を考顧しなかったなら、矢張りこの四五人の、それだけで少しも発展性のない、独り角力に終ってしまうのだ。——ところが、実際には臨時工の女工たちは、私達は折角知り合っても又散り散りバラバラになってしまう。袖触れ合うも他生の縁というので、臨時工の「親睦会」のようなものを作ろうとしている。又臨時工と本工とが賃銀のことや待遇のことで仲が悪いのは、会社がワザとにそうさせているのであって、中には「合い見、互い見」で、仲間になっているものさえある。これらはホンの一二の例でしかない。だが、若しも細胞がそれらの自然発生的なものをモッと大きなものに（組織に）するために努力し且つその中で（自分たち四五人の中でなしに）働くことを知ったら、近々の六百人もの首切りに際して工場全体を動かすことは決して不可能なことではないのである。

殊に倉田工業が毒瓦斯のマスクやパラシュートや飛行船の側などを作る軍需品工場なので、戦争の時期に於いてはそこに於ける組織の重要なことは云う迄もないのだ。私達は戦争が始まってから、軍需品工場（それは重に金属と化学である）と交通産業（それは軍隊と軍器の輸送をする）に組織の重心を置いて、仕事を進めて来た。そして倉田工業には私や須山、太田、伊藤などが入り込んだわけだった。ただ、この場合私達はみんな臨時工なので、モウ半月もしないうちに首になる。私達はその間に少しでも組織の根を作って置かなければならない。そのためには本工を獲得することが必要だった。そうすれば私達が首になったとしても、残っている組織の根と緊密な外部からの連繋によって、少しの支障もなく仕事を継続することが出来る。それでどんな小さい話題からでも、常に本工と臨時工を接触させ、その結合をはかる方向をとることを決めた。然し同時に臨時工の間の組織も、彼等が首になって又何処かの工場を探しあて、それぞれの職場に入り込んで行く人間なので、それは謂わば胞子だった。従って臨時工の一人々々とは後々までも決して離れてはならなかった。——私達はこれらの仕事を、首になる極く短かい期間にやってしまわなければならなかった。

二三日して須山と街頭を取っていると、向うから須山が奇妙な手の振り方をしてやってきた。彼は何かあると、よくそんな恰好をした。会ってからゆっくり話すということなどは、とても彼には歯がゆいらしく、すぐ動作の上に出してしまった。私は何かあったな、と思った。私は途中の小路を曲がってくると、本当はモウ一つの小路を曲がってからお互いに肩を並べて歩くことになっているのに、須山はモウ小走りに、やアと後から声をかけた。

「太田からレポがあったんだ！」と云う。

私は、道理で、と思った。

レポは中で頼まれたと云って、不良が持ってきた。倉田工業から電車路に出ると、その一帯は「色街」になってい

た。電車路を挾んで両側の小路には円窓を持った待合が並んでいる。夜になると夜店が立って、にぎわった。そしてその辺一帯を「何々」組の何々というようなグレ（不良）が横行していた。ところが「フウテンのゴロ」というのが脅迫罪でN署に引っ張られたとき、檻房で偶然太田と一緒になった。それでフウテンのゴロが出て来るときに、彼は私たちの知っているTのところへレポを頼んだのである。

それによると、私が非常に追及されていること、それから眼鏡をかけていることさえも知られていること、ロイドあんな奴は少し金さえかけれは直ぐ捕まえる事が出来ると云っているから充分に注意して欲しいとあった。それを聞いて私は、

「反対に、太田が何もかもしゃべったから、俺が追及されてるんだ」

と云った。

「そうだよ、君がロイドの眼鏡をかけているかいないかは、パイの奴が君だと分って君と顔をつき合わせない以上分らないことじゃないか――」

と、須山も笑った。

それで私達は太田のレポは自分のやったことを合理化するために書かれているということになった。そんなことよりも、私達は太田が警察でどういうことを、どの程度まで陳述しているかということが知りたいのだ。それによって、私達は即刻にも対策をたてなければならぬではないか。私は、太田はこのようではキット早く出てくるが、こういう態度の奴は一番気をつけなければならぬ、と思った。

然し工場では、働いているところから太田が引張られただけ、それは尠なからず衝動を与えた。今迄ビラを入れてくれていた人はあの人であったのか、という親しい感動を皆に与えた。しかも、事ある毎にオヤジから「虎」（ウルトラという意味）だとか、「国賊」だとか云われていた恐ろしい「共産党」が太田であり、それは又自分たちには見えない遠い処の存在だと思っていたのに、毎日一緒にパラシュートの布にアイロンをかけて働いていた太田であることが分ると、皆はその意外さに吃驚した。「太田さんは何時でも妾達のことばかり考えてくれて、それで引張られて行った人だから、工場の有志ということにして、何んか警察に差入れしてあげようよ」伊藤ヨシは太田の事件を直ぐそんな風にとりあげて、金や品物を集めた。七人程がお金を出した。その中には太田を好きだという女もいた。ヨシは太田のことからビラの話をし、工場の仕事の話などから、とうとう八人ほどを仲間にすることに成功した。彼女は長い間の工場生活から、どんなことを取り上げると皆がついて来るか知っていた。それにパラシュートの方は殆んど女ばかりだったので、太田などはなかなか「評判」だった。彼女はそれをも巧みにつかんだのだ。彼女は八人のうちから積極的なのを選んで、「倉田工業内女工有志」という名を

出して、警察に差入にやった。サルマタ、襦袢、袷、帯、手拭、チリ紙、それに現金一円。警察では、その女をしばらく待たして置いてから、中で太田が志は有難いが、考える処あって貰えないと云っているから持って帰れと云った。慣れない女は仲間の四五人と一緒に、その差入物を持って帰ってきた。伊藤は自分が以前警察で、勝手にそんなカラクリをさせられた経験があるので、もう一度警察に行って、無理矢理に差入物を置かせて来た。——ところが、後で須山から太田のことを聞かせられて、彼女はカンカンに怒った。

　太田などは、自分の心変りや卑屈さが、自分だけのことと考えているだろう。だが、それは沢山の労働者の上に大きな暗いかげを与えるものだ、と云うことを知らないのだ。彼奴は個人主義者で、敗北主義者で、そして裏切者だ。彼はそれに未だ警察に知れていない私の部署、その後の私の行動に就いてもしゃべっているのだ。とすれば、私がこれから倉田工業の仲間たちと仕事をして行くことは十倍も困難になってくるわけである。——私達はこうして、敵のパイ共からばかりでなく、味方のうちの「腐った分子」によっても、十字火を浴びせられる。その日交通費もあまり充分でなかったので、歩いて帰った。途中私の神経は異常に鋭敏になっていた。会う男毎にそれがスパイであるように見えた。私は何べんも後を振りかえった。太田の「申上げ」によって、彼奴等は私を捕かもうとして、この地区を厳重に見張りしているのだ。ヒゲの話によると、（前に話したことがあった）彼奴等は私達一人を捕かむと五十円から貰えるということだ。彼奴等はそのエサに釣られて、夢中になっているだろう。——だが、こういう落付かない時は、えて危いと思った。私はつかまってはならない。私は「しるこ屋」に入ってゆっくり休み、それから帰ってきた。

　私達は退路というものを持っていない。私たちの全生涯はただ仕事にのみうずめられているのだ。それは合法的な生活をしているものとはちがう。そこへもってきて、このような裏切的な行為だ。私たちはそれに対しては全身の憤怒と憎悪を感じる。今では我々は私的生活というべきものを持っていないのだから、全生涯的感情をもって（若しもこんな言葉が許されるとしたら）、憤怒し、憎悪するのだ。

　私はムッとしていたらしい。下宿の出入りには、おばさんに何時もちァんと言葉をかけることになっていながら、私はそれも忘れ、二階に上がってしまった。

　私は机の前に坐ると、

「畜生！」

と云った。

　その後、私は笠原と急に親しくなった。私は自分でも妙なものだと思った。彼女は頼んだ用事を何くれとなく、きちんと足してくれた。太田の裏切から私は最近別な地区

に移ることに決めたが、自分で家を探して歩くわけにも行かなかったので、それを笠原に頼んだ。それと同時に私は笠原と一緒になることを考えてみた。非合法の仕事を確実に、永くやって行くためにも、それは都合がよかったのだ。

下宿に男が一人でいて、それが何処にも勤めていなくて、しかも夜毎（夜になると）外出する――これこそ、それと疑われる要素を完全に揃えていることになる。工場に勤めていた時は、そんな点はまあよかったが。殊に一晩のうちに平均して三つか四つ連絡があって、その間に一時間もブランクがある時には、外でウロウロしているわけにも行かず、一まず家に帰ってくる。そして又出掛ける。そんな時、おばさんは現実に奇妙な顔をした。何をして食ってるんだろう？　おばさんの奇妙な顔はそう云っている。こういう状態だと、戸籍調べの巡査が来た時に、直ぐ見当をつけられてしまうおそれがあったのだ。

笠原は会社に勤めているので、朝一定の時間に出る。そうなれば私がブラブラしているように見えても、細君の給料で生活しているということになる。世間は一定の勤めをもっている人しか信用しないのだ。――それで私は笠原に、一緒になってくれるかどうかを訊いた。それを聞くと、彼女は又突然あの大きな（大きくした）眼で私の顔を見はった。彼女は然し何も云わなかった。私はしばらくして返事をうながした。が黙っている。彼女はその日とうとう何も云わないで、帰ってしまった。

その次に会うと、笠原は私の前に今迄になくチョコナンと坐っているように見えた。それは如何にもチョコナンとしていた。肩をつぼめて、両手を膝の上に置き、身体を固くしていた。彼女の下宿に泊った次の朝、下宿から一歩出たとき、「あ――あ、よかった畜生め！」と男のような明るさで叫んだ女らしさが何処にも見えなかった。私はそれを不思議に眺めた。

私達は色々と用事の話をした。その話が途切れると、女はモジモジした。二人ともこの前の話を避け、それを後へ後へと残して行った。用事が済んでから、私はとうとう云った。彼女は自分の決心をきめて来ていたのだった。

私と笠原はその後直ぐ一緒に新しい下宿に移った。そこは倉田工業から少し離れていたが、須山や伊藤は電車でも歩ける「身分」なので、こっちへ出掛けて来てもらった。それで交通費を節約し、道中の危険を少なくすることが出来た。

四

須山はそっちの方に用事があると、時々私の母親のところへ寄った。そして私の元気なことを云い、又母親のことを私に伝えてくれた。

私は自分の家を出るときには、それが突然だったので、一人の母親にもその事情を云い得ずに潜らざるを得なかったのである。その日は夜の六時頃、私は何時ものレンラクに出た。私は非合法の仕事はしていたが、ダラ幹の組合員

の一人として広汎な合法的場面で、反対派として立ち働いていたのである。ところが六時に会ったその同志は、私と一緒に働いていたFが突然やられたこと、まだその原因はハッキリしていないが、直接それとつながっている君は即刻もぐらなければならないことを云った。私は一寸呆然とした。Fの関係で私のことが分るとすれば、それは単にダラ幹組合の革命的反対派としてでは済まない。オヤジの関係になるのだ。私は一度家に帰って始末するものはして、用意をしてもぐろうと思い、そう云った。それだけの余裕はあると思った。するとその同志は（それがヒゲだったのだが）

「冗談も休み休みに云うもんだ。」

と、冗談のように云いながら、然し断じて家へは帰ってはならないこと、始末するものは別な人を使ってやること、着のみ着のままでも仕方がないことを云った。「修学旅行ではないからな」と笑った。ヒゲは最も断乎としたことを、人なつこさと、一緒に云い得る少数の人だった。彼は、もぐっている同志がとうとう行く処がなくなって、「今晩はよもや大丈夫だろう」と云うので自分の家に帰り、その次の朝つかまった話や、大切なものを処分するために、張り込んでいる危険性が充分に考えられる理由があるにも拘らず、出掛けて行って捕まったという例を話した。彼はあまり、どうしてはいかぬとは云わない。そんな時は、それに当てはまる例を話すだけだった。色々な経歴を経て来ているらしく、そんな話を豊富に知っていた。

私はヒゲから有り金の五円を借り、友達の夫婦の家に転げこんだ。——ところが、次の朝やっぱり私の家へ本庁とS署のスパイが四人、私をつかむためにやってきたそうである。何も知らない母親は吃驚して、ゆうべ出てから未だ帰らないと云った。すると、その中で一番「偉そうな人」が風を喰らって逃げたのかな、と云ったそうである。

私はそのまま帰らなかったのである。それで須山が私の消息を持って訪ねて行ったときは、あたかも自分の息子でも帰ってきたかのように家のなかにあげ、お茶を出して、そしてまずまじまじと顔を見た。それには弱ったと須山は頭を掻いていた。彼は私が家を飛び出してからのことを話して、それが途切れたりすると、「それから？　それから？」とうながされた。母親は今まで夜もろくに寝ていなかった。それで眼の下がハレぼッたくたるんで、頬がげッそり落ち、見ていると頭がガクガクするのではないかと思われるほど、首が細くしなびていた。

終いに、母親は「もう何日したら安治は帰ってくるんだか？」と訊いた。須山はこれには詰ってしまった。何日？　然し今にもクラクラしそうな細い首をみると、彼はどうしても本当のことが云えず、「さア、そんなに長くないんでしょうな……」と云ってきたという。

私の母親は、勿論私が今まで何べんも警察に引ッ張られ、二十九日を何度か留置場で暮すことには慣らされてい

たし、殊に一昨年は八ヵ月も刑務所に行っていた。母親はその間差入に通ってくれた。それで今ではそういうことではかえって私のしている仕事を理解していてくれているのである。ただ何故今まで通り、警察に素直につかまらないのかが分らなかった。逃げ廻っていたら、後が悪いだろうと心配していた。

私は今迄母親にはつら過ぎたかも知れなかったが、結局は私の退ッぴきならぬ行動で示してきた。然し六十の母親が私の気持にまで近付いていることに、私は自分たちがこの運動をしてゆく困難さの百倍もの苦しい心の闘いを見ることが出来る気がする。私の母親は水呑百姓で、小学校にさえ行っていない。ところが私が家にいた頃から「いろは」を習い始めた。眼鏡をかけて炬燵の中に背中を円くして入り、その上に小さい板を置いて、私の原稿用紙の書き散らしを集め、その裏に鉛筆で稽古をし出した。何を始めるんだ、と私は笑っていた。母は一昨年私が刑務所にいるときに、自分が一字も字が書けないために、私に手紙を一本も出せなかったことを「そればかりが残念だ」と云っていたことがあった。それに私が出てからも、ますます運動のなかに深入りしているのが母の眼にも分った。そうすれば今度もキット引張られるだろう、又仮りにそんなことが無いとしても、今は保釈になっているのだから、どうせ刑が決まれば入るのだから、その時の用意に母は字を覚え出していたのだった。私が沈む少し前には、不揃いな大きな字だったが、それでもちァんと読める字を書いているのに私は吃驚した。――ところが、母親は須山に「会えないだろうか？」と訊いて、さア会わない方がいいでしょう、と云われると、「手紙も出せないでしょうね」と云ったそうである。私はそれを須山から聞いたとき、そう云ったときの母親の気持がジカに胸に来て弱った。

須山が帰るときに、母親は袷やら襦袢や猿又や足袋を渡し、それから彼に帰るのを少し待って貰って、台所の方へ行った。暫らく其処でコトコトさせていたが、何をしているのだろうと思っていると、卵を五つばかりでゆでて持ってきた。そして卵は十銭に三つも四つもするのだから、新しいのを選んで必ず飲むように云ってくれと頼まれた。私はその「うで卵」を須山や伊藤などと食った。「な、伊藤、俺等一つでやめよう。後でおふくろにうらまれると困るから」と須山は笑った。伊藤は分らないように眼を拭いた。

その後須山が私の家に寄るときに、私は四年でも五年でも帰られないことをハッキリ云ってもらうことにした。そして私を帰られないようにしているのは、私が運動をしているからではなくて、金持ちの手先の警察なのだから、私をうらむのではなくて、この倒さになっている社会をうらまなくてはならない事を云ってもらうことにした。うやむやのことより、ハッキリしたことが分らせれば、かえってそこに抵抗力が出てくる。それに、私の知っている仲間が警察につかまって、それが共産党に関係があると云われる

と、残された家族の妻とか母親とかが、私の夫とか息子にはそんな「暗い陰」が無いとか、「罪にひっかけようとして」共産党だなどと有りもしない事実を云っているのだとか、そんなことを云っていたものがあった。だが若しそうだとすれば、共産党というものは「暗い影」であり、又共産党なら罪にひっかけてもいいのだということを、これらの仲間の残された人たちが自分の口から云っていることになる。私は、六十の母親だが、私の母親がそれと同じように考え或いは云ったりしてはならないと思った。私の母親はその過去五十年以上の生涯を貧困のドン底で生活してきている。ハッキリ伝えれば、理解出来ると思ったのである。

須山によると、私の母はそれを黙って聞いていたそうである。そしてそれとは別に、自分は今六十だし、病気でもすれば今日明日にも死ぬかも知れないが、そんな時は一寸でも帰って来てくれるのだろうか、ときいた。須山はそんなことは予期もしていなかったので、どう答えていいか分らなかった。私は後で、そういう時でも帰れないのだ、ということを云ってやった。

「オラそんなこと云えないや！」

と、須山は困った顔をした。

私はこれらのことが母親には残酷であるとは思わぬでもなかったが、然し仕方のないことであるし、それらはすべての事によって、母の心に支配階級に対する全生涯的憎悪を（母の一生は事実全くそうであった）抱かせるためにも必要だと考えた。それで私は念を押して、私が母の死目に会わないようなことがあるのも、それはみんな支配階級が、そうさせているのだということを繰りかえすことを頼んだ。――だが、さすがにその日私は須山と会う時には、胸が騒いだ。

「どうだった？」

と訊いた。

「こう云ってたよ――」

私の母はこの頃少し痩せ、顔が蒼くなっているらしかった。そして一度会えないものか、どうかときいたというのだ。

私はフト「渡政」のことを思い出した。渡政が「潜」ったとき、彼のお母さんは（このお母さんはいま渡政ばかりでなく、全プロレタリアートのお母さんでもあるが）「政とはモウ会えないのだろうか」と同志の人にきいた。同志の人たちは「会えないのだ」ということをお母さんに云ったそうである。で、私はそのことを須山に云った。

「それは分るが、君の居所を知らせるわけでなし、一度位何処かで会ってやれよ。」

実際に私の母親の様子を見てきた須山は、それにつまされていた。

「が、それでなくても彼奴等は俺を探しているのだから、万一のことがあるとな。」

が、とうとう須山に説き伏せられた。充分に気をつける

ことにして、何時も私達の使わない地区の場所を決め、自動車で須山に連れて来てもらうことにした。時間に、私はその小さい料理屋へ出掛けて行った。母親はテーブルの向う側に、その縁から離れてチョコンと坐っていた。浮かない顔をしていた。見ると母親はよそ行きの一番いい着物を着ていた。それが何んだか私の胸にきた。

　私たちはそんなにしゃべらなかった。母はテーブルの下から風呂敷包みを取って、バナナとビワと、それに又「うで卵」を出した。須山は直ぐ帰った。その時母は無理矢理に卵とバナナを彼の手に握らしてやった。

　少し時間が経つと、母も少しずつしゃべり出した。「家にいたときよりも、顔が少し肥えたようで安心だ」と云った。母はこの頃では殆んど毎日のように、私が痩せ衰えた姿の夢や、警察につかまって、そこで「せっかん」(母は拷問のことをそう云っていた)されている夢ばかり見て、眼を覚ますと云った。

　母は又茨城にいる娘の夫が、これから何んとか面倒を見てくれるそうだから安心してやったらいいと云った。話がそんなことになったので、私は今まで須山を通して伝えてもらっていた事を、私の口から改めて話した。「分ってる」と、母は少し笑って云った。

　私はそれを中途で気付いたのだが、母親は何んだか落着かなかった。何処か浮腰で話も終いまで、しんみり出来なかった。――母はとうとう云った。お前に会うまでは居ても立ってもいられなかったが、こうして会ってみると、こんなことをしている時にお前が捕まるんじゃないかと思って、気が気でない、それでモウそろそろ帰ろうと云うのだった。道理で母は時々別なテーブルにお客さんが入ってくると、その方を見て、「あのお客さんは大丈夫らしい」とか、又別な人が入ってくると、「あの人は人相が悪い」とか云っていた。私がかえって知らずに家にいた時のような声でものをしゃべると、母がもう少し低くするように注意した。母は、会っていて、こんなに心配するよりは、会わないでいて、お前が丈夫で働いているということが分っていた方がずッといいと云った。

　母は帰りがけに、自分は今六十だが八十まで、これから二十年生きる心積りだ、が今六十だから明日にも死ぬことがあるかも知れない、が死んだということが分れば矢張りひょっとお前が自家へ来ないとも限らない、そうすれば危いから死んだということは知らせないことにしたよ、と云った。死目に遇うとか遇わぬとかいうことは、世の普通の人にとってはこれ以上の大きな問題はないかも知れぬ。しかも六十の母親にとっては。母がこれだけのことを決心してくれたことには、私は身が引きしまるような激動を感じた。私は黙っていた。黙っていることしか出来なかった。

　外へ出ると、母は私の後から、もう独りで帰れるからお前は用心をして戻ってくれと云った。それから、急に心配な声で、

「どうもお前の肩にくせがある……」
と云った。「知っている人なら後からでも直ぐお前と分る。肩を振らないように歩く癖をつけないとねえ……」
「あ、みんなにそう云われてるんだよ。」
「そうだろう。直ぐ分る！」
母は別れるまで、独り言のように、何べんも「直ぐ分る」を云っていた。
私はこれで今までに残されていた最後の個人的生活の退路――肉親との関係を断ち切ってしまった。これから何年目かに来る新しい世の中にならない限り（私たちはそのために闘っているのだが）、私は母と一緒に暮すことがないだろう。

その頃ヒゲからレポが入った。
ヒゲは始めT署に五日ばかりいて、それからK署に廻され、そこで二十九日つけられた。須山や伊藤たちの出入しているTのところへ、彼と檻房が一緒だった朝鮮の労働者がレポを持ってきたので、始めて分った。レポには、自分はアジトでやられたこと、然しその理由はどうしても見当がつかないこと、陣営を建て直すのに決して焦ったり、馬車馬式になったり、便宜主義になったりしないこと、そんなことが書かれていた。「焦ったり、馬車馬式に」というところと、「便宜主義」というところにはワザワザ「〇」をつけていた。
それを見て、私や須山や伊藤は、自分たちは「焦ったり」「馬車馬式」になったりするほどにさえも仕事をしていないことを恥じた。
ヒゲの家（うち）には両親や兄弟が居り、その方からも私の名宛で（私たちの間だけで呼ばれていた名で）レポが入ってきた。――自分は「白紙の調書」を作る積りであること、私は一切のことを「知らない」という言葉だけで押し通していること。みんなはそれを見ると、
「これで太田のときの胸糞が晴れた！」と云った。
私たちは、どんな裏切者が出たり、どんな日和見主義者が出ても、正しい線はそれらの中を赤く太く明確に一線を引いていることを確信した。
ヒゲは普段口癖のように、敵の訊問に対して、何か一言しゃべることは、何事もしゃべってはならぬという我々の鉄の規律には従わないで、何事かをしゃべらせるという敵の規律に屈服したことになるというのだ。共産主義者・党員にとっては敵の規律にではなく、我々の鉄の規律に従わなければならないことは当然だ、と云っていた。今彼は自分で実際にそれを示していたのだ。
と、須山が云った。
「ヨシ公はシャヴァロフって知ってるか？」
「マルクス主義の道さ。」
「又切り抜帳（スクラップ・ブック）か？」と私は笑った。

「シャヴァロフはつかまったとき、七カ月間一言もしゃべらないでがん張ったそうだ。そして曰くだ、――一人の平凡人にとっては、如何なる陳述もなさない事、即ち俺が七カ月頑張った其の戦術に従うに越したことはない、と云っている。」
　それを聞くと、伊藤は、
「ところが、この前プロレタリアの芝居にもなったことのある私達の女の同志は、ちゃんと向うに分っている自分の名前や本籍さえも云わないで、最後まで頑張り通して出てきたの。――シャヴァロフ以上よ！」
　と云った。
　彼女はそれを自分のことのように云った。須山はそれで口惜しそうに頭をゴスゴス掻いた。
　そこで、私達、「一平凡人として」敵の訊問に対しては一言も答えないということを、ここの細胞会議の決議として実行することにした。更にこの決議は此処だけに止めず上層機関に報告し、それを党全体の決議とするように持って行くことにした。
　その後にTに入ったレポによると、ヒゲは更にK署からO署にタライ廻しにされ、そこで三日間朝から夜まで打ッ続けに七八人掛りで拷問をされた。両手を後に縛ったまま刑事部屋の天井に吊し上げられ、下からその拷問係が竹刀で殴りつけた。彼が気絶すると水を呑まし、それを何十度も繰りかえした。だが、彼は一言も云わなかった。
　伊藤はそのレポを見ると、「まッ憎らしいわねえ！」と云った。彼女も二度ほど警察で、ズロースまで脱ぎとられて真ッ裸にされ、竹刀の先きでコズキ廻されたことがあったのだ。
　これらの同志の英雄的闘争は、私達を引きしめた。私はどうしても明日までやってしまわなければならない仕事が眠いために出来なく、寝ようと思う、そんなときに中の人たちのことを考え、我慢し、ふん張った。中の人のことを考えたら、眠いこと位は何んでもないことだった。――今中の人はどうしているだろう、殴られているだろう。じゃこの仕事をやってのけよう。そんな風で、我々の日常の色々な生活が中の同志の生活とそのままに結びついていた。内と外とはちがっていても、それが支配階級に対する闘争であるという点では、少しの差異がなかったからである。

五

　伊藤は臨時工のなかに八九人の仲間を作った。――倉田工業では六百人の臨時工を馘きるということが愈々確実になり、十円の手当も出しそうにないことが（共産党のビラが撒かれてから）誰の眼にもハッキリしてきた。その不安が我々の方針と一致して、親睦会めいた固（かたま）りは考えたよりも容易く出来た。
　女たちは工場の帰りには腹がペコペコだった。伊藤や辻

や佐々木たちは（辻や佐々木は仲間のうちでも一番素質がよかった）皆を誘って「しるこ屋」や「そばや」によった。一日の立ちずくめの仕事でクタクタになっているみんなは甘いものばかりを食った。そして始めて機械のゴー音が無くなったので、大声で、たった一度に一日中のことをみんなしゃべってしまおうとした。

伊藤たちは次のようにやっていた。伊藤はみんなのなかでも、「あれ」ということになっていた。それで、しるこ屋などで伊藤は「それらしいこと」を話しても別に不自然でなかった。辻と佐々木は「サクラ」をやった。みんなと一緒になり、ワザと色々な、時には反動的なことを伊藤に持ち出して、そういうことについて話のキッかけを作らせた。それは始めのうちはお互いの調子がうまくとれないで、どまつき、同じところをグルグルめぐりをしたりした。或るときなどはグルになっている化けの皮が剝げそうになって、ヒヤヒヤした。そんな時は、終ってしるこ屋の外に出ると、三人とも自分がぐッしょり汗をかいているのに気付いた。が、一回、二回、と眼に見えて巧妙になって行った。サクラになるものが上手だと少しの考えもなく、ただ友達位のつもりでついて来た女工をもうまうまと引きつけることが出来た。だからサクラになるものは、意識の低い、普通の女工が知らずに抱いているような考えや偏見などをハッキリ知っていなければならなかった。

女工たちは集まると、話すことは誰と誰が変だとか、誰と誰がくッついたとか、くッつかぬとか、そんなことばかりだった。伊藤が連絡のとき、こんなことを私に話したことがある。——マスクにいる吉村という本工からキヌちゃんというパラシュートの女工に、「何処か静かなところで、ゆっくりお話しましょう」というラブ・レターが来たというので、皆が工場を出るなり、キャッキャッと話している。そばやに行ってからも、そればかりが話題になった。キヌちゃんはその手紙を貰ってから、急にお白粉が濃くなったとか、円鏡に紐をつけて帯の間に吊し、仕事をしながら始終覗きこんでいるとか、際限がない。ところが、仲間でも少し利口なシゲという女が、こんなことを云った。キヌちゃんがシミジミとシゲちゃんにこぼしたというのだ。——静かなところで、ゆっくりお話したいと云うけれども、工場の中はこんなにガンガンしているし、夜業して帰ると九時十時になってクタクタに疲れているし、それにあの人は七時頃帰るので一緒になることが出来ないって。誰か「可愛相にね」と云った。するとサクラの佐々木が、「これじゃァ私たち恋を囁やくことも出来ないのねえ！」と云った。皆は「そうだ」とか、「本当ねえ！」とか云い始めた。「恋を囁やくためにだって、第一こんなに長い時間働かせられたら、たまったもんでないし、それにたまにあの人と二人で活動写真位は見たいもの、ねえ——」

みんなが笑って、「本当よ！」と云った。

「それにはこんな日給じゃ仕様がないわ！」

「そう。少し時間を減らして、日給を増してもらわなかったら、恋も囁やけないと来ている！」

「実際、会社はひどいよ！」

「私んとこのオヤジね、あいつ今日こんなことを怒鳴ったの、今はどんな時だか知っているか、戦争だぞ、お前等も兵隊の一部だと思って身を粉にして働かなけァならないんだ。もう少し戦争がひどくなれば、兵隊さんと同じ位の日給でドシドシ働いてもらわなくてはならないんだ。それが国のためだって。――ハゲッちョそんなことを云ってたよ！」

これには伊藤も吃驚してしまった。「恋を囁やく」話が伊藤さえもがそれと気付かぬうちに、会社の待遇の問題に入って行っているのだ。このところサクラまであっけにとられた形だった。話はそれから少しの無理押しつけというところもなく、会社の仕打ちに対する攻撃になった。

私はその話を伊藤から聞き、本当だと思った。戦争が始まってから労働強化は何処でもヒドクなっているのだが、同一の労働（或いは同一以上の労働）をしているにも拘らず、女工に対する搾取は急激に強まっている。今では全く「恋を囁やく」ということさえも、その経済上の解決なくしては不可能になっている。それを皆はそういう言葉としてではなしに感じているのだ。

伊藤は最近この連中を誘って、何か面白い芝居を見に行くことになっていた。伊藤や辻や佐々木は、皆が浅草のレヴューか片岡千恵蔵にしようと考えているので、それを「左翼劇場」にするためにサクラでアジることになっている。

私は伊藤の報告のあとでそのグループに男工をも入れること、それは須山と連絡をとってやればそんなに困難なことではなく、一人でも男工が入るようになれば又皆の意気込がちがうこと、もう一つの点はそのグループを臨時工ばかりにしないで本工を入れるようにすること、このことが最も大切なことだ、と自分の考えを云い、彼女も同意した。

それから私達は六百人の首切りにそなえるために、今迄入れていたどっちかと云えば工新式のビラをやめて、ビラと工場新聞を分けて独立さすことにした。

須山に工新の題を考えて置けと云ったら、彼は「恋のパラシュート」としてはどうだ、と鼻を動かした。

工新は「マスク」という名で出すことになった。私は今工場に出ていないので、Sからその編集を引き受けて、私の手元に伊藤、須山の報告を集め、それをもとにして原稿を書き、プリンターの方へ廻した。プリンター付きのレポから朝早く伊藤が受取ることになっていた。私は須山、伊藤とは毎日のように連絡をとり、工新の影響を調べ、その教訓を直ぐ「マスク」の次の編集に反映さした。

伊藤や須山の報告をきいていると、会社の方も刻々と対策を練っていることが分った。今では十円の手当のことや、

首切りのことについては不気味なほど何も云わなくなっていた。それは明らかに、何か第二段の策に出ているのだ。勿論それは十円の手当を出さないことや、首切りをウマウマとやってのけようとするための策略であることは分る。がその策略が実際にどのようなものであるかがハッキリ分り、それを皆の前にさらけ出すのでなかったら、駄目だ、相も変らず今まで通りのことを繰りかえしているのならば、皆は我々の前から離れて行く。我々の戦術は向うのブルジョアジーのジグザッグな戦術に適確に適応して行かなければならない。私たちの今までの失敗をみると、最初のうちは何時でも我々は敵をおびやかしている。ところが、敵が我々の一応の遣り方をつかむと、それの裏を行く。ところが我々は敵が一体どういう風にやろうとしているのかという点を見ようともせずに一本槍で同じようにやって行く。そこで敵は得たりと、最後のどたん場で我々を打ちゃるのだ。

さすがに伊藤はそれに気付いて「どうも此の頃変だ」という。然しそれが何処にあるのか判らない。

次の日須山は小さい紙片を持ってきた。

掲　示

皆さんの勤勉精励によって、会社の仕事が非常に順調に運んでいることを皆さんと共に喜びたいと思います。皆さんもご承知のことと思いますが、戦争というものは決して兵隊さんだけでは出来るものではありません。若しも皆さんがマスクやパラシュートや飛行船の側を作る仕事を一生懸命にやらなかったら、決して我が国は勝つことは出来ないのであります。でありますから或いは仕事に少しのつらいことがあるとしても、我々も又戦争で敵の弾を浴びながら闘っている兵隊さんと同じ気持と覚悟をもってやっていただき度いと思うのです。

一言みなさんの覚悟をうながして置く次第であります。

工　場　長

「我々の仕事は第二の段階に入った！」

と須山が云った。

工場では、六百人を最初の約束通りに仕事に一定の区切りが来たら、やめて貰うことになっていたが、今度方針を変えて、成績の優秀なものと認めたものを二百人ほど本工に繰り入れることになったから、各自一生懸命仕事をして欲しいと云うのだった。そしてその噂を工場中に撒きちらし始めた。

私と須山は、うなった。明らかにその「噂」は、首切りの瞬間まで反抗の組織化されることを妨害するためだった。そして他方では「掲示」を利用し、本工に編成するかも知れないというエサで一生懸命働かせ、モット搾ろうという魂胆だったのである。

須山はその本質をバク露するために、掲示を写してきたのだった。これで私たちは会社の第二段の戦術が分った。

私と須山と伊藤は毎日連絡をとった。が、連絡だけでは精密な対策が立たないので、一週に一度の予定で三人一緒に「エンコ」(坐ること)することになっていた、その家の世話は伊藤がやった。須山と伊藤は存在が合法的なのでよかったが、私が一定の場所に二時間も三時間も坐り込んでいることは可なり危険なので、細心の注意が必要だった。私は伊藤と街頭連絡で場所をきき、その周囲の様子をも調べてみて安全だと分ると、彼女と須山に先に行ってもらって、私は別な道を選んで其処へ出掛けることにしていた。私はそこへ行っても直ぐ入らずにある一定の場所を見る。その家に異常がないと、その場所に伊藤が「記号(しるし)」をつけて置くことになっていたからである。

昼のうちむれていたアスファルトから生温かい風が吹いている或る晩、私は須山と伊藤に渡す「ハタ」(機関紙)とパンフレットを持って家を出た。その夜は「エンコ」することになっていた。途中まで来ると、街角に巡査が二人立っていた。それからもう一つの角にくると、其処には三人立っている。これはいけないと思った。ものを持っているので、今日の会合をどうしようかと思った。そう思いながら、まだ決まらず歩いていると、交番のところにも巡査が二三人立っていて、驚いたことには顎紐をかけている。途中から引ッ返すことはまずかったが、仕方なかった。私は一寸歩き澱んだ。すると、交番の一人がこっちを見たらしい、そして私の方へ歩いて来るような気配を見せた。――私は咄嗟に、少しウロウロした様子をし、それから帽子に手をやって、

「S町はこっちでしょうか――それとも……」

と、訊いた。

巡査は私の様子をイヤな眼で一(ひと)わたり見た。

「S町はこっちだ。」

私はその方へ歩き出した。少し行ってから何気なく振りかえってみると、私を注意した巡査は後向きになり、二人と何か話していた。畜生め! と思った。そして私は鞄の上から「ハタ」や「パンフレット」をたたいた。「口惜しいだろう、五十円貰い損いして!」

「ハ、どうも有難う御座います。」

私は万一のことを思い、とうとう家へ帰ってきた。次の朝新聞を見ると、人殺しがあったのだった。私たちはよく別な事件のために側杖を食った。が、彼奴等はえてそんな事件を口実にして、「赤狩り」をやったのだ。現に彼奴等はその度毎に「思わぬ副産物があった」とほざいているのがその証拠だ。Sによると、外国の雑誌に、日本では夜遅く外を歩く自由も、喫茶店で無理矢理な官憲の点検を受けずには、のんびりと話し込む自由もないと書いてあるそうだが、それは本当だ。そしてそれは時に我々への攻撃のためである。

私は常に新聞に注意し、朝出るときとか、夜出るときは、自分の出掛ける方面に何か事件が無いかどうかを調べてからにした。殊に今迄逃げ廻っていた人殺しとか強盗が捕まったりした記事は隅から隅まで読んだ。その時には自分の取っている新聞ばかりでなく、色々な新聞を笠原に買わして、注意して読んだ。ある時七年間隠れていたという犯人の記事などは多くの点でためになった。私は毎朝の新聞は、まずそういう記事から読み出した。

――私は今一緒に沈んでいるSやNなどの間で、「捕まらない五ヵ年計劃」の社会主義競争をやっている。それは五ヵ年計劃が六ヵ年になり、七ヵ年になればなる程、成績が優秀なので、「五ヵ年計劃を六ヵ年で！」というのがスローガンである。そのためには、日常行動を偶然性に頼っていたのでは駄目なので、科学的な考顧の上に立って行動する必要があった。笠原は時々古本屋から「新青年」を買ってきて、私に読めと云う。私もどうやら時には探偵小説を、真面目に読むことがある。

次の日、定期の連絡に行くと、須山は私を見るや、「よかった、よかった！」と云った。彼は私が（私は約束を欠かしたことがないので）やられたものとばかり思い、実は君の顔を見るまで悪い想像ばかりが来て弱っていたと云うのである。私は昨日の側杖を食ったことを話した。そして、

「五ヵ年計劃を六ヵ年で、じゃないか！」

と笑った。

「それはそうだが……」

昨日私が「人殺し」の側杖をくって「エンコ」が出来なかったので、須山は今日それが出来るように用意してきていた。場所は伊藤の下宿だった。彼女はここ一二日のうちにそこを引き移るので、下宿を使うことにしたのである。

下宿人が七八人もいるので、条件はあまり良くはなかった。私は若し小便が出たくなったら、伊藤が病気のときに買って置いた便器を使って、便所へ降りて行かないことにした。便所で同宿の人に顔を合わせ、若しそれが知っている人であったりしたら大変である。

私は二人に「そっちを見てろよ」と云って、室の隅ッこに行き、その硝子の便器に用を足した。伊藤は肩をクックッと動かして笑った。

「臭いぞ！」

と、須山は大げさに鼻をつまんで見せた。

「キリンの生だ！」

私は便器を隅の方へ押してやりながら、そんなことを云って二人を笑わせた。

倉田工業はいよいよ最後の攻勢に出ていることが分った。それは例えば伊藤の報告のうちに出ていた。伊藤と一緒に働いているパラシュートの女工が、今朝入った「マスク」の第三号を読んでいると、四五日前に新しく工場に入ってきた男工が、いきなりそれをふんだくって、その女工を殴りつけたというのである。「マスク」やビラが入ると、

みんなはオヤジにこそ用心すれ、同じ仲間には気を許す。それでうっかりしていたのであった。それを見ていた伊藤はどうも様子が変だと思い、その男を調べてみることにした。後で掃除婦から、その男工はこの地区の青年団の一員で在郷軍人であり、戦争が始まってから特別に雇われて入ってきたということが分った。それからその男に注意していると、第一工場にも第三工場にも仲間がいるらしい。時間中でも台を離れて、他の工場に出掛けてゆくことがあった。注意していると、オヤジはそれを見ても黙っていた。それに最近は倉田工業内に以前からあった（あったが今まで何も運動していなかった）大衆党系の「僚友会」の清川、熱田の連中とも往き来しているらしいことが分った。

おかしなことは、今まで何もしていなかった僚友会が此の頃少し動き出していること、第二には（それは何処から出ているのか、ハッキリ分らなかったが、）国家非常時のときでもあるし、重大な責任のある仕事を受け持っている我々は他の産業の労働者よりもモット自重し緊張しなければならない、そこで倉田工業内の軍籍関係者で在郷軍人の分会を作ろうではないかという噂が出ていること。工場長などは賛成らしいが、それは特別に雇われた連中から出ているらしく、僚友会の一二のものがそれに助力していることは確かだった。ただそういうことは会社が表に立ってやるのでは効果が薄いので、職工の中から自発的に出てきたという風に策略していることもハッキリしている。

「君の方はどうなんだ？」

と須山にきくと、彼は、自分の方にはまだハッキリと現れていないが、と一寸考えてから最近昼休みなどに盛んに戦争のことなどについてしゃべり廻って歩いている男がいると云った。「伊藤君の今の報告で気付いたのだが」と、彼は今迄は昼休みなどに皆の話題になるのは戦争の話だとか、景気のことなどだったが、それについては皆が何処かから聞いてきたことや、素朴な自分の考えやを得意になって一席弁じたてたり、又しょげ込んで話したりするのだが、気付いてみると、そういうのとはちがった、何処か計画的に、煽動的にしゃべり廻っている奴がいるらしいと云うのだ。――これでもってみると、向うが全面的にやり出していることは、最早疑うべくもなかった。

そして我々が彼等に勝つためには、敵の勢力の正確な科学的な認識が必要だった。今彼等は自分たちが上から従業員を無理強いするだけでは足りないということ、又工場の往き帰りを警察の背広で見張りさせることだけでも足りないということを知って、第三段の構えとして職工たち自身の中から我々の組織の喰込みの妨害をさせることが必要であると考えているのだ。そのために僚友会が動き出しているし、工場の中に青年団や在郷軍人の分会の組織を押し広げようとしていることが分る。工場が工場なだけに（軍需品工場なので）これらの組織が作られ易い危険な条件をそなえている。私たちは今三方の路から、敵の勢力と対峙

していると云わなければならない。
　須山によると、工場の中で戦争のことをしゃべり廻って歩いている遣り方は、今迄のようにただ「忠君愛国」だとか、チャンコロが憎いことをするからやっつけろとか、そんなことではなくて、今度の戦争は「以前の戦争」のように結局は三井とか三菱が、占領した処に大工場をたてるためにやられているのではなくて、無産者の活路のためにやられているのだ。満州を取ったら大資本家を排除して、我々だけで王国をたてる。内地の失業者はドシドシ満州に出掛けてゆく、そうして行く行くは日本から失業者を一人もいなくしよう。ロシアには失業者は一人もいないが、我々もそれと同じようにならなければならぬ。だから、今度の戦争はプロレタリアの戦争で、我々も及ばずながら、その与えられた部署々々で懸命に働かなければならない、と云っていた。
　僚友会の清川や熱田は、今度の戦争は結局は大資本家が新しい搾取を植民地で行うための戦争であると云って、昼休みに在郷軍人や青年団の職工などと議論をした。ところが清川は、ただ今度の戦争は他の方面ではプロレタリアのために利益をもたらしている。例えば金属や化学の軍需品工場などでは人が幾ら居ても足りない盛況だし、それは所謂「戦争株」の暴騰を見ても分る、（そして何処で聞いてきたのか）帝国火薬の株はもと四円が今九円という倍加を示しているし、石川島造船は五円が二十五円という状態になって居り、弾丸製造に使うアンチモニーは二十円前後の相場が今百円位になっている。更に、ドイツは世界戦争で負けて滅茶々々になったと思っているが、クルップ鉄工場などは平時の十倍もの純益をあげている。それだけ又我々の生活もお陰を蒙るのだから、一概に戦争に反対したって始まらない、その限りで利用しなければならない、そういうのが彼等の意見だった。ここへくると、はじめ青年団や在郷軍人と議論していても何時の間にか意見が合っていた。
　昼休みの様子をみていると、青年団の「満州王国」の話は、何んだか夢のような、それは信じていいのかどうか、若しも本当だとすればいいがという程度だったが、清川たちの話には臨時工などが賛成だった。戦争に行って死んだり、不具になったり、又結局「満州王国」と云ったところで、そんなに自分たちのためになるかどうか分ったものでない、然しとにかく戦争があったために自分達は長い間の失業からどうにか職にありつけたのである。だから仕事は臨時工だというので手当もなく、強制残業させられたり、又ただ臨時工だからというので本工と同じ分量の仕事をしているにも拘らず賃銀が安かったりするのが不満だったが、とにかく戦争のお蔭を蒙っていると考えていた。
　清川のように自分が少なくとも「労働者のための」政党である大衆党の一人であるということさえも忘れて、まるで資本家にでもなったようにその株の値段を心配してやっ

たり、そのお蔭のことを考えているような意見でも、職工たちの（殊に臨時工の）目先きだけの利益を巧みにつかんでいるのである。

伊藤は、自分や自分たちの仲間は、皆んなの前でそんな考え方の裏を掻いて、女工たちにちゃんと納得させるという段になると、下手だし、うまく反駁が出来ない。「歯がゆくて仕方がない」と云った。私は伊藤のこのことは本当だと思った。私たちは今度の戦争の本質が何処にあるかということは、ハッキリ知っている。然し自惚れなく、私たちはそのことをみんなに納得させること、つまりみんなの毎日の日常の生活に即して説明してやることでは、まだまだ拙いのだ。レーニンは、戦争の問題では往々にして革命的労働組合でさえ誤まることがあると云っている。そこへもってきて清川とか熱田とかはモットそれを分らなくするために努力しているのだから、益々むずかしい。

会社では、此頃五時のところを六時まで仕事をしてくれとか、七時までにしてくれとか云って、その分に対しては別に賃銀を支払うわけでもなかった。そんなことは此頃では毎日のようになっていた。臨時工などはブツブツ云いながらも、それをしなかったりすると、後で本工に直して貰えないかも知れないと云うので、居残った。が、六時迄やるとどうしても弁当を食わなければ出来ない。弁当代は出ない。すると六時まで仕事をやるために、かえって一日の貰い分が減るという状態なのである。それは賃銀を下げるぞと云わずに、実際では賃銀を下げているやり方なので、みんなは「人を馬鹿にしてる」と云って、憤慨し出した。伊藤のいるパラシュートでは、六時まで居残りのときは「弁当代を出して貰わなければ、どうもならん」と云っている。

そればかりでなく、最近では働く時間が十時間なら十時間と云っても、もととはすっかりちがっていた。本工に組み入れるかも知れないというので、みんなの働きは見違えるほど拍車をかけられていた。前には仕事をしながら隣りと話も出来たし、キヌちゃん式に前帯に手鏡を挿して、時々覗きこむことも出来たが、今ではポタポタ落ちる汗さえ袖で拭う暇がない。パラシュートなどは電気アイロンを使うので、汗でぐッしょりになる。拡げたパラシュートに汗がポタポタ落ちた。――出来高からみると、会社は以前の四〇％以上も儲けていることが分った。それに拘らずもと通りの賃銀しか払わないのである。それは実際に仕事をしている職工たちにはよく分った。――が、みんなは自分の生活のことになると、「戦争」は戦争、「仕事」は仕事と分けて考えていた。仕事の上にますますのしかぶさってくる苛酷さというものが、みんな戦争から来ているということは知らなかった。だから、その結び付きを知らせてやりさえすれば、清川や青年団などの理窟をみんなは本能で見破ってしまう。

以上のことから、細胞として、どこに新しい闘争の力点

が置かれなければならないかがハッキリした。濟川や熱田などが臨時工のなかに持っている影響を切り離すために、みんなで「労働強化反対」とか「賃銀値上げ」とか「待遇改善」などを僚友会に持ち込ませる。そうすれば彼等は、色々な理窟を並べながら、結局その闘争の先頭に立つどころか、みんなを円めこんでしまう。それを早速つかんでみんなの前で、彼奴等味方ではないということをハッキリさせる。更に私たちは細胞会議の決議として、「マスク」の編集で、工場内のファシスト、社会ファシストのバクロを新しく執拗に取り上げてゆくことにきめた。

書きちらしの紙片を一つ一つマッチで焼きながら、

「こう見てくると、向うかこっちかという決戦が段々近くなっていることが分るな！」

と須山が云った。

「そうだよ、彼奴等に勝つためには科学的に正しい方針と、そいつをどんな事があっても最後まで貫徹するという決意性があるだけだ。ファシスト連が動き出したとすれば、俺だち生命がけだぜ！」

私がそう云うと、

「我等にとって、工場は城塞でなくて、これァ戦場だ！」

と、須山は笑った。

「それは誰からの切抜だ？」

「オレ自身のさ！」

——その後「地方のオルグ」(党地方委員会の組織部会)に出ると、官憲のN軍器工場ではピストルと剣を擬した憲兵の見張りだけで足りなく、職場々々の大切な部門には憲兵に職工服を着せて入り混らせていたという報告がされた。そこの細胞が最近検挙されたが、それは知らずに「職工の服を着た憲兵」に働きかけたためだった。そういう「職工」はワザと表面は意識ある様子を見せるので、危険この上もなかった。倉田工業は本来の軍器工場ではないので、まだ憲兵までにはきていないが、事態がもう少し進むと、そこまで行き兼ねないことが考えられる。

六

時計を見ると未だ九時だった。それで少し雑談をすることにし、私たちは身体を横にして長くなった。私は伊藤の鏡台を見て、それが笠原の鏡台よりもなかなか立派で、黄色や赤や緑色のお白粉まで揃っているので、

「オヤオヤ！」

と云った。

伊藤はそれと気付いて、

「嫌な人！」

と、立ってきた。

「伊藤は赤、青、黄と手をかえ、品をかえて、夜な夜な凄腕をふるうんだ。」

と須山が笑った。

「そら、そこに三越とか松坂屋の包紙が沢山あるだろう。献上品なんだよ、幸福な御身分さ！」
工場で一寸眼につく綺麗な女工だと、大抵監督のオヤジから、係の責任者から、仲間の男工から買物をしてもらったり、松坂屋に連れて行ってもらったり、一緒に「しるこ屋」に行っておごってもらったりする。伊藤は見込のありそうな平職工だと誘われるままに出掛けて行ったし、自分からも勿論誘うようにしていた。それで彼女は工場には綺麗に顔を作って行った。然しそれは男工の場合も同じで、小ざっぱりした身装と少しキリリとした顔をしていると、女工たちから須山の所謂「直接且つ具体的に」附きまとわれた。
「どうだい此の頃は？」
と私が云うと、須山は顎を撫でてニヤニヤした。——
「一向に不景気で？」
「ヨシちゃんはまだか？」
私は頬杖をしながら、頭を動かさずに眼だけを向けて訊いた。
「何が？」
伊藤は聞きかえしたが、それと分ると、眼の表情を（瞬間たったが）少し動かしたが、
「まだまだ！」
すぐ平気になり、そう云った。
「革命が来てからだそうだ。わが男の同志たちは結婚すると、三千年来の潜在意識から、マルキストにも拘らず、ヨシ公を奴隷にしてしまうからだと！」
と須山が笑った。
「須山は自分のことを白状している！」
と伊藤はむしろ冷たい顔で云った。
「良き同志が見付からないんだな。」
私は伊藤を見ながら云った。
「俺じゃどうかな？」
須山はむくりと上半身を起して云った。
「過ぎてる、過ぎてる！」
私はそう云うと、
「どっちが？　俺だろう？」
と、須山がニヤニヤ笑った。
「こいつ！　恐ろしく図々しい自惚れを出したもんだ！」
三人が声を出して笑った。——私は自分たちの周囲を見渡してみても、伊藤と互角で一緒になれるような同志はそんなにいまいと思っている。彼女が若し本当に自分の相手を見出したとすれば、それはキット優れた同志であり、そういう二人の生活はお互の党生活を助成し合う「立派な」ものだろうと思った。——私は今迄こんなに一緒に仕事をして来ながら、伊藤をこういう問題の対象としては一度も考えたことがなかった。だが、それは如何にも伊藤のしっかりしていたことの証拠で、それが知らずに私たちの気持の上にも反映していたからである。

「責任を持って、良い奴を世話してやることにしよう。」
私は冗談のような調子だが、本気を含めて云った。が、伊藤はその時苦い顔を私に向けた……。

帰りは表通りに出て、円タクを拾った。自動車は近路をするらしく、しきりに暗い通りを曲がっていたが、突然賑やかな明るい通りへ出た。私は少し酔った風をして、帽子を前のめりに覆った。

「何処へ出たの？」

と訊くと、「銀座」だという。これは困ったと思った。こういうさかり場は苦手なのだ。が、そうとも云えず、私は分らないように、モット帽子を前のめりにした。だが私は銀座を何カ月見ないだろう。指を折ってみると――四カ月も見ていなかった。私は時々両側に眼をやった。私がその辺を歩いたことがあってから随分変っていた。何時の間にか私は貪るように見入っていた。私は曽つてこれと似た感情を持ったことがある。それは一昨年刑務所へ行っていたときだった。予審廷へ出廷のために、刑務所の護送自動車に手錠をはめられたまま載せられて裁判所へ行く途中、私はその鉄棒のはまった窓から半年振りで「新宿」の雑踏を見た。私は一つ一つの建物を見、一つ一つの看板を見、一つ一つの自動車を見、そして雑踏している人たちの一人々々を見ようとした。私は、その人ごみの中に、誰か顔見知りの同志でも歩いているのではないだろうかと、どの位注意したか分らなかった。その後、刑務所の独房に帰ってから一二日眼がチカチカと痛かったことを覚えている。

自動車が四丁目の交叉点にくると、ジリ、ジリ、ジリとベルが鳴って、向う側の電柱に赤が出た。それで私の乗っている自動車は停車線のところで停まってしまった。直ぐ窓際を色々な人の群がゾロゾロと通って行った。私は気が気でなかった。なかには車の中を覗き込んでゆくものさえいる。私は、イザと云えば逃げられるように、反対側のドアーのハンドルに手をかけたまま、顎を胸に落していた。やがて、ジリ、ジリ、ジリとベルが鳴り出した。私はホッとしてハンドルの手をゆるめた。

私はゾロゾロと散歩している無数の人たちを見たが、そう云えば、私は自分の生活に、全く散歩というものを持っていないことに気附いた。私にはブラリと外へ出るということは許されていないし、室の中にいても、うかつに窓を開けて外から私の顔を見られてはならないのだ。その点では留置場や独房にいる同志たちと少しも変らなかった。然しそれらの同志たちよりも或る意味ではモッとつらいことは、ブラリと外へ出ることが出来て、しかもそれを抑えて行かなければならなかったからである。

だが、私にはどうしてもそうしなければならぬという自覚があったからよかったが、一緒にいる笠原にはずい分そのことがこたえるらしかった。彼女は時には矢張り私と一緒に外を歩きたいと考える。が、それがどうにも出来ずに

イライラするらしかった。それに笠原が昼の勤めを終って帰ってくる頃、何時でも行きちがいに私が外に出た。私は昼うちにいて、夜ばかり使ったからである。それで一緒に室の中に坐ることが尠なかった。そういう状態が一月し、二月するうちに、笠原は眼に見えて不機嫌になって行った。彼女はそうなってはいけないと自分を抑えているらしいのだが、長いうちには負けて、私に当ってきた。全然個人的生活の出来ない人間と、大部分の個人的生活の範囲を背後に持っている人間とが一緒にいるので、それは困ったことだった。

「あんたは一緒になってから一度も夜うちにいたことも、一度も散歩に出てくれたこともない！」

終いに笠原は分り切ったそんな馬鹿なことを云った。

私はこのギャップを埋めるためには、笠原をも同じ仕事に引き入れることにあると思い、そうしようかと幾度か試みた。然し一緒になってから笠原はそれに適する人間でないことが分った。如何にも感情の浅い、粘力のない女だった。私は笠原に「お前は気象台だ」と云った。些細なことで燥いだり、又逆に直ぐ不貞腐された。こういう性質のものは、とうてい我々のような仕事をやって行くことは出来ない。

勿論一日の大半をタイピストというような労働者の生活からは離れた仕事で費し、帰ってきてからも炊事や、日曜などには二人分の洗濯などに追われ、それは随分時間のない負担の重い生活をしていたので、可哀相だったが、彼女はそこから自分でグイと一突き抜け出ようとする気力や意識さえもっていなかった。私がそうさせようとしても、それに随いて来なかった。

私は自動車を途中で降り、二停留所を歩き、それから小路に入り、家に帰ってきた。笠原は蒼い、浮かない顔をして、室の中に横坐りに坐っていた。私の顔をみると、

「首になったわ……」

と云った。

それがあまり突然なので、私は立ったままだまって相手を見た。

――笠原は別に何もしていなかったのだが、商会では赤いという噂があった。それで主任が保証人である下宿の主人のところに訪ねてきた。ところが、彼女は以前からそこにいないということが分ってしまった。私のアジトは絶対に誰にも知らしてはならないので、彼女は自分の下宿を以前のところにしてあったのである。商会ではそれでいよいよ怪しいということになり、早速やめさせたのだった。

私は今迄笠原の給料で間代や細々した日常の雑費を払い、活動に支障がないように、やっとつじつまを合わせてきていたので、彼女の首は可なりの打撃だった。だが、そうと決れば、この際少しでも沢山の金を商会から取ることだったが、私が非合法なので強いことは云えなかった。事実、主任は警察の手が入らないだけ君の儲けなのだから、

おとなしく引いて貰いたいと、暗に釘を打っていた。
　私たちはテキ面に困って行った。悪いことには、それが直ぐ下のおばさんに分る。下宿だけはキチンとして信用を得て置かなければ、うさん臭く思われる。そうなるとそれはただ悪いというだけで済まなくて、危険だった。それで下宿代だけはどうしても払うことにした。だがそうすると、あと二三円しか残らなかった。二三円などは直ぐ無くなる。笠原は就職を探すために、毎日出掛けて行くし、私も一日四回平均には出なければならなかった。私は今まで乗りものを使っていたところを歩くことにした。そのためにー一つの連絡をとるのに、その前後三四十分という時間が余分にかかり処によると往き帰りに二時間もかかり、仕事の能率がメキメキと減って行った。私は「基金カンパ」を起しているのだと云って、会う同志毎に五銭、十銭とせしめた。こうなると、須山の「神田伯山」もないものだ、と私は苦笑した。須山や伊藤は心配してくれた。自分たちは合法的な生活をしているので、金が無くても致命的ということは尠いし、それに誰からでも金は借りられると云うので、日給から五十銭、一円と私のために出してくれた。私は、そういう金はウカツに使えないと思ったので、仕事のための交通費に当て、飯の方を倹約した。なすが安くて五銭も買おうものなら、二三十もくるので、それを下のおばさんのヌカ味噌の中につッこんで貰って、朝、ひる、夜、三回とも、そのなすで済ました。三日もそれを続けると、テキ面に身体にこたえてきた。階段を上がる度に息切れがし、汗が出て困った。
　腹が減り、身体が疲れているのに、同じものだと少しも食慾が出なかった。終いには飯にお湯をかけ、眼を力一杯つぶって、ザブザブとかッこんだ。それでも飯のあるときはよかった。夜三つ位の連絡を控えていて、それも金が無いので歩き通さなければならない時、朝から一度しか飯を食っていない時は、情けない気がした、私は一度その同志に会えたらパン位にはありつけるだろうと当てにして行ったのだが、まんまと外れてしまったことがあった。その同志は気の毒そうな顔をして、自分はこの次にMに会うが、或いはパン代位は出そうだから一緒に行ってみようと云った。Mとは顔見知りだし、我慢の出来なくなった私はそうすることにした。私はそこでパンとバタにありつけた。Mは「パン一片食うために、大の男がのこのこ出掛けてきて、つかまったりしたら事だぜ！」と笑った。「まず、我に、パンを与えよ、だよ！」私はそんなことを云って笑ったが、――こういう情態が続くということは全くよくないことだと思った。しっかりと腰を据え、長い間決してつかまらずに仕事をしてゆくためには、こんな無理や焦り方をしては駄目だ。
　私は最後の手段をとることにきめた。その日帰ってきて、私は勇気を出し、笠原にカフェーの女給になったらどうかと云った。彼女は此頃では毎日の就職のための出歩き

さすがに彼女から眼をそらした。だが、彼女はそれっきり頑くなに黙りこんだ。私も仕方なく黙っていた。

「仕事のためだって云うんでしょう……？」

笠原は私を見ずに、かえって落付いた低い声で云った。それから私の返事もきかずに、突然カン高い声を出した。

「女郎にでもなります！」

笠原は何時も私について来ようとしていないところから、為すことのすべてが私の犠牲であるという風にしか考えられなかった。若しも犠牲というならば、私にしろ自分の殆んど全部の生涯を犠牲にしている。須山や伊藤などと会合して、帰り際になると、彼等が普通の世界の、普通の自由な生活に帰ってゆくのに、自分には依然として少しの油断もならない。くつろぎのない生活のところへ帰って行かなければならないと、感慨さえ浮かぶことがある。そして一旦つかまったら四年五年という牢獄が待ちかまえているわけだ。然しながら、これらの犠牲と云っても、幾百万の労働者や貧農が日々の生活で行われている犠牲に比べたら、それはものの数でもない。私はそれを二十何年間も水呑百姓をして苦しみ抜いてきた父や母の生活からもジカに知ることが出来る。だから私は自分の犠牲も、この幾百万という大きな犠牲を解放するための不可欠な犠牲であると考えている。

だが、笠原にはそのことが矢張り身に沁みて分らなかったし、それに悪いことには何もかも「私の犠牲」という風に考えていたのだ。「あなたは偉い人だから、私のような馬鹿が犠牲になるのは当り前だ！」――然し私は全部の個人生活というものを持たない「私」である。とすればその「私」の犠牲になるということは何を意味するか、ハッキリしたことだ。私は組織の一メンバーであり、組織を守り、我々の仕事、それは全プロレタリアートの解放の仕事であるが、それを飽くまでも行って行くように義務づけられている。その意味で、私は私を最も貴重にしなければならないのだ。私が偉いからでも、私が英雄だからでもない。――個人生活しか知らない笠原は、だから他人(ひと)をも個人的尺度でしか理解出来ない。

私はこのことをよく笠原に話した。彼女は黙ってきいていた。が、その日はそれから一言も云わずに、彼女は早く寝てしまった。

七

夜、「マスク」の原稿を書いたり、地方の「オル」に出す報告を整理したり、それに配布の方から廻ってきて、少し停滞しているパンフレットや資料を読んで遅くなったので、次の朝十時頃まで寝ていた。――私は、下に誰か訪ねてきたりするのには、自分でも驚くほど敏感だった。私は

それで「ハッ!」として眼がさめたらしい。頭をあげると、矢張り巡査だった。戸籍しらべに来ている。私はこういう時に自分が引張り出されないようにと、前から原籍や氏名などを書いて、おばさんに渡してあった。巡査は細々と、しつこく訊いていた。おばさんの一家のことも、まるで犯罪でも調べるようにきいている。これはどうも様子がおかしいなという予感が来た。私は耳をすましてから、書類の入っているトランクに鍵を下ろして、音がしないように着換をはじめた。――「間借は?」ときいている。「ハ、居ます。」……おばさんは茶の間に戻ってきて、私の書いた紙片を渡したらしい。

「これにはこの前いたところが書いてないね。」……「夫婦かね?」とか、「何時籍が入ったのか、それとも籍が入ってないのかも、これじゃハッキリしていない。」おばさんが何か云っている。「夫の方は勤めてないのか?」……「今、居るの?」――私は来たな、と思った。「今出ています。」おばさんの云うのが聞えた。私はホッとすると同時に、やっぱり有り金をたたいて間代だけは払って置いて良かったと思った。「じゃ、後でモウ少し詳しく聞いておいて、な。」と、巡査が云って帰りかけたらしい。私はやれやれと思って、又蒲団の上に腰を下したとき、戸をあけながら巡査の声がした、「この頃、赤がよく間借りをしているから、気をつけてもらわんと……。」私はギクッとした。おばさんは「ハア?」と云って訊きかえしている。巡査はそれに二言三言云ったらしかった。おばさんには「赤」というのが何んであるか分らなかったのだろう。

私はこういう調べ方のうちに、只事ならぬものを感じた。その日、連絡から帰ってくると、隣りの町で巡査が戸籍名簿を持って小さい店家に寄っていた。ところが、そこから一町と来ないうちに、同じ町なのに今度は二人の巡査が戸籍名簿を持って小路から出てきた。私はSに会ったとき、朝の戸籍調べのことを話したら、全市を挙げて虱つぶしに素人下宿の調査をしているらしいから気を付けないといけないと云った。私はこの物々しい調べ方にそれを感じた。

彼奴等は今まで何べんも党は壊滅したとか、根こそぎになったとか云ってきた。それを自分たちの持っている大きな新聞にデカデカと取り上げて、何も知らない労働者にそのことを信じこませ、大衆から党の影響を切り離すことにムキになってきた。ところが、そんなことをデカデカと書いたすぐ後から、到る処で党が活動している。それはどう誤魔化しようにも誤魔化しがきかなかった。殊にこの戦争の時期に「メーデー」とか、八月一日の「国際反戦デー」というような大きなカンパを前にして、彼奴等はどうでもこうでも党の力を根こそぎにしなければならなかった。彼等はそのために全力を彼等の持っているあらゆる国家権力を総動員している。口では党を侮ったり、デマを飛ばしたり見縊っているが、この事実こそは明らかにそれを裏切っ

て、党が彼奴等の最大の敵であることを示している。外国のある記事には、日本の党のことを「小さくして戦闘的な党」と書いているそうだが、(Sは須山の「神田伯山」とちがって、こういうことをよく知っていた) 彼はそのことを私に話したとき、「この小さくして戦闘的な党は、一国の国家権力と対等に、否対等以上に対立している大勢力なんだ」と云って、「この小さくして戦闘的な」党を根こそぎにするために、何百万倍も大きな図体の彼奴等が躍気となっている。だから、この小さい俺達一人々々と雖もそれだけの「自負」を持って仕事をして行かなければならないと云った。「それァ素晴らしい自負だ！」と云って、その時私たちは無精に喜んだ。その自負を最後まで貫徹するために、彼奴等に捕まったりしてはならなかった。

下宿がこんな具合だと危険この上もない。私や須山や伊藤はメーデーをめざして倉田工業を動かそうと思っている。六百人の臨時工の首切と伴って、私たちさえしっかりしていれば、その可能性は充分にあった。それを今やられたら、全く階級的裏切となるのだ。Sは此の頃枕もとに太身のステッキと草履を用意して寝ることにしているそうだ。私はそのことに気付いたので、まだ実行していなかった物干に草履をおいて置くために、途中一足買って戻ってきた。

私は須山と会ってみて、「赤狩り」は何も外ばかりでないことを知った。――連絡に行くと、向うから須山が顔一杯にほう帯をし、足を引きずって、やってくるので、私は吃驚した。「やられた！」と云うのだ。彼は時々ほう帯の上から顔を抑えた。傷が痛んで、どうしようかとも思ったが、時期が時期だし、連絡が切れると困るので、ようやくやってきたのだった。私たちは外を歩くのをやめて、しるこ屋に入った。

工場では外の警察だけではあまり効果がないというので、清川や熱田の「僚友会」や在郷軍人の青年団を入れ、内部から「赤狩り」をしようとしたのに、「マスク」やビラなどで、その事さえバク露されて、あせり出したらしい。ところが会社はこの二三日前から例の「慰問金」の募集をやり出した。時期おくれに倉田工業がそれをやり出したというのはそれでもって工場内の雰囲気を統一して、所謂赤の喰い込む余地をなくしようという目的からだった。「忠君愛国」であろうが、何んであろうが、彼等は自分の利益にならないものなら、見向きもしない。会社にこのことを献策したのは、パラシュート工場で、「マスク」を持っていた女工を殴りつけた「職工の服を着た」在郷軍人の青年団たちらしい。

須山はこの問題をつかんで、「僚友会」の清川や熱田を大衆から切り離すことをしようと考えた。伊藤もそれに賛成した。労農大衆党という兎にも角にも労働者のための党であり、兎にも角にも帝国主義戦争には反対している、だが本当は少しも「労働者のための党」でもなく、帝国主義戦

争にも上べだけしか反対していないのだということを、皆の前で知らせる必要があった。須山と伊藤は「僚友会」の平メンバーに入っていた。プロレタリアートがブルジョワジーのあらゆる欺マン的政策の本質をえぐり出して、戦争に反対するという困難な仕事をしてゆくためには、何より「僚友会」のような見せかけの味方――右翼日和見主義者と闘って行かなければならぬ。須山は慰問金のことで、「僚友会」の定期総会を開いたらどうか、と清川のところへ持って行った。それと同時に伊藤の仲間や自分の仲間を通して、「慰問金」募集の問題を一般に押し拡めることにした。

総会に出てみると、驚いたことには青年団の職工も来ている。私たちが「僚友会」を重くみていたのは、そこには臨時工はホンの少ししかいなかったが、本工が多かったからである。伊藤や須山の仲間には本工が一人か二人しかいなかった。本工を獲得することの重要さが繰りかえされながら、それがなかなか困難なところから、成績が挙がっていなかったのだ。「僚友会」も二三の人間をのぞけば、漠然とした考えから入っているので、それらの眼の前で清川が正しいか、須山が正しいかをハッキリと示せば、それらのものでこっちについてくる可能性が充分にあった。「僚友会」は戦争が始まってから半年になるというのに、一二度しか会合を持っていなかった。仲間のうちでもそれをブツブツ云っていた。須山はまず皆の前で、これだけの労働者や農民が戦地に引き出され、且つ日常生活でもこれだけの強行軍をやらされているときに、「僚友会」が一度も真剣に開かれなかったことは、階級的裏切りだ、というところから始めた。五六人が「異議なしだな……。」と云った。が、その連中は云ってしまってから、モジモジしている。私も須山も反動組合の「革反」の経験があるので、その「異議なしだな」と云って、モジモジしたのがよく分った。それで私は笑った。須山も笑った。が、彼は「痛た、痛た!」とほう帯の上から顔を抑えた。彼は、よく人の特徴をつかんだ真似がうまかった。

慰問金のことになると、清川は、満州に行っている兵士は労働者や農民で、我々の仲間だ、だからプロレタリアートの連帯心として慰問金を送ることは差支えないと云った。皆は自分の爪をこすりながら、黙ってきいていた。我我の同志は工場にいたときは資本家に搾られ、戦場へ行っては、敵弾の犠牲となっている、だが、この我々の同志を守るものは我々しかない、だから我々は慰問金の募集に応じて差支えない――清川の説に、今度は皆はもっともらしくうなずいた。

見ていると、伊藤は困ったように眉をしかめていたが、

「そうだろうか――?」

と云った。

僚友会には女工が十四五人いたが、会に出てくるものは二人位しかいなかった。それを伊藤が誘い合わせたので、

六人ほど出ていた。僚友会としてはめずらしいことだった。――ところが僚友会で女が発言したことは今までになかったので、皆は急に伊藤の顔を見た。
「清川さんの話を聞いていると、もっともらしいが何んだか陸軍大臣の訓辞をきいているようで……」
皆はドッと笑った。
「清川さんでも誰でも、今度の戦争が私たちのためでなくて、結局は矢張り資本家のためにやらされているということは分りきっている。若しも私たち職工や失業者や貧乏百姓のためにやられているものとしたら、私たちは勿論裸になっても有り金全部は慰問金にして送ってもいいが、――そうでない。」
伊藤がそう云うと、青年団の職工が突然口を入れて妨害し出した。それで、須山が割って入った。彼は清川の言葉をそのまま使って、「我々労働者は工場にいるときは搾られ、資本家の用事がなくなれば勝手に街頭に放り出され、戦争になれば一番先きに引ッ張り出される。どの場合でもみんな資本家のためばかりに犠牲にされている。――だから、若しも慰問金を出すなら彼奴等が出さなければならないのだ！」
そう云うと、皆は又それもそうだというような顔をした。
「慰問金を我々に出させるのは、彼奴等は戦争は自分たちのためにやられているのではなくて、国民みんなのためにやられているのだと思いこませるためのカラクリなのだ。」
すると、伊藤は須山のあとを取って、「赤い慰問袋」の話をしたり、戦争になってから少しも自分たちが生活が楽にならなかったことなどを話した。そうなると清川たちはモウ太刀打ちは出来ないのだ。清川は僚友会の「おん大」の貫録をみんなの前で下げてしまった。青年団の職工だって、駄目なのだ。だが、こういう社会ファシストの本体というのは本当の芝居を大衆の前ではなくて背の方で打つところに面目があるのだから、これだけでうまく行ったと思えば大間違いなのだ。
その会合の帰り、青年団の奴が二三人で、
「お前は虎だな！」と云って、「一寸来い！」
と云うのだ。そして小路へ入るなり、いきなり寄ってたかって殴りつけた。
「三人じゃ、俺も意気地なくのびてしまったよ！」
と須山は笑った。
須山は直ぐ伊藤を通じて、昨日集まった僚友会のメンバーに、この卑怯なやり方を知らせて貰うことにした。それが何よりどっちが正しいかを示すことになるからである。
須山に会って一時間して、伊藤と会うと、慰問金のことでどうして殴り合いになったかと皆んなが興味をもってきくので、殴り合いのことを話しているうちに慰問金の本当の意味のことが話せて都合が良かったと、喜んでいた。
――慰問金のことを充分に皆に分らせることが出来なかっ

たと思って心配したのだが、皆は理窟より前に、この仕事のつらさにもってきて、その上文金まで取られたら、「くたばるばかりだ」と云うので、案外にも募集は不成功に終った。工場の様子では、殴られてから須山の信用が急に高くなった。職工たちはそういうことだと、直ぐ感激した。その代り須山はおやじににらまれ出したので、ひょっとすると危いと、伊藤は云った。
「今度の慰問金の募集は、どうも会社が職工のなかの赤に見当をつけるために、ワザとやったようなところがある……？」
私は確かにそうだ、と云った。
すると、彼女は、
「少し乗せられた――」
と云った。
私は、何時もの伊藤らしくないと思って、
「それは違う！」と云った――「俺たちはその代り、何十人という職工の前に、誰が正しいかということを示すことが出来たんだ。それと同時に、僚友会のなかに我々の影響下を作れるし、それを放って置くのではなしに、組織的に確保したら素晴しい成果を挙げ得たことになる。少しの犠牲もなしに仕事は出来ない。これらは最後の決定的瞬間にキッと役に立つ。」
伊藤は、急に顔を赤くして、
「分ったわ！　そうねえ。――分ったわ！」

と云って、それが時徴である考え深い眼差で、何べんもうなずいた。
私は冗談を云った。
「最後に笑うものは本当に笑うものだから、今のうち須山に渋顔をしていて貰うさ！」
伊藤も笑った。
彼女はそれから自分たちのグループを築地小劇場の芝居を見に連れて行ったことを話した。どの女工も芝居と云えば歌舞伎（自分では見たことは無かったが）か水谷八重子しか知らないのに、労働者だとか女工だとかが出てきて、「騒ぎ廻る」ので吃驚してしまったらしかった。終ってから、あれは芝居じゃないわ、と皆が云う。伊藤が、じゃ何んだと訊くと、「本当のことだ」と云う。面白い？　と訊くと、みんなは「さあ――！」と云ったそうだ。――然し余程びっくりしたとみえて、後になってもよく築地の話を し出すそうである。伊藤に何時でもなついている小柄のキミちゃんというのが、
「あたし女工ッて云われると、とっても恥かしいのよ。ところが、あの芝居では女工ッてのを鼻にかけてるでしょう、ウソだと思ったわ。」
そんなことを云った。が、それでも考え考え、「ストライキにでもなったら、ウンと威張ってやるけれど、隣近所の人に女工ッて云うのは矢張り恥かしいわ！」
みんなに、何時かもう一度行こうか、ときくと、行こう

というのが多いそうだ、それはあの芝居を見ると、うちの（うちというのは、自分の工場のことである！）おやじとよく似た奴がウンといじめられるところがあるからだという理由だった。

伊藤が、何気ないように、どうせ俺ら首になるんだ、おとなしくしていれば手当も当らないから、あの芝居みたいに皆が一緒になって、ストライキでもやって、おやじをトッちめてやろうかと云うと、みんなはニヤニヤして、

「ウン……」と云う。そしてお互いを見廻しながら、「やったら、面白いわねえ！」と、おやじのとッちめ方をキャッキャッと話し合う。それを聞いていると、築地の芝居と同じような遣り方を知らず識らずに云っていた。

伊藤の影響力で、今迄のこの仲間に三人ほど僚友会の女工が入ってきた。それらは大ッぴらな労働組合の空気を少しでも吸っているので、伊藤たちが普段からあまりしゃべらない事にしてある言葉を、平気でドシドシ使った。それが仲間との間に少しの間隙を作った。それと共に、それらの女工はどこか「すれ」ていた。「運動」のことが分っているという態度が出ていた。——伊藤はその間のそりを合わせるために、今色々な機会を作っていた。「小説のようにはうまく行かない」と笑った。

私たちは「エンコ」する日を決め、伊藤が場所を見付けてくれることにした。愈々最後の対策をたてる必要があった。

「あんた未だなす？」

伊藤が立ち上りながら、そう訊いた。

「あ。」

と云って、私は笑った、「お蔭様で、膝の蝶ちがいがゆるんだ！」

伊藤は一寸帯の間に手をやると、小さく四角に畳んだ紙片を出した。私はレポかと思って、相手の顔を見て、ポケットに入れた。

下宿に帰って、それを出してみると、薄いチリ紙に包んだ五円札だった。

八

笠原は小さい喫茶店に入ることになった。入ると決まるとさすがに可哀相だった。運動しているものが、生活の保証のために喫茶店などに入るのは、何んと云っても恐ろしいことで、そういう同志は自分ではいくらしっかりしていようとしても、眼に見えて駄目になって行く。我々にとって「雰囲気」というものは、魚にとっての水と少しもかわらないほど大切なのだ。女の同志が自分一個のためでも、又男と女が一緒に仕事をしていても、とも倒れからのがれるために喫茶店に入るときでも同じである。ところが笠原の場合、その仕事の訓練さえも持っていないので、ズルズルと低い方に身体を傾けてゆくのは分りきっていた。——

だが、どうしても自分の全生涯をとして運動をやろうという気魄も持たず、しかも他方私の組織的な仕事は飽くまでも守ってゆかなければならぬドタン場に来ている以上、センチメンタルになっていることは出来なかった。

笠原は始め下宿から其処へ通った。夜おそく、慣れない気苦労の要る仕事ゆえ、疲れて不機嫌な顔をして帰ってきた。ハンド・バッグを置き捨てにしたまま、そこへ横坐りになると、肩をぐッたり落した。ものを云うのさえ大儀そうだった。しばらくして、彼女は私の前に黙ったまま足をのばしてよこした。

「――？」

私は笠原の顔を見て、――足に触って見た。膝頭やくるぶしが分らないほど腫んでいた。彼女はそれを畳の上で折りまげてみた。すると、膝頭の肉がかすかにバリ、バリと音をたてた。それはイヤな音だった。

「一日じゅう立っているッて、つらいものね。」

と云った。

私は伊藤から聞いたことのある紡績工場のことを話した。「立ち腫れ」がして足がガクつき、どうしても機械についていられない。それを後から靴で蹴られながら働いていることを話した。私はそして、笠原がそういう仕事のつらさを、自分だけのつらさで、自分だけがそこから逃れれば逃れることとの出来るつらさと考えず、直ぐそれがプロレタリア全体の縛りつけられているつらさであると考えなければならないと云った。笠原は聞いていて、

「本当に！」と云った。

私は久し振りに自分の胡坐のなかに、小柄な笠原の身体を抱えこんでやった――彼女は眼をつぶり、そのままになっていた。

笠原はその後、喫茶店に泊りこむことになった。その経営者は女で、誰かの妾をしているらしかった。女一人で用心が悪いので、そこで飯を食っても同じ給金は出すから寝泊りして欲しいというのだった。それで下宿には暫らく国へ帰ってくるということにして、出掛けて行った。女主人は高等師範か女子大か出た英語の達者な女で、男は一人でなくて三人位はいるらしく、代る代り他所で泊って、朝かえってきた。大学の教授や有名な小説家や映画俳優がいて、その女は帰ってくると、一々際どいところまで詳しく話して、比較をやったりするので、笠原は弱った。そして昼すぎの二時三時まで寝ていた。私は朝起きても、めしが無いときは、そこの喫茶店に出掛けて行った。朝のうちはお客さんが殆んど無かったので、笠原の食うごはんのように装わして、飯を焚かせ、腹につめこんだ。はじめ笠原が嫌がったが、終いには「この位のこと当然よ！」と云うようになった。喫茶店の台所は狭くて、ゴタゴタしていて、ジュクジュクと湿ッぽかった。私はそこにしゃがんで、急いでめしをかッこんだ。

「いい恰好だ！」

笠原は二階の方に注意しながら、私の恰好を見て、声をのんで笑った。

然し笠原の雰囲気はこの上もなく悪い。女主人の生活もそうだし、女のいる喫茶店にはただお茶をのんで帰ってゆくという客ではなく、女を相手に馬鹿話をしてゆく連中が多かった。それに一々調子を合わせて行かなければならない。それらが笠原の心に沁みこんでゆくのが分った。私はまだ笠原の全部を投げ出しているのではない。機会があったらと色々な本を届けたり、出来るだけ色々な話をしてやっていたのだ。だが、彼女は今までよりモッと色々なことをおッくうがり、ものごとをしつこく考えてみるということをしなくなった。

然し私はそんなに笠原にかかずり合っていることは出来なかった。仕事の忙がしさが私を引きずッた。倉田工業の情勢が切迫してくるとともに、私は笠原のところへはただ交通費を貰いに行くことと、飯を食いに行くことだけになって、彼女と話すことは殆んどなくなってしまっていた。気付くと、笠原は時々淋しい顔をしていた。が私はとにかく笠原のおかげで日常の活動がうまく出来ているのだから、その意味では彼女と雖も仕事の重要な一翼をもっていることになる。私はそのことを笠原に話し、彼女がその自覚をハッキリと持ち、自分の姿勢を崩さないようにするのが必要だと云った。

だんだん私には、交通費や飯にありつくために出掛けることさえ余裕なくなり、その喫茶店には三日に一度、一週間に一度、十日に一度という風に数少くなって行った。「地方」「地区」それに「工細」と仕事が重なって居り、一日に十二三回の連絡さえあることがあった。そんな時は朝の九時頃出ると、夜の十時頃までかかった。下宿に帰ってくると、首筋の肉が棒のように固わばり、頭がギン、ギン痛んだ。私はようやく階段を上がり、そのまま畳のうえにうつ伏せになった。私はこの頃、どうしても仰向けにゆッたりと寝ることが出来なくなった。極度の疲労から身体の何処かしら悪くしているらしく、弱い子供のように直ぐうつ伏せになって寝ていた。私は想い出すのだが、父が秋田で百姓をしていた頃、田から上がってくると、泥まみれの草鞋のまま、ヨクうつ伏せになって上り端で昼寝していた。父は身体に無理をして働いていた。小作料があまり酷なために、村の人が誰も手をつけない石ころだらけの「野地」を余分に耕していた。そこから少しでも作をあげて、暮しの足にしようとしたのである。そんなことのために父はひどく心臓を悪くしていた。——私はどうしてもうつ伏せにならないと眠れないとき、自分がだんだん父と似てくるように思われた。然し父は、地主に抗議して小作料を負けさすことをせずに、自分の身体をこわしてまで働くことでそれから逃れようとした。二十何年も前のことだが。然し私はちがう。私はたった一人の母とも交渉を絶ち、妹や弟からも行衛不明となり、今では笠原との生活をも犠牲に

してしまった形である、それに加えてどうやら私は自分の身体さえそのために壊れかけているようだ――これらは然し私の父のように地主や資本家にモッと奉公してやるためでなく、まさにその反対のためである！

私にはちょんびりもの個人生活も残らなくなった。今では季節々々さえ、党生活のなかの一部でしかなくなった。四季の草花や眺めや青空や雨も、それは独立したものとして映らない。私は雨が降れば喜ぶ。然しそれは連絡に出掛けるのに傘をさして行くので、顔を他人に見られることが少ないからである。私は早く夏が行ってくれればいいと考える。夏が嫌だからではない、夏が来れば着物が薄くなり、私の特徴のある身体つき（こんなものは犬にでも喰われろ！）がそのまま分るからである。早く冬がくれば、私は「さ、もう一年寿命が延びて、活動が出来るぞ！」と考えた。ただ東京の冬は、明る過ぎるので都合が悪かったが。――然しこういう生活に入ってから、私は季節に対して無関心になったのではなくて、むしろ今まで少しも思いがけなかったような仕方で非常に鋭敏になっていた。それは一昨年刑務所にいたとき季節々々の移りかわりに殊の外鋭敏に感じたその仕方とハッキリちがっている。

これらは意識しないで、そうなっていた。置かれている生活が知らずにそうさせたのである。もと、警察に追及されない前は、プロレタリアートの解放のために全身を捧げていたとしても、矢張り私はまだ沢山の「自分の」生活を持っていた。時には工場の同じ組合の連中（この組合は社民党系の反動組合だった。私はそこでの反対派として仕事をしていた）と無駄話をしながら、新宿とか浅草などを歩き廻ることもしたし、工場細胞としての厳重な政治生活が規制されていたが、合法生活が当然伴う「交際」だとか、活動写真を見るとか、（そう云えば私は最近この活動写真の存在ということをすッかり忘れてしまっている！）飲み食いが私の生活の尠なからざる部分を占めていた。時にはこういう生活から、工細としての仕事を一二日延ばしたりしたことがあった。又自分だけの名誉心が知らずに働いていて、自分の名誉を高めるような仕事と工細の仕事と食い合ったとき、つい自分の方のことから先きに手がついたことが一切ならずあった。これは勿論その後の仕事のなかで変ってきたが、それでも党員としての「廿四時間の政治生活」を私がしていたとは云えなかった。然しそれは私にばかり罪があるのではない。一定の生活が伴わない人間の意識的努力には限度がある。一切の個人的交渉が遮断され、党生活に従属されない個人的欲望の一切が規制される生活に置かれてみて、私が嘗つて清算しよう清算しようとして、それがこの上もなく困難だったそれらのことが、極めて必然的に安々と行われていたのを知って驚いた。それはこれまでの一二ヵ年間の努力を二三ヵ月に縮めて行われた。と云うことが出来る。始めこの新しい生活は、小さい時誰が一番永く水の中に潜っているかという競争をした時のよ

うな、あの堪えられない何んとも云えない、胸苦しさを、感じはしたが。——だが、勿論私はまだ本当の困難に鍛錬されてはいない。須山とちがった切抜(スクラップ)の好きなSは、私の「廿四時間の政治生活」というのに対して、「一日を廿八時間に働いても疲れを知らないタイプ」に自分を鍛えなければ駄目だと云っている。

一日を廿八時間に働くということが、私には始めよく分らなかったが、然し一日に十二三回も連絡を取らなければならないようになった時、私はその意味を諒解した。——個人的な生活が同時に階級的生活であるような生活、私はそれに少しでも近附けたら本望である。

倉田工業は、臨時工の若干を本工に直すかも知れないという噂で、最後のピッチを挙げていた。私たちはそれにそなえるために、細胞の再編成をやることにした。須山のグループ（影響下）から一人、それは若い本工だった。それから伊藤のグループから二人、そのうち一人は本工、一人は臨時工だった。この三人を新しく細胞に推薦することにして、「履歴」を取った。私はそれを「オルグ」に持って行き、承認を得た。そして各細胞に対しては職場内での責任を明確に分担して背負わせ、須山や伊藤に万一のことがあった場合、あとのものが直ちに予定された新しい部署について仕事が一日でも遮断されることがないように手筈を決めた。須山や伊藤に何か事が起れば、工場にいると直ぐ分るので、その時は新しい細胞が須山と私との連絡場所にやってくることにしてあった。私たちの会合は闘争の司令部なので、どんなことがあっても連絡が絶たれ、そのために一刻を争うときに対策や方針が出ないということは階級的裏切りであった。誰かがやられ連絡が切れたために、うまく行かなかった——こう云う今迄のやり方は、恰かも我々に最初から弾圧が無いかのような、又はそれを全く予想していないかのような、敗北的な見地に立っている。誰かがやられるかも知れないのは分り切っているのだ。私たちは、だから最初から二段、三段の準備をして闘争をすすめて行かなければならぬ。

事実「僚友会」で乱闘をやってから、須山は極度に危くなっていた。須山は今日やられるか、明日やられるかを覚悟して、毎日工場に出ていた。工場なので、仕事しているときに「一寸来い」をやられると、それっきりだった。然し組織の可能性が高まっていたので、彼は出ていた。危くなったが、同時に職場の中で或る程度のことを公然と云える自由を得たし、みんなの信用が出て来ていた。

月末が近づいた。会社はこの三十日か三十一日に首切りをやるらしかった。本工に直すと云っても、まだそれが少しも具体化していないので、皆はようやく疑いをかけてきた。「マスク」で、このやり方がギマンであって、それによって、一方では仕事の能率を高め、他方ではみんなの反抗を押しとどめるためであることを書いたが、その意味がジカに分りかけていた。臨時工が重なので、首切りが発

表されてからでは団結力が落ちる。この二三日に事を決めなければならなかった。
私たちはビラやニュースで、戦争に反対しなければならないことをアッピールしてきたが、彼等が一度その首切りのことで立ち上ったら、それはレーニンの言い草ではないが、何故戦争に反抗しなければならないかを「お伽噺のような速さで」教える。殊に軍器を作っている工場であるだけ、ハッキリと意識的な闘争が出来るのだ。――まず事を起さなければならぬ。
私は最後の肚をきめた。
それは伊藤や須山の影響下のメンバー、新しい細胞に各職場を分担させて一斉に「馘首反対」の職場の集会を持たせることだった。そしてそれを成功させるために工場の中で須山に公然たるビラ撒きをさせる。――伊藤の「しるこや組」に、兄が倉田工業の社員である女工がいた。その女工の口から三十一日ではなくて（三十一日のように思い込ませて置いて）先手を打って二十九日一斉に首切りをやることが分った。その時は警察ばかりでなく軍隊も出るらしかった。従って是が非でも二十八日にストライキをやって、こっちが逆に先手を打たなければならない。
ところが、須山には最近やられるらしい危険性がある。伊藤からの報告だったが、ケイサツの私服が事務所のなかから一二度出て行くのを見ているし、須山のいる第二工場の入口でよくおやじと立話していた。それがこの一二日なのである。太田がやられてからも、党のビラが二度、「マスク」が二度も入っている。向うが須山をにらんでいることは最早疑うことは出来なかった。それに「共産党」と云えば、何処か知れない「上の方に」いたり、或いは「地の底に」もぐって出没している神様か魔物であるかのように考え、又考え込ませられている。だが本当は須山のように皆から信用のある、自分たちのそばで肩をならべて働いているものがそうであることを、ハッキリと示し、親しみと信頼を起させる必要があった。――私が須山に公然と党のビラを撒かせる決意をしたのは、そこから来ていた。最後を闘うためには、仮りに須山がいないとしてもそれは他の誰かがやらなければならない任務だったのだ。陰謀的な仕方ばかりでは、大衆的動員は行われない。見えない組織をクモの巣のようにのばして置いて、そこへ公然たる煽動を持ち込まなければならないのだ。
その最後の対策をたてるために、私たちはエンコすることになった。この案はそこに出され、決められるのだったが――然し須山のことを考えると、私はさすがに心がしめつけられた。党のビラを撒いたとなれば、闘争経歴にもよるが二三年から四五年の懲役を覚悟しなければならないのだ。何時もなら、私は外へ一歩出たら元とはちがって、一切の空想ごとをやめて、四囲に注意して歩くことにしていたが（そしてそれは可成り慣れていたが）、その日は、フト気付くと私は直ぐ須山のことを考えていた。だが、そんな

に須山のことに立ち停っていることはよくないことなのだ。須山にしても、自分たちの置かれている情勢をハッキリと見ていれば、このことを一つの必然として、而も不可欠のものとして理解することが出来る筈なのだ。そこに別の道或いは除けて通れる道が一つもなく、しかもプロレタリアートの解放のためにはどうしてもその道を通らなければならないとすれば、私たちはそこから何か仕事以外のもの、例えばこんな事をすることが「残酷なこと」ではないだろうかとか、又は「同情に堪えない」ことではないだろうかとか、凡そそんなことが引き出せるわけがないのだ。

　だが、会合の場所に行くまで、私の頭にあの突拍子もない切抜帳で私たちを笑わせる須山の顔が来て困った。

　場所は今まで三度位使ったことのある須山の昔の遊び（飲み）友達の家だった。足元の見えない土間で下駄を脱ぎそれを懐に入れて、二階に上がって行くと、斜めに光が落ちて来て、須山の顔がのぞいた。

　伊藤は壁に倚りかかって、横坐りに足をのばし、それを自分でもんでいた。私が入って行くと、後れ毛を搔き上げるようにして、下からチラと見た。私は「この前は！」と云った。彼女はそれには別に答えなかった。工場のオルグをやると、どうしても白粉ッ気が多くなるが、細胞の会合のときに伊藤は今まで一度も白粉気のある顔をしてきたことがなかった、又その必要もなかったので。フト見ると、ところが伊藤は今までになく綺麗な顔をしていた。

「同志伊藤は今男の本工を一人オルグしてのお帰りなんで――」

と、須山は又すぐ茶目て、伊藤の顔を指さした。

そんな時は何時もの伊藤で、黙っていた。彼女は何故か私の顔をその時見た。

　会が始まってから、私は何時もやることになっている須山の報告に特に注意した。彼はこの前の細胞会議の決定にもとづいて、職場々々に集会を持たせるように手配したが、工場の様子を見ていると、ここ二三日が決定的瞬間らしく、そのためには今至急何んとかしなければならないと云った。

　伊藤はそれにつけ加えて、前に私に報告してある馘首がこの三十一日と見せかけて実は二十九日にやるらしいこと、パラシュートやマスクの引受高から胸算してみると、それが丁度当っていた、そのためには明後日にせまっている二十八日に少なくとも決定的な闘争をしなければならないと云った。

　見解は一致していた。だから問題はその決定的な闘争をどんな形で持ち込むかにあった。――須山は考えていたが、

「ここまで準備は整っているし、みんなの意気も上がっているのだから、あとは大衆的煽動で一気に持って行くことだ。」

　と云った。それから一寸言葉を切って、

「この一気が、一気になるか二気になるかで、勝ち負けが

決まるんじゃないかな……？」

「そ。あとは点火夫だけが必要なのよ――八百人のために！」

伊藤はめずらしく顔に興奮の色を出した。

「俺、最近――と云っても、この二三日なんだが、少しジレジレしてるんだ。今迄色々な遣り方で福本イズムの時代のセクトを清算しながらやってきたが、まだ矢張りそれが残っている。今一息というところで、この工場を闘い抜けないのが、そこから来ているんじゃないかな？」

須山は私の顔を見て云った。

「誰かが大衆の前で公然とやらかさないと、闘いにならないと思うんだ。量から質への転換だからな。――俺、それは極左的でないと思うんだが、どうだろう？」

須山は、誰かがそれを「極左的だ」と云ったかのように、それに力をこめて云った。

私は「独断（ドグマ）」でなく、「納得」によって闘争を進めて行かなくてはならぬ。それで私は黙って、ただ問題が正しい方向に進むように、注意していただけだった。ところが、それは矢張り正しいところへ向って来ていた。殊に伊藤や須山が仕事のやり方を理窟からではなく、刻々の工場内の動きの解決という点から出発して、而もそれが正しいところに合致しているのだ。これは労働者の生活と離れていないところから来ていることで、我々の場合ここに理論と実践の微妙な統一がある。

――私は、それを極左的だというのは、卑怯な右翼日和見主義者が自分の実践上での敗北主義をゴマ化すために、相手に投げつける言葉でしかないと、須山に云った。須山は「そうだ！」と云った。

私はそこで、私の案を持ち出した。瞬間、抑えられたような緊張がきた。が、それは極く短い瞬間だった。

「俺もそうだと思う……」

須山はさすがにこわばった声で、最初に沈黙を破った。

私は須山を見た。――と、彼は、

「それは当然俺がやらなけァならない。」

と云った。

私はそれに肯いた。

伊藤は身体をこっちり固くして、須山と私、私と須山と眼だけで見ていた。――私が伊藤の方を向くと、彼女は口の中の低い声で、「異議、な、し、――」と云った。

見ると、須山は自分でも知らずに、胡坐（あぐら）の前のバットの空箱を細かく、細かく切り刻んでいた。

それが決まった時、フト短い静まりが占めた。すると今まで気付かずにいた表通りを通る人達のゾロゾロした足音と、しきりなしに叫んでいる夜店のテキヤの大きな声が急に耳に入ってきた。

それから具体的なことに入った。――最近ビラや工新の「マスク」が、女の身体検査がルーズなために女工の手で工場に入っていると見当をつけて、女工の身体検査が急に

厳重になり出している。それで当日は伊藤が全責任を持ち、両股(もも)がゴムでぴッしりと強く締まるズロースをはいて、その中に入れてはいること。彼女は朝Sの方からビラを手に入れたら、街の共同便所に入って、それをズロースに入れる。工場に入ってからは一定の時間を決めて、やはり便所を使って須山に手渡す方法をとる。ビラは昼休に屋上で撒くこと。それらをきめた。

会合が終ると、今迄抑えていた感情が急に胸一杯にきた。

「永い間のお別れだな……!」

と私が須山に云った。

すると、彼は、

「俺の友達にこんなのがある」と云った、「仲の良い二人の友達なんだが、一人は三・一五で三年やられたんだ。ところがモウ一人は次の年の四・一六で四年やられた。三・一五の奴が出てきて、昨年の十二月又やられ、三年になった。そいつは四・一六の奴の出てくるのを楽しみにしていたんだ。それで監獄に入るときに曰くさ、俺とあいつはどうも永久にこうやって入りくりになって会えないらしい、だが結構なことだって……!」

そして、「これは俺の最後の切抜帳(スクラップ・ブック)かな?」と自分で云った。

私と伊藤は——思わず噴き出した。が、泣かさるときのように私の顔は強わばった。

「どんなことがあったって、ここの組織さえがっちりと残っていれば、闘争は根をもって続けられて行くんだから、君だけはつかまらないようにしてくれ。——君がつかまったら、俺のしたことまでもフイで、犬死になるんだからな!」

と、須山が云った。

私たちは今日の決定通りに準備をすすめ、二十六日の夜モウ一度会うことにして、

「じゃ……」と立ち上がった。そのとき私と須山はそんなことをしようとは考えてもいなかったのに、部屋の真ん中に突ッ立ったまま両方から力をこめて手を握り合っていた。

フト須山は子供のようにテレて、

「何んだ、佐々木の手は小(ち)ッちゃいな!」

と、私に云った。

須山は外へ出ながら、モウこれからは機会もないだろうと思って、私の家(うち)に寄ってきたと云った。「君のおふくろは、会う度に何んだか段々こう小さくなって行くようだ。」と云った。

「……?」

私は何を云うんだろうと思った。が、フイにその「段々小さくなってゆく」という須山の言葉は、私の心臓を打った。私はその言葉のうちに、心配事にやつれてゆく母の小

さい姿がアリアリと見える気がした。――が、こういう時にそんな事を云う奴もないものだ、と思った。私はさりげなく、ただ「そうだろうな……」と云って、その話の尻を切ってしまった。

須山と別れてから、伊藤が次の連絡まで三十分程間があるというので、私と少しブラブラすることになった。私たちは、二十六日には須山のために小さい会をしてやろうということを話した。そのために伊藤が菓子とか果物を買ってくることにした。

伊藤は何時もは男のように大股に、少し肩を振って歩くのが特徴だった、それが私の側を何んだか女ッぽく、ちょこちょこと歩いているように見えた。別れるとき彼女は「一寸待ってネ」と云って、小さい店家に入って行った。やがて、買物の包みを持って出てくると、

「これ、あんたにあげるの――」

と云って、それを私に出した。そして、私が「困ったな！」と云うのに、無理矢理に手に持たしてしまった。

「此頃あんたのシャツなど汚れてるワ、向うじゃ、ヨクそんなところに眼をつけるらしいのよ！」

下宿に帰って、その包みを開けてみながら、フト気付くと私は伊藤と笠原を比較してみていた。同じく女だったが、私は今までに一度も伊藤と笠原との比較で考えてみたことは無かったのだ。だが、伊藤と比べてみて、始めて笠原が如何に私と遠く離れたところにいるかということを感じた。

――私はもう十日位も笠原のところへは行っていなかった。

九

倉田工業の屋上は、新築中の第三工場で、昼休みになると皆はそこへ上って行って、はじめて陽の光りを身体一杯にうけて寝そべったり、話し込んだり、ふざけ廻ったり、バレー・ボールをやったりした。その日はコンクリートの床に初夏の光が眩しいほど照りかえっていた。須山は自分のまわりに仲間を配置して、いざという時の検束の妨害をさせる準備をしておいた。

一時に丁度十五分前、彼はいきなり大声をあげて、ビラを力一杯、そして続け様に投げ上げた。――「大量馘首絶対反対だ！」「ストライキで反対せ！」……あとは然し皆の声で消されてしまった。赤と黄色のビラは陽をうけて、キラキラと光った。ビラが撒かれると、みんなはハッとしたように立ちどまったが、次にはワアーッと云って、ビラの撒かれたところへ殺到してきた。すると、そのうちの何十人というものが、ムキになって拾いあげたビラを、てんでに高く撒きあげた。それで最初一カ所で撒かれたビラは、またたく間に六百人の従業員の頭の上に拡がってしまった。――こんな事があるだろうと、予め屋上の所々に立ち

番をしていた守衛は、「こら、こら！　ビラを拾っちゃいかん！」と声を限り叫んで割り込んできたが、さて誰が撒いたのか見当がつかなくなってしまった。見ると誰でも、かれでもビラを撒いているのだ。

仕方のなくなった守衛は、屋上からの狭い出口を厳めて、そこから一人ずつ通して首実験をしようとしたが、そんなことをしていたら一時間経っても仕事が出来ない。皆は、太いコンクリートの煙突から就業のボーが鳴り出すと、腕を組んでその狭い入口めがけて「ワッショ、ワッショ！」と押しかけてしまった。そうなれば、守衛には最早どうにも手がつかなかった。――伊藤が見ていると、須山はその人ごみの中を糞落付きに落付いて、「悠然」と降りて行ったそうである。

あとでおやじが「誰が撒いたか知らないか？」と一人一人訊きまわったが、確かに須山が撒いたことを知っているものが居るにも拘らず、誰も云うものがいなかった。青年団の馬鹿どもが、口惜しがって、プンプンした。その日、須山のいる第二工場と、伊藤たちのパラシュートでは気勢が挙がって、代表を選んで他の工場とも交渉し、会社に抗議しようというところまで来た。

帰りに須山と伊藤とが一緒になると、彼は「こういう時は俺たちだって泣いてもいいんだろうな！」と云って、無理に帽子をかぶり直したり、顔をせわしくこすったりした。

途中、彼は何べんも何べんも、「こうまでとは思わなかった！」「こうまでとは思わなかった！　大衆の支持って、恐ろしいもんだ！」と、繰りかえしていた。

私はビラを撒いた日の様子をきくために、その日おそく伊藤と連絡をとっておいた。私は全く須山が一緒にやって来ようとは考えてもいなかったのだ。私は伊藤の後から入ってきた須山を、全く二三度見直した位である。それが紛れもなく須山であることが分ったとき、私は思わず立ち上がった。

私はそこで詳しいことを聞いたのである。私も興奮し、須山が伊藤に云ったという云い方を真似して、「こういう時は俺たちだってビールの一本位は飲んだっていいだろう！」と、三人でキリンを一本飲むことにした。

須山は躁いで、何時もの茶目を出した。

「あのビラ少し匂いがしていたぞ！」

と、伊藤にそんなことを云った。私は「こら！」と云って、須山の肩をつかんで、笑った。

然し、決定的な闘争はむしろ明日のきん坤一番にあるので、私たちはそれに対する準備を更に練った。

次の朝、職工たちが工場に行くと、会社は六百人の臨時工のうち四百人に、二日分の日給を渡して、門のところで解雇してしまった。ケイサツが十五六人出張してきていて、日給を貰いはしたものの呆然として、その辺にウロウロしている女工たちに、「さア帰った、帰った！」と追い

戻していた。
勘定口の側に、「二十九日仕事の切上げの予定のところ、今日になりました。然し会社は決して皆さんに迷惑を掛けないようにと、それまでの二日分の日給を進んでお払いしますから、当会社の意のあるところをお汲み願います。なお又新しい仕事があるときは会社としては皆さんに採用の優先権を認めますから、お含み下さい。」と、大きな掲示が出ていた。臨時工を二百人だけ後に残したことも、彼等のコンタンがある。歩調を乱れさせたわけだ。

解雇組には須山も伊藤も入っていた。――私たちは土俵際でまんまと先手を打たれてしまった。――須山と伊藤は見ていられないほどショげてしまった。私とても同じである。然し敵だって、デクな人形ではない。私たちは直ぐ立ち直り、この失敗の経験を取り上げ、逆転した情勢をそのままに放棄せずに、次の闘争に役立てるようにしなければならない。

蹴散らされたとは云うものの、本工のなかに二人メンバーが残っている。又解雇されたものたちは、それぞれの仕事を探して散らばって行ったが、その中には伊藤と須山のグループが十人近くいる、従ってそれらとの連絡を今後とも確保することによって、私たちの闘争分野はかえって急に拡がりさえした。

彼奴等は「先手」を打って、私たちの仕事を滅茶々々にし得たと信じているだろう。だが実は外ならぬ自分の手で、私たちの組織の胞子(たね)を吹き拡げたことをご存知ないのだ！

今、私と須山と伊藤はモト以上の元気で、新しい仕事をやっている……(前編おわり)

（一九三二・八・二五）

作者附記。この一篇を同志蔵原惟人におくる。

（一九三三年四・五月「中央公論」）

青年抄

林房雄

若かつたので、そして希望にみちていたので、かれはどんな外的事情の組合せによつても心をくじかれることをこばんだ——そうだ、「運命」そのものによつてさえも。オノレ・ド・バルザック。

一

一八六四年夏のある日の午後、二人の若いポルトガル人が、イギリス公使館の通訳官エルネスト・サトウに案内されて、横浜弁天町の旅館芝屋初五郎の店先きにやってきた。帳場の主人はひとめみてびっくりしてしまった——二人のポルトガル青年が、あまりによく日本人に似すぎていたので。

一八六四年は元治元年である。ペルリがきた日から十年たっている。横浜が開港場になってからも、もう七年目だ。横浜村の七年間の速力的な成長を——じめじめした沼地の上の、くされかかった漁村から、街を歩いて外国人にあわぬ事のない国際都市への発展を、眼のあたりにみてきた芝屋初五郎であるから、今さら異人をめずらしがるがらでなかった。異人の一人や二人が黄色い皮膚をしていたからといって、おどろくにあたらぬ。異人の中には黒いやつさえいるではないか。つい二三カ月まえ、フランスの軍艦が上海からつみこんできた二百五十人のアフリカ兵はどれもこれも黒光りだ。顔だって、牙彫(げぼり)の根付みたいに白い歯をむきだして、みられたざまじゃない。

ポルトガル人が、スペイン人も同じだが、眼も黒く髪も黒く、背の低いところから、どうかすると皮膚の色まで、日本人によく似ていることも初五郎は知っていた。現に、浮気な外人たちは横浜花街の女たちに、スペイン名前やポルトガル名前をつけてよろこんでいるではないか。だが、それにしても——この二人のポルトガル青年は、あまりに日本人に似すぎている。

青年は、二人とも、縫いのたしかな、黒のスーツをつけていた。夏であるにもかかわらず、正しく結んだ胸飾も、たまに洋服を着る支那人の両替屋たちのそれのように、半分うらがえしになって襟からとびだしているようなことはなかった。髪は日本の惣髪に似たなでつけ髪だが、悪趣味な巻毛——船乗りの洒落者や派手な外交官たちのよくや

る、耳の両側に古なわの結び目みたいなものをぶどうの房のようにもりあげる、ばかげた飾りなどはついていず、そのおとなしいヨオロッパ風は、うたがうべき節もなかった——だが、黒い帽子と白い襟の間から、じっとこっちをみつめているあの顔は！

年上の方は、もう三十にとおくなかろう。四角なあごと切れの長い眼とつりあがった眉、はげしい気性をしめすらしいひろい額の青い静脈。年下の方は、二十歳をすぎて間もあるまい。やや丸顔で、赤い頬、特色は、鳥羽絵に描いたら小さな二つの点であらわせる白眼のかった眼、それが青年らしくきらきらかがやいているので、ややするどく光って金壺眼とわるくちをいわれる型に近づいている。——しかし、こうして、顔の要素をひろいあげてゆくことは、初五郎の胸を刺してびくりとさせたあるものを説明することにはならぬ。初五郎はただかんじた。犬が犬をかんじるように、猫が猫をかんじるように、この二人のポルトガル青年の中に、ただのひとめで、うごかすことのできぬ日本人をかんじたのだ。

「部屋は——ありますか？」

やや調子のとれた日本語でサトウがいった。二人の国籍と、香港から商用のためにという旅行の目的とを、てみじかに説明したあとで。

「部屋ともうしますと？——へい。」

土間におりて、卑屈なもみ手をしながらも、初五郎は、すべての宿屋の亭主がしめす、旅客の鑑定についての頑固な自信を、眼いっぱいにこめて、通訳官の顔をみかえした。しかし、相手はひるまなかった。

「この二人の紳士（ゼントルメン）が、とまりたいのです。」

「ああそれは——なるほど。」

言葉がみつからないので、頭をかいてみせた。なにかしら腹だたしい気持で青年の方をじろりとみた。すると青年たちの顔があわてだした。息をつめて、唇をひきつらせた。

それみたことか！——しかし、どうしたわけか、推測の適中がもってくる、いつものかるい勝利感はこなかった。いよいよ日本人だ、とそう思うと、説明のつかぬおそろしさが、かれの心をかたくつかんだ。初五郎はどもった。

「どうも、おあいにくさまで、その……」

「部屋はありませんか？」サトウはたたみかけてきた。植民地の外人に共通する、あの自信にみちた尊大さで。

——攘夷さわぎのさ中だ、諸国の商人たちも出足をひかえているはず、部屋があいていないとはいわせぬぞ、とかれの言葉の調子はあきらかにそういっていた。

「それが、あの……」

ひし形の顔がますますひし形になり、眉がさがって、なさけない顔つきになった。

「どうかしましたか？」

どうかしたかもないもんだ。こんな化物みたいな客をひっぱってきあがって！　腹立しさとおそろしさ――この組合せのむずかしい感情が、のみこまれた二匹のたこのように、血管の中をまわるので、初五郎のあわれな両肩は小山のようにとびあがって、はるかな谷間で、油で光る小さなまげが救助信号のようにぴょこぴょこうごいた。

若い方の青年が、神経的に帽子をかぶりなおした。サトウに近づいて、早口な英語でなにかいった。初五郎は気がつかなかったが、かれらは、さっきから、かれ以上におちつきをうしなっていた。年上の方は気早な逃げ足をもう出口の方にむけている。

サトウは、かっこうのいい頬ひげをはやした若い顔に、いたずらそうなうす笑いをうかべて、まちたまえという意味の右手を二人の方にあげたまま、くるりと初五郎の方にむきかえった。あわれな商人の、ひらきかけた心がぷすりと音をたててまたしぼんだ。

「どうしても、部屋はありませんか？」

「ございません、はい」

勇気をしぼってやっといいきった。

「では――さようなら。」

うまくすかされた。だが、すかされたよりも、初五郎はほっとした。出てゆく三人をみおくって、額に手をやると、年中斐もなく冷汗であった。

横浜の町には不吉なうわさがひろがっていた。攘夷派の浪人たちが斬りこんでくる。町に火をつけ、異人と貿易商人をみなごろしにする。いや浪人だけではない、今はもう国ぜんたいが攘夷派だ、幕府の腰さえあやしくなった。入江のむこうには暗殺者の軍隊が、浪のようにおしよせて、伏兵している。町のまわりの丘の上には、松の木のかげで大砲がかくされている。密偵の信号のあり次第、横浜の町は砲弾の雨につつまれる。……イギリス艦隊のキュウパア提督は宣言したという。そんな場合にたちいたったら、列国の現在の兵力では、せいぜい外人とその家族とを、軍艦に収容するくらいのわずかな時間しか抵抗できないであろう。――芝屋初五郎の冷汗の原因は、いうまでもなく、あまりにもたしからしいこの不吉なうわさの中にあった。

「明日にも斬りこみがあろうというのに、なんであんな化物がとめられようか。異人なら異人らしく、居留地のホテルにゆくがいい。日本人なら日本人らしく、えんぎでもない、洋服なんか着ないがいい！」

初五郎は攘夷派に斬られた異人たちのことを思いだした。写真にとるために、白いシイツの上に横たえられた紫色の死骸、片腕をぶらぶらさせ、背中をさかれて、全身に綿のように血をかむって、領事館の門のまえまでかえるとそのまま気を失った乗馬の負傷者。……ああ、もうたくさんだ！

異人だけを斬るというならまあ話がわかる。日本人の貿易商人を斬るというのはどうしたわけだ。京都や大阪では

だいぶやられたという。貿易をゆるして、横浜移住をすすめたのは幕府ではないか。侍の総元締ではないか。総元締がゆるしたものを、侍自身が刀でおどす。なにがなんでも勝手すぎる世の中だ。二本さしているからといってそれがなんだ。腰に刀をさしたままでお袋のお腹からとびだしたわけじゃあるまいし！

去年の夏の立ちのきさわぎ、あれはどうだ。横浜の日本人は全部、商人も外人の召使もすべて、即刻立ちのけ、理由もなにもきかせてくれぬ。埃っぽい神奈川街道に、男と女と子供と、家財道具と不平とわけのわからぬ恐怖を山のようにつみのせた車との行列が長々とつづいた。初五郎は最後までがんばって、立ちのきをこばんだ一人だったが、幕府の役人がやってきて、刀でおどした。刀にはかなわぬので、家財をまとめて、翌朝早くたとうとしたら、その同じ役人がまたきて、もう立ちのかなくともよろしい、いや立ちのいてはならぬ、といった。なんという勝手すぎる！――しかし、あとできいたら、イギリスのキュウパァ提督とフランスのジョレス提督が幕府にかけあい、立ちのき命令をとりさげなければ、両国の兵隊で横浜を占領し、江戸に大砲をぶちこむぞとおどしたからだったそうだ。

「はてな――そうしてみると。」

そこまで考えたとき、初五郎のせまい心に一すじの光がさした。そうしてみると、列国は今度もその手をやろうとしているのかもしれないぞ。幕府をおどして味をしめたイギリスは、その後も、生麦事件を口実にして、攘夷の本元である薩摩を攻めにでかけて行った。鹿児島の町をやきはらい、殿様を山の中に追いあげて、うんと償金もとったという。――のこっているのは長州だ。

長州は、奉行所の役人の話によると、薩摩よりももっと腹の黒い攘夷の親玉で、京都の朝廷をうまくだきこみ、幕府をのっとり、関ヶ原このかたのうらみをはらそうと、なにかしらたいへんな陰謀をめぐらしている。改心した薩摩が会津と力をあわせて、長州を京都から追っぱらったが、それでも尊王攘夷はやめない。国へかえって、下関にがんばり、外国船をぽんぽんうつ。人気とりと幕府いじめのずるい手にちがいないのだが、国中の攘夷派はそれにいきおいをえて、さかんに斬る。外国の品物を買ったというばかりで斬られたりおどされたりする。横浜の貿易はあがったりになった。

四国の公使――イギリスとフランスとアメリカとオランダは、軍艦と兵隊をあつめはじめた。陸には急造のバラックがならび、青い上衣や、赤いズボンや、きらきらする銃剣や、まっ黒なアフリカ兵の笑い顔や。そして海には軍艦――海防艦（コルベット）、二重甲板船（ツウ・デッカア）、外輪単檣船（パドル・スループ）、砲艦（ガン・ボート）、フランス風のフリジット、まっ白な帆を斜めにはりあげ、公使夫人のように、洋妻（ラシャメン）のように、気取っている。……明日にも長州征伐にでかけるのだという。幕府も内々それをのぞんでいる。

そうだとすると、あの洋服の化物も、なにかそれと関係がと思ったので、初五郎はもういちど門口にでてみた。すると、まだいた。居留地(セトルメント)の方にまがる街角で、二人の外人と行きあってなにか話しているサトウ――ちょっとはなれて、例の二人がもじもじと立っていた。初五郎は、首をちじめて、帳場の奥にとびこんでしまった。……

二

明治維新の中に、フランス革命を見ようとするある種の読者は、維新までにわずか四年という元治元年の貿易商人をこんな風にえがきだしたことに、少なからず不満であるかもしれない。当時の貿易商人といえば、国際資本の訪れに、鎖国日本の首かせの中から、まっ先きに手をさしだした進歩的な商人だ。もっときりりとしたところが、もっと元気が、あってもいいのではなかったか？

元気はあった。だから貿易差許しときまると、甲州の谷の奥から、生糸をかついでさっさとでてきた。言葉一つ通じない異人を相手に、身振り手まねで、見事に物々交換をやってのけた。いよいよと見きわめがつくと、そのまま横浜にいすわって、仲買をはじめ、商人相手の宿もひらいた。――元気はあった。しかし力がなかった。

封建諸侯の城下町に百二十ポンド砲をたたきこむ国際資本の鼻っぱしの強さに、同感をしめし、胸のすく気持を味いながらも、自分でその砲弾を用意するだけの実力はなく、攘夷派の、やせ浪人の、貧乏下士の白刃の先きで、ぶるぶるふるえていなければならぬ貿易商人。芝屋初五郎のこのいくじのない姿の中に、即ち明治維新が究極においてブルジョア革命でありながら、しかもブルジョア革命でなかったこととの秘密がある。

作者もまた、ある期待をもって、維新前の町人階級の間に、マラアやロベスピエエルの型はむりだとしても、せめて、貴族諸氏を「マロニエの葉のようにふるえあがらせた国民軍(ガルド・ナシヨナル)」の将校たち――パリ街の肉屋さんや、仕立屋や、両替商の若い書記君ほどにも革命化した型は発生していなかったろうかと、文献の中を歩きまわってはみた。しかし期待はうらぎられた。大名小名を太い貸金の鎖で金縛りにし、ずるい猛獣使いのようなうすら笑いをうかべている、ロスチャイルド型の大町人は、なるほどいたるところに見つかりはしたが。

もっとも、例外的には、××化した下士階級との結合において、国民軍的な組織に参加し、ある程度の役割を演じた町人はないでもなかった。その種の型の町人については、いずれ他の場所で、たぶんこの次に書く「奇兵隊」という題の小説の中で、くわしい写生を試みるつもりであるが、しかし、その場合とても、かれらが決して指導的要素でなかったことだけは、はっきりいえる。かれらの理想は、せいぜい「士分にとりたてられる」ことであって、第三階

級自身の社会というような考えは、少くともまとまった形では、かれらの南瓜頭のどこの隅を掘りかえしてもでてはこなかった。

だから、芝屋初五郎は、首をちぢめて帳場の奥にとびこんだ。

エルネスト・サトウは、二人の青年をつれて、居留地の、煉瓦の色と明るい空気と緑の並木の中に歩きこんで行った。向うから、幕府の役人らしいのが、馬にのって、供はつれず、寺院の屋根のような曲線をもち、表に漆、裏に金をぬったカブリモノを頭にのせてやってきた。

役人は、サトウを見ると、ちょっと顔色をうごかしたようだったが、かるく馬上でえしゃくをしただけで、さっさと行きすぎた。

「外国奉行竹内甲斐守といつか一しょにきた男だ。フランスの公使にあいにいったのかな。……ナポレオン三世の手にのって、幕府がフランスと密約をかわしそうなけはいがある、そういってオルコック公使が心配していたが。」

サトウは、すぎ去った役人の方をあらためてふりかえった。そして——そばにいたはずの二人の青年の姿が紛失しているのを発見した。肩をゆすってサトウは五六歩ひきかえした。オランダ商館の、派手な看板の下の、せまい横丁から、二つのおびえた顔が、ねずみのようにのぞいていた。

「ははあ、逃げたのですね。」サトウは笑いながら英語でいった。「すっかり自信がなくなったとみえる。」

二人は青年らしく顔をあからめた。年上の方は、なにかいいかえしたい風に口をとがらせた。サトウは手をあげて、よろしいとおしとどめ、さっさと先にたってまた歩きだした。

居留地のホテル。経営者はオランダ系のアメリカ人。歌川貞秀えがくところの錦絵「横浜商館外国人夜宴之図」ほどにも原色の多い調度品。帳場(オフィス)にすわった主人の鼻も、絵の中の人物ほどに曲って高く、眼の色もこぼれそうに青い。

サトウは、まだ灯の入らぬ真ちゅうの飾燈の下で、ホテルの主人とぼそぼそ話した。主人はむぞうさにうなずきながら、旅客票にサインする二人の青年のポルトガル名前と黄色い顔とをちょっと見くらべただけで、番号のついた部屋のかぎをぽいとわたした。裏二階の庭の見える部屋に案内されて、白い上衣をきた日本人給仕(ボーイ)の足音が階下に消えると、サトウは急にはしゃぎだした。大げさな用心深さでドアのかぎをかけてから、右手を胸にあてて、芝居がかりにすらすらと日本語で——かれはその言葉を、ここにくる途中の沈黙の中で、しきりに組立てていたのだ。

「さあ、きみたちの本国へ、たぶんポルトガルへ、やっとかえりつきましたよ。……あんしんしたでしょう。」

年下の方はただ笑っただけだった。しかし、年上の方は眉の根をさっと青くして、さっきからおさえつけていた怒

りを、ふるえる唇のはしから一時にはきだすかのようにいった。むろんはっきりした日本語で。

「ぼくらはなにもこわがってはいません。あなたは……」

あとはどもって、つづかなかった。

「おお、おこってはいけません。……わたしは、まじめです。」

洋服はきていても、日本人の眼はごまかせないらしい。当分この部屋にじっとしている方がよかろう。ホテルの主人にはよろしく話しておいた。日本人のボーイたちには気をつけるように。――サトウは、自国語とまじめな調子にかえって、しんせつにそうくりかえし、そしてつけ加えた。

「居留地の外にはでない方がいいでしょう。やむをえない用事ででかけるときには、公使館へしらせてください。公使館に話して、イギリスのごえい兵をつけるようにしておきますから。」

三

波とつばきの葉の間から、元治元年六月の太陽がのぼった。半円形に小さくひらいた入江のおくにねむっている大きな蝶の、まだらな羽が、あざやかにてらしだされた。

横浜は羽をひろげた蝶の形をしていた。北がわの、左の羽は日本人街、木造の手がるな家、騒音とややはげしい交通、ほほ骨の高い黄色い人種が、腰をまげてこせこせとうごいている。右の羽は居留地。切石の迫持(アアチ)、高い窓、模様を彫った木造の明るいヴェランダ、石灰をふくんだ黒煉瓦のゆるやかな、またはするどい屋根の線、ひろびろとして庭園の庭木のならび、住宅と商館、商館のまわりに群れている手車と仲仕(クウリイ)、人通りの少ない、しかしあるきさえすれば世界のすべての隅からあつまってきた人種と国民を見ることのできる、やや不規則な街路。それらの、ヨオロッパ人の植民地住宅様式とこの国の植物性の建築様式との絵画的な調和の上に、高々とひるがえっている旗、力と文化の優越を左の羽にむかってほこらかに示威している各国公使の五彩の旗。

二つの羽の、この対象の中に、人々は「国際都市」としての横浜の特性をはっきりと見る。

横浜は穴であった。国際資本が鎖国日本を世界市場に組み入れるために、手あらな外科手術によってこの国の横腹にぶちぬいたみじめな穴。その穴を通して、ヨオロッパとアメリカの工業資本が、商品の流をそそぎこむことに血眼になっている。街の治安は外国によってたもたれている。海には三十隻の商艦、陸には三千人の外国軍隊。はげしく利益をあらそいながらも、いざといえば、砲門を同じ方向にむけることにかたく一致する各国の商人と外交官。――作者は、時代錯誤をおかすことなしに、「国際都市」という近代用語を用いることができる。

「国際都市」横浜の右の羽を代表する人間の、ゆるやかな歩調とはりだされた胸とをもって、エルネスト・サトウは、海岸通りのひろやかな道を、税関所の建物の方にあるいて行った。サトウはそこで、昨日散歩を約束した二人の友人を——「バロッサ」号の艦医プウランと「ユライヤラス」号乗組の写真師ビイトを見出した。

かれらは、道ばたの小さな木造の台の上にならべられてある日本の工芸品をながめていた。古い陶器、加工された牙と角、デザインのこまやかな漆の盆、金色の象眼細工をもった青銅の器具、刀と小箱、その他形容のできないふしぎながらくたもの——それらの中から、プウラン医師は、数枚の木版画をとりあげて、感にたえた眼つきでながめ入っていた。

「買ったのですか?」

サトウはたずねた。陳列台の向うに、小悪魔のように満足したうす笑いをうかべている日本の商人の顔を見て、また途方もない値段をふきかけられたなと思ったので。

「買いましたよ。……じっにすばらしい!」

厚いめがねのおくから、おだやかな羊のような眼をかがやかせて、初老に近い奇妙な医師が答えた。プウランはまったく、軍人と外交官と商人だけでなりたっている外人仲間では奇妙な存在であった。

フランス系のスイス人で、アルプスの高く自由な空気を吸ってそだった。アレネベルクで放浪時代のルイ・ナポレオンと知りあい、かれのシュトラスブルグでの失敗した挙兵には小さな一役を演じた。かれについてパリにも行った。二十年ほど前の話である。四十年代のどさくさにまぎれて、ルイが「革命的共和主義者」の仮面をすて、ブルジョアジィとプロレタリアートの双方をたくみにふみ台にして、皇帝の王冠をねらいはじめたとき、だまってラテン街のすみにひっこんでしまった。「コルシカの賤民」の血はあらそえぬとルイをののしりながら、ルイのクウデタアがチエルとヴィクトル・ユウゴオを牢獄にたたきこみ、かれ自身をナポレオン三世につくりあげてしまったとき、プウランはパリをすてて、ロンドンに走った。ある日、茶店のテーブルで、ユニヴァシティ・カレッジの学生の一人が、ロオド・エルギンとロオレンス・オリファントの見聞記の表紙をたたきながら、しきりに日本についての夢をかたっているのを聞いた。学生の話によると、東洋の海にうかんだ宝の小箱のようなその島には、いつも青々とした空があり、赤い太陽が花のように照り、住民たちはふしぎな造園術によって、手にとるほど小さくなる植物をうえた庭をながめながら、草をしいた美しい床にすわり、ばら色の唇と黒い眼とやさしくゆきとどく心とをもった娘たちにとりかこまれてくらしている。……学生は若いエルネスト・サトウであった。

二年の後、いくつかの偶然の組合せが、二人のロマンティシストをイギリス東洋艦隊の甲板にのせて、むろん船と

時とはべつべつで、たとえばサトウは漢字をまなぶために北京にとどまるというようなことをしたが、それぞれ横浜の港までおくりとどけた。
「サトウさん、この絵の作者はなんというのでしょう。そこにサインがしてあるらしいが?」
サトウはさし出された絵をひとめ見て、漫画だと思った。太い線で奇怪に誇張された女の顔が描かれている。猫のような額、猿のような眼、羽のようにはりだした髪、曲った唇。この国の木版画によくある、俳優の誇張した表情の瞬間をうつしだした絵だとはわかるが、ぜんたいにただよう嘲笑的な気分はどうみても漫画だ。
「さあ、なんとよみますか、上の字はうつす、下の文字はたのしむ、という意味だから、ビイト君の職業に関係がありそうな名前ですがね。」
「そうですか。……こちらは?」
「ああ、これはハルノブ。……春信です。」
この方はずっとわかりやすかった。うつくしい女がひざをたてて、紙と竹でつくった家のまるい窓によって月をながめている。壁の上に遊女の楽器があって、床の間には花がある。まろやかな線と、おだやかな、むしろくすんだ色彩、サトウはその中から抽象的な好色、童話的なエロティシズムとでもいいたいものをかんじた。もう一枚の「漫画」の中にあふれている、にがいはげしさはどこにもなかった。

「これはうつくしい。」
「それが?……」プウランはサトウの顔をみて、意外だという表情をした。「うつくしいのはこちらです。」
「漫画の中に美がありますかね。」
「いやこれは漫画ではありません。まじめな絵です。そしてほんものです。」
「そうですか。」
「あなたは、この国の絵を研究する気はありませんか?」
「いいえ、べつに。……ぼくには絵はわかりません。」
「いい絵をみると、眼からうろこのおちたような気がしませんか。心が花のようにひらいたり、刃物のようにするどくなったりするような気になりませんか?」
「はあ。……」
若い通訳官は、こまったことになったと思った。プウランの船室はまるで小図書館である。船室のすみに酒瓶や人形や絃楽器をかざってある程度に風流な士官たちはざらにある。しかし、プウランのようにたくさんの本をもっている船乗りはひとりもない。その点で、かれは、サトウをもふくむ、単純な心の同僚たちの信頼と尊敬をあつめていた。もっともプウランの人気は、風がわりな医者のみがもつ、あの技術のたしかさと、心からのやさしさの中に最大の原因をもっているのだが。いつもはむっつりしているくせに、調子がでると、たとえば絵や音楽の話などになると、たぶんかれの書物の山の谷間からわきでてくるらしい

ことばの泉を、とうとうとそそぎだす。ゆだんしていると、どこまでおしながされるか、わかったものでない。
「しかし、……」
「ああ、しかし……」プウランはうなずいて、語脈にさえ注意せずに、先きをつづけるのであった。「しかし、つまり、いい画家は、すべてのいい芸術家は、かれ自身の深い世界をもっていて、見るもののすべてを、いやおうなしに、自分の世界につれてゆくのです。ある場合には、作者の世界は小さくてせまく、その中に入るためには、えびのようにからだをまげたり、胎児のようにちぢこまねばならぬことがあります。にもかかわらず、作者の力が、見るものに魔法をかけて、かれを小人にしてまでも、自分の世界にひきずりこんでしまう。たとえば、これです。サトウ君のいう漫画です。この作者だけでなく、この国の絵の世界は、みんなせせまくて小さく、奇妙にゆがんでさえいるが、わたしをとらえてひきずりこむ。それが芸術の……」
「よくわかりました。」と、写真師のビイトが口を入れた。かれはさっきからにやにやとパイプをふかしながら、二人の話をきいていたのである。「けっきょく、プウランさん自身その芸術家なんですよ。まことに一種どくとくの世界を自分の中にもっていて、ぼくらをその中にひきずりこもうとするのだからな。」
そういって、土の上から写真器をとりあげて肩にかけた。
「なにしろ、ぼくなんか一ばん安全さ。さっきもプウランさんから、絵と写真の問題でだいぶやっつけられたが、とにかく、中味がこの写真器のようにからっぽなのだから問題はおこらぬ。世界は外にあって、内にはない。そうじゃありませんか、サトウ君。ところで、そろそろでかけるとしようよ、プウランさん。」
「行きましょう。しかし……」
「しかし、写真は――でしょう!」
と、ビイトがいたずらっ子のように肩をゆすってみせた。
「いいえ、しゃしんではありません。絵です。サトウ君、その商人にいっておいてください。もしこの同じ作者の絵、ええ漫画の方です、それがあったら、いくらでもほしいから、あつめておいてくれるように。」

四

日本人町をぶらぶらあるいてゆくと、いくつかの橋と長い堤とによって神奈川街道につながれている町はずれにでる。橋のたもとの、木柵と大げさな武器にとりまかれた関所が、サトウたちによって、中世ヨオロッパの城門をおもいださせた。関所では、小さなさわぎがおこっていた。
小さな机の前にちょこんとすわり、分別くさい顔をして、通行人を横眼でにらんでは、なにか帳面にかきこんで

いた上役が、半白の髪をした一人の武士に文句をつけられているのである。なぜ武士だけをそのようにきびしくとりしまるか、両刀をはずしてゆけとはなおさらきこえぬ、拙者は長州ではござらぬぞ。そういって、やせた肩をはりあげるのを、役人は、規則だ、まかりならぬ、と無表情につきはなす。黒塀の中で銃の操練をしていた丸羽織の兵士たちが、どかどかとでてきて反抗者をとりまく。ビイトがおもしろがって、その光景をぱちぱち写真にとった。

さわぎにまぎれて、サトウらが関の外にでようとすると、上役の一人がかけだしてきておしとどめた。あぶないから町の外の散歩はやめていただきたい。サトウはわらって、腰のあたりをさしてみせた。短銃をもっているという意味で。そして、外人に無視されることになれた役人たちをのこして、さっさと行った。

「なんです、あのさわぎは？」

「いつものさわぎです。」

「チョウシュウといっていたのは？」

「幕府と長門のプリンスとが、京都の方で正面しょうとつをしたのです。江戸の藩邸がやきはらわれ、長州人は探されているのです。」

と、サトウがプウラン医師に説明した。

「ではあの青年たちも？」

「むろん！」

「おやおや。」とビイトが口を入れた。

「あの二人は長州人だったのかい？」

「ポルトガル人とおもったのか？」

「まさか！　アフリカ領ポルトガル人くらいにはおもってやってもいいがね。だが、長州人が、どうしてロンドンからかえってきたのだ？」

「わたしもくわしくはしらないのだが。」ロマンス・ハンタアの無邪気な興味を顔にあらわして、プウランもいった。

「サトウさん、はなしてくれませんか。」

小さな丘の方につづく白い道の上をあるきながら、サトウは話しだした。

――二人の青年の名は、年上の方を志道聞太、年下の方を伊藤俊輔といい、長門のプリンスの家来である。プリンスの政府は排外派の全国的な中心であるが、同時に、反幕府派の主動者であるだけ、その限度に進歩的な一面をもち、種々な新制度の採用に苦心している。五人の青年をえらんで、留学の目的でロンドンに密航させたのも、その政策のあらわれである。

攘夷を実行するためには、そして幕府とたたかうためにも、まず必要なのは武器の充実である。ヨオロッパ人の武力、とくに海軍の優越は、ここ十年来の経験によってすでに自明である。しかし、かれらの武器を学びとりさえすれば、わが神の国の精神力によって、かれ夷狄を打ちはらうのは容易だ。敵の武器によって敵を殺す戦策は支那の兵書もこれを教えている。まず学び、しかるのち大いに打ちは

らおう。――これが、政府の論理であり、出発当時の青年たちの信念でもあった。

密航は先年の五月、イギリス領事ガワルの手びきによって行われた。ガワルは、はじめ、青年たちの意志をうたがった。幕府の禁制を口実にして、つよく拒んでみた。すると青年たちは、領事館の庭にすわりこみ、一たび志をたてて国をでた上は、志をとげなければ死ぬのが、この国の武士の習慣であるからといって、ハラキリの用意をはじめた。ガワルは、あわててとめた。

五人は、五月の深夜を、郵船キロセック号の水夫たちにまぎれて、大ごえで「外国語」をしゃべることによって、税関のきびしい眼をのがれた。船が、とおい沖合にでるまで、かれらは船底の石炭庫にかくれていた。

上海で、ガワルの紹介によって、チャアヂン・マヂソン商館のケセウイックにあった。かれは青年たちに渡航の目的をたずねた。青年たちは、開成所印行の英和辞書をもっているだけで、かれのこの簡単な問いを理解するためにも二時間を要した。青年たちは、顔を見合せて、ながい間相談したのち、目的はネイヴィゲイションの研究だと答えた。ケセウイックはうなずいて、一行をロンドン行きの支那茶と一しょに、二隻の帆船に分乗させた。

志道と伊藤の船は、三百トンの小帆船ペケヂスであった。思いもかけぬ手あらな待遇が二人を待っていた。船室をあたえられないばかりか、帆づな引き、甲板掃除、ポンプ押し、うじのわいた塩づけ肉とかわいたビスケット。船長も水夫も、かれらをジャップとよびすてにして、かれらが身振りと十個以下の単語によって行う一切の抗議をかえりみなかった。このおそるべき虐政の秘密が判明するためには、四カ月と十一日の時間が必要であった。喜望峯をめぐる四カ月十一日の航海が終った後のある日、五人の青年がロンドンの下宿屋におちあって、互いの不幸をかたりあったとき、原因は開成所の辞書にあったこと、海軍(ネイヴィ)の術をという意味で航海術(ネイヴィゲイション)と答えたために、かれらは水夫見習としてのきわめて正当な待遇をうけたのであったことが、はじめてわかった。

数カ月がたって、単語の知識もようやく開成所の辞典の範囲をはねこえ、新聞のひろいよみもできはじめたころ、下宿の主婦が眼をまるくしてロンドン・タイムスをもってきた。先年の五月以来、数回にわたって、長州のプリンスが下関で諸外国の船舶を砲撃したこと、イギリス公使は、サツマ攻撃の例にならい、各国の連合艦隊によって、プリンスの「紙と木でつくられた」市街に砲弾を返却するための準備をはじめていること、それについての議会における討論、などがのっていた。

青年たちは、ただちに帰国を決意した。ヴィクトリア女王をいただく文明的なロンドンの文明的な影響が、かれらを確信的な開国論者にそだてあげていた。攘夷は無謀である、国をほろぼす、国のほろぶのを座視していることはで

きぬ、今は英語の単語に苦労しているときではない、かえろう、かえって攘論をくつがえし、一路開国の道にすすませなければならぬ。
しかし、これは大仕事である。水火の中に投ずることだ。もとより一命はおぼつかない。一どに五人かえって、ばさりとやられては、あとがつづかぬ。そこで帰国の提議者である志道と伊藤とが先ずかえることになった。
「なるほど、なるほど！」
プウラン医師はいくどもうなずいた。かれの羊のような眼は、さっき木版画をながめていたときのそれとはちがったはげしい熱情をしめして、きらきらかがやきはじめた。
「ふたたび喜望峯をまわって、やっと横浜にたどりつくと、連合艦隊は帆を洗って、まさに出発しようとしているところです。二人は先ずガワルにあい、それからぼくのところにき、さらにオルコックにあっていったのです。どうぞ出発をのばしてくれ、これから自分たちがかえって、必ず攘論をひるがえし、時局を平和におさめるから。」
「公使はどう答えました？」
「かれは考えています。」
「かんがえている？　――かんがえる必要がどこにありますか？　わたしなら無条件でゆるす！」
と、医師がこうふんして叫んだ。
「いやあ、プウランさん。」と写真師が、例によってにやにやわらいながらいった。「ぼくだってかんがえますよ。なにしろあの二人は、出発前までは極端な攘夷論者で、ガワルの話では、もっとも公使はしらないらしいが、かれらは品川のわれわれの公使館に火をつけた事件にさえ関係があったらしい、という話だし、でき合いの開国論者を急に信用することもできますまい。」
「極端な攘夷論者であったからこそ、極端な開国論者になれたのです！　そこに人間の性格の好ましい秘密があるのです。」
「はあ、……両極は一致す、ですか。」
「サトウさん。」とビイドを無視して、プウランはつづけた。「公使は考える必要はないじゃありませんか。……それに、本国の政府は強力的な手段を好んでいないという し、議会には、自由な市場の開拓による自由な商業を主張して、平和な人民を殺すことに反対している議員たちがいるくらいなのだから。」
「なに、あれは。」とビイトがひきとった。
「あれはマンチェスタアのラシャ屋さんや紡績屋さんの議員たちですよ。かれらは安い商品の生産者だから、安い外交を主張しているにすぎないのです。高い砲弾をぶちこんでも、その代金を回収するみこみのない戦争には反対だ。ただそれだけです。」
「人間を信用したまえ！」
「もし、できればね。」
「では、青年を信用したまえ！」

「青年の気まぐれをですか。」
「青年の純粋さを! 理想のために死ねるのは青年だけです。」
「理想? ——なぜ野心といわないのです。青年のめくら馬のような野心なら、ぼくも理解できますがね。」
「きみは、人間を理解していない。青年をも、野心をも理解していない。そして、いちばんわるいことに、理想とはなんであるか、それを理解していない!」
「じゃ、かけましょう!」
ビイトは、とつぜん妙なことをいいだした。おどろかされた医師は、小さなメフィストのようにわらっている写真師の顔をみかえした。
「え?」
「かけるんですよ、金貨を。あなたは、あの青年たちを天使のように純粋だと信じているらしい。ぼくはその逆だ。かけが成立するじゃありませんか。」
「わたしは、人間を天使だとも悪魔だともいったおぼえはない。」
「ではなんといったのです?」
「あの青年たちは理想につかまれている……」
「つかまれている?」
「そう、理想につかまれている。人は、とくに青年は、ときどき理想につかまれるのです。……あの青年たちは、きっと開国論の主張をつらぬくでしょう。つらぬけなかったら進んで死ぬでしょう。理想がかれらをつかんでいるからです。わしはそれを信じている。」
「ちょっとわかりかねますね。」
「そうです、理想につかまれた経験のないものには、それはわかりかねます。」
「だが、問題は、かんたんじゃないですかね。あなたは、かれらが現在の開国思想をどこまでもまもりとおすだろうといい、ぼくはその逆だというのです。このいきおいです、われわれの砲弾をうけない先きに長州が排外主義をすてるもんですか。だれだって周囲の力にはおし流されます。ロンドンの開国主義者は、長州の攘夷論者です。かれらも長州にかえれば、またもとの、秘密ずきで、詭計上手な日本人にかえってしまいますよ。」
「だからきみは、人間をも、理想をも理解していないというのです。」
「だからぼくは——かけようというのです。」
「これは、金貨などかける性質の問題ではありません!」
「かまうもんですか。馬にだってかけるんだもの。人間にかけていけないという法はない!」
ビイトは、ズボンのかくしから、金貨をとりだして、ひらりと空気の中におどらせた。

(一九三二年八月「中央公論」)

清水焼風景 抄

加賀耿二

露路の中から、恰も断水していた小川の水が、再び盛り上って流れ出したように、あとからあとからと罷工大衆が雪崩れ出ていた。そして、電車線路を越えた向側の妙法院の石垣前や、手前の店屋の前あたりを一ぱいにして、お互に同じい工場の仲間を呼び合ったり、懐やポケットからたばこを出したり、それからさすがに不安らしく囁き合ったりしながら暫く足を止めて交渉代表の出て来るのを待っていた。

実行委員の信吉は、先刻の会議で「応援者」の方へ組まれていた。だから彼は、杉本達と一諸に人々に押されて露路を出た。いつか彼に××のビラを手渡した若い男――三太郎も、メガホンを持って元気らしくそばに居た。

電車通りでは、明るい初秋の陽の光が降るように輝いていた。群る人々を分けて電車がけたたましく通った。自動車も通った。旗をたてたお上りさん達も通った。だが彼は、それらの明るい情景に一つも気がつかなかった。彼の心は、これから愈々示威運動に行くのだと云う緊張と不安とで、一ぱいになっていたのだ。

彼は、自分のこの不安な緊張が、何処から来ているかと云う事を、よく知っていた。それは、いつか××の示威運動へ行こうと誘った時、その同じい工場の仲間から呼び覚まされた恐怖心だった。

『××は×××や、行かはれ、×まるのが落ちや!』

そして今日は疑いもなく××の主張に基く行動を起そうとしているのであった!

彼はあの時以来、一つの大きな悩みに悩んでいた。清水焼が、すっかり行詰っていると云う事は、自分の生活と照らし合わして見て事実としか思えなかった。値を下げたり、手待ちをさせたり、賃金をくれなかったり――要するに自分達の生活の基礎はめちゃくちゃだった。しかも××の文書によれば、これは決して一時的な現象ではなく、瀬戸や美濃に発展して来た機械のために圧された所の、永久的な現実であった。否、益々、最後に清水焼が掃蕩されるまで、愈々深刻になって行く現実であった。すると自分達の生活の基礎は、眼の前に崩れかけて居り、明日は崩れて了うのであった。それは単なる失業では決してなかった。失業以上の失業、職業そのものを否定される失業であった。何処へこの恐るべき絶望を投げつけるべきか? 誰の

もとへパンを要求すべきか？ ××の文書は、親切にそれに答える――「××××××に、その××たる××に！」と。信吉は十分その理窟を呑み込むことが出来なかったけれども、しかしそれより外に道はないと思われた。
だが、この生活の苦しさからやらねばならぬ×、その×をやろうとすれば、より苦しい牢獄が待ち構えている！
この戦いを戦いつつある××へ参加しようとすれば、忽ち「捕るのが落ち」である！
彼は迷った。悩んだ。そして或る時には、一般の人々の主張するように、そう早くこの清水焼が没落するものではないと考えることによって、この矛盾を解決しようとした。だが、度々手にする××の文書を読むまでもなく、自分の過去の、また現在の経験が、この考えの単なる自慰に過ぎない事を十分に説明した。また或る時には、郷里へ帰る事によってこの恐るべき生活の矛盾から逃避しようかとも考えた。だが郷里は、食えぬために彼を追い出した生活の破綻所だった。
彼は、謂れなきこの「恐怖心」は、度々訓練を積むことによって跡かたもなく消えさるものだという事を知らなかった。そしてまた彼は、この謂れなき「恐怖心」は、彼が自分を階級、大衆から切り離して考える時にのみ、より醜く自分に起って来るものだと云う事をも知らなかった。そして最後に、この恐怖心は、彼が自分の――労働者の――現実の生活が、まだ監獄に勝っているかの如き錯覚を持っている事から来るのだと云う事を知らなかった。親方に対する反抗心から、「九州男子」らしく振舞った彼も、矢張りまだ訓練を経ぬ小企業の職人だった。
『大分しかし、不安な顔しとる者も居るな』
と、三太郎が杉本へ囁いた。すると杉本は囁き返した。
『ううん、いいよ、見ておれ、やり出せばみんな見違えるように殺気立つよ。大衆と云うものは自分のやりかけた事の中で、自分自身を訓練するものなのや！』
信吉はそれを聞きつけて寄って行った。すると彼等はそれ切り口を噤んだ。信吉はちょっと淋しくなった。何だか警戒されたように感じた。
雪崩れ出る大衆の一番あとから、岸本達交渉代表が出て来た。それと前後して沢山の××達も物々しく出て来て、大衆の間へ散らばって行った。
『じゃ、しっかりやろよ！』
交渉代表の幾人かが、露路を出たところの群衆の中で、岸本に云って別れた。五条を受持った連中だった。それを見ると、三太郎も杉本のそばから向うへ飛んで行った。そして人々の間でメガホンをもって呶鳴った。――彼は五条部へ「応援」に行く役だった。
『五条部の者はこっちへッ！』
群衆の約半分は、ぞろぞろと彼等のあとへ続いた。
『行こか？』
岸本組合長は、人々の中で帽子をとり頭髪を掻き上げ

た。彼は何か蒼白な顔をしていたが、信吉にはそれが何のためか判らなかった。
『うん、行こう！』杉本は力をこめて答えると、口を両掌で囲って大きく叫んだ。『おおい、蛇ヶ谷ン者、行くぞ！』『泉涌寺ン者、おおい、泉涌寺ン者もこっちやぞッ！』と、信吉の背後で、もう一つのメガホンも叫んだ。そして彼等は、電車通りに沿うて五条部の者とは反対の方向へ歩き出した。みんなガヤガヤやりながら、電車通りを一ぱいにして続いた。
信吉はさすがに卑怯な態度を示したくなかった。それに、みんながその気になっているのだと思うと、何だか頼りのあるような安心も湧いた。で、彼は、八ツ折の音を鋪石に立てながら、杉本達と並んで行進の先頭に立って歩いた。
美術学校の前まで来ると、大衆はまた二手に分れた。一群は真直に泉涌寺へ。他の一群は岸本や杉本につれられて、美術学校の横から蛇ヶ谷へ――およそ百人近くの人間が居た。信吉も蛇ヶ谷へ行くのであった。「堀割」横の眺望の展けた所へ来ると、さすがに澄み切った蒼い空が信吉の眼についた。どこかで遠く鉄盤を打つ幅広い音がしていた。左手崖上の美術学校の校庭では、学生達が並んで写生していた。右手空地の向うの底を、下りの汽車が通って行った。人々は、五人七人と固まりながら、砂埃りの立つ坂道を、トンネル口の上まで登って行った。

玉つき屋の前まで来ると、其処にいつの間に先廻りしたのか数人の××達が居た。
信吉は、ドキッとしたが、色には出さなかった。
『岸本君！』と、中のゲジゲジが岸本を把えた。『示威運動は許さんぞ！　みんな帰したまえ！』
『どうしてや？』と岸本はもういつもの態度になっていた。『どうして示威運動や、ここへ来た者は、みな蛇ヶ谷へ勤めてるものばかしや』
『うむ、それが君達の逃げ口上さ！』と、ゲジゲジはニヤリとした。『だがおれ達は知っているよ、君達は今朝の××の指令を実行しようとしているんだ！』そして彼はポケットの朝日を出しマッチをすって火を点けた。『どや、職工組合は職工組合らしくやったら？　でないと××の取締りするぜ。もう大目に見る事は出来んぜ』
『馬鹿なこと云わはれ、何が××の指令や、斯うするより外に道アあらへんからやるのや』
『それじゃ何も、こんなにぞろぞろと連れて来んでもええ、兎に角帰したまえ！』
『ぞろぞろしているから示威運動やあらへんやないか？帰せったて、家アみんな蛇ヶ谷にあるのやないか!?』
『よかよか！』
と、信吉はつられて思わず叫んだ。岸本の弁解のうまさにも痛快さを感じたのだが、相手のゲジゲジに対する本能的な敵意をも、知らず識らずのうちに積み上げていたの

だ。
　ゲジゲジはジロリと信吉の方を見た。信吉はハッと我にかえって、人々の間へ身を引いた。
　其の時、杉本がつかつかと岸本のそばへ行った。
『組合長、何もわしら示威運動しとるのやあらへん、斯んな事しとったら遅れる一方や、交渉するっとこア五十軒もあるのやぜ、日ア暮れる！』そして彼は、道へ溢れている仲間へ大声で叫んだ。『さア、諸君、行こう！』
『うん行こう、まアそんなわけや！』
　と、岸本は杉本とゲジとへ半々に答えながら、杉本と共に××連の前を通過した。信吉もみんなに交って、其処を突破した。ビクビクしながらも、何だか痛快な感じもした。
　ゴツゴツした陶器の破片を埋めた谷底の道は、玉つき屋を角にしてY字形に別れ、押し合った家並を掻きわけていた。みんなは先ず右の方へ進んだ。暫くは店屋街だったが、すぐ左へ曲ってガタガタした陶器街の坂が続いていた。陶土に汚れた見すぼらしい小工場や、小豆色に格子を塗った親方の家やが両側にあった。序でに説明すると、左手の坂街も同様だったし、その両方の街の所々に無数の露路があり、その露路の奥に、職工達の住むゴミゴミした長屋が隠されているのだった。それから、どの露路の奥にも、工場や窯があったし、工場から工場へ、露路から露路へ、猫と一緒に人間達の「通う」複雑な抜道もあった。しかも谷の南北は——南は禿丘で北は松山だった。従って、一旦職工達が此処へ入り込んで了えば、彼等はまるでドブ鼠のように、自由にかくれまた現れる事が出来た。
『×××が愚図々々云うたら、露路ン中へ逃げ込め！　そしてまた別の所へ現れろ！』
　杉本がみんなにそう云って歩いた。するとあっちにもこっちにも、恰度網の目のように人ごみの中でそう云って歩く者が居た。
　工場街へ来ると、皆自然と足を止めた。
『じゃ手初めに陶川さんから這入ろか？』
　岸本は、みんなの方を見廻し、それから代表仲間の顔を見た。
『うん、よかろう、片っぱしからや！』
　そして四人の代表達は、すぐそこの小豆色格子の家へ這入って行った。
『頼むぞ！』
『しっかりやれよ！』
　皆はそんな声援を送ると、或る者は格子戸の前へ集って内の様子に聞き耳を立て、或る者は反対側の工場前に集って蹲み、或る者は道に溢れて突立っていた。——××連がステッキを振り振り人々を縫うて陶川の家へ近づいて来た。

　　加茂川越ゆる洛東の
　　東山のふもとなる……

その時、誰かの歌声が人々の耳を貫いた。陶川の軒下に立った杉本が、道一ぱいに立ったり踞んだりしている皆に向って、『陶器労働者の歌』を歌い出したのだ。するとあちこちでそれに和する声が起った。

土に生きたる我々の
時代に覚めし今日なるぞ……

それはずっと昔、この京都陶器職工組合の創立された時、或る若い仲間の詩人が作ったと伝えられる下手な歌だった。信吉もそれを習っていた。彼は、人々と押合っていて、大きくそれに続いた。

……………………
我等の筆を捨てるとき……

歌声は全大衆を把えて太くなって行った。それを聞きつけて、方々の露路から人が集って来た。争議団へまだ来ていなかった仲間や、仲間の神さんや、それから沢山の子供たちやが――八九十人が百人を越え、大衆は眼に見えて元気になって来た。

××達は焦々と右往左往していた。彼等は群衆の向うに集って何かを相談したり、またうろうろと人々を睨んで歩いたり――しかし彼等はどうする事も出来なかった。彼等は小人数であった。

窯の煙はあと消えて
土は空しくかたまらん……

今や歌声は、子供や女の声を交えて谷の街を震わしていた。信吉も次第に恐怖の解れて行くのを感じていた。怖い怖いというのは、それはほんの母の乳房の中で山男を感ずるような感情で、実際はこの隆々と盛り上って来る自分の心や、肉体や、生活闘争の外にあるものなのだ。それを自分が、なにかに甘えて自分自身を脅迫していたのだ。彼はいつしかそんな事を思いながら、両隣りの者の肩をしっかりと抱え、足拍子をとって精一ぱいの声を出していた。

未来は我等のものなるぞ……
手を組み進め我が友よ

『君君、君！　辰野君！』××の中のゲジゲジがたまらなくなったらしく、組合幹部の一人を把えていた。『歌だけ止めさしてくれ！　これじゃ困る！』

別の××達は、溢れている女小供達を追っぱらっていた。

『行け行け、お前等の来る所ンない！』

『家イ帰っとれ！　帰っとれ！』

『あの、は、止めさします……』

と、何処へでもついて来る代りに、毒にも薬にもならぬ辰野おやじが、ゲジゲジの前で帽子を脱った時だった。杉本はつと坂上へ駈けて行ったと思うと、歌うのを止めて片手をあげた。

『おおい、諸君、もっと奥へ行こう！　楽山(らくさん)の前へ！』

それは、露骨に××と辰野の取引を、無視し妨害する態度だった。大衆の間へ、期せずして共通の或るものが――

刑事の前でペコペコしている辰野に対する軽蔑的な反感が流れた。彼等は本能的な感情で腰を上げ、足を動かし、歩き出した。ぞろぞろとした集団の流れが、再び狭い坂街に形成して来た。

まだ誰もスクラムを組んでいなかった。しかし街は狭かった。彼等は嫌でも密集せんと居られなかった。××たちは慌てて、行進する行列の横を、モグラのように走り、前へ出で、また後へぬけた。それがまた集団の上へ殺気をもたらした。信吉自身、今にも××達が×いかかるのではないかと思うと、まるでギブスの固る時のような緊張と冷気を覚えて、皆と密集せずに居られなかった。

谷の入口でY字形に分れた道は、谷の行詰り――東山の松の生え際近くまで来ると、A形に再び結ばれていた。其処はやや平坦な所で、一本の道を挟んで右の丘の下に楽山の工場があり、左の松山の岸に楽山の住宅があった。家はもう沢山なく、あちこちの乱雑な空地には、薪や石炭や土俵が積み上げてあった。楽山の家の二階のガラスは、陽を受けてキラキラしていた。

行列は其処まで来る間に、すっかりスクラムを組んでいた。誰が云い出したともなかった。彼等自身、身辺にうろうろする××達から身を守る必要を感じたのだ。

（一九三三年一月改造社刊）

亀のチャーリイ

藤森成吉

一　眼をさます亀

「××から手を引け！――××から手を引け！」

恐ろしく沢山な子供だ。

「そうじゃない。」

「なに？　じゃァ何んてんだい？」

「××××××××××絶対反対！」

「××××……チッ、むずかしいや。」

「君、チンキかい？」

「僕は日本人だ。」

「でも××反対かい？」

「そうだ。日本の労働者農民は、みんなこの××××にゃァ反対だよ。」

「××から手を引け！　××から……」

群。デモは今イーストリヴァ近くを通っているのだ。

「ちがう、ちがう。アメリカの偽善階級だってそんな事位はいう。」

「じゃァ何ていやいいんだ？」

「×××――反ソヴィ……。」

大声で怒鳴ろうとして――怒鳴って、眼をさました。

陽が、白カナキンの窓掛けを半分薄金色に染めて、天井へブッちがいに張り廻した綱へ襁褓見たいに吊りさがった古シャツやズボンやボロ靴下にまで笑いかけてる。古着もの蔭は、反っていやに暗い。同室の失業者仲間は、相変らず職業紹介所へでも出掛けて行ったとみえて隣りの二つの寝台ともカラだ。ぼんやりと枕もとの古机へ眼をすべらせた彼は、積んだ本の手前に一枚のハガキをみつけた。出かけにでも仲間が置いて行ってくれたらしい。

「同志、亀のチャーリイ！」

まだ子供らしい字だ。「ワシントン百年祭の時は、久しぶりで会えてうれしかったね。きのうピオニイル仲間の一人が、君が病気だっていった時、戯談だろうと思った。そうしたら、今日又チャーリイが寝てるって話をした男子ピオニイルがいる。君貧乏で、鰯の頭ばかり食べてるからだろうって。ほんと？　そして病気しどい？　だったらわたしい達見舞代表を送るから、すぐ知らせてよ。亀にもよろしく。用意はよいか。メリイ。」

どこから病気の噂が伝わったろう？　彼はもう一度読み返して机へ載っけた。と、又新しい発見をした。枕の傍の赤ジャケツの中から、黒い小さい突起がニュッと芽のように突き出て、赤いうるんだ眼が臆病そうにその端っこから覗いてる。たった今、彼がハガキを見てるあいだに出て来たのだ。

「カメ！　カメ！」

彼が呼ぶと、山亀は静かに頭をもたげた。思わず起きて、彼は動物の頭へ手をのっけた。と、キュッと又一遍にジャケツの中へ引っ込んで了った。

「カメ」

と、又そろそろ鼻の先から出けて来た。中野はいきなりジャケツをはいだ。黒黄色と黒茶色と二つの山のように高い甲羅。そしてどっちも一面、エッキス光線で照し出した指の骨のような黄ろい斑紋で染った厳重な甲羅。まだ眠ってるのか、突然蒲団をはがれておどろいたのか、小さな方はソックリ甲に埋っていた。

「カメ、カメ！」

呼びながら待っていると、音もなく小さな黄ろい物が甲羅から出だした。

寝ぼすけどもめ、いよいよ起き出したか？　十月末から食わず動かず、眠りどおし眠って、時々水をブッかけて起して飲ませてやると、さも迷惑そうな顔つきをした愛嬌者が！　「三月三日。」去年より半月足らず早い。去年は――

そして毎年大抵——三月半ばから這い出すのだ。この二三日急に暖かくなった日射しに誘い出されたのか？　するとし今年はサンマアパーク（ルナパーク式の夏の遊園地）も少し早く開いて、早く仕事にありつけるかも知れない。だが、去年より一層ひどくなった恐怖を理由にボスめ、ズッと月給は切りさげやがるだろう。去年月百弗だったから、今年は精々七八十弗位か？　それで九月一杯限り。あとは又長い失業だ。

思わず彼は半生を振り返った。労働と失業のチャンポンの長い生活！——アメリカへ来てからさえモウ三十年。そして各地を渡って、鉱山労働だ、鉄道施設工事だ、農園労働だ、コックだ、ホテル掃除だ、この数年来のサンマアパーク労働だと、およそ日本労働者のやる仕事といえば、殆んどやらないものはない。そのあいだ、ぜいたくした覚えも怠けた覚えもないが、碌すっぽ金も貯らず、妻や子も持てず、殖えたものといえば、いつか三分の一の頭を占めて来た白髪だけだ。髪ばかりか、ヒゲも胸毛も肩の毛も、腕の毛さえも白くなりかかった。これが日本人労働者の運命なのだ。毛と結んで心細いのは、近年——特に去年あたりからメッキリ弱った身体だ。先月二十二日ワシントン百年祭当日のアメリカ……………××デモ……　あの時は愉快だった。ニューヨーク全市がヘンポンと米国々旗でひるがえり、商店のショーウィンドにはどこにもワシントンと妻マーザの肖像が飾られ、ユニオンスクエア（ユニオン広場）の端のワシントン銅像には大きな花輪が載っかり、前面を軍隊や学生の武装デモが行進する。その時、スクエアの一方、タマニイホールの前へかけて盛んな××××反対の野天演説がやられ、あと大きな百足虫のように、蜿蜒として四列の人間の塊りが練り出した。メリイもあの時元気のいい声で演説をやり、あと自分をみつけて、林檎のような頬ペタをして飛びついて来た。……しかしデモの途中、イーストリヴァあたりでどうしてかひどく疲れて、熱っぽく、寒気がして、やっと我慢してデモから室へ戻って来ると、そのままこうして十日も寝込んで了った。昔鉱山で大ストライキをやって、十日も二十日も碌々寝ずに働いた元気。鉄道工事で重いハンマアを振りあげて、身体のいいアメリカの労働者仲間に負けずに仕事した力。そいつは今どこへ行っちまった？　過去の長い過労で、もう自分の精力はすっかり擦り切れたのか？

「馬鹿！」

彼の怒鳴り声で、ゴソゴソ机の上を這い廻り初めてた二疋の亀は、びっくりして一斉に頭を突き込んだ。

「はは、気の小さな奴だ。」

大きな黒黄色の方を股へ抱きあげた。ズシリと底重りのする動物の感じが、不思議な喜びをひき起した。

「こいつを見ろ！」

そうだ、おれはいつも、こいつ等のジックリやって行く性質を愛してた。おれは昔から亀みたいな人間で、特別な

才能も学問も何一つ無いが、落着いてコツコツゆっくりやって行く事にかけては誰にも負けない気だった。その男が、何だ、わずか十日ばかり寝るといやに気が弱くなって回顧的になって、チャーリイ！　おまけに、お前が気が弱くなったのは、身体が弱って来たセイってより、むしろ恐慌のセイらしいぞ。収入が減ったって、だがそれ以上のものがあるんだ。今年の宣伝のためには、この恐慌はウント有利だ。すでに二三年来、どれほど運動が有利になって来てるか知れない。そいつは、アメリカの党がラヴストン一派を清算して、一九三〇年初頭の失業闘争をキッカケにぐんぐん発展して来たセイもあるが、同時に恐慌の深化にも依ってる。党幹部の誰もの勤勉と親切さ。官僚主義的気分の徹底的打破。殆んど世界の人種を網羅した、ロシアに次いで一番国際的色彩の強い若い党。人種的偏見の最も激しいといわれるモンロー主義国民中の大堡塞。そいつが恐慌の歯車とガッチリ噛み合って、運動の将来はすばらしい。アメリカの運動はこれからだとさえいえる。

子供達に話す材料も、去年に較べるとズット豊富なんだ。去年は、丁度××××××を始めたところで惜しい事にパークが済んじまったが、あれからの国際情勢の進展はでっかい。戦争に絡んだ……××××の擡頭、……………等々を、アメリカの……………………に結びつけて話したら、子供達はさぞ眼を輝かせて聞くだろう。今年はメリイ以上の闘士をウント作ってくれなくちゃ！

中野は再び晴々した顔色になった。

二　アメリカの子供

子供と動物と、どっちも中野は大好きだった。お互い似たところがあり、中野自身も似てた。おまけに自分の子供を持った事がなく、今後も持つ見込みのない事が、余計子供達へ彼を惹きつけるらしかった。動物の中で特別亀が気に入るのはなぜだ？　昔鸚鵡を飼った事もあるが、それはおよそ亀とはちがった性格だった。どんなに大勢人間がいても、奴は決してその中の一人になりなつかず、又機嫌のいい時と悪い時とあって、大した御天気屋だ。亀は鸚鵡に較べると十分の一も気が利かないが、そういうクセはまるでない。

しかし山亀を飼い出した事は、全く偶然の動機からだった。ニューヨーク近傍の湿地にはドッサリ山亀が野生してるが、奴は普通の亀とちがって水へはいる事が嫌いだ。ところが三四年前の或る日、彼が例のとおり×市（ニューヨーク市とハドソン河一つ隔ててむかい合ってニュージャーシイ州の工業都市）のはずれのサンマアパークへ行く途中、どこからか山亀を持って来て水へ突っ込んで、泳がせて、亀が苦しまぎれに水の上へ頭を持ちあげて、バタバタするのをたのしんでる子供たちをみつけた。そんな真似はよせ

と忠告して、彼は二十五セントで亀を買いとった。そのままパークの店先きへ飼っておくと、パークへ来る子供たちがみんな集って、大変な人気になった。彼が亀好きだという評判を聞いて、亀をもちこんで来る子供が沢山あり、中には売り込みに来る子供もいた。で、一時十何疋もの山亀がウジャウジャ店を這い廻る始末だった。彼の亀好きの評判は一層高くなり、子供達はみんな彼を、「亀のチャーリイ」(Charlie the turtleman)と呼んだ。チャーリイは日本人を馬鹿にした呼び名だが、子供達はそれへ親しみの意味を加えた。(支那人をみると、子供達はチンキ、チンキ、チャイナマンを歌い合い、日本人か支那人かハッキリしない場合は一切チンキと呼んだ)

店に子供がタカッてれば、大人もつい釣りこまれて寄って来る。人が集れば自然店の遊戯も繁昌だ。子供の親達は親たちで、「いつも子供が話してる亀はこれか?」なぞと、散歩がてらに覗にやって来る。来れば、いつも子供がたのしませて貰ってると考えて鉄砲や string(糸を引っ張ってその先きに附いてる色々な品物を釣り上げる遊び)の一つもやる。時々見廻りにやって来るボス(店の所有者)は軒を並べてる他の店に較べてどうしてここの店だけいつも繁昌するか、初めのうちどうしてものみこめなかった。全くたくらまず、黙々とした山亀どもは、こうして中野の助手となり、商売繁昌の守り神みたいになった。

同時に宣伝の媒介者になった、亀を通じて、中野は子供達の友達、話相手、そして教師になって来た。みんな暇さえあれば店の前へへばりついて、顔色の黄ろい、人のいい、どこかヒョウキンな変ったオヤジから、いろんな話を聞き、質問し、議論し、うちへ帰ってからも考え、翌日やって来ては又質問した。中野は過激な言葉を避けて、どんな問題でも具体的に噛み砕き、事実にもとづいて、子供達の興味をそそるように倦まずに話した。材料は無数だった。…………手紙の切手——城だの社だの軍艦だのの図の——を一枚ずつやりながらも、すぐ説明の糸口がついた。

彼が感じた事は、日本の子供に較べてアメリカ勤労階級の子供達が、一寸見は強情で無遠慮でいながら、社会組織や…………を素なおに真っすぐに受け入れる事だった。それはなぜだ? アメリカが伝統を持たないからだと、ブルジョア・インテリゲンチャなら一口に片づけたがるだろうが、中野にはこう思えた。ワシントン百年祭の名が示すように、それはアメリカの過去が封建的政治支配を持たなかったからだ。…………に長く繁昌し、現在まで執拗に残存してる封建的遺制及びイデオロギーが…………子供をどんなに×××るか? 頭ではアメリカの子供に負けなく、むしろ鋭い位でいながら、ごく明瞭な理論に対して、どんなに…………子供がのみこみ悪く、妙にこじれてるか?

と云っても、アメリカの子供の中にものみこみの悪い奴

はいた。親や学校からうんとアメリカ第一主義を注ぎ込まれている子供だった。が、そういう子供達にも見切りをつけず、中野は根気よく辛抱強く宣伝した。そうやって一夏店で働くと、恐ろしく沢山の小さい知己や同志ができた。店をたたむ時はみんな名残りを惜んだ。夏休みの三カ月間を親の暮しの助けに労働に来ている子供達は、帰って行く時はみんな彼に会いに来、握手をし、グッドバイ！　をいった。クリスマスには、毎年沢山のカードが彼のところへ配達された。翌年又パークへ出掛けて行くと、馴染みの子供達が大騒ぎして寄って来た。子供達は、半年あまりの間に見ちがえるほど大きくなっていた。男の子も女の子も、精々十四五才を筆頭に、丁度成長盛りの年頃だった。中にはすっかり見覚えのない子までいる。が向うではチャンと覚えている。冬のあいだも、あちこちの党や大衆団体の集会で、甲斐々々しく働いている男の子や女の子のピオニール姿に見惚れてると、いきなり「亀のチャーリイ！」と呼んで、幾人かが飛びついて来て、力一杯両手で彼の手を握りしめる。彼が育てた、或はそれ等ピオニールの手で新しく育てられた子供達だった。

亀はひどく増減した。持ち込んで来る客があるかと思うと、貰って行く子供がある。半月のあいだにも倍になり、又半分にも減る。彼は惜しまずにやり、同時にピオニールの雑誌を買わせた。一二疋になると、だが彼もやり惜んだ。亀の中に、金色の眼をした、よく中野の言葉のわかる利口な奴がい、彼はそれだけは誰にもやらずに大事にしてたが、或る時一人の女の子が是非とも欲しいという。やれないというとオイオイ泣き出して「亀を貰うって、もうわたい友達にみんなに話してあるのよ。」

中野はとうとう降参して、交換状件にうんとピオニール物を読む約束をさせた。

「お前は悧口な子だからきっといいピオニールになるって、もうチャーリイは、友達にみんな話してあるんだよ。」

彼の予言はやがて適中した。

メリイも同じようにつかまえた一人だった。或る機械熟練工の娘の彼女は、店へやって来て亀だの射的だのスダレのようにさがった引っ張り紐だのを見ているうちに、自分で商売をやって見たくて仕方なくなった。そしてカウンター（勘定台）へ載っけてくれ、きっと上手に、中野が感心するように仕事をしてみせるからと、一所懸命中野に頼んだ。中野は面喰って、「お前は御客じゃないか、お客が帳場をやるなんて……。」

「お客でいるより、わたい商売をやる方がおもしろいのよ。わたいにやらせたら、チャリイよりよっぽど、うまくやってみせるわ。ね、やらせてよ。下手だったらいつでも解雇したらいいわ、解雇手当なんか要らなくてよ。」

労働者の娘らしい言葉つきが中野を笑い出させた。こんな可愛いい悧口な子が手伝ってくれたら、一層店の人気があがる事は確かだ。しかし中野は承諾しかねる顔つきをし

て、
「お前、お金の勘定出来る?」
「出来なくて!」
昂然と胸を張って見せる。
「だが僕は貧乏だから、碌に御礼が出来ないんだ。」
「心配しなくてもいいわよチャーリイ。金なんか要らないわ。わたい、ただ経験のためにするのよ。」
「ふむ、えらい事をいうな。」
「やらせてくれる?」両方の眼に彼女の全身が。
「やって貰ってもいいが……。」
「が?」
「その代わりこの雑誌や本を読むかね?」
彼は何冊かの物をスタンドの下から取り出した。
「読むわ。あす朝までにわたいみんな読んで来るわよ。」
「そんなに早く読まなくてもよろしい。ゆっくりで結構だから、読んで、あとで感想を聞かせてくれるんだ。」
「OK!」
翌朝早くやって来たメリイは、もう三冊も読んでいた。
「チャーリイ、とてもおもしろかったわよ。」
「ほう、どこが?」
メリイは人形のような円い青い眼をクルクルさせて、おもしろく感じた部分を次々に挙げて行った。正確な理解力だった。その朝から助手に採用された彼女は、なるほど、すばらしい熱心と巧妙さを示した。ほかの子供達は、彼女の突然の新しい位置にびっくりしたり羨しがったりした。中には、嫉妬をまぜて嘲笑する子供もいた。メリイは一寸彼等におこった顔をして見せ、あとニッコリ笑いかけた。
小さいながら、子供達のコツをチャンと心得てる。
「なるほど、これはおれより上手かも知れない。」
中野を感心させて、メリイは十日ばかり働いた。そして堪能すると、ピタリとやめて了った。やめる時はもうピオニールの組織へ入ってい、弟や姉ばかりか、父親や母親達へまで宣伝するようになってた。

三　泥　棒

ある朝、中野の店の横手で、二人の小さな悪漢が陰謀をやってた。
「店の前で待ってるのかい?」
「うん、こういうふうに、馬飛びの馬みてェに腰を曲げてるんだよ。おれそのあいだに店のうしろへ行って、コンコン戸を叩きながら、『チャーリイ! 誰か用があるっていってるよ』ってやる。するときっとチャーリイは『オーライ、今行くよ』とか何とか云いながら、裏の方へやって来る。そのスキにおれ前の方へ飛んでって、お前の背中へ乗っかって、カウンタアのうしろんとこへ手を延ばしてボンボンや飴を取ってやる。」
「うめェうめェ。だが、もしお前が取ってるあいだに、チ

ャーリイが戻って来たら困るなァ。」
「大丈夫だってばよ。チャーリイは裏の戸をあけて、どこに用のある人間が来てるかと思ってあっちこっち見廻わしてるから、時間はタップリあらァ。」
「そうか。でも誰もいなかったら、チャーリイはすぐ戻って来やしねェか？」
「大丈夫だってば。おれ素ばしっこくやっちゃうから？」
「うん、ほんとにはしっこくやっとくれよ。ガタってチャーリイの足音がしたら、おらァすぐ逃げ出すから。」
「駄目だよ。そんな事をしちゃァ。おれが背中から飛び降りるまでジッとしていてくんなくちゃ、折角菓子を取ったっておれ怪我をするし、怪我をしなくたって、ドシンと地べたへ落っこちりゃチャーリイが気がついちゃうじゃねェか。」
彼等は全く秘密に計画を進めてた。だが、丁度店のひまを見てカウンタァの背後にうずくまってズボンのほころびをつくろってた中野は、板壁をとうして洩れて来る「チャーリイ」という言葉に耳を惹かれて、陰謀の一切を聞きとってしまった。よし来た！ つくろい掛けのズボンを隅っこへ片附けて彼は店の奥へ立って、ギャングの襲来をゆっくり待ちかまえた。
コンコン――コン！ 案のじょう、間もなく小さな拳で裏の戸を叩く響き。「チャーリイ！ チャーリイ！ 誰か用があるっていってるよ。」つづいて呼ぶ声が聞えて来た。
「オーライ、今行くよ。」
中野は早速返事して、トントントンと足踏みを始めた。大いそぎで店の前へ走って行くらしい子供の靴音。やがてカウンタァの前の物音。と、よごれた白シャツ一枚の小さな腕が、台越しにニユッと一本さがって来た。一足踏み出すと、中野はギユッとその腕をつかまえた。小さな柔かい温かい羅生門の鬼だ！
「きゃッ！」
子供は仰天した叫び声をあげた。下の子供は慌てて一目散に逃げ出した。怪我をさせないため、中野は上の子供のモウ一本の腕を握って、身体もろともズルズル店へ引っ張り込んだ。大抵声で見当がついてたが、まだ十になるかならずの、やせた、だがどこかガッシリした、亜麻色の縮れっ毛の子だった。
子供は驚きと恐怖でクチャクチャになって、
「おれ、おれ、何もする気じゃなかったんだよ。」
叫びながら、大粒の涙をポロポロこぼした。
「わかってる。泣くんじゃない。」
中野は小さな肩を叩いてなだめながら店の中に立たせた。そして、やや遠く逃げて行ってブルブルふるえながらこっちを見つめてる相棒――仲間のことが気になって、さすがひとりでは行って了えないのだ――へ、来いという手招きをした。黄ろい毛の相棒は、地面へ釘のように突っ立ったまま、両方の眼ばかりパチクリさせた。中野はとりこ

の子供の姿をさして、やさしく合図をくりかえした。そろりそろり……餌を貰いに来る馴れない野獣のように、何歩か歩いては立停り立停り、だんだん相棒は近寄って来た。
「なぜ君達は盗もうなんて考えるんだい？」
二人の子供を店の中へ並べて、中野はその前へ腰をかけておだやかに訊いた。
「考えやしねェ。」
リイダアが恥で赤くなりながら否定した。
「そうか。じゃァなぜあんなとこへ手を出したんだ？」
「何があるだろうと思って……。」
「ボンボンや飴があると思ってじゃないか？」
リイダアは黙った。二人とも耳の根もとまで真ッ赤になった。相棒の方はうなだれて、リイダアの方は涙のたまった眼で真っすぐ中野を見つめた。
「赤くなるのが何よりの証拠だ。」
「聞いたんだろう？」
リイダアが低い声で唸った。
「そうだ。だがなぜ君達が菓子を盗もうと考えたかは、まだ聞いてないよ。なぜだい？」
リイダアは口もとをモグモグさせたかと思うと、キュッと余計引きしめた。相棒の方が答えた。
「だって——おれ達のうち貧乏で、碌々あめェ物が食えねェんだもの。」
「ほんとかい？」
中野は、よごれた磨り切れた子供達のシャツやズボンをもう一度見廻わした。
「うん」
相棒は萎れてうなずいた。
「タム、よせ！　そんな事いうなァ」
リイダアは癪にさわったように叱りつけた。
「ふむ、——君達のお父さんは何をしているんだい？　百姓かい？」
「労働者だい」
リイダアは誇りを以って言下に答えた。
「うむ、何の工場で働いてるんだ？」
「鉄工場で働いてた。」
「今は？」
「一月に、工場のボスの奴が首切った。」
「じゃァ今お父さんは失業者かい？」
「うん。」
でも馬鹿になんかされねェぞ、といった顔つきで、リイダアは鼻で答えた。
中野は相棒へ向いた。
「君のお父さんもそうか？」
「ああ、——一緒の工場で働いてた。」
「そりゃァ気の毒だなァ。」
「不景気で、工場に仕事がねェんだとさ。どこにもねェんだとさ。だからおッかァが……」

「よせッてば、馬鹿！」
リイダアが又怒鳴りつけた。相棒は首をちぢめて言葉はやめた。
「そうか。そんならなぜ、チャーリイに初めッからお菓子くれっていわねんだ？」
「おいら乞食じゃァねェや。」
リイダアが叫んだ。
「乞食よりも泥棒の方がいいってのかい？」
「泥……。」いいかけて、くやしそうに口をつぐんだ。
「そうだ。君達ァ泥棒じゃないんだ。労働者や労働者の子供ってものァ、みんな泥棒は嫌いだ。泥棒する奴ァ、……………無くて乞食だの×××だのって奴だ。君達のお父さん達が××××××××されるお蔭で、君達もお菓子が碌々食えなくなるんだ。だからお菓子食いたかったら、労働者達と一緒になって………………………しちまわなくちゃ駄目だ。――君達ァきょうだいがあるんだろう？」
二人とも、――リイダアは軽く、相棒は大きくうなずいた。
「きょうだい達にも、君達ァ食べさせたいだろう？」
リイダアは鋭く眼を見張った。
「そうだろう。さ、これ持ってって、みんなで食べな。」
中野は飴だのボンボンだのを両手一杯つかみ出して、子供達の前へつき出した。

「要らねェや。」
菓子から中野の顔へ眼を移して、リイダアは太く唸った。よろこんで中野の片手分の菓子を、つないだ小さな両掌へ受けた相棒は、ドキッとしてリイダアをみあげた。
「おい、勘ちがいしちゃいけねえぜ。僕ァ………………、君達をごまかすための慈善をやってるんじゃないんだ。君達のチャン達と同じように、僕もボスからしぼられてるプロレタリアだ。仲間どうしでやったり貰ったりしようってんだよ。わかるかい？」
子供達は黙っていた。
「わからなけりゃァこいつを持ってって読みな、そうすりゃァすっかりわかる。それでもわからねえところがあったら、何でもチャーリイに聞きな。」
中野は、菓子と本を持たせて子供達を帰した。二人はやがていいピオニールに成長し、いつも二人で組になって活動した。

四　射　る

パン！　………。
小銃でも撃ったようなヒドイ音が頭で破裂した。
中野も、店の前へたかって射撃だの引っ張り糸だのをやって遊んでた大勢の客達も、びっくりして空間を見上げた。天井にも壁にも異状がなかった。

「ははァ、風船玉の破裂だ」
客の一人が目ざとく呟いた。なるほど、引っ張り糸の横丁に、店の景気かたがた幾つも掲げてある、フラフラ風にゆれて軽く互いにブッつかり合ってる赤、白、青、紫等々の大きな風船玉の一つが無くなり、焼けちぢれたような小さなゴム残骸を一端に食っつけた白い糸が、ほそい素麵（そうめん）のように台の上へトグロを巻いてた。
「あんまり暑いから、ガスが膨脹しやがったんだ。」
他の客が解釈した。
「うん、こう暑くちゃァ人間だって破裂したくなる。」
「此の次破裂するなァお前の腹よ。」
ドイツ人風にふくらんだ大きな男の腹を、隣りのやせた男がチョイと指で突っついた。
「ちげえねェ、はっはっは。」
「なァに、君の膀胱だ。」腹の男が負けずにいい返えした。
「チャーリイ、このゴムお呉れ。」
一人の子供がゴムの破片を頼んだ。中野が糸の先から取ってやると、子供はよろこんで両手で引きのばして、唇へ当ててピイピイ吹き出した。
「うるせェ！」
「余計暑っ苦しくならァ。」
「私刑（リンチ）にしちゃうぞ、チビ！」
パン……。
途端又恐ろしい音がして、白い風船玉の一つが割れ、ガスの尾みたいに意気地なくクタクタと糸が空間をすべり落ちる。それより早く、チリリン……台の上へ小さな金属性のひびきがころがった。
中野はひびきの先をみつめた。折れ曲った、ほそい、チカリと光ってる金属線。彼は指先でそれを拾って、眼の前へ持って来てしらべた。真ン中から曲げられた小ピン、——洗濯物用のピンにちがいない！
中野は客の頭越しにグルリと街を見廻わした。いた！
二三十尺向うの街頭の柱を背に、十四五才の子供が三人陣取って、こっちをみて口をあいて笑ってた。隊長株とみえる大がらな奴の片手にある手製の弓。——中野が彼等へ眼をとめたのを見て、子供達は余計嘲笑的に大きく口をあけた。「これだ」といった格好で、隊長はブルブルと……その振動する工合でみると確かゴムの弦だ……弓を張ってみせた。
「畜生！」
中野は腹の中で怒鳴った。
「ほう、いたずら小僧どもの仕事か」
中野の手のピンと彼の視線とを連絡して、客達はつづいて気づいた。
「暑さのセイにしちゃァ、どうもおかしいと思った。」
「危ねえ真似をする小僧どもだ。もし風船の代わりにおれ達の頭へ当ったらどうする気だ！」
「同じく破裂するだけさ。」

「風船をやっつけちまったら、こっちをやる気だろう。」
非難しながら、明らかに客達の多くは子供達のいたずらを憎むより、むしろおもしろがってた。これは新しい観せ物でもあり、巧妙な遊戯でもある。チャーリイには少し気の毒だが、小僧どもがこれほど正確な腕を持ってる以上、損害はただ風船玉だけのものだ。
「あいつ等大きくなったら、いい兵隊になるぞ。」
露骨に悪童どもを賞讃する客さえ、中に出て来た。
中野は悩んだ。風船玉の損害だが、こういう客の気分がよくなかった。客達が気づかずにいたらともかく、気づいた以上、このまま捨てておくと忽ち店の商売に影響する。長くアメリカに住み、又客商売の経験を積んでるため、彼はアメリカ人気質をよく知ってた。こんな真似をされて黙ってると、アメリカ人は彼を馬鹿にされてるものと見做す。そういうスキへ有色人種に対する一般的偏見が顔を出して、此の後客足が少なくなるに定まっている。ボスは、平生そんなふうに店へケチをつくのをひどく嫌ってるのだ。――これはこのまま捨てておくわけにやァ行かない！
中野がひとりで思案してるあいだに、三人組の悪童はかまわず襲撃を続行した。見事命中した二発で自信を得、おまけに中野や客の注意をすっかり自分達の上に集めて、彼等は大得意になった。隊長は、中野達がこっちを見ている眼の前で又新しいピンをつがえて、ユルユル弦を張って、残りの風船玉の一つへ狙いをつけると、ピューンと放した。チカリ……空気の中で光り物がしたかしないか――パン！　真赤な風船がまた見事に跳ねてケシ飛んだ。チリリン……「命中」報告のように、ピンが追っかけて合へころがった。
「やりやァがるなァ！」という声と一緒に、パチパチ――客の中から誰か手を叩いた。中野はまるで自分の頭を打ち割られたように思わず青くなった。そうだ。自分の頭だ！悪童どもはもうその気でいるんだ。でなかったら、なぜこう自分の店の風船ばかりを狙うんだ？　ここのサンマアパークは小さいから無いが、コニイアイランドその他の大きなパークへ行けば、きっと黒人の射的がある。生きた裸の黒人の頭へボールを叩きつける遊戯だ。命中すると、黒人は真っさかさまに下の水槽へ落っこちる。客に射撃心を起させるために、黒人はボスに命ぜられてわざといろんな悪タイをつき、客はその手へ乗って、人種的偏見と憎悪をボールへこめて夢中になって黒人の頭へ向って投げつける。悪童どもは、今その射的ごっこをやってるんだ――。
「困ったいたずらっ子です。だが風船が往生するっきり、御客さんがたの生命には異状無しですから、さァさァ安心してやったりやったり。射的が五発十セント。スッリングが大負けの一本五セント。それで煙草でもキャラメルでも、キューピーさんでも、こんな大きなワン公でも、何でも射ち落し釣りあげお望み次第。それこのとおり。どうです？　さァさ早いがお勝ち……。」

わざと元気な滑稽がかった口調で中野はしゃべって、客の注意を商売へ集めにかかった。悪童どもなんか勝手にしろ、そんな事にかかわっちゃいられない、といった調子で。――そうやって賑やかにしゃべりながら、客にも悪童にも気づかれないように、彼はだんだん身体を店のドアの方へ寄せて行った。やがてごく自然にドアへ身体をくっつけると、いきなり押し開けて、脱兎のようにそとへ飛び出した。悪童の群へ向って一直線に。

客達はみんな度胆を抜かれた。そして糸や鉄砲を手にしたまま、彼のあとを見送った。一体どうしたっていうんだ？　店の中はガラあきじゃないか？　客も何もすてっぽかしにしておいて。――しかし中野は誰よりもそれを考えてた。考えながら、備えつけ品も売上げ代金も持ち物も、みんなそのままにして飛び出したのだ。ボスでも見ていたら大変な事だった。だが中野は、そういう場合の客の心理を十分計算していた。馴染客も大勢いるし、こんな場合、客達は決してやたら品物を盗んだり売上代金を取ったりするものではない……。

おどろいたのは客だけではなかった。悪童達はすっかり仰天し、恐れた。まるでブルドックのように――彼はズングリした身体つきだった――首をすくめて飛んで来るものすごい彼の姿を正面に見たら、大人だって恐れたに相違なかった。だがそのうえ、子供達には想像力が加わってた。黄ろい額に両眼がつるしあがり、悪魔のように、尖った耳をたて、耳もとまで裂けた大きな赤い口へ白刃を銜えて無二無三に追ッかけて来るチンキニューヨークのブロードウェイの、しかも支那料理屋にすぐ対い合った活動館の表看板にさえ、そんな支那人の大きな顔が描かれ、その大きな口から、冬なぞポッポッと恐ろしい湯気を噴き出して通行人の注意をひいているのだ。（そんな資本主義的創造物は、子供達の印象に深く刻みこまれてた）兇悪と残忍そのものの東洋人の姿を、今彼らは眼の前に見たのだ。

「ぎゃッ」という声もろとも、悪童は蝗のように飛び散って夢中になって逃げた。まさに第四の矢をつがえようとしていた隊長は、矢を捨てて弓一つではしった。

「とまれ！　とまらなけりゃどこまでも追ッかけるぞ！――とまれ！」

中野はわめきながら、兎を追跡する猟犬のように駆けた。その声は、余計子供達を恐れさせた。いくら逃げてもモウだめか？――だが、とまろうにもモウ怖くてとまれなかった。声もたてず、半分しびれてしまった両脚をもがいて、中風のようによろけながらバタバタ子供達は駆けた。

一ブロック建物を越したところで、中野はもうしんがりの一人へ追いついた。ぶるぶる熱病やみのようにふるえてる子供の肩を、彼はいきなりうしろから突き飛ばした。

「御免よ！」

かすれた声で叫ぶと一緒に、子供は他愛なく突んのめった。

そのまま中野は隊長を追った。うろたえた隊長は、自分の弓のためひどく走る邪魔をされてた。二つ目の横丁を曲ったところで、四歩、三歩、二歩……みるみる二人の間隔は縮まって、子供はグイと突き飛ばされた。ブウッ、ブッ――丁度その時急速力で金持らしい、服装の中年男が自分で操縦してるリンコルン型自家用自動車が、向うから一台はしって来た。あわてた警笛のひびき。ズズーと躍りながら、コンクリート舗道を摺って急停車しようとする太い車輪。「あッ……」車の中とそとから同時に揚がる叫び。子供の身体は、そのまま潰れた蛙のように車輪の前へ横に延びた。

「しまった！」と中野は思った。同時に、電光のように踵を返えして、あとも振り返えらず一散にもと来た道を走った。激しい呼吸。――それは走りつづけたためだけではなかった。店の手前の、悪童達が陣取っていた街燈の柱まで飛びつくと、彼はグタリとよっかかった。客がまだ大勢店の前にたかってこっちを眺めてるのが、ボタボタ落ちる汗のしずくを通して眼に映った。

「落着かなくちゃいけない！」

中野は息と汗のあいだから自分へ呼びかけた。「落着かなくちゃァ……。」二三度くりかえしてから、少しばかり汗と呼吸を静めると彼は店へ戻った。

「どうしたチャーリイ？」

「なに、少しおどかしておいて来た。ははは……どうも店をあけてすみません。」

質問に答えながら、彼は何気ない顔つきで商売にとりかかった。――だが、その努力は十分に成功しなかった。彼の胸の中には早鐘のようなものが鳴り、それがイヤ応なしに顔色へ反響して来た。案のじょう、見廻わしたところ店の物は何一つなくならず、売上げ代容れもそのままだったが、客はもう店に興味を無くして了い、中野から追跡物語もきけそうにないとわかると、二人ずつ三人ずつボツボツみんな去って了った。

丁度そこえ、例の組の中の二人の子供がやって来た。

「チャーリイ！　お前ジョンを殺しちまったよ。」

子供は口先を揃えていった。

「ジョン？　そいつあ誰の事だ？」

「そら、お前が僕等と一緒に追っかけた、あの子さ。」

「うむ、お前達とグルになってこの風船玉をドッサリブチ割ったあのいたずらっ子か？」

子供は困ったような顔つきをしながらうなずいた。

「なぜあの子を殺したっていうんだ？」

「お前が追っかけて突き飛ばしたもんだから、あの子は自動車にシカレて……」

「ウソをいうな！　おれは突き飛ばした覚えなんかねえ。あの子は逃げる拍子にきっと自分で自動車へ衝突したんだろう。」

「ちがう。お前が……。」

「でたらめいうな。ひいたら、ひいた奴が悪いんだ。そいつにかけ合って、ウント弁償を取るんだ。」
「だって、ジョンがそういってたよ、お前のお蔭でシカレタんだって。」
「そいつはでたらめってもんだ。どこの金持の自動車にひかれようと、おれの知ったこっちゃァねえ。くだんねえ事をいってずにサッサッと帰りな。」
中野は頑強に突っぱねた。そういう突っぱねかたを、長いアメリカの経験が彼に教えた。アメリカの一般社会では、ウッカリ自分の誤りや弱点を承認したら大変な事になる。その人間の正直さを認める代わりに、社会はそういう誤りを犯した人間として彼を認めるのだ。余計な正直のお蔭でひどい永久的人格的損害を招いて了った立派なアメリカ人を彼は幾人も知ってた。心を鬼にしろ、断じて自分の行為を承認するな。したら大変だぞ！
ヤット子供達を追い返えすと、今度は怪しげなジプシイ女が二人連れでやって来た。
「お前さん、どえらい事をやってのけたねえ？」
「どえらい事って？」
「子供を一人見事殺しちまったじゃないか？」
「そんな覚えはない。」
「いくらいい逃れようたって駄目だよ、お前さん。チャンと証人があるんだから。——だが心配する事ァないよ。わたし達に一切おまかせ。こんな事にゃァわたし達ァ馴れてるから、決してお前さんの損害にならないように、うまくやってあげるよ。」
「わたし達が中へ入りゃァ、きっと示談にしてあげる。」
肥った女が口を添えた。
「示談にするもしないも、おれに関係のない以上……。」
「駄目だってばさ、お前さん。そんな事いってると暗い処へブチ込まれるがいいかね？」
「悪い事ァいわない、早く示談にするが第一だよ。今すぐ百ダラ出しな。」
肥っちょが切り出した。
「百ダラ？　何のために？」
「奔走料や示談の金さ。」
「ふむ、いい金だな。」
「いい金だって？　お前さん、暗い処でいやな思いをする事を考えて御覧！　百ダラ位安すぎる話じゃないか。」
「暗い思いをする奴ァ自動車の金持だ。」
「戯談じゃないよ、お前さん。金持ちに何の責任があるもんかね。」
「そいつがひき殺したじゃないか。」
「誰がひき殺させたの？」
「誰もねえ。」
「いるっていう証人がある。」
「ほう、誰だ？」
「何て強情だろうね、まァこの人は。…だが強情も時により

けりさ。こんなハッキリした事件に強情を張ってると、かえってタメにならないわよ。」
「全くさ、見当ちがいだよ。」
肥っちょが、
「わたし達ァ、もしかしたらこんな事じゃないかと思って、お前さんのためにすぐ来てあげたんだ。」
「おれのためなら、サッサと帰りな。」
中野はブッキラ棒にいった。
「あきれたわからず屋だねえ、お前さんは。」
「驚いた。」
「驚いたら帰れよ。」
「あとで後悔しないがいいよ。」
あい手にならない中野を見て、ジプシイ達はプリプリして帰って行った。
と、入替わりに又子供達がやって来た。
「チャーリイ、とうとう死んじゃったよ。」
「ほう、まだ死ななかったのか？」
「死にかかって病院へ運ばれて行ったんだけど、やっぱり駄目だったんだよ。」
「じゃひかれた時は死ななかったんだな？」
「うん、だがシカレて死んだんだよ。」
「ふむ、可哀そうな子だ。お前たちも、これから自動車にひかれないように注意しな。」
子供達が帰って行くと、間もなく、又ジプシイ達がやって来た。変にニコニコしながら「どうだね、お前さん？」
「何がどうだい？」
「考えなおした？」
「なおさないよ。」
「まあ！」仰山な叫び声と一諸に二人で両腕をひろげて、
「お前さん、そんなに暗い処好きなの？　おもしろい人だね。」
「誰が好きなもんかね。このひと外国人で、気の毒にまだよくアメリカの事がわからないんだよ。」
「ああ、そうでなくちゃァ、こんなに平気な顔していられるもんじゃない。ね、お前さん、警察じゃァ、もうすっかりお前さんをつかまえる手筈をしているんだよ。でもまだおそかァない。早くわたし達にまかせなさい。そうすりゃァ、わたし達これから警察だの親達だのへ飛んでって、一所懸命とりなしてあげるから。」
「善はいそげってさ。一刻でもおくれたら取り返えしがつかなくなるよ。」
「お前さんが気の毒だから、もう一度わざわざ来てあげたんだよ。だが見たところ、お前さんもあんまりラクじゃなさそうだから、エエ、思いきって五十ダラに負けとこう。その代わり、示談成りたち次第現金だよ。」
「五十ダラじゃタダみたいなもんだ。」
ジプシイ達は代わるがわる説いた。
「お察しどうり貧乏で、五十弗どころか一弗の金もねえ。」

「まさか。」
「ほんとうよ。」
「わたし達ァ戯談相手に来てるんじゃない。少しほんきになって……。」
「これよりほんきにゃァなれねえ。」
どうせこんな女どもなんか三文の役にもたちっこない。金をまきあげられるだけがオチだ……中野はそう考えてた。
「チェッ、何てじれったいんだろうねェ、この人は！」
「まるで他人ごとのような顔つきしてさ。」
「そうさ。ジプシイ美人諸君の儲け仕事になんか、おれは一向興味がないんだ。」
「儲け仕事だって？」
ほそい方の女がおこって叫んだ。
「じゃァ、そうしつこく売りこむのはなぜだ？」
「お前さんが可哀そうだってのに、わからないの？」
「余計なおセッカイはやめてくれ！」
中野はソッポを向いた。
「お馬鹿さん！」
肥っちょが身体をゆすって叫んだ。
「知らないぞ！」
ほそい方が指をたてておどした。
「結構。」
中野は横向きに一本の引っ張り糸を握って、大きなブルドックを一疋女達の前へ釣り上げた。茶色の犬は、四本足を空間へ突っ張ってウサン臭そうに女達を睨んだ。
「ちェッ！」
女達は、半分おこった半分あきれた顔つきで帰って行った。中野は急に度胸ができた気がした。「この分だと、もしかしたら大した事じゃないかも知れない。どうかそうあってくれ！」
「さっきは失礼。」
半時間たつかたたないのに、ほそい、一寸美人の方のジプシイ女が今度はひとりでやって来た。
「おや、又御入来かい？」
中野は驚いた。
「ねェお前さん。」
女は、いきなり台の上へ両肱をたてて、その上、うすく白粉を刷いた格好のいい顎を載っけて、艶っぽい眼で中野をみつめながら、親密な口調で話し出した。
「お前さんさっき金がないってたわね。」
「うん。」
「ほんとと？」
「ほんととも。」
「じゃ仕方ないわ。わたし達踊子だって、無い袖は振れないんだからねェ。そんなら菓子でもいいわ。」
「菓子？」
「うん、店の菓子二箱に負けたげよう。」

しめた！　中野は腹の中で思わず歓喜の声をあげた。こんな事をいい出す位なら、恐らく子供は死んでないぞ！死んでたら、まさかこうまで値を下げて来る筈はない。……氷のように張りつめた緊張感から、彼は一時に釈き放された気持になった。
「二箱！」
「うん、どの箱でもいいわ。」
「ありがとう。じゃァそこで一つうんと遊んでいってくんな。何十回でもいいよ。こっちゃァ二箱分の実価さえ貰ゃァいいから。」
「なにいってるんだい？」
女は相手の顔をみつめた。
「きれいなお前さんの事だ。おれも思いきってまけとく。」
「おフザケでないよ、チャーリイ！」
美人は眸から顔をあげて睨みつけた。
「ふざけるって？」
「悪党め！　お前は底の知れない悪党だな。」
「なぜ？」
「わたしはここのお客じゃないんだよ。」
「ああそうか。じゃァ店の邪魔にならねえように……。」
「帰るとも。畜生！　だがあとでおぼえてるがいい。ウンと呪ってやるから。」
「うれしいな、そうまで思い込まれるたァ。」
「蝦蟇！　豚！　犬の糞！　悪魔！　今に自動車にひかれちまうぞ。血を吐いて這い廻わりやがれ！」
「ふむ、もう呪い始めてるのか。」
女はくやしがって、散々毒づきながら立ち去った。
案のじょう、隊長の子供は死んでいなかった。その翌日、ほかの子供達の口から一切がわかった。隊長は、頭だの腕だの脚だのをやられたが、どの傷もたいした事はなく、四五日入院したきりで出て来た。中野はほかの子供達へ、「直接会って話したいっていってチャーリイがいってると、伝えてくれ」と頼んだ。退院して間もなく、鼻のやや上反った、眉や髪の濃い隊長は、繃帯で跛をひきながら、相棒二人と一緒に中野の店へやって来た。
「割合軽い傷でよかったね。」
中野がいうと、
「うん。」
すなおな返事だ。
「まだ痛む？」
「いや、それほどでもねえ。」
「気の毒だったなァ。」
「なに、おれが悪かったんだ。」
怨んでる様子もなく、隊長はサッパリした調子で自分の悪かった事を認めた。
「そうか。」
中野は喜ばされて、
「悪く思わないでくれよ。僕はそんなに君をやっつけるつ

もりじゃなかったんだ。丁度運悪く……」
「わかってる。」
いたずらに比例して、あともアッサリしてる。
「僕はあの時、黙って君達をうっちゃっておくわけに行かなかったんだ。そんな事をすれば、あとこの店全体が馬鹿にされて商売が出来なくなり、僕は失業しなくちゃならん。そのうえ悪い事は、君達がブルジョア教育に影響されて人種的偏見を持ってる事だ。日本人の僕の店でなかったら、君達はあんなしつこい真似はしなかったろう？」
子供達は黙って彼の顔を眺めた。
「然し君達は、僕が追っかけたらすぐつかまったじゃないか。こんな短い脚をしてたって僕は走る事ならどんなアメリカ人にも負けないんだ。アタマだってそうだ。普通のアメリカ人の知ってる位の事なら、何だって知ってる。君達が僕を軽蔑するのが馬鹿げてるのは、だがそればかりじゃない。君達の家はみんな職人だそうだが、職人だの、その子供だのって者は、世界中みんな兄弟同士なんだ。兄弟同士軽蔑し合ったり憎み合ったりするなんて、とんだ間違いだ。僕達は助け合って、……………………――――――――……………………ちゃあウソだ。」
子供たちは、この奇妙な東洋人の言葉に眼を輝かせた。
「だが君は弓がうまいなァ。どこで習ったんだい？」
つづいて店の菓子を沢山頒けながら、中野は隊長にきいた。
「ひとりで。」ややはにかんで彼は答えた。
「そうか。そういう腕をもってる者は、大いにプロレタリアのためにその腕を役立てて貰わなくちゃァ……。」
その日から、三人の子供――特に隊長は、すっかり中野と親友になった。喧嘩が、余計深く結びつけたのだ。暇さえあれば、その後隊長は店へやってきて仕事を手伝った。或る時なぞ、二三十箱もの菓子の荷が店へ着いて、丁度忙しい折から、どうして一々開けたものかと中野が途方に暮れてると、丁度隊長がやってきて、ひとりで全部片づけて了った。親友――同時に同志の東洋人のために、彼はいつも骨身を惜しまなかった。

五　赤ジャケツ

折角仕立てあげた親友――同志をうしなった経験も、中野は持ってた。
或る者は病気や事故で！　そのうち一番忘れられないのは、パークの前面に横たわってる×島の百姓の一人の子供だった。ムックリ肉のついた、日に焦けた身体と、牛の眼のように静かにうるんだ、澄んだ眼と、ふっくり赤い唇、……初め唖かと中野が思ったほど、その子は口数がすくなかった。店へ来て遊ぶ時も、黙って台の上へ銅貨をのっけて、黙って糸を引いたり鉄砲を打ったりする。いくら当らなくとも平気だし、当っても精々一つニコリとするきりだ

った。中野が話しかけても、口の代わりに大抵頭を動かして済ませた。亀を眺め始めると、いつまでもジッと、亀より静かだった。

中野が本を貸すと、黙って持ってって一週間位も経って何遍も読み返えしたあとで返えした。そして不審な点をボツリボツリきいて、納得がゆくまではやめなかった。進みかたはおそいが、全く正確な理解、中野はひどくひきつけられて、彼の将来をひとりでたのしみにしていた。

が或る日、彼が遊びに来てるあいだにひどい風が吹き出し、湾一面が大浪を挙げだした。子供は平気な顔で、その嵐の中を乗って来たボートで帰ってゆこうとした。中野は心配して、嵐が静まるまで待った方がいい、そのあいだ自分の室へ来て泊らないか、といって引きとめた。しかし子供は、その日のうち帰る事になってるからといって、ムックリした赤ジャケッの背中をみせて帰って行った。

店をあけるわけにも行かず、中野は送って行きもしなかったが、その晩一晩眠れずに、翌朝早く、パークへ行く前、海岸の三叉風に杭の突き出ている場所へ出掛けた。水や風の加減で、そこはよくいろんな漂流物が引っかかる個所だった。と、一本の杭の根もとに、濁り水の中でユラユラ揺れてる何か黒いものをみつけた。彼は靴をぬぎズボンをまくりあげて、ザブザブその杭のところまで渉って行って、黒い物体をつかみあげた。泥が一杯浸みこんで重くなっている赤い小さいジャケッ。――念のため周囲の水をさがしたが、碌でもない屑や板ッ切れきり、ほかに目ぼしい物は何もなかった。ボートが水をかぶって、泳ぐためにきっとこいつを脱ぎすてたのだ。しかし、あの子は無事に帰りついたろうか？　……

中野は岸へ戻って、ヂャブヂャブジャケッの泥を揉み出した。いくら揉んでもあとから浸み出すひどい泥だった。店へ持ち帰って、彼はなお何遍もきれいな水で洗って、丁寧にしぼって、乾かして、着ていた子の店へ来るのを待ってた。三日、四日、六日、十日たっても、二十日たってもそれきり子供の姿は店の前へ現れなかった。何日もひとりでふさいで、彼はとうとうあきらめて、そのジャケッを記念に保存する事にした。十月の末、亀が眠りこむ時期に入ると、彼はそれを亀達の冬の住家に貸してやった。長いあいだ落ちついて眠るために、彼等はやたら無性に、あっちこっち首や身体を突っこむ所をさがすのだった。中野は彼等をジャケッに包んで、枕もとへ置いて、毎年一緒に年を越えた。彼等は何一つ食わずに彼は一個五セントの鮪の頭を買い込んで来ては、何度もの食事の菜にして――。

事故や病気で奪われるばかりでなく、……………………て行く子供も、毎年片手の指で数える位ずつあった。しかしビオニールの群は、それらの犠牲を越えて、中野の周囲に年ごとにキノコのようにぞくぞく殖えた。彼の力にも依るが、一層、眼にみえない、だが底力のある強い勢力に押されて。

（一九三二、八）

女性苦 抄

松田解子

今晩こそ矢田も帰って来るだろうと思うと、ハルエは落ち付かない気持だった。

帰って来てくれればいい。——もう、帰って来てさえくれたならばどんなにでもなるんだが——と思うと、ハルエはいても立ってもいられなかった。

『さア、行こうよ、ツネ子ちゃん』

ハルエはそう云って、小路をはさんだ長屋と長屋の間から、淡雪をおいたような夕雲をふり仰いだ。

『いい天気でしたねエ』

隣りのおかみさんが一と足さきへ——

水道ばたは相変らずにぎわっていた。笑い声もはじけていた。

だが、いつも無雑作なつぼやきを頭のまん中にでんぐりかえしている一軒おいて隣りのおかみさんが、たいへんな話をすませたあとらしく、

『ほんとにこの不景気にねエ、われわれにばかり貧乏風吹かせてよこすんだから、罰ですよ』

と、結んでいた。

話はこうだった。

この日お昼前十時か十一時頃、日本橋の×××へムサントーの人たちが×××んで、××××××という××の×××が木の葉のように撒きちらされたというのである。

ハルエも胸をさわがせた。——木の葉のように撒き散らされた×××! ムサントー? ハルエは未だ夕刊は読んでいなかった。けれども、四日ぶりで、あるいは帰って来るかも知れない矢田の寒そうな顔を思うにつけ、飛び散る×××と、『ムサントー』が、どの『ムサントー』であるかが気になった。

もちろんおかみさんたちは、今にもその××束の一枚が耳たぼのへんに舞い降りはしないかと、あたりを見廻わす気持だった。

『なんてまたなア、ムサントーだかなんだか知らねえが、わしらンとこででも撒いてくれれアいいものを』

『ほんとにねェ、千の万のと云わない、十円でも五円でもいいわ』

『まったくよ』

みんなの眼には、磨いでいる徳用米よりも、洗っている

小魚よりも、何よりも、その××束がこびりついた。あの――紙片とも思えない色っぽさの、鋳抜いたようなノミノスクネのお姿……

『……えええ、運のいい奴ァ一枚も、そこの××の窓あたりぶらついてて拾ったかも知れないね』

『まったく――ありかねないね』

『あああッと、これやこれやッと、聞いただけでも眼がまわるよ』

『撒いてもらったら歩けないね、ぽッとしちゃって』

『ハハハハハ』

『ハハハハハ、ぽッとしたって構わねえ、一ぺんはここらで撒いてもらいたいよ、ハハハハハ、夢みたいな話だ』

おかみさんたちは立ち上った。

ハルエも、ほうれん草の小ざるを抱えてツネ子の手をひいた。

『さァ、ゆこう……父ちゃんが帰ってるかも……』

裏口へまわると、ぼんやり電燈がついていた。

来てるな、と思って戸を開けると、ぬッと障子に丸坊主の影が浮いている……

ハルエは、ヘナヘナと座ってしまいたいほどがっかりして　しかしやっぱり声をかけた。

『おい――、てえへんだよ』

障子を開けると、兎公は、夕刊におでこをおっつけるようにしていたが、困ったよ、とくりかえした。

ハルエは、もう、なにもかも分ってしまった心だが、聞かないわけにもゆかなかった。兎公は、この一大事の報告には、一種異様な厳粛さを示したのだった。眼はなおのこと急がしくまばたいて、唇からは白い泡がこぼれ、一言ぎりに尖った舌の尖がうすい唇を舐めまわした。

『おれがよ、なア、もう少し早く代議員席にねじ込んで行けたら、タヤちゃんもなんとかなったろうによ、……あん畜生どもがナ、なんであんなだか階段と入口の合さに一ぱい詰ってやがってよ、おめえ、持丸が、な、なぐられたぜ!』

『だれに?』

『若え連中にさ、撲られてたよ、しこたま撲られてたよ』

ハルエは、夫がせい一ぱい××しながら×××れて行く姿と、持丸が、×・反の――あるいは、×・反の影響を受けている組合の連中に撲られている姿を、同時に眼に浮べた。

『それで、――矢田たちはとうと代議員資格をとられた?』

『なにが? なにがとられるもんか、それで騒ぎになったんだから』

『その、資格を取る取らないの騒ぎでね』

『ああ。だが、でえ丈夫だよ。あんなインダラ共がなんぼ資格をとったって、関東金属にしろなんにしろ、断然クラブ排撃派ががんばってるんだから』

ハルエは、肯ずきながらも、兎公の云うほどもはっきりした様子の理解できない自分がなさけなかった。物足らない気持――何もかもが癪にさわって、じっとしていられない気持だった。
『兎さん、今晩はうんとご馳走があるのよ、どっさり食べてって頂戴ね』
ハルエはそう云ってごろりとそこへ横になった。
『俺がごっそうこさえるかな、それじゃ。なァ、ツネ坊』
兎公はけろりとして、鼻唄まじりに立ち上った。
『よう、唄わねえかツネ坊、え、なんだっけあれァ、まァるくなあれまァるくなあれって云うんだろう、ええ?』
『ちがうよう』
ツネ子が云った。
『まァるくなァれ、ちきゅうをかこめだよう』
『おいらの仲間でちきゅうをかこめか、かァちゃんのぽんぽんまァるくなァれだろ』
『ちがうよう、おいらのなかまだよう』
じっと涙のたまった眼で電燈の光を見つめながら、ハルエは口で笑っていた。
兎公が行ってしまうと、ハルエは早々と表裏の戸を閉めてツネ子のそばに寝た。
外からの光も音も暗い部屋には通らなかった。

ハルエはなかなか眠つかないツネ子をなんべんも抱きしめて、いろいろな唱歌をうたってやった。矢田がいないときや、いてもどうにも折合のつかないようなときは、なおさらいとしいツネ子だった。
『ツネちゃん』
ハルエはしんみりと、心の底から娘の名を呼んだ。
『つねちゃん』
『はーいー』
ツネ子は、強く抱きしめられている苦しさと嬉しさとを、一緒に母の乳房に息ぶいた。
『母ちゃん』
『はーいー、ツネ子ちゃん、あんたお父ちゃんどこへ行ったか知ってるの』
『ちってる』
『どこへ行ったの』
『よそいったの』
『そうね』
ハルエは、鰻のように凍てついた小さな足を股のあたりに暖ためてやりながら、まともにツネ子の顔を見た。
『どうして帰らないんでしょうね、父ちゃんは』
『父ちゃん、よそいってんの』
『そうね』
ハルエはそういった小さな唇や、黄ばんだ頬を吸って、頭を撫でてやった。

『父ちゃんはね、もうウーンといくつも寝てから、おひげを伸して来るのよ』
『おちげのばして？』
『そう』
『……おみかん持って？』
『……そう……』
遠くで汽車のポーが鳴った。
ハルエは汽車の遠鳴りとかすかな地響きをおぼえつつ、状勢も――運動する人たちも、みんな自分の身のまわりを走って行くような気がした。その走って行くものの中にいて、自分だけは何時までもツネ子を抱いて眠っているのではないだろうか。
と、思うと、今夜からまた幾日かの間、あの狭苦しい、不潔な、不自由だらけな×××に、ジャケツのままで、のびのびと横になることも出来ない矢田が考えられた。じつに彼とは、いろいろにいがみ合ったものだと思った。けれども、一つの生命――そうしてまた、もう一つの生命をつくり上げている矢田にまでいがみ合わなければならなかった自分の、このひたむきな気持はいつか分ってもらえるに違いないと考えて慰めた。
もう汽車の音も聞えなかった。
間もなく、夜警の錫杖の音が窓の下を通りすぎた。
『ツネ子ちゃん』
も一度呼んでみた。けれどもうツネ子も返事しなかった

夜中だった。
ハルエはなんだか、コン、コンという音に目をさました。
ねまきの上から胸にのせていた手を、そっとツネ子の顔の方へやってみると、暖かい寝息が指の間に来た。
『よくねてる』
彼女はそっと起きしなに、抱くように上からかぶさって、前髪のさらつく額を接吻した。誰も来ないにしても便所に立ちたかったのだった。
すると、又、コン、コンという音がした。たしかに裏戸を叩いてる気配だった。なぜかハルエは、着物を着なおして行く余裕をもたなかった。心臓が早鐘のように鳴る……近づいて、コン、コンと打ちかえした。
『ぼく、イヌ、カイ』
『ああ……』
ハルエは、はっとして内鍵を引きぬいた。が、ねまきのまま、引き返すことも出来なかった。
『すみません。おそいからどうかと思ったが』
犬養は、青ざめた顔をほんのり血走らせて、呼吸づき荒く云った。後戸を閉めながら、
『矢田君は帰ったの？』
『帰らないんですよ、大会でやられたそうです』
『そうか、道理で会えなかったんだ。三十分も待ったが……

……』
『まあ』
ハルエは肩をすぼめて着物を重ねにもどって来た。後からカチリと内錠の降りる音がした。振りかえると、犬養は暗闇の中に立っていた。
『で、あの……』
電燈をつけて、座り直しながら、ハルエはぎこちなく呟いた。電燈をつけることもこんな場合どうかと思ったが。
果して、犬養は、途中××××××されたと云うのだった。
ハルエは此の×××××じゃないかとふッと考えた。が、犬養は、これから外へ出ることは××××だから、泊めてもらいたいと申し出た。
それから彼はのびのびと其処に横になって、恰度矢田がするようにツネ子の頭を撫でてやった。
『よく眠ってるね』
そして、やおら起き上って、
『かわいいだろうねえ……』とハルエに云った。
『それァもう……』
ハルエは、詫びるような調子で犬養の、ようよう青ざめきっている顔を見た。
矢田はやられ、犬養は逃げまわっている。××はムサントーに××××、組合同盟のダラ幹は、×・反の同志に撲られている。この逼迫した状態の中で、自分はただツネ子を誇っていいだろうか。その上、直きに産まなければならない体を持っている自分は——犬養の前ではますます自我的に、わがままに見えるのではないだろうか。
ハルエはそう考えると恥かしかった。
やがて犬養はハルエの敷いてやった三畳の寝床にもぐりこみながら、
『おやじさんやられて。困るでしょうねえ』
と云った。

電燈を消して、ツネ子の傍に入りながら、ハルエは考えた。
しかし、おやじがやられたからと云って、特別に困るというようには考えられなかった。ただ、さびしくてさびしくてたまらない気持と、そういう気持が、やがては女たるものの肉を削ぎ、骨をけずるような痛苦に自分を引き摺りこむんじゃなかろうかという不安だけは強かった。
物足らなさ、癪! そうだ、癪だった。
ハルエは足を伸しながら障子の陰につぶやいた。
『それァ困ると云えば困るようだけど、米櫃の方は倍もつんですよ矢田がいなければ——だけど、やっぱり、×××××××××、××ねえ!』
『だが……』
障子の陰から犬養の声が近づいた。『今度のことはいく

らか考えていたでしょう?』
『今度のことと云うと?』
『矢田君がやられたことについて』
『そうねえ、……心配はしていたんだけど、まさか、と思っていましたよ。とにかく合法組合なんだと思って』
『そうかなァ、——だが、もう、合法組合だからってちッとも油断はならんね、合法的なるは、結局合法的に動いてる連中に××××××××××——だからと云って始めから縮こまることばかり考えちゃ駄目だがね、注意だけはしょッちゅう要るね』
『そうでしょうね、わたしなんかもう、子供が生れてからってものはなんにも出来ないでいるから、ちっとも世の中の様子も運動の様子も分らないんだけど、今日なんか、なんかムサントーが××××へ押しかけたそうじゃないですか』
『ああ、社民党の青年部の連中ね、だがあれも尻を割って見れァ、赤木一派の国家社会主義を吹ッこまれた手合が駈り立てられてやったんだね、金輸出再禁止を要求してる××にとっては、一万や二万の××なんて問題じゃないですよ。奴らの一挙一動が狙うのは××××、××××ですよ。俺たちァ此の通りドル買い××をやっつけたぞッと云うような芝居に欺されるのは、月給の上り下りの割に少い、いわゆる殊勝な小市民か、お目出たい労働者だけ。奴らも今に本質の足を出すから見ててごらん』
『そうでしょうかねえ』
ハルエは、日ぐれの水道ばたで、おかみさんたちの云ってた言葉を思い出した。——どうせ撒くんなら、わしらンとこで撒いてくれれァいいに——そうしてそれを犬養に話してみた。犬養は笑いながら、
『それァそうだろうなァ』
と云い、それから、暫くしてつけ加えた。『——今度ァ夢みたいな××束じゃないものを、ハルエさん、ここいら中のおかみさんたちに撒くか』
ハルエはドキリと胸を打たれて、暗の中に笑いかけながら、撒けるかしら、と呟やいた。
『撒けるともさ。赤んぼを生んだらひとつ、やってみるんだな』
『そうねえ……』
ハルエは話しているうちに、だんだんとこだわらない親しみを覚えて聞いた。
『犬養さん、奥さんいるんでしょう』
『うム、どう見えるね』
『ありそうだわ、どうも……』
『そうかなァ、——そう見えるならそうしておこう』
『そうしておこうなんてハハハハハ』
ハルエは眼をつむった。

囚われた大地 抄

平田小六

家の中が息もつかれないほど煙っていた。
清司は灰に突きささった欅、猛烈に煙をあげて燻っている山毛欅の根株を激しくにわかに叩きつけた。囲炉裡の上につるしあげた飯鍋がクチクチ音を立てて飯は出来上っていた。

土間に転がった焚木はにわかの上でパッと火の子を散らしたと思うと、ころころと転がって、縁の下に入った。そしてそこで前よりもひどく煙を噴き出した。（糞！ 火事にでもなれ！）彼は腹立ちまぎれにそう思った。
「飯、まだだなァ、阿母！」
清司は寝床の様子に耳をすましてから叫んだ。
母親はあわてて奥から駈け出して来た。
「おつけも出来てらあ、さあ、食え、食え！」

母親はこのごろ、しょっちゅうおどおどしたり、物忘れをしたりすることが多くなったのを清司は感じていた。清司はそれが母親がすべての注意と関心を峯にとられているのだと思っていたから気にもとめていなかった。しかし母親の方では何か自分達が悪いことをしていて男達から絶えず非難されているように感じていたので、終始、謝まるような眼で清司達を見たり、二人で話しているところを男達に見られまいとしておどおどしているのであった。
「おそくなったべえ、さあ食え！」
母親はおどおどしながら支度し始めた。
彼が昼飯をワッパに詰めていると、母親は戸棚からみがき鰊を出して来て、ちょっと躊躇ってから彼に渡した。油のトロッとした新鰊であった。新鰊を昼飯のさいにすることなどはこれまでに一度もないことだったので、彼は躊躇ってそれを抛り出した。
「汝等、食え、我いらね！」
暗い家の中でほとんど手探りで纜匠（地下タビ）を履くと彼は急いで家を出た。
陽がやっと昇り初めていた。はるか遠く連峯の上の方が一直線に開け放されて、そのほかは灰色の雲が走りながら低く天に拡がっていた。無気味なほど真紅な朝焼けが、開け放たれた空のその一角だけを染め抜いていた。
彼は突然、四五日前の家の騒ぎを思い出した。無気味に赤い色の空に彼は怖気だってぞっと身顫いしながら、それ

に抗うように首を振った。――清司は峯が帰って来て、家の中が日増しに陰気になってゆくのを、それから遠ざかろう、遠ざかろうとして、眼や耳を蔽う気持で暮して来た。彼はほとんど毎晩、教員の木村のところで過していたのであった。木村は心から彼の一家に同情していて、絶えず清司を慰めたり励ましたりした。（もっと積積的に考えろ、ああいう悲惨なことに自分の気持を引き入れられても何にもならない）と木村は云った。清司はそういう木村に従って、家での出来事は気にかけないようにして、仕事に熱中した。

峯の騒ぎが起った時も清司は木村の二階で話していた時だった。

木村はその時ひどく沈んでいた――彼は眼鏡の底に例の憂わしげな瞳を輝かせながら、ここ数十日を費して改造に努力した木炭販売組合改造の計画が、全く失敗に終ったことを、清司に説明した。木村は自分の計画の失敗の主なる原因として、村の事情に疎かったこと――即ち、村民の既成の二大政党に対する過信（それは全く骨の髄まで浸み込んだと思われるほど頑強な対立であった）と、木炭輸出の時期をはっきりと認識していなかったことや、二人の対立する地主とそれに属する村民の対立などをはっきりと調べて居なかったことなどを挙げた後、到底彼の考えたような改造などは行わるべくもない不可能なことだと結論した。――そして熱心に清司も新潮会の若者達の中に入って、彼等と行動をともにするようにとすすめた。

「あの与作ッて奴、百姓仕事を嫌がって、東京の工場さ働きに行っていたんだ。一遍東京さ行っただらうんと働いて金儲けたらいかべえ、今頃無一文で村さ帰って来るだなんて、あの奴空ッ骨病みでねえべか？」

木村に与作のことを云われると、清司はそう云った。

「そうとは限らない、東京だってそう金儲けの出来るところではなし、第一働く仕事もない様子だ――俺も一遍与作に会って見るつもりだ」

木村達がこうした話をしている時だった。ひどく調子の変った女の長い叫び声が、ちらと彼等の耳に入った。と、続いて階下の店の戸が激しい音を立てて叫び声がはっきりと聞えた。

「清司ャ早くこらァー！」

清司と木村は、ただならぬ母親の叫び声で一しょに戸外へ飛び出した。

峯はその時もう紐から外されて床の上に寝かされていたが――家の中は板の間一面灰や垢が散らばっている中に、子供達の学校道具や汚れた着物などが乱雑にとりちらかっていた。――木村は一瞬何事が起ったのか気がつかなかった。「まだ温い、まだ温い！」と母親は叫びながら板の間の上で足ぶみをするような恰好で二人に喚きちらした。

二人は咄嗟に出来事を直覚して寝床に駈け上った。

「峯、峯！」

清司はひどく大きな声で叫びながら、峯の肩を抱えるようにしてゆすぶった。
木村が女の腕をとって見るとまだ脈が打っていた。
「生きてる、生きてる!」彼は叫んで、「峯、峯!」と同じように呼んだ。
「なんだって、汝まあ死ぬ気になったやだバ――」と母親は手放しで泣きながら寝床のまわりを廻って歩いた。医者が来るより先に近所の者達が集って、忽ちのうちに家の中にも、にわかにも、外の通りにまでも溢れてしまった。
その夜、すっかり興奮が去ってから、木村は自分の二階で清司にこう云った。「峯が死んだとすれば(死んだも同じだが)あれは自分で死んだのでなくて、誰かが手にかけて殺したんだと云っても間違えでねえべ、そうだべ?」と云った。
「うんにゃ、あったらもの死んでしまえばいんだ、ほんとに畜生!」と清司は憎々しげに木村に答えた。
清司は自分の心をそういうものからそむけようと必死に努力しているに拘らず、自分の運命を暗くするような事件が次々に起ってきて、どうしてもそれから抜け出られないのであった。――
(雨かなァ?)と清司は次第に低く雲の垂れてくる空を見上げながら考えた。
雨になれば、工事場の仕事は中止され、彼等の賃金が半減されるからであった。
村ではどこの家もみんな起きていて、仕事を始めていた。何処かで春気づいた馬が高く嘶いている声が聞えた。土の底からでも湧いて来るのかと思われる鈍い槌の音が、どこかの家の前を通った時響いて来た。それは藁を打っている音であった。
㊎の屋敷では、春気のついた馬の高い嘶きがして、母屋から離して建ててある厩から、今しも借子が馬を曳き出すところであった。その時清司は厩の底に高く積まれている堆肥へ鋭く眼を走らせた。堆肥はそこばかりでなく、厩の背後にも高く積まれているのであった。――彼のように馬を持たない小作人達はこうして馬に蹈ませた堆肥が羨ましかった。
「改竣さ行くだカ?」
清司の姿を見るとひどく癇高い声で借子の若者が遠くから叫んだ。「んーン」と彼は頷いて見せた。
「なんぼう、稼ぐバァ、田起してしまってすぐまた改竣かァ、札、蓄って仕方ながべえョ!」若者は大声で叫びながら威勢よく笑った。――若者は清司の働き者であることを賞めたのである。
「何が? 何もよ!」と彼も思わず薄笑いを浮べて独り言のように低い声で呟いた。
「この秋ァ、汝の祝言食ったもんだなァ」若者が彼を揶揄っている声が背後から聞えた。(「祝言を食う」という表現は

地方語では「俺も結婚式には呼ばれてゆくぞ」という意味)
仕事場に着いた時には、太陽が全く上っていた。空低く飛んでいた雲がいつの間にか姿を消して、高い空に散らばっている白い片雲が慌しく形を変えると見る間にそれが拡がって行った。
陽は真直ぐに潟の岸まで延びて来て、足もとの若い草の上をまんべんなく照らし出した。広々と展けた草原の輝きがまぶしく彼の眼を射た。さっぱりとした温気が彼の全身を包んだ——春は全く展かれてあった。——けれどもそれは少しも彼の心を引き立たせるものではなかった。反対に彼はそういうものとは無関係に暗い生活の中に立たされているように思った。彼は今しがた若者に揶揄われた祝言のことを思い出して見ても、心は縮こまってしまうばかりであった。(いいことは一つもない!)彼は心の中で呟いた。

ヅシーッと鈍い音をたてて、トロが腐った枕木を噛みながら停った。
「さァ!」
スコップを抛り出して二人は車の背後に廻った。
「ようサーノ、ヨッ!」
うん、と気合を揃えて、トロを河の方に傾けた。ドド……と車の中に満載した岩片が忽ち水の中に崩れて見えなくなると、赤く濁った泡が河の底から上って来た。土手の岸は一面泥泡と水垢で赤く染っていた。
「オーライ」
清司はトロをもとへもどすと、複線になっている線路を引きかえした。
堤防は河に沿うて十里も河上まで続いていた。津軽平野を流れる山木川の汎濫は、毎年収穫の期を狙って、何百年も津軽の百姓を苦しめたものであった。本州の最北端であるこの平野は、元来あまり豊饒な土地ではない上に、凶作と水害とに隔年に見舞われていた。津軽のドン百姓はこうした自然の制約を受けた上に、永い間津軽藩の支配下に置かれ、上は殿様から下は御家中(武家)の武士達に作米を納めていたのである。永い間どこの村でも作のいい年には、一俵二表と籾を天井に上げて置くことが、祖先が伝えた習慣となっていた。それと同時に水害や凶作で、餓鬼になった百姓の怖しい飢餓の云い伝えが残っていた。わけても河下に当る、十三湖畔のかなり広汎な地域は、不作や水害は例年の事で、百姓達は、自分達が天の晴曇を支配出来ないように、そういう災害も免れることの出来ないのが運命だと信じていた。
××代議士の不滅の功績と伝えられる岩木川改竣工事は、こうして大正×年議会を通過した。——即ちA村の百姓達が百姓を放擲して潟を渡り、海を越えて出稼ぎする改竣とはこれであった。
埋立や、築堤に用いられる岩片は、海岸伝いに二里も離

れた海岸から運ばれた。艀を引いた発動機船のポンポンがやっと陽の上る頃から潟の上に響いた。
――その日は果して土砂降りの大雨となった。「朝間のテカピカ、後家のケタクワタ」は怖るべきものの雙壁とされていた。清司がその朝に見た、いやに雲切れのいい太陽は、それから四時間後には大雷雨となるひと時の御機嫌であったのだ――

「さあ、来たどウ!」
怖しく黒い密雲が、無気味な手を下の方に延ばしたと見ると、潟も海も一面にさッと銀灰色に変って、海は早くも鱗のような逆浪を見せ始めていた。一番悪い東風が出た証拠であった。風の音とも、海鳴りとも思われる巨大な騒音が人夫達の耳を驚かした。瞬間跳び上るほど唐突な稲妻が、鶴ハシやスコップを持った百姓達を襲うた。
「そら、来た!」
百姓達は一斉に番小屋めがけて駆け出した。
清司は艀からトロに石を運んでいた。雨と雷が一しょだった。大粒の雨がバラバラと顔に当ってから彼は仕事をやめた。(また半日代無しにした!)と彼は考えた。
「近けえカミナリだなァ!」艀から上って来た与作が、持った鶴ハシを遠くへ抛り出しながら云った。
「んーン」
東の番小屋には二十人近い百姓が集っていた。彼等はてんでに煙管を抜いたり、ワッパに詰めた昼飯を開いたりしながら、次第に勢を増して来る雨足を怨めしそうに睨んでいた。百姓達は何か互に罵り合ったり話したりしたが、屋根のトタンを打つ雨の音で、二尺も離れれば何か意味がとれなかった。
雨は無数に魚が踊っているように激しく眼の前の土を蹴って、赤石の土手に忽ち溝を掘って流れた。
「いい雨だ、僚ァ苗代水足りなくてらだモ」
歳とった百姓がその雨足を見つめながら独りで呟いた。
「この雨! ちょっこら晴れねえド!」と誰かが叫んだ。
「勘定もらって、行くべえがヨ?」
事務所の時計は十一時を廻っていた。人夫達は硝子戸の中を顧みながら動き出した。
発動機の機関士をしている兵一が、濡れ鼠になって一番後から駆け込んで来た。色の褪せた菜葉服がべったり肉に吸い着いているのを彼はおどけた恰好で摘んで見せた。
「褌まで浸み込んだでヤ!」
「せがれ風引くド!」
誰かが合槌を打つのが聞えた。
ワハハ……と近所のものが笑い出した。
兵一は服を拡げて巫山戯て歩きながら事務所の中を覗いた。
「やっと十二時になった、大の男、一日丸潰しで六十銭か」
彼は時計を見てから百姓達の方に顔を向けて相変らず股を拡げながら歩いた。

「なあに、兵一だら一両もとるべもョ！」
「なんの一両だもんか、七十銭だべ！」
木の札を窓に差し出す音が起った。先頭の方で札と金の引換えが始まっていた。と忽ち、百姓達の間に動揺が起った。
「五十銭だでヤ！」と意外な呟きの声が聞えた。
「何？　五十銭？」
「六十銭でねえがョ！」
「それだから無理だ！」
騒ぎは忽ち全部の百姓の間に伝わった。
清司は窓のところへ詰め寄って行った。
「どうして半日分払われねえだ、時計見れ、十二時でねえがョ！」
現場監督の木本が傍の硝子戸を開けて顔を出した。その顔には百姓を莫迦にした薄笑いが浮んでいた。彼は警官のようにピンと耳の立った帽子に、金ボタンの洋服を着ていて、腕を両傍に垂れて歩くので百姓達は平常木本を蟹と呼んでいた。
「時間で見てるだ、笛の鳴らねえうちに仕事やめたでないか！」
「俺ァだら仕事していたド、此処さ来たの十一時半だでヤ！」
清司は真直に監督の前に迫って行った。監督は唾を跳ね飛ばして叫んでいる清司を、そり身になって睨みつけた。

「こっちでちゃんと勘定しとる！」と監督は急に別な言葉になって叱りつけるように叫んだ。
「いや違う！」
その時ひどく嗄れた声が清司の耳もとで呶鳴った。与作が持前の小皺の多い眼尻をピンと緊張させて監督の前に寄って来たのであった。
「俺ァ達雨降っても仕事やめねえだド、おめえ様、時間に笛吹いただか？　俺ァ音聞かねえだ！」
「吹いた！」と監督が瞳を浮かせて周章てて叫んだ。
「吹かねえ、吹かねえ！」百姓達が一斉に叫び出した。
「吹かねえだ、おめえ一番先に逃げたでねえがョ」
後にいた百姓達の間に笑い声があがった。
「さあ、皆んな、五十銭欲しいか、六十銭欲しいか？」
与作が急に後向きになると笑いながら叫んだ。
「それだら、六十銭だ！」
「六十銭！」
「一両！」
またも笑い声があがった。
「五十銭にまけて置け！」
「まあ仕方ねえべョ、五十銭にまけて置け！」
自分を嘲るような笑い声が静まると、そういう声が多くなった。
「俺ァだらまけられねえ！」と清司は背後を振向きながら叫んだ。

「俺ァちゃんと十一時半まで働いていただド、まける理窟ねえだ！」
監督はいくらか蒼くなった頬に無理に薄笑を浮かべながら黙っていた。清司、与作、兵一がそこに立っていた。
百姓はどしどし札と金を引換えて、幾らか小降りになった雨の中へ出て行った。
清司と与作はその金を受取る時、明日から来なくともいいという断りと一しょに六十銭受取った。
「彼奴等、アタマはねてるだべョ」と二人が雨の中に出た時清司が云った。
「んーン、そうだ、皆んな俺ァみたいに頑張ったら、おら達も馘にならねがったべえもナ」
与作は口を開けてアッハハと笑った。
清司が与作と口をきいたのはこの日が始めてだった。

（一九三三年一一月—三四年五月「文化集団」）

村の次男

和田伝

一

信平の生涯の希望を賭けたような甲種合格が、籤のがれでふいになってしまったのだから、彼はその日からふてて三日も寝込んでしまった。
耕地では陽炎が燃えだし、百姓は泡をくって野良を始める時だったが、信平がそうしてふて寝をきめても、兄の清一は何も言わず嫂とつれだって野良へ出た。後家を通してきたきかぬ母親さえ、この彼の失望には不覚にも涙を見せてしまったので、彼女もまた何とも言い出しにくかった。だから信平は三日も寝つづけた。
ところで、信平の軍隊志願は、決して今日の軍事熱の所産ではなかった。それもないとは言わぬが、根本は、生涯の進路をさだめるために、即ち生きるために彼は軍隊を選

んだのだった。
彼は畑から掘り出された里芋のように泥だらけな百姓だ。百姓こそは生涯を打込んで悔いない稼業である筈だった。しかし、田も畑ももたぬ百姓というものが想像できるだろうか？
都会が、田舎の膨脹し過剰する労働力を、磁石のような力で吸い寄せた時代は信平は知らなかった。この都会の膨脹力が歇み、田舎がその過剰する労働力のはけ口を塞がれて身悶えをはじめた時代に少年時を過した信平がともかく物心がついた時は、時代はもう一廻転して、さきに呑みとられた田舎の労働人口は、飽食した都会の胃の腑から吐瀉物のように再び田舎に吐きかえされている最中だった。都会はその華やかな舗道の上から、目ざわりになる失業者の姿を田舎に送りとどけた。田舎はその逆流人口を養わなければならなかった。一反の田が血の出るような争いで二人にも三人にも分けて耕やされた。
信平のうちは小作人だった。同じく次男だった亡くなった父親は、兄から米三俵貰って分家した時から、一人で八反の田と五反の畑を小作していた。いまも信平たちはこの一町三反の土地を耕作して一家をたてている。しかし、それは兄の清一が嗣いでつくる土地で、兄一家のためにそれだけの土地は一坪も欠けてはならないのだ。
分家して一家を起そうにも信平には一握の小作地も分けて貰える余地がなかった。といって新らたに小作田が借りられるというあては全然なかった。父親の若い時代のことは信平には遠い世界のおとぎばなしだ。父親は峠の向うの今という大地主のところに八年も作男をして忠実に勤めあげた。旦那は彼をひどく可愛がって、彼が分家して一家を起すために欲しいと言うだけ小作地を分けてくれ、嫁を、即ち信平たちの母親を見つけてめあわせてくれた。家をたてるとなると山の松や杉を伐って行けと言って貰った。そのため一生旦那様と呼び、向うからは呼び捨てにされるという封建主義を、信平はいまなおその方を今日のなまなかの近代主義よりも選びたいとさえ思うことがある。（しかし、そうした封建主義が今日田舎で清算されたのは、小作人の自覚によるのではなく、実に地主の功利主義による方が多いのだ。今日人を呼び捨てにする地主は殆んどなくなり、代わりに旦那様と呼ばれることを彼等は好まない。）
再び信平の軍隊志願だが、実はこれにはよい実物の手本もあるのだ。父親の弟の巳之吉叔父で、三男の叔父は、甲種合格で兵隊になると上等兵になり、深い考えもなく序でに再役志願をして軍曹になった。そして三百円の恩給取りになってから彼は村へ帰ったが、帰ると軍隊で覚えた電気の知識で、村のはずれに電力の精米製粉場をたて、粉屋になった。それがひどくあたって、恩給は丸残りになるという盛かり方で、今日では兄弟中一番の身上になっているのだった。（過ぐる農村恐慌の最中などは、彼の三百円の恩給は、一貫一円なにがしの繭を売らなければならない人々

の憎しみさえ含んだ羨望を集めて、××をされかかったことさえあつた。
巳之吉叔父は、深い考えでやったこともないその途方もなくあたった前半生の経路を、今度は計画的にそのまま息子にも辿らせようとした。彼は一人息子の数男が兵隊にとられると、同じように再役志願をさせたのだった。数男はいま伍長で、熱河の守備隊で勤めているから、恩給年限は父親のより遥かに短縮される筈だった。これもあたった。
信平の兵隊志願も、だから勿論再役志願をして、恩給まで勤めあげることにあった。そこまでゆけば先は何とでもなると彼は思ったので。………
信平はしかし四日目には自分から起きた。息子を信頼して、母親はついに一言も言いにくいことを言わないですんだ。起きだして悪い顔もしないで野良着を着たのが却って可哀そうになり、そばへ寄って行って、
——野良をやるかや？
と母親はやさしく声をかけた。
——うむ、三日寝てさばさばしちゃった。
と、信平がけろりとした顔で笑ったので、彼女は急に調子づいて
——そうだ。兵隊へ行っても………おしまいだ。それはそうと今夜は一つぼた餅でも祝おうじゃないか。
信平が鋤を担いで清一たちが行っている桑畑へ出て行くと、母親は急いでそのぼた餅をこしらえる用意にかかった。小豆と糯米をはかり出してくると、すぐに小豆を煮て餡をこしらえにかかった。
彼女の息子への信頼はやっぱり裏切られなかった。信平はやがて今度は一本やりに小作田を手に入れることを心掛けるだろうと彼女は思った。そのためなら彼女だってやれるだけはやる。清一だってやってくれる。菊だって今の様子はそのつもりになって心掛けてくれるのだ。菊は信平の姉で、母親たちのもとの主人仝へ女中奉公に出してある一人娘だ。仝の田があいたらそれはこっちに借りられよう、娘にそれを心掛けていてくれるようにとは固く言ってあった。
母親は今夜はこのぼた餅で本家の次郎もよぼうかと思った。実は信平が寝込むと、すぐに彼女は次郎に言ってやって遊びに来させようかとも考えたのだった。信平一人がそうなのではない。本家の次郎も八方塞がりの小作人の次男なのだった。次郎はもう廿七にもなるのだが、分家をもたてるあても聟にゆくあてもなくているのだった。（ただ次郎は信平とちがって、それでもわたくしの小作田が二反あって、三年前から小作していた。彼はその小作田を、定日傭に出る地主のところで、三年も小作料を怠納した小作人から奪いとったのだが、その三年分の怠納米をなしくずしにおさめるという条件を、しかもこちらから持込んで、それでやっと借りられたのだった。）

次郎なぞ呼ばなくてよかったといまは母親は思った。が、それだけに今夜はぜひとも呼びたいと思うのだった。で仕事の合間を見て彼女は本家へ一走りした。
次郎は、だから丁度いい時刻にやって来た。
——おめでとう。
次郎は声をかけて這入った。こういう場合にも、反対に入営が確定した場合にも、この同じ挨拶をするのがこの辺の慣例だった。
——ああ三日ふてて寝たらさばさばしちゃった。
信平は元気に返した。
——何も、ふてることはねえな。兵隊になったたって必らず叔父きのようになれると決るもんかな。再志願はこの節あばかに多いと言うからな。
——それや多い筈だとも。
——だからさ、こうなったら機敏に立廻って、田を手に入れるように心掛けるんだ。
そのことになると次郎はひどく先輩顔になって見せた。そのことでは清一だって頭はあがらなかった。彼も自分で手に入れたという土地は一かけらもなかったから。
——そいつあ運さ、それに……
信平は今夜そんな話は面白くなかったので迯らそうとすると、
——運だから機敏に立廻らなけりゃつかめねえんだ。
と、次郎は迯らされまいとした。

だから信平は今度は少し意地にかかって、
——それに……人の怠納まで持たせられるんじゃな、おら考える。
とはずして笑ったが、次郎は笑うどころではなく、慌てて口のなかのものを呑落して、
——今時そんなやにっこい考えじゃ、田は絶対に手に入らねえな。人の怠納と思うから何だけど、権利金だと思うんだ。何だって、手に入れるにゃただじゃできねえさ。……
……駄目だ、そんなやにっこい頭じゃ……
——ところでお前のその怠納分は今年でもう納め終るのかな?
少し針を刺すような言い方で清一が言った。
——まだだ。この暮れで三回目だから、来年は愈々皆済みになるんだ。
次郎はそれを少しのひけ目も見せずに、むしろ終りの方は誇らしげになりさえして言った。
信平はその気勢に押されて、勝目がなくなったのを感じて少し呆れた。次郎のその怠納分というのは三年分の十五俵を特に十俵に地主がまけてくれたのを、四年に分納するという契約だった。
——権利金だと思っておれはこっちからそれを言い出したんだ。あとで考えるとよかったと思うな。
と、次郎は、こっちからそれを言い出したというので向うも人情だ、三分の一はだからこそまけて貰えたのだと言

った。そして他に彼と同じような方法で田を手に入れた者で、彼のようにまけて貰えなかった例を並べかけたが、それは信平も知っているので、舌打ちをして、
――チェッ！　おかしな時世になったもんだ！
――まったくだ。何しろ籤のがれでふて寝をするってんだからな。
と、次郎は嗤われていなかった。
――だけど次郎さんも二反ばかりのわたくし田じゃ仕様がないね。分家をもったてるも何もできやしないし……
母親がその時真顔をあげて言うと、
――まったくだ。話にならないよ。だからおれは一本やりに、地主さんとこの怠納さがしをやるね。
次郎はすっかり調子を変えていた。
――そうしなけりゃ田は絶対にないかな。
信平も急に真顔になっていた。
――ないとも。絶対にないな。だからおれは怠納さがしときめているんだ。どう考えたってほかにはねえ。それともあるか？
――次郎さん、こうなると遠い他村の田へだって出だしてゆくんだね。
母親が言うと、次郎はそれを自分にすすめられたことと早合点して、
――ところが、おれはどうも他村の地主さんとはあんまり縁がねえんでな。弱ってる。

母親はそれをきくと、そんなつもりで言ったのでもなかったのに、何となく安堵したような気軽さを覚えた。……次郎は今の旦那様は知らないんだ。母親にとって、いつのまにか、慰め手に呼んだ筈の次郎は、信平の競争相手のようなものになって考えられるのだった。彼女はそれに気づいてうろたえた。

二

ところが、或朝信平へ来た手紙の差出人は今にいる姉の菊だった。
母親はそれを見ると躍りあがった。そしてお昼まで待ちきれないで、手紙を掴んで桑畑へ駈けつけた。
清一も鋤を離してやって来て信平を囲んだが、封を切る信平の泥だらけの手が少し顫えたのを母親は見て、彼女も心が顫えた。
――田があるとか？
信平は返事もしないで読入ったが、見るうちに顔色が解けて来た。
清一が肩越しに覗込んで、
――こいつは素晴しい！
母親は溜息にして出して、
――田があるとな？
――よし！　今夜おら行ってみる。

信平は手紙から離した眼を、峠の方に向けた。すると、みんなそのあとを追って峠を見た。雑木山の斜面をなだらかにのばした小さな峠、木の芽をふくらましたその斜面は、ふわっと白っぽく浮いて、裾の方では耕地の陽炎が騒いでいた。

その峠の向うから幸運がだしぬけに転げて来た。今でこの春は怠納の小作田の整理をするという。菊が知らせてきた鮫の井というところの三反の田なら、信平の村からそんなに遠くはなかった。その田の小作人は去年で三年も怠納しているので、今度は愈々整理をするというのだった。菊はそれを主人たちのちょっとした会話から竊みきいたと言ってきた。まだ誰にということはきまっていないのだから、早い方がいいと言ってある。

――今夜？

清一は首をかしげてみて、

――今夜といわず、すぐに行け。一時も早いがいいんだ。

母親もそれを主張したので、信平は母親と一緒にすぐもどった。

母親がすぐに小ざっぱりした野良着を出してきて、信平はそれに着換えると地下足袋もいいのに穿きかえた。

――いいか、怠納の分は引受けると言えよ。清一もそう言ってたに。

うしろから母親は言い添えた。

信平は毎年小作米を[illegible]て行くので、旦那に向っては言うだけのことは言える近しさはあったから、裏口から廻って茶の間の縁側に落ちついて手が突けた。

勝手で割烹着をきた姉がひょいと彼の方を見て、眼が一寸合ったが、彼女は慌てて逸らしてくるりと後向きになった。あたしからきいたと言っては駄目、そのしぐさはそう言っていた。

信平は縁側に腰をかけて、長火鉢のわきの旦那に会えた。彼は兵隊が愈々駄目になったので今後はみっちり百姓をするつもりだと言うと、そのあとは楽にすらすら言えた。

――そいでこんな方じゃ遠くてとても駄目だろうがな？

と旦那はねっから身も入れないでそっけなく言った。が信平は、そんな贅沢を言っている場合ではない。一里や一里半のところなら三十分も早起をすればよいのだと言った。

すると旦那は今度はいくらか身を入れた顔つきで信平を見返した。その拍子に、薄暗い部屋で旦那のきれいに刈ったしらがちかちか明滅して、一寸鋭い顔だったが、信平はきつい気になってそれを受止めた。

――そいでも鮫の井あたりならつくれるか。

と、旦那が顔を引いて火鉢のなかへ独言にして言うと、信平はそれに追縋って、

――鮫の井にあるのでしょうか？

――ないこともないが……どうかなあ。

しかし、それも殆んどききとれない独言だった。

旦那は怠納のことを言おうとしているのだと信平は思った。すると彼は逃らさずもしか怠納でもあるのだったらそれは引受けると言った。

と、じろりと見返してきた旦那の顔は険しく信平を見据えた。が、彼が懸命にそれを受止めているとたちまちもやもやと皺を散らして、

——お前が怠納したんじゃないわい。

——でもわたしの方ではそれは権利だと思えばよろしいんです。

——ばかな。わしは初めてきくな。

旦那はてんで相手にならなかった。

信平は何となく気が軽くなったと思ったが、しかし、かえってそのため先がつづかなくなった。では旦那は何を言うつもりなのだろう？　鮫の井にあることはあるが……それがどうだというのだ？　……信平は弱ったが、せっかくここまで漕ぎついたのだと思って、その鮫の井の田をつくらせて貰えないかと頼んだ。

——そいつがなあ……

旦那の顔は思ったより慎重だったが、

——何だな、その田は市川佐市というのがつくっているんだが、お前がじかにその佐市に掛合ってくれて引取るなら、わしの方はそれでよいがな。

と云った。

信平は一寸浮立ちかけたが、やがて思案にくれた顔になって、その顔のもってゆきばに困った。

——佐市てのはな、人間はおとなしい、まあ愚直の方だ。遅子持で、子供がまだ金にならねえので、貧乏の真盛りらしい。……

何年怠納しているときくと、三年だと言って、

——暮れには来年の春蚕で入れる、秋になると秋蚕で入れる、秋になると暮に一度に入れるで、泣いてくる。

と、旦那は笑って見せた。

信平も笑いかけたが、笑っていられないことに気づいた。そうだ。旦那はなぜじかに佐市に言い渡すことをしないで信平にそれをさせようとするのだろう？　それを考えて、彼はきつい気になって、旦那から一言その佐市に言い渡して貰えないものだろうかと言った。

——なぜだ？　お前いやか？

旦那はつよい語勢には似合わずくずれた顔になって言った。その顔に縋って、彼は、その方がみちだと思うと言うと、

——お前もいやなんだな？　……実はわしもいやなんだ。だからお前に押しつけるんだ。

と言って旦那は笑ったが、

——田を取上げるなあわしはいやでな。わしの代になってから、まだ田を取上げたことは一度もないんだ。わしは強い奴にゃ負けんが弱い奴にゃ勝てんでな。それで弱る。

な、その田をつくりたけれや佐市にはお前が言え。
そして、信平がまだ思案にあまった顔でいると、
——な、いいように言え。どんなふうに言ってもよいわ。
旦那は劬わるような声になっていた。
で、とうとうそういうことになって信平は今の裏門を出た。
すると、門を出た彼のうしろから菊が追いついて来て、
——ね、しっかりやっておいでよ。三反だよ。
と、白い割烹着の下から太い指を三本出して振りながら言った。

三

帰ると、清一は信平の話を終りまできかないで、ではその佐市のところへ寄ってきたのかと訊ねた。
信平が首を横に振ると母親も険しい顔で、なぜ廻って来なかったと窘めた。
だから信平はお昼をすますとそのなりでまた佐市のところへ出掛けて行った。
佐市の村は、峠の裾を廻って、その峠と小さな雑木山に挟まれたせまい耕地を前にして峠の裾の櫟林のなかに散っている、殆んど小作人ばかりのような部落だった。
信平はそこには縁がなく不案内だったが、佐市の家はきくとすぐにわかった。

道から離れて、まばらな櫟林に囲まれた佐市の家は、二間と三間のひどいあばら家で、障子もない家のなかはよれよれの莫蓙が敷いてあって、隅に夜具のようなものが積んであるのが見えた。壁は土が落ちている部分の方が多いらしく、蚕座紙が貼ってあるのが西に廻った日光に透けていた。土間で娘らしい女が藁火を焚いているまわりに、子供たちががやがやなりたかって顔を寄せていたので、見ると鍋のなかの芋か何かを棒の先で競って突刺しているのだった。
佐市は見えなかった。庭の隅には藁で囲んだ小屋があって、そこが納屋で、堆肥や肥桶などが取乱して詰っていた。佐市はそこにも見えなかった。そのほかは庭の隅に堆肥の山ができているだけで、鶏一羽見えなかった。
信平は暫く庭先で足踏をしたが、思い返して引返すと、二三軒先の道に沿った寄込み易そうな家を見つけて這入った。彼はそこで佐市に就て少しばかり知っておきたいと思った。
家にはおかみさんがいて、見知らぬ者の訪問に驚いた顔もしないで、
——じゃ、縁談のことででも来なすったか？
と問返した。咄嗟に信平はその気になって、その通り縁談のことで来たと答えた。
するとおかみさんは、蛹色のお茶をくんできて、自分も上框のところに来て坐った。そして、佐市のところではい

まが貧乏の絶頂だが、人間はみんな実直で、たちは悪くはないのだと言った。

信平はえらいことになったと苦笑いしながら、

——貧乏の絶頂だってね？

佐市はひどく遅子持で、四十八だというに子供は、その娘の二十はいいとして、男子供は十二を頭に十一、九つ、八つの四人だ。あんまり繁く産んだせいで女房は死に、働き手のないところへ食い手ばかり多いのだったからたまらなかった。しかし娘はそれだけに働き者だと褒めかかったが、それは信平には用がないので、

——それでいま百姓はどのくらいやっているかね？

佐市は稼ぐには稼ぐが達者ではない上に食い手ばかり多いのだから、一頃は一町二三反はやって三十俵近くの年貢米は威勢よく曳き出したものだったがとおかみさんは言って、

——いまじゃ、何だね、悪いことを言うようだが年貢も滞るし……だから田も取上げられるというしね……

信平は乗り出して、

——それで田は何反ぐらいやってるね？

——二三反だろうね。だからこの冬なんか町へ日傭に出ていたね。それゃひでえ暮しさ。芋ばかり食ってるっていうな。見たことはねえが、養鶏の餌にするカナダ麦で芋粥を煮てるなんて話だが……腹がへるって子供が泣くと、佐ヤさんは自分では水を飲んで野良へ行くって話だ。……それあ子煩悩でなあ……。

かみさんはその辺で、事は縁談であることに気付いたように、翻るように話をかえして今度は、しかしその貧乏もいまが絶頂で、じきに楽になるから末はたのしみだと言った。何故かときくと、その四人の子供を奉公に出して給金を取込ませて見なとかみさんは答えて、今度は食い手の方が一人だ。あと二三年で、佐市は坐っていても米の飯が食えるだ。

——だからわたしは誰にもここんとこをよく話しとくんでさ。

かみさんは、少し前道路工夫だという男と佐市の娘との縁談が始まったとかで、先方の者がうちへ聞込みに来たと言って、信平もその方の者かと訊ねたので、彼はそうだと答えてそこを出た。

そこを出るとすぐ佐市の家の前だったが、信平はそこから再び佐市の家へはどうしても行けなかった。ただ覗きながら前を素通りして、明日でもいいんだと独言に言って、峠の裾を廻って村の方へ戻った。

あまり話が素晴し過ぎると思ったが、やっと見つかりかけた田はこんなところにあった。三反の田。信平にとって火の中へ飛び込んででも手に入れたい、入れなければならぬたった三反の田。そのためには食い盛りの四人の子供の口から、飼料のカナダ麦の芋粥さえとりあげてしまわなければならないのだ。

巳之吉叔父の精米機の音をききながら村に入ると、道ばたの桑畑に次郎がいて、信平を見つけて呼びとめた。
——何処へ？　えらく萎れているじゃねえか？　え？
次郎が一人だったたので、信平は急に勢込んで畑のなかへ寄り込んだ。
——少し萎れたよ。
と言って畑境の芝土堤にどっかり腰を下した。次郎も鋤を離して寄ってきた。
——何が？
信平は、母親や清一によりも次郎に、そうだ、怠納さがしを一本やりにやるという次郎にこそ、このことはとっくりときかしてやりにやりたいと思った。そこで彼はいまきいてきた佐市の話をきかせ、そしてどうしてもそこへ寄込むことができなかったことを話した。
するど次郎ははげしく舌打をして、
——駄目だ！
と玄能で叩くように言った。信平がきっと振返ると、次郎は険しい顔でそれを受けて、
——何てお前はやにっこい頭なんだ？
とまた叩くように言った。
——じゃお前だったらどうする？
——おれだったら？　知れたことよ。きっぱり言い渡してくる。それで明日からはどしどし一番うないをはじめちまうな。

——おれにゃそんな不人情なことはできん！　貧乏人同士で……
すると次郎は今度はあははははと笑って、
——不人情だって？　……誰が？　……おれがかい？
と言ってまた彼はあはははははと笑った。
——おいッ、不人情なのは誰だい？　……一千万石の過剰米をかかえて米穀統制法の作付反別法のってご談議してる一方に、欠食児童は相変らず村にいっぱいだ。おれたちは米をつくることが仕事だが米が食えねえで麦や芋を食ってらあ。佐市の餓鬼から飼料のカナダ麦の芋粥までひったくらなきゃこっちが生きてゆかれねえというのに、田地だけでもまだ四百万町歩の可耕面積に雑木がしゃあしゃあと茂っていらあ。おい！　不人情なのは誰だ？
次郎は打って変った調子を出したが、すぐにその調子を変えると、
——信ちゃん、おれだってね、好きで怠納さがしをして田を手に入れたいと血眼になっているんじゃねえよ。だがそうしなけれゃ生きてゆかれねえじゃねえか？　………じや、どうすれゃいいんだ？
と、少しばかり声を顫わしてきた。信平はそれに答える言葉がなくて、
——おらやっぱり軍隊へ出られたらよかったと思う。……数ちゃんはうまくやってる。
と、彼もつい同じような声になって、巳之吉叔父の一人

息子の数男のことを言った。
すると、次郎は三たび声を変えて、
——それはそうと、今夜きっとその佐市のところへ行けよ。いいか？
と、ひったてるように言った。
信平はうんと答えて起ちあがった。が、その実のいらない返事が次郎にはもの足りなかったか、
——三反の田が手に入るんだ！　馬鹿め！
と、声をたてて笑った。
家に帰ると、みんな野良から三時のおやつにあがってきていた。
——おらやっぱり軍隊へ出られたらよかった。
信平は先廻りをしてそう言いながら這入った。
——何んだ？　駄目だったのけ？
母親が慌てて芋を呑落して訊ねた。
——数ちゃんが羨しいよ。
そこで信平は、いま一度佐市の話をしてきかせなければならなかった。
すると、清一はやにわに起ちあがって、
——よし！　じゃおれが行ってきてやる！
きつい顔で言った。母親がつづいて、
——そうだ。信平でない方がいい。今の使いの者だと言うんだから信平でない方がいいわ。それで信平は明日からでも一番うないを始めちまえ。
——それがいい、おれが今夜行って、きっぱり言い渡してくる。
その通り、清一は晩飯がすむとすぐに小ざっぱりした野良着に着かえた。
そして、出掛けようとしていると、そこへ表から次郎の声がして、
——信ちゃんは行ったかい？
次郎が入ってきた。
清一は、すっかり身仕度をしたなりで起ったまま、信平でなしに彼が代りにいま行くところだと言うと、
——お前が？　……なるほど、それがいい。
次郎は安心したような顔を見せて帰って行った。

四

清一は信平が思ったより早く帰ってきた。
信平は、兄がきっぱり話をつけてきてくれればその方がいいと思うことの方が多かったが、しかし、そう思うことがどうしても非道なことのように思われる気持もそばにあった。だから、彼は母親のように炉端から起ちあがって兄を迎えなかった。
佐市はやっぱり留守だったと言いながら清一はあがってきたが、そのむっちりした顔色が信平には読みとれるような気がした。

――それでどうだった？
母親が乗出してきくと、だから娘に言い渡してきたと清一は答えた。
――それで？
――どうもこうもあるか。今の使の者がきっぱり言い渡してきたんじゃねえか。
それから信平のいる炉の方へ寄ってきながら、娘はおやじが帰るまで待ってくれと言うんだが会っても仕様がないと言って帰ってきたと彼は言った。
――兄さんどんな気持だ？
と信平は片手で榾火を搔き起しながら言った。
――どんな？
清一はきっと構えるように顔を締めたが、中途で思いとどまったようにくずして、
――少々まいった！
と、おっぽり出すように言った。
母親はそれで安心してしまったものか、或は清一が話してきかせる佐市の家のことをそばできいているのがいやだったのか、座敷の方へ行って嫁のそばで縫物をひろげた。
清一は懐から胡蝶の新しい箱を出して見せて、煙草屋へ寄って少しばかりきいてきたと言った。その鮫の井の三反の田は、どこの地主からも取上げられてしまった末最後まで今の畈こぼしにあずかっていた田だったが、佐市自身も、いつまでただでつくっていられるとは思っていないと、そんなことを自分でいっていたと煙草屋で話したと言った。
翌朝は、だから、信平はすぐ今へ出掛けて行って、小作証書を入れるつもりでいた。それで朝飯を急いで食べていると、今の使の者だという若い者がやってきて、信平にすぐに来てくれるようにと旦那の伝言だと言って帰った。
母親は、信平の不安な顔には気づかず、
――信平、印をもって行け。きっと証書のことだわ。
と言いながら印を紙に包んで渡した。
今へ行く路々信平の足はよく地面を踏まなかった。希望と失望とが一足踏むたびに赭土の中で彼の足を小突き廻わすような気持を感じさせた。希望は印刷された小作証書に書入れをして印を捺そうとする。が片方では、そのためとりあげられるカナダ麦の芋粥をどうするのだと挑みかかるのだ。そうして峠の頂に達した頃には、彼には自分が空から落ちた雨の粒のように、どちらかへ、こっち側か向う側かどちらに落ちるにしても、それはもう自分の意志ではないのだと締めるような気持にさえなっていた。
そんな気持で彼は今の裏門をくぐった。ところが、茶の間の縁側に手を突いた時、長火鉢のふちから振向いた旦那の視線に会って、希望はあたふたと逃げ腰をあげた。
旦那は信平を見ると、前のように遠くから火鉢のわきで話しかけようとはしないで、自分で蒲団を持って縁側まで出てきた。

菊がお茶をそこへ運んできたが弟の顔は見なかった。
——ゆうべ佐市に泣込まれちゃってな。
旦那はこれも前とは違って親しい口をきいた。
佐市が泣込んできたのであった。
——泣込んでな、それがお前、ほんとうに、おういおうい声をあげて、涙をぼろぼろ流して、そいつを拳固で拭きながら、まるでお前五つ六つの子供だったたな。お前にも見せたかった。
旦那はその時一寸菊のいる方を覗いて、
——菊は、お前そこから見ていたな。
信平はさっぱりと諦めよく無言ではっきりとうなずいて見せた。
旦那はそれを見ると、立膝になりながら菊をそこへ呼び寄せて、きょうは出かける用事があるから、ゆっくりして行くといい。ゆうべ佐市の話は菊からきくといい。田の方は心にかけておくと言いおいて奥へ這入って行った。
主人の後姿を見送ってから、菊が何か言いだしそうに唇を動かしたのを見て、信平はその泣込の話から逃げるように、
——おらやっぱり軍隊へ出られたらよかったと思う。数ちゃんはうまくやっているとつくづく思うな。
と言った。
——それやそうね。数ちゃんのようになれたらそれに越したことはなかったけれど……
菊は調子を合わせかけたが、急に、思いだしたようにはずんで、
——そうそう、知っている？ 数ちゃんてば、愈々熱河で最前線に廻ったってね。知っている？
——ほんとか？ 誰が言った？
初耳だったので信平はきっとなった。
——ゆうべね、叔父さんがお団子の粉を届けに来て旦那様に話してたわ。昨日便りがあったんだと。
——じゃ、奴はじきに軍曹だ。
——そうかしら？
——そうとも。軍曹になって帰るよ。……そうなれや大威張で一人立ちができる！
——一人立ちになんかならなくともいい身分だに……
——親子で恩給をとりながら稼ぐなんて……。また××でもされなきゃいい。……おれはほんとにばかな籤をひいちゃった。
菊はそうなるとそんな話は言い出すのではなかったという顔色になって、
——それはそうと田の方は旦那様が心にかけておくと言われるから、あてにしておいでよ。ねえ、佐市っていう人のなんか無理矢理にひったくらなくともいいわ。あんなのをひったくったら化けて出られる。
——ほんとだ。化けて出られるとも！
すなおに心を変えて信平は笑った。そして、その顔で彼

は起ちあがると、
――おッ母さんがっかりするだろうねえ？
と、菊が急に沈んだ。
信平はわざわざ懐から紙にくるんだ印を出して見せて、
――証書にこいつを捺せだとさ……
舌でも出して見せるつもりで言ったのに、不覚にも信平は喉をつまらせた。

五

母親はがっかりするだろう。帰り路信平の頭にはそのことばかりがあった。が、佐市は泣いて拝んできたのだ。「マンママンマ」と言って泣く子供に、食わせないで寝ろとは鬼になっても言えぬのだ。それを聞けば母親もあきらめるだろう。

《怠納あさりは懲々だ！……》誰もいないのに声を出して言った。考えてみるまでもないのだ。この土地飢饉に年貢を滞らせば結果はどうなるくらいのことは誰にだってわかる。怠納どころか、悪い米を納めたり、雨だ風だで泣き言を言いに行ったりしただけでもいつ田がよそへ飛んでゆかないとも限らなかった。そのなかで怠納をするのだ。納めないのではないのだ。鬼になっても納められないのだ。その怠納あさりなんか懲々だ。

しかし、次郎は怠納あさりをやるという。そいつを一本やりにやってゆくというが。不人情なのは誰だと次郎は唆呵をきった。そうだ。次郎だって好きで怠納あさりをするんではない。そしてお前はやにっこいと次郎は嗤った。

そうしなけれゃ次男野郎なんか生きてゆかれないのではないか？　だから信平だって、今朝懐の紙にくるんだ印を握りしめて、そいつを小作証書に捺すことをあれほど希望したのだ。

《怠納あさりが懲々なら、ほかにどうするんだ？……》再び、信平は声に出して言った。今の旦那が心掛けておくというのがあてになるだろうか？　旦那は三年怠納した者でも泣込んでくれれば田をとりあげはしないのだ。……

その時桑畑の向うに家が見え出した。すると今度は、待っている母親の落胆も一緒になって落ちかかってきそうだったので、彼は少しやけになって路を走った。

家に駈込むと、ところが、母親の姿は見えないで、納戸で、嫂が箪笥の前で着物や帯をひろげていた。

――途で誰にも会わなかった？

嫂は慌てて出てきたが、顔色がただでなかった。

――じゃあ、まだ知らないのね？　……数ちゃんが……

――何あんだ、知ってるよ。戦線に廻ったんだってな。

奴はじきに軍曹だ。

嫂は呆れたような顔になって、

――何言ってるの。数ちゃん、ね、戦死！　今朝陸軍省から電報がきてね……

信平は棒立ちに立竦んだが、母親も清一もすぐに巳之吉叔父のところへ駈けつけて行ったと聞いて、飛んで行った。

だからこのふってわいたような大きな事件のかげに鮫の井の田のことは溺れてしまったかに見えた。

信平が駈けつけた時には、巳之吉叔父の家ではもう祭壇ができて、数男の伍長の軍服姿の写真が飾られて、その前に巳之吉叔父や叔母や本家の伯父伯母やその長男や次郎などがごっちゃに坐っていた。信平の母親も清一もいて、母親が彼を手招いてなかに加えた。

しかし母親は今から戻った信平に、鮫の井の田の結果を訊ねようとしなかった。清一もそのことは言い出さなかった。

そのことを誰も言い出さなかったので、信平はたすかったと思った。ほっとして、できるならこのだしぬけな大きな悲しみのために、そんなことはその場の夢であったとみんな思うようになって欲しかった。鮫の井の田も、佐市も、カナダ麦の芋粥も、消えてなくなれ！　彼はそれをからだのなかへ叫び込んだ。

夜はそのままでみんなで通夜をした。陸軍省からの電報は簡単に古北口で名誉の戦死とだけしか知らせてこなかったので、人々の話はしぜん昨日着いたという数男の手紙を足がかりとしてのびてゆくのだったが、その手紙はもう人々の手から手に渡ったあと再び巳之吉叔父のところに返されてあったのを、信平は読ませてもらった。陣中で忙しく書かれた手短かな乱筆だったが、そこには数男の腹を割った本心が摑み出されてあったのを信平は見た。この戦争では必らず功をたてて軍曹になって凱旋するつもりだ。断じて伍長では帰らぬ。必らず軍曹の資格を身につけて帰る。そして、帰ったらトラックを一台買入れて、運輸業をはじめるつもりだと言っていた。信平は錐を刺込まれたように応えた。そして識らぬまに声を出して唸った。今でついいましがた姉と話してきたように、一人立ちになる必要もない数男のこれが本心だった。故人の事志とちがった不幸を悲しむ心よりも、信平には、この時ほど彼の籤のがれの口惜しさに沁みわたったことはなかった。

その口惜しさが、頭の隅っこに残っている鮫の井の佐市のことを、はげしい憎悪と侮蔑で追いたてた。

ききつけて村の人々が続々と見えた。くやみをのべただけで帰る者は殆んどなく、みんな通夜の仲間入りをしにあがったので、巳之吉叔父の家は店先から奥まで村の人たちで詰った。そして、こういう人々の集りのなかで、彼等の素朴ないくさばなしのなかで、佐市も鮫の井の田もそんなものは消えてなくなっちまえ！　と信平は思いつづけた。

十二時を過ぎると再び身うちの者だけになって、故人に就いてのはなしも一段落のかたちだったが、母親は田のことは訊ねなかった。

その夜から母親は巳之吉叔父の家にい残って、家へは廻りつかなかった。清一もやはり叔父のところでたち働いた。

だから信平は翌日は一人で野良をやった。鮫の井の田のことはまだそのままだったけれど、母親は夕方一寸帰った時、葬式の相談がまとまらぬなぞと話してきかせただけで、また気忙しげに出掛けてしまった。清一も夜一寸帰って、村長が見えて、村葬になる模様だから、葬式は骨が届いてから出すことになったなぞと言ってきかせたが、田のことは訊ねないでまた出掛けて行った。

しかし、その翌日の夜になって、母親は清一と一緒に帰ってきたが、信平を見ると、

――こういうことがあるからな……

と言った。

きつく反駁しようと信平が振向いた拍子に、

――信平、おととい田の方は証書を入れてきたろうな？

と彼に期待の一刻も与えないでそれを言った。

ところが、このだしぬけが却ってよかった。

――ふむ、鮫の井の田も、佐市ッァンも、みんな糞喰えだ！

と、おっぽり出すように信平は言ってのけた。そしてまるで人のことでもあったように、今での話を母親と兄にしてきかせて、

――××も何んだけれどこんなのもあんまりぞっとしねえな。

と、笑って見せた。

人ごとのようにからからと笑ってしまって、今度こそこれで鮫の井の田も、佐市もおしまいだ！　消えてうせろ！と信平は思った。そして一寸のうのうした気持を味わった。その気持のなかへ溶けて、母親の落胆した顔へは眼を向けなかった。

六

数男の葬式は骨がとどいてから村葬で行われるということにきまって、巳之吉叔父のところの人寄せは一段落ついたかたちだったが、母親は相変らず、巳之吉叔父のところへ行っていて、滅多に家に廻りつかなかった。

信平には合点がゆかなかったので、

――何がそんなに用があるんだ？

と、或夜だいぶ更けてから帰った母親に、彼は寝床のなかから言いかけた。が母親はただ、

――だってお父ッアンと二人分だからな。

と言っただけだった。

が、その次の日も野良から昼飯に帰ってみると母親は家にいなかった。

――一体おッ母さんは何が用があるんだ？

信平は兄にそう訊ねてみたが、清一もそれを知っていな

いらしかった。
ところが、或晩夜更けてから帰ると母親は、信平と清一の間に割込んで、きちんと坐って膝の上に手を置いた。
母親はそういう坐り方は、大事なことを言い出す時でなければしなかったので、信平も清一もすぐに真面目な聴き手になって構えた。
——巳之さんところでは、後継に養子を貰うことにきまったらしいがな……やっと巳之さんの方の身うちから貰うことになったそうだ。
と母親は話してきかせた。
巳之吉叔父のところでは、後継を互いに身うちから入れたくて、夫婦の間に、ひいては雙方の親戚の間に、むずかしいいきさつがあったが、結局叔父の身うちから入れることにきまったのだという。そのかわりその後継の嫁は叔母の方の身うちを入れるのだという。
——それで？　誰を入れると？
清一がそれを訊ねかけた時、母親の眼が険しく彼をたしなめるように瞬いたのを信平は見た。
——巳之さんの身うちというからな。
母親はそのくせ独言のようにそう言った。
叔父の方の身うちというと、本家の次郎と信平と、ほかに叔父の二人の妹たちの次男三男たちが三人あった。
——信平、お前どうだ？　え？
清一が言いかけたのを母親は制して、
——何を言う？　入りたいと言ってあすこへ入れられるか？　あすこへ入れる者は、……いまどきよくよくの果報者だ。なんぼ言い出したたって、それをこっちから言われはしねえ……
信平を入れたい！　母親の顔はしかしはっきりそう言っていた。で清一はつけつけと、
——だが、公平に言って信平がいい。信平が一番いい。叔父さんの一番近い身うちと言えば次郎と信平だが、次郎より信平がいいさ。商売屋なんだから、これからその商売を覚えなくちゃならん。次郎じゃ年がゆきすぎてる。
——商売を覚えるにはなあ、若えに越したことはねえなあ……
母親の声はひどくどきついていた。
——そうとも！　それゃどう考えたって信平がいい。
清一は確信を調子に出して言った。
——次郎さんもいい若い衆だが……
言いかけて母親はつづけて言う言葉につまった。再び、彼女の信平にとって、今度ははっきりと次郎は優勢な競争の相手になっているということを母親は知っていた。
信平はしかし、それを望むことが恥かしかった。母親の言う通り、巳之吉叔父のところへ後継に入れたら途方もない果報者だと彼も思った。それだけにそんな途方もない果報に自分の手が届くなぞということが彼には考えられなかった。そうだ。そんな途方もなさすぎる果報は、捉えよう

とする方がまちがいだと思った。そんな果報どころか、甲種合格も駄目だった。どころか怠納の小作田三反手に入れる幸運さえ信平の手からは逃げてしまったのだ。そうだ。果報を待つのはもういやだと信平は思った。果報ばなしは懲々だ。しかも、これもやっぱり人のうちの不幸のゆえに湧いた幸運だった。

鮫の井の田のことは、貧乏人同士でもそれでも他人同士の争いだったが、今度のは兄弟同士従兄弟同士が、片方の大きな不幸ゆえに湧いた幸運をめがけて争うのだった。一方の不幸をこっちの幸にして摑みとるのだ。

だから信平は、そのことはなるべく考えないことにして、一人でせっせと野良をやった。

しかし、母親が昼となく夜となく叔父のところへばかり行きたがるのは信平にはよくその気持がわかった。彼にはそのため母親がいじらしくさえ思えて、彼女が家に戻った時なぞ遠くからその顔色を竊って見た。ただそのことだけが、巳之吉叔父の後継のはなしに就いて信平がはらった注意だった。

ところが或夜のこと夜半になって戻ってきた時の母親の顔の萎れ方ったらなかった。まるで何か大きな不幸のなかをくぐりぬけて、やっと辿りついてきたような、すっかり蒼ずんだ、皺ばかりけわしく彫れたその顔を見て、信平は夜具の間から半分出した顔をその場に伏せた。

居所を狭められた心臓が反撥して踠くように、むやみに響かせて悸ち出したのに彼は気づいたが、その時母親は枕もとにきちんと坐って、

――信平、とうとう負けだ！　……本家の次郎さんが入ることにきまったわ…

と溜息といっしょに言った。

言い終るか終らないうちに、

――次郎が？

納戸から清一が夜具をかむって出てきた。

――そうよ。次郎さんにきまった。とうとう、信平、負けだ！

母親はそれから冷たい炉端へ寄って行って、まるで凍ったものをあたためでもするように、そのなかへ深く顔を落とした。

――次郎さんが？

信平は言いながら寄って行って、暗い炉のなかへマッチを摺った。次郎が！　信平はそうなるということをはっきりとも考えなかったけれど、いまそう言われてみると、やっぱりなるようになったという気持が先になった。彼はその幸運が自分のところへ転げてくるなどと考えるのも恥かしかったが、さりとてそれが誰のところへゆくかということとも身にしみては考えなかったことにいま気がついた。それほどそれは自分からは遠くのものに考えられたのだと気がついた。

――信平が入れたらと思ってなあ……いろいろつくして

みたけれど……本家でも一生懸命だったし……

母親は燃えだした炉のなかへまた独言を言った。

――ほんとに次郎ときまっちゃったんか？

清一が少し荒だって訊ねた。

――ああ、きまっちゃったわ。もう動きっこねえ。

信平はあてにもしていなかったかわりに、はげしくがっかりもしなかった。また、次郎を羨ましく思うということもなかった。却ってそれがいかにも次郎が掴みそうな幸運だと思った。その時信平のはらのなかにあたまをもちあげてきたものは、ほかのものではなく、実に次郎のわたくし田、その二反の小作田のことだった。次郎は巳之吉叔父のところの後継に入る。そして粉屋になるのだ。百姓は廃業するのだ。だとすると、その次郎のわたくし田なら、それこそもう間違っこなしに自分の方へ廻して貰えるということを信平は考えていた。それはこっちから言いだす必要さえないだろう。次郎は向うからそれを言ってくれるに相違ないと思った。二反の小作田、信平にとって、これで充分思いがけない幸運だった。そして、これは人の不幸のゆえに湧いた自分の幸運ではないんだと思うと、彼の脳天にまでしみるこころよさを感じはじめた。

すると、その時、母親は急に顔をあげて、

――信平、鮫の井の田は口惜しかったな！　あれさえ手に入ってたら……

と信平をまともに見つめて言った。

――鮫の井の田だって？……なぜだ？

信平は急に勢込んだ。

――そうよ。鮫の井の田よ。口惜しいともなんとも！　あれさえ手に入ってたら、次郎に負けやしなかったんだ！

母親は唇を顫わしていた。

――なにッ？

清一はきっとなって顔を寄せたのに母親は相変らず信平の顔へ、

――次郎よりか信平の方が、年若いし、商売を覚えるには若えに越したことはねえんだし、な、巳之さんもそれはそう思ってるんだけれど……信平とちがって次郎さんは小作田をもってるからな！　それがとうとうものを言ったわ！　……巳之さんも根が百姓だ。小作田をもっていることが、とうとうはなしをそうきめちゃった！……根が百姓だってことよ。巳之さんはな、年とってこういう不幸に遭うのも、つまりは百姓に生れて鍬棒を捨てちゃった酬いなんだと悟ったと言ってな、ゆくゆくは商売は若いものにさせて、隠居気分になって巳之さんは田がつくりてえんだとよ？……鮫の井ならここからは遠いが巳之さんところからはすぐ近くだ！……………

母親の頬が濡れだした。（了）

（一九三四年三月「改造」）

白い壁

本庄陸男

一

とうとう癇癪をおこしてしまった母親は、削りかけのコルクをいきなり畳に投げつけて「野郎を……」と喚くのであった。

「いめいめしいこの餓鬼やあ、何たら学校々々だ。この雨が見えねえか！　今日は休め！」

「あたいは学校い行くんだ」

富次は狭い台所ににげこんでそう口答えをした。暫く彼はそこでごとごといわせていたが、やがて破れた障子の間からするりと出て来て蒼ぐろい顔をにやりとさせた――

「なあおっ母あ、お弁当があんのに休まれっかい。あたいは雨なんておっかなくねえや」

「ええっ！　この地震っ子――」と母親は憎悪をこめて呶鳴ってみたが、直ぐにそれをあきらめて今度は嫌味をならべだした。親が子に向って――と思いながらも彼女は、云わずに居られないのである。

「んじゃあ富次、お前は学校の子になっちゃって二度と帰って来んな」母親はおろおろしはじめた伜の汚い顔をじっと睨め「なあ富次、お前の小汚ねえその面を見た日から、こんな苦労がおっかぶさって来たんだから……よお、帰らなくなりゃあ何ぼせいせいするもんだか！」

そう云われると子供は今までの勇気が忽ち挫け、そこにきょとんと突っ立ってしまった。

雨が夜明けからどしゃ降りであることは知っていたが、その時刻が来ると同時に、子供は嫌な仕事をさっさと投げ出した。朝っぱらから無理強いされるコルク削りの内職手伝いは、いい加減に子供の心をくさくささせた。そして富次は学校に行きたいと一途に考えるのであった。別に勉強がしたいなどと云う殊勝な心ではなかった。ただこの陰気くさい長屋よりも、曠々とした学校が百層倍も居心地よかったのだ。年中寝ている病気の父親と、コルク削りで死にもの狂いになっている母親の喧嘩には、たまらないと思う漠然とした気持で――しかし母親の剣幕が一番おそろしく、富次は紐のちぎれた鞄を小脇にしっかり押え、こんな場合仕方なしに父親を視た。床の上に長くなっている父親は、いつか学校で見た磔されるキリストみたいなひげ面で、眼ばかり異様に蒼光からせていた。富次はぎょろりと

動いたその眼にあわてて視線を壁に移した。するとそこには、医薬に頼れない病人が神仏に頼るならわし通りに、不動明王の絵が貼りつけてあった。
「学校なんて行ったって――」と母親の言葉が急にやさしくなった。「なあ富次、損じることはあっても一銭だって貰えるんじゃねえからよ、それよかお母あの仕事を手伝うもんだ、な、そしたらこんだ浅草へ連れてくからよ」
「小学校も出てねえじゃ、今時、小僧にも出られねえからよ」と父親が口を挟むのであった。富次はほっとして母親を視た。彼女は外方を向いてへんと云う風に鼻をしかめた。
「なあ、俺が丈夫になれば何とかしるからよ、子供に罪は無えんだし、学校にだけは出してやれよ」
「芝居みてえな口は聞き飽きたよ、え？　お前さんも早く何とか片附くことだ」
母親はそう云って亭主を一瞥し、富次に向っては一喝した。
「さっさと行っちまえ、このいやな餓鬼やあ――」
柏原富次は右手に鞄を抱え、左手は傘の柄にからまして、しぶいている雨の中にとび出した。大通りは河になって流れていた。雨がっぱにくるまった辻の交通巡査が、学校がよいの子供を自動車や電車から守り、子供達の敬礼ににこにこしてみせた。
城砦型に建てられた鉄筋コンクリートの小学校は、雨の日は見事に出水する下町の中で、いやに目立って聳えていた。この一帯は一昔前、震災でぺろり焼け頽れた。生き残った住民たちはあたふた舞い戻ったのであるが、彼等は前よりも一層危かしい家に住まねばならなかった。ただ小学校だけは――流石に政府の仕事だけあって、実に堂々と出来あがった。例えばそれは、こんな雨の日でも、子供達の視力を傷めないためにその採光設備を誇ったりした。それで内部の壁と云う壁はまっ白く塗られていた。無数の子供等が今朝も喚きあってこの建物に吸いこまれる。傘をふりまわしたり、ゴム引マントを敲きつけたり、――とに角昇降口は彼等の叫喚に震えるのであった。子供達はそうすることが何故か嬉しいのだ。然し教員は反対に益々陰気な顔をしてこの騒ぎを看ていた。朝っぱらから疲れ切ったように、ズボンのポケットに両手を突っ張ってぽかんとしていた。駈けこんで来た子供はそれにぶっつかって、はっとする。そしてそこから急に取り澄まし白い壁の教室にのろのろはいって行くのであった。
この建物の直接的な管理は、いかに義務教育を効果あらしめたか――という責任とともに、すべて月俸二百円也のそこの校長の肩にかかっていた。師範学校を出ただけの彼が、長い年月かかって捷ち得たこの地位は、彼の白髪をうすくし、常に後手を組まなければ腕が曲って見える危険さえ伴う、それほどの努力の結果であった。それを思うと彼は肩が凝り荷が重いのである。だが彼も亦最後の望みにこの帝都有数の校長として、せめては最高俸二百四十円也に

辿りつきたい、それには何をさて措いても——と彼は頭をふりふり考えるのであった——先ず第一に校舎を清浄に生命のある限り保たねばならぬ。市会議員は云うまでもなく、教育畑の視学でさえ最初に気づくのはこの校舎である、そしてあとで、しかも楯の両面の如く教育上の新施設を器用に取り入れること——。校長は生徒を集める朝礼には決ってそれを訓諭した。

「皆さん、皆さんは先生の云いつけをまことによく守るよい生徒であり、又よい日本人でありますぞ。そこで日本の国をよくしようとする皆さんは、忘れずにこの学校をよくしようとします。この学校はたいへん綺麗だと賞められる——嬉しいですね、それは皆さんが一生懸命に掃除をするからだ、掃除の好きなよい生徒がこんなに沢山いるんですからには、いいですか？　この学校が建った時よりも却ってますます綺麗になるわけでしょう？　わかりますなあ……おお、わかった人は手をあげなさい。」講堂にあふれている子供たちの手が一斉に彼等の頭上に揺めきだした。校長は眼尻の皺を深めてそっと周囲の壁を一瞥する。子供たちの顔もそれにつれて素早く一廻転する。その時老朽に近いこの校長は、たあいもなく満足の微笑を見せ、一きわ声を高くして「よろしい——」と叫んだ。

「それでは皆さん、手を下して、よし……」

「しかし——」と校長は教員室の前で立ち停った。陰気くさくぞろぞろ歩いていた教員達ははっとして校長の顔を見かえる。すると彼はちょこちょこと杉本に追いついて君——とその肩をたたいた。「君の組は特別に注意して呉れんと困るわい、手だけは人真似にはいはいとあげとったが、どだい君の受持っとる低能組はわしの話を聞いとりゃせなんだ。」

午前九時かっきりになると、昇降口の扉はたった一枚だけをくぐりのように半びらきにして、あとは全部使丁の手で閉じられてしまった。おくれかけた子供は恐怖の色を浮べてとびこんで来た。柏原富次は鞄と傘と、緒の切れた泥下駄を一しょくたに胸にかかえた。泥だらけのたたきを水洗いしていた使丁がいまいましげに舌打ちしてそれに呶鳴りつけた、「馬鹿野郎……そ、その泥足は何でえ……」ぴくりと富次は驚くのであるが、その時彼はえり頸を掴まえられて既に足洗い場に運ばれていた。「それ、それ——」と使丁はがなりつける。「まだ踵にいっぺえくっついてるじゃねえか——何だ、手前の脚は？　月に一ぺん位はお湯にへえってんのか？」

「あたいはね、今日ね、お弁当を持って来たんだよ」と富次は胸にたたみきれない喜びを露骨にあらわして、平然と使丁に話しかけた。「うそだと思うんだら、見せてやろうか？　え？」

図体の大きな使丁は、子供を荷物のように造作なく上り口に運びそこに立っている受持教師に外方を向いて話しかけた。

「いやはや、杉本さん、呆れけえった子供ですねえ——この餓鬼あ……」
　杉本は生温い両手の掌で、冷えた富次の頬を挾んだ。子供は上眼づかいに怖る怖るそれを見あげる。それを見あげる尖った顎から頬にかけてまっ黒い鬚がかぶさり、眼鏡の奥で黒い瞳が見つめていた。富次は漸くそれが自分の受持教師であることに気づいた。すると彼は紫色の歯ぐきを出してにこりと笑い、早速喋りだした。
「あたいわね、先生——お弁当持って来たよ。あたいん家ではね、昨日……だか何日だか、区役所からこんなにお米を買って来てさ、そいでねえ、ねえ先生——」
「そうか——」と杉本は答え、まだまだ何か話したげな子供を促して階段を登るのであった。
「またあとで聞くからな、みんなが教室で待ちくたびれてんだろうよ」
　そんな単純な喜びを全身に感じてじっとして居られない様な子供を、四十名近く杉本は受け持っていた。尋常四年生にもなって——だからそれは教育上の新施設として低能児学級に編制されたのである。彼等もまたせめては普通児並みの成績に近よらせたいために、それからそれが駄目ならば可能な限り職業教育を受けさせたいために——それはいい、けれども選りわけられたこの一群は邪魔なもの、不必要なものとして刻印を受けるに過ぎないのではないか、或は収拾出来ないものを収拾させようとして、実は……

……ぶち毀そうと目論まれたのではないか——杉本は何とかしてこの子供たちも人並みにしたいと奮闘した、ここ数ヵ月の無駄な努力を痛々しく思い出してぶるんと頭をふりまわした。
　杉本は何も特別に低能教育の抱負や手腕を持っていたわけではなかった。彼にとってその仕事は偶然のようにあたえられた。誰だって楽な仕事の上で自分の成績をあげたいに決っている。だから学年始めが近づくと……………
……………こそこそ校長の私宅を訪れた。そんな行動はおくびにも出さず、日が来ると彼等は受持学級ふり当ての発表を聞かされるのであった。この決定に異論を申立てることは許されませんぞ——と、教員の咽喉笛をにぎっている校長が高飛車に申し渡し、——と云うのは——と一言註釈をつける——これは私の権限に属することでありまして私としては日常平素、諸君から受ける種々なる特質と、それぞれの学級の特質とを充分慎重に考慮研究した上の決定であります。——学問をしたい、そうしたならばと一途に思い詰めた少年の杉本がいた、官費の師範学校でさえも（彼はそのさえもに力を入れて考える）知人の好意に泣き縋らねばならぬ家庭であった。喘息病みの父親と二人の小さな妹、それらの生活が母親だけにかかっていた。仕事といわれるかどうか知らないが、母親は早朝からのふき豆売り、そして夕方はうどんの玉を商った。手拭をかぶった小柄の女が、汚れた手車をひき、鈴をならして露路から露地に消え

て行く。――そんな家に大きくなった杉本は、時偶の弁当に有頂天のよろこびを語るこの子供が、ひりひりと胸にひびいて来た。今になって杉本は、この低能組の受持に恰好した自分を発見した。すると発育不全の富次が自分の肉体の一部分みたいにいとおしくなり、濡れた着物のままぐいと脇の下にひきよせて二階三階と駈けあがるのであった。

三

月曜朝の第一時間目には、どの教室にも一様に修身科がおかれていた。びっしり詰った十三坪何勺かの四角な教室からは、たからかな教育勅語の斉唱が廊下に溢れ出た。躾のいい組と云われている子供たちの声が、いたって単調なリズムを刻みながらそれを繰りかえした――

しかし、三階のとっつきにある杉本の教室は盲目滅法な騒音に湧きかえっていた。彼等は教師が現われても一向平気であった。机の上では箒を構えた小さな剣士が、さあ来いと眼玉をむき、大河内伝次郎だぞ、さあさあさあ、と八方を睨みまわした。「やい手前、斬られたのにどうして死なねえんだ」と机の上の大河内は足をふみ鳴らしていきなり下にいる子供を殴りつけた。「痛えッ！」「痛かったら死ね、死んだ真似でもしろ」「何にいッ」と捕手が机の上に跳ね上って大河内を追っかけはじめた。塗板の下に集まった一かたまりは、べい独楽一つのために殴り合いをはじめ、塗板拭きがけしとばされると同時に、濛々たる白墨の粉の煙幕を立てていた。

教室のうしろ側にもぞもぞしていた年かさの子供達が、教師の前ではどうしなければならぬかを漸く思い出すのであった。彼等は先ず習慣的に「叱っ、叱っ」と口を鳴らし、果ては「馬鹿野郎ッ」とどなって警告した。「先生が来てんぞ、先生が……」その警告によって児童はやっと教師の存在をみとめ、それがそうなっているのだったら仕方がないと云う風にのろのろ自分の席に戻った。それから長いことかかって教室が変に静まる、すると子供たちは杉本の顔を見つめてにたにた笑いだした。

「先生――修身だあ」とひとりの子供が突然一声叫んだ。

杉本は教卓の傍に椅子を寄らせて、頬杖をつき、一わたり子供を見わたした。窓は豊富に仕切られ白い壁は光線を反射しているのであるから、子供たちのさまざまな顔は空ん洞に明るすぎ、却って重苦しく重なっているのだった。口を開けっ放しにして天井ばかり見ているもの、眼をしかめたり閉じたりぐるぐるまわしたりしているもの、洟汁を絶えず舌の先で舐っているもの――一応は正面を向いて、何か教師の云い出すことを待ち設けている恰好はしていたが、それは何年かの学校生活で養われた一つの習慣であった。低能児はそれに相応しくぽかんとそうしている。教師もまたぽかんとして子供の顔を一眸におさめていた。

「先生――」と思いだしてまた一人が叫ぶのであった、
「さ、早く修身をやろうよ、先生」
「よろしい、では修身!」
それを聞くと子供たちはがたがた机の蓋を鳴らした。彼等は薄っぺらなその教科書をひきずり出す。そして中には足をふみならして何か喜ばしそうに、修身だあ修身だあと節をつけたり口笛を吹いたりした。
杉本は教案簿をぱたりと開くと、そこには、勤勉という題下に三井某の燈心行商がこまごまと書きこまれてあり、「きんべんは成功のもとい」という格言まで書きこまれてあった。杉本は前の日いろいろな参考書を検べてその教材を準備した。だが今、こんながらん洞の子供の顔を視て彼は次第にその努力が情なくなり、最後には…………………………、教案簿を閉じてしまう。すると一人の子供がにょっきり棒立ちになった。
「先生!」と彼は叫んで股倉を押えた。「おしっこ、よう、ちょっ、ちょっ、ちょ……まかれてしまうよう」
一人の子供の尿意が忽ちすべての子供に感染した。「先生、あたいも」「あっ、まけそうだ」「やらせなきゃ垂れ流しちまうから」「あたいもだあ」そう口々に連呼しながら彼等は廊下に駈け出した。杉本の耳はがんがん遠くなり咽喉はかすれた。もはや成り行きに委せるより外はなかった。杉本の耳はがんがん遠くなり咽喉はかすれた。
彼はぼんやり突っ立っていた。
図体の大きい使丁が物音に駭いて凄い剣幕を見せながら跳びこんで来る、彼は気短かに呶鳴り続けた。この教室の騒々しさがコンクリートの壁を徹して他の課業を妨害するというのである。がなっていた使丁は、自分の声に駭いて急に静まった教室を見まわし、ちょっと気まずげに云い足した――「何ですぜ杉本さん、校長さんが湯気をたててんだからねえ――」
杉本はその間に、やっぱり今日の修身も講談にしようと決心した。修身々々と云ってよろこぶ子供たちもまた、それによって「あとはこの次」になっていた講談を思い浮べていた。
「先生――大久保彦ぜえ門!」と子供が催促した。「よし、彦左衛門」と杉本は答える。それを合図に子供たちは居ずまいを正し、ごくりと唾をのみこむ音が聞えるのであった。教師はもうやけくそになって、御前試合の一くさりに手振り身振りまで加える。その最高潮に達したところで、席の真中にいた一人の子供が、再びぴょこんと立ちあがった。
「先生え……ちょ、ちょっ、ちょっと」
「何だ? 元木――」
しかも元木武夫はもう自分の席からとび出して来て、ぬうっと教師の鼻の下に突立つのであった。そうした突飛な行動に杉本は馴れきっていた。彼は元木を無視して更に話をつづけ出した。所在なくなったその子供は教卓に凭れかかった。そこから暫く、がくがくと動いている教師の顎を

眺め、眺めているうちに彼のだらしない唇のすみからは涎が垂れ落ちた。元木武夫は首をおとした、そして教卓にたまった涎の海に指をつっこみ出鱈目な絵を描き、その絵がまだ描きあがらぬうちにハタと自分の疑問に思い当った。もはや矢も楯もたまらなくなるのであった。「先生!」と一際髙らかに叫んで教師の腰にぱっとしがみ着いた。元木は「大久保彦ぜえ門のお内儀さんは意地悪るばばあだったのかい」と一気に叫びつづけ、「ようよう、よう」とその腰骨を揺ぶるのであった。途端に杉本は一足身体を退き子供の真面目くさった質問を避けようとした。すると元木武夫はくわっと逆上し、どがんと教師の股倉めがけて飛込んで来た。

「よう——先生ッ」

ふいを喰った杉本は、腰を曲げて両手で股倉を蔽い、瞬間とまった呼吸を呼び戻そうとした。そのおかしな恰好に元木武夫はまたもや自分の質問を忘れ、眼尻を下げてひとりげらげら笑いつづけていた。

教室が珍らしくしーんと静まるのであった。四十の並んだ顔が、今はこの話に異常な興味をそそられていた。杉本は自分の不ざまな恰好に気がついて子供たちを見まわした。が彼等の顔付きは、ただこの教師から出る返答を求めているに過ぎなかった。杉本は恥しそうに顔が火照って来た。奇妙な性格の元木武夫にぽかんと浮んだであろう大久保彦左衛門の女房が、何か物わかりの鈍いとされている児童の心をひどく打ったのである。劇しく光る四十対の瞳に射すくめられて、解答をあたえ得ない教師の顔はやがて次第に蒼ざめて来た。すると元木武夫は、堰を突然断つようにげらげらまた笑い始める。教室の緊張がどっと破れてしまった。その騒音に包まれて杉本は、何故かほっと胸の悶えを吐き出すのであった。

窓ぎわにいた塚原が今度は立ちあがった。年中きょろきょろしている彼は、「注意散漫」という特性が刻印されていた。だが彼はその時、瞬間的な義憤に口から泡をとばして元木武夫に喰ってかかった。

「元木の馬鹿野郎——大久保彦ぜえもんにお内儀さんなんどいるもんけえ、すっこんでろ、やい元木!」それだけ喚きとばした塚原の注意は、次の瞬間さっと窓外の雨に向き替っていた。梧桐の広葉が眼の下に見え、灰色にくすんだ運動場は雨の底にしぶいていた。そして再び教師にその眼を移したのであるが、その時、塚原義夫のきょとんとした黒い瞳には珍らしく泪が浮んでいるのであった。

「先生え、あたいん家にはね、あたいの父(ちゃん)にはお内儀さんがいねえんだよ」

「ば、ば、ばかだなあ——お前」と元木が教師の下から喚いて両手を自分の鼻先に泳がし劇しく否定した。「馬鹿ッ! あたいん家のお内儀さんなんて鬼婆あだい。塚原あ——大人はみんなお内儀さんがあってな、そんでお前大人は、な、お内儀さんばっか可愛がってんだぞお……」

塚原は自分の瞼をぐいと釣りあげ「野郎――」と罵りかえした、「八幡さまに手前のことを呪ってやるから、おぼえてろお……」

順序も連絡もなくその子供等の考はぷくぷくと浮びあがった。しかしその恐ろしく馬鹿げた喚きの底には、彼等の生活がのぞいていた。だから低能児なんだと云うが、杉本は彼等と暮しているうちに泡の底が見透けて来て、「止めろ、止めないか！」と強圧することが出来ないのだ。もしこの時廊下側の座席から久慈恵介が持ち前の金切声をふり絞って、「うるせえ、止めやがれ！」と飛び出さなければ、二人の子は殴合いを始めそうにいきまきだしたのである。珍らしく小ざっぱりした小倉服の久慈は、かわいい眼をくりくり動かして「あのねえ――先生え」とつづけるのであった。「あのね、先生、元木の奴はね、あのね、壁一ぱいに変な絵を書きちらしました。そいでさっきも塚原と喧嘩をしたんですよ、元木の奴は……」

すると子供たちの眼は靡くように一斉に久慈を見つめた。彼はそう云う風に注目されることが嬉しかった。傲然と反り身になって重々しく身体を後に向かせ、背後の白い壁をじっと指さして示した。

「ほーらねえ？　見えるだろう？　赤鉛ぺつで書いてさ、ほーら、見えるだろう、ほーら」

杉本はその指に導かれてのそりのそり壁に近づくのであった。近づくに従ってその落書は次第に明瞭(はっきり)して来た。全くその絵が絵として眼に映ると、彼の背筋が急にぞくぞく粟立って来た。何故か恐ろしさと恥しさとに打たれて、彼は棒立ちになった。子供たちもまた緊張して声をのんだ。彼等は咄嗟にこの壁がどんなに大切なものであるかを思い出した。不機嫌に蒼ざめたこの教師が、壁を汚したことによってどんなに怒り猛るか知れないと思うのであった。すると何年かの間学校生活を余儀なくされた子供たちは、得態の知れない恐怖を描いて硬直してしまった。しかし杉本は反対に今は泣きたくなったのだ。「元木――」と彼は壁に面したまま子供を呼んだ。「お前は大した凄い画描きさんだなあ、それだのにどうして学校の図画は……」そう云いかけて彼は咽喉がつまってしまった。落書は赤鉛筆の芯を舐め舐め書かれた、……であった。悲壮な顔をした男の脛には……………………さえ植えられていた。おずおずと教師に近づいた元木は、「おい、お前は！」と叫んで、がっちと自分の肩を押えた杉本を見あげるのであった。彼は教師の顔色からそれが怒り出す気持でないのを敏感に見て取ると、「先生――あたいは画がうまいだろう？」と云い放った。杉本は唇を噛んで、まるで歔欷きを堪えるような顔をした。すると元木は教師の腕をとらえて、「先生、あたいの絵よく出来てんのかい？」とまた催促した。しかし杉本は忙しく瞬きしながら云うのである。

「はやく消さなきゃ、元木、校長先生にどやされるぞ」

それを聞くと彼は「や！」と叫んでとび上った。「いけ

ねえ——あ、いけねえ！」
たった一人のその声で教室中が一時にざわめきだした。いけねえと気づいた時、彼等の頭にも反射的に消さねばならぬことが浮んだ。そう思うと彼等は一刻もじっと耐えることが出来なかった。白墨をこすりつけて見た。雑巾を一なで撫でまわした子は泣き出した。二三人の子はばけつの尻を鳴らして水汲みに駈けだした。

厚いコンクリートの壁を揺ぶって、この騒音は再び全校舎にとどろいた。しかしここでは全員が一生懸命なのである。杉本は上着を投げ捨てていた。彼はナイフの刃を壁にあてた。白い粉がざらざら削り落され、そのあとにはコンクリの生地が鼠色に凹んで行った。白くしなければならぬと云う考えが裏切られることに腹が立つのであるか——杉本は額から汗を流して昂奮した、そして自分の大袈裟な激情の馬鹿らしさに一層焦ら立っていた。

その時突然冷水を浴びたように騒音が消えるのであった。杉本は枕を蹴とばされたような駭きに周囲を忙しく見まわす、すると彼の鼻先に、白髪あたまの校長がずんぐり迫っていた。

「何をしとるかね？」と校長が訊ねた。

「壁はまっ白にしなきゃならんですからね——」

冷然と疑い深い眼を角立てていた校長は、いかにもわざとらしく神妙によそおって各自の席に着いた子供達を、まんべんなく一瞥した。杉本は、その眼につれて自分も子供たちを見まわし、

「なあ、皆あ——」と話かけた。「壁は大切なもんなんだからなあ——」

「うん、そうだよ、大切だよ」と一番先頭の席にいた福助そのままの阿部が、さっと立ち上るなり大きくさいづち頭を頷かせた。校長の顔がそれに向き直り満足らしくたちまち瞼を細くする。すると恰かもそれを待ち構えていたかのように阿部は「ちぇッ！」と舌打した。「あたい、嫌んなっちまうなあ、変な顔してそんなに睨むなよ、ちぇっ、おかしくって！」

三

それほど本当のことを何の怖気もなくぱっぱっと云ってしまう子供たちから、受持教師の杉本は低能児という烙印を抹殺したいとあせるのであった。もしこの小学校の特殊施設として誇っている智能測定が、まことに科学的であるというならば、子供の叫ぶ真実が軽蔑される理由はないではないか——「なあ……」と杉本は話しかける、「お前の思う通りをじゃんじゃん答えるんだぞ。父（ちゃん）はどんな職業（しょうばい）だい？」

しかし放課後をひとりあとまで残された川上忠一は、それだけで既におどおどしていた。数え年の十三歳（生活年齢は十二年と五カ月）で尋常四年生の彼は、原級留置（とめおき）を二

度も喰った落第坊主だった。けれども父親にして見れば、何とかしてこの子を——と思うのである。「何ちったって此奴を真から知ってんのはあっしですよ」と保護者の父親は学校の床に膝を折って懇願した。「家にいる時あ、とても頭がいいんだが、学校じゃ丙やら丁やらで……なるほど、あっしら風情の餓鬼あ行儀は悪うがしょう、したが、それとこれとは訳がちがいまさあ、なあ先生様、そう云うものでしょう？　やれ着物が汚いの、画用紙が買えなかったのと、そいでもって落第くらったんじゃあ全くたまんねえでがすよ。あっしゃ考えました、こりゃあやっぱしええ学校に上げなくちゃ嘘だとね……区役所で通知を貰うんには骨も折りましたが、はあ、いい塩梅にやっとこさこんな立派な学校へあげることが出来て——これ、忠！」と彼は、そこで恥しそうに着物の腰あげを弄くっている伜の手を引っ張るのであった。「ああ、見ろうな、こんな立派な御殿みてえな学校に来たんだから、お前もちゃんとお辞儀してお願い申すもんだ」それほどの気持で中途入学して来た川上忠一は、しかし、いきなり低能組に編入されたのである。
校長はそれも彼の権限として、汚れくさったその子の通信簿を一瞥すると何等の躊躇もなくこの教室にあらわれ、一個の器物を渡すかの如く簡単にそれを杉本の手に渡そうとした。杉本はむっとして校長の顔を注視した。すると彼はその時始めて腰の上に組んでいた後手をほごし、それを上下に振り動かし乍ら口を切った。「智能測定はせなけりゃならん……頼むよ杉本君、まあとに角君い……」そう云って渡された子供なればこそ——と杉本は思うのであった。校長が無雑作に決めた低能児の認定を、所謂ビネー・シモン氏法によって覆してしまいたいのだ。もしもそれが、当代の実験心理学が証明する唯一の科学的な智能測定法と云うならば——。杉本は測定用具を教卓に投げおき、「なあ川上——」と子供の頭に手をおいた。「お前の父（ちゃん）はどんな仕事を毎日してんだ？」一日の仕事に疲れ切っていながらも、彼はその子の冷たそうな唇を見つめて答えを聞きのがすまいとするために、ぶるぶる身体を緊張させていた。
川上忠一は首をすくめて、出来るだけ教師とその視線を合わすまいとしていた。彼は徐々にその眼を窓の外に移して行った。放課後全く子供のいなくなった校舎は、しーんと静まり、却ってそのしーんとした静寂が耳につくのであった。
「え？　川上？」と更に教師は答を促して彼はまた窓外のうすれ行く夕陽の色に眼を移していた。川上忠一は何か決心したようにあわてて着物の襟をかき合せ、上眼づかいに教師を見た。
「さっさと片づけて早く帰るとしようぜ」と杉本が云った。子供はぶるぶるっと両方の掌で顔を擦り、にたっと笑ってみせた。恥しがっていたのだ——それだのに、何故こんなに執拗く促しているのだろう——職業がその子の智能を直接的に規定しているという理由からだけなのだ。そし

てそれが検査要目の最初の項にあげられた疑問だからである。杉本は狼狽してそれをひっこめようとした。
「云いたくないんだったら……」
川上忠一はうるさげにそれを途中で遮えぎると、たたきつけるようにがなった。
「船だよ！」
「船？　船とはどんな船だい？」
「ちぇっ――わかんねえな」そう舌打ちをして子供は度胸を据えるのであった。さあこうなったら何でも喋ってやるという風に、教師の顔を正面に見て語気をあらくした。
「船は船じゃ無えか？　大河をあっちい行ったり芝浦い行ったりする船じゃねえか。あたいがぎーっと舵をおしてんだ、あたいだって――」川上はそこでうすい脣をつん出し早口になっていた。「まちがわねえで呉れ、泥船じゃねえんだからな、ちゃんとした荷船でよ、あげ羽丸てえんだ。でも、何だってそんな巡査みてえなことばかし聞くんだい？」杉本は蒼ざめて吸いかけているバットを揉み消した。「あたいらは正直もんだよ」と川上は更につづけた。「うそなんてこれっぽっちも云いやしねえよ、さ、早くかえして呉んな」
「儲かるかい！」杉本はそう云って話題を外らそうとした。
「儲かるもんか！」川上忠一は眉根をしかめてそれを即座に否定した。「発動機に押されっちゃって、からっきし仕事がまわって来ねえんだよ。遊んでる日がうんとあらあ。遊んでても仕方が無えんだけんど、何しろ仕事が無えんだからなあ、父（ちゃん）だって辛いし、あたいだって――」そう雄弁になってぶちまけ出した子供の言葉を、杉本はじいっと聞いていることが出来なくなった。彼は埃と床油の臭気が立籠めていることに思いあたり廻転窓の綱をがちゃりと曳いた。夕映えの反射がそこで折れて塗板の上をあかるくした。「先生えあたいなんかはなあ、まちの子供みたいにあそんじゃ居られねえよ。おっ母の畜生が逃げちゃったんだ。そうよ。船は儲からねえからよ。儲からねえたって云ったって……」教師は照れかくしに教卓のまわりをぱっぱっと煙草をふかしつづけた。落第坊主即低能と推定されて自分の手に渡されたこの痩せこけた子供が、こんなに淀みなく胸にひびく言葉をまくし立てるのだ。よしそれならば――と杉本は真赤な顔を子供に向け直し、ただわめきつづけようとする口を強制的にでも止めてしまおうとした。
「よし！」杉本はどしんと床を踏みならした。「よし！もうわかった、それならば――」彼のそのいきおいにはっと落第生に変化してしまった川上忠一は、亀の子のように首をすくめべろりと細い舌を出した。しまった――と思ったが既におそいのである。そして彼自身もその刹那から職業的な教師にかえったのも知らずに、「それではなあ川上、これから先生が訊ねることはどんどん返事をして呉れよ」と云いつづけていた。それから彼は測定用紙をひろげ、三

歳程度の訊問を匆体ぶって拾い出していた。
「コノ茶碗ヲアノ机ノ上ニオイテ、ソノ机ノ上ノ窓ヲ閉メ、椅子ノ上ノ本ヲココニ持ッテ来ル――んだ」
　おそろしく生真面目な眼を輝かした教師に、川上忠一はへへら笑いを見せて簡単にその動作をやってのけた。
「その調子！」と杉本は歓声をあげた。その調子――そして、この匆体ぶった検査を次々に無意味なものにたたきこわしてしまえ。彼はそう思って、「ではその次だ」と呶鳴った。
「モシオ前ガ何カ他人ノ物ヲコワシタトキニハ、オ前ハドウシナケレバナランカ？」
「しち面倒くせえ、どぶん中に捨てっちまわあ――」
「え？　何？　なに？」杉本は既に掲示されている正答の「スグ詫ビマス」を予期していたのだった。だがこの子供の返答は設定された軌道をくるりと逆行した。杉本は背負い投げを喰わされたようにどぎまぎした。「え？　何？　なに？」と彼は繰りかえした。「もう一度云ってごらん？」
「どぶに捨てっちまえば、誰が毀したんだか分りゃしねえだろう？」と川上は訊きかえした。
「じゃあもう一つだけ――」杉本は何度も使った質問を誦んじ乍ら今度は子供の顔を注視するのであった。「モシオ前ノ友達ガウッカリシテイテオ前ノ足ヲ踏ンダラオ前ハドウスルカ？」
「ちぇっ！　はり倒してやらあ……」

　そのはげしい語気に衝かれて杉本は思わず「なるほどなあ」と声をあげ、検査用紙をばさりと閉じてしまった。すると、川上忠一の痩せとがった顔がもう全然別な憂愁に蔽われていた。彼は暮色の迫った窓を見つめ出した。コンクリートの教室はうす墨いろに暮れていた。ぶるっと身ぶるいを出して彼は、血の気の失せた薄い唇を舐め、今更のように教室を見まわした。それから彼は、もはや教師の存在を無視してさっさと腰をあげた。「暗くなって来たなあ――」と杉本は一言つぶやいた。川上忠一はその声に、また突然学校を思い出したらしく、気味わるげに教師の顔色をのぞき込むのであった。しかし、こんな夕方になっては、どうしてもこれ以上先生の意志に譲歩することが出来ないと思った。「あたいはもう失敬するぜ、何しろ父（ちゃん）が心配するからな」と呟いて自分の鞄を手許に引き寄せた。引き寄せてはみたが、長い間学校に虐めつづけられてきたこの子供は、教師の顔色を一そう覗きこみながら、身体は扉口に進め、首だけはうしろに向いて動かないのであった。杉本は鼠色になった教室の壁を見つめてぼんやりしていた。とうとう扉に手をかけた川上忠一は、決心してわめいた。「あたいは帰えるよ、いいかい？　父（ちゃん）の晩飯を炊かんきゃならねえし――それに、あたいの家が無くなっちまうからよ！」それを喚きおわるが早いか、彼はぺこんと習慣になった敬礼を残して、扉をはね開けた。一足教室の外に出て教師の眼をのがれたと思うと、子供は一ぺんに重荷をおろした気

がし、あとは綱を断たれた野獣のような猛々しさを取り戻して長い階段を一気に駈け下りるのであった。
杉本は暗くなった教室に暫らくそのまま頬杖をついてぼんやり考えていた。彼の意気込みにもかかわらず川上忠一の智能指数はやっぱり八〇に満たないのである。測定したあとの、あのもやもやした捉え所のない不愉快が今は殊更強く彼の頭に噛みついて来るのであった。それが真実に子供たちの運命を予言し得るものとすれば（実験の結果によれば――と当代の心理学者が権威をもって発表する）コノ指数ニ満タザルモノハ到底社会有用ノ人間タルコトヲ得ズ。「この社会！　この社会！」と杉本は繰りかえした。えらい心理学者や教育学者たちが規準にした「この社会」と、そこから不合格の不良品として選びわけられ、今は彼に預けられた、低能な子供たちの住む「この社会」とは、同じ「この社会」でも社会の質が異っていた。そっちの社会で要求しているものを川上忠一は素気なく拒否したのだ。そうして彼は抗議する――何だってそんな巡査みたいなことを訊くんだい？　杉本は自嘲的に自分の職業を三つの単語で合唱する――「べからず、いけない、なりません」そいつにがんと抗議して川上忠一は教室をとび出して行った。一本お面を喰ってふらふらと参った杉本は、……、「…………、…………！」と叫びたい気持になって来た。杉本はうす闇の中でにやり歯を出して笑い、さておもむろに腰をあげた。すると、朝の八時からこんな日の暮れまで、焦立ちつづけていた神経が一度に崩れ、身体がくたくたに疲れているのを発見した。その杉本を、図体の大きな使丁がこれもいらいらしながら捜しあてたのであった。
「杉本さん、大変だぜ」と使丁がどなった。
「横着な面をするない」と杉本もどなりかえしていた。
昇降口に仁王立ちになっていた使丁はむっとした。帰り仕度をしてしまった杉本も、それを見て一層むっとした。年がら年中こづきまわされている彼等は、これだけは自分の自由意志だと思いこんだものががんと阻まれるその刹那に、想像出来ない程の敵愾心を煽られるのであった。こんな平教員に舐められるものかと云う風に、使丁は明らかに冷笑を浮べて、「へへえ……これだよ杉本さん」と自分の首筋をたたいてみせた。「子供が紛失してお前さん、親爺さんが泣きこんで来てらあ」
「なにぃッ？」と杉本は棒立ちになった。
「お前さん子供がどうだっていいと云うならば、校長さんに話さにゃならんが……」
「いや――」と杉本は使丁を停め、「俺が捜してみせる」と呶鳴った。そして小使室に駈けこんだが、彼は自分のその行動が急に忌々しくなって、そこから振りかえりざま声を荒くした。
「か、勝手にしろ」
だが、小使室にしょんぼりしていた川上忠一の父親は、一ぺんに神経を取り戻して「先生さまあ――」と悲鳴をあ

げた。「あとにも先にもたった一人の伜でがして、なあ、先生さまあ……」
　彼はそう云って、胸に漲っていた心痛のはけ口を杉本に向け、潮くさい身体を矢鱈に折り曲げるのであった。
　学校の門を出てからの子供が、それぞれの家に辿り着くまでの責任は矢っ張り教師にあるというのであった。しかし今日の責任は、いやがるその子供を日没まで引き止めていただけに、杉本は居ても立っても居られぬようにそわそわした。「先生さまあ——」とその父親はもう子供がなくなったように口説きつづけた。「あの野郎は親思いで今日まで一ぺんも心配をかけたことはねえのに、はあ、今日と云う今日はどうしたことでしたか……」
　街はすっかり暮れていた。二人は肩を並べて歩いた。親父は行き交う子供の顔を一々のぞき込みながら、居なくなっては生き甲斐もないと云う大切な子供について、語り止まなかった。
「あっしらは船の商売で——だもんで、永代橋さ戻ってみたらば野郎の姿が見えねえ。はて、らんかんの下にでも蹲んでいるかと、あの長え橋を三べんとこ往復しやした。三時の約束でしたが、あ、久しぶりに仕事にありついたばっかしに、ちっと許り慾を出して、つまり天罰ちもんでしょうか？」浅野セメントから新大橋をわたり、船頭はも一度芝浦まで歩こうと云うのであった。「先ず交番に届けて置こうではないか？」という杉本を、彼は手をふって否定し「交番ちものは——」と説明した。「あっしら風情には、つまり性に合わねえもんで」それでは永代橋から電車に乗ろうという杉本に今度は懇願した。「野郎も毎日歩いてるんでがす、今日はひゃくも持ってねえから野郎も歩いたでがしょう。見落しちゃっちゃ可愛そうでがすからなあ」そして、橋という橋にさしかかると親爺の歩調は急にのろくなり、そこいらの溝水に纜っている船を注意ぶかく覗きこむのであった。暫くうろうろして、そこで影さえ見当らぬのを知ると、親爺は得態の知れない都会の底にあがいている伜を思い描き、腹の底から溜息を絞った。銀座では人間の河が舗道を洗っていた。その人波に逆って行く二人は何時の間にかぴったり身体を寄せ合っていた。「先生さまあ——」と親爺は行き交う人間の顔に眼を光らせながら、なおも語りつづけた。
「忠の野郎ははきはき勉学してますかね？　はあ、今日様を生きるにゃあ学ほど大切なものは無え、あっしもせめては発動機の運転手になりてえもんだと、そうっ——と、都合十六ぺんがとこは試験を受けやしたが、はっはっは……学が無えものは駄目の皮よ。あっしゃあ決心したんだ！と、ね？　よろしく頼みますで先生さま、ああ、えらく立派な人ばかし歩いてるが、こんな人はさぞや学があるんでしょうなあ——先生様あ？」
　ゴー・ストップに遮られた親爺は淀んだ人混みの中であ

るのも構わず、「ああ学さえあれば！」と絶望的にたからかな叫び声をあげ、目茶苦茶に明滅しているネオンサインのあくどい光が、痩せた船頭の顔を異様に彩色するのであった。

四

不仕合わせに育った子供の一人である塚原義夫を、ちっと許り幸福にしてやるために——つまりは彼の特質である哀しい注意散漫を削ってやるための一つは、〇・五しかない視力を近眼鏡で補ってやることであった。その子のためにこれ位のことは当然だろう——と教師は決心しそれから父親宛に手紙を書くのである。「御子供さんの勉強が一段と進むことは、全く火を見るよりも明らかなことで、義夫君も大よろこびをしていますから——」だがその日のうちにその父親は恐ろしく達者な拳舌で、湯気を立てながら我鳴りこんで来た。

「べら棒めえ、そんなお銭がころがってたらば、だなあ——こちとら親子がな、おい、先生！　三日がところお飯にありつけようと云うもんだ。こんな餓鬼にお前、眼鏡なんてしゃら臭くて掛けられっかてんだ。学校で要るってならば、お前さんさっさと買っとくれ！」

うすら禿の頭の地まで真赤にし、ぱっぱと唾を反っ歯の合間から撥き出しながら、そんなにも昂奮して見せるのであるが、実はこの父親も、一度は眼鏡屋を訪れてみたのであった。しかし教師の前では勝手にしやがれと自暴自棄にわめき立てていた。「それではあんまり可哀そうだ——」と杉本はつい口を辷らかして義夫のために骨折ろうとするのである。所が親爺はこのもののわからぬ教師を今度は本気で呶鳴りつけた。

「か、かわいそうなのはこちとらじゃねえか！　腕を持ってて腕が使えねえこんな裟婆に生きながらえているこちとらじゃねえか！　子供のことまで文句をつけて貰うめえ」

子供は学校にあげねばならぬおきてだというから上げている。数年前、米屋が桝を使用していた時代には彼は錚々たる職人として桝取業をしていた。彼の腕にかかれば、必要に応じて、一斗の米が一斗五升にも八升にも斗りかえられた。それだのに、何の因果でか、ある日から忽然と、米屋は秤を使わねばならなくなった。「この腕がお前——」と彼はとうとう嘆きだしした。「使い道がねえじゃねえか。なあ義——」と、こんどはきょろきょろしている倅に向い、「お前も可哀そうな餓鬼だよ、霞炎じゃあ、おっ母がおっ潰されちまうしよ。しかし何だぞ、眼鏡なんてしゃら臭くって掛けられるもんじゃ無えからな」

紙芝居の拍子木がカチカチひびき渡って、ろじ裏から子供たちがぞろぞろ集まって来たが、一銭玉一つも持っていない子供はそこでも除け者にされるのであった。長屋の中は暗くじめじめしていた。それに較べると学校はひろく勝

手気ままに跳びはねることが出来るのだ。放課後になると、子供より何よりも、校舎を汚されることだけが自分の餓と同じ位怖ろしいと観念している使丁達に階下の遊び場を追いまくられ、子供等は吹きっさらしの屋上運動場に逃げあがって行った。そこでは、家に帰ってもつまんねえ――と指をくわえる子供等が、犬ころのように他愛なくふざけちらしていた。「先生、あたいも遊んで行かあ――」と塚原義夫は父親と別れ、教師の腕にすがるのであった。うす暗い階段を螺旋まきに駈けあがり天井を抜けると、ささくれ立ったコンクリートの屋上に出る。「おーい」と塚原がわめいて跳ねあがる。すると沢山の子供が四方からばらばら集まって来る。彼等はそこに現われた教師を見て心のつっかえ棒を発見し、うれしくて堪らなくなるのだ。わあわっわ……と叫んで、教師の首と云わず肩といわず、凡そぶら下り触れ得るところに噛りつくのであった。涎と鼻くそと手垢をこすりつけ、何故かそうして満足し野方図にはしゃぎまわった。

　頑丈な金網をその周囲に高々と張りめぐらしている屋上運動場は、それだけで動物園の大きい檻を連想させた。そこだけが日没まで彼等にとって唯一の遊び場所になっていた。けれどもそこで一あばれすれば、初冬の陽がたちまち傾き、吹き抜ける風が目立って冷めたくなるのである。子供たちの唇は一様に紫色にかわる、その冷めたさを撥きかえしてやろうという気力はなかった。ただ変な顰め面をして黙りこみ、仕方なしの様に金網にへばり着く。すると網の目から、帰らねばならぬ自分の家が見える。汚れた場末の黒く汚れた屋根の下に自分の家を考えて、いよいよ不機嫌になるのだった。それが彼等に幸福かどうかは判らないが、杉本は一刻でも多く子供だけの世界に彼等を引き止めようとする――

「阿部、阿部――」ひょうきんな、さい槌頭の阿部が「何でえ――」と答えながら教師の方へふりかえる。「お前の家はどこにあるんだ？」

「あたいん家か？　あたいん家はねえ」と阿部は少しでも高くなって展望をさせたいと思い、金網に縋ってこうもりのようにぶら吊った。「ほら、あそこに、ほら白い屋根が見えんだろう、そいから深川八幡様だ、あそことあそこの間にあんだけえどなあ……」彼は何とかして適確にそれを示したいと伸びたり縮んだりしたが、結局どれもこれも同じ黒い屋根で一しょくたになり、ちぇっと舌打ちして、

「あんまり小っちゃくて見えねえんだよ、先生！」

「先生――あたいん家を教えてやらあ」と次の子が造作なく調子に乗って来た。「ほら、あっこに大い池があんだろ？　あれが木場でよ、あの横にあんだが……鉄工場が邪魔になって、よく見ねえや」つづいて月島の方面に面した金網では地団駄ふんでいる子供が今とばかり懸命に説明するのだった。「あたいん家の父は、あのでかい工場だ、よう――お――い、みんな来て見ろ――な、煙がまっ黒けに出てや

がらあ。へん、あたいん家の父はえれえもんだ、毎日あの工場で働いてらあ……」
その工場の黒煙だけは、たくましく京橋方面の濁った空気にとけこんでいた。都会の屋並をなでる煙は河の向う側から逆にこちらになびいていた。隅田川がその間に白々と潮を孕んでくねっていた。「寒くなって来たからもう帰ろうよ」と杉本は子供たちの顔を見わたした。ひと塊の――家にかえってもさっぱり面白くない子供たちは、その声にぎょっとしてまた顔を曇らせた。「先生もう帰えるか？」と一人が訊いた。
「わ――あい、先生え、たすけてくれえ？」そう悲鳴をあげて、元木武夫がその時屋上に駈けあがって来たのであった。彼はびっくりして飛びすさった子供の隙間を全く一またぎに跳ねこえて、わっと教師の胴っ腹にしがみついた。だらしのない日頃の唇が今は両方にきりっと引き緊り、蒼ざめた頬がぴくぴくひきつっていた。せわしく肩を上下させた劇しい呼吸が静まるまでには、暫らくの間があった。
「どうしたんだ？」と杉本がたずねた。
傍にいた相棒の塚原義夫は、元木の頸に手をかけ、その顔を覗きこみながら断定するのだった。「またお前、おっ母あに虐められたんだな。お前え馬鹿だい、ちぇッ、学校休むやつがあるけえ――」それから彼は呪わしいことの一つ言葉を真顔でつぶやいた。「八幡さまにお前えは詛われてんだぞ。」
元木武夫はまのびした平べったい顔で、眼尻の下がった瞼をぱちくりさせていた。彼を取りまいた子供たちは、何故かそれにひどく同感してふんふん頷き、口の中で低く呟いていた。「そうだよ、そうだよ」と云って骨ばった塚原の手が元木の肩をおさえた。彼は軟かく二三度それを揺ぶって、「お前はな、もうせん、八幡さまの池で、よ、ほら、亀の子を盗んだじゃねえか、え、そうだ、屹度お前そいで詛われたんだ」「ちげえねえや」「おっかねえなあ」とそれが肯定されて行った。
「ば、ばか！」途端に元木は叫んだ。「あたいは小僧い行くんが嫌なんだ、よう！」
ほんのたった一日この子が欠席した間に、十二歳になった元木武夫の運命が旋回しようとしていた。それも却っていいだろう――と思い乍ら、「あたいは小僧い行きたくねえんだよう――」と云って腰を揺ぶられると、手に負えない子供であるが、杉本は行かせたくないと決めるのであった。義務教育だ――そう云ってそんなむごい両親を突っぱねねばならぬと考えた。元木武夫の両親は揉手をしながら、やがて屋上にあらわれて来た。
「へへえ、これは先生さまあ……」顎のしゃくれた女房がお世辞笑いをして科をつくるのであった。「ちっと許り御相談にあがりましたんだが……」と子供によく似た父親がそのあとを受けた。元木武夫は教師のかげに身体をかくしてしまった。すると父親の顔がぐっと向き直った。「お前

さんは——」と彼は杉本に喰ってかかった。「あっしの伜にとやかく口を入れる権利はあるめえ」「順序を立ててお話しなくっちゃ何ぼ先生さまでもねえ、まあお前さん」女房はそう云って、益々杉本にへばりついた子供に、じろりと凄い一瞥をくれた。「全く今日この頃はひでえ不景気でして、ねえ、ヘッ、子供と遊んでて大した月給を貰える結構なお身分には不景気は素通りでしょう、が、さ」すると親爺が一声合いの手を入れるのであった。「こちとらは遣り切れねえだ！」

話はまわりくどく、時々言葉のきれはしは風に吹きさらわれるのであるが、日傭労働者の父親は一人でも口を減らさなければやって行けないと云い、継母はあんまりこの子も親の恩知らずだと高尚な理窟をこねた。二三年この方電気ブラン一杯もひっかけられないと云う親爺は、小僧にほしいと云うこんないい口を、武の奴めが嫌がる筈はねえ、聞いてみれば先生に相談しなきゃあと小生意気を云い出しやがった。親の云いつけをきかねえと云うことはねえんだと一日責めたらば、せがれは憤然とこれ、このように学校ににげこんで来た。餓鬼のくせに驚き入った野郎だが、一体全体親の命令をきかねえと云うわけがあるもんかどうか——「聞かして貰いてえもんだ。あっしに取っちゃ生きるか死ぬかの大問題なんだ」と親爺は胸を張って一あし詰めより、ちらりとその女房の顔色をうかがった。「どうしたもんでしょうかねえ、先生さま」と今度は子が急に悲しそうに悄れてみせ、無精ひげに包まれた杉本をねっとりと睨むのであった。杉本はぶるぶる身体がふるえて来た。手を変え品を変えして、今はこの教師をうんと云わせさえすれば、万事うまく行くとしているその親達に、彼の防備は役立ちそうにも見えなかった。しかし、顫えて自分の身体に抱き縋った元木武夫の腕には、だんだんと必死の力が籠って来た。ひ弱い子供ながら、この乱暴な親に押し挫がれずよくも此処まで逃げて来て呉れた。杉本はそう思い直した。

「それで本人はどうだと云うんですか？」

「そこがそれ——」と女はすかさず答えた。「先生さまに納得させて貰いさえすれば……」

「あたいは、嫌だぞ！」

元木武夫のその声が夕風をさっと断ち切った。

だが、その叫び声と同時に女は髪をふり乱した。「こ、この餓鬼い！」とうめいた。「手、手前はさっき、神様の前で、承知しましたと吐したじゃねえか、継母だと思って舐めやがったなあ……こら、畜生ッ！　武！」ぐらっとひっくりかえりそうになった雲行きに、父親もまた喚きあげ、「こん畜生ッ！　親を親とも思わねえのかあ——」その上父親は逆せあがって今は伜にとびかかり暴力をふるおうとした。元木武夫は冷いコンクリの上を逃げた。扁平足のはだしが、吹きっさらしの屋上にばたッばたッと不気味な音を立てていた。見ていた子供たちはさっと道を開いて、

援するのであった。

五

昇汞水に手を浸しそれを叮嚀に拭いた学校医は、椅子にふんぞりかえるとその顋で子供を呼んだ。素っ裸の子供は見るからに身体を硬直させて医師の前に立った。彼は先ず頭を一瞥して「白癬」と云った。それから胸をなでて「凸胸」下腹部をおさえて見ると、低いがよく透る声で「ヘルニヤ」と病名を呼ばわった。側に控えていた看護婦が身体状況調査簿に万年筆をはしらせてすらすらと書きこんで行った。

「よし！」

突きはなされた子供はほっとして微笑を浮べて、医師の前をとび退く。そして検査場の隅に脱ぎ棄てておいた自分の着衣を捜しだす、垢に汚れたシャツにぼたんが一つもついていなかった。

椅子から腰をあげた医師は、昇汞水に指を浸してゆっくり消毒しながら、後手を組んで突っ立っている校長に話しかけた。

「今の子の家庭は何でしょうかね！」

校長は子供に混っている杉本をじろっと見て、「君い——そのう……」と訊ねた。「今の子のうちは何をしとるかね？」

ずたずたとなった三尺を捲きつけていたその子はふいにその手を停め、やぶにらみに受持教師の顔色をうかがっていた。杉本は「さあ——」と首をふって答えなかった。すると看護婦が気を利かした積りで調査簿に書きこまれた家庭職業を報告した。

「金箔に芳——かんばしいの芳が書いてありますが、私には読めませんわ」

そう云って彼女も白い顔をあげ、杉本の方を見て答を求めるのであった。

子供はそんな風に自分の家のしがない職業を、多くの人の前で詮索されるのが嫌でたまらないのである。彼は俯向いていた。お前は教室に行ってよしと云って、その部屋から外へ出してやった。それから大人達の好奇心を満たさねばならなかった。

「錺の職人ですよ。つまり鳶人足なんですが、今では御多分に洩れず半分は失業しているのと同じことで……」

杉本はそう答えて、次の子供のシャツを脱ぐ手だすけにかかった。

椅子にかえった医師は、尖った顔をぐいと引いてまた次の子供を呼ぶのであった。

「さ、次の番」

待ってましたと許りに久慈恵介はすっぽり丸裸になり、

元気よく医師の前に立った。
「耵聹栓塞、アデノイド、帯溝胸――ふん！」医師は眼を光らせて、はじめて感情をふくめたよろこびの声をあげた。
「おお、これはみごとな帯溝胸だ、ごらんなさい、どうです？」
傍にいた看護婦は立ちあがって来たし、校長はたるんだ瞼を引きしめた。
「あたいん家はね、東京市の電気局だよ」と久慈は元気よく金切声をあげた。
医師はその声を無視した。彼の興味は家庭の状況よりも殆ど畸型に近い久慈恵介の胸にかかっていたのだ。彼はすかして見たり、深さを測ってみたりした。そうして益々感心し「ふうん――」と鼻を鳴らすのであった。
順番を待っていた子供の中から、妬っかんだ声が洩れて来た。
「久慈い――ちんちん、ごうごう、おあとが閊えています。久慈い――おあとが閊えているよ、早くかわんな」
それを聞くと久慈恵介は急に全身で真赤になった。彼はまだしきりに撫でている医師の手をふり払った。自分自身の体の醜さに気づき、それと父親の仕事が嘲られた口惜しさが一しょくたになった。彼は素っ裸のまま声を立てて泣きだした。
裸体になったとき、その子供たちの不幸が一度にさらけ出されるのであった。しちむずかしい病名が、まっ黒になるほど書きあげられた。医師はそれによって、今更の如く感心してみせた。「健全な精神は健全な肉体に宿る……昔の人はいいことを云ったもんですなあ、え？ そうじゃありませんか？」すると校長もそれに答えるのである。「こんな不健全な身体では知能発達の劣るのも無理はありませんですな、いや、全くもって家庭が悪い！」
寒い日で子供たちの首筋には毛孔が立っていた。袴などは勿論なかった。上履さえ買って貰えない彼等は、床油を塗ったので、油がべとつく板の上をべたべた歩いた。さいわい彼等は不幸に馴れ切っていた。直接不愉快な場所を脱け出すとすぐにそれを忘れた。そして金切り声を天井にひびかしたり、出鱈目な節まわしに口笛を吹きあげたりして、凡そ無気味な騒音を立てながら自分の教室に雪崩れこんで行った。
白い壁が三方を立てこめているこの教室にはいると彼等は、何か自分の家に辿りついたような安心を覚え、鼻唄まじりに周囲を見まわすのであった。教卓に頬杖をついた杉本も、子供たちとお互の面を改めて見合わせる――歯の抜けた痕の様に、元木武夫の席が空いていた。無力な教師は、顔をしかめてぼんやりしていた。その顔を見て子供たちは殊更おどけ、眼を釣りあげたり歯をむいたりして見せる。どうかして朗らかになりたいと子供たちも焦るのである。

「先生え――」ぽかっと、古沼に浮きあがった水泡のように、思いがけなく塚原義夫が立ちあがった。「先生え、修身、修身――また修身をやろうよ、よう」
　すると、にたにたしながらすぐに喋り出す元木武夫はもういなかった。勿体ぶってしゃあしゃあ張り出す例の久慈恵介は、先刻の衝撃が未だ彼の頭から完全に消えず、赤らんだ瞳をきょとんとさせているだけであった。涎を垂らしている子供、青っ洟を少しずつ舐めている子供、うしろにのけ反ったり、机につっ伏せたり、脚を腰かけの横にぬーっと出してまるで倒れかかった自分の身体を危く支えたりしていた子供たちが、徐々にざわめきだした。一番うしろの机にいた大柄の子供が、突然「ふはあ――」と欠伸をした。子供たちは一斉にそちらを振り向いた。三つの年に脳膜炎を患ったその子は、命だけは不思議に助かったが、いつも天井を見ていた。無類に模範的に温順しい彼は何を聞いても耳にはいらなかったし、何も云いたいことを持っていなかった。とうとう塚原は焦れて足を踏みならした。
「先生――修身だってば、さ！」
　川上忠一が廊下側から立ちあがった。
「あたいが修身をしてやらあ」
「ちぇっ、手前の話なんか聞きたかねえや」と目玉をひんむいた錺屋の子が叫んだ。
「やれ、やれ」と塚原は音頭を取った。「先生、邪魔になるからそこを退きな、川上が修身をやんだからさ、早く退きな」
　川上忠一は右肩をいからかして教卓の前に直立不動の姿勢をつくり、ぺこんと頭を低げた。それから薄い唇をぺちゃぺちゃと舐めてみんなを見まわした。
「あたいが三つの時のことなんだ、しんさいがあってさ、関東大震災でじゃんじゃん家が燃えっちまってさ」
　しんさい――と聞いて子供たちの呟きが何故か一時に停るのであった。何かこれら不幸な子供の胸底にひっそり潜在していたものが、その一語でぐらっとひっくりかえり、そのぶ気味さに当わくしたような沈黙であった。杉本は窓の外に身体を外らして雲のすっとんでいる怪しいこの空模様が川上忠一にこんな話題を憶い起させたのか、それとも年に一度の身体検査にひねくりまわされた彼等の皮膚の、嫌な感覚がそうさせたものかと思い、話手の顔を見直した。白眼を剝いて天井の一角を睨まえている川上忠一の尖った顔には深い隈が刻まれていた。暫らくそうやっていて、そして彼はやっと、これから喋ろうとする状景を再現した。彼は歯ぐきをむき出してにたりと笑った。
「あのね、そんな時あたいのもとのあげ羽丸も焼けちゃった。あたいは死にもの狂いで河にとびこんだ。深川は危ねえってんで、ほら知ってんだろう？　東清倉庫に避難したんだよ。あそこは石だから燃えねえや。そいでもって一ぱい人が逃げて来てよ。あたいはそん時おっ母がいたんだぞ。お前東清倉庫は八幡様の縁日よか人がうじゃうじゃし

たんだよ」川上はふいと口を噤み、また天井を睨んで次の記憶を思い描きだした。聞いている子供たちは下手な話手の言葉から、最早や遺伝になっているその凄惨な状景を描き、脅えることに満足していた。「日本刀を持ったおっかねえ人がお前え、…………だなって、こうだ」川上はさっと一太刀浴せかける恰好を見せた「そいからこんなでっかい針金でもってね、……………………………………、……………………………………」しかし、その時の手ぶりは途中でわなわなふるえ出し彼は蒼ざめて自分から溜息をついてしまった。「ああ、おっかねえ――」

「手前、見てたのか？」と塚原がせきこんだ。

「見てたとも――」川上がそう答えて、はずむ呼吸を抑え、傲然と云い放った。「あたいはそん時三つだったんだ！」

「そ、そいから？　そいからどうした？」

「そいからお前、大河に……………………………」

「死んだんだなあ――」がっくり首を落し、いま一人の子が痛々しそうに呟いた。川上忠一はそれにには見向きもせず、今はその話に自分から夢中になって来た。

「手前も……だろう……って云われた時にゃあ、あたいも胆っ玉がふっとんじゃったぞ。活動写真たあまるっきり違うんだからな」

窓側の一番前にいるさい槌頭の阿部が、その時がたがた立ちあがり、当てずっぽうに杉本を呼ぶのであった。

「先生え？　先生！」

「うるせえ、すっこんでろう――阿部！」

話にわくわくしていた塚原が、半畳を入れた阿部にがなりつけた。彼はとび出して行くが早いか、その小さな子供をつき倒した。

「頭でっかち、すっこんでろ！」そう大喝して、くるっと川上に向き直り、はげしく促した。「そいで……そいで、それからどうした？」

ところが倒された阿部はむっくり起き直って、じろじろ教室中を見わたした。彼は後の方の机にちょこんと腰を下している杉本を発見した。阿部はぽんと跳ねあがり盲目滅法の迅さで杉本の頭に抱きついた。

「先生、先生ッ！　大変だ、柏原が、うんこを洩らしちゃった、うんこ――」

杉本が漸く腰をあげると、阿部は拍子をとって床を踏みならし、節面白く叫ぶのであった。

「あ、うんこだ、うんこだ、柏原うんこだ」

みんな一度にがたがた立ちあがった時、塚原義夫が川上忠一を殴りつけていた。

「やい、手前嘘を吐け！　あたいのおっ母はおっ潰されたんだぞ、やい！」

「杉本さん、あんまりだらしが無さすぎますぜ、尋常四年生じゃねえんですか、そりゃ掃除をしろと命令されりゃ掃除もしましょう、しかし何しろ――」そう云って例の使丁

は銜えた煙管を取ろうともしなかった。「わしらあこうしていても手は塞がっているんだ。区役所から校長さんのお客様が見えられる筈だし……」

「そうかい、じゃ僕が片付けよう」

杉本は塵取に灰を掬い、雑巾とばけつをさげて小使室から三階にあがるのであった。

子供たちは、汚れない机を片づけてしまった。白墨で大きな輪を描いていた。その輪の中心に不覚にも洩らしてしまった柏原富次が、先刻のままじっと腰かけていた。

「今日はこれでお終いだ、帰りたいものはしずかに帰んなよ」

だが教師のその言葉に一人として動き出すものはなかった。子供たちは土俵のような円い白墨の輪を取り囲んで、床の上に蹲っていた。行儀よく固唾をのんで、仲間の不幸をいたむように口も利かずに座っていた。

杉本は富次の身体を腰から立たしてやった。「腹をこわしてたんだなあ――さあ、とに角その着物を脱いで……どら、こっちに来な、あんまり大食いをした罰かな？」

「ちがうよ――」柏原は動かされるままになり乍ら、一言否定するのであった。「あたいはしんさいが怖かなかったんだよ」

発育不全の柏原富次は、日蔭の草みたいによろけて杉本の肩を捉えた。彼は教師の温かい頸筋に 臭い彼の鼻加多児のいきを押しつけた。そして汚れた尻から腿を拭いて貰い、何か肉体的な幸福をぼっと面に漲らし低い声で話しだした。

「あたいん家はね、震災に焼けちまったんだとさ、お店だったんだって――おっ母さんがね、そんな時びっくりした拍子に、あたいを産んじゃったんだって――だからあたいは地震っ子て呼ばれてらあ」富次はそう云い乍ら、いつの間にかその細い腕を教師の頸に捲きつけていた。そしてその眼は、埃っぽい教室の白い壁に注ぎ、そこにあわれな未来を描きだして喋りつづけた。「ね、父ちゃんが死んじゃったら、お母ちゃんは、肺病やみじゃないまた別の父ちゃんを捜すんだってさ、そいからまたお店を出して……お店をね、ああらら……」富次は急に声を低め杉本の耳に口を寄せた。

「校長先生がはいって来たよ、あらら……やんなっちまうなあ」

（一九三四年五月「改造」）

牡丹のある家

佐多稲子

一

店先に夏蜜柑、ラムネ、駄菓子などを並べている土間の広い安宿や、荷車をつけたままの大きな牛がつないである軒の低い運送店や、肥料屋などのある駅前の通りを過ぎて間もなく村を出はずれると、もう左手は青々と麦のそよいでいる田圃であった。田圃は広く、中程には、その裾に沿って小川の流れている土堤道が太々と横に貫いていた。土堤の側面はびっしりと草がはえて青く、土堤の上をくるくると廻ってゆく自転車が微かに白い埃りを後ろに上げていた。ときどきその自転車のどこかに陽があたり銀色に光った。

　右手は木の多い小さな山の連りが奥へのびていて、すぐまぢかの高い土堤の上に山陽本線がゆるくうねって、山の間へ曲っていた。その土堤に女の子供達が二三人、陽を浴びて土筆を摘んでいる。

　村を出はずれた道は、線路の土堤の下の、トンネルのように丸くくり抜いて煉瓦でかためた穴をくぐり、山の裾へ這入っている。道の片側にはここにも小さな溝川が流れ、澄んだ水がちょろちょろと音を立てていた。ゆるく登りになっているその道を少し奥へ入ると、左手に、米谷の家の桃山がある。

　その道を、姉妹は山へ向って歩いていた。七歳になる末娘のきぬ子は母親や長兄に似た色白な面長の顔を汗ばませて、何か摘みながらあとになり先になりした。昼飯の重箱を提げている姉のこぎくは、娘らしく花模様のメリンスの帯をお太鼓に締めて、薄い色の綿セルの袖を両脇にはさんでいたが、都会から帰った娘たちがよくやるように洋傘を持ったりなどせず、すっぽりと手拭を頭の上にかけ、両端を口にくわえていた。陽の光はすんなりと都びたこぎくの背に直射していた。頭にかけた手拭の下に、この頃の流行(はやり)風にうなじの上にきっちりと束ねた髪がのぞいている。妹にかまわず、すたすたすたと藁草履の音を立てて歩いた。

　松の木の多い一つの山裾を廻るとすぐその後ろに、陽に向ってまっ白に花を咲かせた桃山の梨が見えていた。家では「桃山」と呼んでいるように、山には桃が多いのだが、もう桃の花は散って今は梨が咲き始めている。道の途中から山へ登って行くと、やや裏手に当る葡萄畑に薄蒼い煙が

登り、ぱちぱちと芝の燃える可愛い音がはじけていた。
「大っけえ姉ちゃん、待ってつかはよう。」
きぬ子の甲高い声が下で呼ぶ。
「あんた、何しとってん？　早うきなはれ。」
ちょっと下を向いて立ち止り、そう返事をしたこぎくは、せいせいと息を切らして気むずかしそうに眉を寄せていた。
山では祖父と長兄の市次が桃の木の害虫取りをしていた。
桃林の中で、噴霧器の筒先を上に向け、自分も仰向いたまま「飯かあ。」と市次が呶鳴った。桃の葉かげに太陽がちろちろとこぼれ、背の高い、シャツ一枚の市次の身体に細かな模様を落していた。飯の声ですぐ出て来たというように、七十八になる祖父の厚ぼったい丸い顔がこちらを向いてすたすたと前こごみに歩いてきた。頰かむりの手拭の端に、白い、太い頰の髪がのぞいている。無口な、いつも変ったことのないおだやかな表情で、気に入りのきぬ子にぼそぼそと口をきいた。
「きぬ子はんもおいでたんか。」
「何言いよってん。お祖父さん。」
甲高い少女の声が山の中できわ立つ。
こぎくは弁当をそこへ拡げてやると、自分だけ梨の木の下に一人離れて坐った。市次が彼女の何か一人になろうなろうとするのを気づかうように、飯は食わんのか、と聞いたが、あし、家で食べるんや、と答えて、さすがに兄に対しては微笑んで見せた。
頭にかけた手拭を取るこぎくの顔は、梨の花の白さの故か、白々と透いて、都会なれた唇元が薄く、疲れた色が目を強くしていた。市次とそっくりの腫れぼったい瞼は、市次の持っている優しさが無くて、重くたるんでいた。
こぎくはわざと男のように仰向けに寝そべって目をつぶった。木の下をくぐって静かに風が吹いていた。薄く目を開けてじっと見るともなく空を見ていると、太陽の光がどういう風になるのか、薄蒼い空の色は下の方からだんだんに拡がるように桃色に変ってゆく。平らな地面にぴったりと仰向けに背を合せて、そういう空の色などを見ていると、背中のだるさがじじと音を立てるようにひろがり、薄れてゆくように思われた。
正午の上りの汽車であろう、山あいに汽笛が聞え、それがあたりに響いた。汽笛は空の広さを思わせるように響いた。じっと目を据えてこぎくは汽笛のあとを追っていた。
そこには朝の閑な一刻を、掃除を済まして手を洗って来た娘たちが商品の蔭にそっと寄り合って思い思いの話題に微笑み合っていた。きらびやかな高い天井と朝から点いている大きな電燈のこもった光線と、商品の特殊な匂い、その中に点々と立っている空色の事務服の仲間の姿、まだ客の少い朝の時間には、点々と立つこの空色の事務服が遠くまで見渡された。やがてぞくぞくと満ちて来る客の波の中

に、もう自分の時間など無く立ち続けるそれらの姿だった。

二年間のそこの単調なくり返しの朝夕は人生について真面目に対してゆこうとしていた一少女の考えから生活の希望を奪っていった。脱けどころのない疲労は若い健康の上に押し重っていった。お店なんて、肺病の巣だっせ、みんな言ってはるわ。などと仲間同士で語り、友達の二人三人の死を送りながら、遂に自分に廻ってくるのをどうしようもなく、自然に胸を折るように背中のうずくのをじっと、目を強く据えて見つめるばかりであった。こういう娘にとって、或る朝起抜けに、咳き込む拍子にぶくぶくとあぶくと一緒に吐き出されたまっ赤な血は、生活に変化をもたらすやけくそな希望にさえ見えた。病的に熱した目をきらきらと光らせて、縁先の土にぶつぶつとあぶくの消えてゆく自分の血を見つめていた。それからまっ蒼になり、床についた。

そういう思いもあるのに、ひとり離れて田舎へ帰って来ていると、こぎくは堪らなく友達が恋しかった。それはただもう娘らしく友達が恋しいのであろう、決して二年間の女店員の生活ではないのだ、と自分自身でさえ腹立たしくなり、そう思って見るのであった。

兄の何か叫ぶ声がふと聞えた。反射的に、がば、と起きたこぎくの耳に、燃えていた芝の音がぱちぱちぱちぱちと大きく聞え、同時に、

「おっけえ姉ちゃん、山、火事だっぞ。」

きぬ子の声が絶望的に響いた。

山裾から段々にぱちぱちと少しずつ上の方へ燃えつづけていた芝地の火が、勢いよく拡がろうとしていた。市次と祖父が、上着の半纏を振りかざし、跳ぶようにして、ぱっ、ぱっと地面に火をたたき伏せていた。その半纏の下をすり抜け、火はぼぼうと音を立てて横に飛び、前にとんだ。太陽の下で芝の燃える色は薄黄色く見えたが、ときどき、きろ、きろっと赤く光り、半纏を振りかざし必死になってあとを追う兄たちの手の下に、ますますあふられるようにぼぼうと猛り立って前へとんだ。

「村へ言うてこい。」と市次がまっ赤になって呶鳴った。呶鳴りながら自分は火を追うて横へ飛んだ。老人は表情だけは少しも変えていないのだが、市次に負けず半纏を振り上げているその動作で異常なのが知れた。

きぬ子が短かいおかっぱの毛を後ろへはね上げるようにしてもと来た道を跳んでいた。こぎくもそのあとを追って走った。

きぬ子の知らせで、駅前の運送屋からすぐ、荷馬車を輓く村の若い男たちの自転車が三四台つづいて線路の下のトンネルをくぐり山へ向った。

「お母はあん。」

きぬ子は土間へ駈け込むと、せっかちに甲高く、山がなァ、山がなァ、としゃべり出した。土間の隅で、味噌豆を

煮ていた母親の小房は、竈の前を立って来たが、きぬ子の甲高い声を手で制して、
「嫂さんに聞えたらあかんのだっせ、静かにしなはれ。」
女の本能で咄嗟に産褥の嫁のことを言いながら、土間に下駄の音を立てて門口へ出て来た。この駅前の通りのはずれから見ると、まだ山の方に煙などは出ていない。若い駅員が二人線路に立って火の手を探すように身を寄せていた。それを見ると、小房はくすんと鼻をすすり、忙わしく前垂れで手をこすりながらまた家の内へ入るのだった。眉を寄せたことのない小房は、今も目を伏せただけで、ただせかせかと歩いた。燻っている竈に、松葉をつかみ入れてかき立てながら、土間に薄蒼い煙が立ちのぼると、小房はふと竈の外にまでぼっと燃え上る松葉の火を、あわてて長い火箸でせかせかと押し込んだりした。
奥の部屋で嫁の信江の苦しんでいる声がときどき聞えていた。もう二日も床についてうなっている信江を、小房は大仰な、と思い、今押し込んだ竈にすぐ追いかけて一とつかみの松葉を投げ入れた。
こぎくは道をよけて山裾を少し奥へ這入り、熊笹にぐったり身をよこたえていた。登ってゆく自動車の音や、高い男の声など物騒がしく走り過ぎてゆく。ぶるぶるとふるえる指先で、唇をそっと押え、うつつのようにそれを聞いていた。怒濤の中に身を浮かせているような、捨て切った気で、大きな悲劇を待つ気持であった。太陽の下でキラキラと赤くはじいていた薄黄ろい炎を思い、それが山一面に燃えひろがってゆくところを想像した。その火が、この山に移って来ても、逃げ出す気力はなく、頭の上の松に火が跳んできたら、じっと目をつむろうなどと考えたりした。別に悲しい気はないのに、涙がぽろっぽろっとこぼれた。頬に笹の葉が突きささり、ちょっと頭をうごかせば取れるのさえ、その気にならず、ひりひりと痛さを押しつけていた。
さっき、きぬ子のあとを走り出して間もなく、まだ山路の途中で、ぶくぶくと泡の盛り上ってくるような胸の気配に、こぎくははっとして溝川のふちにしゃがんだのである。
ぱっと水の中に血が散って、にじみながら流れ、また落ちて、にじんで流れた。やがて村から人が駈けてくることを思うと、こぎくは水をすくって口をゆすぎ、唇を袖で拭きながら熊笹の蔭を探したのであった。

二

あくる朝であった。
灰色の雲が空一面に大きく動いてゆき、白々とした空気の中に井戸端の牡丹の花の色がほのかに浮いていた。微かな風が花の上を軽く吹いていた。
小房は、米とぎの桶を小脇に抱えて、飛び石にカタカタと下駄の音を立てて井戸端へ出て来た。澄んだ朝の空気に

釣瓶の音が大きくきしり、水の音も冴えて流れた。小房は米を洗って白水が出ると流し許から牡丹の方へ二三歩足を運んで、その白水を牡丹のかこいの中へ流し入れてやった。米谷の家の自慢のこの牡丹は、背の高い小房の丈ほどもある古いものであった。その赤味を帯びた根はたくましく四方へ枝を張って、大きな葉が三畳敷ほどの竹囲いの外にあふれていた。人の顔よりも大きな花輪が、色も形も深々と開いていた。

小房の流してやる白水は、赤味のまじり合った鮮明な葉の蔭にじゅくじゅくと吸われてゆき、蜂が一匹飛んだ。

「お早う。」

市次が手拭を首に巻いて、すたすたと出て来て、牡丹の傍にしゃがんだ。

「へえ、お早うさん。」

小房はトンと米磨ぎ桶を石の上において、市次をむかえるように手を休め、

「昨日は、えらい騒ぎやったな。あれで済まなんだら大ごとやな。」

「今頃、こないしとられへなんだな。」

「ほんまにいな。」

市次は笑って、「どない、吃驚したぞう。」

釣瓶をたぐりながら、

「牡丹もみんな咲いてしもたな。蕾はもう無いだっしゃろ。」

「うん、今年もよう咲いたな」

「牡丹がまだ盛りよるうちは、家も気が強ええな。」

「どないだかァ。この牡丹の木売らんならんこと出けるかも知れへん。」

「しょうむないこと言いなはんな。」

小房はわざとからからと笑って土間へ這入った。市次は顔を合せない機会を摑まえるように後ろから声をかけた。

「信が、安井のお母はん呼んでくれ、言いよったん。」

「へえ、そう。」

声の調子を変えまいとするように、「おまはん今日運送屋から電話かけさしてもらいなはれ、安井の家の前の郵便局で呼んでくれまっそ。」

「ふん、そうやな。」

「へえ、そうしなはれ。今日も山へ行くん？」

こぎくは一人で、裏に面した六畳の部屋に寝ていて、母親と兄の会話を聞いていた。市次が母親に優しいので評判なのを思い出したりした。昨夜も隣りの部屋にうなりとおしていた嫂の信江が気の毒に思えたりした。苦労せずに育ったせいか、信江は、また若い姑と夫の間にすばしこく立ち廻り割り込んでゆくことさえ出来なかった。

とんとんと年寄りが煙管をはたいている。

外では、裏の小道を誰か通るらしく、市次と言葉をかけ合っている。

小房も今日は畑へ出て行き、家の中では信江の世話をしに来た取り上げ婆さんの引きずるような足音がときどき土間にするだけであった。信江は今日もただうめいていた。こぎくは裏に面した六畳に一人寝て、じっと天井に目を据えている。

裏庭には子供の騒ぐ声もなく、正午前の一ときのしーんとした静かさがあった。薄雲が一杯流れていて、太陽がどこにあるのかわからないような、ばあっとした弱い陽が射している。その薄ねむいようなにぶさの中で牡丹の花がゆらゆらとして見えた。

まだ生きていた父親が、一時素麺の製造などをやっていて、この古い牡丹を自慢にし、花の盛りには客など呼んだりしたものであった。その酒の席で父の膝にいた被布姿の自分を、こぎくは今も思い出す。

この辺りの地方は百姓の貧富の差が少くて、一般に地主があまり無く、大抵小さな自作農であった。土地の狭い故か、みんなやっと食べている自作農ばかりである。米谷の家もその一つであったが、父親が存命していたひと頃は、素麺の製造や、山にはその村で初めての果樹栽培などをやり、父親は活花などを道楽にしたりする余裕もあった。

その父親にこぎくは可愛がられた。こぎくという、その土地の古めかしい名なども父の好みであった。こぎくは殆んど百姓をさせられたことなく、高等小学を出ると、彼女は大阪の叔母の嫁入先に働き場所を探して出て行った。素麺など造って見ようとしたり、村で誰もやらない果樹などをやった父親の気性がこぎくに残っていた。同時に、羽織をきながして、活花など道楽にしようというところも、こぎくのきれい事のすきな気質に現われていた。こぎくは都に出て働いていた間中、牡丹の花見の席に、主人役の父の膝に抱かれていた幼時の記憶で我家を考えていた。次女のふじ江が姫路の紡績に入ったことを聞いた時、大阪へ来ればいいのにと、自分の働いている場所と、妹の工場を比べたことがある。

取り上げ婆さんが、ことことと、土間へ信江の飲み水をくみに出て来た。表の土間のまっ黒な土の上に角封筒が重く落ちていた。婆さんは拾い上げ、目のそばに持って行って見たが、解ったのかどうか、懐ろへ入れて、水のみの茶碗と一緒に信江に出して見せた。厚ぼったい顔を苦しさに汗ばませて、泣き出しそうな顔をしている信江は、弱々しい目をちょっと見開いて手紙を取り上げたが、

「こぎくはんじゃ。」

と言ってまた枕につきながら六畳を軽く指した。

「へえ、こぎくはんけえ。そう。」

間の襖を開けて、「こぎくはん、お手紙だっそ。」

「へえ、おっき。」

そのまま立話でも始めそうにした婆さんは、ふと門口に人の声を聞いて「へえ。どなたはん。」と振り返った。

声を聞きつけた信江が、「さ、お母はん。」と呼ぶように

言った。こぎくはそっと起きて、婆さんが開け放して行った襖をそっと閉めた。
「まあ、どないしたん。おまはん。えらい心配しとった。」きびきびした信江の母親の声がし、それまで持ち堪えていた気持が急に崩れるように、信江の、お母はん、と言っておいおい泣き出すのが聞えた。その訴えるような泣き声と、どうしたどうした、と言っている母娘の声を聞いていると、こぎくは居辛いような圧迫を感じながら、いつか引き込まれるように、くくっくくっと息を押えて泣いていた。取り上げ婆さんが何かくどくどと言っていたが、信江の母の怒る声がふと聞えた。
「何や、お前、何をお前敷いて寝とん。莚やないか。」
呶鳴るように言うのを、こぎくははっとして身を固くして聞いた。
「阿呆らしい、何や、何でこないなもの敷いとん。いじらしや。二日もこの上に寝とんか。何で蒲団敷かんのか。」
信江がまた新しく泣き始めた。
「ええ、ええ、泣くことありますかいな、何で自分でそう言わんのや。」
ごとごとと荒く押入れを開けて蒲団を出している気配がした。こぎくは真っ赤になる顔を蒲団の襟に押しつけていた。
丁度小房は昼の支度に帰って裏から土間へ這入っていて、信江の母のこの言葉を聞いていた。彼女は黙って、竈の方へ入り、湯を沸かす支度をした。
暫くすると信江の母の呼んだ産婆がやって来た。海老茶の袴をはいて、革の手提げ鞄を持って、自転車で駈けつけたこの若い産婆がやってくると、取り上げ婆さんはこそこそと井戸端へ出て水を汲んだりした。
産婆は一寸見ると、
「まあ、まあ可哀想に。」と言って、甲斐々々しく腕まくりした。
すぐ、ブリキの便器にほとばしるような小水の音がし、それと同時に赤児が出た。赤児は男の子でもう死んでいた。
市次たちも昼飯に帰って来てい、「もう二時間おくれたら駄目でしたっせ。」という産婆の言葉をはさんで、気まずい空気が流れた。信江の母親は大きな黒塗りの仏壇のおいてある一部屋に市次を呼んで、信江は今日一日そっとしておいて、明日は自動車で実家に連れて帰り、ゆっくり静養させるから、と言うのだった。
「市次はん、あんたが悪いとは言いまへんけど、信江は死んでしもたかも知れまへんのだっせ。あしは、今日すぐにも連れて帰りたい思いまっせ。」
険しい目をして言い始め、それから襦袢の袖口を引き出して目頭を押えるのだった。市次はつぎの当ったズボンの膝をきちんと折ってその上に手をおいていた。
「信江もその方がよう休まるやろ、思いまっさかい。」

そ言って頭を下げた。
夫が村の小学校の校長をしている信江の母は、小さな束髪にし、襟元をきちんと合せていた。小房は手髪の丸髷を殆ど一年中くずしたことがなかった。二人はどちらも険しいものを内に押えながら挨拶していた。
こぎくはそれを聞いていて、小房の、決して調子を変えない柔かいもの言いと、さっきから嫂の出産に決して何ひとつ手助けをしなかったらしいのと思い合せ、気が強いのだな、と思うのであった。
「こぎくは御飯出て食べらへんか、」
いつものように柔かに呼ぶ母の声に、何か外に対して構えている張り切ったものを感じた。彼女は目を反らしたまま頭を振った。
信江が連れて帰られると、小房はばたばたと障子を開けひろげ、蒲団は裏庭に運んで竿にかけた。ぱあっぱあっと勢いよく畳を掃き出している。
こぎくが堪り兼ねるように、「お母はーン。」と呼んだ。
「何もそんなに荒々しくせんかてえだっしゃろ。」
「えらい埃や。」
母親はこぎくの癇に障っているのは解らないらしく、知らんふりに尚もぱあっぱあっと掃いた。こぎくは再び言う気はなくて、黙って顔をしかめていた。
「おまはんとこも掃いたろ、ちょっと起きなはれ。」
そう言って小房はぴたぴたと縁の障子を開けた。

「いらへん。閉めといてつかは。」
「よう辛気くさい、閉めきっておかれるな。」
そう言いながら、小房は仕様なしに障子を閉めた。
まだ幾分上ずっているらしい母親の動作を見ていると、こぎくはふと意地悪くなって言った。
「お母はん、嫂さんに莚しかしとったん？　安井のお母はん、どうないおこりましたっせ。」
「なに言いよん。女が子を産むのに莚敷くの当り前じゃ、わしら、お前ら産むのに座敷で寝たことなどあらしまへんで。いつかて土間で産んだもんじゃ。どない、わしが辛いことでもしたように言いよん。」
「そいかて、安井のお母はんの言い分かて無理ないでっしゃろ、二日も三日も嫂はん苦しんだんやもの。お母はんの言うように許りいかんわ。」
「安井じゃあ、この頃、どうない家のこと見くびっとんじゃ、そりゃ安井じゃあお父っあんは丈夫で勤めとってやし、家かて小人数やし、家らより裕福やろさ。そいかて、どない、長やんの時かて悪う言うとったか。信江はんがみんな言うじゃ。長やんの時は、わしはどない辛い思いしたか知れへんだっそ。」
「長やんの時、そない悪う言うたん？」
「へえとも。」
小房は不断の無口に似ず珍らしく、話しつづけるのであった。信江の実家のことを言って好い縁組みだ、と近所へ

自慢したものであったが、嫁の家から見くびられた、ということが小房にとっては心外でならなかった。
　市次と一緒にいると、くっくっと忍び笑いばかりしてい、きりきりしゃんとゆく質でなかった信江はんも、ずい分我慢していたもんだ、など、とも小房は言うのだった。
　こぎくは、次兄の長次の話が出、神戸の造船所にいていつか不良になったこの兄を思い出した。まだこぎくが家にいた頃、ときどき帰宅しては、すぐこぎくの友達の娘などに、「嬉しい返事を菊の花」などと女郎部屋からでも覚えたらしい文句の手紙などをやったりした兄であった。喧嘩をして、今は傷害罪で刑務所に入っている。
　母親の小房にとっては、この息子が帰宅すれば、どんなに小さくても一軒、家を分けてやらなければならないと、それが今から苦労になっていた。
　こぎくは次兄を思い出して、厭な気がした。安井の家で悪く言ったことも当り前だ、と思いながら、そのことではやはり腹が立った。腹が立ちながら、傷害罪の次兄がいるのかと、今更のように自分の周囲が厭だった。いっそ、刑務所にいるのなら、まだ……の方がよかったろうなどとも思うのであった。長次の家の事を言い出す母親を、彼女はまた意地悪く突っつくのであった。
「長ちゃんが帰って来たら、お母はん牡丹かて売ってしまうかも知れまへんで。」
　言いながら、昨日の朝、市次も牡丹を売ることを母親に言っていたことを思い出し、自分たちがみんな家に結びつけて牡丹に大きな希みをかけているようなのを気づくのだった。
「牡丹は死んだお父つぁんが大事にしとったもんじゃ、わしが生きとるうちは手離すようなことはさせやへん。」
　傷を突かれたような小房はおろおろした気持を、自分で打ち消すように真剣に言って、ガラス越しに鮮やかに見えている牡丹に目をやるのであった。

三

「きぬ子。」
「へえ。」
　裏に何かして遊んでいるらしいきぬ子の返事が聞えた。
「きぬ子。」
　こぎくはまた呼んだ。
「何ぞいな。」
「ちょっと来てつかは。」
「用をそこで言うたらええんじゃ。」
「来なはれ言うたら来なはれ。」
　こぎくは甲高い声を上げた。
　きぬ子の不服そうな、遠慮したような顔が縁からのぞいた。そして中を見て、
「もうおさわさん帰ったったん。」

「きぬ子、おさわさん言う子、新田の中村の子やな。」紡績にいる妹のふじ江の友だちだった娘が、今こぎくの見舞に来て帰ったところであった。
　こぎくの問いにきぬ子は頸を振って甲高くしゃべった。
「ちがいまは。おさわさんな、ほら駐在所のうしろのお国おばはんところの人やで。」
「あ、そうや。あの中村の子やな。道理で。」
　こぎくは繰り返し「道理で。」と言って、駐在所のうしろの小さな家を思い出した。すると馬鹿にされたようにくしゃくしゃしていた気持が、自分の家の優越感で幾らか消えた。お国は、死んだ亭主のかわりに、村でたった一人の、運送屋の牛車輓きだった。
「どうしてもこきつかわれるさかい。病気になるのも無理ないだっしゃろ。」
　おさわという娘がそう言ったのだ。
　誇りだった都会の生活と希望の崩れてしまった今の自分に、母や兄に対してさえ大きな退け目を感じながら、わずかにそれを強気で押しているこぎくであった。こきつかわれるなどとあけすけに言われ、一般の勤人と同じように、自分でさえ触れずにそっとしておきたかった生活の根本的な点を衝かれて、思わずこぎくは恥かしめられたように感じたのであった。このころはおさわも牛車輓きまでしているではないか。自分の家より貧乏な家の娘だ、と分ると「道理で。」と逆に考えた。

「用はもういいけえ。」
「あ、そのインキ壺取ってつかはれ。」
　こぎくは床の下から、角封筒を出してもう一度読みかえし、返事を書こうとするのだった。お互いにそれとなく好きだった男の店員から来たもので、始めての手紙なので遠慮がちながら、自分の気持なども書いてあった。「いつまでもいつまでも、あなたのお帰りを待っています。」
　伝票などで見なれた男の字を見ながら、待っていてどうするのだろう、などとまだ寄宿舎にいるその若い店員を嘲笑的にも考えた。
　――私の家には近郷でも評判される程まれに見る立派な牡丹の木があります。私は我家を、その牡丹ばかり粧って考えていました。そして、そのおろかさに始めて気づいています。田舎で肺病で寝ているのは苦しいことでございます。私は我ままで、その苦しさを突っぱってはいますけれど、やがてそれも長くなれば居づらくなりましょう。親身であっても人の心は個人的なものだと私はよく分ります。あなたは働くものの同志愛、だとおっしゃっていますけれど、私は自分の周囲を見て、そう考えられません。みんな自分の家の体裁をよそおうのに一生懸命です。私は邪魔物になりたくない。私はどうすればいいでしょう。思い返せば、私は故郷を一つの誇りで考えていたようですけれど、そこにも私の破れた身体を休ませる場所はありませんでした。

半月過ぎ、一ヵ月過ぎて、麦の刈入れの忙しい時になっても、信江は帰って来ず、そのうちに、先方からの離縁話になった。家中の者と一諸にいる時にも、笑いを含んだ目でじっと夫の顔ばかり見た信江のことを思い、市次は、仕事をするのさえ厭になり、刈入れの鍬を捨てたくなるのだった。捨てることもならぬ鍬をさくさくと麦の根に切り込ませながら、市次は泣いた。信江の家にひとり頼みに行ってみようかとも思い、しかしそれは彼の自尊心がゆるさなかった。逃げてでも来られそうなもの、来ないところを思い合わせると、自分もその気なのだと、田圃へ出て暑い暑いと言った信江を思い出し、小房と同じように、自分の家が見くびられたという考えになり、劇しく腹が立った。

まあ、あんとき山が焼けた、と思えや。

と、対手を見くびるつもりでそう思って見たが、それは意外にも真実の気持なのに、市次ははっと気づくのであった。どうせ手工業的な生産ではあったし、委託販売の手に安買いされるものではあるが、山がもし焼けていたら米谷の家はこの上どうなるのか、想像してみると、それは女房の問題に代えがたいものに考えられた。

「女房と金と比べるようじゃおしまいだ。」

市次は弱々しく嘲笑してみたが、それは動かすことの出来ない実際のことであった。

もともと比較できないものを、焼けもしない山に比べて、精神的な苦痛を諦める市次の姿に、経済的に押されてゆく自作農の弱々しい、個人的な処世感が映し出されていた。

「また、ええ嫁はん、探しまっさ。」

どこか晴々とした母の調子に、市次は気づいて、ぷすっと向うを向くのだった。

「当分、一人じゃ。めんどうな。」

祖父は話の筋合いが理解出来ているのかどうか、いつもの和やかな顔ですぱすぱと煙草をすっていた。母と息子の気持に、ほとんど同時にすうっと、こぎくのことが浮んだ。どちらも黙っていた。

ある日、こぎくは市次をつかまえて言った。

「嫁はん探すのに、わしが寝ていて悪いな。」

縁談の邪魔になるだろうという意味であった。市次は敏感にそれを察した。自分の気持を見すかされたような気がし、市次は逆に荒々しく言った。

「なに言いよん。そない心配する間に早うようなったらええんじゃ。」

「なかなかようならへん、なったところでわし何のために生きとんのかわからへんもん、死んだ方がましじゃ。」

「嫁入りしたらええやないか。」

「どこへ。田舎へは嫁入り出来へんし、伯母はんみたいな勤人言うたかて、息のつまるようなもんだっせ。苦労してまで嫁入りせんかてええわ。」

その調子に、市次は何か絶望的なものと、拗ねた気分を

感じ、そない、心配するな、と言って座敷を出て行った。
その夜、老人も子供も眠り、小房も床に入っていた。市次だけが外へ出てまだ帰らなかった。
次の部屋のこぎくの気配に、小房は何かいつもと変ったものを感じていた。眠られないまま木枕に首をのせてさっき電燈のネジをぴしんとひねったこぎくの細い腕の影を思っていた。
こぎくはまだ眠らないらしい。
「こぎくはん、早う眠りなはれ。」
「へえ。」
こぎくははっとしたような素っ頓狂な声を上げた。
「お母はん、まだ起きとってん。」
そういう声は不断のこぎくらしくなく、細く慄えていた。小房は何か哀れになり、
「眠られんのなら、話しにいて上げまほか。」
と床を出た。と、こぎくが泣くような、叫び声を上げた。
「いけんわ。お母はん。いけんわ。」
小房はその声で却ってぱっと起きて間の襖を開けた。こぎくはじっとしている。
電燈をつけ、母親はほっとして、娘の蒲団の襟元へ寄って「どないしたん。」と覗いた。
ふと、異様な臭気に気づき、小房ははっといつか鼠を取るのに使ったことのある薬の臭いを思い出した。よくも咄嗟に思い出したという程古いことなのだったが。
小房は娘の蒲団をはいで見ようとした。こぎくはその襟をしっかりと押えていたが、ふと、顔を下向け、わあっと泣き出した。
蒲団の中にこぎくの計画を見つけると、小房はさっと顔色を変え、息を弾ませて、「阿呆なことしなはんな。」
と言いながらそれを引ったくるようにして畳に抛った。
こぎくはおいおいと泣いた。母親が抱くようにして次の自分の部屋に連れてゆくのにもこぎくはぐったりと為されるままになっていた。六畳の部屋で、空の床の傍に、かき餅についた薬が、気味悪く青く光り、畳のあちこちにもちろちろと光っていた。小房は気味悪くなり、台所から雑巾を持って来て拭いた。と今度はその雑巾が台所の闇のなかでまたちろちろと光っていた。
小房は、そっと娘のかたわらに寝ながら、裏のごみ捨て場に抛ったチューブが、そこでも青く光っていたのを何か怖ろしいように思って気になった。彼女はまた丁度降り出した雨の中を裏に出て、ごみの中にも一度それを拾い、肥を汲む便所には捨てられぬと思い、紙に包みながら途方に暮れた。
露地から裏へ帰って来た市次に、小房ははっと驚き、それから、
「今まで、何しとってん。家は大騒ぎや。」
そう言って紙包を懐ろに押し込んでそそくさと家の内へ這入った。

こぎくはその後、だんだん起きるようになった。母の代りに昼飯の漬物など出しておいたり、果物の袋などを貼って手伝った。

こぎくはその間に、自分の身体をためすように、二年間の通勤の朝夕をじっと考えるようになった。二分遅れても庶務課の課長の前へ印を押しに行く朝の時間に、足駄を履いて、雨傘を横に風にさからって行く雨の日の通勤の辛さが生々しく思い出されていた。

もう九月に入り、じりじりと暑かった。昼過ぎの停留場は風を通しながらも、かあっと照りつけられてうだっていた。

駅のへちま棚の下に遊んでいたきぬ子は、這入って来た上りの汽車を見ようとして柵の方へ飛んで行ったが、向い側のホームにちらとこぎくの姿をみとめた。柵の上に足をかけてよじ登り、窓の一つ一つを見ようとしたが、姉の顔はもう見えなかった。

こぎくは小さな風呂敷包を膝の上にのせ、雨傘と日傘との二本の傘を一緒に傍らにおいてじっと窓の外を見ていた。

どうしても口へ入れられなかったかき餅の、ひどい臭気と、薬を買いに行った時の、じっと握りしめた掌の中で印形がじっとり汗ばんでいたのを、いつまでも忘れなかった。

彼女の膝の上の風呂敷の中には、一枚の着換への他には、紺絣の雨合羽と一足の足駄が入っているだけであった。彼女の用意周到な雨支度の中に、悲壮な決心が語られていた。

「からだはもうええんやろか。」

と小房は言った。

「へえ、黙って行ったんけえ、おかしいな。」

これは老人であった。

「わし、見たんじゃ、わしほんまに大っけえ姉ちゃんが汽車に乗るとこ見たんじゃ。」

きぬ子は重大なところを見たというように目を見張ってしゃべった。

「ええ、うるさい、黙っとらんか。」

市次は叱りつけ、独り言のように、

「どうも仕様ないんやろ。」

とつぶやいた。

井戸端の牡丹はいつか葉ばかりになり、山では桃が採れた。

「山で啼くとりを、田圃で聞けば」

と市次が唄う声が桃林に聞えた。

　山で啼く鳥を　田圃で聞けば
　思いきれきれ　きれと啼く……

鋏の音がぱちんぱちんとそれにまじって聞えていた。

（一九三四年六月「中央公論」）

盲目

島木健作

その日の午後も古賀はきちんと膝を重ねたままそこの壁を背にして坐っていた。本をよむことができなくなってからというもの、古賀には一日じゅうなにもすることがないのだ。終日ぽつねんとして暗やみのなかにすわっているばかりである。時々彼は立上って房のなかを行ったり来たりする。わずか三歩半で向うの壁につきあたるような房のなかなのだ。一分間に十往復とすると、一時間には六百回、距離にすると、一里ちかくになる、などと考えながら古賀はあるく。しかしじきに頭のなかがぐるぐるとまわってくる。そこで彼はまたすわり、こんどは塵紙を引きさいて紙紐をよりにかかる。途中で切らないようにこの粗悪なぼろぼろな紙で完全な紙紐をよるということが、しばらくのあいだ彼をよろこばせるのだ。指先がひりひりするようになってからはじめて彼は手を休め、いろんなもの思いにふける。頭が疲れてくると、また立上り、手さぐりで掃除をしたり、狭い房の四方の壁に気づかいながら体操をしたりする。――朝のうち、古賀はいくどかそんなことをくりかえし時間を相手に必死の組打ちをするのであった。しかし――あらゆるたたかいののちに、結局はやはり壁に背をもたせ、茫然としてすわるよりほかにはないのである。

――古賀は顔をあげて高い窓とおもわれるあたりに向って見えない目を見張った。その年の十月という月ももう終りに近づいていた。今日は朝から秋らしくよく晴れた小春日和のあたたかさが、光を失った彼の瞳にもしみるおもいがするのである。日は静かにまわって彼の背をもたせている方の壁にもう明りがさしている時刻である。手をうしろへまわしてさぐってみると、はたしてほんのわずかの広さではあったが、つめたい石の壁がほのかなぬくもりをもってその手に感じられるところがあった。古賀はすわったまま静かにそこまでからだをずりうごかして行った。高い窓からわずかにもれている秋の陽ざしのなかにはいると、古賀の眼瞼には晴れ渡った十月の空や、自分の今すわっている房のすぐ前の庭に、日に向って絢爛なそのもみじ葉をほこっているにちがいない、一本の黄櫨の木などがおのずからうきあがってくるのであった。陽は彼の垢づいた袷をとおしてぬくもりを肌につたえ、彼はしばらくのあいだわれ知らずうつらうつらとした。長いあいだ忘れていた、ふしぎなあたたかい胸のふくらみを感じるのであったが、同時

にそういう自分の姿というものががえりみられ、秋の日の庭さきなどでよく見かける、動く力もなくなって日向にじっとしている虫の姿に似たものをふっと心に感じ、みじめなわびしさに胸をうたれるおもいであった。――ちょうどその時、向うの廊下をまっすぐにこっちを向いてくる靴のおとがきこえてきた。

午後になるとここの建物のなかはひっそりと静まりかえるのであった。朝は、ここの世界だけが持っているいろいろなものおとが、――役人たちののしりわめく声、故意にはげしくゆすぶってみるのであろうとおもわれる彼らの佩剣のおと、扉をあけ又しめる音、鍵や手錠のしまる時の鉄のきしむ音、出廷してゆく被告たちの興奮をおし殺したささやきの声、――そういったもの音が雑然としてそこの廊下に渦をまき、厚い壁と扉をとおし、それは恐ろしいひびきをその壁の内部に坐っている者たちにまでつたえるのであった。気の小さい者はそのもの音にじっとしては坐っておれず、おもわず立上ってはいくどもそこの小さな覗き窓から外をうかがい、房のなかをうろうろし、みじかい時間のうちに何度も小用に行ったりするのである。昼すぎになるとしかし朝のうちのそういうさわがしさもいつか消えてゆき、人々は心の落つきを取りもどすと同時に、ものみなを腐らす霖雨のような無聊に心をむしばまれはじめるのである。――そういう静けさのなかに、近づいてくる靴の音を聞き、耳の鋭くなっている古賀は、すぐにその靴音の主が誰であるかを悟った。そうしてそれが近づいてくるに従って、なんとはなしに自分のところへやってくるもののように感ぜられるのであった。はたしてそれはそうだった。靴音は彼の房の前まで来て立ちどまり、やがて、扉があいた。うながされるままに古賀は机の上にのせてあった黒い眼鏡をかけ編笠をかぶって外へ出たのである。

「おい、こっちこっち」と二度ばかり注意はされながら、人に手を取ってもらわなくてももうだいぶあるくになれて来た長い廊下を行き、つきあたりを右へまがり――そのまがりしなにすぐそばによりそってくる看守の肉体をかんじ、その看守の人のいい髯の濃い顔が記憶のなかにうかんでくると、古賀は、

「誰ですか?」

と訊いてみた。看守は、うん、と答え、それから古賀の耳の近くでパラパラと紙をめくる音がしたが、「ああ、弁護士面会だ、佐藤弁護士」といった。

面会室へはいると、古賀は机をへだてた向うにもさっきから待っているらしい人のけはいを感じた。挨拶をし、それから、椅子に腰をおろした。「やあ、ぼく佐藤です、おはじめて」と快活な太い声でその人はいい、それから鞄の金具のぱちんという音と、つづいて机の上に取り出されるらしい書類の音がさらさらときこえるのであった。

「山田君からあなたのことは始終きいていたんですが、……とんだ御災難でしたねえ。それにこんなところでさぞ御

不自由でしょう、お察しします。」
「ええ、ありがとうぞんじます。こんどはどうもいろいろお世話様になります。」
「じつは、控訴公判の日取がきまったんですよ。」
「あ、いよいよきまりましたか。そいつはおもったより早かったですね。」
「まだはっきり何月何日ときまったわけじゃないんですが、大体、来月下旬頃とほぼ確定したんです。今日、裁判所の意向をきいてきたんですがね。どうせ分離のことだし、あなたは特別不自由なからだだから、一日も早くしてもらおうとおもって。」
「それは、どうも。……私もおもったより早くて、うれしいんです。どうせ年を越すつもりでいたんですから、いつになったって結局はおんなじことと、一応はおもってみますけれども、おそかれ早かれきまらずにいないことは、やはり早く片づいてくれたほうが心もらくなんです。」
古賀は少し興奮し、はしゃぎ出してきた自分自身をかんじていた。彼が弁護士の佐藤信行氏と逢うのは、今日が始めてである。一審のときの彼の弁護士は同郷の先輩である山田氏であった。何かと親身も及ばぬ世話をしてくれていたその山田氏から、ぷっつりと音信がとだえたのはおよそ半年ばかり前の事であった。ある日の朝、郊外の家から事務所へやって来た山田氏が、その場から連れて行かれた事実を古賀がきくことができたのは、それからさらにふた月ほどを経たのちのことであった。この土地には若い弁護士達から成る一つのグループがあり、山田氏はそのグループの中心人物であったのである。姿を見ることはもちろんできないが、山田氏も今は古賀とおなじこの建物のなかに朝晩起き臥す身となっているのであろう。わずか十カ月前には、古賀のために法廷に立ってくれた山田氏が、いまは彼とおなじ立場におかれている事実をおもい、古賀はその一つの事実からさえも、高まりゆく情勢の険悪さを胸にしみて感じずにはいられないのであった。そうしたわけでこんどの控訴公判にはひとりで法廷に立つことを古賀は覚悟していたのである。そういう古賀のところへほぼ一カ月ほどまえに山田氏の友人であった佐藤弁護士から手紙が来た。山田のあとは自分がやることになった。近々にお訪ねしてよろず事うち合せよう、との手紙の文言であった。古賀は力づよいおもいをした。何かとお世話をしてくれる弁護士があらわれたということを自分のためによろこぶこと以外に、古賀が自由なからだでいた今から二年ほどまえには微温な自由主義者としてのみきこえてい、その後もかくべつ変ったともきかなかった佐藤氏が、特に今日のような時代に自分たちの事件を進んでうけ持ってくれるようになったということ——その事実のなかに彼は明るい力強いよろこびをかんじたのである。あらゆる分野においてあとからあとからと人はつづき、ともしびは消えることなくうけつがれてゆくであろう。佐藤氏の場合はその小さな一つの例にすぎ

ないのだ。
「山田さんは御元気でしょうね。」
「ええ、元気です。詳しいことはまだお話することはできませんが。」
「あなたは実際とんでもない不仕合せな目にあわれたものだが……、それだけでも当然即時保釈にすべきだとぼくらは思っているんだが、どうもねえ。目をわるくされてからもうどのくらいになるんです。」
「ええ、早いものでもう一年以上です。あれは忘れもしない去年の八月の五日で、一審公判のはじまる半年ほど前のことでしたから。あの当座はおはずかしいはなしですが、私もしばらくは半狂いのようになり、わけのわからないことをぶつぶつ言っては、房のなかをぐるぐるまわってあるくといったていたらくで、人のはなしにもずいぶん変な言動が多かったといいますが、この頃では余程おちついて来たんです。……」
古賀は堰かれたものがほとばしり出たような勢でべらべらとしゃべりはじめたのである。辻褄の合ったようなまた合わないようなはなしになって言葉はながれて行った。その当時の彼の苦悩についてくどくどと述べるかと思えば、突然彼の事件の発生当時のことに話が逆もどりしたりした。訴えるような、又涙ぐんだようなこえで、せかせかした口調で話すのであった。長い間のここでの生活と、彼がつきおとされた運命の苛烈さのゆえに、すこしは頭もみだれかけて来たものであろうか。頬はおちくぼみ、顎はへんに尖ってい、頭はいがぐりなので顔全体がいじけた子供のように小さくしなびて見えた。黒い眼鏡のかげにかくされている両眼は、おそらくは白濁してうつろに見ひらかれているのであろう。その顔をきっとこっちに向け、しゃべっている、唾の白くたまった口元などを見ていると、昔この男が颯爽として演壇にのぼる姿を見たことのある佐藤弁護士は、何か凄愴なものすら感じ、しばしばその言葉も耳にははいらず、言うべき言葉も知らずただもだしていたのである。古賀にしてみればしかし、彼は今よろこびの頂点にあるといっていいのだ。むかしはむしろ無口といわれたほうで、大抵のことはじっとうちに貯えてだまっていることのできる性分の男であったのだが、目がそうなってからは本はよめず、手紙は書けず、そうかといってはなす相手はなし、どこへ向っても心に鬱結するものの捌け口は閉ざされてしまっていた。そうしてそれはまたなんという苦しみであったことだろう！　そうなる以前の彼はあらゆる費用を節約し、それを一日おきの書信代にあてていた。ふるい友人、あたらしい友人のたれかれにあてて、彼は根気よく書いたのである。毎日よむかなりの頁数の書物のノート代りということ以外に、そしてまた、外の同志との連絡ということ以外に、手紙を書くということの持っていた大きな役割を、古賀はそれを書くことができなくなったのちに、はじめて知ったのである。手紙を書くということは、不自然

な生活を強いられている現在の彼らにとっては、ほとんど唯一の精神の健康法であったのだ。その唯一のものをうばわれ、鬱結したものの圧力にいまは耐えがたくなってくると、古賀はいつもぐるぐると房のなかをあるきまわり、頭をそこの壁にうちつけたりするのであった。そしてたまたま人に逢って話す機会を持つと、ほとんど見境なくべらべらとしゃべりだすのだ。これだけはほとんど自制しかねるほどの欲望であった。それに今日は、自分のいうことをなんでも聞いてくれる人として、佐藤弁護士が前にあらわれたことが、一層彼のそうした欲望を刺戟することになったのであろう。——古賀はしかし、しゃべっているあいだに、いらだたしげに靴を床にすりつけ、佩剣を鳴らす立会の看守部長の存在にはじめて気づき、同時に迷惑そうな顔をしているにちがいない佐藤弁護士をおもい起し、心で赤くなった。彼は急に話をやめ口ごもりながら、自分の饒舌の詫びをいうのであった。

佐藤氏は、「いいえ」といって、

「それで、今おはなししたようなわけでしてね、公判もあと一ヵ月ぐらいのうちなんですから、その前にあなたにいろいろお聞きしておきたいことがあるんです、今日はそれでお訪ねしたんですが」と用件にはいり、書類をぱらぱらめくりながら、「もっとも個々の事実の点は記録にあるとおりでべつにつけ加えることもあるまいとおもいますが、あなたの今の気持ですね、つまり心境というやつです、結局公判廷での態度になりますが、それをお聞きしておきたいんです。」と言ったのである。

古賀は今までの浮きあがっていた気持からたちまち厳粛な気持にひきもどされて行った。いよいよ来た、という感じであった。と彼は急に心の動揺と不安を感じてきた。公判が遅かれ早かれ開かれることがわかっている以上、公判廷にのぞむ態度というものもある程度まできまってはいた。しかし、その態度の如何ということは古賀の運命にとってはまさに決定的なものである。従って事柄のその重要性の前に知らず知らずしりごみし、いよいよという時が来るまで、どこか奥の方に曖昧なものを残していたということは否めなかった。その曖昧さが今彼の心に動揺と不安とをもたらし来ったのである。古賀は心を沈めるために、机の上においた手を額にあて首をうなだれて暫らくじっとしていた。気持はやがて沈まって行った。しかし、今決定的な態度をここで佐藤氏の前にのべるというところまではいかなかった。彼は顔をあげ、もう少し考えてみたいこともある、十日ほど待っていただけまいかと言ったのである。佐藤氏は気軽にうなずいて書類を鞄にしまいこむと、じゃあといって立上り、「近いうちまた来ます、無理はしない方がいいですよ。」と、あたたかみのある声で言った。その言葉の意味はからだの無理をするな、というふうにも、無理をして心にもない態度をとるな、というふうにも聞えたのであった。

ドアをあけて外へ出かけた佐藤氏はそのときふいにふりかえって、「ああ、忘れていた、すっかり忘れていた、」といって、もどって来た。「今日ね、ここへ来るまえに永井美佐子さんに逢ったのです。用事があって行けないからといって五円あずかったのでさっき差入れておきましたよ。今夜よそで逢うとおもいますが、何か言伝てはありませんか？」

古賀の顔には瞬間ちらりと陰翳がさし、複雑な表情が動いたかに見えた。が、それはすぐに消えた。もとの顔にかえって彼は礼を言い、別になにもない、と答えた。永井美佐子というのは古賀の別れた妻である。

房へ帰ってくると、暮れるに早いこのごろの日はすでに夕方であった。からん、からんと、とおくで鉄板製の食器を投げるおとが聞える。雑役夫が忙しげに廊下を走りまわっている。――やがて夕飯がすみ、窓の近くにひとしきり騒がしくさえずっていた雀のこえも沈まってゆくころには、もうすっかり夜にはいったらしい。山の湖のような、しかし底になにか無気味なものを孕んでいる静寂のなかで、寝るまえの二三時間、古賀は自分の考えをまとめようと努力しはじめた。――

雲のようにわきあがってくる思いのまえに彼はいくどか昏迷しては立ちどまり、自分の行手をふさぐ暗いかげの前におののいては立ちすくむのであった。息苦しくなると彼は立上ってあるき出し、それからまた坐った。なんとしても追いがたくはらいがたいものはしかし、こうした場合、いつも過去の追憶であった。ここへ来る人々のすべてがそうなのではあろう、人々は生きた社会生活から隔離され、いきおい色彩に富んだ過去の追憶の世界にのみ生きるように強いられているのであるから。古賀の場合はしかし、ほかの人々にも増してそうなるべき理由があった。――彼は自分の短かいしかし複雑な過去の生活にからむあらゆる追憶を丹念にほじくりだし、ひとつひとつそれをなでまわし、舐め、しゃぶり、余すところないまでにして再たびそれを意識の底にしまいこむのであった。そういう彼の姿というものは、いうならば玩具箱からときどき玩具を取出してたのしむ小児の姿に似ていたともいえよう。だがやがて彼は過去の世界にのみ生きているような、そんな自分自身というものをさげすむ心になったのである。しかし生きている人間が死の状態にまでつきおとされ、しかもなお生きて行かねばならぬとしたならば、そういう彼を支えてくれる何が一体ほかにあるであろう。苦い追憶も今はかえって甘いものとなり――過去の世界はその度ごとに新らしい感懐を伴ってなおも幾たびかよみがえってくる。――

三年前の春のある事件以後、一時的に混乱に陥入った（原文六字欠）にとらえられた古賀は、（原文二十二字欠）を迎えたのであった。とらえられた始終のいきさつについては、今（原文二十一字欠）はある。古賀は少くとも自分一個に関するかぎりヘマはやらぬとの自信を持っていたの

だが、組織の仕事のことゆえ、ほかからくる破綻というものは拒ぎきれぬ場合も多いのであった。他の同志がつくった場所が、(原文七字欠)とおもいながら出かけても行かねばならず、そういうとき、自分の身の安全をばかり考えているわけにはゆかぬ。思いつきの便宜主義、——それが古賀の場合、(原文二字欠)を来たした結局の原因であったが、だがそれも、経験のすくない若い組織のことゆえ、やむをえないことであったろう。そうしたことを今さらおもいかえしてみたとて何になろう、(原文二十一字欠)のだ。古賀はその確信に安んじ、ここへ来てからの彼は、ただひたすらに(原文八字欠)はずかしくない態度をとることにのみ心を砕いたのであった。彼の心の構えはきまっており、腹の底は案外におちつきはらっていた。古賀はかねてから、腹といい度胸というのも、畢竟は時々刻々に変化してやまない外界にたいする、あるプリンシプルのうえに立ったうえでの自己の適応能力にほかならぬ、と信じていたのであるが、数年このかた、多くの先輩である同志たちが、次々に連れ去られて行った、その度ごとにうけた激動と、その激動が次第に沈静してゆく過程のうちにあって、そういう場合に処する彼の心構えも自然にある程度まではできあがっていたものであろう、ことさらに気張り、堅くなった頑張りではなく、冷やかな落つきが、意地のわるいようなふてぶてしさが、古賀の心の基底をなしておったといえる。そうして彼はまたそういう心を意識してはぐくみそだてたのであった。事実またそのためには、(原文七字欠)というものはほかに見出しえようとはおもわれないのだ。(原文五字欠)を毎日目のまえに見せつけられれば見せつけられるほど、それを肥料として(原文十二字欠)心が一日々々(原文二字欠)してゆくのである。あらゆるあまいものを嘲笑し、あたたかいものをしりぞけ、喜怒哀楽の感情を忘れはてた人のような仮面のような表情で彼はそこに坐っていた。だがその無表情な仮面のかげにかくされている無言の(原文六字欠)人々は容易に見抜くことができたのである。やがては恐ろしさというものを知らない人間にまで鍛えあげられるであろうなどと、わずかばかりの苦難に耐ええた経験から思い上っていたのは笑止で、いくばくもなく古賀はどん底の闇につき落され、はかりがたい現実の冷酷さをいやというほど思い知らされねばならなかったのである。——ここでの古賀の生活はそういうふうにして毎日平穏にすぎて行った。すこし気に入った本がはいった時などは、自分が今こうしたところにいるということも忘れてそれによみふけり、巡回役人の佩剣の音に読書の腰を折られる時にはじめてわれにかえって、今の自分の境遇におもいいたる、ということも珍らしくはないのであった。

そうこうしているうちに古賀は六カ月ほどの懲役に服さなければならぬ身となった。彼は以前ある争議に関係し、当時進行中の刑事事件がひとつあったのである。それがち

ようどこんどの新らしい予審中に確定したのであった。それは昨年の春のことであった。予審中であったので、そのままここの未決監にいて刑の執行をうけることになった。仕事は封筒はりであった。

残刑期も残り少なくなった八月の三日のことである。その日は入浴日で古賀は風呂にはいっていた。五日に一回、それも着ものを脱ぐ時からあがりまで十五分しかゆるされないその入浴が、どんなに彼にとってたのしみであったことか。その年の夏は四十年ぶりとかの暑さであった。その暑さはここではまた格別だった、房のなかでは、霍乱を起し卒倒するものが一日に一人はあった。突然に（原文四字欠）ものもあった。「お前、梅毒をやったことがあろうが、こういう時にゃ、頭へあがってバカになるんだ、気イつけろ」まじめなのか、それともからかっているのか、看守がげらげらわらいながらそういっているのを古賀は一度ならずきいた。この暑さのなかでうだり、健康な人間の肉体も病人のそれのように腐りかけていた。古賀のいたのはちょうど西向きの房であったから、長い夏の日半日はたっぷり炒りつけられるのであった。古賀は苦しくなると窓によって背のびをし、小さな鉄格子の窓にわずかに顔をおしつけて、さかなのように円く口をあけてあえぎながら、少しでも新らしい空気を呼吸しようとするのであった。坐って仕事をしていると、時々かるい脳貧血を起した時のように目の前がぽーっとかすんでくる事がある。そういう時には前においてある封筒をはる作業台の上に思いっきり額をうちつけて、その刺戟でわれにかえるのであった。だが、何にも増して彼がそのために苦しんだのはひどい汗もと血を吸う虫とであった。古賀の身体は、青白い静脈が皮膚の下にすいて見えるといったような、薄弱な腺病質からはほど遠いものであった。拘禁生活もまだ一年足らずで、若々しい血色のいい皮膚はまるく張り切ってさえ見えたのであるが、それが土用にはいると間もなく真赤にただれてきたのである。しぼるように汗みづくになった（原文四字欠）が粗い肌ざわりでべとべとと身体にからみつくのであった。夜は夜で汗もにただれたその皮膚のうえを、平べったい血を吸う虫がぞろぞろと這いまわった。おもわず起き上り、敷ぶとんをめくってみると、そのふとんと蓙の間を長くここに住みなれ、おそらくは（原文七字欠）の血を吸いとったであろう、貪欲な夜の虫どもが列をみだして逃げまどうのであった。おなじように眠られないでいる男たちの太い吐息が、その時いいあわしたようにあちらこちらからもれてくる。——そういう古賀が、どんなによろこんで五日に一度の入浴を待ちかねていたかは想像するにかたくはない。

畳半分ぐらいの一人入りの小さな湯ぶねである。古賀は既決囚であったせいか、いつもいちばんあとまわしにされ、その日もやはりそうだった。彼がはいるまえにもう何人の男たちがこの湯ぶねの湯を汚したことであろう。半分に減

ってしまった湯のおもてには、(原文二十九字欠)足を入れると底は(原文四字欠)であった。それからなにか、(原文八字欠)のようなものも沈んでいるらしく足の先にふれるのであった。洗い場を見ると、そこはまたそこで、コンクリートのたたきの上には、(原文十三字欠)とくっついていたりするのであった。(原文十二字欠)川のような臭いもながれていた。——しかしそういう不潔さにはもうみんなが慣れていたのである。だいいち、不潔だなどといってはいられないのだ。古賀もまたそうだった。古賀はからだをとっぷりとその湯のなかにつけた。ただれた皮膚にじーんと湯がしみる。無理に肩までつかってじっと目をつぶっていると、彼はいつもなにかもの悲しい、母のふところにかえってゆく幼児の感傷にも似たものおもいに心をゆすぶられるのであった。——しかしそうしておれるのも、ほんのわずかのあいだである。「もう時間だぞ、出ろよ」と担当看守がそこの覗き穴からのぞいて言って行くからである。そう言われてから、古賀はあわててからだを洗いはじめるのであった。陸湯のでる鉄管の栓をひねってみたが、もう一滴の湯もでなかった。水も——連日の日でりで貯水タンクも空なのであろう、そのタンクから引いている水もすっかり涸れていた。そこで古賀は湯ぶねのなかで、身体もそれから顔まで湯をひたした手ぬぐいでごしごしと洗った。汗もは吹でもののように顔にまでひろがっていたからである。それがすむかすまないうちにバタンと音がして浴場の扉があく。出ろ、という合図である。からだをぬぐうひまもなく、作業衣を肩にひっかけて房へかえり、みると、ひとの垢か自分の垢か、うるけたような白いものが胸や腕のあたりにくっついているのであった。

それが、その日の正午すこし前のことであった。

そしてその夜、うす暗い電燈の下で夜業にとりかかった頃から、古賀は両眼の眼瞼のうちがわが、なんとなく熱っぽく痛がゆくなってくるのをかんじたのである。だが、さして意にもとめなかった。というのは、春から夏にかけて結膜炎を病むということは、塵っぽいなかで目の過労を強いられているここでの作業生活にあっては珍らしいことではないらしく、古賀も亦かなり以前から病んでをり、さし薬ももらっていたのであるが、栄養の関係もあったものであろう、なかなかなおり切らずにその時まで持ち越していたからである。夜業はことにそういう目にはこたえた。朝は目やにで目をあけるのに苦しむこともあるほどであった。そういう古賀であったから、その夜すこしぐらいの異物感を目のなかに感じたとしても大したことにはおもわなかったのである。夜寝てから、半ばは夢のなかで、熱をもった両方の目をなんどとなく手の甲でこすりこすりしたことを古賀は今でもおぼえている。

翌朝起きてみると全身がけだるく、暑さのせいばかりではない、たしかに熱があると感じられるのであった。眼瞼はずっと腫れあがっていて痛みもひどかった。手をやって

みると、耳の下の方の淋巴腺がやはり腫れてふくれあがっていた。黄色い、目脂のもっとやわらかいようなものがぬぐってもぬぐってもとめどなく流れでるのであった。膿汁ではあるまいか？　と疑ったとき、古賀の漠然とした不安はみるみる大きなものになって行ったのである。彼は報知機をおろし、医者をたのんだ。

かなり暇どってから来た若い医者は、「どうした？」といいながら、無雑作に古賀の眼瞼を指でつまみあげると、ぐっとそれをひっくりかえしてみた。と、クリームいろのどろどろとしたものがほとばしるように流れでて医者の白衣をよごした。それは結膜嚢にたまっていた膿汁であったのである。結膜の表面は真赤に熟れ切ったいちごを見るようなものであったという。おもわず、「こりゃ、ひどい。」と、口に出して言って、じっとそれを見まもっていた医者の顔は、古賀はむろんそれを見ることはできないのだが、みるみる緊張して行ったようにおもわれたのである。ちょっとのま、考えているようであったが、やがて手をもとへかえしアルコホルをしめした綿でぬぐいながら、

「トリッペルをやったことがあるかね？」

と、古賀をインテリと見てとったものであろう、そういうような言葉で医者は訊いたのである。古賀が否定の答えをすると、じっと小首を傾けていたが、ふと気づいたようにこんどは、

「風呂はいつだったかね？」

と、訊くのであった。古賀が、昨日の正午すこし前でした、と答えると、ちらりと彼の顔を見つめ、ふたたび考えぶかそうな目つきをしてだまりこんでしまったのである。

病監へ入れられてからは、目の疼痛は一層はげしくなって行った。熱も高く、嘔気をもよおし二三度きいろい水を吐いた。眼瞼が上下くっつくのをふせぐためであろう、睫毛はみじかく剪りとられてしまった。一滴々々おとされる硝酸銀水が刺すように目のなかで荒れまわるのであった。看病夫は二時間おきぐらいに目のなかの昇汞水とおもわれる生温かい液体で目のなかを洗ってくれた。それがすむと冷たい薬液をひたしたガーゼで静かに目の上をおおい——そして古賀は高熱にうかされながら、うつらうつらしているのであった。「どうしたんでしょう、大したことはないでしょうね？」と訊いたとき、看病夫が、「俺たちにゃわからねえよ」といった、その言葉は彼らにしてみればあたりまえのことを言ったにすぎないのであろうが、その時の古賀にはおそろしくつめたいひびきをもってきかれたのである。夕方かえりしなに、医者は看病夫をよんで何かひそひそと話し合っている様子であった。交替で徹夜して看てやれよ、というようなことも言っていた。その言葉はなにかおそろしい不吉なものを古賀に予想させずにはおかなかったのである。トリッペルをやったことがあるか？　と訊かれたときにちらと兆した、そして余りの恐ろしさにむりやりに心の隅の方へおしやって、事もなげ

なふうをよそおっていたその不安が、新たな強い力で今つきあげて来たのである。声をあげて医者を呼ぼうとしたが、言葉がのどのへんでひっつったまま、どうしても出ないのであった。「真実を知ることの恐ろしさ」がそれを拒んだのである。高い天井に電燈のともる頃には、泣き出したいような気持にさえなり、夜ふけて田圃をぶるぶるふるえながらあるいた子供の時の心がよみがえってくるのであった。強い睡眠薬のたすけをかりてうとうとと眠りにはいりながら、「風呂で顔を洗うなよ、風呂で顔を洗うなよ、」と、入浴の時、ときどき注意していた浴場担当のこえを、古賀はぼんやり夢のなかで聞いていた……。

朝、とおもわれる時刻に古賀は目をさました。

目のまえは、うすぼんやりとくらいのである。

古賀はおもわず目の上のガーゼをかきむしって取ってしまった。しかし暗さはおなじことであった。

「先生」

と、古賀はどなった。しかし、返事はなかった。

「看病夫さん」

と、彼はふたたびどなってみた。しかし誰も答えるものはない。

枕もとに近い廊下では、朝のいとなみとおもわれるもの音がもう忙わしげにきこえているのである。古賀はぞっとして恐怖におそわれて寝台の上にガバとはね起きると、大声で何ごとかをわめき立てた。

「興奮するな、興奮するな、」と、そのときすぐ近くにいたらしい聞きおぼえのある看病夫のこえが走って来て、しっかと古賀をおさえつけてしまった。

すべてはその時もう終っていたのである。おそるべき病菌がほんの一夜のうちに、古賀の両眼の角膜をとろとろと溶かすがごとくに破壊し去ってしまったのである。

一切の事実をそれと悟ったとき、古賀の頭脳、古賀のからだじゅうの全神経は、瞬間あらゆる活動を停止してしまった。やがてわれにかえったとき、彼ははじめてしめつけられるような声をはなって号泣したのである。大声をはなって泣き、その声が自分自身の耳孕をするどく打つあいだだけ、真暗な恐怖と絶望の世界からわずかに逃れうるもののごとくに感じたのである。彼は夜に入ってもなお泣いていた。病監の扉をもれ、しんかんとした夜の病舎の長い廊下の壁にひびき高く低く彼のむせぶような泣声がよっぴてきこえていた……

およそ一と月余りを病監におくり、見るかげもなく痩せおとろえた古賀がもとの房へ帰って来たのは秋風がもうさむざむと肌にしみる頃おいであった。黒い眼鏡をかけ、看病夫に手をひかれて長い廊下をそろそろとあるいて来、房へ入ると彼はそこの莫蓙の上に両手をついて崩れるように膝を折った。あらあらしく扉のしまる音がし、役人と看病夫の跫音がとおのくにつれて、いまさらのように心をむしば

むさびしさがわくようなおもいであった。あやうく泣こうとし、わずかに声を呑むのであった。しばらくはあらそわずその感傷のなかに身を浸し切り、古賀はじっとうごかずにいた。六ヵ月の刑期は病監にいる間にすでに終っていたので、その時の古賀はあらためて未決囚となっていた。目の光りを失ってから病監で送った一と月の生活がどんなものであったかを、彼はいまだにはっきりとおもいおこすことができない。今おもいかえしてみても、過去の生活の連続のなかからちょうどその間だけがぽつんと切りとられ、夢と現実との見境いがつかぬようなおもいがするのである。手近にあるものを取っては誰にともなく投げつけ、一週間ばかり半ば手の自由をうばわれていた記憶がある。長い紐状のものは犢鼻褌のはてにいたるまで一切とりあげられてしまったことをおぼえている。何日間か飯をくわずにいて人々を手古摺らせたことをおぼえている。きれぎれにそういういろいろなことをあとさきなしに記憶しているにすぎない。いわば当時の彼は半ばものぐるいに近いものであったのであろう。古賀のあたらしい惨めな生活というものは、だから、その一と月を経てふたたびもとのところへ帰って来たときからはじまったといえる。うつろな心をいだいていま彼は手さぐりで暗の世界を彷徨しはじめた。

──

房の外では一と月まえとなんのかわりもなく、──いや、おそらくは古賀の生れない昔からこのとおりであったろうとおもわれるほどに、平凡に、しかし少しの狂いもない規律の正しさで物事が進行しているのであった。刑の確定した被告は送られ、新らしい犯罪者がそれに入れかわる鍵と手錠のつめたい鉄のひびきがひねもすきこえ、やがて夜になり、また朝が来、おなじことが毎日無限にくりかえされてゆく。

古賀ひとりの身の上にどんな不幸が起ろうが、そんなことはなんのかかわりもないことなのだ。個人の幸不幸なぞはみじんにはねとばし、一つの巨大な歯車がおもいうなりごえを立ててまわっているのである。古賀は虫けらのような、棄て去られ、忘れ去られたみじめな自分自身を感じた。この冷酷な、夢幻をも哀訴をも、ましてあまえかかることなどはうの毛のほどもゆるさない事物の進行がほんとうの現実の姿であると、心魂に徹しておもい知った時、古賀はおそろしい気がした。そうして窓の彼方の赤煉瓦の建物のなかでは、着々として彼を処断するための仕事が進行しつつあるのである。

最初に古賀を襲ったものは発狂の恐怖であった。今までは何ら心を惹かれることなく、むしろ醜いもののようにさえ思いなしていたいろいろな物体の形までが、今は玉のような円満な美しさをもって彼の記憶の視覚によみがえってくる。彼は房のなかにある土瓶や、湯呑みなどを引きよせ、冷たいその感触をよろこびながらふっくらと円みをもったそうした器具の肌をなでまわし、飽くことを知らない

のであった。そうしているあいだに、ほのかなその愛着は次第に力強いものとなり、ついには喰いつきたいほどの愛着を感じて来、同時にひと度、ああこうした物の形ももう二度とこの目に見ることはできないのか、ということに思いいたれば、ただそれだけでもう狂わんばかりの心になるのであった。単に生理的に見ただけでも、五官中の最も大きな一つが失われたために、感覚をまとめる中心が戸まどいをしている形で、思考も分裂してまとまりがつかず、精神状態は平衡を失っていた。そういう下地があるうえに、過去において自分の知っている二三の狂人の事どもがおもいいだされ、そういう時に限ってまた頭は気味のわるいほどにさえざえとして来、彼らの場合と自分の場合とを一々こまかな点にいたるまでおもいくらべて見、はては自分もまた狂うであろう、といふ予期感情の前におののくのであった。古賀の精神状態はそうして一日々々暗澹たるものになって行った。茫然として一日をすごし夜になると、今日も亦どうにか無事にすんだのだな、と自分自身に言いきかせてみるのであった。――その頃の古賀にとって何よりの誘惑は自殺であった。死を唯一の避難所としてえらばなければならないほどに傷ついた人間にとって、自殺がどんなに甘い幻想であるかということは、ものの本などで読んだこともあったが、古賀はいま自分の実感としてしみじみそれを味わうことになったのである。苦しみが耐えがたいものになった時に、ひと度、いつでも死ねる、という考えにおもいいたれば心はなにか大きなものにおさめとられた時のような安らかさを感じて落着くのであった。人間がそこから出て来た無始無終の世界というものが死の背後にあり、死ぬことによって人間はふたたびその故郷へ帰ってゆくがゆえに、それを導く死というものがかくも甘く考えられるのであろうか、などと時には思われもするほどであった。いつでも死ねる、という安心はしかし、反面には直ちに自殺を決行せしめない原因でもあつた。苦しみのなかにも安心を与えてくれるものとして死を考えることをよろこび、心は惹かれながらしかも容易にはそれに手をふれようともしないその気持というものを死と遊ぶとでもいうのであろうか。――自殺の一歩手前で生きている人間は今日どこにでもいる。唯、(原文五字欠)がそこまで堕ちなければならなかった場合、事柄は厳粛なものを含んでい、人の胸をうたずにはいない。

この真暗な心の状態から古賀がすくわれ、やがて次第に落着きを取りもどして行った。その契機ともなったところのものは、聴覚の修練ということであった。分散した精神を統一するためにはただ漫然とあてもなく努力したとて無益であろう、ということに気づき、視覚を失った不具者の自己防衛のためであろうか、丁度そのころ、耳が次第に異常な鋭敏さを加えつつあることを自覚していた古賀は、心を聴覚の修練にもっぱらにすることによって精神の統一をもはかろうと努力しはじめたのであった。そうしてその試

みは成功したといえる。ここの建物の内部に自然にかもし出される、単調ななかにもあらゆる複雑な色合いを持った音の世界に深く心をひそめることによって彼は次第に沈んだ落着きを取り戻してゆき、その後の古賀にとっては外界とは音の世界の異名にすぎないものとなったのである。一つは現在の環境がかえってそういう試みに幸するところがあったのであろう。その時からおよそ一年を経た、この物語をはじめた頃の古賀の耳や勘のするどさというものは、ほんの昨日今日のめくらとはおもえないほどのものになっていた。われながらふしぎにおもうほど、鳥やけだものの世界はかくもあろうか、などと時にはふっとおもっても見るほどであった。たとえば数多い役人の靴音を一々正確に聞きわけることができ、靴音が耳にはいると同時にそれと結びついた役人の顔や声がすぐに記憶のなかにうかんでくる——それは何も古賀に限ったことではない、少し長くここに住みなれた人間にとっては珍らしいことではないかも知れぬ、しかし古賀はそれ以上に、自分のところへ用事をもってくる靴音をかなり遠くにあるうちに正しくそれと感ずることもできるのである。天候にたいしても——もっともこれは病人などにもそういうものがあるにはあるが、以前とは比較にならぬほどに敏感になって、朝起きてああ今日は雨だな、とおもえば多くその日は雨である。必ずしもからだの快不快によるのではない、ほんの感じでそうおもうだけではあるが、それが適中するのである。もっとも古賀はそれ以外にもう一つ天候を予知する方法を知っていたのであるが。それは雀の鳴きごえによるものであった。ここの建物の軒下にはたくさんの雀が巣くってい、房の前の梧桐や黄櫨の木蔭に群れて一日じゅう鳴いているのであるが、その声の音いろによって、——それまでになるにはかなりの日時と修練とを要しはしたが、古賀はいつかその日の天候を大体いいあてることができるようになっのである。言葉では言い表しがたい細かな感じのちがいではあるが、晴れる日、くもる日、もしくは雨になる日によって雀の鳴きごえがそれぞれ少しずつ異ったひびきをもって聞かれるのである。人間でいえば、沈んだ声とはしゃいだ声の、乾いた声とうるおいをもった声のちがいででもあるのであろう。小さな動物なぞはやはり、自然の支配をうけることがそれだけ多いのであろうとおもわれる。毎日暗がりにぼんやり坐って小鳥のこえを聞くことは、今の古賀にとっては何ものにもかけがえのないわびしいたのしみになっているのであった。今に刑がきまり、よその刑務所にやられ、そこの窓近くこの愛すべき小鳥の訪ずれがないとしたならばどうであろう、などと時には真剣に考えてみることもあるのである。——古賀はまたこのごろ、季節々々の切花を買っては房のなかへ入れている。目が見えんくせに花を買うといって役人などがわらうのであるが、古賀のはもちろん見るのではなく、匂いを愛するのである。だから香りのない花がはいってくると失望するのだが、その花がやがてし

ぽんで来、花びらのくずれおちるときの音が、かなりはなれた机の上においてあってさえずいぶんとはっきりきこえるのである。夜ふけの枕もとに、目がさえたまま眠られずにいる古賀はしばしば余りにも大きすぎるその音を聞き、何か不安を感ずることさえあるのであった。

また、いつかこういうことがあった。何の用事であったか看守につれられて中庭へ出て行ったときのことである。中庭をつききり、向うの廊下の入口へもうだいぶ近づいたらしいと感じたとき、古賀はおもわずはっとして一間ばかりもわきへとびのいたものである。間髪を入れずその瞬間に、何か大きなものが上から、たったいま古賀があるいていたあたりへはげしい音を立てて落ち、ついでもののこわれる音がしたのであった。きいてみると、囚人が屋根へ上って屋根瓦の破損箇所を修理していたのであるが、何かの拍子にあやまって束にした瓦をおとしたのであった。少しおくれていた看守もその時の古賀にはおどろいて、えらいもんだな、みんなそうなるものかな、と感心していた。

――これらは耳の鋭敏によるというよりも、からだじゅうの全神経の微妙な統一の結果であろう。

――心が狂うであろう、という眉に火のつくようなさしあたっての苦悩がそのようにしてややうすらいでみると、こんどはしかし、心に余裕がなかったために今までかえりみずにいたひとつの苦悶があたらしくはっきりと浮きあがって来るのであった。今後の自分はどうしたものであろう、どういう考えの上に心を据えて生きて行ったものであろう、という問題である。みじめにうちくだかれ、踏みつけられた今となっては、昂然と眉をあげておごり高ぶっていた過去の自分というものはみじんにくだけてとび、自分が今までその上に安んじて立っていた地盤ががらがらと音を立てて崩れてゆくことを古賀は自覚せずにはいられなかった。えらそうなことを言って強がっていたってだめじゃないか、何もかも叩きつけられないうちのことさ、と意地わるくせせら笑うこえを古賀ははっきりと耳近くきいた。ただただ与えられた運命の前に頭をたれてひれふすよりほかにはなかったのである。今までは、どんな場合にもつねに一つの焦点を失っていなかった。内から外から彼を通過するあらゆるものはみんなその焦点で整理され統一された。今はそういうものがなくなっている。だがそうかといって、苦しまぎれになんらかの観念的な人生観というものを頭のなかにつくりあげ、そこに無理に安住しようとしたところでそんなことができる筈のものではない、古賀はよるべのない捨小舟のような自分自身を感じた。悲しいときには子供のような感傷にひたり切って泣き、少しでも心のらくな時にはよろこび、その日ぐらしの気持で何日かを送った。彼はまだ打撃をはねかえし、暗のなかに一筋の光を見るだけの気力をとりかえしてはいなかったのだ。従来、自分の立っていた立場にひとまず帰り、そこから筋道を立ててものごとを考えてみるだけの心の余裕をとりかえして

はいなかったのだ。彼が再たび起ち上ってくるまでには、なお長い暗中模索の時が必要とされたのである。――そうしてかなり長い時を経たのちに、古賀が最初に心を落着けたところというのは、一つのあきらめの世界であった。それは必ずしも宗教的な意味を含んで言うのではない、捨小舟が流れのままに身を任せているようにすべてを自然のままに任せきり、いずこへか自分を引ずってゆく力に強いて逆らおうとはせず、そのまま従うという態度であった。なるようになるさ、とすべてを投げ出した放胆な心構えであったともいえる。今まで軽蔑し切っていた、東洋的な匂いの濃い隠遁的な人生観や、禅宗でいう悟りの境地といったようなものがたまらない魅力をもって迫って来たりした。そういう気持におちつくための方法として古賀は好んで自分の貧しい自然科学の知識をほじくり出し、はるかな思いを宇宙やそのなかの天体に向って馳せ、やがてはほろびるといわれる地球のいのちについて考えたり、それからそのなかに住む微塵のごとき人間の姿について思いを潜めたりするのであった。すると世の人間といとなみがすべて馬鹿々々しいもののように思われて来るのである。そういう考えが一段と高い立場であり、窮極の行きどころのように一応は考えられてくることはなんとしても否めない事であった。「社会」から隔離されているこの世界にあっては、ひとり古賀のような異常な場合でなくてもすべての人間にとってこういう考えが支配的になる根拠はあったのである。

しかし古賀はひとまずそこに落着きはしながら、心の奥ではそこが畢竟一時の腰かけにすぎないという気持を絶えず持っていた。理論的に問題を解決していない弱味をはっきり自覚していたからである。いわば、それは、はげしい打撃にうちひしがれた彼の感情がずるずるべったりに到達した場所にすぎなかった。昔彼の立っていた立場はまだ少しも手をふれることなくそのままであった。そして心の奥底では、古賀にはやはりその立場を信ずる気持があった。そこへやがてはもどって行ける時がくるような気持がほのかにしていた。――彼がしばらくでも腰をおちつけていたその立場が案外に早く崩れねばならない時がしかしやがてやって来た。古賀が第一審の公判廷に立たされる日がそうこうしているうちに近づいて来たのである。

あたらしい身を切るように切実な問題が、さらにもうひとつ急速な解決を迫ってきた。公判廷においてどういう態度をとるべきか、従来自分の守って来た考えにたいしてはどうでなければならないかという問題である。古賀は懊悩し、息づまるほどの苦しみにさいなまれた。食慾は減り見るかげもなく瘠せはてて久しぶりに逢った山田弁護士が声をあげておどろいたほどであった。理窟の上からはしかしこの問題は、大して考えるまでもなくすでに早く古賀の頭のなかで解決されていた。ただ明かにわかっていることを踏み行えないところに懊悩があったのである。くりかえしくりかえし古賀は自分に答えてみるのであった。――そう

ではないか？　なぜといって自分はもちろん一定の確固たる理由があってその立場をとるにいたったものである。ところでその後自分は思いがけない不幸な目にあった。だが、そうした個人的な不幸というものが一体なんであるか？　人がどういう不幸にさらされねばならないか、それを誰が知ろう。どんな惨めな目に逢おうとも、自分をしてそうした立場をとらしむるにいたった原因が除かれない限りは自分はその立場を棄てえない筈である。棄てたといえばそれは自らをあざむくものであろう。もちろん、失明した今の自分は自分たちの運動から見れば一箇の廃兵であるにすぎない。しかしそれは、自分が今まで抱いていた思想を抛棄しなければならないという理由にはならず、いわんや従来の考えが間違いであったということを宣言しなければならないという理由にはならないのである。……

時にはまた自分の内部にうごめいている醜悪な他の自分を擁護するために、あらゆる有利な口実を探し出し、ならべたて、それが決して醜くはないこと、それこそがほんとうの自分であることを論証しようとして全力をあげることもあった。が、次の瞬間には彼はあわてて苦しげに頭をうちふり、自分自身をはっきりと真正面に見据え、思いきり冷酷に言い放つのである。――今更になってあれやこれやと、はずかしくもなくよくいえたもんだ、あらゆる暗い運命ははじめっから承知の上ではなかったのか。不幸な目にあっているのは何もお前ばかりでない、ここに来てからだってお前はすでに多くのそうした不幸をその目で見た筈だ。昨日もお前の筋向いの房にいた同志が発狂した。その時の叫び声はまだお前の耳に残っているだろう、お前の受けた不幸は偶然的な特殊なものであり、それだけ大げさに考えあまえた気持でいるかも知れないが、もっと普遍でしかもはるかに（原文七字欠）がどれほど多く世間には行われていることか。そしてそういう不幸の根を（原文十二字欠）ためにはじめたお前の仕事ではなかったのか。それにいまさら土壇場になってやれなんの、やれかんのと。……

古賀は恥じた。人気のない闇のなかで彼はひとり心で赤くなった。

ついに古賀はある程度に心を決するところがあった。しかしその決定的な態度というものを山田弁護士にすら告ぐることとなく彼は公判廷にのぞんだ。彼には自信がなかったのである。きめておいても最後の場合、どうなるかも知れはしないという不安が絶えずあったのである。そして一度思いが年老いた彼の母の身の上に走るとき、その不安がますます大きなものになって行くことを古賀は感ぜずにはいられないのであった。

古賀は母にはもう長いこと逢っていなかった。母はその年、彼の捕われた事実を知って郷里から出て来、遠縁の家に身をよせてこの町に滞在していたのである。古賀の失明の事実は役所の方から一応知らせたらしい様子であった。母は幾度も面会に来たが、失明後の古賀は頑固に拒んで逢

わずにいたのである。逢った瞬間の恐らくは胸もつぶれんばかりの老いた母の心の驚ろきというものを想像するに堪えなかったのである。

古賀が最後に母と別れたのは四年前の秋であった。ある争議に関係してしばらく入獄し、やがて保釈出所した古賀はその年久しぶりで故郷へ帰ったのである。わずかの入獄期間中にも情勢は変っており、出て来た彼はある種の決意を要求されていた。その決意を固めるには時日の余裕をおいてなおいろいろと考えて見なくてはならず、陰ながら母に長い別れを告げる為にも一度は帰郷する必要があった。母は地主で同時に村の日用品を一手に商う本家の伯父の家に寄食していた。

――わざと裏口から這入り、茶の間で伯父や伯母と挨拶をしている間、母は台所で何かごそごそと仕事をしているらしい様子であった。その後ろ姿がこっちからも見えた。しかしその様子は仕事はもう疾うにすんでいながら、わざとそうやっていつまでも手間どっているというふうに古賀には見えた。やがて伯母によばれ、ぬれた手をふきふきやって来たがその顔はむっと怒っているような表情であった。

「帰っただか」と低くふるえるこえで、一口だけ言った。古賀はその表情のかげに、激情を辛うじておさえている、一と皮むけば泣き出すにちがいないものを見てとった。

伯父伯母との間には格別話すこととてもなく三十分も坐っている間にもう言葉はとだえがちであった。好人物の夫婦であっただけに強い事は言わなかったが、やわらかい言葉のなかにはげしい非難の針を含んで古賀を刺すのであった。伯父は古賀の小学校時代の同級生の消息についていろいろ語った。地主の息子で東京に遊学していたものは多くその年の春卒業していた。だれそれはどこへ就職したとか、だれそれは嫁をもらったとかいうはなしを伯父はするのであった。それが単純なニュースというより以上の意味をもって語られている事は明らかであった。父の死後、わずかばかり残った田地を売ってそれを学資として上京していた古賀だ。母はその間、伯父の家に身を寄せて彼の卒業の日を待っていたのだ。それがもう一年足らずというときに突然警察からよばれ、不吉な知らせを受けとらなければならなかったのである。

母の居間にあてられている三畳の部屋にはいり、古賀はそこで始めて母と二人きりで向いあった。母の顔を目の前にしげしげと眺め、五十の坂を越すと人はどんなに急速に老いるものであるかということを古賀ははじめて知ったのである。

「よう丈夫で帰ったのう」というと、母の日に焼けた頬にはみるみる大粒の涙がつたわった。

翌日から古賀は、遊んでいる間にと東京で引受けて来た翻訳の仕事にとりかかった。少しは金にもなるのだった。夜、母は机に向っている息子の側でおそくまで針仕事をし

ていた。時々、「これ、通してけれ」といって目をこすりこすり古賀の前に針と糸とを出すのであった。古賀の若いたしかな目は待つ間もなく針めどに糸をとおすことができた。糸を糸まきにまく手伝いをさせられることもあった。そういう息子の姿を見るときの母の目はやさしくうるんでいた。母は東京での古賀の生活については少しも聞こうとはしなかったし古賀も別に話はしなかった。母は息子を信じていたのだ。悪者であるといわれていた息子は、帰ってみれば昔よりもやさしく言葉や態度はぐっと大人びて何か頼もしいものさえ感ぜられるのだった。

三月ほど経った。東京からはしきりに手紙が来出し、帰らなければならない日が近づいていた。そういうある晩、古賀は村から五里はなれたT市へそこの劇場にかかった新派劇を見せに母を連れて行った。母は歌舞伎でないことを不満がりながら、しかし子供のように喜んだ。幾つかの番組のなかに母と子を主題にした劇が一つあった。始末は通俗なハッピー・エンドだが明らかにゴルキーの母をいくぶんか模したものであった。見ている母はいくども吐息をついて言った。

「よくやるのう、まるでうちの親子そのままぞい。」

帰りのはげしくゆれる電車のなかで、母はいくどもその夜の印象を語った。そして生きているうちに一度いい歌舞伎が見たいと言った。雑誌の色刷りの口絵かなにかで名優の仕ぐさを見、いろいろ空想し、たのしんでいるらしいのであった。ぼろ電車のはげしい動揺からまもるために、手を背なかからまわして母の小さなからだを抱きながら、古賀は、

「ああお母さん、こんどは東京の歌舞伎につれて行ってあげますよ」と、あきらかな嘘を言ったのである。

それから二日後の昼、母が島に出ている間に古賀は家を出てそれっきり帰らなかった。かんたんなおき手紙のなかには翻訳の稿料を入れておいた。もう稲刈のはじまる季節であった。空も水も澄み切って、故郷の秋は深い紺碧のなかに息づいていた。――その後年を経て親子がふたたび逢ったところは、いま古賀がいるこの建物のなかであった。

――面会に来る母の小さな姿を見るごとに古賀はいつも思うのであった。母はこの年になるまで生れた村を一歩も外に出たことのなかった百姓女だ。それがこんどはじめて目に見えないある大きな力に押し流されてこの大都会に出て来たのだ。そうして自動車や電車の響に絶えず驚かされながら、世なれた人間でさえ脅やかされずにはいないこの建物を訪ねてくる。そこではいかめしい鉄扉や荒々しい人々の言葉におどおどし、自分にはよめない西洋数学で書かれた面会札の番号をいくども側の人にたずね、――人々はその時あまりいい顔をしないだろう――その札を汗ばんだ手にしっかと握りしめながら、そこの腰かけにちょこんと坐って今か今かと呼び出しを待っている、……古賀にはそうした母のめっきり白くなった髪や、しょぼしょぼした目

までが見えてくるのだ。時々母は塵紙のような藁半紙に鉛筆で一字々々刻みこんだような仮名ばかりの手紙を書いてよこす。古賀は房の入口に近く立って、房の外で無表情な言葉で話す役人にその手紙をよんでもらうのである。

公判までに古賀には尚一つ処理しておきたい問題があった。妻の永井美佐子との関係である。

美佐子は彼の妻であると同時に同志でもあった。ここへ来るとすぐに、古賀は彼女に対し今後はどうにでも自由な行動をとるように、自分の事は忘れてもいい、仕事を忘れるなと言ってやったのである。彼女に対する彼のこういう態度は彼の平生の持論から出発していた。何年ここにいることになるか、生きて出るか死んで出るかもわからない身でありながら、妻に向ってはいつまでもそうして待って居れと強いる、それは許されないことであると、古賀は信じていた。古賀はかねがねこの建物のなかにいる同志のある人々に対し苦々しいものを感じていたのである。彼らの外にいる妻に対す態度というものは、なんのことはない封建時代の家長のごときものなのだ。ここでの自分の生活に同志である妻の生活を全く従属させようとするのである。外にいる彼女たちの上にひたすらに夫の権利をふるまおうとするのである。――言うならば、その二つの面は一箇の人間において別ちがたく統一されているに係らず、同志としての彼女を忘れ、妻としての彼女の半面をのみ強調するにいたるのである。その結果はどうなるか？　彼女たちの多くは次第に(原文八字欠)、やがてはいわゆる家庭へ帰った女となる。夫はまた夫でそれをむしろ喜こんでいる。(原文八字欠)お互いを高めるためにのみ結合した筈であるのに、彼は今はただ世間普通の男の女にたいする愛情を彼女に感じているに過ぎないのだ。そのうちに彼女たちのうちの弱いものは堕落して行く。経済的に窮迫してそうなって行くものもある。そうならないものでも多くは弱ってなかにいる夫に(原文二字欠)精神的影響をあたえるような言葉を面会ごとに口にしたり、手紙に書いたりするようになる。夫もだんだん弱って行く。そうした結果は(原文十字欠)彼の態度にもひびかないわけにはいかない。――これでは(原文八字欠)。

自分の周囲にそういう同志の姿を余りにも多く見せつけられた古賀は、ついにはいわゆる(原文四字欠)の結婚それ自体に反対したい気持にさえなっていたのである。それは度をすぎた機械的な反撥ではあったであろうが、彼が美佐子に対して取った態度もそういう気持から出ていた。自由な行動をとるように、という言葉のなかには別れようという意味をも含めたつもりであった。お互いが間違いをしでかさないためにはそれが唯一の方法であると彼は考えたのである。だからその後美佐子が、ある合法的な組織に属している同志上村と恋愛関係にあるらしいとのうわさを耳にした時にも、そういう場合にすべての男が感ずるにちがいない一応の感情はうけながら、古賀は案外平気で居れた

のである。どういう考えで言ったのかは知らぬ、ある時同志の一人が手紙に書いてそれとなく右の事実を古賀に伝えたのであった。其の後面会に来た美佐子の様子はいつもと別に変ったとも見えなかった。――目が今のようになってからはしかし古賀の心持は急に変って来たのであった。別れたくない気持がひしひしと迫って来たのである。その変り方を彼は心に恥じはしたが、心身ともに弱り藁一本にもすがりたい気持になっていた当時の彼としては当然のことであったろう。同時に古賀は美佐子の心にもなって考えないわけにはいかなかった。上村との事がほんとうであるとすれば、美佐子としても自分と別れるつもりでいたにちがいはない。ただそれを言い出すに適当な時を待っていたのであろう。それがこんど古賀がこういう不幸な目にあってみれば、押し切って言い出すわけにはいかず、さぞ困惑していることであろうと思われた。幾度か躊躇した後公判の迫って来たある日、古賀は彼女にあてて手紙を書いた。ぼくは自分の不幸な状態を口実に君をしばろうとはしない、ぼくの考えは今までと少しも変ってはいない、と彼はそのなかで言ったのである。書きながらも彼女のうちに封建時代の貞女らしいものを予想し、それをのぞむ心があり、古賀は自分の矛盾を恥じた。だがそれは自分勝手な考えでしかなかった。しばらく経ってから来た美佐子の手紙ははっきりと別れることを告げて来たのである。

その手紙が来てから間もなく美佐子は一度面会に来た。今までどおり面会にも来たい、また差入れもしたいから承知してほしいとの事であった。――面会を終えて帰って来、房へ入った時に古賀ははじめて浸みとおるような寂しさをかんじた。彼女の存在が自分のここでの生活を支えていた大きな柱の一つであったことを今はっきりと知ったのである。心の一角がぽこんと凹んだような空虚な寂しさであった。彼はいよいよたったひとりになった自分をするどく自覚した。

古賀はしかし同時にすべてから解き放された自由なおちついた気持が深まって行くのを感じた。葦のごとく細く弱いしかし容易には折れない受身の力を――弱さの持つ強さといったものを自分のうちに感じたのである。

公判は翌年の二月の終りであった。じとじととみぞれが降り、寒さがじーんと腹にまでこたえるような日であった。古賀ただ一人の分離裁判であった。彼はかねて母が入れてくれた綿入れを重ねて着、いつものように黒い眼鏡をかけ、重い手錠の手をひかれて裁判所の第一号法廷につづく高い三階の階段をのぼった。手錠をかけられる時、いつもよくしてくれる年老いた看守が、「どうも、規則だから、な」と、低く、つぶやくように言ったその言葉を彼はしみじみとした思いで聞いたのである。

古賀は陳述台を前にして立った。

「古賀良吉だね」

裁判長の声を聞いて古賀は低く、はい、と答えた。――

一瞬、その直前までかすかにうちふるえ、そわそわしていた彼の気持は水のように澄んで行き、陳述の態度もその瞬間において決定したのである。一応の事実しらべがすんだ時、人の好さそうな裁判長（勿論古賀は声でそう思っただけである）は、
「被告は拘禁中、目をわるくしたそうだが気の毒なことであった」といった。うがちすぎた想像ではあろうがそのあとにすぐつづけて、「被告の今日の心境は？」と尋ねたところから察すると、向うからそのように進んで失明のことを言い出すことによって古賀に自分の不幸について訴える機会を与え、いわゆる転向を彼に語らしむるように仕向けたのかも知れない、それは不幸な古賀に対する裁判長の好意であったのかも知れない、とも考えられるのであった。しかし古賀は、「はい」と答えたまま彼の受けた不幸についてはついに一言も言わなかったのである。心境は？　と問われた時には、過去において（原文十二字欠）と思うといい、今日はすでに（原文三十四字欠）と答えたのであった。行動の出来ない身で依然その思想を固持するとは被告らの理論体系からすれば矛盾ではないか？　とつっこまれたのに対しては、（原文十四字欠）古賀はそれらの答弁をかんたんに落ちついた低声で答え、そして公判は終った。
古賀の母はその日やはり傍聴に来ていた。あれが良吉かえ？　あれが良吉かえ？　といって手錠編笠の姿で公判廷に這入ってくる古賀を不思議なものを見るように見つめながら、何度も何度も側の同志にきいていた。そしてあれが古賀にちがいないということを口ごもりながら、その同志が告げると、信じがたいと言ったふうにいつまでも小首をかしげているのであった。公判が終り、閉廷が宣言され、古賀がもう帰るのだと言うことがわかると、その時までじっとしていた彼女は突然なにか大声に叫んで立上り、幾列にもならべた長い椅子を縫うようにして古賀の方へ走りよって行ったのである。（その声は古賀もきいて何事であろうと不安に感じていた）もちろんそれは人々によってすぐに阻まれはしたが。それから同志の二三人と一緒に外へ出、同志たちは近くのうどん屋でうどんをごちそうしたのであるが、そこへ腰をおろすと彼女ははじめてふところから手ぬぐいを取り出し目をおおい、声は立てずにさめざめと泣いたという。――古賀は同志の一人から手紙でその時の様子を詳しく聞いたのである。
そしてその時から今日までちょうど十カ月になる。
佐藤弁護士に逢ってから二日後には裁判所から控訴公判の開廷日を通知して来た。――佐藤氏に約束した十日間の日はいつの間にか過ぎ去った。十一月にはいると間もなく霜がおり、朝晩はめっきり寒くなった。三方の石の壁から、うすい蓙一枚をしいてすわっている床板から、冷が迫って来て骨身にこたえた。その頃から古賀はこんこんとへんな空咳をし、そして少しずつ瘠せて行った。

ある日、彼は突然教誨師の来訪をうけた。
「控訴公判の日がきまりましたそうですな」
扉を細目にあけ、その間からからだを半ばなかへ入れて、さぐりを入れるような言い方をするのだ。声もそうなら目つきもそうであろうと古賀は思った。彼が何の用を持って訪れたかを古賀は知っていた。ふっと古賀はなんというこ となしに（原文十四字欠）を心に感じた。彼はうなずいたきりだまっていた。
「お母さんは面会にいらっしゃいますか？」
古賀はなおもだまりつづけていた。
「一度公判前にお逢いになってゆっくりお話なすったらいかがです。私もいろいろおはなししてあげましょうか」
古賀はかんたんに礼の言葉を述べたきりでその後は一言も口をきかなかった。目の見えない彼は、手持ぶさたな相手の態度にも無関心をよそおい平気でおれるのであった。
――やがて教誨師は出て行った。
翌日は呼び出されて典獄に逢った。
典獄の態度は教誨師のそれよりもずっとあらわであった。すべてははっきりとしていた。彼はまず古賀の「心境」をたずね、母の近況をたずねた。それから古賀に向って一つの勧告をした。そしてさすがにこれはやや遠まわしにではあったが、その勧告を入れるならば、保釈出所は容易であろうということをほのめかして言うのであった。典獄は丁寧な言葉でそれをいい、温顔（そう古賀は想像した）をもって終始した。古賀は言葉すくなに答え、もう少し考えて見たいこともあるからと言って帰って来たのである。帰りの廊下で編笠の隙間からのぞかれる彼の顔は、心持蒼白に引きしまって見えたが、その口もとはかすかにゆがみ、冷やかな笑いに近いものさえそこにはうかんでいた。……
――古賀はこの数日来の興奮が次第におさまって行くのを感じていた。同時に心の奥に残っていた曖昧なものの最後の一片が、過去の回想に浸っているうちにいつか自然と除かれてしまったことに気づいていた。――一審の公判を終えてから今日まで十ヵ月、その間彼は幾度も弱り又元気を取戻した。元気をとりもどし、あたたかい血潮の流れを身裡に感じ、萎縮し切っていた胸がまるくふくらんでくる思いがすると古賀は記憶のなかから幾つかの歌をとり出しては口ずさんだりするのであった。それらの歌はみんな彼の過去の闘争の生活と結びついていた。若々しく興奮し、心持ふるえる押し殺したこえで暗闇のなかで古賀はそれをうたうのだ。だがやがて彼はまたじりじりと弱ってゆき、かじかんだ心になるのであった。――あの公判のすんだ当座はわれながら不思議なぐらいに元気で、それまできまらないでいた心も公判を契機にしっかときまったかのように感じさえした。しかし時が経つにつれてだんだん暗いかげが彼の上をおおいはじめ、ふたたびよるべのない空虚さに心を蝕ばまれはじめるのであった。公判だというので無理にも心を鼓舞し鞭撻しなければならなかったその緊張がす

ぎ去ったとき、こんどは今までにない弛緩した心身を感じなければならなかったのである。この空虚なさびしさは理窟ではどうすることもできない、心の深いところに根ざした抗しがたいもののように思われた。不幸な目にあった当座はまだよかった。自分で絶えずなんとかしてはね起きようと努力していたからである。一定の時期そうした状態がつづき、その次に来たその当時のような虚脱状態はどうにも仕様がなかった。ずるずるとほとんど不可抗的な力でニヒルな気持にひきずられて行った。――しかし古賀はだんだんそうした場合に処する心の持ち方をも自ら体得して行った。そういう時にこそ彼は「時」にたよったのである。無理に心を反対の方向に駆り立てようとはしないで静かにその暗さのなかに没入して時を待ったのである。すると、やがては心の一角にほのぼのと明るい光がさしてくるのであった。そういう明暗のくりかえしを古賀は幾回も幾回も経験した。春、夏、秋、冬と失明してから丁度一年をおくり、その季節々々のかわり目にはことに自然の影響を今までになくはげしく受け、からだの弱った時にはやはり心の弱り方もひどかった。しかしついには古賀も行きつくところへ行きついたものであろうか。この頃では明るい光をみることの方が多くなり、折々は陰翳がさしても自分の工夫でそれを払いのけることができるようになったのである。

　最初古賀がその前におののいた冷酷な現実の、個人の幸不幸を一切度外視して悠々とまわっている歴史の歯車の、その前に立って今の彼はもうふるえてはいない。彼は目をおおわずにその前に立つことができる。いや、この頃の彼は赤はだかな現実の姿を見、その姿について思いを潜めることが、自分の心を落つけるにいちばんいい方法であるとさえおもっているのだ。個人の運命を無視して運行する歴史の歯車も、実は人間によってまわされているのであり、古賀もかつてはそのまわし手の一人であった。だが途中であやまって無惨にはねとばされ、今は廃兵となってのこされている。そういう自分自身の姿というものを冷やかに見つめることは寂しいには寂しい。だがそれ以外にほんとうに心のおちつくわざはないのである。街路をあるいている人間のとりどりの顔つきや姿勢などをひとりはなれてこっちから見ていると、なんとはなしにおかしくなって吹き出したくなることがありはしないか。自分自身の惨めな姿をも、一定の間隔をおいてそんなふうに笑ってみるだけの心の余裕を持ちたいと古賀はおもうのだ。何ものの前にもたじろがぬそうした心をしかしどこに求めよう。それは結局はやはり、自分たちの（原文二十七字欠）ことのなかにある。（原文七字欠）自分の運命の暗さにも笑える余裕をあたえてくれる。真暗な独房のなかに骨の髄までむしばむニヒルをかんじながら、しかもなおそこから立ち直って来た古賀の力もそのなかにあった。その（原文二字欠）がもっと身について来た時に（原文二十七字欠）もできるのだ。死の一歩手前にあってなおも夢想し、計画し、生きる希望

を失わない男。古賀はそんな男を自分の頭のなかにえがいている。

おそらくはこのままの状態でなお何年かつづくであろう生活のなかにあって、自分の（原文六字欠）を自分自身じっと見まもってゆくことに、古賀はたのしい期待をかけている。

控訴公判の開かれる日の少し前、古賀は代筆で佐藤弁護士にあてて手紙を書いた。こんどの公判廷にのぞむ私の態度は、（原文六字欠）格別かわりのないものとして万事よろしくおねがいいたします、と彼はその手紙のなかで言ったのである。

（一九三四年七月「中央公論」臨時増刊号）

炭坑抄

橋本英吉

橋爪の担架があがったあとは、ほっとして皆はひと休みするために、片盤の両側にならんで腰をおろした。休むというよりも、もう働く意志を失って自然にへたばってしまったといった方がふさわしかった。

脚絆をやぶって突きだしていた白い骨の印象が、油のように頭のすみずみに沁みついていて、すぐには仕事にかかる気になれなかったのである。

「枠を入れるばかりに、坑木まで切り組んであったんですが、橋爪が二番函を積んで終うまで待てというんで……」

まだそこに腰かけていた清水が、奈良崎に報告するのだった。

「ああそうか、そんなら橋爪がよくない、つまり過失だね。そりゃ困る！」

奈良崎はそう云って、坑夫等を盗むような眼でチラと見

まわした。「困る」という一句（それは故意に支柱を怠った結果であるから、規定の公傷と見做せないという意味を含んでいた。）がどのような反響をあたえたかを探るかのようであった。

「私がさっき注意したんですが――あれはひねくれやですね、いくぶん。」

清水が弁明するようにつけ加えた。

「いかん、君。証明は書けないじゃないか。」

奈良崎は勿体ぶって強く云い切ると、安全燈をさげて立ちあがった。清水も同じように、立ちあがり、

「おい、皆かかれ！　十時二十分だぞ！」

そして行ってしまった。

普通なら三番函が入って、丁度仕事に調子がついている頃だった。今からでもすぐ思いきめて立ちあがれば、自然に平常通りの調子を回復できることが、彼等自身にもわかっていながら、まだ愚図々々していた。

「初！　弁当もってこい！　よう。」

親父が云った。

「函に積んでしまっチから、弁当にすりゃいい。」

おかみが云った。いつもより遅れてはいるが、三人分の課程が今から出せなくはない。昇とテイの分だけ函数が減っているから、親父は少く掘ればいい訳で楽になったのだ。坑内にいる以上はなまけてみたところで身体の慰安になりはしないので、奈良崎さんが云うように働いた方がいいのである。しかし何より大切なことは――と女房は考えるのだった。今夜の三人分を今まで働いた三日分に加えて、明後日は薪と米と晒木綿と、尚余裕があれば酒を買わねばならぬ。今夜このままサボってしまえば、買入れる品物の量を減らさねばならんではないか！

「女郎、だまっちょれ！」

親父は自分の背をかいていた長い木片をおかみに投げつけた。そして本田の方をむいて、

「なァ本田、人間は喰うもの喰っちょけば、いつドンと来ても、安心成仏でくるキなァ。」

「また、そげなこと云う。酒なんか、誰がとってやるもんか！」

女房はそうは云ったが、立ちあがって切羽に弁当をとりに行った。本田らも賛成もやはり弁当をとりに出かけた。本田は決して自分でイニシアチーブをとることもなく、それかと云って、人の提案に反対することもない。「穏健着実」とか「毒にも薬にもならぬ」という形容詞を、ぜひ冠せねばならぬ人種の一人であったのみならず、妻のクメも似たような性質であったから、この一家族から荒々しい言葉や投げつける茶碗の響きなど、到底耳にすることができなかった。すべて日常のことが「ああしようか？」「そうですね。」と云った具合でなめらかに進捗するのだった。クメは色の黒い女で、体の恰好がよいだけで外に取柄はないけれども、至極あっさりした生れつきで若い者に人気が

あった。自分に寄ってくる男を拒んだこともなく、またこっちから男に執着をもったこともなかった。丁度水玉をのせた蓮の葉のようなもので、サラサラと男を掌でころがしているが、相手がころがり去ったあとでは、影さえその面にのこさないと云った具合だった。また両親は娘がどのような行いをしようとも、決して干渉したこともなければ、小言を云ったこともなかった。また第三者にしても、本田一家のこととなると妙に差出口をしないのだった。というのは、どんなよい忠言を与えてもちっとも反応がなかったからである。反対はしないが——いやどんなことにも賛成するのだが——ただそれだけである。おそろしく張合がないのであった。

「わざと怪我するもんもあるめェに。奈良崎さんは、あんな分らん人じゃねェけんど。」

平沢は、沢庵をうまそうに嚙みながら云った。

「けんど、ひねくれちょるチ云うたき、あれが大分利いたようじゃった。気の毒だなァ。」

本田が答えた。

「そうですなあ。自分の財布から銭を出すのじゃなし。」

髪をきれいに分けた養成夫の一人が、遠慮しながら口を出した。

「自分の財布どころか、わしらが、毎月積み立てる共済金から出てるのですぞ。光井さんにも出して貰やせん。」

巡査あがりだという鬚のある養成夫が、腹だたしげにさけぶように云った。共済会というのがあって、働き高の幾分かを積み立てて、会社側がそれに相当する分を支出し、公死傷、疾病の医料費、手当、見舞金をそこから出していた。この制度ができたのはごく最近のことで、それ以前はすべてが会社の負担であったから、公傷手当など全然なかった。共済会は会社側と坑夫側から同数の委員が選出されているけれど、それはホンの形式だけで、実権は無論会社が握っていた。たとえば坑内で負傷した場合、私傷か公傷かを認定する権限は、昔のままに小頭や工手などにあった。だから古参坑夫のなかには、自分が毎月積金しているにも拘わらず、やはり共済費全部を会社が負担しているように思っている者もあった。

「公傷にせんチなァ？」

飯をくって居眠りをしていた平沢のおかみが、突然中途から割りこんだ。

「この、くそばば！　橋爪が枠を入れさせせんき。」

「けんど、枠を入れてくれち、なんぼ頼んでも坑木がねェから、今夜まで延ばしたのだから、そりゃ無理じゃ。」

ねぼけていたのが、まるで親父にくってかかるような頓狂さで主張した。

「このお多福！　じゃから俺達が無理じゃち、云いよるじゃねエか！」

親父がきめつけた。

「なーに、奈良崎さんはあげなこと云うチ、おどかすんじ

や、判を押すよきっと。」
今度はクメが人のよい自信に満ちた態度で云った。彼女は腹がいっぱいになったので、キャル股の紐をほどいて沢山の人の前もはばからず、腰巻を直し始めた。
「おまえは、そげなもの人に見せち——」
平沢のおかみが小さな声で叱るように云った。
「なーに。」
本田はニヤニヤ笑いながら黙っていた。それからあけすけな猥談が初まった。話につりこまれて、仕事のことは一時忘れた形になってしまった。そうなれば平沢や本田は、新参の養成夫や女や若い者にはかなわぬので、だまって聞いているよりほかなかった。大きな弁当を平げたあとでは、腹の皮が張って、瞼がゆるんでくるものだ。人々が猥談に気をとられている間に地面を手でかきならし、手頃の塊炭を枕にして横になっていた。
「ふん、呑んだり喰ったりするときは、元気がいいけど……
……」
平沢のおかみが、親父の足をひっぱったが、彼はだまって足をひっこめるだけだった。
「ねせちょきない。ねるほどねたら牛でもひとりで起きる。」
クメが云うのだった。
「なァ本田、海に釣りに行って、ピチピチする奴を肴に、一ぱいやったときぁよかったなァ、もう一遍あげなことがあるといいなァ。」
平沢はせき立てる女どもをわざとじらすように云ったが、また、たしかにそんな実感もあったのである。戦争の頃は家族が一日働けば、翌日はピンとした十円札が貰えた。のみすぎて朝寝をしていると人事係が起しに来て「行ってくれよなァ」となさけなさそうな声音で頼んだものである。十五日目の勘定日毎に、無欠勤には一人七円五十銭、一日欠勤に五円、二日欠勤二円五十銭の賞だった。それでも欠勤が多いので、十三日目に二円五十銭、十四日目には五円と云った具合に、坑口で現金を握らしたものである。——それから急に不景気になり一時は三日出勤して一日休みというような時代もあったが、今では好景気の時の印象だけが何故か強く思い出されるのであった。
「云うな、そげなこと。今時、一生懸命働いても、あの時の五分の一じゃ。養成さん、あんた達もあの頃坑夫になっちょったら、まるで銀行に預けた金を下げに行くように金儲けが出来たがなァ。」
「採炭夫ち云や、なんのこたァねェ、神様じゃった。今でもボタ被って死ねば、山の神の神様になれるが、あの頃のは生神様じゃったバナ。」
本田も面白がって云うのだった。けれども養成夫たちは、その大げさな話よりも、石炭の上に寝ころんだ二人の背の皮の厚さに感嘆していた。
「お前だちは、切羽に行って積んで来い。」

「おら手にマメができたき仕事はでけんバナ。」
平沢のおかみがすねる。
「じゃ手を出しち見い。」
平沢は起きあがっておかみの掌をひろげた。
「こりぐれエで……メシ粒でも塗っちょけ。」
それからマメを潰してメシ粒を塗りまた横になって、命令をだすのだった。
「お前だちは、仕事かかれ!」
しかし、誰も動こうとしない。しゃがんで膝の上に顔を伏せて居眠りをしているのだった。
「このスベタ、立たんか!」
平沢は枕にしていた塊炭をつかんで、女房に叩きつけた。ドスンと鈍い音がして、女房はレールの上に倒れた。そして大げさな呻り声をあげたので、眠りかけていた人々は急に驚いて立ちあがった。
「平沢! なしそげなことするか。あぶねェ。さァ、皆仕事にかかるど。」
皆はそれでやっと立ちあがった。養成夫一人は立った拍子に枠で頭をズシンとぶったので、天井からボタがザラザラ落ちてきた。
「おおいてェ! やっと眼がさめた。」
「眠い眠い、一時間でいいな、ねてエな。」
だるそうに、めいめいの安全燈をさげて切羽に歩きかけた時、コース捲の方で誰かの声がした。
「なんだ?」
養成夫の一人が声の方に走って行った。
「直ぐ道具を片づけて、本線の捲立てに出て来いって、白打ち(小頭助手)が云って来たぞ。」
「なんだ? 道具をかたづけるのか?」
「なんだか知らんけんど、道具をかたづけて来いって。」
「白打ちの奴、子供のくせに生意気だ。訳を云わねエなんて。」
初太郎は道具の鍵を弁当箱から出しながら云った。
「とにかく。ヒジョウじゃろ、早くしない。」
ヒジョウ(非常)という言葉は爆発という言葉と共通な響をもっていた。彼等は爆発という熟語のヒビキをきらって非常と呼んでいた。何か変事があるとすれば、爆発ではないだろうか? 遠くの切羽で起った爆発が、だんだん広がりつつあるのではあるまいか? そういう考えがすぐ浮んだ。
「ほーら見ろ! なんぼ働きてエちうても、山の神様がな、働かせねエ。本田、今何時頃じゃろか?」
皆のあわてる様を小気味よく見あげながら、平沢はまだ寝たままだった。
「そうだなア、腹時計はとまってしもうた。けんど眼の時計はまア十一時すぎじゃろ。」
本田は中腰になったまま答えた。
「あんとき橋爪とあがっちょらなア。あれから今まで坑内

にいただけ損じゃねえか。」
捲場にはもう誰もいなかった。責任上最後まで残っていなければならぬ清水の姿さえ見ることは出来なかった。機械場の電燈も消え、真暗な沈んだ沼のような気配がただよっているのだった。
「いそげ！　ヒジョウだぞ！」
坑夫らは追っかけられるような不安におそわれて、そこから急に小走りになった。自分達だけが坑内に居るという推測は、むしろ恐怖に近いものである。そういう時には地上と坑内のあいだにあるへだたりを考える。生命にかかわるような災難にあっても、助けを求めることができないとくそれはそういう状態に置かれたものだけが経験する感情だった。勿論平日でも千人近いバラバラに働いている他の坑夫と、連絡がある訳でもなければ、協同することもできないのだが、しかし多くの仲間が、この炭層の向側にいると考えるだけで心強いのだった。ある事情のもとではすぐ一緒になれる、いやでも一致して自分を守ることができるのだから――自分の仕事を他人より早く終らせるためには、妬んだり悔んだり、口論したりする。だが何か一寸した故障でも起きると、彼等はいやでも仲直りしなければならぬような状態に置かれていたのである。
「安全燈に気をつけろ！」
あかりは何より大切だ。消したら再び点火する方法は、坑内にはないのである。ただ通風係とか役員とかだけが、マッチ入り安全燈というものを持っていただけである。
第一の防風扉まで来たときに、彼等は扉が少しの抵抗もなく開いたので、施風機がとまっていることを直ぐ覚った。しかしただそれだけの事で、こんなに早く昇坑させる筈はないので、別に重大な事件がやはり起っているに違いないと想像した。
本卸の捲立に着いた時、何か異常な事件が起っているという想像は、益々疑いないものとなった。本卸の炭層の真中を、坑底から炭層の最下部まで一直線に貫いている運搬幹線で、二十ポンドのレールの複線になっていた。複線の片方は空函の通路、片方は実函を捲上げるようになっていた。いつも電燈があかあかとつき、函はたえず上下していたし、どんなときでも棹取夫や馬丁や、背に傷のある馬がいないことはなかったのであった。
今夜はもう誰一人そこにはいなかったし、暗い無気味な沈黙があるだけで、レールの間に敷いた頑丈な鉄板の上を、坑外から来る冷い風（風というよりも流れこんでくる空気と云ったような）が吹いているだけだった。
しかし人道まで出ると、彼等よりまだ下の層で働いていた採炭夫が、せつなそうに息をきらしてあがってくるのに出会った。それから更に上の方にも安全燈のあかりが沢山見えたので、やっと彼等は安心してとき放されたような軽い気持になった。

「旋風機がくずれたんじゃろ。」
人道の傍にある大きな鉄管（揚水用）に腰かけて休んでいる男が云うのだった。まだ三十位の若い男だったが喘息があったので、そこで休んでいるのだった。
「ただそれだけの原因じゃろか？」
それだけならあわてることはないと、平沢の親父は鶴嘴の束を置いて、鉄管に腰をおろした。役員はなかなか仕事を放棄させせない。今までも幾度も旋風機の故障はあったが、ただ通風の悪い切羽にいる者だけが、仕事をやめて本卸まで出て来る。そして故障の直るのをそこで待つ習慣だった。不景気とは云いながら割当だけは出炭しなければならなかったので、僅かの故障ではなかなか休ませないのであった。彼等はそこでまだまだ重大な故障が、あるに違いないという確信をすてなかった。彼等は一休みすると、下からあがって来る坑夫等と一緒に、坑底をのぼって行った。坑底が近くなるに従って坑夫の数はだんだん殖えて行ったが、本当の理由を知っている者は一人もいなかった。けれども、もう彼等は恐怖心など抱いていなかった。早く坑底について、ケージにのりさえすればよい。そうすれば新鮮な空気や、広々とした夜の空を味うこともできれば、煙草も吸えるのだと思っているのだった。
まだ尋常科を出たばかりの子供が思いがけぬ故障のために早く昇坑できるので有頂天になって、まるで競走でもするように、大人のなかをくぐって、走りのぼっていた。またある支柱夫は、もう一時近いから多分一人前日当が貰えるのだろうから、半日分の得だなどと話していた。
バラバラに歩いていた坑夫が一列になり、更に二列三列に殖え、遂には厚いかたまりになった。連絡坑道からは四尺坑の坑夫が同じように塊って、こっちに割りこんで来た。自分の胸は前列の者の背にピッタリとおしつけられている。安全燈や鶴嘴の触れ合うチャラチャラという響が、話し声や足音に交って狭い管のような坑道に満ちていた。
「発電所が焼けちょるちょ。ケージは運転しちょらんち。」
そういう噂が上の方から伝わり、動かし難い事実として、人々をとらえたのだが、誰もそういう事に少しの関心ももとうとしなかった。そしてふざけたり、あくびをしたり、溜息をついたり、咳をしたり途方もない大声で「ねむい！　ねむい！」と叫んだりしながら、十六度の傾斜道をのぼるのだった。ケージは運転してないことを知っていながら、歩いていさえすれば坑外に出られるという平常の想念を、倘すてていないかのように――
「今夜は弁当をもって見物に来たようなもんだ！」
「おれの切羽はマイトをつかって炭をそのまま捨てて来たからマイト代だけ損だ。」
などという声がする。
初太郎はヒョイと後を見ると、四尺坑の娘が来るので、左手を出して、一寸にぎってやった。すると「八尺の人は親切だね。」と云って笑った。その時先頭が立ちどまった。

斜面にならんだ坑夫の頭だけが見え、それも先頭の坑底に近いところは暗のなかに溶けていた。初太郎は上下を見渡して、これだけの人間をどうして坑外に運び出すのだろうと、ぼんやり考えるのだった。

坑底には右側のケージが止まったまま、竪坑の壁面から湧き出す一時間三十立方呎の地下水に打たれ、あたりに飛沫を散らしていた。ケージから一間ばかり離れて見張小屋があり、そこの柵まで坑夫の先頭は押しかけて、飛沫に濡れながら立っていた。坑底から三間ばかり離れてひっこんだ処に、ガラス張りの坑内事務所があって、役員達は提灯や懐中電燈をふりまわしていた。坑内では見たこともない提灯を、平気でもちこんでいることで、一層あわただしい気分をかもし出しているのだった。

「その、およそ何時間位たてばケージを運転するちうこたア、分らんのですか？」

採炭夫の一人がガラス戸のところで役員にきいていた。

「うん、今わかる、うん、うん。」

そう云いながら役員は奥の方に行ってしまった。

平沢等の立っているところに、清水が群集をおしわけながら下りてきた。

「皆来たか？　誰ものこっていなかったか？」

「清水さん、あん時橋爪について上っちょったら、こげなこたァなかったですなァ。」

平沢ははちまきもとらずズケズケ云った。

「もうじきあがれるど。」

「今夜は歩をつけて下さい。清水さん！」

初太郎はずっと離れた下の方から叫んだ。すると他の坑夫が、

「出ずら三分にきまっちょる。一つそういうことに手をうちましょう……」

すると今度はまた別のところから、

「じゃ、一つ頼みますよ、それ！　シャンシャンシャン……

……と」

薄暗い上に人数が多くて顔のわからないのをいいことにして、さかんに小頭を冷かすのだった。若い女のいるところでは、倘賑かだった。

「女の尻にさわりたけりゃなア、おめエちのババーが丁度いいど。」

そんな女の声がする。

「キャル股をあたまに被せろ！」

つづいて二三人が一緒にしゃべり始める。

「彼は遂にとらわれの身となったのであった……」

突然よく響く声だったので、ドッと笑い声が起った。するとその男は一層活弁の真似に熱中するのだった。しかし猥談ほど、一般的で興味のあるものはなかったので、女をも加えて方々ではずんでいた。もともと若い娘がキャル股一つでふざけることのできる坑内のことである。人の前では音をたてることさえ恥かしがって、沢庵を丸のみにする

令嬢が、おならはかかとでおさえてすかすのを作法と心得ている。それも上等社会が自然につくりだし、形づくった習慣なら、これも亦、習慣の一つであって結局は同一なのだ。

坑底から坑夫の列の最後尾まで、二丁ではきかなかった。しかも鱗のようにギッシリと詰っていたので、安全燈の熱と人いきれで、裸ではあったが、汗が流れていた。肌から肌へ、生ぬるい炭塵で汚れたあぶらが、伝わるのであろ。ふやけたようにたるんだ肉体と、同じようにネチネチした肉体がくっつき、もみ合うのだった。

坑外では発電所建物や油類が燃えつくすのを待ってい た。消火などと云うことはとうに思いきっていた。そして一方では、町に来ている水力電気を、一時的に導入する支度にかかったのであったが、それも種々な設備が必要だったのですぐの間にはあわなかった。汽鑵場はホンの一部分しか破損していなかったので、火勢のおとろえるのを待って蒸気を送れるように鉄管のかけ替えにかかった。だがいよいよかまに火を入れる段になると、今度は貯水池には一滴の水もないのに気がついた。そこでまた元にもどって、やはり電気をひいてポンプを動かさなければならぬのだった。そういう訳で、思わぬ故障があとからあとからと発見されて、ケージを運転するようにはなかなかなれないのであった。

坑外と坑内の連絡には電話があったのだが、詳しいことは知らせなかった。

坑夫らは「光井さん」の金の力を絶対的と云っていいぐらい信用していた。自分達を保護するためには、どんなことでもしてくれるものと確信していた。殊に一人二人ではない、八尺坑四尺坑を併せて千人の坑夫がいるのである。——だから彼等はいつまでもおとなしく待っていた。

彼等は立っていることに疲れると、道具をおろして、その上に腰かけた。ある者は、鉄筒の上に場所を見つけて寝たり、地べたにすわったりし始めた。時間が空しくすぎて行くに従って、殆んど重なったまま眠りこむのだった。丁度夜行列車の中のように、もう人の迷惑などは考えられなかったのだろう。

「また、どういうわけで火事を起したんじゃろなァ?」

安全燈番人の老人がまだ眼をさましていて話していた。喘息らしくゼェゼェと話すのも苦しげである。

「まだ焼けちょるじゃろか? けんどなんぼ発電所が焼けてもケーヂを運転せんちうこたァねェなァ、ケーヂはおめェ蒸気で運転するじゃろ?」

老眼鏡をかけたやはり安全燈番の一人が云うのだった。

「なァ、放火と俺はにらんじょるが。」

「うーむ、うーむ。」

と相手の老眼鏡は考えこんでいたが、突然ハッシと膝をたたいて、如何にも秘密なことを告げるかのように、相手の耳に唇をつけて云った。

「××じゃろう。」
「うーん、この不景気じゃからなァ。俺も一度は起ると思うちょった。」
そこで二人の老人は自分らの言葉の意味に驚いたように口をつぐんで、あたりを見廻すのだった。
「米騒動のときにはやったなァ、おとなしそうにしていて急にやったので、警察がこの山の坑夫は頭があるちうてほめたそうだ。」
枠取夫が頭をあげて云った。
「そうだ、あん時七八人監獄に行ったが、もう出ちょるなァ？」
「もう出ちょるけんど、この山で使わんのだ。……ハズミで起きるもんだからなァ。」
「三時十五分前――」
向うで誰かがそう云った。それから立ちあがって背のびをし、ああ一服吸いてェなァ、と云ってまた座った。すると方々から寝たまま、「すいてェ」「すいてェ」という声がおこった。
「おい、大竹坑道に行く者はねェか？」
そう云いながら人々を押しわけて、七八人の男が下の方からあがって来た。大竹坑は第二坑のことで、山一つ越えた隣村にある斜坑であった。こっちの竪坑が不通になった場合の用意に、連絡坑道ができていた。しかし道が遠いうえに、またこっちに山路を帰って来なければならぬので、間もなくケージが運転するだろうと思っている人達は動こうとしないのだった。だが、連絡坑道があるにはあるが、果して危険なしに通行できるかどうか？　奥まった平常は用のない坑道が、ガスや落盤の危険なしに通れるかどうか怪しいものだった。
それでも主に若い元気のいい坑夫が十四人道具をあずけたり、安全燈をいいのととりかえたりして出発した。陸を歩いて約半里である。坑道が双方から延びてきているから、人の通らない個所は二丁ぐらいのものであろう――と想像していた。
「どっちが先に納屋に帰りつくか、競争だぞ！」
そう云い残して出発したあとは、また退屈な居眠りがつづいた。煙草を吸いたい、酒をホンの一口すきぱらに呑みたい、眠い――ただそれだけである。暗い壁で遮えぎられたあたりには感覚を刺激するものは何一つない。
坑底から遠く離れた底の方にいる者は、なんとなく悲しげな表情をしていた。昇坑の順番もあとだし、何か悪いことがあると一番不利な位置にあったし、それに役員からのいろいろの「達し」は、伝わって来ても、ここまで来るあいだにすっかり、内容がかわっていた。（しかも悪い方に）坑夫らの勝手な臆測や、誇張で加味されるのだった。「汽罐場へ火が移っている。坑外は風が強くて大騒ぎだ。」とか、「ケージの捲揚機械室もあぶない。」などと。

（一九三四年一〇―一二月「文学評論」）

II
評論・声明書

日本プロレタリア文化連盟の任務

資本主義はもはや国際経済の統一的＝包括的な体制を代表していない。資本主義的経済体制に並んで、社会主義的体制が存在し、それは資本主義体制に対立し、それが存在するという単なる事実によって資本主義の腐敗を曝露し、その基礎をゆるがせつつ成長成熟しつつある。

経済的政治的体制におけるこの二つの世界の対立に対応して、文化も亦ハッキリと二つの世界に対立している。資本主義文化と社会主義文化との存在、およびその対立がそれである。

資本主義文化は資本主義そのものの内包する矛盾の上に建てられている。それは労働の社会的性質と生産物の私的占有との間の矛盾の上に、生産の無政府的非計画性の上に、都市と農村との離間の上に、肉体的労働と精神的労働との分裂の上に、産業の国際的性質と国家的利害との衝突の上に立てられている。かかる基本的諸矛盾を反映する資本主義文化は、資本主義の帝国主義段階への発展につれて、その本質的属性である内的矛盾をますます増大させ、急速に頽廃しつつある。資本主義文化は、すでに、その歴史的役割を失って、人類文化の発展に対する反動的桎梏としてのみ存在している。

之に反して社会主義文化は、プロレタリアートの国ソヴェート同盟において発展しつつある。それは、ソヴェート同盟における社会主義的建設の基礎の上に、即ち、生産手段の社会化、国民経済の計画性、生産の工業化と農業の共同経営化、一般に労働者農民其の他の勤労者の物質的生活の向上の上に立てられている。これは資本主義文化の合理的発展として、その固有の矛盾を揚棄し、人類の蓄積して来た全文化的遺産を発展させることによって、全人類的文化の基礎を築きつつある。

だが文化における二つの世界の対立は、社会主義文化と資本主義文化としてのみではない。二つの文化の対立は、諸資本主義国内に於ても存在する。即ち一方には支配的文化としてのブルジョア的文化の反動化と頽廃化とがあり、他方には、社会主義文化の要因を形づくりつつあるところのプロレタリア的文化の成長がある。ブルジョア的文化は、資本主義的文化の武器として役割を演じつつあり、これに対してプロレタリア的文化はプロレタリアートの階級闘争に結合し建設されつつある社会主義文化に結合しつつある。従って、全文化戦線に於ける闘争は、他の二つの戦線、政治的及び経済的戦線における国際的、国内的闘争と

切りはなすことはできない。
このことは日本の現情についても全くあてはまる。のみならず、日本に於ては、明治維新のブルジョア革命が特殊的な形態を取ったこと、ブルジョア自由主義時代が無かったことの為に、封建的文化を揚棄することとなしに、残存せしめた。しかも現在封建的残存文化は、イデオロギーの領域に於て、他のブルジョア文化と固く結びつくことによって、反動文化の支柱となっている。このことは、ブルジョアジーが世界恐慌の激化にともない、自由主義的欺瞞の最後の一片までもかなぐり捨て、ファシズム化するにつれて、益々重大になって来ている。日本のファシズムは、封建的イデオロギーと結合することによって、特殊的な最も反動的な最も野蛮的なものとなっている。
以上の諸点からして次のような我々の主要任務が導き出される。

ブルジョアジーの文化反動政策との闘争

日本のブルジョアジーは、その動揺せる支配の安定化、労働者、農民、其の他の勤労者の搾取の永続化のために、すべての文化手段（学校、新聞、雑誌、ラジオ、映画、宗教、芸術、科学、スポーツ等）を利用して、帝国主義的宗教的平和主義的イデオロギーを大衆に注入して、それによって、大衆の階級的意識を眠らせ、或は半封建的なファシズム文化を強要することによって、反動に引き入れつつある。これに対して、社会民主主義者は、ただ之と闘争しないのみか、之を援助し、現在では、完全に社会ファシズム化している。我々はブルジョア的、社会ファシズム的文化反動に抗して、大衆を闘争にたたせる為に、労働者、農民、その他の勤労者大衆間の封建的ブルジョア的文化と戦い、プロレタリア文化の普及をなさねばならない。特に我々は、婦人、青少年、農民、被圧迫民族に対するブルジョア的封建的文化支配に対して、闘わなければならない。

ブルジョア・イデオロギーとの闘争

ブルジョア文化反動との闘争は、ブルジョア的及び社会民主主義的理論、芸術、宗教等との闘争に成功的に戦うことによってなされる。ブルジョアジーのイデオロギー的下働きとしてのブルジョア学者、芸術家、宗教家等との積極的な闘争が必要である。今まで、我々はこの戦いを十分にやって来なかった。ブルジョア学者、芸術家、宗教家との闘争は、社会民主主義者や同伴者的インテリゲンチャに任せ、ただ彼等から攻撃して来たときにのみ、自ら立って我々の立場を防衛するということがしばしばあり、時にはこの闘争のボイコットすらあった。だが今や我々は、この方面においても防禦から攻撃に移らなければならない。これは動揺しつつある、ブルジョア的専門家獲得のためにも

必要だ。なおブルジョア・イデオロギーとの闘争のうち、宗教との闘争は特に重要視されなければならない。

労働者、農民、其の他の勤労者の日常的文化的生活的欲求の充足

ブルジョア文化反動との闘争は、労働者、農民、その他の勤労者大衆の日常的文化的生活的欲求の上に立ってのみ成功的に闘争し得る。労働者、農民大衆の文化に対する要求は、急激に高まりつつある。だがしばしば彼等は、工場農村内に、自己の文化を見出し得ないために、ブルジョア文化の中に捲きこまれている。この文化に対する労働者農民大衆の高まりつゝある文化に対する要求を取り上げて、労働者自身の文化組織、ならびに諸施設をつくり、これを指導することが必要である。

文化、教育施設のブルジョア的独占との闘争

労働者、農民、其の他の勤労者の日常的文化的生活的欲求の充足は、文化、教育施設のブルジョア的独占との闘争なしにはあり得ない。ブルジョアジーは、学校、劇場、図書館、競技場、公会堂等の文化施設に、ブルジョア的条件を付して、一般大衆から隔離し、またこれらの文化諸施設を自己の階級利益の為めに従属させている。したがって我我は、これらの文化施設の民主化、自主化の闘争を新聞、雑誌、書籍、脚本、映画、美術、ラヂオ等の検閲反対、学内の軍事教育、宗教教育反対の闘争に結びつけて遂行しなければならない。

植民地、半植民地に於ける帝国主義文化支配との闘争

我々の目標は窮極においては民族文化の揚棄、国際文化の樹立であって、民族文化の建設では決してない。しかしこのことは、現在の帝国主義文化を弱小民族に強制することではなく、反対に民族文化の自由な発展を促進することによってなされるのだ。したがって我々は朝鮮、台湾、関東州その他に於ける日本の帝国主義的文化支配に反対し、それらの地方に於ける民族文化の自由のために闘わなければならない。

ソヴェート社会主義文化の擁護

現在国際プロレタリアートの最高の文化は、ソヴェート同盟に於てのみ建設されつつある。したがって我々は之を全力を以て守り、之を日本の勤労大衆の間に普及しなければならない。同時に我々はすべての国のプロレタリアート

との文化的交歓を組織しなければならない。

文化活動のための労働者幹部の養成

これらの主要任務を遂行するためには、文化闘争の場面を工場、農村その他一般の職場に拡大し、広汎な大衆の中から文化活動のために幹部を養成しなければならない。そのためには、プロレタリア文化運動は爾余のプロレタリア諸運動と結びつかなければならない。

かくて日本に於けるプロレタリア文化戦線を統一し、文化全線にわたる闘争を押しすすめるべき日本プロレタリア文化連盟の基本的任務は次の如く規定される。

一、ブルジョアジー、ファシスト、及び社会ファシストによる文化反動との闘争

二、労働者、農民、其の他の勤労者の政治的経済的任務の系統的啓蒙

三、労働者、農民、其の他の勤労者の文化的生活的欲求の充足

四、マルクス＝レーニン主義の上にたつプロレタリア文化の確立

かかる基本的任務を果すための行動綱領は次の如きものとなるであろう。

一、言論、出版、展覧、上演、上映、演奏、放送等に対する政治的抑圧との闘争

二、労働者、農民、その他の勤労者の文化的施設の創設及びそれに対する政治的経済的抑圧との闘争

三、ラジオのブルジョア的独占反対、公会堂、美術館、劇場、競技場その他の公共的文化的施設の使用の自由

四、学校に於ける宗教的軍事的教育反対、青年会、処女会、青年訓練所等を通じての反動的教育反対、学内及び兵営内の文化活動の自由

五、労働者、農民、その他の勤労者の児童の授業料全廃および学用品の無料給与、自主的父兄委員会の設置

六、宗教に対する闘争

七、反動的スポーツ反対、労働者、農民、その他の勤労者の自主的スポーツの促進

八、婦人に対する封建ブルジョア的イデオロギーとの闘争

九、植民地及び半植民地に於ける帝国主義的文化支配との闘争

十、ソヴェート同盟に於ける社会主義文化の擁護、国際プロレタリアートとの文化的提携

以　上

（一九三一年一二月「プロレタリア文化」）

機関紙『プロレタリア文学』の創刊に際して

一九三二年　プロレタリア作家同盟

わが日本プロレタリア作家同盟は一九三二年一月よりその単独の全国的機関誌『プロレタリア文学』を創刊し、これを広く全国の労働者農民諸君に贈る！

既に明かなように、昨年度に於ける『日本プロレタリア文化連盟の結成は、わが日本のプロレタリア文化運動史に於いて劃期的な意義をもつものであった。それは今迄芸術、科学其他個々の領域に分散して闘争されてきた各文化団体の運動を統一し、その強固な全国的中央部を結成することによって、我が国に於けるこの運動を国際的な規模にまで躍進せしめたところにあった。——従って、この全文化戦線の統一指導のための文化連盟中央協議会が成立すると共に、今まで芸術運動だけの独自的指導機関として存在してきたナップ（全日本無産者芸術団体協議会）は、必然にその歴史的任務を完了して発展的解体を遂げ、ナップ加盟各同盟はそれぞれ同位単位として文化連盟に参加するに至った。その結果わが芸術運動の綜合的機関誌たる『ナップ』も又廃刊され、各同盟は各その独自の機関誌を持つこととなったのである。

かくの如く、綜合的機関誌からの発展的分化として我々が独自的な機関誌を持ち得たということは、全文化闘争の構成部分としての我が文学運動がそれ自身としても充分に質的に強化されたことを意味し、この事は又日本のプロレタリア文学運動の方向が世界的な方向にその歩調を合せ得たことを示すものである。

従って、わが同盟の機関誌『プロレタリア文学』は『戦旗』『ナップ』を通じて獲得してきた過去の豊富な経験を自己のものとし、その成果の上に立って仕事を押し進めて行かなければならない。

わが機関誌は日本のプロレタリア文学運動の組織者として、第一に作家同盟に結集するプロレタリア作家を絶えず指導し、文学に於けるボルシェヴィキ的党派性確保のために闘って行かなければならない。——即ち闘争の過去を振りかえってみるとき、昨年『われわれは我々の文学が×のものとならなければならない』ことはハッキリと認識したにも不拘、この問題が直ちに取って以って、組織の問題と我々の創作方法即ち唯物弁証法の問題に発展されることによって、実質的な意義を獲得するものであることを理解しなかった。

従って『文学が×のものとならなければならない』という事を単純に、内容の××主義的イデオロギーによる×装であるとし、我々のその後の実践は其機械的に形式の探究に向った。『芸術大衆化の決議』『文学形式のための討論』

等々がそれである。そこから必然に昨年末以来、この機械論的傾向から作品の一様化、固定化、類型化が生じた。ところが、それに対抗する我々の努力が階級的規定を含まない『作品の多様化、広汎化』の主張となってあらわれた結果、作家の創作的実践に於いては小ブルジョア的観点への転落、非政治主義的、右翼的偏向におち入ったのである。これは機械論的偏向に反撥して生れた観念論的偏向を意味するものである。

更に文化闘争と政治闘争とについても、その関係の機械的理解から文化を政治から切離し、プロレタリアートの階級闘争の実践によるこれが弁証法的統一を見ないばかりか、我々が当面している現段階に於いて、自己の任務をプロレタリアートの根本的政治諸任務、××主義のための闘争の諸任務に従属せしめないような独立的なプロレタリア文化運動があり得るが如き観念的傾向が根強く存在した。

我々は昨年の下半期を通じて、このような世界観と方法を、内容と形式を、理論と実践を分離するが如き弁証法的唯物論からのプレハーノフ＝デボーリン的背離を意味する機械論的観念論的傾向に対して、同時的に闘争してきた。——かかる情勢に置かれている我が機関誌は、更にプロレタリア文学のレーニン的段階に於ける弁証法的唯物論の正確な把握をおし進めることによって、この問題を発展せしめなければならない。

次にわが機関誌に課せられている重大な任務として、今迄閑却されていたブルジョア・ファシズム及び社会ファシズムの文学に対する闘争を挙げなければならない。我々はこれらの反動的文学に対する闘争が特に現在の段階に於て重要な意義を持つことを理解しなければならない。即ちこれらの反動的文学と闘争することなくしては、我々の文学及び文学理論をレーニン的段階に高めることが不可能なばかりでなしに、実にこのことによってのみ『文学サークル』の組織を拡大強化し、これらを我々の正しい方向に引きつけ、プロレタリアートの課題たる多数者獲得の任務に答えることが出来るのである。

然し、反動文学に対する我々の闘争は、その正しい意図にも不拘、単に一般的な抽象的な物差に従って、結論的な否定を与えて来たに過ぎない。このことは我々のうちの観念的傾向を示すものであり、実践の上では敗北を意味するものでしかない。我々は具体的な知識の上に立って、彼等の文学及び理論に対し『論理的』および『歴史的』分析を弁証法的に統一し、全面的批判を捲き起さなければならない。——我々の機関誌はその闘争の先頭に立たなければならない。殊に、××××をケイ機として擡頭した我が政治支配に於ける××××化の傾向は、文化戦線の上にも挑戦的にあらわれ、広汎なブルジョア文学の陣営がこの社会的根拠の上に、あわただしい編成替を行いつつあるということ、従ってこれに対する我々の闘争はその些々たる見誤りもない具体的な認識の上に立てなければならないという

ことが云われるのである。

第三に、わが機関誌は最近殊に活潑になって来た通信員活動を組織化し、それと密接に結びつくことによって、大衆のイニシアチヴによる実質的な編集を行わなければならない。それは一方では我々の運動を常にプロレタリアートの実際的任務に結びつけ、文化運動の立ち遅れのギャップを急速に埋めることであり、他方文学活動の分野に於けるあらゆる偏向、例えばそのセクト的、文化主義的、極左的偏向に対する大衆的場面での『自己批判』を意味する。わが機関誌は通信員活動を通じて、我々の分野に於ける優れた働き手の獲得のために努力しなければならない。

最後に、わが機関誌は日本のプロレタリア文学運動の最高の指導者として、常に国際的な規準の上に立たなければならない。我々の運動に於て、我々は未だ充分に国際的関心が高いとは云えないし、国際的経験の摂取に対して積極性が稀薄であったことが指摘されるのである。国際的観点に立ってのみ、我々に運動の正しい見透しが与えられ、殊にソヴェート同盟のあらゆる分野に於ける社会主義建設の輝かしい成果は、遅れて進む我々にとって限りない×××示すものであることが、わが機関誌によって具体的に示されなければならない。

『プロレタリア文学』の発刊は、かくの如く実に多くの任務を我々に課するものである。我々はこれら諸任務の担手たる我が機関誌を×階級のあらゆる××××守り、日本プロレタリア文学の強固な建設に向って進まなければならない。

（一九三二年一月「プロレタリア文学」）

『国際革命作家同盟』加入に際して檄す！

昨年以来の我が同盟の諸活動を特徴付ける最大のものとして、何より『ハリコフ会議』の成果を我が運動のあらゆる分野に持ち込むことによって、我が同盟が実質的に『国際作家同盟』の一支部であることを示してきたという事である。然し、その際たとえ如何なる考慮すべき条件が存在していたとしても、国際組織に即刻加入しなかったという点で、我々はゆるすべからざる日和見主義的誤謬に陥ったものと云わなければならない。およそ、プロレタリアの闘争に於いて、問題が常に組織上の問題として解決されずしては、それは単にイデオロギー的な、敗北主義的なものでしかない。我々は正式に国際組織に加入すべきであるということを、非常に形式的に機械的にしか理解していなかっ

た。

ここに於いて、我が同盟は、かかる過去の誤謬から立ち直って、正式に『国際××作家同盟』に加入するに至った。

×××変と××××をケイ機として、中国を舞台にする第二××××××目睫のうちに迫り、国内的にはブルジョア政治支配の×××××化の波の高まっている時、我々は我々の諸活動を国際的な組織の強固性によって×装し、この急迫せる情勢に立ち遅れることなく闘争すべき任務を背負わされている。我々は国際組織への加入を、断じて『紙の上だけの決議』に終らしてはならぬ。——云うまでもなく、このことは『文学サークル』組織の精力的拡大強化と新しき同盟員の獲得及びその××××イキ的訓練、創作活動、理論活動に於ける『党派性』の確立等々、我が同盟の全活動の実質的強化によってのみ成し得ることを、ハッキリと理解されなければならない。これらの事以外に、その道はあり得ない。

『演劇同盟』は既に二月から八月までの諸活動を総動員することによって、その具体的成果をもって、世界大会を飾らんとして居り、『美術家同盟』も『映画同盟』も『写真家同盟』も、ともに我々と歩武を合せて国際的連繋のために、その闘争を起そうとしている。特に我が作家同盟に対しては『国際××作家同盟支部』たるアメリカ、ドイツ、及びソヴェット・ロシアの組織から、共同闘争のための種々なる提議がなされている。——この際各同盟が提携してこれらの闘争を捲き起すことによって、この国の芸術運動を質的に躍進せしめなければならない。

最後に、特に強調すべきことは、既に発表したこの四月に持たれる我が同盟の全国大会のためのあらゆる準備闘争に、この国際組織加入の問題を結びつけることによって、言葉の真実の意味に於ける実質的なものとしなければならないということである。

☆「国際××作家同盟」加入万歳！
☆プロレタリア文学活動の国際的、国内的××競争を捲き起せ！

一九三二年二月

日本プロレタリア作家同盟

（一九三三年三月「プロレタリア文学」）

文新通信員規定

○ 通信員の任務

一、文学サークルのことを書く

君のはいっている文学サークルで文学について皆はどういっているか、どういう催しをしたか社会の出来事に対しどういう考えを持っているか

二、職場のことを書く

君の職場、君の居住地では友人知人が文学についてどういっているか、又文学についてどんなことをやっているか、文学にとり入れねばならぬどんな出来事が起ったか

三、編集局からの依頼によって特別な通信を書く

例えば『君の職場では戦争のことを皆どういっているか、又どんな戦争小説をみんなが読んでいるか?』というようなことを調査して通信する

四、右のような通信を月二回以上編集局へ送ってくる

○ 通信員の資格

すべて文新の読者たること、文学サークルの幹事や集会で適当とみとめられた人、自分から申込んで来て任務に服する人等は皆通信員になれる、なるべく工場農村その他の職場にいる人を歓迎するがそうでなくともよい

○ 通信員の批判

一、通信員はたえず編集局によって批判される、更に全読者は紙上にのった通信員の通信を批判することは勿論、特に自分の地方の自分のサークルの、自分の職場の通信員の通信活動を眼を皿にして監視し、通信の間違い、デタラメ或いは自己宣伝、私利をはかる等の場合は紙上において批判される

二、通信成績の優良な通信員は作家同盟員として推せんする、又その他の方法を以て表彰することがある。

編者註 文新は『文学新聞』の略称。

労農芸術家連盟解散の辞

声明

『文戦』二万の同志読者諸君！

資本主義の一般的危機による現下の経済恐慌は、労働者、農民、勤労大衆の生活を飢餓と赤貧をもって脅かして居り、一方この致死的抑圧に目醒めて、次第に闘争化し左翼化せんとしつつある大衆の下からこの圧力に向っては、支配階級は直接にファッショ的強圧をもって、これを撃破せんとしている。

まことに今日の瞬間こそ、われら日本プロレタリアートの空前の受難の時であり、したがって、その故にまた、今日の瞬間こそ、真の左翼が左翼としての階級的任務を明識し、一方に右翼的降伏と決死的に抗争すると共に、他方に極左的自慊と徹底的に闘争すべき時である。

同志諸君！　諸君！

かかる瞬間を、不幸にも、われらの歴史と栄誉とを有する『文戦』及び労農芸術家聯盟が、この輝ける機関紙を廃刊し聯盟を解体するの止むなきに立ち到ったことを諸君に告知する。

この不幸は、外でもない、直接の経済的圧迫の十字火が、われらを強襲した結果に外ならない。

而してまたこれは、われらがこの際、一時この不幸を堪え忍ぶことが、一層手強い、新らたなる形態をもっての出発のために、反って有利であるを自信した結果に外ならないのである。

同志読者　諸君！

『文戦』十余年の闘争、労農芸術家聯盟の頑強不抜の闘争が、わが日本の左翼運動一般、時に左翼文学運動に、いかに実質的に貢献したか、且つ現在のそれらの運動の内容が、いかにわれらの轍として指し示した方向に進展しているかは、いまさら説明するまでもない。

われらの階級的任務は、まさに、この輝ける闘争のコースを、あらゆる障碍と抑圧の底を潜って、実質的に押し進め、高揚することに存せねばならぬ。

われらがここに支配階級の十字火のために経験した不幸は、もとより不幸であり損失であるに相違ない。われらは徒らに名目にとらわれるものではない。問題はこの反動支配とファッショ的気流の下において、いかにわれらが、聰明に、剛毅にわれらの闘争の実質を進展せしむるかにかかっている。

同志読者　諸君！

われらは、ここに新しい希望と、あふれるような自信をもって、諸君に告知する。われらの運動の実体と実質とは、一刻の休止もなく存起し発展する。而してわれらの新らたなる運動形態と新らたなる機関紙も亦、この瞬間に於

いて直ちに準備されている。われらはこの新しい形態と機関とにより、生死をもってわれらのコースの先頭に驀進すると共に、われらの旗の上に、諸君は、刻々に階級的意義を実証しつつある左の光輝ある標語の記され続けて行くことを見出すであろう。

一、右翼的降伏――ファッショ化を粉砕しろ!
二、極左の分裂主義、宗派主義の根をたやせ!
三、反ブルジョア的統一戦線を戦いとれ!
四、共同戦線党による大衆の闘争組織を実現せよ!
五、反動的ブルジョアとの全面的闘争へ!

一九三二・五・一五

文戦
労農芸術家連盟

政治と芸術

政治の優位性に関する問題・結語

宮本顕治

政治と芸術に関するレーニン主義的理解に対する敵の歪曲及び我々の陣営内の諸偏向――特に右翼的逸脱に就いてみて来た。私は反動芸術理論との闘争を通じてこの問題の主として原則的、理論的方向を明かにした。その際、私はレーニン的党派性の問題を正面におし出すことから闘争を進めた。蓋し次のことは、芸術の場合にも全く相当するからである。「哲学及び科学の党派性の原理は、哲学、科学及び政治の相関関係に関する最重要の問題の古典的解決を与えている。この問題においてはレーニンによって極度の多くの新たな独自的なものが与えられた。」(ミーチン)我我はこの独自的なものを、自らのものとしなければならぬ。

自己の陣営内の歪曲の批判を通じて、私はこの問題に関する理論的実践的究明を試みた。

我々のすべてにとって、次のごとき理解は今や何らの異議のないものであろう。

「文化闘争は、勿論のこと全階級闘争の不可分の一翼をなしている。それ故にその中に政治的、経済的闘争の契機を含んでいない文化闘争なるものはあり得ないし、その発展に於いて経済的――政治的闘争たり得ない文化闘争はない。又すべての政治、経済闘争は、その部分として多かれ少なかれ文化闘争を含んでいる。それ故に一面から云えば文化闘争の全過程は、政治的、経済的闘争のための学校であり、その組織は後者のプールでなければならぬ。」

「文化的大衆の組織の結成は、それ自身に加わる政治的圧

迫に対して、又それの反動的文化組織との（それ自体が経済的搾取の組織であり、又政治権力と不可分に結びついている）闘争に際して、決してそれ自身の力で最後的に勝つ事は出来ない。ただ自ら階級闘争の一翼として、政治的・経済的闘争に対する熱烈な支持協力に依って、そしてそれを通して全体としての階級闘争におけるプロレタリアートの決定的な勝利を早めることによってのみ、文化闘争の遂行——プロレタリア文化の建設を正しく進展せしめ得るのである。」（プロレタリア文化創刊号巻頭言）

ここから明らかなように、文化闘争が、階級闘争として闘われ、それが単一なプロレタリアートの階級闘争に結合される一翼として存在する限り、文化闘争は広汎な意味の政治闘争に抱括されるものであり、従って政治闘争の指導党の掲げる任務に従属されてのみ、具体的に単一な階級闘争に結合され得るのである。蓋し、「階級の闘争は一つの政治的闘争である」（哲学の貧困）「あらゆる階級闘争は政治闘争である」（共産党宣言）

我々は以上のことから、文化活動と政治的、経済的闘争の結合、時に、文化に対する政治の優位性をはっきり認識しなくてはならぬ。文化に対する政治の優位性は、経済に対する政治の優位性と同様に、理論戦線におけるレーニン主義の闘争が一段と強調して照映したところのものである。

そして文化闘争が政治闘争に従属しなければならぬと云うことのレーニン的理解を発展させて行くとき、芸術、文化は党のものとならなくてはならぬ。それは党の任務に従属されなくてはならぬと云う文化、芸術の党派性のための闘争の意義を理解しなければならぬ。蓋し、政治闘争は党派の闘争として最高の表現を与えられるからだ。

そして、今日の段階は政治闘争が党派の闘争として激烈を極めている、この観点に立たなければ最早や不充分である。

従って、プロレタリア芸術における、政治の優位性の実践は次の如く概括することが出来る。

イ、創造的、啓蒙的活動が党の課題を自己の主題としなければならぬ。かくて、芸術運動は始めて階級闘争、広汎な意味の政治闘争の部分たり得る。

ロ、芸術団体、文化サークルは、広汎な意味の政治闘争のみならず、党（組合）の指導、組織する政治闘争（経済闘争）に活潑に参加しなければならない。

ハ、プロレタリア芸術団体員は、自己の創造的活動の党派性を自己の革命的実践と結合すべく努力しなければならぬ。（党と文学についてのレーニンの言葉を想起する必要がある）かくて、作家、批評家、文学的啓蒙家は始めて階級的党的作家たり得ることが出来る。

以上のことは、勿論強制ではない。我々は大衆団体の内部で物を云っているのである。しかし、わが芸術団体が一定の政治的方向に立っている以上、我々の指導の方向は、

そこにおかれなくてはならぬ。指導のボルシェビィキ性は、組織の大衆団体性と絶対に矛盾するものではない。若し、矛盾するとすると考え一定の指導の政治的方向をあくまでも拒否するとするなら、彼は何処かの、超党派的即ち「中立的」組織にしか安住の地を見出さなくなるであろう。

今、我々の運動は、以上の任務をいかに実践しているかと云えば、我々は疑いもなく階級的闘争の部分としての実践を基本的には正しく実現しつつある。その成果は国際的にも決して低いものではない。しかし我々は現状に甘んずる者ではない。我々の全実践が政治的課題を貫徹する点で、まだ立ち遅れていることを承認することは、何ら恥辱ではない。我々は、このことに多くの因子をあげ得る。だがマルクス・レーニン主義者は当面の基本的環の主張に他の因子を結合せしめなくてはならぬ。基本的欠陥は、我々の検討が示したごとく根本的には我々が現在の情勢に対して全体として政治的に低いところからきている。芸術運動は方向転換によって、真に経営内において全階級の闘争と結合する方向をとったが、それがまだ客観的可能性に応じて具体化されていない。これが基本的要因である。従って我々の主観的力は、未だ十分たかまり得るほど、政治的に高くない。我々は次のごとき方向において我々の全面的政治的立ちおくれを克服して行かねばならない。

一、経営サークルへの即時所属。日本プロレタリアートの歴史的疾患は、経営との結合の不十分にある。経営内の政治的文化的任務の遂行を通じてプロレタリア的観点を深めなくてはならぬ。労働者自身の作家、批評家の比率を高めること。

二、日本プロレタリアートの当面の政治的課題（新テーゼ第十二回総会決定等）を十分把握すること、マルクス・レーニン主義理論（スターリンによって深められつつある基本的政治理論、国際国内情勢のレーニン的分析、デボーリン、プレハノフの芸術論の我々の内の誤れる遺産の徹底的清算、レーニン主義芸術論マルクスの現段階の把握）による武装。同志村上雄が、我々が理論的に極めて低いことを指摘して「創造活動の立ちおくれ」の原因としていることは全く正しい。

三、啓蒙新聞、刊行物、講習会、講座、教育部、研究会等による政治的芸術的教育を深めること。従来、レーニン主義政治芸術理論の国際的国内的段階は、極めて少数の指導的分子の内で関心（それも決して十分でない）を持たれて居るだけで、その段階に全同盟員をたかめるための教育活動が欠けていた。教育部は単に批評家的グループに止ってはならぬ。芸術団体のどの新聞も、同盟の到達段階の大衆化と云う点に無関心であった。また、政治問題は研究会なんかでとりあげる必要はないと云う傾向などは、芸術団体は政治闘争の埒外にあるかのようなとき、作家同盟が、それについての政治的研究会を持っ文化主義気質の残存である。一昨年極東戦争の開始の

たことは全く正しい階級的敏感性であった。来るべき三月十三日、マルクスの五十年記念は、マルクス、レーニン主義政治、文化理論の大普及カンパニアとして指示されているが、政治的立ちおくれ克服闘争の一環である教育活動がこの際劃期的に展開されなくてはならぬ。四、封建的、ブルジョア的、社会ファシスト的芸術との闘争を何よりも正面に押し出しつつ、それとともに、陣営内の主要危険たる、右翼的偏向と「左翼」的偏向とを克服して行かねばならぬ。敵との闘争なくして、レーニン主義芸術が、正しく深まることがあり得るかのように考えるのは馬鹿げたことである。また、陣営内の小ブルジョア的逸脱は、基本的には反動敵のイデオロギーの陣営内への反映、圧迫として現われている以上、敵との闘争を抛棄して真に両翼の逸脱が克服出来る筈はない。人々は日和見主義の理論と実践がいかに反動芸術のそれと当然に方向を同じくしているかを痛感するだろう。

我々が今述べつつある諸条件を欠いている今日、日和見主義的傾向の発生の社会的根拠は全く拍車をかけられる危険を示していると云えよう。偏向の可能性が多いことは、芸術運動の現段階の到達点について高い関心を示していない人々が現在の困難を実践的に正しい方向へ克服しようと努力しないで、何の努力もいらない純文化的熱情に耽けることによって過去の特等席的気分をあたためようとしているところにある。今日の文化団体は、決して昨日のそれのようではなく、刻々に特等席的街頭性を清算しつつあるにも拘らず、しかも、事実において街頭的分子に止まっている人々が、ともすれば日和見主義的風潮にそまり易い多くの可能性を持っていることは全く明かである。逸脱は右も「左も」、どちらも危険である。にも拘らず、我々が、「右」を主要危険と云うのは、日和見主義の右翼的現われ方の可能性が多いし、それが妥協され、保護され易い、小ブルジョア的遺産が多く存在するし、又、それが当面の闘争の主要な障害となっているからだ。

偏向との闘争に際して次の如き政治的態度が必要である。

イ、批判を偏向的に主張をしている個々人の言説にのみ向け、或は個々人の「悪徳」にのみ向け、かかる逸脱を発生させるところの社会的根拠と諸条件の克服へ向けないことは正しくない。

ロ、逸脱の度合を具体的に知ること。次のスターリンの言葉は教訓的である。「日和見主義の方を向いている逸脱はまだ日和見主義ではない。我々はレーニンが逸脱の概念を説明する機を逸しなかったのを知っている。右の方への逸脱、それは未だ日和見主義の形を具えて了ったものではなく、未だ訂正する余地のあるものである。だから右の方への逸脱を完全な日和見主義とごったにしてはならぬ。」（スターリン・工業家と右翼的逸脱）欠陥が

基本的に正しいものの部分的不充分、部分的逸脱であるか、又は全体として誤まっている方向であるかを識別しなくてはならぬ。

ハ、ある同志の個々の偏向を、その同志の全体的傾向と分離して、種々の決定的烙印をおすことは危険である。しかし又系統的偏向者には執拗な系統的批判が加えられなくてはならぬ。党派性なき八百長的仲間ほめ、「腐敗せる自由主義」サロン的廻りくどさ、貴婦人的言飾と、非同志的悪態、デマゴギーを止揚し、厳密なレーニン的科学性と階級的熱意で問題はすすめられなくてはならぬ。

ニ、正しい批判に対する階級的自己批判を率直に展開することなくしては、全運動は発展しないのみか、誤謬の固執者はそのことによって、運動に徒らに混乱を加えるのみである。誤謬固執者はかかる意味で全く危険である。「吾々の間には何びとも『誤りを犯さない』者などは存在しない。けれども誤謬には、種々の誤謬が存在する。誤謬を犯すものがそれを固執せず且つその誤謬から綱領、傾向、分派等の生ずることなき誤謬がある。かかる誤謬は間もなく忘れ去られる。けれども又、誤謬を犯すものがそれを固執し、且つその誤謬から分派、綱領、及び党内闘争の生ずるような、他の種類の誤謬が存在する。かかる誤謬は忘れ去られ得ない」（スターリン）後者の誤謬を犯す者は、運動全体に意識しないで大きな打撃を加えるものとなることは明かである。

附記――私はここで「批評」の問題に詳しくふれ度いと思うが、それを果し得ない。手軽に素通り的に取り扱うより扱わない方がましな位にこの問題は可成り複雑だ。既に同志林の批評（諸処、特に十二月読売新聞）同志中条の批評（プロレタリア文学一月）同志川口の批評（プロレタリア文学一月）等が多くの問題を投げている。レーニン主義批評の基礎のために、批評における諸々の逸脱を次の早い機会に問題にしたい。

わが芸術、文学運動が、以上の四つの基本的条件を克服することなくしては、政治的立ちおくれを解決することは出来得ない。既に二三の同志たちは、例えば所謂「創作不振」は「単なる不振ではなくて、発展した情勢から取り残されたこと、或は書く暇がないのではなくて書けないのだ」と基本的には正しい理解をしている。（同志鈴木）又他の同志は経営からの分離（同志鹿地）理論的未熟（同志村上）政治的明確性の欠如（同志伊藤、同志中条）等をあげているが、これは全体として我々の欠陥が政治的立ちおくれにあることを示す要素の夫々の指示である。だが、一部の同志は立ちおくれの妥協的合理化を試み、「不振」の罪を、単なる文学的教養の問題、組織運動多忙の問題、更にひどいのになると、専ら「批評」に帰着しようとしている。我々は問題を単なる、あれやこれやの思いつきでなく、我々の運動がそれなくしては、ただ、停滞と腐敗の危険を加えるのみであるところの政治的立ちおくれの克服と、そ

のための四つの条件の遂行に、他の必要なモメントを従属させなくてはならぬのである。
　我々は、政治の優位性に関するレーニン主義的光条をあくまでも実践のなかに貫徹しなくてはならぬ。政治と芸術、政治の優位性の問題は我々の全実践が依存する原則的問題である。「原則的問題には『中間の方針』はないし、またあり得る筈はない。」（スターリン）我々は、理論的無原則性と現象的思いつき主義、腐敗した自由主義に抗して、運動の先頭にレーニン的党派性を立てねばならぬ。
　我々はこの方向を断乎としておし進めることによってのみ困難を克服し得るであろう。また日本プロレタリア芸術運動に課せられた現在の瞬間の国際的に重い歴史的任務に対して正しく答え得るであろう。（完）

（一九三三年一月「プロレタリア文化」）

作家として

林　房　雄

一

　ぼくは心をきめた。ぼくは文学のために一生をかける。
　文学の仕事は高くそして大きい。それは男の一生をかけるにあたいする。いな、一生をかけないかぎり、文学は、——およそ文学の名にあたいしうるものは、けっして生まれない。
　（ここでぼくは、はでな宣言文章をかこうとしているのではない。作家としての再出発を行うにあたって、小さなおぼえ書をつくろうとしているにすぎない。だから、いうことはおのずから単純である。それは心の複雑な、心の大人びた同時代人の微笑をさそうものであるかもしれない。しかし、「確信によってうらづけられた単純なことば」のみを、ぼくはいまこの上なくあいしている。そのことばのみが、まことの詩であり、ただ一つの文学であることも、知っているつもりである。）
　ながいあいだ、ぼくは、プロレタリア作家の一人として、「政治」と「文学」という二つのポールのあいだをぐらついていた。もちろん、このぐらつきは、頭の中だけで行われた。それを積極的な行動としてあらわしたことはなかった。すなわち、つねに作家としてしか行動してこなかった。しかも、頭の中では、文学を政治にしたがわせたり、政治から文学をきりはなしたり、しかし要するに多くの場合、政治の名において文学をおしさげること、自ら作家でありながら作家としての自分を卑下すること、に終始してきた。

このぐらつきと自卑の原因を、ぼくはこれまで、「時勢」と「良心」のせいだと考えていた。事物の関係がつねに安定せず、つねに転変する「過渡期」のせいであり、またプロレタリアートに忠実であろうとするインテリゲンチャの「良心」のせいだと解決していた。しかし、いまになってわかる——ぐらつきと自卑の原因は、ぼくが文学をただしく理解していなかったという、明白なそして根本的な事実の中にあったのだ。

たとえば、ぼくは作家と記者の区別さえ、はっきりとは知っていなかった。

もう五六年もまえのはなしである。蔵原惟人と一しょにテルノフスカヤ女史をたずねたことがあった。女史は千駄ケ谷の小さい露路のおくの家にいて、そのころの「文芸戦線」同人の作品をほんやくしていた。ぼくの作品もその中に入っていたので、はなしのついでに、女史はいろいろとぼくについての批評をした。その中に次のようなことばがあった。

『林檎』『繭』『絵のない絵本』などは、まず文学になっています。しかし『公園の蝣曳』『エティケット』などは文学ではありません。ジァーナリスト——記者のかくものです。作家はけっして記者のかくようなものをかいてはいけません。」

ぼくはなんの意味だかわからなかった。わからなかったから、かんたんに女史のいうことをけいべつしてしまった——心の青いくせに、ひたすらに傲慢なものの手っとり早い逃げみちとして。ぼくはひそかに思ったのだ。

「この婦人共産党員は、出身が労働者だというのに、なんという古い文学観にとらわれているのだろうか？　この女は、すくなくとも文学については、ロシアのあたらしい教化をうけていないのではなかろうか？　それとも、ロシアの一部には旧時代のかすとして、まだこんな古ぼけた文学観がのこっているのであろうか？　——新時代の作家は記者でたくさんだ！　とくにプロレタリア作家は、闘争の従軍記者であり、生活のすばしこい報告者(レポーター)でなければならない。ぼくらはむしろよき記者であることに誇りと満足を見出すべきではないか！」

いまになって——三十歳になってはじめて、この考えがたいへんなまちがいであったことに気がついて、冷汗をかんじている。テルノフスカヤは、ソヴェート・ロシアのすぐれた批評家・鑑賞者たちとひとしく、文学について、まことにたしかな理解をもっていた。まちがったのはぼくであった。

「作家はけっして記者であってはならない」ということばの意味を、さらにいっそうはっきりさせてくれるのは、つい近ごろよんだ、バルザックとゾラについてのエンゲルスの比較であった。「プロレタリア文学」と「思想」の七月号に発表された、リアリズムを論じたエンゲルスの

手紙の中に、次のような一句がある。

「……わたしはバルザックを、過去現在未来のあらゆるゾラよりも、偉大なリアリスティックな芸術家だと考えています。……」

バルザックとゾラを、いまのぼくは、たいして知っているわけでない。しかし、知るかぎりの二人の作家について、しずかに思いかえしてみるとき、エンゲルスのこの断定から、ふかい文学的教示をうけとる。

これはまず文学史の常識をやぶることばである。フランスではすでに、これに似たことが、たれかによっていわれているのではないかという気がするが、すくなくとも日本におけるフランス文学史の常識としては、バルザックはロマンティシズム末派・リアリズム前派の作家であり、真のリアリズムはゾラとその友人作家たちによって花さいたことになっている。リアリズムをかたるのは、まずゾラを最高の場所におかなければならぬことになっている。

だからエンゲルスのはげしい断定は、文学史的常識——すくなくともぼくのそれ——をやぶってくれた。常識のめがねをはずして、あたらしくこの二人の作家をながめなおしたとき、ぼくは、バルザックがより多く作家的な作家であり、ゾラが、その偉大さにもかかわらず、より多く記者的な作家であることに気がついた。

ここであらためて、バルザックの作家性とゾラの記者性を説明する必要があるであろうか？ だまって書架から「従妹ベット」と「金」とをとって、読者の机の上におくことで十分なのではなかろうか？ ——心をもってこの二つの作品をよみとおす人は、記者性と作家性の差異を、たやすくよみとることができるであろうから。

だが念のために、一つのたとえばなしをつくろう。

もえている熔鉱炉があり、うごいているトラックがある。トラックは鉱石をはこび、熔鉱炉は鉱石をとかす。

トラックの任務は、その中に〇・五パアセントの金をふくむ鉱石を、できるだけ多く、できるだけ敏速にはこぶことである。多く、そして早くはこべばいいのである。むろん、まるで金をふくんでいない鉱石を、まちがってはこんだトラックは、まぬけだといわれるであろう。しかし、すくなくとも金をふくんだ石をはこびさえすれば、それはよきトラックであり、それで責任ははてるのである。

しかし熔鉱炉は鉱石をとかす。胸の中の、地獄のようにきびしい火熱によって、山なす鉱石をとかし、九十九パアセントをすて、〇・五パアセントをあつめ、かがやきわたる純金の流れとしてはきだす。山なす鉱石があっても、熔鉱炉がなければ、人は純金を手にすることはできない。また、そのうかつさの故に、金をふくむ鉱石の価値を知らず、いたずらに鉱石のきたなさと重さをなげいていた人々も、熔鉱炉の口からあふれでる純金の流れを見るとき、例外なしにそのうつくしさをたたえ、鉱石の山をみなおし、そのよごれと重さをなげくのをやめ、自ら発掘のためのつるば

しをとりあげることとさえするのである。

トラックが記者であり、熔鉱炉が作家であり、鉱石とは人生、純金とは本質性でありリアリティである、と説明するのはよけいであろう。

作家の任務は、いかにひろく材料をあつめるかという点にあるのではない。いかに完全にそれを熔かして、本質性とリアリティにみちたあたらしい世界を創造するかという点にある。

明快をこのむ比較者は、ゾラをトラックにバルザックを熔鉱炉にたとえてもいい。しかし、ゾラにもまた作家としての敬意をもつぼくは、むしろ、ゾラをよりひくい熱度をもった熔鉱炉に、バルザックをよりたかい熱度をもったそれにたとえたい。「山のごとき材料」「統計のごときノート」を、創作の前段的事業として腹の中にとりいれる点では、ゾラの方がむしろまさっているであろう。しかしその熱度のひくさの故に、かれは多くのかすを、またはなまな鉱石をとかしきれないままにはきだした。だから、正しく文学をかんじうる人々は、ゾラの作品の中に、バルザックのそれにくらべて、より多くの新聞記事をみる。

二

作家はトラックであってはならない。うちにもえさかる心熱をひそめて、一切をとかし、その本質を昇華させる熔鉱炉であらねばならぬ。

ソヴェート・ロシアの批評家たちが、プロレタリア作家に要求する、

「作家は前衛の眼をもって事物をながめなければならない。」

「作家はつねに時代の最高文化水準を代表しなければならない——ゲーテのごとく、トルストイのごとく。」

ということばもまた、作家が単なる記者・報告者であってはならないこと——現象の底に入って、俗眼の見おとす、リアリティの世界のまえに啓示するものでなければならないことをおしえることばにほかならぬ。

「リアリストにして、もしかれが芸術家なら、人生の平凡な写真をわれわれに示すことなく、現実そのものよりもっと完全な、もっと迫るような、もっと納得できるような人生の幻影をわれわれにあたえるようにつとめるべきであろう。」

これは、人も知るとおり、モオパッサンの有名なことばである。有名であるだけでなく、文学の任務についてたしかなまちがいのないことばである。これと「芸術的方法についての感想」の中に蔵原惟人によってひかれたベリンスキーのことば、

「才能ある画家によってカンヴスの上に創造された風景は自然におけるあらゆる絵画的な眺望よりもすぐれている。」

「……科学と芸術における現実は、現実そのものにおけるよりも現実に似ている。……」
「……現実が芸術家をひきまわすのでなくて、芸術家が現実の中に自己の理想をみちびき入れそれにしたがって現実を改造するのである。……」
さらに、マルクス主義者として、ベリンスキーを正しく訂正する蔵原惟人の、
「……芸術家はその眼から見て、その現象に偶然的なものと見えるものを除き、それに固有なものと見えるものをひきだして、それによって新しい世界を創造する。……」
ということばを考えあわせれば、エンゲルスのはげしい比較の意味がもっとはっきりするであろう。
すなわち、ゾラにくらべると、バルザックはより多く創造者であり、バルザックにくらべると、ゾラはより多く報告者であった。そして、報告はけっして文学でなく、記者はけっして作家ではない。
しかし、そういうことによって、ぼくはゾラを「平凡な写真師」として、不当におとしめようとするのではない。ぼくがもし、バルザックの肩車にのって、ゾラを小人あつかいにしたならば、それはあまりにも小僧らしいげいとうであろう。またもし、エンゲルスの権威をかりてゾラの文学史的光明を消そうとするなら、巨人を巨人としてみとめえない自らの盲目ぶりを告白することになろう。しかし、現在のぼくのまずしい鑑賞力によっても、かねてゾラの作品にはばくぜんとした不満をいだき、バルザックの作品に自ら説明しかねるはげしい熱中をもっていたことは事実である。
だから、一月ほどまえ、ゾラをしらべているある若い研究家が、
「ゾラは作家としてよりも文学運動の指導者・評論家としてえらかった。かれの十一巻の評論集はあきらかにそれを示している。かれの作品の中で、文学としてあげることのできるものはまず『居酒屋』くらいなものであろう。」
という意味をいってくれたときに、眼から最初のうろこがおちた気持がした。そしてエンゲルスの暗示は最後のうろこをおとしてくれた。作家は記者であってはならないこと、プロレタリアートのすぐれた指導者たちは、作家にたいしてこのように高い精神の水準を要求しているということ、プロレタリアートの作家でありうるためには、ぼくらはゾラであってもなおたりないということ——この自覚はぼくをひきしめる。過去をはずかしくふりかえさせると同時に一生を文学にささげるあたらしい覚悟をよびおこす。

三

作家と記者の区別さえ知らず、いな、心の幼さとからっぽさによって、知ろうにも知りえなかったぼくが、しかも

奇妙な自信と自己満足とをもって、作家的任務を記者的任務におきかえ従軍記者、事件報告者、即興作者、通俗解説者こそが新時代のプロレタリア作家であると信じこんでいるとき、そこにおこったものはなんであったか？　――作家としてのみじめな自己卑下であった。

「文学は政治（すなわち階級の総体的利害）に従属せねばならぬ」という正しくまちがいのないことばを、きわめて小児的に理解して、「文学か政治か」などとみじめにぐらつくことによって、ひどくこっけいな政治的誤謬におちいったのである。ぼくは熔鉱炉を敵の手にわたして、トラックにのって逃げだしたのである――しかも自分では、それこそプロレタリア作家の正当な態度であると自信しながら。

これまでのぼくの作家としての醜態も根本の原因はここにあるのだ。あれをぼくのモダン・ボーイ性に帰することが、一部の批評家・読者の常識になっているようであるが、それはまちがいである。自ら記者・報告者であると考え、文学そのものを第二義的にしか理解しえず、したがって文学にたいして、つねにイージイ・ゴーイングであったことが一切の原因だったのである。

しかし、もうぼくは記者ではない。自ら放棄した熔鉱炉をたてなおす。もうぐらつかない。すべての自卑をすてる。

一生をかける。――そして一生とはなんであろうか？すぎさった日が一生であろうか？　これからくる日が一生であろうか？　どちらでもない。ぼくの一生は今日一日をほかにしてない。ぼくは今日一日を、生きている日の一日一日を、文学のためにかける。

ぼくは毎日だまって、八時間だけ机のまえにすわりとおす。それがもう三月つづいた。一生つづける決心である。

今かいているのは小説「青年」である。作家として最初の出発。記者的要素を全力をあげてのぞきさること。

「青年」はぼくの血と肉をすいとる。ぼくは「青年」をかいているときには毎日やせ、ほかのものをかきはじめると、またふとる。「青年」においては、ぼくはまず、作家として活動するまえに、資料蒐集家として、考証家として、風俗史家として活動する。すぐれた歴史家たちの概括や結論はもちろんとおとい。しかし、作家は人のあたえてくれた概括や結論の上に作品をきずくことはできない。自分自身の資料を開拓しなければならない。

しかし、この資料開拓にあたって、作家がややもすればおちいるあやまりは、それが創作の前段的仕事にすぎないことをわすれ、歴史家的考証家的興味にとらわれて歴史小説をかくつもりで、歴史そのものをかいてしまうことである。森鷗外の歴史小説がそのいい例だ。かれのもっとも歴史小説的な「高瀬舟」にしても、純粋な考証文献としての「伊沢蘭軒」や「渋江抽斎」と大きなへだたりはない。鷗外はリアリティにもっとも近いつもりで、もっともとおい

作品をかいてしまったのである。

この逆をゆくものは、菊池寛、芥川龍之介などの作品に代表される歴史小説であろう。これは、社会的時代背景から抽象した個々の事象に、作家が「現代人的」解釈を加えたもの、現代人に過去の衣をきせたアレゴリイの一種であって、根本的な歴史解釈――歴史のリアリティとははるかにとおい。そのカリカチュアライズされたものが、すなわち大衆文芸家諸氏の「歴史小説」にちがいなかろう。

この二つの非歴史的歴史小説の型から、ぬけでようとしているものは、島崎藤村の「夜明け前」だ。そして、それは、すくなくとも、菊池・芥川的アレゴリーからは、完全にぬけきっている。しかし、資料蒐集家・歴史学者にひきずられている点では、まだまだという気がする。素材におされて、藤村は作家としての十分に自由な創造的活動をさまたげられている。

「夜明け前」の読者の九〇パアセントまでは、あの作品のよみにくさをなげく。まったくよみにくい。そして、このよみにくさは、作者自身の責任だとぼくはあえていいたい。（「夜明け前」への讃歌はすでに小論「文学のために」の中で、十分うたいつくした。ここでは不遜をかえりみず、あえてその欠点のみをとりあげる。）

「夜明け前」の藤村は、けっしていい熔鉱炉ではなかった。炉口からほとばしりでるものが、一いろの火のながれにとかされていない。注意ぶかい読者は、あのみがきあげられた七宝のような表面をすかして、とかしきれない鉱石の破片をじつにおびただしく発見する。

また、わざわざ「夜明け前」をよまなくとも、ありきたりの明治維新史をよめばたくさんなことがらが、あたかも小説であるかのごとくならべられてもいる。歴史小説でなくて、歴史そのものである部分が多すぎるのだ。それが読者をこの上なくつからせる。

極端をおそれずにいえば、ぼくはあの作品に、文学的興味よりも、資料的興味をかんじたくらいである。

トルストイの「戦争と平和」は、人もしっているとおり、そのある部分は歴史家の根本資料としてみとめられている。かれが、その社会的地位の便宜を利用して、普通の歴史家が手に入れえない、貴族や旧家に秘められている文献をあつめ、それを作品の中にもりこんだからである。

藤村が、かれの近親者の残したためずらしい事蹟と文献によって、いままでの維新史家がみおとしていた「平田篤胤死後の門人」の運動、すなわち革命化した農民上層の全国的組織の活動を発見し、えがきだしたことは、このトルストイの歴史家的貢献と共通するものがある。

しかし「戦争と平和」の偉大さが、そのような資料的方面にあるのではなく、その作者が、世にも偉大な熔鉱炉であった点にあることは、もうくりかえさなくともいいであろう。（このことは歴史小説のみならず、現代をあつかった小説にも――いな、文学全体にあてはまる。長篇たると

短篇たるとをとうことなしに。)

「青年」において、ぼくはこれらの一切の欠点から自分をまもることにつとめている。非力なぼくがそれを十分に行いうるかどうかは、神のみが知る。しかし、この努力はどこまでも作家の義務であろう。

四

おわりに、小さな夢をかたらせてもらいたい。むろん夢ものがたりであるから、ややちぐはぐである。わらってよまれてもかまわない。

ぼくはいまプロレタリア・ルネッサンスということを考えている。

西鶴・近松の元禄時代に、最初のルネッサンスをむかえそこねた日本のブルジョア文学は、ついに明治以後においても、ルネッサンスの名にあたいしうるものを、もつことができなかった。ヨーロッパのルネッサンスは、ギリシャの文化的遺産と地中海を中心とする当時の世界市場の上に花さいた。しかし、日本のブルジョア文学は、大唐・王朝文化(その本質においてギリシャ文化におとらぬ遺産)を背景にもっていながら、徳川幕府は鎖国制度によって世界市場を足もとからさらわれたために、馬琴・一九・八文字屋本のあわれな化政度文学にまでちぢみこんだ。西鶴と近松とは、完全にわすれさられ、かれらがふたたび文学的に復活するためには明治の二十年代三十年代をまたなければならなかったのである。

ある人々は明治文学の創建者である「紅鷗露逍」らの少青年期の読書目録の中に、一册の西鶴さえなかったといったら、おどろかないであろうか? ——逆説をおそれずにいえば、明治創建期の文学は、外国文学のとりいれと、自国において一度花さいた元禄リアリズム、すなわち西鶴一人におちつくことでせい一ぱいだったのである。

しかも、明治の文学が、ようやく本来のブルジョア・リアリズム・ムーヴメントとしての自然主義運動にまで発展しはじめたところには、ブルジョアジー自身は、すでに革命的勢力たることをやめ、生れはじめた自然主義文学を、山県・桂官僚政府の攻撃のまえにさらして平然としていたのである。

日本の自然主義文学は、そのために、おさえられた小ブルジョア・インテリゲンチャの文学運動として、小さくまがって畸型化してしまった。

大正期に入って、ブルジョアジーが、うなぎのようにぬけ道をくぐって政治的首位にのぼったときには、日本の反資本主義的諸勢力は、すでにその第一歩をふみだしていた。

この一般的な反資本主義気分の上に花さいたのが、白樺派の文学である。それは貴族の没落した部分——主として公卿貴族とその友人たちを中心としておこり、当時の都会と農村のインテリゲンチャの心をふかくとらえた。武者小

路実篤の「人道主義」や空想的社会主義気分を理解するためには、ブルジョアジイによってめちゃめちゃにされた公卿貴族たちの生活とその反ブルジョア気分を知らなければならない。(熱心な読者には、武者小路の自伝作品以外に、正親町季董の自伝や、入江たか子の自叙伝をよむことをおすすめしたい)。また白樺派末期におけるあの見事な混乱と解体――武者小路をはじめとして、志賀、有島、里見たちの作家がしめしたそれぞれ特色のある転向と自壊とを理解するためには、かれらの階級的基礎とプロレタリアートの勃興を頭にいれれば十分であろう。

このように、日本のブルジョアジイは、ついに人と社会とを底の底からまきかえす真のルネッサンスをもつことなく、文化の促進者としての役割をおわった。

それ以後、まがりくねりながら、そろそろとプロレタリアートの側にちかづいてゆく、インテリゲンチャのプロレタリア的文学運動がつづいた。それとならんで、出版資本家の活動によって、「大衆文芸」のめざましく俗悪な進出があった。ああ、日本ブルジョアジイの最大の文学的功績!　この二つのあいだにはさまれて、たえず黄色い汗や青い汁をはきだしている「純文学」なるものがある。これは自ら称するとおり「純文学」であって、文学ではない。自分が出版資本にみはなされたことを、まるで文学の滅亡であるかのように考えて、亡ぼうか亡びまいかとしきりに煩悶しているあわれな文学変種である。

どの流れが日本のルネッサンスを完成するであろうか?

ぼくはいま「日本プロレタリア作家同盟」の中ではたらいている。そして、この作家同盟が知識階級性をしだいにあらいおとして、プロレタリアートに組織の中心をうつし、このあたらしい文化の泉をふさぐ最初の石を、とりのけたことを知っている。――こたえはこの事実の中にある。

ぼくたちはがんばらねばならぬ。日本のルネッサンスはプロレタリア・ルネッサンスであり、文学のルネッサンスはプロレタリア文学に課題されている。

これはぼくの夢である。しかし、ぼくはまた知っている。努力はしばしば夢を現実にすることを。

(一九三二年九月「新潮」)

最近の所謂「歴史小説」の問題に寄せて

本多秋五

「歴史小説」を論ずる時、我々は「歴史小説」それ自身か

ら出発して論ずべきではなく、つねに小説——文学の見地から、その一つの特殊形態として論ずべきであることは、最初にのべた。もし我々は「歴史小説」を書くべきであるかどうか、若し又書くとすれば、それは「何を」「如何に」と云う問題も亦、我々は文学の性質意義をいか様に解し、その当面の任務をいか様に規定するかによって決定されねばならない。

我々の小説——文学の創作活動は、労働者農民並びに勤労者大衆の獲得を任務とする文学運動の一面である。従って小説——文学は、この任務に対してより積極性ある主題を持たねばならぬ。そのためには、我々の文学の中心的主題が常に階級闘争におかれなければならぬと云うことは、歴史的にも論理的にも証明せられる。

我々の文学の中心的主題が常に階級闘争におかれると云うことから、文学作品の題材に、ストライキや反戦活動や小作争議のごとき、階級闘争の直接的に激化した場合が、より多くとり上げられると云うことは、一つの必然である。何故なら現在我々は惨虐な白色テロルと眼に見えた・或は隠れた抑圧と闘争しており、この闘争をより強力により効果的に戦うために闘争しているのだから。併し我々の階級闘争は——すでに谷本清が云っている様に——その直接的激化の場面にのみある訳でもなく、政治的・経済的・文化的・日常生活的等のあらゆる場面にある。のみならず、現在の闘争は過去の闘争から切り離されてある訳でもない。従って我々の文学は、過去及び現在の、より顕著な・或はより隠微な階級闘争のなかから、積極性ある主題を構成するに役立つ題材を、広汎にとり来って利用しなければならない。谷本清が「……弁証法的唯物論の方法そのものは芸術に於ける主題の積極性を要求する。現在及び過去の我々の現実の中から社会的に積極性のある主題を類型的にではなくて、具体的に広汎に発生し来ることは芸術家の一つの重要な任務である。」(「プロレタリアートと文化の問題」二三頁)と云っているのは、この意味である。蓋し社会的に積極性ある主題とは、とりも直さず現在の革命的プロレタリアートにとって積極性ある主題であり、労働者・農民並びに勤労者大衆獲得のための我々の運動にとって積極性ある主題と云うも、亦かような主題に外ならないから。それ故、一般的に云えば、もしかような積極性ある主題を構成するところの題材が過去の歴史の中にのみ存在する場合には、所謂「歴史小説」の創作されねばならぬ必然性がそこにあり、かかる場合にのみ「歴史小説」の意義があるのである。オー・ビーハが、『時世(アクチュアリテート)に適合していること』は政治的並びに観念的な自明の明白さと並んで、プロレタリア文学作品のよりよい作品のための第一前提である。この意味に於て時世に適っていると云うことは、時間的範疇ではなくて、内容、材料選択、問題提出の範疇である。従って十年前の闘争を描いた作品が、昨日を取り扱った作品よりも、『時世に適っている』ことがあり得る。すなわち現在の政

治的状態が、十年前になされた闘争の経験から、昨日一昨日の先例からよりも、より易くより善く過去の過失と敗北を避け得る場合がそれである。」(「綜合プロレタリア芸術講座」三巻五一頁)と云っているのは、当面の情勢に対する適応性と云うものを、時間的範疇ではなく内容と問題提出の範疇として理解している限りで、「然しこの方向(「歴史小説」の方向)に極端に走ることは、結果に於て我々を誤らしめるであろう。」(同上)と云う忠言とともに、完全に正しい。かような歴史小説創作の必然性に基いて書かれた作品が、そしてそれのみが、個々の作品の全体的な成功と失敗とは別として、少くとも当該作家にとって一歩退却を意味しないところの「歴史小説」創作の、唯一の場合である。そしてもしもこの場合、かように積極性ある主題を構成する題材が、特定の過去の歴史の中にのみ発見されると云うことが真実であるならば、即ち過去の具体的な諸条件の中にのみ発見されるのであるならば、作者は当然この過去の歴史的断面に於ける諸条件を、具体的に、現実的に再現せざるを得ない。そこでは過去の歴史の恣意的なつくり変えはあり得ない。即ち「歴史小説」に於ける主観主義的傾向は、何ら存在し得られないのである。この場合にのみ、それは主観主義的傾向を克服しているとともにそれはもはや現実の闘争から眼をそむける一姿勢ではなくて、現実の闘争そのものを見透す眼光が過去に徹しているのであり、あらゆる客観主義的傾向をも克服しているのである。

即ちブルジョア的世界観に於ては、宥和しがたい対立をなしていたところの、主観主義的と客観主義的との傾向対立が、もはや傾向としてではなく、止揚せられ統一せられているのである。これが現存事物を、その客観的・歴史的現実性に於て把握するとともに、この具体的な現実そのものの中に、これを廃棄する生きた進歩的条件をみいだし、この条件を担う、「一定の社会的グループ」の側に公然と立ち、この条件を意識的積極的に発展させることに依って、客観主義よりもより深刻に客観主義を貫徹せしめる党派的見地であり、この見地に立つ故にレアリズム以上にレアリスティックな、弁証法的唯物論の創作方法なのである。

以上に私は「歴史小説」の一般論をのべた。以下に私は我々の「歴史小説」の「何を」、「如何に」、の問題を具体的に考察するために、「青年」を例にとり、「夜明け前」と比較しながらすすもう。

同志林房雄が幕末維新の時代を背景とした長編の「歴史小説」に筆をつけたことは、もしそれが現実のプロレタリアートの生活と闘争を描くことを回避したものであったとするならば、――「プロレタリア文学」十月号の同志亀井の論文末尾の言葉にまったく同感である。もしそれがそうでないならば、――非常に意義ある試みを企てたものであると云える。明治以後の日本の政治・経済・並びに道徳・

教育・芸術・宗教その他の文化領域の史的発展の再検討が、今日の如く我々に重要な意義をもって来たことはない。そしてこの再検討のメスは、疑いもなく幕末維新の時代に、先ず深くおろさなければならない。幕末維新史研究のために、それぞれの専門学者が彼等の科学的方法によってメスを揮うのと同様に、芸術家が又彼等の独自の芸術的方法によってメスをふるうのは、我々当面の重要任務に応える所以である。そして同志林は「密偵」（一九二八年九月「戦旗」）の如き作品のあるところから推せば、相当以前から維新史研究に関心をもっており、特に獄中では専門的にこの方面の研究に努力を払ったものの如くであるから、この仕事に対して最も適した作家の一人であったであろう。どの作家も平等にすべての題材に通じていると云うことは、望まれもしないし、必要でもない。得意とする題材やその取り扱いに引きずられて、イージー・ゴーイングな、又は誤った方向に逸脱しない限り、それぞれの方面に対して最も適した才能が、積極的に活動すると云うことは、それだけに効果的である。この意味に於て同志林の企図は、少くとも非常に意義あるものとなり得べきものであった。

「青年」前篇は元治元年を時代的背景としており、伊藤俊輔、志道門多を中心人物としておる。時代は公武合体論の占めた一時的支配をおし破って、より急進的な討幕論がこれに代わろうとし、それにともなって攘夷論の内容が変ろうとしている一時期である。即ち国の内外の圧力に依って旧制度がまさに土崩瓦解せんとし、新しい社会制度の建設が摸索されている一時期である。中心人物は長州藩を背負って維新革命の運動の前面に立ち現われている二人の「英雄」である。作者は大きな維新革命運動の中心的な環にメスを触れんとしている。作者には大きな成功が約束されているかに見える。しかし作者は大きな失敗をしでかしている。のみならずこの作品は、実はそこに実現せられた結果から、作者の意図そのものがそもそも奈辺にあったかが問題となってくる作品である。頗る積極性を欠いた、もし作者が大なる積極性を発揮していると云うならば、その積極性そのものが果して如何なる積極性であるかが問題となってくる作品である。

作者は「英雄」を全く孤立的個人として描いて、利害・思想・感情を異にし、従って結合し・離反し・中立的となる諸階級・身分からなる国民大衆のうちの指導者として描かなかった。従ってその時代的背景をも具体的に描かなかった。中心的な環は、実は中心的な環として取り上げられず、孤立した環としてとり上げられている。このことは、筋の発展が偶然的であり、人物が抽象的になっている点にハッキリ現われている。

筋の発展の偶然的性質は、一面人物の抽象的性質のうちに現われている。それ故人物の抽象性に就いて云おう。例えば医師ブラウンの如き、——読者にも作者にも、これは

も早くどすぎるかも知れない、しかし云おう――その最もチィピカルなものであろう。この男は、この時代的背景をはなれて、自由自在に歩きまわることの出来る男である。二〇年前へ持って行こうが、三〇年後へ持って来ようが、又イギリス人にしようがフランス人にしようが、旗本にしようが浪人にしようが、乃至は現在我々の眼前にいる二十歳の代のインテリゲンチャにしようが、この作品中で持っている自然さ（或は不自然さ）よりも、より少い自然さ（或はより大きい不自然さ）をもつと云うことはないだろう。このの男がかような変通性をもつと云うことは、それだけ具体的条件を抽き去られた、中身の透ける抽象的人物であることを意味する。藤村の「夜明け前」は、前の規定によれば宿命論的客観主義の立場から肯定せられた過去の歴史であると云ったが、一口にそう云う中にも、より具体的にみれば歴史を逆転するより外に自己を肯定する道のない小ブルジョア的変革の待望を鼓吹している。そのことに依って、それは反動的意義を持つ。藤村の立場が現代の一部の小ブルジョアジーの立場であることに依って、作中に描き出された世界も、木曽街道の庄屋・本陣・問屋の、もしくはそれに類する階級を主とし、その他の世界はそこから眺められており、そこから遠ざかるに従って墨色はうすくなり、遂には影の様になっている。併しブラウンの様な抜き差し自在な人物はどこにもいない。主人公の半蔵が起って居る仲間に入り、障子をあけて西の空をながめる、美濃・尾張の晴れた空がはるかに見える。この時彼が腹から一つ呼吸をすれば、我々はその呼吸をかなりの程度までジカに感ずることが出来る。それは何故か。いろり辺での茶飲話、帳簿を前にしての執務、彼の読書、彼の交友、そう云うものを通じて、彼がその中に育ちその中に生活を営んでいる歴史的・社会的条件の総体の中に、彼がかなりの程度まで具体化されているからである。藤村が本当に光を浴せている世界は、せまい世界にすぎない。したがって丸彫りにせられている人物は殆どない。しかし少くとも主要人物はくっきりと浮き彫りにされており、それぞれ必然性をもって行動している。ブラウンの行動が無限で自由であるに比して、一定の人物が一定の事件に遭遇してとり得る行動は、そう幾通りもない。そのことはブラウンがまるで必然性を持たぬ人物であると云うことである。「青年」のブラウンを、「夜明け前」の半蔵と比較することは、不当であるかも知れない。しかしブラウンを俊輔にしても聞多にしても、程度の差こそあれ同様のことが云える。

鷗外は彼の短篇「歴史小説」に於て、すべての人物を歴史的・社会的条件で、十重二十重に縛りつけた。いな寧ろ十重二十重にからみ合う歴史的階級的条件そのものの中に、「生きた人間」の脈搏を脈うたせた。これが彼の理詰めのレアリズムの一形態であった。彼の描いた人間を一定の歴史的断面にピッタリと貼り着いており、勝手に出歩くことが出来ない。彼を組成する諸条件を抽けば彼は死ぬ、

と云うより、大体彼は消えてなくなるのである。鷗外は勿論、実証主義者が観念論者であると云う意味で観念論者であった。しかしこの限りでは遙かに林房雄よりも唯物論的であった。唯物論者は孤立的個人と云うものを認めない。社会関係の総体の中に織りこまれた個人を見るのである。従って抽象的な人間性を容認せず、非歴史的な人間の生きているのを知らないのである。そう云う人間が描かれている限り、それは非現実的なのである。

作者の側に立って或は云うことが出来るかも知れない、ブラウンの様な特異な経歴と性格を持った人物が、当時存在する可能性が絶無だったとは云えまい、作者はそう云う人物の口をかりて自身の見解を述べさせたのである、と。なるほど云えまい。しかしかような人物の存在と当時の日ブラウンの様な人物が当時絶対に存在し得なかったとは、本の国内的・国際的情勢と、偶然的でないどう云う関係があるか？　イギリス艦隊を日本に派遣したものは、イギリス政府の世界市場開拓のための外交政策であり、この政策を動かしていたものはマンチェスターの紡績屋とラシャ屋である。これがこの間の本質的な事情である、こう規定しているものは作者自身ではないか。他方作者はイギリス・ブルジョアジーの帝国主義的政策を、自由主義的・人道主義的理想の観点から批判しようと云うのであるか、抽象的な「青年の理想」の名によって作者は理想主義者の理想を、而も作中に作者自身が乗り出して、讃美しようとするのであるか。

我々が探究するのは現実――現実中の現実、その動脈であり脊髄である。従って作者が作中に探究の対象としてえらぶ主要事件・人物は、歴史的階級的内容を深刻に反映しない・浮いた脂の様な偶然的・例外的なものであることは出来ないと思う。エンゲルスはこのことをラッサールに宛てた手紙の中で云っている。私はラッサールの史劇「ジッキンゲン」を読んでいない。しかし原則的な命題は、この手紙だけからでも充分学び得られる。問題になっているのが小説でなく戯曲であることも、その点に何等支障を来たさない。即ちエンゲルスは云う。「君のジッキンゲンは全く正しい軌道の上にある。即ち行動する重要人物は、一定の階級と傾向、従ってその時代の一定の思想の代表者であって、彼等の動機をつまらない個人的情慾の中に見出さないで、実に彼等を押し流して行く歴史的激流の内に見出している。」（改造社版、マル・エン・全集、二二巻・一六〇頁）と。更にこれにつづけてエンゲルスは、「しかし尚改良を加うべきであるとすれば、それはこの動機が行動そのものの進行中にもっと、活々と、活動的に、いわば自然に前面に現われて来、これに反して議論の多い論争……が益々無用になると云うことだ。」（同上）と附言している。エンゲルスは、与えられた現実中の現実必然性の追求を求めて、作中人物に一般的なタイプの具体化を要求しているばかりではない。更に高度な芸術的要求――具体的なものを一層具

体的にヴィヴィッドな形象として表現することを要求しているのである。

　医師ブラウンに就いて云えることは、艦長ダウエル、中尉トレシイ以下のデクに就いても勿論云える。

　同じことは「青年」の二人の主人公伊藤、志道に就いても云える。この二人は人間の原高貴性に輝かされた青年として扱われている。この人間の原高貴性自体が問題となることは一まず云わないでおくとしても「非常時」に際して閃めく人間の主体的緊張・犠牲的行動一般さえも、背景の社会的動乱なしにはあり得ない筈である。作者がこの二人を、「理想につかまれた。」「理想につかまれている。」と繰り返していながら、一向どこで、どうして理想につかまれたかを描き得ないでいるのは偶然ではない。彼等の熱情を沸き立たせずにおかなかった・その社会的情勢を作者は描いていないからである。更に作者はこの二人を、現在までのところでは、歴史発展の進歩の担い手として無条件に規定している。同じく「非常時」に感激して一身の利害を度外視するにしても、プロレタリアートの英雄があり、血盟団の「英雄」がある。誰が進歩の担い手であるかは、具体的な全面的な社会の分析の上に立って始めて云い得る。そのためには就中幕末の日本の国内情勢を決定している基本的な関係、商業・高利貸・資本主義経済と自然経済との矛盾、それに依ってぐらつき出した権力構成、従って武士と町人と百姓との階級対立、更にそれ等諸階級内部の対立が、具体的に描かれなければならなかったのである。しかるにここにも亦孤立的個人ばかりである。のみならず、彼の仕事をしている人間さえ一人もいない、どの人物もどの人物も、すべて飲んだり食ったり議論している人物でなければ、寝転んで黙想しているのである。藤村の人物が浮き彫りにされているのは、いずれも彼等の直接・間接の環境が描かれており、彼等の生活——仕事に対する配慮が描かれている限りに於てである。

　更に同様のことは高杉に関する部分にもあてはまる、この部分は一篇中形象と情緒とが最も渾然たる統一をなしている部分である。恐らく作者が最もよく題材をマスターしており、最大の情熱を傾けた個所もここであろう。しかし、瞑想する晋作の懐疑動揺が、何らかの積極性を持つためには、やはり彼の周囲に闘争する社会的諸勢力が、晋作と云う特定の人物の主観に映ずる関係が明かにされる必要がある。又蟄居する晋作の胸にも響いてくる外界の情勢が描かれてこそ、一層現実的となり、深刻となる。読者はこの部分を読めば、それが渾然たる芸術的統一をもっているだけに、晋作をでなしに、作者その人の感慨を直接感ずるのである。

　思うに作者は高杉晋作のうちに作者自身を発見した、宛かもハインリッヒ・ハイネの中に彼自身を発見したごとく。彼が発見したハイネは如何なる人物であったか？ブラウンが語るところは特徴的である。「ハインリッヒ・ハ

イネは、この理想にひきずられるものの気持を告白しています。自分はかならずしも政治や社会的闘争に特別な興味をもつ型の人間ではないらしい。詩と絵と音楽と、娘と恋と、小鳥と花のうつくしいゆめの世界に自分をおくことをこのむ型の人間だ。しかも、自分は、逃避としずけさをのぞんでひそかにのがれこんだ部屋の、窓の外にマルセーユの歌声をきくとき、自分はどうしても詩の筆をすてて街路にとびださざるをえない。理想がいやがる自分をひきずり出す――人は人間が理想をつかむものだと信じているが、じつは理想が人間をつかむのだと、正直なげきをもって告白しています。ハイネは、ごぞんじのとおり、欠点だらけの人間です。その欠点にもかかわらず、理想にひきずられることによって、利己と凡俗主義の泥沼から、かれはたかだかと太陽の中にとびだすことができたのです。」（「中央公論」八月号、四九頁）このハイネは作者によって発見された晋作とまったく同型である。気紛れで、多感で、「欠点だらけ」で同時に娘と花――詩酒放蕩の詩人であり、時に又政治的闘争の戦士である。ときには決然たる叛乱の旗手であり、ときには底無しの悒鬱に浸る懐疑家である。ここに引用した一節は作者が情熱を傾けて発見した二人の詩人――革命家の像の要約であり、作者にとって光栄(?)にも発見者――作者自身の全風貌を彷彿させている。これに就いては多くのことが云われるが、唯一つ、根本的な点だけを云おう。それは、詩人と革命家との対立、その間の動揺である。この場合詩人は「娘と花」の詩人であり、革命家は直接行動の革命家である。この二つのものの対立、その間の動揺、これは作者自身の問題である。さればこそ作者はかくも情熱的に、かくも同情的に晋作の動揺を描き得た。又「青年」前篇のいたる所に問題にしなければならなかった。さればこそ「いやがる自分を」、「ときどき」理想をつかむことを、かくも讃嘆した。更に云えば、作者は自己心中の動揺・懐疑を、ハイネや晋作の心中に発見し、これ等の大名に自らを結びつけることに依って、これが正当化（ジャスティフィケーション）を容易ならしめんとしたのだと云うも、強ち過言と云えないのである。

ここに到れば、同志林が幕末に取材した作品をかように書いたことは、時にこの時代にプロレタリア作家が探究のメスを下す意義を、一応正しく理解した上で、正しい意図を、実際には描く実現したのであるか、それとも最初から誤れる観点からの企てを実現したのであるかの問題へ、我々は引き戻される。「青年」前篇は、彼が出獄後の二三の感想文とともに頗る否定的にこの問題に答える。なお云えば、彼は、作家たることは男子一生を賭けるに充分値する、自分は断然作家たろうと決心した、と云う。しかしなお「ときどき理想につかまれる」、気持の照ったり翳ったりを味っている限り、詩人と革命家とが、「娘と花」の詩人と直接行動の革命家として対立しており、組織的な革命家＝詩人として止揚されない限り、彼の心中の動揺は止む

時がないであろうと考えられる。
　作品を論評しようとすれば、作者の立場の検討にまで溯源しなければならなくなるのは必然である。しかしここでは「青年」の作者の批判が目的ではなく、「青年」を例証として我々の「歴史小説」の「何を」、「如何に」、の問題を明らかにするのが眼目である。それ故尚しばらく、「青年」に沿って行く。我々がもしも青年と同じ時代に着目した作品を書こうとするならば――それの意義、「時世への適合性」は既に云った――さきにも述べた通り、武士・町人・百姓、更にそれ等内部の階層分化と対立とを、即ちこの時代の歴史の背景を大衆的規模に於て捉えなければならない。それが行われない限り歴史の運動は理解されず、従って今日の「時世への適合性」も何もあり得ない。この作品の中には、抽象的にもなににもせよ、農民の指導者ばかりか、名前をつけられた農民さえ一人もいない。農民の大衆の生活・地位を無視して、維新史に取材したプロレタリア作品の成功し得ないことは、同志徳永が(「プロ文学」十月号)既に具体的な例を挙げてのべた。維新以後自由党の運動が全国的に燃え上るまで農民の運動が歴史の前面に現われていないこと、維新革命が主として下層武士階級の手によって遂行せられたこと、これは事実である。しかし維新以後に農民の解放運動が澎湃として全国に起って来た所以、しかもそれが絶対主義の明治政府によって中道に絞め殺された結果、今日に到って人民革命が日程にのぼされるに到った所以を闡明するためには、この時代の農民の状態を具体的に描かなければならない。もしもそうでないならば、維新史を明治元年まで溯る理由、いやかかる「歴史小説」の書かれなければならぬ理由は、もともと存在しないのである。作者自身、長州藩が維新の革命運動に指導的立場をかち得た原因は、長州藩が「改良された藩」であったことに依りそれが「改良された藩」であったことは天保以来の農民の闘争の歴史にあると云っているではないか。
　作者は「青年」につづいて「壮年」、「晩年」を、それぞれ明治一六―四三年とを背景にして書くと云っている。作者は元治元年の伊藤・志道を進歩の担い手として、「理想につかまれた」青年として描くことは出来ても、よもや一六―二〇年、三九―四三年の伊藤、井上をそう云うものとして描くことは出来ない。すれば作者はいかにして進歩から反動に転じた人、「理想から見離された人」を描こうとするのであろうか。「明治民権史論」(大正二年)の著者は、維新革命は草莽の間より起ち上った青年志士に依って実現された、しかし、彼等は既に老いて地位と名誉とを得た。今は一度得た世間的富貴を亡わざらんことに汲々としている。新しい維新は往年の意気なき老革命家達に求むべくもない、それは我々青年の任務だと云っている。この理論は、今日国民同盟の「理論家」中野正剛にはふさわしくもあろう。しかし断じてプロレタリア作家の見解に似つかわしくない。われわれ唯物論者は、歴史の運動を代表する

人物の進歩性と反動性、「正義」の把持とその拋棄とを、個個の人物の主観的態度の中に求めない。個々の実在の人物にはそう云う主観的態度の変化もあったかも知れない、案外そしてそれは甚しかったかも知れない。しかしそれは皮相の、枝葉の問題である。プロレタリア作家が芸術作品の中に格闘する問題は、そうして個人の堕落あるいは向上の、それだけとしての歴史ではなく、(「青年」の中でいかに立志伝が幅を利かしていることか)歴史的・社会的な矛盾が個人の中に反映することに依って醸成される・より本質的な歴史の「悲劇」でなければならぬ。

エンゲルスは、前に引いたラッサール宛ての手紙の中で、書かれた歴史の視野の外に起伏する広汎な社会群の運動を正しく展望することが、芸術作品をより内容豊富にし、芸術的により深刻にする所以であることを説いている。即ちジッキンゲンの時代の・様々な平民の社会群に光を浴せることは、この戯曲を生かす種々の特異な材料を与えただろう、のみならずこの場合これ等の社会群の中で、農民の占める社会的地位は決定的に重要である、従ってこれを正当に評価することが、この悲劇をしてより悲劇的ならしめるに、決定的な役割をなすのだ、と云っている。即ち「ジッキンゲン」に就いては、「……僕はたしかに、この農民運動の軽視が、君を誤らしめて、全国的の貴族運動をも一面誤って叙述し(僕にはそう思われる)また同時にジッキンゲンの運命の門の真に悲劇的な要素を逸せしめた点であると思われる。僕の考えでは、当時の帝国直参の貴族の群は、農民と結ぶことなど考えていなかった。けだし彼等が農民の抑圧によって得られる収入に依っていることが、これを許さなかったのである。むしろ都市との同盟の方が可能であった。しかしそれも出来なかったか、或はほんの一部に成立したにすぎなかったのである。しかし全国的の貴族革命の遂行は、都市及び農民との同盟、特に後者との同盟によってのみ可能であった。そして僕の考えでは、正に悲劇的要素は、この根本条件である農民との同盟が不可能であること、従って貴族の政策が必然的に下らぬものたらざるを得なかったこと、貴族が全国的運動の先頭に立とうとした瞬間に、国民の大衆である農民が彼等の指導に反抗し、そのために必然的に貴族が没落せざるを得なかったという点にある。」(前掲全集、二二巻、六二頁)と云っている。更にエンゲルスはこの「悲劇」の問題を敷衍して云う――「だが僕は、君が、農民を解放しようと志しているように、ジッキンゲンとフッテンとを解釈することが正しいか正しくないかと云って、君と争おうとするつもりではない。だがこうすれば、君は直ちにこの二人が一方にこれを断然欲しなかった貴族と、他方農民との間に板挟みになったと云う悲劇的の矛盾を得るだろう。僕の考えではここに、歴史的必然の要求と、実際上不可能な実行との間の悲劇的な衝突があったのである。しかるに君はこの要素を逸し、悲劇的な葛藤を、ジッキンゲンが直ちにカイ

ゼルや帝国に戦を挑む代りに、僅かに一領主に戦を挑んだ（よし君がここに於て正しい調子を以て農民を取り入れているにもせよ）と云う狭い舞台に押し込んでしまい、そして彼を単に貴族の無関心と臆病とのために滅んだものとしてしまっている。だがこの点は、もし予めすでに遠雷の如く轟き出した農民運動と、以前のブンドシューエとアメル・コンラードに依って無条件に益々保守的となって行った貴族の気分がもっと強調されていたならば、全く異った説明を与えられたであろう。」（同前、一六三頁）と。

　同志林は国民の圧倒的多数を占める農民を視野の外に置いた。そして又――より厳密には、従って――町人をも武士をも孤立的、抽象的にしか描き得なかった。伊藤・志道の壮年・晩年のでっぷり肥った「悲劇」をどの様に剔ろうとするも「狭い舞台に押しこみ」、中野正剛的其他に堕せざるを得ないであろう。「夜明け前」をつらぬくものは、今日の無気力な、追いつめられた小ブルジョアジーが空しい希望をそこにかける社××革のおずおずとした待望である。これはプロレタリアート側に立つ人の作品ではない。しかし「夜明け前」から我々が学ぶべきところは、主人公半蔵の「悲劇」が、「青年」の主人公達のそれより遥かに具体性をもつており、それは影絵の如くにではあるが、視野の隅っこに半蔵の生活と直接間接関連をもって百姓・町人・武士の姿が描かれているからだ、と云う点である。

「青年」に就いて云わなければならぬも一つの、最も重要な問題は×××の中に集約的に現わされている××の××主義的支配権力の問題である。

　着実に眼前の世界を見る人である限り、××の×××のもつ神秘的性質をみとめない訳には行かない。我々の作家のうちにも既にこの神秘的性質を感じ、その探究――剔抉に興味と必要とを明瞭にか或は不明瞭にか、感じていた人は決して少くないだろうと私は思う。このものが××の――殊に農村の――大衆の間に得ている地位は、殆んど宗教的信仰に等しい。しかしそれも今日では現実的に破綻をバクロしかけて来て居る、――それは、最×××蒙・××「×変」以来眼に見えて来ている――のみならず、他方では理論的にこれに対するより大きな注意の喚起と、バクロの方法的示唆とを我々は受けている。この仕事を作品の中で実践することは、我々の作家の重要な任務である。従って、この任務を遂行するために幕末維新を背景とする「歴史小説」に着手する必然性こそ大いにあれ、幕末維新に取材した「歴史小説」にしてこれを回避したり度外視すると云うことは、断じてあり得ない筈である。

「青年」の中でもこの問題は扱われている。どの様にか？

「――いちばんいけないのは幕府だ。あれは肥壺のふただ。このふたをはねのけないかぎり青空はあおげない。

——ふりかえって、京都をみよ。京都には、かってわが国を、無階級で自由な一国に統一して、合理的な政治によって万民をうるおした聖天子の末裔があらせられる。いまはほそぼそとして世にあらわれぬとはいえ。そのむかしの自由な日本は、この聖天子を幕府とおきかえることによって再生するのだ。」（「中央公論」、十一月、一〇七頁）

これは当時の志士、尊王論者の理論として書かれている。

次に文久元年、江戸から萩の父親に宛てた俊輔の手紙に関する一段がある。この手紙には、「今上天皇様いたって御賢明の御方様にてあらせられ、このたび、かくのごとく日本の人民困窮いたし候条を聞こしめされ、御歎息のあまり、黄金五十枚山城国中の百姓へ頂戴仰せつけられ候由」をきき、恐く感佩したことが載っている。そして、

「この一節は興味ぶかい。……この「黄金五十枚」のニュースは、その種の小集会（志士の秘密集会）では、必ずもちだされたらしく、俊輔もそうした場所で、これを耳にしたことと察せられるが、それを家父につげるかれの筆致の中に、われわれは当時の青年の心に芽生えたユートピズム——「……」の再発見と理想郷へのあこがれをみいだして、ほほえまされる。事実、……における「……」は、その中に、このユートピズムのあらわれとみなされる多くのなごやかな性質をもっていた。それが、……（二十九字省略」トアリ）……やっと明治十年よりのちのことである。」（同前、一〇三頁）

ここには多くの抹殺があってよくは解らないが、大体は解る。××または×××にふれているところは、「青年」前篇中以上の二ヵ所だけである。

維新革命にいたるまでの尊王論は、後期にいたって討幕論と結びつかねばならなかったことに依っても知られる通り、主として儒教的尊王思想に盛りこまれた封建的抑圧廃棄の要求を内容として居ることに依って、進歩的なばかりでなく、まさに急進的な思想を意味していたと云える。これは疑がない。したがって「青年」の作者が、尊王論尊王論者の運動を進歩的なものと見ているのは別段誤りではない。しかしそれ丈では全く抽象的である。この運動の結果でき上った王政復古政府は、明治元年、「五ヶ条の御誓文」を中外に宣布し、「政体書」を発表している。これ等は坂本龍馬の「八策」等に現われた封建的抑圧からの大衆の解放要求が、数次の脱皮を経た形でこたえられたものであって、実に堂々たる進歩的政策である。これがブルジョアジー・地主のみならず、爾余の全国の全被圧迫階級の要求を代表するものであったことは、後の自由民権運動——「下からの××運動」のあらゆる建白書・請願書・宣言に「五ヶ条の御誓文」の趣旨××履行の非が痛論され、その精神の徹底的実現を要求していることに依っても知られる。この同じ政府は明治二年版籍奉還を行い、同四年廃藩置県を行っている、これも封建制度の掃蕩と云う側から同

様に進歩的意義を持つ改革であったと云える。

しかし王政復古政府は、その後次第に最初の宣言の実現から遠ざかり、遂いにまったくこれを裏切るに到ったし、又裏切るに到らざるを得なかった。版籍奉還・廃藩置県そのものが一方に進歩的であるとともに、他方同時にまた藩閥形成――封建的勢力の強化の端緒をなしていることは、ブルジョア史家もみとめている。王政復古は全民衆に対して五条の誓約を発表した程進歩的であり革命的であるとともに、いくばくもなくして之を裏切り、一口に云えば、今日××××に対して××、一千余××××を宣告するに到る基礎をきずいた丈それだけ反動的であり、反××的である。すなわち尊王論の進歩性・革命性とは、王政復古の進歩性・革命性が条件つきであり、制限されたものであるのと全く同様に条件つきであり、制限されたものであったのである。維新革命の重要な思想的武器となった尊王論は、そして×××は、この××が封建制の軛のもとに喘いでいた全民衆の利益と解放との運動に一致し得た限りに於て、進歩的であり、革命的であったのである。より詳しく云えば、尊王論の進歩性と反××性とは、維新革命の実質的な指導的推進力となった商業――高利貸資本家階級の進歩性と反××性とであった。「××は常に国民大衆の運動であり、常に直接若しくは間接に、搾取に反対して向けられている――一×××命がそうである。社会主義的のそれのみには限らない。如何にして搾取者が搾取に対する闘争(訳ガ怪シイ、搾取するための闘争ダロウ)に国民を招き得るかを思え。そう云うことは、勿論、決して起り得ない。しかし或る搾取者は常に他の搾取者に対する被搾取者の反逆を利用することが出来る」(叢文閣版ポクロフスキイ、「ロシヤ社会史」、一二四五頁)商業――高利貸資本家階級は、――表面上は所謂志士なる革命家たちは、彼等の利益を全民衆の利益、全日本の利益と呼ばわれることに依って、爾余の被圧迫階級を動員した。しかしそれ以上すすむことが彼等の利益を脅かす点に到ったとき、彼らは立ちどまった。××が討幕・王政復古の階級に達したとき、彼らは自らの性能に応じて新政府を組織した結果、ここに×××を支柱とする×××義的権力をつくり上げた。新政府の手による諸般の「改革」に助長されつつ、××の第二の波が農業に於ける封建的搾取の掃蕩をめざしてもり上って来たとき、彼等――それまでの運動の指導的階級は、もはや以前と全く反対の立場に立ってこの運動を抑圧し、弾圧した。彼等の利益が封建的搾取形態そのものの中にあることが、これを余儀なからしめたからである。この時以来彼らの支配の支柱としての×××もまた進歩から反動へ、××から反××××側へと転化しはじめたのである。

この際彼等、維新革命の指導者たちが、みずからの限界性、制約性――それは又明治維新が、「ブルジョア革命であり、又ブルジョア革命でなかった」歴史的制約性に外ならぬ――を理解していたか、いなかったかは問題ではない。

勿論彼等はそれを知らなかった。それ故にこそ彼等は「善良なる意図」を以て大真面目に「天地ノ公道ニ基クベシ」と宣言し得たのだ。誰がこのことを明瞭に意識しつつ、権勢もいらず、富貴もいらず、妻子もいらねばいのちもいらぬ、どうにも仕様のない人間、このどうにも仕様のない人間でなければ出来ぬ××家の献身的行動があり得ようか。ついでにも一度云えば、伊藤や志道や、その他板垣や福沢や加藤や等々の真実の「悲劇」もまた、ここにあったのでなければならぬ。

このこと――×××の進歩性と反動性、××性と反×××――は、当時の「下からの×××運動」を代表する自由民権論者の言動のうちにも看取することが出来る。自由民権運動は、×××云々のスローガンを正面におし出すまでに闘争を昂めたことは、嘗つてなかった。従って彼等の攻撃の矢は、藩閥専制または有司専制に向けられていた。しかし国会開設要求の請願書には、屢々現存政府を以て徳川幕府或はその他の武家政治・公家政治に比し、専制がてん覆のもといたるべきを云い、××の身にまで云い及んでいる。例えば、明治十三年茨城県の国会開設請願委員によって上呈された請願書に於いては、議会開設をもし不問に付するごときことあらば、内治外交の諸問題を解決し得ざるのみならず、「恐らくは×××の間自ら凌轢を生じ、元弘承久の如き蒙塵の禍を来すことなきを必すべからざること」(「東陲民権史」、四六頁)を云っている。又『民権自由論』(明治十二年)に於いて植木枝盛は、昔ローマのカリギュラは百姓が羊を牧うを見て、×と人との関係を宛かも人と羊の関係だと云ったが、「人は皆同じく天の造りたる同等の人じゃ。君も人じゃ。民も人じゃ、何んで羊と百姓との如×××××るものか。チト元気を引き起し、かの失敬千万なるカリギュラなど云える×××所に往きその骨でも掘き×××もて××やりたいと云う位の考におなりなさい。」(「明治文化全集」、五巻、一八七頁)とさえ書いている。支配的意見とはなり得なかったけれども、民撰議院設立の建白書(明治七年)起草のときには、「××専制」の廃止か「有司専制」の廃止かが問題となっている(「西南記伝」、上巻の二、二七頁)のである。封建的抑圧からの解放運動に対して、×××はもはやこの時邪××と化していたのであり、事実これら「下からの」運動は、あわやこの×物に手を触れんず気勢を現わしているのを、ここに我々は看取できるのである。

尊王論、そして×××の進歩性と反動性とをいう時、いま一つの考慮すべき点は、ヨーロッパ資本主義の東洋(就中支那)侵略の事実から脅かされていた日本が、民族的統一国家の独立をまもるために、結集の紐帯としてこれが役立ったと云う事実であろう。これは小さからぬ問題である。しかしこのことも上述の基本的事情を外にしてある訳ではない。国権拡張、国威の宣揚と云う××的×名のなかに、いかに多くの圧制と搾取がかくされていたことか!

××主義的支配、就中××××××性——かくされた××的性質の探究と云う点は、「夜明け前」の最も弱い部分である。いやこの点に関してはもはや探究と称すべきものは、何等存しない。それにも拘らず、「青年」はこれに劣らず探究を拋棄している。「青年」の作者は、これに関しては、わずかに俊輔の手紙の一節に感想的意見をのべ、ないしは単に「ほほえ」んでいるのみである。この二つの作品が讀者の中に入って行って、客観的に果す役割は別として、作者のみに就いて云えば、——「夜明け前」はレアリスティックに現象を模している限りでは、これを「我々が唯物論的に読む」ことに依って過去を生かしてみる上に啓発される点がある。例えば大政奉還の報の入った木曽の諸宿むら村が、引きつづく風害や飢饉のために困窮しているに拘らず、「ええじゃないか」節に、お札様に浮きうきして来る一種の騒ぎが、幽かながら判明して来る。それは、例えば諸宿の役人をして人足制度の改革を幕府に要求せしめる農民の圧力、これに圧し出される宿駅の町人階級などの如き、地方の百姓町人の諸階層の生活が、不充分にもせよ写されているからである。しかるに「青年」にはそうしたことは望まれない。これは作者、特に「青年」の作者にとって名誉あることではないであろう。

孰れにせよ「青年」の作者がこの重要な問題に対して、殆ど何らの積極的関心をもって臨んでいないことは、たとえそれが「冷えた塊」となっていようとも毛利敬親論にあれ程精力的でありながら、この問題に対しては刺身のツマ程の位置をしか与えていないことに依って知られる。繰り返して云う、この点をオミットして幕末維新を題材とする「歴史小説」の創作は、我々にとって殆どあり得ない筈であるのに。

さて以上すべての点を総括して云う——「青年」の作者は、現在のわれわれの闘争に役立つものとしての現実の批判的探究が、不可避的にそこまで歴史を溯ることを要求する「歴史小説」創作の必然性によってこの作品を書いたのでなかった。そのことは、ありし歴史の歴史的・具体的な現実を無視して、主観主義的(ロマンティック)傾向を色濃く出していることに依って、又この作品の主題を具体条件を抽いた「理想にとらわれ」たり、放されたりする動揺期の多感な心情の観察においていることに依って、二重に証明せられる。この作品が、正しい出発の拙い到達でないことは、これもまた二重の証明に依って云われる。第一にこの作品は拙い作品ではない、座敷牢の高杉の情景一致した描写の如きは、ブルジョア文壇にも近年その比を見ないと云ってよろしい。第二に作者自身が最初からどれだけ意識的であったかを別とすれば、もともと作者の問題は青年の「理想」の問題——ここに現われねばならなかった如き形の——にかかっていたのである。この創作実践の具体的内容は、作品そのものとしては、この後者、——このことは前節にも触れた——即ち個人主義へロイズムにあり、現在

それがもつ客観的意義から云えば、同志亀井(「プロ文学」十月号)及び同志堀(「プロ文学」十二月号)が指摘している通り、我々の陣営内の右翼的偏向である。

最後に附け加えて云う。「歴史小説」創作の主なる準備的研究として考えられるものには、第一に歴史の科学的研究(所謂歴史研究に属する科学的諸研究)がある。これの重要さは云うまでもない。第二に当該時代の所産にかかる芸術作品、なかんずく文学作品の研究がある。誰かがどこかで云っているように、外国を真実に理解することの出来るのはその国の文学が理解された時からであると云う為ばかりでなく、我々はそれに依って活きた言語の呼吸する様をも知るからである。そして第三に当該時代の遺物が現代に殆どそのままの形で、或いは多少の変化を受けて、日々生命をいとなんでいるものの観察研究である。これは作家にとって最も重要なものであるように私には思われる。

具体的なものを把握し再生産するための、科学的方法と芸術的方法との相違を、理論的に究明する余裕を私はここに持たぬ。しかしバルザックは「経済上の個々の事柄に関してさえ」・彼の描いた時代の「あらゆる専門歴史家、経済学者、及び統計家の書物から学ぶよりも、より多くのもの」を、エンゲルスに教えた。偉大な芸術家が、偉大な科学者と肩を並べて、われわれを教え得るのは、芸術のみがなし得る現実の把握と再現とをなすからであり、芸術的方法の特殊性を発揮することに依ってである。題材が「過去」であり、芸術が「歴史小説」であっても事情は同様である。ここには上掲の第三のものが特に重要であるように思われる。「青年」に於いて毛利敬親論が「冷えた魂」となっているのは、作者が現存物の中にかくれている過去の遺物を看破る眼光を持ってなかったか、或は全く第三のものを軽視していたことに由るのではないかと考える。「青年」が、例えば服部之総から学んではいても、服部を恐らく教え得ないだろうのは、主としてこれに由るのではないかと考える。これは、この限りでは、レーニズムの何のと云う問題ではなくて、ほんの常識にしか過ぎない。

——(一九三二・一二・一五)——

プティ・ブルジョア・インテリゲンツィアの道

――唐木順三氏の『現代日本文学序説』を読んで――

平野　謙

一

かつてそのすぐれたる論策『文学批評の基準』の冒頭において、宮本顕治氏は「対立する二つの方向」と題し、典型的なブルジョア文学イデオローゲンとして、小林秀雄、井上良雄らの名前をあげた。しかしこのふたりを均しくブルジョア文学イデオローグと規定することは、私には適切でないように思われる。

もしそう云うことが許されるなら、井上良雄氏は『宿命と文学に就いて』以来私のひそかに注目してきた少数の人のひとりであった。どういう意味においてか。プティ・ブルジョア・インテリゲンツィアのもっとも典型的な文学イデオローグとして、そして、全く同じ意味において、『芥川龍之介の思想史上に於ける位置』以来の唐木順三氏についても関心してきたつもりである。事実このふたりほど自己の文章にその階級的な血液を誠実にみなぎらせて出発したものは少いであろう。

――この人たちはこれからどう進んでゆくことであろうか。私にとってこの問題は全く「人ごと」ではなかった。そして、この国の最近における殊に息づまるような歴史の流れは、必然的にこのふたりをもその出発点のままにはとどまらせなかったようである。

その出発にあたって、唐木氏は結語的にこう語っている。

『「フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」の著者は如何にして古典哲学が起り、如何にして古典哲学が終結したるかを述べ、最後に「ドイツ労働者運動は実にドイツ古典哲学の継承者である」と結んでいる。それは芥川の古きイデオロギイを想い、芥川を超克せんと努める人々に、ある示唆を与えるであろう。我々が如何なる分野より、如何なる方法をもって、プロレタリア解放運動に向うべきかは勿論深き省察と、日本の現段階に対する透徹した認識とを要することであろう。が、歴史の歯車は必然的に理論理性より実践理性に進んでいる。人生に忠実ならんとする限り、人々は不可避的にそれに面せざるを得ないであろう。（傍点筆者）』と。

われわれが揺ぎなき歴史の展望を貫かんと努めて、われわれの肉体に巣喰うほとんど宿命的にもみえるこの「芥川的なもの」を超克しようと、唐木氏がかかる出発を出発してから、すでに三年以上の月日がすぎた。そして今日氏は

いかなる地点にまで到達したか。新著『現代日本文学序説』こそまさしくその道標でなければならぬ。従ってこの文章の目的も亦おのずから明かになる。氏の三年間における発展過程の追跡、それ以外にない。そしてそれは氏を正しく理解するための鍵でもあるだろう。しかしこの困難な課題を前にして、私は果して自分が仮借なき追跡者としての資格を具えているであろうかを疑わないわけにはゆかない。しかし私は努めて氏の裸身に肉薄しなければならぬ。それは私自身の血液検査をすることでもあろうから。

＊『現代日本文学序説』に再録されてある『芥川龍之介論』には、上掲引用の部分が全部削られてある。あるいは書物全体の体裁上省略されたものかもしれぬ。しかし私には唐木氏自身にとってもっとも根本的な原因があるように思われる。

二

『小説神髄』『当世書生気質』以来日本近代文学の多様な歴史のなかに、われわれは学び取るべきさまざまな教訓を発見する。しかしその重要なひとつは、田山花袋が『近代小説』のなかでもっとも素朴曖昧に提起した「実行と芸術」の問題であろう。この問題は二葉亭四迷以来の日本近代文学史を縫いとる一すじの縦糸である。その歴史的・社会的制約にもかかわらず、「人生に忠実ならん」と努めた詩人たちは、おのおのの生活感情の角度からつねに自己の問題として取りあげ、自己の血肉でこの問題を血ぬらし、そして幾人かが傷つき斃れた。

この二元的相剋を真実の意味において突き抜け得た最初の栄誉は、中野重治に与えられねばならぬと私は信ずる。中野重治こそ自己の階級的基礎の洞察がよくプロレタリア・インテリゲンツィアにまで甦生し得た最初の文学イデオローグであった。（この断定は異論をまぬがれぬことと思うが他日『中野重治論』を書き得る日まで待ちたい。）その中野氏がすでに早く（おそらくは一九二六、七年に）次のように書いていることは、私には意味深いことに思われる。

『明治の詩人中私の胸に時に屢々往来する一系列の詩人がある。北村透谷、長谷川二葉亭、国木田独歩、石川啄木。透谷は「人生に相渉るとは何の謂ぞ」に於て山路愛山の俗人的見解を駁撃することによって人生に相渉った。二葉亭は文学者の名を厭って終に「文学は男子一生の事業と為すに足らず」と宣した。独歩は山林の中に存する自由にあこがれ北海道に於ける開墾事業を具体的に夢見た。そして啄木は時代の閉塞を認知して終に「明日の考察」に到着した。彼らを他の明治詩人から区別する所の彼らに共通の特徴は彼らが単に完成せる芸術を創ることそのこと（云うまでもなくかようなものは事実無い）を目指さずして、直ちに人生の全般的考察を目指した点に、そのために彼らが物質的にも精神的にも幾多の苦悶を経て薄幸に終った点

に、しかもそれら凡てに拘らず、彼らが未完成の儘に残した多くの仕事が、矛盾と焦燥と動乱の中に棲む我々の胸に幾多の考うべきものを与えずには置かない点にある。』*（『啄木に関する断片』）

この一系列の詩人こそまたひとしく唐木順三氏の胸に去来し、「幾多の考うべきもの」を示唆した詩人たちであった。『現代日本文学序説』はこれら一系列の文学イデオローゲンの史的究明のためにほとんどその全ページを捧げていると云っても過言ではなかろう。時代の過渡層をよく渡りきるために、「自己を整理し、清算するために」芥川龍之介の分析から出発した唐木氏は、此処においてもまた同じ面貌をシッカリ保持しているようである。だから従来の文学史的常識から大胆にすぎるような価値評価を随所に与えているのだ。（例えば透谷の『内部生命論』啄木の『時代閉塞の現状』漱石の『明暗』等に対する史的評価をみよ。）そしてそれらの行間に溢れているものは氏の鋭敏な芸術的感受性と該博な哲学的教養とである。谷川徹三氏の所謂「享受と批評」の統一は此処にひとつの規範を示しているとさえ云えるかもしれない。事実谷川氏が本書を「批評の本道」として激賞しているのも決して、偶然ではない。（この点については後にふれたい。）――こういう問題の切り取り方、それを裏打ちしている氏の心的昇華、その点にこそこの書物の独自の魅力の存する所以があるのだ。

また、さまざまな角度からではあるが、最近における明治文学研究熱のすさまじい勃興にもかかわらず、その具体的成果と云えば、依然として「体系を究めず、系統的発展を無視し、勝手に何々派、何々主義のレッテルを貼りつけて、以て足れりとし、……認識の静止として、或は非歴史的見解として、各々の作家の個人的特徴に眼をつけるにとどまり、全体としての作家の時代的意味をし尽さない文学史か、（在来のブルジョア文学史家に対するこの唐木氏の指摘は当っている。同時にそれは氏の方法論的意図を逆に現わしてもいる。そして唐木氏のこの指摘に該当する最近のものに藤村久松両氏の共著『明治文学序説』がある。いや、それ以上にこれは全く反動的な「民族精神」で貫かんと意図している点で、現在の瞬間もっとも注意されねばならぬもののようである。）あるいは正宗白鳥流『文壇人物評論』的のものか、（疑いもなく正宗氏の評論は学び取るべき多くのものを蔵している。しかし瀬沼茂樹氏の喝破しているように、正宗氏から小林秀雄氏に到るブルジョア批評家が「多く近代文学の巨匠及びその作品を論じ、そのうちに自己の批評の権威を示すより仕方がない」ところに、彼らの批評の現代的意義の喪失があるのだ。）そうでなければ所謂下部構造と上部構造との単なるパラレリズムに終っているかにみえる論策の少くない今日、（勿論処女地開拓の困苦は傍目から覗き得る限りではなかろうし、又性急に十全を求めるのも間違っているであろう。しかしなおプロレタリア文学史家小宮山明敏、篠田太郎の二人においてさえ

私はその不満を抑えがたい。）唐木氏の新著はたしかに注目されていい労作のひとつであろう。

――私は冗漫な讃辞をならべすぎた。そしてこの文章の目的もそこにはなかった筈である。

*『若きソヴエート・ロシヤ』の著者秋田雨雀氏もほとんど同じ時期にほとんど同じ意味のことを語っている。（『人として芸術家としての有島武郎』一九二七・八改造）このことは文化継承の問題がいきいきと日程にのぼされている今日、注目されていいことがらであろう。

三

「歴史的連関の把捉に急なるものは個性的なものをその深さにおいて捉えることを忘れるし、個性的なものを深さにおいてとらえようとするものは、多くの場合その暗い洞穴の中で道を踏迷っている。唐木氏の批評はこの二つの、歴史的連関の把捉と個性的なものの深さの把捉との、幸福に結合している……例である。」そう語りながら谷川徹三氏は本書を評して「批評は常に対象の内にいり込むと共にその外に立たなければならぬと信ずる私にとって、唐木氏のこの書の行方は、もっとも本道的なものに思える。」と結んでいる。

こういう論理は『享受と批評』以来の谷川氏のほとんどマンネリズムと云えないこともない得意の組立て方であるが、文学における「歴史的連関の把捉」は勿論その個性的なるものをうちに含まねばならず、「個性的なものの深さの把捉」は客観的現実の歴史的連関および合則性のわれわれの認識への反映から以外に派生しない。だから歴史的連関の把握と個性的なるものとの把握とは同等の権利をもつ対概念ではあり得ない。しかし問題はそこにあるのではない。はたして、唐木氏は谷川氏の云うように、「その歴史的センスに実際なみなみならぬもの」があるだろうか。はたして氏の日本近代文学の解明がその本質的なものを余すところなく解き得ているであろうか。

はじめに『芥川龍之介論』についてみよう。これは氏の多くの作家論のなかでも、もっとも力の籠ったもののひとつであり、また私の眼にふれた限りの『芥川龍之介論』中もっともすぐれたもののひとつである。

理性と本能との相剋こそ芥川の理解した生そのものの姿であり、この生の不合理は芥川を駆って生そのものから逃避せしめんとし、「人工の翼」によって慰戯の世界へ没入せしめた。しかし慰戯それ自身のうちに孕む矛盾のゆえに再び生へ突き戻される。この生の不合理――慰戯――不合理――慰戯の「一進一退」「不断の反覆」「繰返し」こそ芥川の全生涯の姿である。そう唐木氏は説くのである。そして、それを裏づけるために氏は芥川全集八巻の間を克明に往復する。

勿論芥川に対するこの氏の見解は誤っていないであろ

う。しかし、これは氏の第一の特色たるその歴史的センスのなみなみならぬことを立証する現れであろうか。私は便宜的に手近にある井上良雄氏のそれと対比してみよう。井上氏は次のような短い文章のなかに芥川の運命をするどく剔抉している。

『人生に対する直接な愛憎から、知的アイロニーの膜に隔てられて、苦悩も快楽も等しく冷眼視していることは、当時の（大正八年）彼の自負心を満足させたであろう。しかし、近代的と呼ばれるものの一切の自己破壊、混乱、頽廃は、実はこの時はじまるのだ。「僕自身の経験によれば、最も甚しい自己嫌悪の特色は、あらゆるものに嘘を見つけることである。しかもその発見に少しも満足を感じないことである」と晩年の彼は書いている。この晩年の文章に述べられていることは、十年前彼が年少の愛読者に示した教えと別のことではない。この世の嘘の発見に心を動かさぬということは、年齢が人に教える智慧である筈であった。しかしここに現れた彼は最早、あの楽しい智慧の誇り顔な説教者でない。この一文程、彼の晩年陥*っていた精神的地獄の暗さを示しているものはないのだ。』（『芥川龍之介と志賀直哉』）

なぜ芥川はほこりかな智慧の世界からまっくらな精神的地獄にまで落ちこまなければならなかった。ここにこの国における観想的知性の最後的悲劇がある。そしてこの問題こそ芥川の「自殺の真相」をひらく唯一の鍵であり、云うまでもなくそれは個人的事件や文学の世界だけから解き得るものではない。それを強いて解こうとすれば、主観的な表白でなければ論理的図式の展開に終るしかない。唐木氏は果してかかる欠陥から完全にまぬがれ得ているであろうか。

しかしもっとも問題となるのは巻頭の『現代日本文学に於ける自然と道徳の問題についての史的考察』であろう。この一篇は「日本ブルジョア文学に於ける自然と道徳の問題の史的発展の跡をたどり、その連関を明にし、問題史としての文学史」を展開しようとする唐木氏のもっとも野心的な試みであり、同時に『現代日本文学序説』全体の「ひとつの総括」である。此処には氏の特質と現在におけるその位置とがもっともあざやかに定著されてある。だからこの文章の中心点もまたできるだけ精密にこの論文を取扱うことによって、できれば氏の出発点からの距離を泛びあがらせたいところにあった。しかしはじめに惧れた私自身の力の不足は、十一月下旬からの個人的事情による多忙さも加重して、その企図をきわめて不充分なものに終らせてしまった。原稿締切の期日のとっくにすぎた今日、私は以下不完全な覚え書をつづるしかない。

＊「プティ・ブルジョア・レアリズム」を理論的に裏づけようと、『宿命と文学に就いて』から出発して、ただ一すじに『文芸批判というもの』にまで到達した井上良雄氏は、しかし『芥川龍之介と志賀直哉』におい

で「宿命と現実の挾み撃ちに遭っている」氏自身の観想的世界を踏み躙いて進んでゆこうとする「男々しい」決意を示した。それはもっとも誠実なプティ・ブルジョア文学イデオローグの現在の瞬間における、ぬきさしならぬひとつの宣言である。しかしたとえここまでにじり寄ってくる困苦が「眼のくらみそうな」ものであったにしろ、われわれの真実の苦難の道は次の一歩からはじまるのである。

四

『自然と道徳の問題について の史的考察』のまずはじめに、唐木氏は八つの自然概念を列挙している。しかし氏によれば、それは単なる「列挙」「比較」ではなく、「内的連関」として「史的発展」としての跡づけである。そしてその八項目のもとに（一）透谷、（二）樗牛、泡鳴等、（三）抱月、花袋等、（四）独歩、（五）漱石、（六）龍之介、（七）有三（八）プロレタリア文学の「史的考察」が展開されてある。しかし私は氏の抱負と努力にもかかわらず、不幸にもその企図は生かされていないと云わざるを得ぬ。氏の他の論策に比しても、一貫した論理の明確性に欠けている。非常にムリがあり、読後の印象がにごっている。何故であろうか。

第一に気づくことは、以上の八項のもとに説かれてある「自然と道徳の相関関係」が適切に該当していると肯かせる項より、肯かせない項の方がはるかに多いことである。況やそれら八項を貫く歴史的必然性については、氏のあらゆる努力にもかかわらず、ほとんど解明されていない。

この論文成立の過程について、氏みずからこういう意味のことを語っている。はじめ「文学と社会との相関の問題」を中心として二葉亭から龍之介にいたる歴史を叙述するつもりだったが、「職業的道楽家」漱石論が「意外の方面に展開」したため、最初の計画を放棄し、その「延長」として生れたものであると。もし忖度が許されるなら、ほかならぬ漱石論執筆中に、唐木氏の胸中をしばしば去来したであろう一系列の文学イデオローゲンをも含めて、「自然と道徳の相関関係」のもとに解明し、問題史としての文学を一貫させたい野望にかられ、新しく問題を設定しなおしたのではなかろうか。おそらくこの点に、その論理的破綻を来した第一の原因があるのではなかろうか。いかなる意味にもせよ、自然と道徳の「相関」のもとに樗牛を、独歩を、そしてプロレタリア文学を（！）解こうとするのは無理である。かかる欠陥こそ「抽象的な論理的図式と理論とをもって……現実を導き出し、演繹しようと試みる」（ミーチン）態度のあしき現れではなかろうか。このことは根本的には歴史過程の内部にひそむ、人間の意識から独立している合則性を看破り、その基本的な土台をしっかりと踏まえて、文学史における交代の必然性の秘密をあばき出そうと努め

なかったからである。勿論こんな「常識」は唐木氏の理解を要請するまでもないことであろう。しかしながらなかなか「それは理解できないことであり、理解できても承知出来ないことがらである。」（中野重治）

「自然と道徳の相関」は断じて社会発展の本質的なメルクマールとはなり得ない。此処に氏の文学史の全き一面性がある。（たとえその問題の切取り方が一部の人びとに——私をも含めて——ある魅力を含むとはいえ。）氏にあってはひとつの波が昂まり、また次の波が乗り超える起伏の全面性はほとんど捉えられていない。

この社会発展の本質的契機の無理解はまた具体的に氏の方法的恣意性とわかちがたく結びついている。氏は社会と文学の距離から、自然と道徳の相関関係から、「気骨」という概念を中心に、また最近には外来思潮と伝統の相剋という観点から、文学史を解こうとしている。それは『自然と道徳の問題についての史的考察』の一篇のなかにもハッキリと現れている。氏は「自然」なる言葉のなかにあらゆる恣意的な概念を無理やりに押しこめようと努力しているかの如くである。

第二は氏における「論理的なものと歴史的なものの統一の必然性」（ミーチン）の無理解である。なるほど氏は自然と道徳の相関関係を縦糸としてその代表的な文学イデオローグを年代的に忠実に追っている。一見それは「対象の理論とその歴史的発展との対照」（エゴーロワ）を示しているようにみえる。しかし龍之介から有三への「連繋」「史的発展」など現実には存しないのだ。タンヒレヴィッチは云っている。

「論理的（理論的）研究は、全体としての過程から出発して、その範疇の順序を作る。その際、主として、論理的研究は事件の歴史的交代を文字通りに反映しようとせず、事件のその代々の論理、即ち合則性や真の意義および意味を明かにしようと努める。……範疇の論理的順序と歴史的順序との完全なる一致ということを要求することは出来ない。」（『歴史的なものと論理的なもの』）

繰返して云えば、唐木氏にあっては「交代の理論」はほとんど闡明されていない。

第三に氏の理解する文学史の主流、傍系の意味がはなはだ曖昧な点である。

その序文において氏はこう書いている。「この著作の中に拾われた作家の名は、なるほどその数において少ない。が主流に沿うて下ったつもりである。」と。ではその「拾われた作家」とは誰であるか。氏がもっとも愛情をこめ、努力をかたむけて、われわれの前に描き出した作家は、二葉亭、透谷、啄木、独歩、漱石、有三、龍之介である。

また他の場所では氏はこうも書いている。「我国現代文学に於いて、ひとつの重要なる場所を有しながら」「子規以下の、ホトトギス、アララギの人々、及び、森鷗外等」は「遂に非歴史的運命に終った」と。

いうまでもなく、二葉亭、透谷、啄木はその文学的生涯において、非歴史的運命に終ったもっともティピカルな作家たちであった。だから此のふたつの引用文から推察すれば、文学の主流とは、その先駆者的役割その他のゆえについに非歴史的運命に終らざるを得なかった謂のようである。だからこそ、その薄幸な死を「桜の木へ兵古帯をかけ美事にブランコ往生を遂げたる由」（塩田良平による孫引き）と当時の新聞に報道せられた北村透谷が、唐木氏によって、硯友社文学を完全に止揚し、現代日本文学の基礎を全く樹立した功績者としての王座に据えられるのだ。しかし主流があれば必ず傍系が存在する。唐木氏の理解する傍系とはまことに忖度に苦しむが、浪六、涙香らの伝奇小説、蘆花、幽芳らの家庭小説などを指すのであろうか。云うまでもなくそれらは支配的な波と波との交代の瞬間に必ず泛ぶ泡沫であり、それゆえ当然にそれ自身非歴史的運命をになっている。（唐木氏にあっては同じく「非歴史的運命」を終った啄木と鷗外との本質的差異は上掲のふたつの引用文からは読みとれない。）では非歴史的運命に終らず、豊かな成果をのこし、そのイデオロギー的影響のもっとも大きかった硯友社文学は、自然主義文学運動は、白樺派の勃興はどうなるのか。

　真実の意味における当該社会の文学的主流とは何によって規定されるか。ここにマルクスの有名な言葉がある。「社会の支配的な物質的力であるところの階級が同時にその社会の支配的な精神的力である。」これが基本的な礎石だ。「支配的な物質的諸関係」の文学的表現が当該社会の主流を形成するのだ。これはあくまで動かせない。しかし問題は実に此処から出発するのだ。何がその社会の支配的な文学的力であったか。そしてそれは何時まで進歩的な意義をにない、あるいは喪失したか、それは何によるかまた何が当時の傍系的な文学的力であったか。そしてそのなかに、遠く当来社会にまで呼びかける先駆的芽生えを孕むもの、逃避的な傍観者的な自我の世界に閉じこもろうとするもの、あるいは最初から現実の客観的真理の文学的反映を放棄しているもの等々のさまざまな流れの入り乱れているのは何によるのか。これら全体の姿がわれわれの前に浮彫りにされ、しかも全体としてのそれらが大きなうねりを見せて次の時代に移り変る姿が再現されてこそ、はじめて文学の歴史を推し進める全面性が明かにされるわけであるが、この複雑多岐な現実を前にする時、実にそれは困難極まる問題である。そしてこの困難な課題を闡明するためには、揺ぎなき一定の階級的利害の見地から、与えられた文学イデオローゲンそのものの精細な階級的分析、所与の具体的現実の階級諸関係、その内的矛盾の剔抉が不可欠に要請されねばならぬ。唐木氏の文学史にあっては、それらはほとんど全く放棄されてある。

　以上のことは基本的には、フリーチェ的な文学史家と文学批評家との二元的使いわけの謬見とは全くうらはらに、

プティ・ブルジョア文学批評家唐木順三のまなこで文学の全歴史を押切ろうとした誤謬である。勿論それはフリーチェとは比較にならぬ致命的なものであり、氏の文学史における一面性の全秘密がここにかかっている。極端に云えば、文学批評としてのさまざまな美点にもかかわらず、なお、『現代日本文学序説』はほとんど文学史の名にたえ得ないものである。氏がこの著書を『近代日本文学史序説』と名づけなかったのもまた偶然ではない。しかも三年前の唐木氏自身こう断定しているのだ。

「彼等は自己のイデオロギイと過去のイデオロギイとを直接に対立比較して、さえぎるものなき論理の曠野に相見え、相検討するを以て足れりとする。」（『文学評価の基準に就いての基礎的覚書』）と。その「彼等」に今日の唐木氏自身が近似しつつあるのを憂うるのは私の独断にすぎないであろうか。とまれ、もう私はこう断定してもいいであろう、谷川徹三氏の極めつきは単なるヒイキのひき倒しにすぎぬものであると。そして谷川氏が讃称するところに、今日の唐木氏の位置に対する示唆が含まれてもいる。

文学批評家と文学史家との弁証法的統一の問題に関しては、最近においては、高瀬太郎氏の『文芸史研究の方法に就いて』がある。（『季刊・批評』第一冊）これはすぐれた労作ではあるが、なお両者の弁証法的差別については説き及ばぬ憾みがある。そしてこの問題は、今後作家同盟、プロレタリア科学同盟の芸術学研究委員会所属の人びとによって、実践的にも理論的にも急速に解決されてゆくであろうし、現に解決されつつある。

第四に唐木氏の「第八の自然概念たる、自然と社会・自然と人間の弁証法的理解」についてのべなければならぬ。この概念それ自体の曖昧さにはふれまい。またこの概念をプロレタリア文学の歴史を解く第一のモメントとしている大胆さにもふれまい。しかし唐木氏が次のように書いていることだけはハッキリさせておかねばならぬ。

「我々には先にかかげた第八の自然概念たる、自然と社会・自然と人間の弁証法的理解が残されてある。我々はそれを、プロレタリア文学を論評する日の来るまで延そうと思う。それには、新しい地盤と力をもって、漱石、龍之介、有三等の先人に於いてなし遂げ得られなかったところのものを果し終えることが要求せられている。（傍点筆者、読者はこの主語と、私が最初に引用した氏の文章のそれとを比較されよ。）」

これが『自然と道徳についての史的考察』全体の結びでもある。これは何を意味するか。唐木氏が意識しようとしまいと、プロレタリア文学への虚構的な責任のなすりつけであり、「××と××主義」下に文字通り苦難の道を闘い抜き、その優位性を実証しつつある日本プロレタリア芸術・文化からまなこを閉じるものであり、従って現在におけるこの国の客観的現実から逃避しようとするものである。

此処で再び私は井上良雄氏の最近の心構えと対比しなければならぬ。井上氏はこう語っている。

「文学が何よりもわれわれの肉体的な行動であるならば、われわれの文学上の転換は、最早意志や努力を超えた、何か宿命的な困難さを蔵していると いうことを、今も尚私は疑わない。しかし、今日われわれの周囲にある文化の頽廃が既に最期的なものであることを思い、われわれの前にあるものが、最早ただ宗教、狂気、自殺のいずれかのみであることを思うならば、われわれの過去の文学的経歴がどうしてわれわれに宿命的であってよかろう。あってはならないのだ。そして、宿命であってはならないというこの直接自然な感情こそ、それが宿命的でないことの、唯一絶対的な保証であると、私は信じている。』(『芥川龍之介と志賀直哉』)

此処に、過去の重荷にもだえながらも、現実を直視しようとする、ぬきさしならぬ、せっぱつまったインテリゲンツィアの声がある。

五

以上に於いて私は一通り『自然と道徳の問題についての史的考察』にみられる難点を列挙し、そのよって来る所以をひとつのものに集約しようと努めたつもりである。しかし勿論それは私の力と時間の不足から、的外れであったり、上滑りであったり、あるいは重要なモメントを逸したりしたことであろう。事実私自身書いている途中で、(唐木氏の用語にならえば)無慈悲に氏の「アキレスの踵」をみきわめようと努めながら、その突っこみ方のはなはだしい不足を感ぜずにはおられなかった。(ひとつには、そこからのがれようと努めながらも、私を捉えてはなさぬこの書の魅力にもよる。)

最後にこの文章の最初の目的であった氏の三年間の発達過程を要約し、この貧しい文章の結びとしよう。

「代赭色をした人生の海の渚に、せめて美しき小貝を探さんとした彼の心を思うて憐憫の情に堪えない」ながらも(唐木氏の芥川に対するこの言葉はもっとも理解の透徹したヒュネラル・マーチである。)あるいはそれゆえにこそ、芥川を乗り超えんとした唐木氏は、今日「自由主義的小ブルジョアジーの名残として……同伴者への方向と保守性への固定化の中間に今立っている」(『ブルジョア文学についての決議』「プロレタリア文学」三月号)山本有三の芸術を評して、「涙を出している自分に気がついてうろたえつつも、「それは常に批判と闘争を欠く『仕方がない』『どうしようもない』という行詰りへ人を追込む。」と断定している。このことは前にもちょっとのべた通り、氏がつねに変らぬ面貌をシッカリ保持しているような外観を与える。しかし逆説的に云えば、この点にこそ、(唐木自身の用語をかりれば)歴史の歯車に逆行して、実践理性から理

論理性にまで逆転しようとする氏の姿を看とることができる。もはや唐木氏と山本有三氏との間には、何ら本質的な距離は存しないのだ。そのまぬがれがたい歴史的制約をになって、氏もはじめから同伴者的傾向と保守性の固定化の二因をうちに孕んでいた。しかし出発の当初は努めて前者をその前面に押しだそうとした唐木氏は、今日固定化の方向を漸次色濃く染めなしつつある。これは決して私の独断ではない。氏の近来の文学的実践があきらかに立証しつつあるところだ。プロレタリア文学に対するその見解には余りこだわらないとするも、最近の氏は『小倉時代の森鷗外』をその久しい文学的生涯から特に抽きぬいて、われわれに示し、その冷眼と傍観的態度、現実肯定と「あそび」の文学を裏づけている。また「遂に非歴史的運命に終った」ホトトギス、アララギの文学解明をも約束している。このことは何を物語るか。氏の関心が、先駆的・急進的な文学潮流から、観照的・諦観的な文学潮流へと漸時移行しつつあることを如実に示しているものだ。云うまでもなくこれは氏の客観的現実に対する積極的意欲の漸時的喪失を意味する。

進歩的な同伴者から観想的な客観主義者へまでの退却。これが今日までの唐木氏の全風貌である。

唐木順三と井上良雄。その誠実さのゆえに、ひとりは次第に「自分の制限を知りつくして」個別的個人の世界にまで退こうとし、ひとりは客観的現実の変革者にまで自己を昂めようとする。私はプティ・ブルジョア・インテリゲンツィアをめぐる血液を想い、覚わず深い溜息をもらす。

憐憫も知らず憤怒も知らず
心平らかに善と悪とを聴く（エヌ・ゴニークマン）

これはすべてのインテリゲンツィアに隙あらばもぐりこもうとする根づよい誘惑ではあるが、それだけにこのロシアの諺（?）が単なる虚妄にすぎないことを、われわれは今ハッキリ「承知」しなければならぬ。（一九三二年一二月初旬）

附記。「文学批評の方法論」の発表機関年月につき唐木氏の御教示を乞いたい。

（一九三三年一月「クオタリイ日本文学」第一輯）

一連の非プロレタリア的作品

——「亀のチャーリー」「幼き合唱」「樹のない村」——

附・創作活動と組織活動との統一の問題にふれて

宮本百合子

十月下旬行われた作家同盟主催の文学講習会のある夜、席上で、たまたま「亀のチャーリー」が討論の中心となった。ある講習会員が「亀のチャーリー」をとりあげ、その作品は一般読者の間で評判がよく、親しみをもって読まれたから、ああいう肩のこらない作品の型もプロレタリア文学のなかにあってよいのではないかというふうに問題をおこし、プロレタリア文学のジャンルの問題に連関させていた。

その晩、自分は最後の時間をうけもっていたのでおそく出席し、そもそもその講習会員がどんな発端からそういう話をはじめたのかわからず、鹿地亘が意見を述べるのを聞いていた。「亀のチャーリー」について問題とすべきはプロレタリア文学としての創作方法の問題であって、ジャンルの問題ではないということが説明されていた。自分はそのとき「亀のチャーリー」を読んでいなかった。帰って注意ぶかく読んだが、はたして「亀のチャーリー」はプロレタリア文学の中にあってもよいという種類の肩のこらぬ作品であったろうか？

藤森成吉氏が「改造」九月号に発表した小説「亀のチャーリー」は、三十年もアメリカに移民労働者として辛苦の生活をしている動物と子供のすきな日本人中野が、市場で亀を、ひろって育てたことから亀のチャーリーとあだ名され、アメリカの子供の人気を博しつつ、日本の切手や菓子その他を宣伝用具として子供らを教育し、ピオニイルに仕立ててゆく。亀のチャーリーは相もかわらず貧乏で冬じゅう何も食わぬ二匹の亀の子とボロ靴下を乾したニューヨークの小部屋では五セントの鰯の頭を食って暮しているが、ピオニイルはゾクゾク殖えてゆくという物語を、五章からなるエピソード的構成で書いているのである。

小説の冒頭には、ワシントン百年祭当日、アメリカの共産党によって指導された民衆の、中国から手をひけ、ソヴェト同盟を守れ、とのスローガンをかかげた大衆的示威運動の光景が描かれ、チャーリー中野もそれに参加したと紹介されている。ニューヨークの反戦デモに参加するばかりか、中野は、三十年間転々としてアメリカであらゆる労役に従事していた間に、鉱山の大ストライキにプロレタリアとして夜も眠らず働いたことがある。なおかつ現在では自分の周囲におけるアメリカの子供の中からピオニイルを養

成していというのであるから、おそらく、日本移民労働者の一人として、アメリカ共産党に組織されているのであろう。

「亀のチャーリー」一篇を読んで最も強く印象されることは、亀のチャーリーという中年の男が全く孤立的に書かれていることである。生活的な面では住んでいるアメリカのプロレタリア大衆とも故国日本の革命的大衆ともなんら切実な交流を持っていない。ポッツリ切りはなされている。亀のチャーリーという男が、ニューヨークには、ほかの日本人労働者も学生も商人もいるであろうのに、それとはちっともかかわりなく、またアメリカの労働者、その前衛とも何の有機的結合をも示さず、ひたすらアメリカの子供に向って公式的な宣伝教育をしてはせっせとピオニイルにしてゆくことが書かれている。――これは全く著しく変であると思った。

ピオニイルの組織は誰でも知っているとおり、どの国においてもプロレタリアートの指導のもとに組織されている革命的な階級的少年少女組織である。ピオニイルは共産青年同盟員によって指導されるのが通例であり、おそらく五十を越しているであろう腕の毛まで白い亀のチャーリーにその任務がはたせられていることはなかろうが、それは一応チャーリーの子供好きの特色、独特性によるものとして、どうも納得できないのは、亀のチャーリーがピオニイル養成という現実の仕事の理解に対して示している機械的な卑俗的な、安易さである。

たとえば、メリイという女の子が夏場彼の店に出入りしてピオニイルになる過程を作者は手軽くこう書いている。メリイに本を読ますと円い青い目をクルクルさせて「正確な理解力」を示し、「十日ばかりチャーリーの店の手伝いをして」「やめる時にはもうピオニイルの組織に入ってい、弟や妹ばかりか父親や母親たちまで宣伝するようになった」あるいは失業者の息子が二人、店に掻払いにきたのに、亀のチャーリーがつかまえて説得して「本」をやると「二人はやがていいピオニイルに成長して、いつも二人で組になって活動した」と。

あとからあとからそのようにしてつくられるピオニイルらは、どこへ組織的にはつけられるのか、どんな分隊野営をチャーリーが知っているのか、読者にはわからずに、はなはだ不安である。「本」をよますと「正確な理解力」を示すというが、それはどんな本であろうか。子供らは質問するというが七百万人の失業者のあふれたアメリカの子供、牛乳業トラストが市価つり上げのため原っぱへカンをつんで行って何千リットルという牛乳をぶちまけ、泥に吸わせ、そのために自分たちの口には牛乳が入らないでウロついているアメリカ勤労階級の子供らは、亀のチャーリーにどんな、現実的なプロレタリアの子供らしい質問をするか？ 子供らがピオニイルにならずにおれぬモメントはどこにあったのであろうか？

最も興味あり関心事であるべきそれらの点を、作者は機械主義で片づけている。同時に、一人の子供をピオニイルにしようとし、なし得たことによって得た経験が、亀のチャーリーの心持をプロレタリアとして、またアメリカ帝国主義の下で有色人種労働者として二重の搾取と抑圧とに闘っている日本人移民労働者としてのチャーリーの心持をどのくらい高め、鼓舞し、生きてゆく日常の世界観を変革したかというようないきいきした人間的階級的摂取は、作品のどこにもあらわれて来ない。

その例は小説の初めに、風邪をひいてしょげた亀のチャーリーの心持とその次の不自然な、非現実的飛躍に現れている。しょげたチャーリーは平凡らしく、金もたまらず、妻も子も持てずに働きつづけ、今や体が弱って髪の白くなったのを「これが日本人労働者の運命なのだ」とこぼし、更に「おまけに、お前が気が弱くなったのは、体が弱ってきたセイってよりも、むしろ恐慌のセイらしいぞ」と弱気な、非闘争的なダラ幹魔術にかかっているような述懐をもらしたかと思うと、忽然として次の行では作者はそのチャリーに「収入が減ったって、だがそれ以上のものがあるんだ」と意気込ませている。そしてつづけていっている。「今年の宣伝のためにはこの恐慌はウンと有利だ」と。

作者の非プロレタリア的現実把握が微妙に右の一二行によって曝露されている。即ち、チャーリーの本当の気分は恐慌によって弱くなっているのだが、宣伝のためには有利だと、まるで第二インターナショナルの職業的社会主義者のように、切迫した恐慌による階級と階級との対立を人為的にみている。三十年間にうけた抑圧との闘いによってプロレタリアとして目覚めた一移民労働者が、今や彼の賃金を百ドルから七十ドルに切り下げる恐慌に対して、利害の衝突する二つの資本主義国家間の泥仕合的排外主義にたいし、ピオニイルの養成にも熱誠を示すというようなのでは決してない。

プロレタリアートの心持を書こうとして客観的現実と主観とが非弁証法的な分裂をとげたというのではない。「亀のチャーリー」は、生々したたくましい現実としてのプロレタリアートの日常に作用している革命性、そのための組織など書いていない。ましてや、一九二九年来の恐慌が一層深刻化し、資本主義の局部的安定さえ今は破れ、資本主義国家と資本主義国家との衝突の危機が切迫している現段階のプロレタリアートのピオニイルという最も革命的組織的なものにふれつつ、それを最も非組織的に非現実的に描くことによってプロレタリアートの力を背後に押しかくし、亀の子、子供、子供ずきの孤独な移民チャーリーと市民的な哀感をかなでている。

作者は「移民」という小説を近く発表するらしく広告で見た。しかし「亀のチャーリー」のように、主題の把握においてプロレタリアートの闘争から切りはなされ、プロレタリア作家に課せられている課題から逸脱したものである

ならば、「移民」の書かれる革命的意味もまた少ないであろう。

作家が一つの作品から次の作品へと正しい発展をとげてゆくことは、困難な努力のいる仕事である。ブルジョア作家たちは、その本質から、作家としての完成を個人的自己完成としてしか理解し得ないため、その努力を取材から取材への一見めあたらしげな転々たる移行およびその扱いかた、書きかたの練達へと集中する。彼らはいかに数多く一つから一つへと書きまわろうとも、ブルジョア的世界観の上に立っている以上主観の真の意味における発展はない。いきおい陳腐な本質の粉飾としての形式主義に、芸術至上主義に堕さざるを得ない。

この点プロレタリア作家は全く根柢を異にしていると思う。プロレタリア作家こそプロレタリア階級の発展の各モメントとともに発展し得る。プロレタリア作家が唯物弁証法的把握によって自身の階級の当面の革命的モメントを正確に政治的に把握し得さえすれば、——社会的矛盾における複雑活潑な相互関係と、それに対して階級として働きかけるプロレタリアートの革命性を具体的にとらえ得さえすれば、作品における主題の積極性、発展性は革命の進展につれて押しすすめられ得る。この意味でプロレタリア文学および作家の発展をわれわれは問題にするのであるし、プロレタリア作家の発展の努力はこの方向に向ってなされなければならぬ。あれやこれやと低下したあるいは逸脱した題材を書きまわるのではなく、プロレタリアートの課題とともに書きすすめる努力こそなされなければならない。

須井一の「幼き合唱」と「樹のない村」とはこの観点からわれわれに何を教えるであろうか。「幼き合唱」においで作者は漁師の息子である小学校教師佐田のブルジョア教育に対する反抗を書いている。貧乏なばかりに師範の五年間を屈辱の中に過し、それをやっと「向学心」と「学問の光明」のために忍従していよいよ教師となった彼は、「希望と理想と満足とがひとりでに胸をしめ上げて来る」という状態で就任する。ところが「教員生活の最初の下劣さ」として、先輩教員らのへつらい屈伏を目撃し二宮金次郎の話をして児童から「私は金次郎は感心ですけれど万兵衛はわるいと思います」といわれたことを契機に、猛然と自分のかけられてきた師範学校的世界観の魔睡を批判しはじめる。佐田の煩悶がかくして始る。佐田は神経的に正義派的に、彼の認識の中で一般化されている(作者も同様に一般化している)児童の「意欲をもたぬ幼年期の純真さ、無邪気さ」、創意性などを計画し、「労作にむすびついた教育、具体的実践に結合した」教育こそ小学教育の基礎であると感じる。

たとえば「窓ふき」という集団的労働を子供らがみずから分業に組織したことに驚異した佐田が、そこから生産労

働の分業について子供らに話しはじめれば、当然資本主義社会における矛盾形態としての分業の説明が必要となることを感じる。佐田は蟻の話と工場の話とを対照させる。児童を型にはめ、卑屈にさせ、抑圧と搾取とを準備する現在の小学教育はドグマの所産であると奮激し「おれはもっと……して……ぞ！」(原文伏字)と切歯する。

K市の年中行事として行われる「共同視察」参観者の列席の前で、佐田は児童との初歩的な階級性を帯びた質問応答によって彼の発見しつつある新しい教育法を示威しようとしたことから、ついに反動教育と決裂する。あやまれといわれたことに対して、体じゅうをブルブルふるわし「私は詫びにきたのではありません。主張をしにきたのだ」と叫び、あわてふためく同僚に「私は、私は……」と叫びつつかつぎ出される光景をもって結んでいるのである。

伏字によってこの小説の中のかんじんなところはわれわれの目から隠されてしまっている。それらの部分で作者はきっと、思惟の当然の発展としてソヴェト同盟における社会主義的小学教育が全社会の前進とともに達成において新しい人間を生みつつあることや、または現在日本の文部省教育の腐敗は日本独特の封建的専制主義の重圧によるものであることなどもいっていることだろう。

そこを考えに入れても、この「幼き合唱」が読者にあたえる印象の総和は、錯雑と神経衰弱的亢奮と個人的な激情の爆発とである。行文のあるところは居心持わるく作者の軽佻さえ感ぜしめる。これはどこから来るのであろうか。「子供の世界」という小市民的な一般観念で、階級性ぬきに子供の生活を「意欲をもたぬ純真」なもの、無邪気なもの、天真爛漫な人生前期と提出している点、作者はきわめて非プロレタリア的である。バイブルが「手袋なしには持てぬ」しろものである通り、ブルジョア世界観によって偽善的に、甘ったるく装われ、その実は血を啜る残虐の行われている「子供の無邪気さ、純真さ」の観念にたいしてこそ、プロレタリアートは「智慧の始り」である憎悪をうちつけるのではなかろうか。実際の場合に、人道主義的、正義派的な若い小学教師が、小学教育の欺瞞に目ざめる動機は「万兵衛は悪いと思います」という子供のイデオロギー的な言葉よりさきに、校長、教頭などが金持、地主、官吏の子供らばかりをチヤホヤし、その親に平身低頭し、自身の地位の安全のためにこびる日常の現実に対し素朴な、しかし正当な軽蔑と憤りとを感じることから始まる例が多い。

佐田は搾取形態としての分業について、又は専制的封建的小学教育法について、イデオロギー的批判をするとき大がかりにマルキシズムの社会観によって思想を展開させている。ところが、それを実践にうつす段どりになると彼はきわめて安値に、粗末に非組織的に行動することしかなし得ない。

児童たちの窓ふき作業ぶりを観察して、たちどころに小

学教育の基礎と方法とは労働に結びついた教育でなければならぬという社会主義教育の階級的課題にまで頭の中で推論に拍車をかけた佐田は性急に、孤立的にそれをどういう形で行うかというと「おおい、みんな！」彼はとっさにワイシャツとズボンを脱ぎすてて叫んだ。「先生もみんなを手伝うぞ！　みんなの仲間入りするぞ！」そうして、素早く雑巾を握ると、まるで夜のあけたような心で割り込んで行った。生徒たちが若い先生の主観的な亢奮ぶりにキョトンとすると、彼は「肥えたる わが馬手なれしわが鞭」と「精一杯の声を張りあげて歌い出した。」子供たちも「忽ちこれに同化されて歌い始めた。労働の歌が労働するものの心を融合し統一した」と作者は楽観している。

師範卒業生佐田の安直ぶりが、階級的発展の端緒としての意味をもつ未熟さ、薄弱さとして高みから扱われているのではなく、作者須井自身にとっても弱い一点であることは、「幼き合唱」のところどころの文章にうかがわれる。大体作者はいわゆる筆が立つという型である。したがって字面をおしみなく並べてスラスラ読み流させる傾向であり、描写は立体的でなく叙述的である。文章に調子がつくと作者はよみ下し易い美文めいたリズムにのるのである。たとえば「絶望があった。断崖に面した時のような絶望が。憤激があった。押えても押えてもやり切れぬ憤りが。惨めさがあった。泣いても泣いても泣き切れぬ惨めさが。恩愛も、血縁も、人格的なつながりもない……（原文伏字）から死命を制せられている自分！」うたい上げられた調子はあるが沈潜して読者の心をうち、ともに憤激せしめる迫力は欠けている。

皮相的な、浮きあがった表現の著しい例をわれわれは、この小説のクライマックスともいうべき「共同視察」の場面に発見する。ドヤドヤと視察者が入ってくる。佐田はさすがに「厄介なことになった」と思うが、あくまで自由な質問応答をやり、「活潑にやることによって彼の発見し、実行しつつある新しい」教育法を「示してやろうと思った。」佐田の一生にとって、即ち小説としての芸術的概括の点からいってもこの瞬間は緊張した、真面目なるべきモメントである。それにもかかわらず、作者は「彼はちょっと悲壮な気持で第一声をはなった。『では質問に入りますから、判らぬところがあったら……』」云々といってすぎている。この一句で真摯なるべき現実が不快にくずされている。悲壮という複雑な人間的感情の集約的表現は、ちょっとという小量を示す形容詞によって、軽佻化され、なおざりのものとされ、読者は作者の浮腰を感じるのである。このような例は、この部分一カ所ではない。

「幼き合唱」は濫費されている字数にかかわらず何故に薄手な、貧弱な作品を結果したか？　作者は日本の封建的ブルジョア教育との闘争を、プロレタリアート解放のための具体的一部としてつかみ、芸術による闘いとして主題を深めていないからである。書く材料をペン先で扱っているか

らである。もし作者が一小学教師の煩悶、反逆を野蛮な封建的絶対主義的抑圧と闘う労働者農民の立場に立って把握したならば、当然天使的な無邪気な子供というブルジョア的観念化からも救われ、佐田のイデオロギー的飛躍と実践とは、もっと質的な、納得のゆけるものとして描かれたであろう。現実の日本において、文化反動との闘争の問題は今日広汎に教育労働者を包括してきている。作者が主題をそこまで積極的にプロレタリアの課題とするところまで高めたなら、佐田の実践はよしんばあの形態において書かれたにしろ、その個人的な非組織性——小ブルジョア的なアナーキー性に対し、作者は目的を貫徹するための執拗な周密な行動を、集注し指導し更に一層合目的たらしめる可能を理解するプロレタリアの観点から正しい批判をもって描き得たであろう。

同じ作者の「樹のない村」は「幼き合唱」の創作態度において感知することのできた作者の「作家」というものについての理解が、作品中にはっきり姿をあらわしている点、特に多くの注意を喚起した。

農村のはてしない収奪と資本主義の高利貸搾取と二重の重圧によって祖先伝来の樹木さえ失い「樹のない村」となった山間のK部落の自作農らが、更に戦争の軍事費負担を加重される。軍部がその部落に二百円の強制献金を割り当てた。自作農らはついに共同墓地の松の木を伐ってそれを出すことに決議したが、昭和二年の鉱山閉鎖以来共同植付刈入れをしている「やま連」と呼ばれる農村の集団的な労働者がそれをきっかけに、未組織のK部落における闘争に率先して立つことになった。そのオルグ的役割は僕というプロレタリア作家によってされた。この小説はその作家の手紙からなっているのである。

「樹のない村」において、主題は「幼き合唱」よりはるかに積極的である。手紙の筆者である僕というプロレタリア作家は闘争の激化した現段階で、帝国主義日本の革命的勤労大衆の前衛に課せられている任務は、広汎で具体的な帝国主義戦争反対の闘いであり、帝国主義戦争によって生じるあらゆる矛盾のモメントを国内的にはプロレタリア解放のために有利に強力に転化せしめることであり、そのためにプロレタリアートの共力者として農民との結合が急務であることなどを理解している。

久し振りで彼を故郷へ呼びかえした点呼。強制献金。それらの機会を、彼は階級的方向に転用しようとするのである。

K部落の土着で、「ふん自家用か、お前も役場の衆みたいなことをいう！　これ以上、どうして芋が食える。朝食うて、昼食うて晩食うて……。お前に食わさんのが慈悲じゃと思え」という兄について彼は部落を歩きまわり、ことごとに部落の荒廃を目撃する。盆の十四日が百姓平次郎に銃をふるわせる厄日であり、室三次の命の綱である馬が軍隊に徴発されその八十円を肥料屋と高利貸に役場で押えら

れた室三次の女房は絶望して発狂した等々。それらを部落の一般経済事情の分析とともに、僕なるプロレタリア作家とは組織上どういう連関にあるのかまるで示されていない同志Tに、彼はほそぼそと報告する。観察報告を書くとなると、彼はいわゆる作家的手腕を示す欲望にとらわれ、芥川龍之介がよく文章の中で使ったような調子までを使い、なかなか多弁に、詠嘆的に、味をたっぷりつけるのである。

目撃したK部落の窮迫の現象から、彼は猛然と「畑へ」「種子」をおろそうと決心した。部落は自作農ばかりだから、闘争組織は農民委員会であると規定し、「僕はいよいよ実行運動に入ろう」「時はあたかも僕はウンカ問題で村会とこじれている」「やさしくなくとも僕はやる。我々の故郷に革命の詩をもたらすための開墾を」と、プロレタリア作家の農村における闘争的活動が開始される。

読者はこの作家の実行運動において最も拙劣な、機械的なオルグを見るのである。強制献金のための村の衆の集りに出て、アヂ・プロしようという機会そのものの積極的なとらえかたは、間違った方法によって失敗に帰したのだが、僕というプロレタリア作家は、手紙のこの部分になると、階級的先進分子として、オルグ的活動と作家的活動とを、完全に分裂した実践として行っている。

失敗した宣伝教育の自己批判を通して、彼の口惜しさ、悲しみが読者の胸に浸み込むような真実さで手紙は書かれていない。第一信と同じ饒舌な文調で、書くために書かれている。オルグはオルグ、作家は作家、そして手紙を書くにあたって、まさに僕は作家なのであるという分裂を行っている。「どうでも書かずに居れぬ」と切迫した実感において自己の失敗を書くとき、誰が「いや――こんな描写を重ねていては君を退屈させる。僕はいい加減にペンをはし折らねばならぬ。どうも小説書きというやつはどんな場合でも呑気でいかん」などと、いりもしない断り書きをするほど、そんな不必要なお喋りするであろうか！　そういう作家であるからこそかんじんの村の集りで自分だけいい心持ちになって喋り、やがて「あたりを見廻して」みなが自分のまわりを離れ、区長や雑貨屋の方へかたまって彼をぬすみ見ているのに、「驚いた」りするのである。活々した階級的人間的生活の種々雑多の具象性に対し最も感受性が鋭く、個々の具象性の分析、綜合から客観的現実の総括をあるいはその逆の作用をみずみずしく営み得るはずのプロレタリア作家ともあるものが、自分のしゃべる言葉に対する大衆的反応を刻々感得することなく、自身を「排斥された異端者」と文学的に詠嘆するに至っては、一箇の腹立たしい漫画である。

なるほど、村についた最初から彼プロレタリア作家は、K部落の窮乏がどんな外見をとって現れているかということは、こまかに書きとめている。外から部落へ入って来たものとして観ている。しかしそれらさまざまの外見をとって起る事件が、部落民の世界観をいかにかえつつあるかと

いう大切な要因については、その重大さに必要なだけ細心で執拗な関心を払っていない。

作家は「悲劇が来た」と報じている。馬をとられた三次の女房の発狂にしろ、気が違った女房が役場に日参しているという現実の報告で終っている。現実の悲惨事のこれだけの現象主義的把握は一応大衆作家でもやるのである。われわれに必要なのは、そのようにして女房まで発狂させられた三次が、戦争に対し、政府に対し、どんなにこれまでと違う心持を抱くようになって来たか。三次のその不幸はまた部落民の心にどんな影響を与えたか、そのことこそ必要なのである。この三次に強制献金は何と響くであろう。彼プロレタリア作家は暗い納戸で寓話化されたソヴェト同盟を幻想に描くよりさきに、三次の事件を想起すべきであった。しかし彼は村の神社の集りへ出て、鉈をふった平次郎は念頭においたが、三次が集りに来ているかいないかさえ問題にしていない。

同時に、その部落と彼との関係はどこまでも、「僕」「彼ら」あるいは「百姓たち」という関係におかれ、しかも「実行運動」に当って「僕」なるものが、部落の大衆にどんな感情でうけ入れられているかという、大切な計量をぬかしている。部落へついた第一日に「味噌又」のおやじに「点呼で？　そうかそうか。そしてもう社会主義たらいうもんやめて？」云々といわれている彼にしてみれば、「川上の弟じゃ、菊坊じゃ！」というだけではすまさぬ複雑な部落民の先入観によって迎えられていることは明らかである。

村の社での演説の失敗は、これら数多の必要な情勢分析の不確実さから生じた当然の帰結であった。彼が戦闘的唯物論者らしく部落内の現象の分析綜合をなし得たら、「彼女（部落）の古い精神がいかに社会変革をきらっていようとも彼女のからだ——生活はこれを熾烈に要求しているのだ。要求せざるを得なくなっているのだ」という二元論は成り立たぬであろう。古い伝統がそれを嫌っていようとも生活が社会の合理的発展を熾烈に要求せざるを得ない状態に立ち至っていたとすれば、その要求によって必然的にかえられる古い精神が、そっくり元のままの古い精神であることは絶対にあり得ないのである。

プロレタリア的実践力の欠如によって起るさまざまの破綻を、僕というプロレタリア作家は「無力な小説家的詠嘆だというなかれ！　実際僕は悩んだのだ」と、さながら小説家というものの本質は無力なもので「どんな場合にでも呑気でいかん」ものなのだが、マア堪えてくれろといわんばかりに書いている。

彼の失敗した演説にもかかわらず、農村における力の高揚はむこうから組織をとらえに来る。「やま連」のグループが北村清吉を代表として部落委員会らしいものを組織する話をもち出してくるのであるが、この月夜の晩、彼プロレタリア作家の心は「この一言でまるで満月のようにふくれてしまった。」そしてただちに「同志Tよ。僕の煩悶は無駄

であった」と安心し、大衆の実生活が内包する革命性の豊富さに対するオルグとしての自己の実践の貧弱さ、誤謬はそれなりに飛び越えてしまっている。きわめて非マルキシスト的な態度である。

「樹のない村」の検討において、特に作家とオルグ的活動についての分裂的認識の点を強調したのは、今日われわれプロレタリア作家に課せられている階級的課題の実践的理解と連関をもっているからである。今日プロレタリア作家に課せられている任務は、あらゆる芸術的技術を統一練磨し、階級性の集注的表現・プロレタリアートの組織の基本的線に従属させ、その独特で鋭利な武器となるべき時にあるからである。

「樹のない村」で読者は直接農民委員会、または部落委員会の組織を試みたプロレタリア作家を見たのであるが、プロレタリア作家のオルグ的活動の面はさらに多面であり、作家としての技術を組織的活動に直接活用し得る面も数多くある。それはサークル活動である。

「樹のない村」について見ても、このプロレタリア作家は、新しく「やま連」を中心とする部落の闘争組織ができようとするにあたり、「明日の夜になると我々の故郷にも赤い旗が立つ」と抽象的表現で結び「どうだ、この蚊のひどいこと！」と手紙を終っている。蚊よりも同志に語るべきことがあったはずだ。オルグ的役割をつとめる作家であるならば、その新しい革命力の影響を大衆化するために当然、「部落新聞」の発行について考え、その具体的な指導が「ひどい蚊」に代って彼の注意を占めたはずではなかったろうか。

以上三つの作品、特に「樹のない村」の検討は、われわれの関心、反省を、自身のプロレタリア作家としての活動の吟味に導いて来る。作家同盟で目下とり上げられている組織活動と創作活動の統一の問題にふれて来るのである。

十月号「プロレタリア文学」に鈴木清がこの問題について「一歩前進か二歩退却か」という論文を書いている。この論文はいうべきことのまわりをまわりつつついにかんじんの環をつかみそこねた論文である。筆者は、繰返し説得している、組織活動と創作活動との統一はプロレタリア作家の実践によってのみ解決されるものであると。そして、その実践とは「より一層の精力的な組織的活動と創作活動との交互関係において始めて解決されなければならず」これは「統一され得ない問題ではなく、統一されざるを得ない問題である」といっている。しかし、筆者はその実践の経験を真に「精力的な」「交互関係」において統一させ、われらの世界観を豊富ならしめ、前衛作家として発展せしめ得るものは、ただ一つそれら「精力的な」「相互関係」を通じてわれらに客観的真理の概括を与えるところの、明確な政治的把握あるのみであることに言及していない。この問題の具体的な、日常的な解決は、とりもなおさず、芸術に

おける政治の優位性に対する正しい階級的理解なしにはあり得ないのである。鈴木清はこれを基本的環とせず、あれやこれやの必要条件の一つとして理解したため、論文は実践的な推進力を失ったのである。

今日、プロレタリア文学運動において、組織およびその組織活動を否定するプロレタリア作家はいないであろう。文学運動が文学運動としてあり得る鍵は組織活動にある。われわれの組織の内で、組織活動と創作活動の統一の問題がおこったのは、組織活動の否定からではなく、逆にその重要性の理解(しかし不十分な理解)から起ったのである。われわれは組織活動はもちろんやらねばならないし組織活動の旺盛化の要因として創作活動も高められなければならない。だが何ともいそがしいではないか。同盟内の仕事はおのおのの部署にあり班会にあり実にうんと用事がある。サークル活動は更に多くの精力を要求する。体が一つではまわり切れない。朝出て家に帰るのは十二時であるとすれば、いつ創作ができよう。だが作品は書かねばならない。困ったものだというところから問題が生じている。当惑と一種の焦慮とをもって問題はおこっていて、一つこの矛盾を大いに克服しようではないか、そのためにはわれらの置かれている現実をまず分析しよう。討議しよう、さあ……諸君! という、気組みの引立ちが欠けている観がある。

時に率直にいえば、一九三二年の後半期に問題は一進している。林房雄や須井一などが一応プロレタリア文学の陣営に属するように見えつつ、実質においては非プロレタリア的な作品を量において多量生産し、しかもそれがブルジョア・ジャーナリズムにおいてもてはやされているのに対して、われわれが一々それを作品によって覆えすような作品を書いていないという現象から、漠然たる圧力を感じる傾向があった。従前から、創作活動旺盛化の課題がわれらの前にあった折から、この気分は同盟内に新たな意識で創作活動と組織活動との統一の問題をまき起したのである。そして、この問題に対する同盟員の感情も微妙な複雑性を示した。

一方には、組織活動をしないでいいとは思わないが、今のままではやり切れない、何とかならないものか、という消極的な、他力本願的気分がある。一方には、現在の状勢でプロレタリア文学運動の確立のために組織活動なしでどうするものぞ、組織活動によってこそ、多数者獲得の課題に答え得るのだ、今書けないのは仕方がない、という左翼的日和見主義があり、他には、時間の問題とする部分もある。創作をする時間さえあればよいのだ、と。

プロレタリア文化運動で組織問題の重要性が理解され、それが実践にうつされたことは一九三一年度における基本的発展であった。更に、そのプロレタリア文学組織としての発展を、組織の特殊性によって具体化するために創作活動旺盛化の課題が一九三二年の大会で決定されたことは、

正しかった。われわれはわれわれの革命的作品によって反動文学を克服し、サークルその他同盟の組織活動によって敵の文化組織を撃破し得るはずであった。

しかし、それはうまく行っていない。急速に変化した情勢は、現在サークル活動の理解の立てなおしを要求している。創作においてもわれわれがプロレタリア作家として互に要求しているだけ雄大で高度で、かついきいきとしたプロレタリアートの生活描写において大衆をすいよせるような作品は出ておらぬ。

だからといって作家同盟の方向が根本的に誤っているとかまたは林房雄の憫然たるアナーキー性の爆発的言辞を引用すれば「鎌倉に引込んだ僕の方がプロレタリア的仕事をするから見ていろ」などというに至っては、すでに論外である。

真にプロレタリアートの立場に立ち、戦闘的マルキシストの目で発展の本質を理解すれば、われわれの当面する矛盾の最大のモメントとして現れていることを理解するのである。

たとえばブルジョア文学批評家は、自分がもとのように次々と小説を書かぬことについて過去二年間しばしばこういう文句を繰返した。「中条百合子は小説が書けなくなった。作家同盟なんぞへ入って、柄にもない部署につかされ、追い立てられているから、才能をついにドブにすてた」と。だが、自分をそれらの言葉で苦しめ、傷けることは全く不可能であった。なぜならばブルジョア・インテリゲンチア作家としての発展の必然としてプロレタリア文学運動に参加した自分は、すでに質において真の作家としての発展の可能性をとらえた。また、過去のすべての文化的蓄積を最も革命的に利用し得るよう自身を鍛え洗われたものとし、世界観の隅々までをプロレタリアに組織するためには、先ず、文化啓蒙活動をとおしてあらゆる機会に勤労大衆と接触しその一員となることこそ、正しい第一歩であることは明らかであるからである。

ここに、一本のステッキがある。ブルジョア作家はそれについて何を実感するであろうか。そのステッキの外見の瀟洒さ、流行、キッドの手套、キャデラック。又は半ズボンと共に郊外の散歩。あるいは忽然として、自分のわきに細い眉毛を描いて立つ洋装の女を思い出すかもしれない。

自分は、今ステッキを見てそのような種類のことは思えない。何ともいえぬ肉体的憎悪をもってそれを見る。直接な敵を感じる。野蛮な警察のスパイどもは紳士をよそおいステッキをついて我らを襲撃するからである。革命的な活動をする若い女の口へステッキをつっこんで、負傷させ、その娘が叫ぶ声をこの耳でききその血を見たからである。それを私は私の目で、警察の留置場で見た。留置場へは、プロレタリア文化活動に従うという理由にならぬ理由によって入れられた。勤労階級は歴史の合理性によりその歴史的任務を実践する過程においてつねに支配権力と抗争する

のであるから、従って、私ひとりが一本のステッキについて、ブルジョア作家には感じることのできないプロレタリアの実感を持つというのみでない。それは階級の実感である。この実感および実感を与えた現象を、その根柢にある政治性へまでつきつめて把握し、再びそれを芸術的概括として作品化した時、一本のステッキについての実感はプロレタリア文学作品となるのである。そして作品として大衆に働きかけ、その世界観の発展に役立つであろう。サークルへ行った。雑誌を編集した。つかまって留置場へ行った。そこでステッキで拷問ざれた労働者の娘を見た。と、いたずらにあれやこれやをちりぢりばらばらに認識し、それをかき集めたところで作品は書けない。われわれの努力は、より強固にされ、明確にされた政治性――革命性によって客観的に現実を理解し、文学運動においてつかむべき当面の環をはっきり知り、それを基準として全同盟の組織活動を整理し、深め、より精力的に企業・農村の大衆の中へ活動することに払われねばならない。まごうかたなきプロレタリア性によって貪慾にかかる階級的実践の成果を芸術的概括にまで高め、発展せしめる努力がなされなければならない。組織活動と創作活動とはプロレタリア作家にとって二つの対立する作業ではなく、そのものにおいてきりはなすことのできないプロレタリア作家活動の二面の活動形態である。統一は、図式弁証法への定式化によって、二つの問題を正・反と対置したところから何か固定した形で結論として出てくるのでは決してない。

鈴木清は論文の中で「作品はなるほど組織活動なしにも書き得る。しかし問題は別してそれらの創作がプロレタリア文学として立派なものであるかどうかである。」その答は「遺憾ながら否である」と遠慮ぶかく書いている。われわれは、もっと確信と責任とをもってこういい切らねばならぬ。真にプロレタリアートの解放と勝利との歴史性を理解しその実践にしたがうものが、闘争の必然的形態として必要な組織活動を自身の実践として認容しない筈はなく、それをなし得ないような革命性なき世界観を持つものならば、プロレタリア作家として立派な作品どころか、そもそもプロレタリア的な作品すら書き得ないであろう、と。

世界のブルジョアどもは、マキシム・ゴーリキーが当代のプロレタリア作家の真摯な長老であり、優れた作家であることは認める。しかし、彼のすべての芸術的天分、プロレタリア解放への永い年月の実践を、最も効果的に国際的に輝かしく未来に向って意味をあらしめたものこそは、ロシアにおけるプロレタリアートの勝利であったことについては、沈黙を守っている。

われわれはゴーリキー礼讃における狡猾な革命性の抹殺をあばかなければならぬ。プロレタリア作家としての実践(組織活動と創作活動と)の中にその基本とプロレタリアの革命性を確立しなければならない。(一九三二・一二)

(一九三三年一月「プロレタリア文学」)

右翼的偏向の諸問題

――討論終結のために――

小林多喜二

同志林房雄の「文芸時評」について

私は既に本誌十一月、十二月、一月号連載の私の「右翼的偏向の諸問題」に於いて、我が同盟内の右翼的偏向の基本的な諸問題については触れてきた。ところが、最近同志林房雄は「改造」二月号に「文芸時評」を書きその中で彼は彼の危険な傾向を更に発展せしめている。この同志藤沢桓夫、須井一、藤森成吉に宛てられた三つの手紙から成る文芸時評は、色々な方面にそれぞれの反響を引き起した――従って、私はこの文芸時評の持つ典型的な危険と更に徹底的に闘争することなしには、右翼的偏向との全面的な「真面目な闘争」は思いもよらないと考える。

そんならば、同志林房雄はこの文芸時評で、自己の危険な傾向を「如何に」発展せしめているか？

疑いもなく、同志林はここで右翼的偏向に於けるブロック的行動の最初の段階に突き進んでいる！　これは然し未だ明確な形をとっていないし、且つそのための組織的行動としては現れてはいないかも知れない、だが明らかに、かかるものへの最初の危険性をこの時評は準備している。同志林は自己の偏向の周囲に多くの同志（！）を集めることによって、偏向の強化合理化を目論んでいる。今迄、ヨリ個人的に偏向を固執してきた彼が、同志中条百合子の機械的批判に反撥した同志たちの気持を得たり賢しとばかりに捉えて、自己のグループに引き入れようと図っている。彼に於けるこの発展的態度は、誠に注目に値するものと云わなくてはならぬ。――従って、同志林の「文芸時評」が我が作家同盟はじまって以来の罵り、毒舌の最も醜い歴史的文献であるというところに基本的な重要点があるのではなくて、実にこの「新しい危険」が公然たる姿を取りはじめているというところにあることを、我が作家同盟の諸活動、その方向に対し常に関心をもって見守っている同志諸君に指し示さなければならないと考える。（罵り、毒舌ということになれば、それが歴史的に稀代なものであるという意味で、すべての同志諸君の注意を喚起しなければならないものであるが、この点では然し同志林は遺憾ながら甚だ拙く、何時もの彼らしくもなく、極めて拙く行動したと云わなければならない。何故なら、この罵り、毒舌によって、彼は自己の醜い本質を余りにも露骨に大衆の前にさらけ出したことによって、今迄何等かの好意を彼に対して残していた同志たち、調停派的見地＝或はレーニンの所謂「泥濘的」見地によって、彼を「その翼の下に」隠していた同志たちをしてさえ、最早とても、さすがに彼を擁護する如き

言葉を口にすることを敢えて為し得ないような状態に立ち至らしめたからである。これは全く以って、同志林の不幸であると云わなくてはならぬ。）

ところで、我々は、同志林が右翼的傾向に於けるブロック的行動の最初の段階に突き進んだことを、その内容について具体的に示すことが必要である。彼は同志藤沢桓夫宛の手紙のなかでもいっているように、そして今迄絶えずそれを繰りかえして来たことであるが、常に自己を「同伴者作家」として規定づけ、且つ固定化している。そして彼は問題をすべて此処から出発させる。これは正しいだろうか？　否、諸君、それは全く正しくはないのだ。私は本誌前号で我が作家同盟の組織は、コムミュニスト作家ばかりでなく、所謂革命的なすべての作家を広汎に含むところの組織であり、従ってその中には当然にヨリ同伴者的作家、ヨリ小ブルジョア的作家もいると述べた。だが私はその時、我々の組織のうちに、そんならば、「同伴者作家」が「小ブルジョア作家」がいると云ったであろうか？　何処でもそんなことは云わなかったし、且つそんなことは有り得ない。我々の組織は「同伴者作家」や「小ブルジョア作家」の組織ではなくて、あくまでも、全体として「革命的な作家」の組織である。そこには勿論、ヨリ同伴的、ヨリ小ブルジョア的要素をもっている作家はいるであろう。だが全体としてそれが革命的作家であるが故に、ボルシェヴィキ的指導によって統一され、且つ高められることが可能なのである。ところが同伴者作家とは、常に革命的作家であるとは限らない。例えば山本有三、高田保、北村小松、野上彌生子、広津和郎の如きは、進歩的な作品を作ろうとしながらも、その自己の階級的諸制約性の故に、時には反動的作品を作ったりする。これらの作家に対しては、常に彼等の階級的制約性とその革命的活路を示すことによって、我我の組織に確保することが必要なことは云う迄もない。だが、同伴者作家と革命的作家とを混同することは大きな誤りである。そのためには、我々は同志林房雄が何故我々の組織内の作家を、譬えその作家がヨリ同伴者的要素をもつ作家であるとしても全体として革命的作家であるときに、その点を抹殺して、「同伴者作家」と規定づけるのか？　彼はそれによって、一体何事を目論んでいるかということを見なければならぬ。

彼は一体何をもくろんでいるのか？　私の考えるところに依れば、彼はそのことによって少くとも二つのことを目論んでいる。

第一の目論見はそのことによって、彼は我々の指導のボルシェヴィキ性を、同伴者作家の高さにスリ換えようとしていることこれである。同志林が久米正雄から「プロ作家ではなくて、左翼芸術家である」と云われたことに対して、憤激するどころか、喜んでその尻尾に屈従してまで、常に自己を「同伴者作家」であると規定づけてきたのは全くかかる意図からではあった。それが彼の正直な謙譲からであ

ると思ったら、飛んでもない間違いである。謙譲どころか反対に、彼は我が作家同盟が建設してきたところのボルシェヴィキ的方針を「ウルトラ」とデマることによって(都新聞)、それと対置に「同伴者的」方針を持ち込んでいるのである。これが現在の段階に於いて、最も危険な傾向であることを理解するのに、なんの困難があろう。だからこそ私は前号に於いて、「我々の組織が種々なる層を含むという理由から、恰も、我々の指導的方針にも、それに適応した幾つかの方針がなければならぬ」とする危険について触れたのである。若しも我々が仮りに同志林が云うようにたらどうであろう? 我々はアメリカ映画もどきのベタクサした恋愛小説を作ってもいいということになる。なるほど、ブルジョアジーはそれに対して拍手をおくるだろう。だが、その居心地の良いうたたねから覚めたとき、我々は彼等によってサムソンのように去勢され、彼等の鎖につながれている自分を発見することであろう。更に彼の主張は「政治」からの「文学」の遊離である。従ってあらゆる我我の作家は書斎にひっこんで、階級闘争の諸問題とは凡そ無関係なことを、ただ「書きたい放題のことを」(藤沢桓夫)書けばいいのである。かくて、我々の組織と作家が、「去勢」され、横光利一や川端康成と瓜二つに似た我々の作家が沢山輩出するであろう。(何と奇妙なことであるか?)従って、今迄ビクビクものだったブルジョアジーや警視庁はこれでようやく安心して、昼寝も出来るという事になる！ヒョッとすると、林房雄はその功によって、所謂「シンパ事件」を執行猶予にして貰うことが出来るかも知れぬ！

だが、私はこれらのことを、非常に真面目さをもって云っているのだ。私が同志林の傾向が我々の運動の最も主要な危険であると云うのは、彼の見解が実にこのような危険をもっているからに外ならぬ。私は多くの諸君が、彼の狡猾な言葉のかげに隠されているかかる意義を、何よりも諸君自身の手によって捉えられんことを望む。でなかったならば、何故我々が一見細かなようなことでも、これをつかんでかくまでも執拗に闘争しているのか、ということが、理解されないのではないかと考えるからである。今、我々の前には同盟の一般方針か、林の同伴者的方針か。ボルシェヴィキ的党派性によって武装された方針か、去勢された武装解除の方針か。——この二つの問題が提出されている。諸君はこれ等のいずれか一方を選択しなければならない。私はこの場合、「諸君が正しい選択をなすであろうことを信じて疑わない」。

ところで、第二の目論見は、我々の作家が全体として革命的作家であるという点で統一されているにも拘らず、その中に特に「同伴者作家」の規定を持ち込み枠付けをすることによって、我が同盟の組織内にそのブロック(グループ)を形成しようとしている事、これである。先きにも述べたように我々の組織内には勿論ヨリ同伴者的な作家がい

るであろう。だが、それらは全体として革命的作家であるが故に、党派性ある指導によって統一、貫徹されることが可能なのである。従って、我々の組織内に同伴者作家、農民作家云々と規定づけることは、論理的にも、組織的にも、政治的にも誤謬であり、そんなことはただ第一の目論見と第二の目論見のため以外の何等の理由からも出ていないのである。同志林はこの「文芸時評」で、自分に、「おべっか」をつかい、「おだて」てくれた凡ゆる人達に（私はこの人達に云って置きたいが諸君が現在同志林の傾向が最も主要な危険であるということを矢張り現実に於いては理解して居らず、且つ何よりもその為に闘争していなかったということである）汚い手を差し出している。林が手をさしのべるのは当然である。林が中条の批判を契機に、このようにブロックの相手を求めたことは、そんならば何によって説明されるか。それは右翼的偏向に対する闘争で、誰かが間違うのを待って居り誰かが間違ったとき（中条が間違ったのだが）そのことから、右翼的偏向に対して闘争したあらゆる闘争が誤って居り、「ウルトラ」であるかの如き印象を与え、それをつかんで同志を糾合しようとしたことによって説明される。明らかに彼は「堀英之助」の名だけを引き合いに出して、それの具体的な批判に敢えて触れず、堀も中条と同じように誤っているのだと一般の諸君に思い込ませようと努力している。私は多くの諸君が、諸君自ら問題のこのような巧妙なスリ換えを見破り、それが如何なる意向から為されているかを知ることが絶対に必要であると考える。かくて私は諸君が同志林の一系列の理論と行動のうちに、少しの善意も少しの階級的良心もないということを知ることは困難でないと信じる。

一二の同志の調停主義的見地の批判

ところが、それに対して我が同盟の指導部内の有力なメンバーが如何なる態度をとっているか。「都新聞」を見ると、同志山田清三郎が、「双方考え直せ」という短文を書いている。彼はその中で、林の文芸時評の名「タンカ」に拍手をおくり、それどころか「相手が十年後輩の中条百合子に物を云うのに、わざわざ須井や藤森やを担ぎ出さなければそれが出来ないというのは、彼がいかに善良にして且つ小心であるかを示すものでなくてはならない」と云い、林も間違っているが、然し「全般的にいって、作家同盟の最近の指導的傾向の中に、一種の前衛主義および批評に於ける観念的・公式的一面性が可なり強く幅を利かしていることも、到底否定することは出来ないだろう」と、同志山田清三郎はまぎれもない日本語で、このように述べている。

我々は、我が作家同盟が昨年十月、同志林の傾向を右翼的偏向と規定し、それに対して闘争することを決議したことを知っている。しかも同志山田はその決議に参加した一人である。決議というものはどうでもいいものではなく

て、それに対しては指導部は厳重な責任を持ち、その実践者とならなくてはならないのだ。ところで、指導部はそのように行動したか。　遺憾乍ら、多くの同志がそれに対して「沈黙派」および「泥濘的態度」をとったことは、これ疑いを入れない。全然沈黙を守ることによってスターリンの所謂「本当の顔を見せぬ用心をした日和見主義」、および作家同盟には「イザコザがある」とか「不統一がある」とかばかりブツブツ云って、自己の見解を明確にせず、結局正しいボルシェヴィキ的指導の貫徹を妨害する泥沼的態度が、そこにあった。我々は既に此の外に「調停主義的」危険のあることを述べたが、それは沈黙派および泥濘派が大衆の圧力によって右翼的偏向とどうしても闘争せざるを得なくなった時に、当然おち入る態度に外ならない。沈黙派と云い、泥濘派と云い、調停派と云うも、すべてそれらは基本的には同じ右翼的見地に立っているが故に、右翼的偏向に対しても、単なる一応の「見せかけ」の闘争しか行うことが出来ないのである。――それにしても、この同志山田清三郎のかくも明白な、かくも露骨な調停主義！　同志亀井勝一郎の場合は、それでも「遺憾なことには調停派的役割におち入った」というところがあったし、同志山口浩は「現実の芸術的反映」という客観主義を持ち込んだのではあったが、そのいずれもこのように明白、且つ露骨にその役割を行ってはいなかった。「流石気負いの林房雄」とか、彼が「善良にして小心である」とか、彼の今迄の諸見解が「家付娘の我儘(！)」であるということによって、我々が今迄かくまでも執拗に闘争してきた全意義、および我同盟の決議を否定し、林房雄のあらゆる危険を陰覆している。しかも同時に、同志山田は「指導に於ける一種の前衛主義」を云々している。これは如何なることを意味しているか？「前衛主義云々」については私は本誌前号の論文に触れているから此処では繰り返さないが、同志山田はかく云うことによって、指導のボルシェヴィキ性、同志蔵原惟人の指導を抹殺して、林の見解を支持していることに気付かなくてはならない。

更に、「批評における観念的、公式的一面性が可なり強く幅を利かしていた」ということも、それが具体的なものとしては、どのように現れていたかと云うことが示されなくては、一般大衆には本当にそういう傾向が、林のあの右翼的な傾向よりもヨリ危険な且つ支配的なものとして事実上存在していたかの如きデマゴギーを与える。林房雄も何時でも同じこの卑怯な「手」を使う。だが、我々はこれらの「言葉」に誤魔化されてはならぬのだ。一つ一つの感想、一つ一つの作品についての実際の批判の上でのみ、初めていずれが正しいかが決定されるのである。然しそれにしても同志山田よ、君は何故作家同盟の方針を汚い言葉でけなしたり、君や川口や我々を嘗り罵り、悪口雑言の極りをつくした林の批判には一言も触れないのか？　君は君の胸にそのことを問わなくてはならぬ。何故なら、そこに調

停主義の本領があるのだ。「組織」「指導」、「批判」等の問題については、同志神近市子も（東京日々新聞の彼女の文芸時評を見よ）ほぼ同じような誤った見解のもとに、同志林を支持し、応援している。が同じことの反覆になるので、此処では特に触れないであろう。ところが、同志藤森成吉も本誌前号の「批評の批評」および「東京朝日」の文芸時評「林房雄に答えつつ」に於いて矢張り多くの調停主義的見地の上に立っている。――まず「批評の批評」では同志中条の誤謬を批判しながら、しかも彼女が正しく指摘したところの「亀のチャアリイ」の持っている基本的欠陥である当面の政治的課題からの立ちおくれ、即ち積極性ある主題の喪失に対して自己批判を行っていないので、この一文が結局中条の誤謬が用意しているところの右翼的偏向に対する機械的反撥を助長させるのに役立っているのである。即ち同志藤森のこの方法によっては同志中条の危険な誤謬は克服されずに、かえって今では中条とは反対のものの危険へ更に我々を連れこむのである。

同志中条の「一連の非プロレタリア的作品について」が持っている機械的危険は、我が同盟の主要危険である右翼的偏向に更に拍車をかけるものであるという点から、充分に且つ厳密に批判される必要がある。しかもこの論文は、自分自身「右翼的見地」に立つものによって、逆に煙幕として、自己の欠陥の合理化として（林の文芸時評を見よ）使用される危険を多分に持っている。遺憾乍ら、同志藤森の「批評の批評」も林の文芸時評的態度から例外をなしていない。即ち、「左」翼的危険はその反対のもの、右翼的見地に立つものによっては真に完全に克服されないのである。同志藤森よ！「林房雄に答えつつ」では、同志藤森は遥かに近く同盟指導部の観点に立って、林および中条の批判を行っているが、そこにも林に対する未だ多くの自由主義、亀井的調停的見地が残存し、右翼的偏向が主要危険であるということの実際上での把握が行われていない。

私は同志林の「文芸時評」を中心に、二三の同志の問題にも触れて来た。だが私はこれら我が同盟の指導的メンバーが、同盟中央委員会の決定遂行のために、直ちに調停主義的見地を捨てて同盟の危険な傾向に対して先頭に立って闘争を宣するであろうことを信じて疑うものではない。

右翼的偏向の発生の「根拠」とその「危険」

私は次に、現在に於ける右翼日和見主義の発生の根拠とその危険について――

現在、この度重なる（イ）白テロの重圧と（ロ）党派性による我々の運動の躍進のための困難さとが結びついたかかる段階でなかったならば、右翼的偏向の問題はかくまでも鋭く且つ重大に提起されはしなかったろう、と云えると思う。スターリンは次のように述べている。

「階級闘争の発展に転向がある度毎に、闘争が尖鋭化し困難が増加する度毎に、プロレタリアートの異れる諸層間の意見の相違と習慣と気分が、不可避的に党内に於ける一定の意見の相違と云う形に発展し、而してこの意見の相違は、ブルジョアジーとそのイデオロギーの圧迫によって尖鋭化し、やがてプロレタリア党内部の闘争という形になって現れる」と。而して、この矛盾はただ闘争によってのみ、解決されるのである。従って我々はこの観点から問題を見て行かなくてはならぬ。

（イ）まず第一に、我々の組織が未だ全体としては街頭的存在であり、経営についていない多くの小ブルジョア出身の作家をヨリ多く包含しているという正にその理由によって、我々の組織に加えられる度重なる白色テロルによる重圧が、一般同盟員にややもすれば、敗北的、退却的気分を与え易いヨリ恐しい根拠を持っているということ。例えばこの事はコップ防衛、時にその中央部の補充の問題にあらわれたことは万人周知のことである。コップへ行くと起訴されるとか、恐しいからコップには遣らないでくれとか、コップの仕事をしなかったら保釈は取消されないとか、がそれだった。また、明石の如きは、明らかに執行猶予にありつくために同盟へ脱退届を送ってきた。他のある同志は如何にすべきかと不決断にその間をフラついている。又、ある保釈の同志は統一審理を要求すれば、罪が重くなるというので、それを巧妙にサボっている。更にヨリ利口な同志は常に同盟の指導部の方針に逆っていれば、検事局の覚え目出度く、執行猶予になれるということを理解し、且つ実行している！ 又、或る他の闘争分野での保釈の同志が、文化運動ならば大して嵐が強くないという理由から、小説を書き出している……等々！ これらが最近の現状である。――まことにコミンテルン第十二回総会のテーゼが、現在の段階に於いて、日和見主義としての敗北的気分に対する闘争を特に挙げているということはいわれのないことではない。

だが問題は、これら一連の日和見的脱落者が、それらを一定の理論的、創作的扮装のもとに隠して現れているということである。ここに困難がある。だが、政治と文学の問題或はその他の感想で、如何によそ行きのもっともらしい顔付でものを云っていようと、争われず彼等はその隠された本質を反映し出しているのである。同志諸君、我々が右翼的（或は「左」翼的）偏向を常に無慈悲に、且つ厳重に問題にするのは、それがかかる「根拠」をもって居り、それが全体として未だ街頭的存在を清算していない我が同盟にとって「時に」危険であるからに外ならぬ。ことの真相がかくの如きものである時、うるわしい人情主義（！）から、中途半端のところで妥協したり、「腐敗した自由主義」（スターリン）によって「雅量を示して」放置しておいたりすることが正しい事だろうか。否、それの正しくないことは同志諸君が誰よりも知っている。諸君が何よりも銘記し

ていなければならないことは、若しも我々が種々な問題についての危険性を放置しておくならば、それは取りも直さず我が同盟を敗北的気分のなかに、警視庁の顎のままに動かせる去勢された組織に残して置くことを意味するものだということである。――この危険に対して、闘争せずに居られないことは明らかではないか。

（ロ）については、我々の組織を全体として経営に根をもつ労働者組織にすること、政治的闘争に密接に結びつくことによって文化主義の清算を敢行すること。（ここに組織的、創造的活動に於ける政治の優位性の問題が立っている）しかも、これらの問題が常に絶えず繰り返してきた如く、第一に全くそれ自身が困難な仕事であるということ、第二にはその困難につけこんで種々な歪曲と偏向が魔の手をのべるということ（例えば、林的見解がそれである）によって、問題の重要性を更に鋭く、させられているのである。右翼的偏向は、実に此の「躍進のための困難」にとって主要危険である。同志藤沢や黒島伝治が云っている「作家が窒息する」ということも、従って事の真相は彼等の理解していることとは正に反対に、それはこの困難を作家が克服することとなしには最早一歩も進むことが出来ないのにも拘らず、まだ我々が経営内サークルへの配属を充分に行っていないし、且つレーニン的理論の把握の不徹底、刻々の政治的課題に対する立ちおくれがあるからに外ならぬのである。ところが「作家の窒息」をボルシェヴィキ的批評の罪だとするところに、彼等が問題の本質をテン倒して受取っている誤謬が存在して居り、且つそのことのために、まんまと林房雄の術策に陥っているのである。

結語

さて私は結論に入らなければならぬ。

A、同志林房雄は「都新聞」の「何を云うか、山田清三郎よ」なる一文で、「ところで、喧嘩はこれからだ。これから一年間、見栄も外聞も忘れ、時と所をえらばずに、かれら一連のウルトラ共と、すっぱだかになって喧嘩をする」と宣言をしている。これでは、林と我々とがただ交互に何年間も云い合うだけで、問題はその終結を見出すことが不可能となるではないか。だが、我が作家同盟は、我々に背負わされている日常的活動を遂行して行く「闘争組織」であってそれは断じて無際限な「討論クラブ」に転化してはならない。これはレーニン、スターリンの教訓である。若しも我が同盟指導部が誰の眼にも明らかな原則的偏向に対して「腐敗した自由主義」的態度をとり、同志林をそのまま放任して置くならば、それは必然に我が同盟を、「討論クラブ」に転化させ、日常活動を妨害することは疑いを入れないのだ。私は本誌一月号で、右翼的偏向に対する闘争は分派とならない段階の限り「広汎な啓蒙的カンパーニヤとして捉まれなければならぬ」と述べた。それは然

し少しも無際限な「討論クラブ」となることを意味しはしない。それはただ右翼的偏向がその発生の一定の根拠をもっているが故に、且つその危険性の故に、ヨリ執拗な闘争が必要であるという以外の何等の理由もなかったのであった。

私は、かくて我が同盟の指導部が、同志林を無限に放置しておくのではなしに、一定の政治的処置、厳格な自己批判を要求することが不可欠に必要であると考える。

B、従って同志林から次のような点について、明確な自己批判が要求さるべきであろう。

(イ) 同志林の見解と我が同盟の原則的方針との間には深淵が横わって居り、彼の主張が我が党派性の武装解除、敵への屈服を意味するものであったということについての明確な計算書を出すこと。(ロ)同志林は自己の見解を明らかに反レーニン主義的なものと刻印し、公然かつ誠実にそれから分離することを誓うこと。(ハ)同志林が我々と歩調を一にし、且つ我々と共にありとあらゆる右翼的偏向に対して、自ら決定的に闘争することを要求すること。

C、更に我々は次の諸問題についても明確な態度を保持することが必要である。即ち我が同盟の右翼的(「左」翼的)偏向に対して、全然沈黙することによって、且つ泥濘的態度をとることによって、かかる偏向の助長に加担したものに対する仮借なき闘争を行うこと。

D、且つ、右翼的偏向に対する闘争に於いて、同志亀井、山田、藤森等の如く調停派的見地に立つことによって、右翼的偏向をその翼の下にかくし、且つ自己の右翼的容貌を大衆から巧みに陰覆した危険に対して、厳重な批判が必要であること。

E、更に創作理論のうちに「現実の芸術的反映」というが如き見地を引き入れた同志川口、組織理論、特にサークルの認識の問題で、文化主義的見地を固執する同志鹿地の諸理論がボルシェヴィキ的見地と明らかに背反するものであることを規定づけ、その観点の放棄に立ち向わせること。

F、最後に、右翼的偏向との闘争において「左」翼的逸脱=機械的誤謬に陥った同志中条の理論の危険を厳重に批判すること。

G、而して、全体として我が同盟のうちにややもすれば流れ易い敗北的気分に抗して、その克服のための思想的、組織的処置に進むこと。

私の考えるところによれば、我が作家同盟の指導部がこれらの諸点を即刻に、且つボルシェヴィキ的に解決することに立ち向うことをしなかったならば、それは我が同盟をして全く救うべからざる危地に陥し入れしめるものであるということが云われなければならない。さもなくば、我々が我々の前に課せられた新しい諸任務を遂行してゆくということは、全く他愛のない一片のナンセンスと化してしまうであろう。

(一九三三年三月「プロレタリア文化」)

編者註 文中「本誌」とあるのは雑誌「プロレタリア文学」のこと。

創作方法上の新転換

徳永直

一

この標題は、ここで与えられた紙数で書きうる内容にくらべては、すこし大袈裟かも知れない。それにも拘らず、たとえ五分の一でも、この標題に沿うて書くことが、当面重要のことと考えるのでそうした。それでまず具体的に今月の作品の批評から入ってゆこう。

ところで便宜上、ぼくは二つの作品「飯場で」松田解子(中央公論)「子」貴司山治(改造)だけをとりあげる。それはこの二つの作品を批評することによって、他のプロレタリア作品乃至はブルジョア作品にも関係を及ぼすだろうからである。

「飯場で」は、八月中のプロ作品において秀ぐれたものであろう。ここではA県地方における或る銅山の飯場で、実に悲惨な労働のなかで成長する一少女を中心として、飯場頭、その女房等々が描かれてある。銅山の労働のために、母を亡い、また父を亡い、孤児となった「おキヌ坊」なる子供が、あの搾取の中で、正直で健康な一労働者として出来上ってゆく性格を、美事に描き出している。この客観的現実は、だれが鶴嘴をぶちこもうとも、テコでもうごかない真実のものだ。この一労働者少女こそが、プロレタリアの未来を約束される基礎なのだ。この一作をみてもまことに松田君は詩人である。

ところで若し作者が、さらに視野を拡げ、あの飯場を、全銅山の一部として描いたならば、もっと立派なものになったであろう。銅山と村とのつながりをいくらか描こうとしているが、あの形式ではむしろ破綻を示しているようだ。しかし以上のことはぼくの希望であって、さらさら欠点だとは云わない。何故なら芸術作品は、それぞれ自らの「形式」で制約されているのだから。

ぼくがこの作品の欠点として強調したいのは、以上のことではなく、また何故旧時代を素材としたかでもなく、またさらにその年若な作者の技術不足からくる、全体的に見られるヨタつきや息切れでもない。肝じんのことは、あのヘンな、抽象的概念的な社会状勢の説明を無理にも押しこんだだろうか、ということだ。まるで「水と油」のような、折角の芝居がフイに楽屋ウラをのぞかされたような気がするではないか。さらに結末にちかく、「亀さん」とかいう人物による不自然な反抗的な言葉のラレツや、おキヌが急に階級的に自覚しようとするところだ。あれは嘘だ。

あれがああなるには、それだけの客観的現実がなくてはならぬ。恐らく「生活経験」を豊富にもつ、この作者はそれを知ってるであろう。それで「水と油」のようになった

のだ。
　ところで、こんな傾向は、プロレタリア作家の作品には殆んどある。突如として自覚し、自覚するや否や、もはや大衆とは縁のないような人間が威張りかえっている。同盟が折紙づけた作品にもフンダンにある。この作品では、客観的現実の反映がつよいので、この観念的異分子が、実に「水に油の如く」キマリわるい姿勢をしているけれど……。
　それが「子」貴司山治君の場合になるとキマリ悪いどころか、「油」で出来上っている。まず理論をだてて、それから「人間」をどっかから拾ってきたようなもンだ。客観的現実も糞もあるもンか、まったくヘーゲル流の「白馬に跨がる絶対精神」なのだ——。
　読んだ人にはすぐわかるごとく、モデルは最近故人となった作家Kであろう。成田と呼ばれているけれど、「転形期の人々」の作者は世界に一人しかないのだからだ。だがその詮議はどうでもよい。それであろうとなかろうと、芸術作品はそれ一個として独立するものだ。
　——闘士もまた子供を産んでよろしい。そして親子もろとも出陣すべきだ。前衛成田はまさに愛する母親を、個人的愛情から階級的愛情へまでたかめようとしていたぞ——というのが、この小説のテーマらしい。かかるテーマも非常によろしいであろう。現実にかかる立場にある前衛は沢山あるであろうし、被扶養者をかかえて、飛びたくも飛べないでいる勤労者大衆は何十万とあろうから。しかし困ったことには、プロレタリア作品は、作者の主観や理論では出来上らないのだ。
　この小説を読んだ心ある勤労者諸君は泣き出したかも知れない。——まるで個人的に金をつかい、時間をつかい、レポをつかう「成田」なる男は、とても「弁証法的唯物論」を世界観とする陣営の一員とは考えられない。ましてや、現在の情勢下にあって、本名で小説をかいて、これをブル出版屋に売り、それで母を養い、生活をたててゆこうという、その観念的幼稚さ——勤労者は毎日悧巧で抜け目のない大きな力をもっている資本家と闘っているのだ。自分のたのむ前衛が、まるでこんな観念的グループだと知ったなら泣かずにいられるか。成田の「親孝行」はブルジョア的愛情であり、三浦なる男の、子供のまえで——この子のためにも、恥しくない親になりたい——という覚悟なぞはまったく小ブル観念だ。労働者なら、恥しいとか、恥しくないとかより——このガキを、牛や馬に踏まれないまでにどうして育ててやろうか——という思案と覚悟がさきにたつであろう。松田解子君が（文化集団七月）に発表した「絆」は、この主題はじつによく描き出しているが、ここでは述べない——。
　しかしこの作品でぼくが追求したいのは、以上のテエマでなくて、その方法の問題だ。その主観的、観念的態度だ。この作品は、現在のプロレタリア作家がもつ、大きな癌の、その代表的なものだ。まずスローガンを持ちだし、

理論を考え、それからそれに適当するような（現実にはそんなものはあり得ないのだが）人間やきれっぱしを拾いあつめてくるやり方だ。これは偶々貴司君に代表的に現われただけで、小林多喜二を先頭として、全部の作家にあるのだ。そしてもちろん、かかる傾向は、指導方針なるものが生み出したところのものだ。

客観的現実とはおよそ縁の遠い、この「油」的やり方の、理論的破綻は、昨年問題をひき起した沢本鶴一の「軍需工場」で、まったく完全な形で現われたのだが、だれもそこまで突っこむことが出来なかった、指導部では「本年度の傑作」と折紙をつけたに対し、一部では、それは「まったくの愚作」だという異論が起り、「軍需工場」は出たり、ひっこんだりして、ついに、書き直しという名義で、出版は無期延期されたのだ。

ぼくも何も道楽で、かかる醜体を御披露しようというのではない。主観的、観念的にあやまられた、芸術創作方法上の毒虫を退治せんがため、その傷口を洗ったにすぎない。このままでゆけばプロレタリア文学は、根本から喰い荒らされ涸カッしてしまうであろう。「飯場で」のような、豊富な生活と現実の反映する作品にすら、まるで水に油のごとくぎごちない形で、穂を孕んだ稲穂におそいかかるウンカのように喰らいついているのだ。

しかも、もっとわるいことには、この毒虫は、「主題の積極性」という看板の裏側に巣喰ってやがるのだ!!

二

もちろん毒虫が巣喰ってるからとて、「看板」自体を逆うらみすることは当らない。主題の積極性ということは、観念的に、闘士を天から降らしたり、はては探偵小説的興味ででっちあげることでもなければ、またスローガンの絶叫でもありはしない。ここまでは明らかにされて居り、度度批評家などは口にする。しかし出てくる作品は依然として、ここから脱することが出来ないのが現在までの過程だ。何故か？　それは「唯物弁証法的創作方法」にあるのだ。

谷本清の名による蔵原惟人君の「芸術方法についての感想」で「弁証法的創作方法」が提唱されて以来、この軌道は誠に「整然」とつづいている。この軌道から逃れようとした作品は、決議によって「無残」にたたきつけられ、しつこく首を出す豚は、その檻からひきずり出された。立野の力作長篇「春」を先頭に、大小さまざまの犠牲作品をあげて、このいわゆる「ボリシェヴィキ」的方針(?)は、まことに鉄の如く保たれたのである！

そしていまや、優秀なプロレタリア作品は、地をハラうまでに、たもたれつづけようとしている。「芸術方法についての感想」は、二年以前と同じく、今日も「金科玉条的」なのである。今年蔵原は獄中から、くるしんだ作家の

質問手紙にこたえて――小説が益々書けなくなったとはお気の毒であるが、それは唯物弁証法的創作方法のせいではなくて、却ってそれをよく理解しない点にあるのだ――という意味（プロレタリア文学）を述べている。まことに批評家は幸福ではないか！

「唯物弁証法的創作方法」の理解のために、わが作家たちがいかなる努力を払ったか？　「部署」を発表して期待されていた長沢佑が、ついに第二のプランに手をつけることなしに死亡したことや、小林多喜二の「弁証法的創作方法の講義」失敗の話や、藤森成吉の「創作方法図解」や、さまざまの悲喜劇をこゝでならべたてることは、あまりいい気持ではないのだ。ここ数年の作家たちの艱苦はいかばかりであったか？

そしていまぼくらが到達したところからみれば、この創作方法の提唱が、如何に機械的であり観念的であったかがわかる。唯物弁証法とはプロレタリアの哲学であり、客観的真理なのだ。物の本でソラんじるべきものでなく、作家としては創作実践（政治的実践とスリかえてはならぬ）によって、それを身につけ大きくしてゆくものなのだ。しかもこの生きた哲学は、マルクス・エンゲルスによって固められたけれど、体系をもち得たのはレーニンにおいて始めてなのであり、この以後において益々成長してゆくところの、およそ形而上学とは反対のものなのだ。

主観的、観念論的毒虫の存在は、すでにこの創作方法の機械的提唱をした「芸術方法についての感想」のうちになくてはならぬ。谷本は自ら述べている。――階級的人間以外に「生きた人間」はあり得ない。此処で「生きた人間」を描いたといわれる過去の偉大な芸術家の作品を振りかえってみるならば、我々はそこに彼らがそれとはしらずに、「階級的人間」を描いていることを知るであろう。シェクスピアにしろ……モウパッサンにしろ、また西鶴、近松にしろ、実はその時代の階級的人間を描いていた。だから彼らの「人物」が「生きて」いるのだ。（同七〇頁傍点徳永）――すなわち弁証法論者でない彼らが、「階級的人間」を描くことが出来たのだ。イデオロギーがなくとも、階級的人間を描くことが、それがすぐれたリアリストであればあるほど可能だということを証拠だてているではないか。――勿論、思想がそれをたすけるということとは別にだ――。これが芸術の特殊性だ。科学と異なるところだ。

――バルザックは王党派だったにも拘らず、彼の創作はリアリズムであった。未来の真の人間を、革命的雰囲気のうちに見出した。作家の思想と、創作結果のこの喰いちがい……この事実は芸術の特殊性を無視することの出来ないことを証明している。（全露作家同盟第一回総会キルポチンの報告演説広島定吉訳）

ぼくの考えるところでは、創作することは客観的現実を正しく描き出すことが内容である以上、この実践は、作家が始めてプランをたてたり、書きあげたりしてゆくその過

程において彼自身も進歩してゆくことを示すものだ、この過程において作家は、弁証法的世界観を少しずつ身につけ、また豊富な実践によって大きくし、さらにこの哲学体系をたかめてゆくものと思うのだ。作家にとっての実践は、創作以外にあり得ない。そのためのさまざまの苦労や、実践はひっきょうするに創作作品としてしか現われてこないのだ。もし政治の優位性、という問題を間違えて、機械的に適用するならば、それは「作家を殺し」てしまうことになるであろう。――このことは芸術の特殊性、複雑性というものを忘れてそれが理論的に表明されたのが、「ラップ」の「唯物弁証法的創作方法」なのである。……作家の創作的方法は、イデオロギーから全体としての世界観から切り離されてはならない。この命題はまったく正しくて間違いはない。しかし次の点まですすんでくると――それ以上に創作方法は作家のイデオロギー的立場に、すべてを従属しなくてはならぬ――ということになると、これは芸術の単純化となり、俗悪化となる――(同上)

「芸術方法についての感想」においては、過去のブルジョアリアリスト作家が、「階級的人間」を描き出したことを明らかにしてるにも拘らず、何故そうであったか？　については、――彼らが現実をみる芸術的眼を持っていたからだ――という以上には、このことを説明することが出来なかったのだ。この抽象的解決は、プロレタリアリアリズムという一つの芸術的方法のスローガンの代りに、「唯物弁証法」という、あらゆる科学に適用されるところの哲学をもって、押し嵌める結果となったのである。――プロレタリアの真理をもって小説をつくれ！　――かかる命題は、どうひっくりかえしてみても、具体的な芸術方法としては、それ自体意味をなさぬではないか！

この誤られた芸術方法が提唱された当時、わが作家たちが、理論的にいかに低かったかということは、前記のさまざまの悲喜劇の続出によっても明らかであり、機械的に何らの批判もなさずに、あのスローガンのとっかえを、まさに一糸乱れず――に決議してしまったところにも現われているのだ。――芸術の特殊性、科学と芸術の区別――に対する蔵原のアヴエルバッハ的理解は、この前篇、後篇の長論文を貫くところの基礎となっている。唯物弁証法における根本法則「内容」と「形式」の交互関係――その「内容」の優位性は、芸術の場合においては自ら異ってくるのだ。芸術の場合は、形象ないし形式が、既に本質的であり、内容を規定してしまうのだ。具体的に、中野重治の作品「開墾」に対する、蔵原の機械的批評を検討しよう。

……ある批評家は、この作品の欠陥として「言葉のいたずら」と「低徊趣味」とを挙げている。それはたしかにそうだ。しかしそれは決してこの作品が失敗した基本的原因ではない。では基本的なものは何か？　私の考えるところではプロレタリア作品としてのこの作品の根本的欠陥は、農村の具体的分析の上に立っていないというところにある。

（「芸術方法についての感想」傍点徳永）

これにつづいて階級的分析が約四五頁にわたって述べられている。しかもこれらの分析が出来たならば、わが優秀な作家中野重治は、少なくとも（基本的）には失敗しなかったであろうか？　繰りかえしていう――批評家は何と幸福ではないか――。

……政治がいくら成熟しても、理論がいくら成熟しても、それ自身では芸術は創りだされない。芸術は特殊な上部構造だ。この上部構造の特殊性は、形象――芸術的なにある。芸術の形象的形式、これが本質的形式なのである。……何故ならこの「形式」が失くなるとともに芸術それ自身も失くなるのだ。批評家は屢々このことを忘れた。（キルポチンの報告演説）

ぼくはここで平凡な一つのエピソードを附け加えよう。作家中野重治は、ぼくの知人のある農民運動者から、小説の材料を貰った。そしてそれを如何に描くか、というよりはいかに描かねばならぬかについて、即ち階級的分析を、ぼくの書斎で三人で二タ晩も討議したのであった。それにも拘らず、三日たち一週間経っても、彼は一筆もはこべない。彼は率直に、ぼくにその苦しい心境を語ったのである。そこでぼくはこうすすめた。――なるべくその材料にちかいような農家をえらんで、半月でも一週間でもトまってきてはどうか……と。それで彼は農民運動者から紹介状を貰いそこへいったのだ。――とにかくにも出来上ったのが「村のあらまし」であった、もちろんその農家への寝泊りが全部でないにしろ、これなしには彼は筆をハコベなかったのだ。少なくとも彼は芸術家であり、観念論者ではないのだから……。

芸術は客観的現実の中から、作家の豊富な生活経験によって創りだされる。弁証法的世界観がいかに作家をたすけるとはいえ、基本的なのは前者だ。かかる事実を無視した批評は「芸術方法についての感想」の白洲において被告席にたたされた幾多の作品を、弁証法の機械的適用で、一束五厘の眼刺し鰯の如く、片っぱしから貫いてしまった。至極く夏向きで、いい気持になられたであろう。「愛情の問題」で一束、「偶然と必然の問題」で一束、「政治的立遅れ」で十把総からげだ。「赤い恋以上」も、「処女地」も、「蟹工船」も、「太陽のない街」も、あえない最期を遂げてしまったのだ。そして彼は涼しく口を拭う――実をいうと日本のプロレタリア芸術は遺憾ながらかつてその百花繚乱を誇ったことはないのであるから……（同上一一二頁）

作家は創作実践によってイデオロギー的にも進歩する。それ故にこそ、われわれは同伴者作家を問題にしうるのだ。キルポチンはいう。――芸術はその他の上部構造と密接な関係がある。たとえば芸術と政治との、それから芸術とイデオロギーとの依存関係は、同志アヴェルバッハが考えたように、しかく一直線でも、単純でもない、芸術の複雑性、そ

れをアヴェルバッハの如く単純化するときは、作家に対する官僚的支配へと、必然的に導いてゆく。単に思想的にしか指導を必要としない場合に、それ以上に作家を取締ることとなるのだ。——(同上、傍点徳永)

三

(一)において指摘したように、「飯場で」の場合は、「水と油」のようにキマリ悪く、「子」の場合では、まったく完全に、この主観的、観念的創作方法があらわれているのも、その他(徳永を含めて)殆んどすべてのプロレタリア作品が大小に拘らずこの害虫に冒されているのも、根本はこの「唯物弁証法的創作方法」という、指導方針のうちに存在するのだ。「主題の積極性」も、「政治優位性」も、このかたちで現われるかぎり、それはまったくの「非弁証法的唯物論」的なのであり、似て非なる政治主義であり、それこそ、「徹底的、文化主義」なのだ。

弁証法の「内容と形式」の法則を、芸術にもそのままおしはめて、蔵原は高らかに叫ぶのだ。——我々が前衛のこの「英雄的行動」というものを作品に描き出す場合に、それを現実の複雑な連繋性(日常の闘争や大衆との結合等々)から切り離して描き出したとするならば、それは結局一つの抽象を描くことになるので、それ自身としては現実性をもっていたものが、既に具体的現実性を喪失して、虚偽のものとなるのである。……貴司山治の「忍術武勇伝」や、久坂栄二郎の「山懸万歳」はそのよき例である。これらの作品がいずれもそのモデルにされた当人から忿懣を買ったのは決して偶然ではない——と。弁証法におけるごとく、芸術においても内容が形式をリードするものならば、罪はこれらの作者にあるのであろう。それは蔵原のいう如く、観念が現実までひきずらねばならなかったのだ。(雨は天へむかって降らねばならなかったのだ!)ところで、「客観的現実」はそう易々とうごかないのだ。「忍術武勇伝」の三田村四郎も、久坂の山本懸蔵も、これらの作者の観念にしか存在していないかぎり、つまりは忍術でドロンとなるか、早幕で辻褄を合せるかしなければならぬのだ。わが批評家の折角の御訓戒にも拘らず、貴司は、久坂は、やはりこの現実と辻褄の合わないものを描くよりないのだ。

——我々の前には××大衆化という××××××××××××これらの闘士の養成という政治的任務が課せられている——(同上八二頁)という気狂いじみた怒号を浴びせられたとて、はや何とも作家たちには手に負えぬのだ。もしこのことから機械的に推理して——プロレタリア作家は前衛となれ、プロレタリア作家は経済学者となれ、その他何々——という風に、作家の実践を、創作を政治にスリかえたりするならば、冗談じゃない、日本国土からプロレタリア作家は地をハラうであろう。作家個人が、ペンを棄ててプロレタリア政治家になるということは、あくまで個人と

してでしかない。作家として論ずる実践は、やはり作品としてだ。何故なら作家が、真に政治家となるなら、少なくともその期間だけは小説は出来ない筈だ。もし出来るならば、その政治家はホンの名のみの閑職であろう。だって小説書く頭と一緒くたに指導されるような団体なら、それこそ慨かわしい観念団体だろう。最も質の悪い街頭の文学サークルみたいなものだろう。ぼくの六七年の組合運動（合法時代）の経験では、小説書く頭と、ヒンパンな闘争指導とはてンで両立しなかった。ぼくは闘争を少しサボって短篇を一つ書いたら、幹部会議で「査問」され、詫状をとられたことがあった。論文は書けても小説は書けない。ここに科学と芸術の区別があり、文学と政治の限界があるのだ。

もちろんこのことを、作家が政治家になってはならぬという風に曲解してはならない。作家としての実践を政治とすりかえてはならぬというのだ。イデオロギー的立場を強要し、官僚的支配に作家たちをくくりつけるなら、作品は「ビラ」のようになり、作家は大衆からまったく孤立するであろう。科学と芸術は決して単なる「形式」の相違ではない。たとえば科学は、かりに経済的統計をつくるとしても、弁証法的世界観なしには、プロレタリア的な統計をつくることは不可能であるが、芸術はこの世界観なしにもプロレタリア的作品が可能なのだ。――小林の「蟹工船」、徳永の「太陽のない街」等々。ここに芸術の大衆性があるのだ。具体的にいって体系ある科学は十七八世紀以後において、ある階級が一定の世界観を確立したときに始めて可能となったが、芸術文学は人間社会に言語が始まったときから、可能だったではないか。

蔵原がこの論文において、最も主力をそそいだかに見える、科学と芸術の区別は、単にそれを形式の相違に帰した。――科学は人間の階級を、それらが現実に存在しているような多種多様直接的な形態において問題とするのではなくて、その具体的な本質の形態に於て問題としてゆくのであるが、芸術は現実に存在する直接的な形態のままで人間なり階級をとりあげ、そしてその直接性を失わない限りにおいて概括する。(同上、八二頁)これがこの長論文の基礎であることは明らかだ。彼はつづけていう。――ではこの芸術的概括と理論的概括との相違は何処にあるのであるか？　これが今我々の解決を迫られている理論的実践的問題である。ここでは唯一応の解決に止めて置かなければならない。(同上)

日本におけるプロレタリア文学が、ソヴェートの如く百花撩乱でなかったとはいえ、一把五厘の眼刺し鰯のごとくであるとはいえ、すでに世界的水準にまでたかまったところの幾多の作品をもっているのではないか。わが愚鈍なる作家どもは、唯物弁証法の根本法則を口先でソラんじる芸当は出来ないが、少なくとも創作実践の経験は持っているのだ。彼は何故かかる機械的結論をもって、これらの「経

験」を無視し、「弁証法的創作方法」の看板掛替えを迫ったであろうか?!

われわれは芸術における「弁証法的唯物論」には賛成である。しかし「弁証法的創作方法」というスローガンは間違ったスローガンである。それはその事態を単純化し、芸術的創作とイデオロギー上の企図との複雑な関係、作家と彼自身の…………………………………………用する法則へと化し去る。……作家は屢々彼自身の世界観の如何に拘らず芸術において正しい結論に達することが屢々ある。これを忘れる結果は作家へ対して、思想的指導とマルクス主義的批評からの援助を与えて、弁証法的唯物論への正しい道に就かせるだけでいい場合に、それを超えて、作家自身を強制的に取締ることになるのだ。……芸術の複雑性を単純化してはならぬ。芸術における形式は本質的方面なのだ。われわれが形式に最大の注意を払えと宣言するのは、芸術の内容を軽視するという意味でなく、豊富な本質的内容の、真の体現という意味からだ。(キルポチンの報告演説、同上)

すでに与えられた紙白を超過した。残念ながらぼくは結論をいそがねばならぬ。勿論この蔵原の論文は二年以前に書かれたものであり、当時ソヴェートにおいて、テイ立していた文学諸団体の最左翼「ラップ」の書記長で指導理論家アヴエルバッハの機械論が(ただしい文学的影響を大衆から切り離し、孤立せしめた彼の宗派主義的誤謬が批判され、彼は引責辞職したという)風靡していた頃であったから、その影響を避け難いものであったろう。さらにまたこれらの提唱、決議に対して実践的経験をもつ作家たちが、無批判に応じたこと(ぼくも含めて)批判さるべきであろう。しかしいまだにこの基礎理論(芸術方法についての感想)が、今日のプロレタリア的乃至は進歩的作家(作家同盟を含めて)の拠ってたつ所である限り、われわれはこれを批判しなければならぬ。

主観的、観念論的毒虫を退治せよ! 稲穂にむらがるウンカを掃滅せよ! そうしなければ、プロレタリア文学はついに根元から涸渇してしまうであろう! 機械論を駆逐せよ、たとえば今日、ソヴェートで唱えられている創作方法上のスローガン、「社会主義的リアリズムと〇〇ロマンチシズム」も、いきなり持ってきてはならぬ。これらのスローガンは、ソヴェートの社会情勢第二次五カ年計画を遂行しつつある、社会主義的社会の、大衆の現実に即したスローガンなのだ。日本とロシアとのこの差違、大衆の生活、客観的現実の相違——そして、特殊な上部構造たる文学芸術の自ら規定さるる限界——。これらがまずもって照応されなければならぬ。たとえば「〇〇ロマンチシズム」は、ロシアの労働者農民の現実的生活なのだ。それは単なる希望や理想でもなければ、単なる萌芽的現象でもないのだ。彼処におけるプロレタリアヒロイズムは、日常大衆生活の隅々までに、捲き起りつつある現実なのだ。

ぼくらは、プロレタリアリアリズムから出発しなおさなければならぬと考える。これは決して逆転の意味でも、「やりなおし」の意味でもない再び大地へ足を踏みつけるためなのだ。

最後にのべておきたいのは、この国際的な、「唯物弁証法的創作方法」の過誤が、単なる過誤であったか、或はその客観的意義がどういうところにあったかは、いまここで述べるで紙白をもたない。――ただぼくの経験からすれば、この創作方法の提唱以来、沢山の悲喜劇の一つとして、ぼくらは「弁証法研究」にこの一年半ばかりを没頭したこと、そして「唯物弁証法的創作方法」という言葉はそれ自体、ちっとも具体的でないことがわかっただけである。この間、親切な読者や、作家仲間から「弁証法の研究なんか止せ」としきりにすすめられたが、当時のぼくにはこれよりすすむ道がなかったのだ。その副産物として、ぼくらの研究会の成果として、専門家からみれば恥しいかも知れぬが、最近弁証法の本を出すつもりだ。「内容の豊富さと、形式の完成とに、調和的に結びついた思想の明確さ」――、今日もなお新らしい大衆の「生活に学んで」ゆかねばならぬ。無限に豊富な現実を正しく反映しえてこそ、主題の積極性も生きてくるのだ。白馬に跨ってはならない。――文学批評の官僚的支配を蹴って、のびのびと、自由に、ぼくらは大いに創作しようではないか。――(一九三三・七)

(一九三三年九月「中央公論」)

文学運動の新たなる段階のために

――宗派主義の清算と創造的任務の展開へ――

鹿地亘

今日の情態

恐らくすべての作家同盟員は文学運動の今日の情態について当惑を感じていると思う。そして多かれ少かれ運動方針のどこかに欠陥があるのではないかという疑惑を抱いている。疑惑を抱かないまでも、かりに方針が正しいとしても、同盟が今日の方向を持続する限り、自分はついて行けないという不安を抱いているものは非常に多い。しかも文学に経験を積み重ねて来た作家の間にこの動揺が最も強くあらわれている。

不安もしくは当惑の中心になっているものは次の二つの点であるらしい。

第一に、今日の方針が義務づけているところの政治的任務の実現は、作家にとって余りに大きな負担である。

第二に、今日の方針の下では、作家としての文学創作の要求を充分に満すことができない――

これらの不満は最近に於ける…………の改変に際しての不安と結びついて、漸時明瞭、大きな規模で運動方針の変更活動形態の改変を要求する声として現れ始めている。

ところで、情勢に応じての我々の活動形態の適応ということは、いうまでもなく考慮されねばならない問題である。それにもまして、新しい情勢への適応を機として、我我の方針の上に或る種の欠陥が明るみに出されるとするなら、方針そのものの充実、運動のより高い段階へのための自己批判は非常に大事な問題である。

ともかく、今日の文学運動の方針が多数の作家・文学者を糾合し得ていないのは誰も見逃し得ないことである。さまざまの理由はあるだろうが、少くとも、われわれが過去の運動方針を絶対化し、方針の現実に於ける「答え」を見る眼を曇らされない限り、或る種の行きつまり若しくは停滞の情態を見逃すわけに行かないだろう。

ところが、過去の運動方針を無批判的に……しようとする空気が全くなかったとは云い得ない。われわれの到達の成果をまもるという主観的な意図はよくわかるとしても、こうした態度がさまざまの合理化をうみ、強弁をつくり、作家を離散させ、結局情勢を一層困難に陥れていたという事実を全く否定することはできない。

その理論的な表現の一つとして、私は次のような宿命論が頭をもたげていた事実を指摘しよう。

これは同志宮本喜久雄が、文化集団九月号文芸時評の中で云っていることばだ。

「同盟作家の中で、レーニン主義の方向へ自からを置こうとつとめる少数の作家と、経営内から現れた新しいタイプをもった労働者作家と、一方自己の小ブルジョア的芸術方法の上に存在理由を見出そうとしている多数の作家たちとに、次第に分化しつつある形勢が明瞭になりつつある。芸術的方法についての闘争は必然に作家グループの分化を促すことは、各作家を規定している生活基礎の階級的条件が異っている以上必至のものである。作家同盟に組織されている作家の大多数が小ブルジョア層から出ている以上、この分化は文学に於けるレーニン主義のための闘争が進められると共に、その方向に身をおくことを嫌悪する作家がその小ブルジョア的面貌を明らかにしてゆく過程である。(傍点鹿地)」

この見解は単に同志宮本個人のものではない。コップ・作家同盟等の諸機関誌でも、これほど明瞭にではないまでも、類似の考え方は随所にある。

これはレーニン主義のための闘争とは全く反対の間違った考え方だ。

プロレタリア・ヘゲモニーの確立は、プロレタリア的な理論の指導的影響の下にプロレタリア的作家を益々前進させるのみならず小ブルジョア的傾向をもった作家までも、全体として、………、……させるところに意義がある。その反対に小ブルジョア的階級条件をもった作家をその条件

に宿命的にしばりつけ、……のないものとして固定化するなら、――そんなヘゲモニーは作家に指導力をもたぬ無能な指導の「ヘゲモニー」でしかない。

どんな結論がこうした考え方から引き出されるか。

日和見主義に対する闘争！

自己の指導的影響が及ばぬ範囲を一概に、日和見主義と規定しての右翼日和見主義の危険に対する闘争！

まさに、過去に於いて、われわれは全作家同盟の、或はそれに近い成員を日和見主義で片づけた例がないとは云えない。

勿論、「非常」に……の…………、それまで運動の中に陰蔽されていたさまざまの反プロレタリア的な、小ブルジョア的要因が公然と明るみに出されることは事実である。だから、日和見主義への闘争を…………していいと私はいうのではない。まさに反対だ！

だが、日和見主義への闘争、プロレタリア・ヘゲモニーのための闘争は、多くの「日和見主義者」をわれわれの陣営から…………かたちでやられるのでなくて、多少とも日和見主義の危険をもった作家を、かかる考えから…………し、正しい理論的・指導的影響の下に…………ためになされるのだ。

作家を全体として糾合し得ていない今日の運動の情態を、その弱点を、その失敗を、逆にプロレタリア・ヘゲモニー確立の必然の過程のように解釈し、合理づけることは全く見当はずれである。

事態をまじめに考えて見よう。

経営から労働者的作家がのろいテンポではあれ芽生えはじめたことは事実だ！ ところがそれが運動の指導的中核を形づくるなどとは思いも及ばない初歩の段階だ。より高い段階のための指導的任務をもつものは…………な方向をもつ…………作家・文学者であることは明らかだ。ところが、その大多数が上記のような動揺もしくは離散的傾向の中にあるということは、一概にこれらの大多数の「日和見主義」が悪いということばかりでは、常識的に見ても、おかしいだろう。情勢の困難さに脅かされ、曝露された小ブルジョア性にだけ責めを負わせてもことは片づかないだろう。

なるほど、客観的条件の困難さは急激に強められている。……に於ける……階級の文化に対する…………は、単にプロレタリア文化に対する……（その事実は列挙するまでもない）を……ているばかりでなく、ブルジョア文化の範囲に於いてさえ凡そ真面目な研究、思想生活の一切を……ようになっていることを今年になってからの幾つもの顕著な事実が物語っている。近い将来の…………のは更に…………の……がもはや真面目な文化・文学の成長を…………ところの全く……な……となったことを如実に物語っている。

だが、他方にこれらの情勢は広汎な…………層を文化の……、文化……に対する批判的態度に導き、その批判的な開眼から真実の…………的真理にまで……得る……性をつくり出している。

プロレタリア文化・文学運動に従事するものにとっても、一方に於ける不安と同時に、他方に……をもって、「文学」を……うとする決意を……させているはずである。資本主義の枠におさまり切れぬ豊かな文学の指標を高くかかげ、近づきかけている多数の………………作家を周囲に結集させて行き得る筈である。

このことは一応みとめられている。だから、言葉の上では少くともわれわれは急進化しつつある小………層との統一戦線活動を、その意義をしゃべりつづけて来た。だが、もしも、われわれが上記の如き宿命的階級観にとらわれている限り、統一戦線の可能性は頭から否定されているではないか。プロレタリア文学の働き手をさえも「しりごみ」させている「今日の困難性」は、「広汎な…………層」などに頭をあげさせるわけがないではないか。

なるほど、文学に於けるレーニン主義的方法の確立の過程は、それと小ブルジョア的方法との差違を益々明白にして行く過程である。だが、私はくり返していう——それは、プロレタリア的作家と小ブルジョア的…………………的作家とを遠く引き離して行く過程ではなくて、全体としての作家を小ブルジョア的方法から………、プロレタリア的方法の下に……して行く過程でなければならぬ。方法の正しさは、情勢の困難性をかくして……るはずである。

多かれ、少かれ、われわれの間にかかる宿命観によって、多数の作家を日和見主義者として徒らに鞭うつ危険がなかったとはいい得ない。それは、一概には方針に対する「ねずみの愛」をすべての作家に要求し、それに対する批判者を一概に「日和見主義者」として叩きつけ、かくして批判と討論とを殺し作家を無気力に陥れた「自己批判の不足」とも確かにつながっている。

私はこの点を先ず根本的に自己批判する。

はつらつさと自由の空気がないところに、運動の発展はない。

ところが、方針に対する無批判的態度が、それを殺して来ている。

指導部は益々声をはげまして同盟の無気力情態をひきたてるために叱咤しつづけ、指導部と結合している一小部分の……的な活動分子の全く………しいほどの………な……がそれにつづくにも拘らず、同盟の停滞はいささかも好転しない。これらの活動分子の活動にわれわれは不充分さを見出すことは出来ない。

だが、全体としての同盟員の無気力をも又いきなり責めることは誤っている。作家としての本質的な欲求が満されないときには、その欲求の障害物に対して抗議する。方針に対する「ねずみの愛」からその抗議が無惨に押しつぶされるなら、作家は意気を失うであろうし、又一部の作家は、非組織な方法で抗議を爆発させるだろう。かかる場合、作家の弱い一面が、日和見主義的に自己を主張しはじめたとしても、それは、これらの人々にばかり、責任を負

わされ得るものではない。日和見主義の結晶に契機を与えたものは、指導の弱点である。同志徳永直、林房雄等の非組織的な爆発的抗議はかかるものとして生まれている。

もしもこれらの同志の非組織的行動を、それがかく乱的行為に陥っていることを責めるなら（たとえば、同志大場文夫及び鹿地亘の場合のように）、それは方針を絶対的なものにすることによって方針に対する批判を容れ得ないような空気をつくり出した指導部にも大半の責任がある。

今日の情態を合理づけることなく見極める必要がある。同盟の運動が危機にさらされていることは事実である。同盟の諸組織網に活動力を流し込んで行く大動脈としての機関誌は、諸出版物は、同盟員の文学的発表機関であるこれらのものは、屢々………………危機に陥り、発行を停滞させている。同盟員の滞納は甚しい情態であり、発表機関の恢復のための作家の熱意は失われ、ことにその熱意をふるい起すべき旺盛な文学的創造物は生れず、同盟員は創作上の行きつまりを訴えている。文学サークルの組織は同盟員に義務づけられているにかかわらず非常に少くしか組織されていない、殊に文学的に最も高い東京ではサークルが皆無に近い。政治的な度々の……にもただ……の指令が叫ばれるだけの観を呈している。（中略）

文学に於ける政治的境界線

わたしはプロレタリア文学運動の当面の急務は、プロレタリアートの………方向に……された文学運動の……のために、政治と文学との明確な差別の上にたった諸矛盾の克服にあることを指摘した。

「政治」が「文学」を支配し、命令するときに、文学は狭隘な、そして性急な桎梏が加えられ、のびのびとした文学的創造が殺されると共に、多数の作家をその中に抱擁し得ぬ組織上のセクト性が生れることを指摘した。

この点について、われわれは更に詳細に、系統的に過去の諸実践を跡づけて見よう。

作家同盟は文学組織である。作家同盟がその組織に抱擁しなければならぬものは、プロレタリアートの……の……を……、資本主義に対する批判的見地にたつところの文学の創造を目的とする……プロレタリア的・作家である。

ここまでは従来ともはっきりしていたことである。

ところで、プロレタリアートの……の……を作家として、文学的実践に於いて再現するということは、必しも作家が世界観の上に、ひいては政治的見解の中に、明確なプロレタリア的立ち場をもっている場合に限らない。或る場合、社会民主主義の政治的立ち場を支持する作家の中にさえも、文学的実践においてはその立ち場に反して現実の本質を、今日の時代の本質的内容を文学的に再現することが可能であり得る。

たとえば、暫く以前における葉山嘉樹、岩藤雪夫、平林

たい子等の場合がそれである。これらの作家はプロレタリア作家ではなかっただろうか？　否！
「海に生きる人々」、「鉄」、「施療室にて」――これらの作品が、日本に於けるプロレタリア文学の偉大な収穫の中に地位を占めることを否定するものは、誰もないだろう。これらの文学は、或る場合にこれらの作家が社会民主主義者によって、プロレタリアートへの反対的立ち場に利用されたとしても、少くともプロレタリア文学に大きなプラスを加えてきたことは否定し得ないことだ。

　これらの作家を我々が糾合し得なかったという事実は、一面には社会民主主義者の、かかる作家への政治的陥穽があったとしても、他方に我々自身の組織の中に、政治的見解の相違せる作家を抱擁し得ぬ宗派的弱点があったことは見逃せぬことである。

　この宗派主義の危険は、政治的組織ではないところの、より正確に云えば、非政党的組織としての文学組織に、一定の政治的立ち場が暗黙のうちに要求されていたことから生れている。

　即ち、「…の……」がそのまま、組織の成員の文学的行動の基準とされたり、「プロレタリア……への反対的見解」を抱いた場合に簡単に組織外に追われたりすることが、当然のこととして容認されていたことに現れている。

　かかる宗派性の克服なしには、これらの有力な作家を全体としてプロレタリアートの側に引き寄せ、高めて行くことは夢にひとしい。文学運動に一定の政治的境界線が設けられている従来の習慣が、その理論的根拠が根本的に曝かれ、打破されねばならない。

　勿論、わたしはこの問題を論ずるに当って一つの警告を先ず忘れないだろう。それは昨今の…………に際しての空気の中で、それを避けるために、作家同盟を政治的中立の団体とするという意見(例えば、人物評論十一月に於ける同志亀井のように)のあることだ。政治的中立とは今の場合、我々にとって、いずれの政党をも支持しないという、「超階級的立ち場」を表明することである。いかなる場合にも中立という立ち場は…………、ということは階級関係に関する原則上の問題に属する。繰り返し言うようにわれわれの…………の文学組織である。
われわれは………反動的な「超階級的立ち場」を（十一字削除）。

　しかし我々は作家・文学者である。文学者・作家の文学的活動の組織になぜ一定の政治的立ち場を与える必要があるか。なぜ政治的立ち場を表明しなければならないか。
「文学」という共通の目的が政治的立ち場を越えて、すべての作家を結合し、プロレタリアートの目的に統一し、導かれねばならぬときに、なぜ、「一定の政治的立ち場」が作家に境界を、敷かねばならぬか！

　この点を明らかにして問題を進めよう。

　プロレタリア文学団体にあっては、プロレタリア文学の

創造とその方法の検討という共通の目的が作家を結合する力でなければならない。それは自明の理である。ところが、一連の歴史的事実は我々の前に全く別様に示されている。日本において、文学運動の上に「政治の課題」が支配しはじめたのは実に、文学運動が政治的組織と関係を結び始めた当初からであった。

一九二七年の前半に日本に於ける最初のプロレタリア芸術団体である日本プロレタリア芸術連盟は分裂を惹起している。それは連盟内の一分派が当時の第一次無産者新聞の援助と指導とを受けるに至って、福本主義の精神にもとづく「全無産階級的政治……」の……なる政治的任務を芸術運動の中にもち込んだからであり、そして、芸術の任務としていわゆる政治………のための「政治的曝露」なるものを持ち込んだからである。

文学が……主義の政治的……をやっているかどうか、資本主義機構の………がうまく説明されているかどうか、それがなければプロレタリア文学でない、こういう批評の方法が作家に労働組合や労農党の宣伝小説を、売薬業者の病気予防宣伝劇にしか見られないおそまつな宣伝劇を製作させる傾向を助長した。同志久板栄二郎等に代表される当時の芸術作品を思い出して見るがよい。かかる「政治的曝露」と「全階級的政治闘争の……」なる任務とを押しつけられる結果、良心をもった芸術家は遂にプロ芸を抛棄して別個に後に「労農派(山川均一派)」に足場を与えたところの労農芸術家連盟を組織せざるを得なかった。

芸術運動がプロレタリアートの全体的機構の部分として結ばれたこの最初の段階において、芸術家たちは真実に「プロレタリアートの芸術家」になることを嫌悪してプロ芸を去ったのではない。彼等は芸術をまもる良心をもっていたのである。もちろんプロ芸にとどまった芸術家たちが誤ったのでもない。彼等は、階級に対する……ある……を……抜いたのだ。にも拘らず、文学をプロレタリアートの基本的に統一する過程に於ける機械主義が芸術団体の統一を破壊したのだ。

このことは一九二八年初頭の出来ごとを見ると一層明瞭である。プロレタリアートの………とその…………。これは…………であった。階級闘争に関心をもつすべてのものが……………、それとも対立的な………主義の立ち場をとるかを自己の問題として討論した。芸術運動にもそれが反映しておる。労農芸術家連盟内の労農派(山川均一派)的傾向のグループと、プロレタリアートの………するグループとが対立を生じ分裂を生んでおる。前衛芸術家同盟が生れておる。これらの芸術家は基本的な……を………ながらも過去に於ける福本主義的精神には服し得なかった人々である。そして福本主義の清算は前衛芸術家同盟と日本プロレタリア芸術連盟とを接近させ、両者を合併して全日本無産者芸術連盟(ナップ)を結成せしめておる。勿論、プロレタリア芸術の展開という一

つ目的が、単一的な芸術組織ナップを結集したことに疑いはないが、その過程に、依然として、政治的境界線が、おかれていたことは否定し得ない。だから、「政治的立ち場」が一つの芸術家グループを分裂させ、「政治的立ち場」が二つもしくはいくつかの芸術家グループを結合したかの観を呈せしめた。

われわれは当時に於ける前衛芸術家同盟員であった古い同志から（例えば同志山田清三郎）から次のような言葉をきくことが出来るだろう。

「われわれはプロ芸の芸術家とよりも労芸の芸術家との方が芸術創作の立ち場を同じくしていた。だが政治的見解の相違から、われわれは同じ立ち場をとるプロ芸術と合体した。」

労農芸術家連盟は社会民主主義的影響を強くもった芸術家団として残された。そしてわれわれのすべての者の記憶に新しいように、この団体は今日までの間に三回の分裂を惹起しておる。この分裂の事実は社会民主主義の影響下の団体の場合にも政治的任務への文学の機械的従属が、云いかえれば、「政治」による「文学」への支配と強制とが芸術団体をその政治的立ち場によって分裂させていることを示している。

同志黒島伝治、小島昂等の一団が労農芸術家連盟を脱してナップに合体した理由は、これらの同志が…………………………を表明し、他の一団がそれに反対を表明したことが契機となったものであった。

同志細田民樹、細田源吾等の一団が労芸を脱退してナップに加った理由も、実に…………の……如何についての政治的見解の相違だからである。

労芸の最後の分裂は、青野季吉、金子洋文、青木某等の全く腐敗しきった社会ファシズム文学者が労芸を大衆党の全き御用宣伝機関にしようとして作家に政治的任務を強制したところから生じたものだった。それに甘んじない、芸術家的な一団である葉山嘉樹、前田河広一郎等が脱退して作家クラブを結成した。一握りの社会ファシストの文学団体は「レフト」として残された。

黒島伝治、細田民樹等の同志が……い政治的立ち場をとったということを私は……するのではない。それどころか、次第に社会ファシズムの政治的強制が文学創造に窮屈な桎梏を加え、社会ファシスト的立ち場による「文学の腐敗」を生み始めたときに、彼等が無意識のうちにもそれに対する反撥を、「政治的立ち場」の問題として爆発させたことは根本的に……かった。

だが、問題は、これらの事実の中にも、明らかに、作家をその政治的見解にしたがって、四分五裂せしめる危険が、一貫していること、社会ファシズムの文学の撃破も又、正しいプロレタリア文学の下に作家の結集を固めるために、具体的に「文学」の上に展開されねばならなかったことを私は強調するのだ。（一九三三年一二月国際書院刊）

ナルプ解体の聲明

ナルプ第三回拡大中央委員会は、本同盟――ナルプ（日本プロレタリア作家同盟）の解体を決定した。解体の理由は左の如くである。

一、今日、日本のプロレタリア文学運動は、帝国主義的危機にともなう支配階級の極度の反動化と、プロレタリアートの政治的勢力の一時的衰退との相対的関係の中で、未曽有の困難な条件の下に置かれている。特に最近に於ける治安維持法の改悪の意図は、前者の最も露骨な表示であり、近時急激に強められて来た支配階級の、階級闘争への惨虐な攻撃の合法化の意図である。プロレタリアートの政治的勢力は今日、これをはね返し得る情態からは遙かに距っている。

このような情態の下にあっては、階級のイデオロギー的文化の形成の事業は、合法的には著しい制肘の下に置かれている。しかも今日、全般的に我々のプロレタリア作家は、現在の活動形態のままではかかる情勢に対応し、支配階級の攻撃に対抗して自己の活動の途を拓き得ない情態にある。

それは次の如き事実によって明らかである。

我が同盟の絶対的多数の作家は現在の組織を事実上放棄し、合法圏内に於ける必要な活動の自主的な展開に向っている。云いかえるならば、我が同盟の活動的作家たちは、現在の情勢下に於ける旧来の活動形態に対して、機関誌の発行の擁護、同盟費の納入、組織活動遂行等の一切の義務を放棄することによって、絶対多数を以ってそれへの不信を表明しつつあり、指導部への不満に対しても組織的方法による指導部の批判乃至改選への意志を放棄することによって、事実上同盟組織を形骸にとどめている情態である。明白にこれはわが作家たちの一時的敗退である。何人もプロレタリアートの力の全般的昂揚なしには、この作家の敗退を食いとめ得ない如く、現在の指導部も今日の情勢に於いては、この敗北を克服し得る現実的基礎を有しない。それは指導部の個々のメンバーの無能に帰せらるべきものでは断じてない。何となれば原因がそこにあるならば組織成員は力をあげて指導部を改造し得ることは自明だからである。現実に成員の絶対多数はそのことに無関心を粧い、別のところに力を注ぎつつある、即ち、作家の根本的欲求としての創作活動を、全く合法舞台に於ける展開に集中しつつあることである。

この事実は確認されねばならぬ。このことによって我々は、今日の情勢下に於ける活動の合法的可能と限界と、ならびに必要とを一層はっきり見極めなければならぬ。

政治的文学的組織の成員であることは脅かされながらも、プロレタリア作家としての具体的な文学的活動はある程度の制約の下にではあれ、今日なお保証されている。か

かる合法的可能は最大限に我々のものとされねばならぬ。殊に一方に於いて我々の文学がまだ何程の大衆をも捉えていないのみならず、他方に於いて作家たちの絶対多数が合法圏内に於ける活動の意志と力とをのみ示し得る情勢の時に、断じてそれは放棄されてはならぬ。最大の慎重さを以てそれは我々のものとされねばならぬ。

これらの客観的、並びに主観的条件の許るところなき確認の上にのみ、今日の困難な情態に処する我々の文学運動の合理的解決がある。

二、既に述べた如く、情勢に敏感な少からぬ我が同盟の成員は、同盟を脱退し、正式に脱退しないまでも同盟の活動を放棄しているのは、決定的多数に上っている。これらのうち全くプロレタリア文学を放棄した若干の例外は別として、殆んど全てのものは、自己の活動し得る限界もしくは可能な方法に於いて、プロレタリア文学のために活動しつつある。否我が同盟の成員たることに依って、近時その活動に不安を以って臨んでいた時期よりは、一層その活動力を増している場合すら皆無ではない。

今日まで、ナルプはかかる事情に対して如何に臨んだか。

ナルプを始め、コップ参加の諸文化団体は一様に、これを文化運動内に発生した敗北主義的傾向としてのみ批判した。我々は今日の情勢と、その中に於ける我々の力の実際とを正当に評価しつつ、そこから正しく作家の活動の方法を指示し得なかった。

明らかに、これらの事態は、今日の力関係に於ける我々の一時的敗北である。だが、ある力関係の下では我々の一時的後退は又止むを得ないことである。もしも力の関係を顧慮することなく方針が樹立されるならば、そこから予想され得るものは大多数の成員の離反と悲惨な敗北である。

上記の如くこの兆候は今日顕著である。しかもなお、我々は情勢と力とを顧慮しての一進一退と、いわゆる敗北主義の誤りとをはっきり差別しなければならぬ。

敗北主義について云うならば、まさに我々の内部に、今日の困難な情勢から惹起された敗北的風潮（プロレタリア文学の発展の基本内方向を歪曲する理論ならびに創作的実践の方向、組織活動に関する放棄論、等）が明白に観取される。これらのものとは闘争しなければならぬ。

だが、同盟が、現実にその絶対多数の成員によって抱かれている不安を取り除き、今日の主観的ならびに客観的情勢に処する合理的解決を与えなかったところに、これらの成員が同盟からの離反を敗北的見地に立って合理化しなければならぬ条件が与えられたこと、即ち同盟の政策的無力が敗北主義的潮流をあふった事実を見逃してはならぬ。

ともあれ、かかる理論上実践上の混乱をともないながらも、作家がその主観的条件に応じつつ、自己の文学的活動を本能的に拓いて行った方法の中にはその事実に、明らかに、我々の今日に於ける活動の方法の暗示されているもの

がある。
発表機関を中心とする自主的な、合法的な、創作的研究的諸グループの形成がそれである。我々がもし、政策を現実の文学運動の実際に依拠しつつ建てるならば、今日、形骸のみに近い組織の維持を計るよりも、かかる文学的活動の実体を基礎としつつ合理的解決に向わねばならぬ。

三、情勢に敏感な我々の適応的解決は時期を遅らせたとはいえ、まだ時期を失ったわけではない。だが、時期を失うならば（治安維持法の改悪実施と共に、それとの正面からの衝突が惹起した場合に予想される悲惨な敗北）、事態は甚しい困乱に陥るだろう。

我々は現情の正確なる認識によって、この困乱をまぬがれねばならぬ。現在までの同盟の困乱から惹起されたところの、文学運動の方向そのものを溺らせ勝ちである理論上の混迷をはっきりさせ、整然と、一致的な、新しい活動形態への移行が遂行されねばならぬ。

この点については、先ず我々は最近に於ける文学理論、創作方法上の達成点を明らかにする必要がある。

正しく今日の社会的真実を、階級社会と階級闘争との真実を描き出す「社会主義的リアリズム」の方法を、我々の作家の実践上の指針とすること、その実践を通じて作家の世界観を高め、到来する困難な情勢下に於ける真の階級的な、文学活動家を養成すること。従来我々の間に残されていた卑俗な政治上の功利性を要求する誤りを排して、正しく文学自体の政治的評価がなされねばならぬと共に、他方に於いて従来の欠陥への反撥から今日一般に見られつつある階級のイデオロギー的文化としての革命的方向の抹殺の危険を示しつつある観照主義の傾向を克服すること。作品の中から作家の世界観一般をのみ抽象することを以って、文学の正しい客観的評価に置きかえるが如き誤りを完全に克服し、広汎な作家たちの作品が客観的現実を正しく又、如何に表現しているかを検討する事が、それの階級的功利性と一致するが如き批判方法を現実に取らねばならない。そのことによってのみ、我々の文学ならびに現代の広汎な文学が指導され得ることを実践によって示さねばならぬ。そのために、我々の社会主義リアリズムに関する理論を、具体的に普及し徹底せしめることは急務であろう。

つづいて組織上の問題に関する現在の混迷がただされねばならぬ。

組織問題の理解に当っては、我々は次の事を見忘れてはならない。

二年以前、我が同盟が企業農村を基礎とする大衆的組織化の方向をとって以来、夥しい文学的活動家の輩出と、同盟の全国的な、組織的発展とがもたらされた。これは文学サークルを基礎としての組織方針の具体化の成果であることは疑う余地がない。

しかし文学サークルの問題は、必ずしもその提起に於いて、又その後に於ける政策的実践的な諸解決に於いては、

常に文学運動を組織するという正しい見地から、一貫して問題が立てられていなかった。「政党」・労働組合の拡大強化という見地から、即ち補助組織を組織するという見地から問題が建てられ勝ちであったが故に、文学団体としての組織的活動に各種の障害が胚胎した。政党・労働組合が拡大しないという責任が文学団体に問われるように逸脱した見解が支配した。

今その障害の顕著なるものを挙げるならば、第一に文学団体の成員に政党・労働組合オルグの任務を負わせる傾向のために、作家本来の創造的任務がおろそかにされる危険が一般に生じ、又文学団体の成員に文学的活動をしないものがサークル・オルグの資格で流入する危険を、随って文学団体としての質の低下、組織内に、文学的諸活動の誤れる評価を生じ勝ちな傾向を屢々生み出した。(所謂、卑俗なる政治的功利性の文学への要求等もこのことと無関係ではない)。

勿論、組織の労働者化、新しい労働者的働き手の養成の必要から、作家同盟の成員たる資格を労働者には低くする必要はあるが、このことも、彼が文学者たらんとし、文学的才能を以って活動しつつある場合の水準について云い得るものである。作家・理論家としての業績を持たぬものを、文学運動の必要以外の理由から、殊に労働者ではなく一般に街頭分子の間からさえも流入せしめる危険があったことは、明らかに組織理論の混迷の具体的現れである。

だが、他方に於いてこれらの欠陥から、文学運動の組織活動一般への疑惑、もしくは否定の見解が全体的に支配しつつある事実は警戒されねばならぬ。明らかに、我々の文学の影響を組織的に大衆の中に流し入れ、その教育的影響によって新しい文学的活動家を誘発し組織することは、必要であり、不可欠である。しかも、この影響が確保された文学サークルの組織は客観的には政党・労働組合等の政治的組織的影響が伸びてゆく労働者の補助的な結合体であることは自明である。

ただ、我々は、次のことを明らかにしておかねばならぬ。文学運動の大衆的基礎としての文学サークルは、文学のすぐれたる創造とその影響の流入なしには考えられないということである。随って作家の創造的任務の犠牲を以ってしてはサークル自体の発展が不可能である。なによりもすぐれたる文学の創造と出版物の影響の拡大とが必要である。

のみならず、組織活動の具体化に当っても我々は今日の主観的・客観的情態を離れては如何な実践的なる方針をも樹立し得ない。今日、あらゆる労働者的な組織(サークルをもふくめて)が敵の攻撃からは保証されていない情態の下では、我々の作家が自己の合法的創作活動の保証のために、組織活動を回避することも一般には止むを得ない。しかも、創作活動の保証は逆に、サークル発展のためにも又不可欠なのである。このような事情の下で、作家とサーク

ルとの組織的結合を我々が一般に強制するということは、困難というより妥当でさえない。

かかる事情の下では、特に我々はサークル組織に於いて、サークルの経営農村に於ける自主的組織としての機能をはっきりさせ、その自発的結成と発展とを俟つ外はない。自発的結成をたすけるために、指導は主として経営農村の日常的闘争組織の手に、その補助組織としての組織事業に委ね、作家とサークルとの直結的結合を一般的には弱める外はない。文学運動としては、あくまで本来の、すぐれた文学的創造に勢力を集中しなければならぬ。

プロレタリア文学の創造、その運動の組織に関して、基本的方向をゆがめる所の修正的見解は打破されねばならぬ。しかし方針の樹立は、情勢ならびに力関係をよそにしては無意義に終るであろう。殆んどその実践にたえるものを持たない方針をそのままに固執することは全き誤りである。

四、では、今日の条件下に於ける我々の活動の具体的形態はどうでなければならぬか。一言で言うならば、作家の創造的活動を最大に保証し、具体化し得る可能な形式がそれである。

我々は次のことを見通し得る。過去の政策に於ける機械的な極左的欠陥（敵の攻撃に口実を与えるところの）の克服を以ってしても、従来の形式はもはや今日作家をつなぎとめ得ない。既に見たように我々の組織を改造する前にそれを放棄している現情である。して見ればかかる組織の維持は意味をもたぬ。従来の組織を基礎において、新しい活動形態を考慮することは、それ故に適当な方法ではない。今日、我々の作家達が自主的にではあれ移っている所の実質的な活動形態こそ、新しい文学運動の形成のよりどころとなるものである。

しかも我々は充分次のことを見なければならぬ。階級闘争が一般に合法性を保証されていない場合は、敵の攻撃の分散をはかるために分散的形式に散開することを妥当とする。だが、我々のところでは、かかる意味に於ける分散的活動そのものが今日の情態では維持し難い情態である。なぜかなら、事実絶対多数の同盟成員は、かかる対抗的形式に移ることを欲せず、合法的圏内に於ける作家としての活動に全体的に移行しているからである。その根拠をはっきり見る必要がある。我々は今日作家として社会的真実を描き、すぐれたる文学を創造する限り、制約はあれ、なお自由を保証されている。既に述べたように、この可能は放棄されてはならぬ。のみならず我々の作家の今日の力の評価を誤らないならば、事実上形骸にとどまるところの政治的文学的組織としての作家同盟の維持、もしくはそれを基礎とする対抗的な分散的形式を維持することは無意義である。

合法的な、発表機関を中心とする文学者団（直接の政治的任務から解放されたところの）の形式、しかも、それは、自生的に今日生長しつつあり、現存しているところのもの

を、正しく成長せしめること、ならびに地方に於いては同じく合法的文学雑誌の発行を中心として、従来の同盟組織の成員を実体とするところの、地方文学グループを形成すること、このことこそ唯一の合理的解決である。
かかる見通しの下に、我々は光輝ある歴史をもつ日本プロレタリア作家同盟の解体を宣言する。このことはプロレタリア文学の放棄を意味するものではなく、今日の情勢に適応しない形式をやめて、プロレタリア文学のより高き発展に最も合理的な解決の途を拓くことである。自己の可能と限界との正確な認識の上に、今日最も妥当なる形式——合法的発表機関を中心とする創作グループとしての活動にうつれ、このことこそ、新たなる情勢に於ける、更に前進的な文学運動の再組織に基礎を与えるものである。
理論上・創作上の方向について云うならば、今日ほど我我は、豊かなる文学的成果を約束されている時期はない。社会主義的レアリズムの方法の導きの下に、すぐれたるプロレタリア文学の創造、社会主義的競争を開始せよ。かかる実質的活動に於いて、諸グループは相互の高き文学的成長のために協力せよ。
(尚残務整理のため、当分整理委員会の事務所を次の所におく。東京市杉並区高円寺町五ノ八五七米谷吉太郎方)
モルプ支部
一九三四年二月二十二日　日本プロレタリア作家同盟
第三回拡大中央委員会

III

詩・短歌・俳句

生ける銃架

——満洲駐屯軍兵卒に——

槇村浩

高粱の畠を分けて銃架の影はきょうも続いて行く
銃架よ、お前はおれの心臓に異様な戦慄を与える——血
　のような夕日を浴びてお前が黙々と進むとき
お前の影は人間の形を失い、お前の姿は背嚢に隠れ
お前は思想を持たぬただ一個の生ける銃架だ
きのうもきょうもおれは進んで行く銃架を見た
列の先頭に立つ日章旗、揚々として肥馬に跨る将軍たち
　色蒼ざめ疲れ果てた兵士の群——
おおこの集団が姿を現わすところ、中国と日本の圧制者
　が手を握り、犠牲の鮮血は二十二省の土を染めた
(だが経験は中国の民衆を教えた！)
見よ、愚劣な軍旗に対して拳を振る子供らを、顔をそむ
けて罵る女たちを、無言のまま反抗の視線を列に灼き
つける男たちを！
　列はいま奉天の城門をくぐる
——聞け、資本家と利権屋の一隊のあげる歓呼の声を、
　軍隊の吹奏する勝利の曲を！
やつら、資本家と将軍は確かに勝った！——だがおれた
ち、どん底に喘ぐ労働者農民にとってそれが何の勝利
であろう
おれたちの唇は歓呼の声を叫ぶにはあまりに干乾びてい
る
おれたちの胸は凱歌を挙げるには苦し過ぎる
やつらが勝とうと負けようと、中国と日本の兄弟の上に
　弾圧の鞭は層一層高く鳴り
暴虐の軛は更に烈しく喰い入るのだ！

おれは思い出す、銃剣の冷く光る夜の街に
　反戦の伝単を貼り廻して行った労働者を
招牌の蔭に身を潜め
軒下を忍び塀を攀じ
大胆に敵の目を掠めてその男は作業を続けた
彼が最後の一枚に取り掛った時
歩哨の鋭い叫びが彼の耳を衝いた
彼は大急ぎでビラを貼り
素早く横手の小路に身を躍らせた
その時彼は背後に迫る靴音を聞き
ゆくてに燦めく銃剣を見た
彼は地上に倒れ、次々に突き刺される銃剱の下に、潮の
退くように全身から脱けて行く力を感じ

おとろえた眼を歩哨の掲げた燈に投げ
裂き捨てられ泥に吸われた伝単を見詰め
手をかすかに挙げ、唇を顫わし
失われゆく感覚と懸命に闘いながら、死に至るまで守り
　通した党の名をとぎれとぎれに呼んだ
……中、国、共、産、党、万……

——秋。奉天の街上で銃架はひとりの同志を奪い去った。しかし次の日の暮れ方、おれは帰りゆく労働者のすべての拳の中に握りしめられたビラの端を見た、電柱の前に、倉庫の横に、風にはためく伝単を見た、同志よ安んぜよ、君が死を以て貼り付けたビラの跡はまだ生々しい
残された同志はその上へ次々に伝単を貼り廻すであろう

白樺と赤楊の重なり合う森の茂みに銃架の影はきょうも
　続いて行く
お前の歴史は流血に彩られて来た
かつて亀戸の森に隅田の岸に、また朝鮮に台湾に満州に
お前は同志の咽を突き胸を破り
堆い死屍の上を血に酔い疲れて突き進んだ
生ける銃架。おう家を離れて野に結ぶ眠りの裡に、風は
　故郷のたよりをお前に伝えないのか
愛するお前の父、お前の母、お前の妻、お前の子、そして多くのお前の兄妹たちが、土地を逐われ職場を拒まれ、飢えにやつれ、歯を喰い縛り、拳を握って、遠く北の空に投げる憎しみの眼は、かすかにもお前の夢には通わぬのか
裂き捨てられる立禁の札。馘首に対する大衆抗議。全市を揺がすゼネストの叫び。雪崩れを打つ反戦のデモ。吹きまく弾圧の嵐の中に生命を賭して闘うお前たちおれたちの前衛、ああ日本共産党！

——それもお前の眼には映らぬのか！
生ける銃架。お前が目的を知らず理由を問わず
お前と同じ他の国の生ける銃架を射殺し
お前が死を以て衛らねばならぬ前衛の胸に、お前の銃剣
　を突き刺す時
背後にひびく万国資本家の哄笑がお前の耳を打たないのか

突如鉛色の地平に鈍い音響が搾裂する
砂は崩れ、影は歪み、銃架は血を噴いて地上に倒れる
今ひとりの「忠良な臣民」が、ここに愚劣な生涯を終えた
だがおれは期待する、他の多くのお前の仲間は、やがて
　銃を後に狙い、剣を後に構え
自らの解放に正しい途を
　撰び、生ける銃架たる事を止めるであろう

起て満州の農民労働者
お前の怒りを蒙古の嵐に錬え、鞍山の溶鉱炉に溶かし込め！
おう迫りくる×の怒濤！
遠くアムールの岸を嚙む波の響きは、興安嶺を越え、松花江を渡り、哈爾賓の寺院を揺すり、間島の村々に伝わり、あまねく遼寧の公司を揺るがし、日本駐屯軍の陣営に迫る
おう、国境を越えて腕を結び×の防塞を築くその日はいつ。

間島パルチザンの歌

思い出はおれを故郷へ運ぶ
白頭の嶺を越え、落葉松の林を越え
蘆の根の黒く凍る沼のかなた
赫ちゃけた地肌に黝ずんだ小舎の続くところ
高麗雉子が谷に啼く咸鏡の村よ

雪溶けの小径を踏んで
チゲを負い、枯葉を集めに
姉と登った裏山の楢林よ
山番に追われて石ころ道を駆け下りるふたりの肩に
背負繩はいかにきびしく食い入ったか
ひびわれたふたりの足に
吹く風はいかに血ごりを凍らせたか

雲は南にちぎれ
熱風は田のくろに流れる
山から山に雨乞いに行く村びとの中に
父のかついだ鍬先を凝視めながら
眼暈のする空き腹をこらえて
姉と手をつないで越えて行った
あの長い坂路よ

えぞ柳の煙る書堂の蔭に
胸を病み、都から帰って来たわかものの話は
少年のおれたちにどんなに楽しかったか
わかものは熱するとすぐ咳をした
はげしく咳き入りながら
彼はツアールの暗いロシアを語った
クレムリンに燻ぶった爆弾と
ネヴァ河の霧に流れた血のしぶきと
雪を踏んでシベリアに行く囚人の群と
そして十月の朝早く
津浪のやうに街に雪崩れた民衆のどよめきを
ツアールの黒鷲が引き裂かれ
モスコーの空高く鎌と槌の赤旗が翻ったその日のことを

話し止んで口笛を吹く彼の横顔には痛々しい紅潮が流れ
血が襦衣の袖を真赤に染めた
崔先生と呼ばれたそのわかものは
あのすさまじいどよめきが朝鮮を揺るがした春も見ずに
灰色の雪空に希望を投げて故郷の書堂に逝った
だが、自由の国の国ロシアの話は
いかに深いあこがれと共に、おれの胸に沁み入ったか
おれは北の空に響く素晴らしい建設の轍の音を聞き
故国を持たぬおれたちの暗い植民地の生活を思った

おお
蔑すまれ、不具にまで傷つけられた民族の誇りと
声なき無数の苦悩を載せる故国の土地！
そのお前の土を
飢えたお前の子らが
苦い屈辱と怨恨をこめて噛み下すとき——
お前の暖い胸から無理強いにもぎ取られたお前の子らが
うなだれ、押し黙って国境を越えて行くとき——
お前の土のどん底から
二千万の民衆を揺り動かす憤激の熔岩を思え！

おお三月一日
民族の血潮が胸を搏つおれたちのどのひとりが
無限の憎悪を一瞬にたたきつけたおれたちのどのひとり
が
一九一九年三月一日を忘れようぞ！
その日
「大韓独立万歳！」の声は全土をゆるがし
踏み躙られた日章旗に代えて
母国の旗は家々の戸ごとに翻った
胸に迫る熱い泪をもっておれはその日を思い出す！
反抗のどよめきは故郷の村にまで伝わり
自由の歌は咸鏡の嶺々に谺した
おお、山から山、谷から谷へ溢れ出た虐げられたものら
　の無数の列よ！
先頭に旗をかざして進む若者と
胸いっぱいに万歳をはるかの屋根に呼び交わす老人と
眼に泪を浮べて古い民謡の謡をうたう女らと
草の根を噛りながら、腹の底からの嬉しさに歓呼の声を
　振りしぼる少年たち！
赭土の崩れる峠の上で
声を涸らして父母と姉弟が叫びながら、こみ上げてくる
　熱いものに我知らず流した泪を
おれは決して忘れない！

おお、おれたちの自由の歓びはあまりにも短かかった！
夕暮おれは地平の涯に
煙を揚げて突き進んでくる黒い塊を見た

悪魔のやうに炬火を投げ、村々を焔の波に浸しながら、
　喊声をあげて突貫する日本騎馬隊を！
だが焼け崩れる部落の家々も
丘から丘に搾裂する銃弾の音も、おれたちにとって何で
　あろう
おれたちは咸鏡の男と女
搾取者への反抗に歴史を綴ったこの故郷の名にかけて
全韓に狼煙を揚げたいくたびかの蜂起に血を滴らせたこ
　の故郷の土にかけて
首うなだれ、おめおめと陣地を敵に渡せようか

旗を捲き　地に伏す者は誰だ？
部署を捨て、敵の鉄蹄に故郷を委せようとするのはどい
　つだ？
よし、焔がおれたちを包もうと
よし、銃剣を構えた騎馬隊が野獣のようにおれたちに襲
　い掛かろうと
おれたちは高く頭を挙げ
昂然と胸を張って
怒濤のように嶺をゆるがす万歳を叫ぼう！
おれたちが陣地を棄てず、おれたちの歓声が響くところ
「暴圧の雲光を覆う」朝鮮の片隅に
おれたちの故郷は生き
おれたちの民族の血は脈々と搏つ！

おれたちは咸鏡の男と女！
おう血の三月――その日を限りとして
父母と姉におれは永久に訣れた
砲弾に崩れた砂の中に見失った三人の姿を
白衣を血に染めて野に倒れた村びとの間に
紅松へ逆さに掛った屍の間に
銃剣と騎馬隊に隠れながら
夜も昼もおれは探し歩いた

あわれな故国よ！
お前の上に立ちさまよう屍臭はあまりにも傷々しい
銃剣に蜂の巣のように突き刺され、生きながら火中に投
　げ込まれた男たち！
強姦され、肉を剥られ、臓腑まで引きずり出された女た
　ち！
石ころを手にしたまま絞め殺された老人ら！
小さい手に母国の旗を握りしめて俯伏した子供たち！
おお君ら、先がけて解放の戦さに斃れた一万五千の同志
　らの
棺にも蔵められず、腐屍を兀鷹の餌食に曝す軀の上を
荒れすさんだ村々の上を
茫々たる杉松の密林に身を潜める火田民の上を
北鮮の曠野に萌える野の草の薫りを籠めて

吹け！　春風よ！
夜中　山はぼうぼうと燃え
火田を囲む群落の上を、烏は群れを乱して散った
朝
おれは夜明けの空に
渦を描いて北に飛ぶ鶴を見た
ツルチュクの林を分け
鬱蒼たる樹海を越えて
国境へ――
火のように紅い雲の波を貫いて、真直ぐに飛んで行くもの！
その故国に帰る白い列に
おれ、十二の少年の胸は躍った。
熱し、咳き込みながら崔先生の語った自由の国へ
春風に翼を搏たせ
歓びの声をはるかに揚げて
いま楽しい旅をゆくもの！
おれは頬を火照し
手をあげて鶴に応えた
その十三年前の感激をおれは今なまなましく想い出す
氷塊が河床に砕ける早春の豆満江を渡り
国境を越えてはや十三年
苦しい闘争と試練の時期を

おれは長白の平で過ごした
気まぐれな「時」はおれをロシアから隔て
厳しい生活の鎖は間島におれを繋いだ
だが、かつてロシアを見ず
生れてロシアの土を踏まなかったことを、おれは決して
　悔いない
いまおれの棲むは第二のロシア
民族の牆を撤したソヴェート！
聞け！　銃を手に
深夜結氷を越えた海蘭の河瀬の音に
密林に夜襲の声を谺した汪清の樹々のひとつひとつに
血ぬられた苦難と建設の譚を！
凪よ、憤懣の響きを籠めて白頭から雪崩れてこい！
濤よ、激憤の沫きを揚げて豆満江に迸れ！
おお、日章旗を翻す強盗ども！
父母と姉と同志の血を地に灑ぎ
故国からおれを追い
いま剣をかざして間島に迫る日本の兵匪！
おお、お前らの前におれたちがまた屈従せねばならぬと
　言うのか
太て太てしい強盗どもを待遇する途をおれたちが知らぬ
　というのか

春は音を立てて河瀬に流れ
風は木犀の香を伝えてくる
露を帯びた芝草に車座になり
おれたちはいま送られた素晴らしいビラを読み上げる
それは国境を越えて解放のために闘う同志の声
轢鉄を前に、悠然と階級の赤旗を掲げるプロレタリアートの叫び
「在満日本革命兵士委員会」の檄!

ビラをポケットに
おれたちはまた銃を取って忍んで行こう
雪溶けのせせらぎはおれたちの進軍を伝え
見覚えのある合歓の林は喜んでおれたちを迎えるだろう
やつら! 蒼ざめた執政の蔭に
購われた歓声を挙げるなら挙げるがいい
疲れ切った号外売りに
嘘っぱちの勝利を告げるなら告げさせろ
おれたちは不死身だ!
おれたちは、いくたびか敗けはした
銃剣と馬蹄はおれたちを蹴散らしもした
だが
密林に潜んだ十人は百人となって現われなんだか!
十里退却したおれたちは、今度は二十里の前進をせなんだか!

「生くる日の限り解放のために身を献げ
赤旗のもとに喜んで死のう!」
「東方解放軍」の軍旗に唇を触れ、宣誓したあの言葉を
おれが忘れようか
おれたちは間島のパルチザン。身をもってソヴェートを
護る鉄の腕。生死を赤旗と共にする決死隊
いま長白の嶺を越えて
革命の進軍歌を全世界に響かせる
——海を隔ててわれら腕結びゆく
——いざ戦わんいざ、奮い立ていざ
——ああインターナショナルわれらがもの……

上野壮夫

スパルタクスの道を
——カール・リープクネヒト——

この日
血にまみれたベルリンの市街は十三度目の春を迎える
裏切者エーベルト、シャイデマンの傭兵どもが
眼には灰を、口には泥を、胸には銃弾をうち込んだその日
奴らの装甲自動車が

その屍さえもドイツ・プロレタリアートから永久にぬす
　み去ったその日
――十三度目のその日を！
にくしみは積み重ねられる、築いては砕かれ再び×くバ
　リケードの上に……
ヒットラーが『カール・リープクネヒト館』(註)に
銃弾の雨を降らしたとて、何の不思議があろう！
ベルリンの労働者はその日からこのことを見ているの
　だ。

おお、カールよ、おれたち青年の指標！
世界のプロレタリアートはめぐり来るこの日と共に闘争
　に湧きたつ。
おれ、極東日本の労働者は
十三年の月日を無駄には生きて来なかった――
子供の胸に憎めと教えられた平和の敵ドイツ帝国の軍隊
　――それが
工場主、貴族、銀行家どものために
東部と西部と青島と南洋に追いやられた労働者と貧農で
　あることを
残された女房と娘はひときれのパンのために×められ
戦争に戦いを宣したきみには――ただ死があたえられた
　ということを
どうして俺の眼からおおいかくすことができようぞ！

カールよ
きみが×をもってあがなった青年の道を、おれも生きて
　行こうとするのだ
鋼鉄をもて武装された意志、スパルタクスの道を！

ああ、この日満蒙の原野にしろじろと雪は凍る。
彼処、日本帝国主義の最後のとりで
ソヴェート同盟への××の前線
ひき裂ける砲弾の中に立ちあがりうち×れたものよ
それが一九一七年ではなかったとしても
どうしてヴェルダンの要塞に枕を並べた労働者の運命で
　はないだろうか
ああ、いま日本全土をおそう嵐はするどい刺をはらんで
　いる――×餓と失業の一九三二年
雄々しく旗を進めるものの前には高い鉄の扉が待ち構え
　ているのだ
そして……
一九一九年一月十五日――その日が
ここに
おれたち日本全産業の労働者のまえに
囚われの××の上に黒い翼となっておおいひろがって来
　るのだ、――裏切者赤松、大山らの歓呼のうちに！
ああ、大陸を吹く風は零下二十五度、水はおろか機関銃
　の油槽さえも凍りつく

だが、三百万の兄弟には石で砕く凍った握り飯さえもな
　いのだ
カールよ、無数のカールよ、おれたちの犠牲者よ
今日、おれたちは工場から工場へ、職場から職場へ行こ
う
きみの×を指さして叫ぼう
戦争の張本人ヒンデンブルグが、社会民主主義者シャイ
　デマンの護衛のうちに酔いしれている時
おれたちの指導者は森林の中に、屍となってうち捨てら
　れたということを
この仕打ちを耐え忍ぶことができるか、と彼等は声を合
　せて応えるだろう
どうして耐え忍ぶことができるものか！　と。
その時、きみは蘇りきみのいのちは輝く、きみは数百万
　となって起ち上るのだ
おお、誰が云うのか、リープクネヒトは死んだと
誰がうなだれるのか、カールはいないと
彼が数百万となって叫ぶ時に――
青春が闘争にうずまき、スパルタクスの魂がお前の胸に
　波うっているなら
カールの声は、仲間よ、お前の耳をうつのだ、共産青年
　インターナショナルの旗を進めろ！　と
飢餓と牢獄との××のために
解放と建設のためにスパルタクスの道を死守しろ、と。
カールよ、
その日のために、この日をおれ達は記念するだろう、決
　意と確信とをもって戦争と××の時代を！
ソヴェートのまもりと戦争反対の戦いのために！
（註。カール・リープクネヒト館はドイツ共産党本部）

蕗のとうを摘む子供等

――東北の兄弟を救え――

長沢　佑

三月の午後
雪解けの土堤っ原で
子供らが蕗のとうを摘んでいる
やせこけたくびすじ
血の気のない頬の色
　ざるの中を覗き込んで
　淋しそうに微笑んだ少女の横顔のいたいたしさ
おお　飢えと寒さの中に
今も凶作地の子供等は

熱心に蕗のとうを摘んでいる

子供等よ！
お前らの兄んちゃんは
何をして××に縛られたのか
何の為に満州へ送られて行ったのか
姉さん達はどうして都会から帰って来たのか
お前らは知ってるね
何十年の間、お前らの父ちゃんから税金を捲き上げていた××は
お前らの生活を保証してくれたか？
おまんまのかわりに
苦がい蕗のとうを喰うお前らの胸にも
今は強い××が燃えている

天災だと云って
しらを切ったのはど奴だ！
『困るのは小作だけでない』
そう云った代議士（地主）の言葉にウソがなかったか
子供等よ！　いつ地主の子供が
お前等と一緒に蕗のとうを摘みに行ったか
いつ、地主のお膳に
ぬか団子が転っていたか
修身講話が次から次へとウソになって現れて来たいま

おお　お前等のあたまも『学校』から離れる

北風の吹く夕暮れ
母親は馬カゴのもち草を
河っぷちで洗ってる
子供らはざるを抱えて家路へ急ぐ
背中の児は空腹を訴えて泣き
背負った子供は寒さに震える
だが、見るがよい
水洟をたらした男の児等の面がまえを！
児を背負った少女の瞳を！
おお、凶作地の子供等よ！
その顔に現れた反抗と憎悪をもって
兄んちゃんのような強つい人間に成れ！
苦がい蕗のとうのざるをほうり出して
父やんから×金を捲きあげた奴等に向って
あったかい米のご飯を要求するんだ！

別れ

木原豹

俺らの戦いは敗れた
おお　俺らの戦いは充分に敗れた
そして俺ら十二人はショッ曳かれて行く
吹雪する夜の峠
夜空一ッぱいに吹きまくる粉雪の峠を

村に舞い落ちる粉雪は悲しんでいた
森でゴウと泣き
サラサラ　サラサラ　俺らの肩に溜息した
サラサラ　サラサラ　サラサラ……と
無数のその溜息のなかで
俺らは抱きあった
俺らの女房ときょうだいと仲間と餓鬼と
俺らの肩はつめたかった
そして俺らは知っていた
これが何カ月か何カ年かの別れであろうことを
俺らは何からシャベッてよいのか

そこで俺らは無言で抱きあった
俺らの白いイキが混りあい相手の首すじに凍った
そして俺らは知っていた
俺らのイノチを賭けた戦いは充分に敗れたことを
俺らは闇のなかで聴いていた
村の衆のさげた提燈に粉雪がシボシボと散りかかる音を
しずかに黒い人群のなかでスリ泣きの声が起るのを
俺らはしっかと抱きあいながら聴いていた
奴らのはい剣が俺らの周囲で無遠慮に鳴るのを
奴らの長靴が俺らの餓鬼を黙らせるのを
俺らは大きな恥らいとこみあげる怒りとをもってそれら
　を聴いていた
そして奴らの白い手套の手が
邪険に俺らの結びあった肩をひき×いた
俺らはふるえる手を伸べた
そして粉雪が提燈の灯にチラチラした
俺らはかんじた
親しい者たちと再び抱きあえないことを
俺らはかんじた
両の手首に鉄の手×がピンと凍てつくのを
俺らは突きのめされた
俺らはグイと振りかえり何か吸鳴ろうとした
だが　そこで　何の言葉があったろうか！
（俺らの戦いは敗れた

おお　俺らの戦いは充分に敗れた）
俺らは珠数ツナギにつながれて峠を登って行った
俺らは雪に埋もる足もとを見ていた
あの日
赤い頬ぺたをした餓鬼らの
元気な行商隊が越えたこの峠
あの夜
『組合』の応援隊の雪沓が踏み越えたこの峠
そして　いま　俺らは誰もが聴いていた
つながれて行く俺らの傍で奴らがわめき罵るのを
俺らの女房や親父や餓鬼が、××××で追っぱらわれる
のを
村の衆の提燈が雪のうえに叩き落されるのを
俺らの二月余の戦いを×み××った長靴がいま××らの
　見送り人を××らすのを
そして俺らの行途には警察と赤煉瓦の監獄とがあった
××な裁判所とのしかかる×力とがあった
俺らは峠を越え汽車に乗り縄につながれてそのなかに行
　くのだ
おお　息子を奪われた父親よ
亭主を持って行かれる女房よ
娘ッ子よ　餓鬼よ
これが幾月の別れか　幾年の別れか！

そしてショッ曳かれて行く俺ら十二人は知っていた
小作人に明日からのメシがないことを
ランプに一滴の油さえ切れていることを
そして長いながい冬が来ていることを
部落から娘ッ子が売られて行くだろう
若い衆と餓鬼が出稼ぎに流れ出すだろう
そして幾つかの家族が風呂敷一ッで村を追われるだろう
（俺らの戦いは充分に敗れた
おお　俺らの戦いは充分に敗れた
俺らのまえに何人の『縄ツキ』がこの峠を越えたか
そして　いま　最後の十二人がショッ曳かれて行く
吹雪する夜の峠を
夜空一ッぱいに吹きまくる粉雪の峠を）
そして　そこは岐れみちだ
そこには雪に頭をさらした標示杭が市街地と村への距離
　を示している
俺ら十二人は立ち止った
俺らの眼と無数の親しい眼とが一瞬間粉雪のなかでカラ
　ミあった
それら無数の眼は濡れて燃えていた
青い雪あかりのなかに俺らは見た
悲しみでも恥らいでもない
ただ憤怒のたぎる青い炎を

根強い　貧農の魂を
ああ　たとえ俺ら十二人の行途に石の壁があろうとも
たとえ村に千日の冬が来ようとも
俺らすべてのまえには××だけがある！
いまはただ　燃えたぎる怒を鍛え
歌って歌って　おお　歌って別れよう
俺らの近い××のために
その日の存分な×××ろの戦いのために
俺らの親しいあの歌を
俺らの胸先を搏つあの歌を

この恥らいの奥底から
この悲しみのドン底から
この敗北のさなかから
奴らの心の臓にまで
奴らの骨のズイにまで
焼け鉄の杭のように
おお　すべての×どもの脳天にまで
声をあわせわれらの歌うたをぶち込もう

そこは破れみちだ
粉雪のなかを百のうた声の合唱が
森を抜け谷を越え村に流れる．
おお別れの百のうた声の合唱が

日織のオルグへ

松　原　信

あなたは青ざめ
あなたの駒下駄はチビている

八・一のちょっとまえから二十七日
暑い盛りをブタ箱で過して出て来た時
顔色はもっと青ざめていたが
プリントやニュースや新聞に就いて
良く判るように話し聞かせてくれる時
あなたは母親のような
やわらかい眼をする
封建的な搾取にあえいでいるメリヤス工と徒弟に
あなたの言葉のそのままを
ぼくはどうしたら伝えることが出来るだろう
ぼくはあなたに子供があるかどうかを知らない
夫があるかを知らない
ぼくはあなたの家族のことを知らない

あなたは日織のオルグ
ぼくは十二円の月給の中から
あなたの交通費の幾何かを負担しよう
あなたは未組織労働者に呼びかける

俺は
あなたの言葉を兄弟に伝えることを
封建的な徒弟制度の中から
手工業的な小工場の中から
俺たちの闘争をモリあげることを誓う

時計

田村武

ターバン、シーマ
おまえは茶色の革で俺の左の手首に巻かれている
ターバン、シーマ
俺は退職手当の大部をおまえに充てた
おまえは透明な、かそかな音を続ける
おまえは俺の生活をきざもうと
その音を絶やさない
ターバン、シーマ
おまえは一昼夜の汽車の中でも廻りつづけるだろう
おまえは兵営のラッパの音にもおじけないだろう
俺は入営する
俺は軍服をつけた俺たちの仲間が
一コ連隊もいる新しい重要な職場にはいる
俺は銃の手入れをしながら
俺の隣に寝る者に
×は誰であるかを教えなければならない
ターバン、シーマ
おまえの正確さで俺の生活をきざめ
おまえの持つ弾力で俺を鞭うて。

鉄骨の上にて

佐川光二郎

ダッダッダッダッダッダッ
真赤に焼けた鋲
鋲打機を青銅色の腕にカッチリと抱えて
俺は懸命に打込み、打込む

体はふるえる――振動と闘争の心に
夜業だ　針は八時を廻り九時に近づく
冬の月を背に黒々と立つ鉄骨の上だ
冷たい風の中で僅かの割増の強制夜業だ

ダッダッダッ………

東京へ俺は鉄材と共に来た――模範工見学の名の下に
だが何が模範工見学だ！
夜業に次ぐ夜業ではないか　体の蕊まで搾り
更に凡てを麻痺させようと云うのだ
畜生！（爆音の中で工場の同志を想い浮べる――）

ダッダッダッ………

ヒューと夜風を鋭く切って鋲は
俺達の血管のように赤く赤く線を走らせて飛んで来る
打込めば鋲はめり込み基礎は固まる
　来るべき日　或は此の屋上は、窓は、彼奴等の砦にな
るかも知れない
だが、然し、或は俺達のバリケードになるかも知れな
い
そうだ、その時のために一揺（ぴく）ともしないように築くの
だ！
さあ　ガッチリと熔接だ
兄弟へ、投れ鋲を、真赤に真赤に焼いて！

紺の胴体
――妹に――

後藤郁子

青バスが疾走（はし）る
幾台も
幾台もはしり過ぎる
さっ、さっ、とプラタナス鳴る十月の街を――
（ごらん姉さん
　あの彼女らは生き生きしてる　元気で働らくならわ
たしも……
　　お茶の眼は燃えた、うつくしく
　お前は絵を描きたがった
　でも――それは駄目になった
貧乏！それは圧力をもって
ひしがれた生活を社会の全面に押しだす
おお、今日
資本主義の下で悩んでいる私ら。
（青バスは初給もいいし、服も支給される、永くはやれ

ない烈しいというけれど私は健康だもの
おっ母さんは案じる
（いち時はよかろうがね
女は子供を生むんだし）
だが知ってるじゃないか！
プロレタリアの女の、情けなさを——
骨の髄まで沁みこんでる、
ぎりぎりたぎる憎しみは——
起ち上る力だ。
辛らいのはみんなだ。
　リュウマチスで臥んでるのは照ちゃんだけじゃあない
　メンスでも服務して貧血勝ちのひと達　賃金だって
　男に比べれば——
そして　私は知っている
去年の春同情罷業で検束された仲間を
みんなで奪いかえした姉妹！
「ダラ幹引っ込め！」と
メーデーのデモの中から叫んだ反対派！
　屈せぬ闘志は獄中の同志に通い・
　私らは誓う
　熱望の
　その日を！

ごらんよ妹よ
目まぐるしいゴー・ストップ
「市内の霧」ほこりの中を　ガードの下をカーブする
紺の胴体をがっちり締めて
同じ帽子に
同じ服
あの階級的元気
青バス七百の姉妹！
　「団結の
　　力はわれらの　武器だ」
根づよい歌を響かせて………。

役所の中から——

今泉　純

『お役所勤めは楽なもんさ——』
それは奴等——高等官連中のいうこと！
俺達給仕はお役所の仮面のもとにこき使われ、走り廻さ
れる

毎年冬になるのを待ちかねた様に、もっともらしい出張
　の名義をつけて
スキーをやりにゆく奴等！

そして俺達はクタクタになった手にペンを握って
莫大な金額の、何枚もの
旅費請求書を書かされる
その金額は
俺達の血と汗がこり固まって出来たもの！

税金のために
――娘を売らねばならなかったキキンの東北の農民達
――カザイ道具にベタベタ札を貼られた工場労働者達
奴等の官費の遊山旅行のために

憎しみと憤りで
ハジケ豆の様にハレツしそうな俺達の胸ん中！
そいつをおさえ　おさえて
同志を集め
一日も早く
下からの盛り上る力で
奴等と堂々と闘うことの出来る日を待つ

遠地輝武

新しい習慣を組織しよう

――未組織の印刷工場で――

街はずれのバラック工場――
穢ない貧民窟につづいて
おれ達の印刷工場がある
おれらの楽しみは　第一に
そこで額を汗だくにすること
小リスのように
敏捷に手を動かし
植字、文選、植えかえ、クワタわけ！
――冬は過ぎ
工場は春がやって来る
暖かい陽の光は
陽気なよいどれ気分で工場をとりかこい
眠い！
だが、おれ達の工場には「季節の関係」なく
冬の日――
冬の寒さをしぼられたように

欠伸とすげかえの馘切りにおびえ乍ら
春は春の労働をしぼられておれ達はちぢこまる
おお　ちぢこまる　ちぢこまるおれら
鉛の粉にむせ
犯されて行く胸の苦痛を知っていても
ただ一つの衛生設備さえ要求してないおれら
ふてくされの女のように
おれ達は一人一人で不平をつぶやくけれども
それをまとめみんなの要求とはしていないのだ！
これあ全く悪い癖だ！

おお　これあ全く悪い癖だ！
こんな習慣をおれ達は清算しよう
なあ　みんな
印刷部のものはベルトを止めて来い！
紙型屋は叩くブラシをほり投げて来い！
みんなで集まって職場の不平を沸騰し
要求をまとめて工場主(おやじ)の胸板へ——
デモだ！　そしておれ達の生活の基礎を
コンクリの固さでこの工場の中に
——そうとも、斯うしておれ達は悪い習慣を清算し
これからの新しい習慣を組織しよう

高い窓

西沢隆二

俺は高い窓の上にいる
今は大晦日なので
留置場の中も大掃除
俺は蜘蛛の巣を払うことを仰せつかって
これ、この通り窓の上

眼の前には太平洋がひろがっている
港の出口をプレジデント・マッキンレー号が汽笛を鳴ら
　しながら滑って行く
おお青い空
青い海
さんさんと降る光りの中を
煙突の黄色い小蒸汽が煙りを細く、長く
波頭に漂わせながら走って行く

「降りろ！　降りろ」と看守が怒鳴る
降りりゃまた鉄格子の中

海の仲間よ、しっかりやれ！
メンマストのてっぺんで何も知らずに手を振っている仲
　間よ
港の奥深く
ドックの三本煙突が見えるだろう
俺はあの工場で働いていたのだ
全工場、十三職場に漲る、戦いの気運
俺は思い出す七十五日前
俺たち九人の同志が
逮捕されて工場を去る時
見送る仲間の火のような熱い眼差
プロレタリアの堅い決意の交歓

俺は洞窟の中で暮して来た
胸には戦いの火が燃え上った
雨の夜、風の吹く夜
波はどうどうと飛沫を上げて四壁をゆすぶる
俺は苔の生えた岩根のように
おもおもしい焔を抱いて耐え忍んだ

「降りろ！　降りねえと引ずり降すぞ！」
看守が下から喚いている
俺は鉄格子を握りしめ
光りの中に顔を晒す

おお、たえ間なく打寄せる
太平洋の怒濤よ！

五月一日に

山田清三郎

正午近く——
室外運動に出ると
雨あがりの窓には、青い雲切れが覗き
まだ光に乾き切らぬ湿った風の中を高い新芽の匂いが
どこからともなく流れていた。

一九三一年五月一日——
きょうはメーデー
おお、この日の偉大なるデモンストレーションは——
いま、
空をどよもす雄叫びの怒濤と
轟く示威者の跫音と
火と燃え、血と湧き立つ真×な戦いの旗風と共に
東京に
大阪に、神戸に、京都に、

そして
全国至るところの都市と、工場街の中に始まり
捲き起されていることであろう

此処は獄内——
高いコンクリートの障壁によって
一人ごとに厳重に隔てられ
眼を遮ぎられた
深い蓋なしのボックスのような運動場の底から
眼下された監視台の番卒の眼に抗して
鳴り渡り
こだまし返す
おお、きょうの『被告』たちの、何という下駄の歯音の
　響きの高さ勇しさ！
私は知る——
『獄内』メーデーの××が既に始まっているということ。
『聞け、万国の労働者
轟き渡るメーデーの
示威者に起る足取りと
未来を告ぐる鬨の声……』
一周三十歩に足りぬ狭い運動場の中を
高い壁の塀をめぐって

地も窪み、
下駄も割れよとばかり
踏みしめ、踏み鳴らして行く『被告』——われわれのた
　くましい足音！
誰からともなく起る合図の懸声と共に
期せずして整い、一致する秩序ある歩調も
『囚われ』の身の暗さを知らぬ雄々しくもまた晴々とし
　た行進の律動！
壁を越えて
お互に意識し、共感し合う赤い心臓の脈膊と
（恐らくは——そして勿論私も）輝く眼を上げ
高々と胸を張りつつ行く、鋼鉄の意志をもつもののみに
見る英雄的な足取り！

おお、
かくて、
日本の
そして世界の労働者階級の、
幾百——幾千万の大衆と共に
この日を誓い
この日を歓び
プロレタリアートのゆるぎなき×利の確信のもとに
さらに誓いと決意を新にするところの獄内メーデーの×
×の波は刻々に高まって行く。

今夜おれはお前の寝息を聞いてやる

中野重治

今夜おれはお前の寝息を聞いてやる
おれはお前の仕事に忠実であることを褒めてやる
おれが警察から警察へまわされていた時
お前はささやかな差入れ物をかかえて次々とまわって来た
それは白い卵を抱えて巣移りする蟻のようだった
しかしそのためお前がお前の仕事を少しでも怠るのであったらば
お前の心づくしを受け取ることがおれに出来なかったろう
やがておれが刑務所へまわされた時
お前はふたたび手を振ってやって来た
しかしもしお前が
おれ達のひき裂かれたことをお前の仕事を高めるモメントとしているのでなかったならば
おれは面会所で編笠を取ることが出来なかったろう
お前はいつも仕事に忠実であったし今も忠実である
お前は明日(あした)仕事を逐うて川越へ行く
お前は一人でさっさと仕度をし
今はかすかな寝息を立てている
おれはお前の寝息をかぞえ
お前の寝息の正確なことを褒めてやる
正確な寝息は仕事にまめまめしいもののものだ
お前はお前の仕事に常にまめやかに
それ一つでいい
かつてひき裂かれたおれ達はまたひき裂かれるかも知れない
しかしおれ達がおれ達の仕事にそれぞれに忠実である限り
おれ達を本質的にひき裂くなにものもない
すべての手段を奪ったものも献身による手段を奪うことは出来ない
おれはお前の寝息をかぞえてその安らかなことを褒めてやる
未来にわたって安らかにあれ
仕事に忠実であることの安心の上に立って

やられた友に

松山達枝

いまは午後十時……
外はひどい風、ガラス窓がカタカタ鳴っている

キクちゃん
あなたはどこの留置場にいるのだろう
私はこうして
いま炬燵にあたっている……
いまごろあなたは
冷たい毛布でどこに眠っているのだろう
それとも×問のために呻いているのじゃないかしら

この間
職場の人が差入れに行ったら
××署から
もうほかへまわされたとか
いまごろはどこにやられているのだろう

一月十九日の日暮れ
職場の人たちでプロ劇に行くため
××町の停留所で待ちあわせたとき
あなたは買物の包みを家までおきに行った
遅くとも二十分で帰る筈なのに
四十分たっても帰らない
職場の人も一人も来ない
風に吹かれて
私は待った——

私は待った四十分！
それからようやく帰ってきたあなたは
黒オーバーの男に連れられていた
オルグかしら？
いいや！
あなたは知らん顔して
私のそばを横切り向う側の鋪道へ移った

黒いオーバーに腕をとられたまま
ちょろっと後ろを振りかえり
あなたはそっと笑って合図した
私の目に
合図の笑いと正服の後姿を残して行った

あれぎりで
まだ帰らないキクちゃん
やられたのはあなただけじゃない
十九、二十日にかけて
全市で三十何人か市電の仲間はやられた
あなたはそれを知ってるかしら

おお、そして
広尾、キンシ堀をきっかけのストは消えたけれど
やがてくるゼネスト！
断たれた連絡は一つ一つつけられ
組織はもとにかえって行く

キクちゃん
がんばってくれ
外にはみんながいる
できるだけのことはするから心配するな
もう職場の兄姉が
廻されたとこを探して差入もは入るころと思う

中国の同志へ手をさしのべる

橋本正一

A

君たちの腕はおれらの堅固なトリデとなった
君たちの腕はおれらを守る鉄条網！
中国革命軍の同志よ
輝かしい君たちの陣営へ手をさしのべる
隣邦普羅列塔利亜（プロレタリア）の敬意を以て　感謝を以ておれは！
資本家と土豪と野獣のごとく無恥な軍閥とは
君たちを搾菜（ちゃあちいよ）のようにしぼりあげた
世界の鷲の目はグッと君らを威（おど）かした
裏切りの青天白日旗（あおはた）を逸楽の官衙の上へ
おお　餓えと死の三百万人
君らはあげた　烽火（のろし）を
革命軍のもとに大きな憤怒の烽火を

赤軍だ！　こいつはごたごたのざっぺいじゃァない
中国革命軍の秩序ある編制！
農民と都市工会の自警隊は

果敢なる戦闘部隊となった
革命軍！　鍬と銃と大砲！
革命軍！　爆破と射撃と堂々たる××
進撃中国革命軍よ万才！

おれたちは見た
中国地図の美事な変貌を
コンサイ・コントン・ウーナン・ウーパ
そこ　千里の沃野天府の地……の……
坊主や役人どもをぶっ倒せ
学校を×××

B

だが
おれたちは恥じる
おれたちは怒りにもえる
八ミリ砲のすさまじい狼煙！
日本国の軍艦だ
あれには兄弟どもが乗っている

漢口にせまる英国クチク艦
長砂を撃つ美国（アメリカ）・パロス号
そして日本国の第二十四クチク隊
居留民保ゴ・利権カク保の名のもとに
資本家と帝国主義

そのお手先になって得をする買弁階級
そいつらは普羅列塔利亜の敵だ
見ろ奴らは本性をあらわして喰ってかかる

君たちはいまそれと闘っている
軍艦にのりこんだ各国の水兵どもも
次ぎには資本家と地主に向けかえすのを知るだろう
それを誓う
おれらの絶えざる努力において　闘争において

中国革命軍の同志よ
世界革命の前衛として立った君らの前へ
日本国のプロレタリアは精いっぱいの支持をおくるぞ
かばねの上にひるがえるアカハタ
そのかちどきの声にあわしておれらの歌を
日本国プロレタリアートの忍苦の歌を、
共に！

旋盤工の歌

林　光　範

ほれ
素晴しく挽けるぞ！
ジリジリ、ジリジリ

ほれ
素晴しい
バイトだ！
ジリジリ、ジリジリ
白い煙を尾に曳いて
醤油が泡に
鉄片が飛ぶぞ！
ジリジリ、ジリジリ

四分角から三分角に
真赤に焼いて
きたえ鉄だ！
聴かせてやろうか
こいつの名前！
ハイス、スピードキャッピタアールだ！

ほれ
素晴しく削れるぞ
ジリジリ、ジリジリ
さすがの鋳物も
つるつるに削れるぞ！
急廻転でも屁のくそだ！
ほれ
鉄片が飛ぶぞ！
俺達の体から搾取した
手前の洋服に
赤い醤油がはね飛ぶぞ！

ほれ
さわって見ろ！
こんな小さな
鉄片でも
一寸さわらあ火傷するぞ！
ほれ
素晴しく挽けるぞ！
ジリジリ、ジリジリ

低気圧へ

小熊秀雄

争議に依って

俺たちの職場はわきたつ
「同志、ズボンの釦（ぼたん）がはずれているぞ！」
「おーらい、おおそして君の帽子もゆがんでいるぞ！」
「おーらい」
俺たちは微細なものに対しても
細心に注意をしあう。
ゲートルをくつから巻き直し
帽子をキチンと冠（かぶ）り直し
腕を組んで
胸を張って、
今は××に移るばかりだ。

その時、俺たちは工場の上の雲を見あげた、
飾りけのない白雲、
雲よ、
俺たちの滋養分となれ。
俺たちは決して
お前を天上の物と見ない。
それは何時でも俺たちの
俺たちの激しい闘争の頭上に
お前を認めることができるからだ。
雲は俺たちの味方だ
晴れた日、

彼はじっと動かないが
少しも滞（とど）っているのでないことを知っている。
じっと見つめると彼は
明日の低気圧と合するために
実に激しく動いていることを。

俺達は機械だ！輝かしい音

大江満雄

鉄の
組立てのように
おれたちは集る
濃い血のように
インキでよごれた仕事服
モーターの響
シャフトの音よりもはっきり見た
ここの工場の中にも××がある
昨日までは知らなかった
おく病な
弱い意志の

泣きごとばかりの工場かと思うた
信心のつよい労働者が
キリストの像を手にして行進した
×の日曜日のような
正直に訴える勇気さえもない
ねむっているような
工場だと思っていた

おれたちは見た
工場主にしぼられぬいて
はっきり感じた兄弟が
合言葉を求めた
そうだ
ちょうどレーニンの日だった
おれたちは約束した
なによりも
勇気だ
そして、ストライキは
三人じゃ駄目だ
工場は
無学で
ヨタで
泣きごとと言いの
より集りじゃない

みんなひとりひとり勇気をかんじてきた兄弟！、
薔薇は機械じゃない
温い部屋で
よくすべる椅子へよりかかって
マルクスをしゃべるだけの
ブルジョアのゆく所はきまっている
社会民主主義者のしっぽを見ろ
おれたちは頭をもたない手のように
敵の差しだした白い手と握手していた
ひとりひとり
巨大な世界の
プロレタリアートのうごきに
めざめてゆく
それは機械のように
正確に
熱情的に
そして冷徹に
兄弟たちは一本のネジのように
無数の歯車のギザのように
飛びちる油のように
×をもって進むことを
おれたちは知った。

煙に曇る夜の屋根裏

沖田英雄

二分　三分
やって来ない
ヤキモキする俺は腕時計と睨めっこだ
薄暗い高塀のかげ——

立ち止り
遙かに響く靴音に耳を澄ませ
（アイツでは無い！）
イライラする胸を押えて足を早める
後を振かえり
又振りかえり

あいつ！
あいつ！
大丈夫だろうか？
（あいつの事だから——）
（いや　ヒョッとしたら——）

夢中で掴んだハンチング
掌に丸めて急ぐ　次の××へ！
（おお　もう五分しか無い！）

あいつ！
あいつ！
あいつとうとうやられたか?!
一瞬深い沈黙に落ち
腹の底からコミ上げ　両頬を濡らす熱い涙にグッと首をもたげるのだ

（おお　よかった！）
（無事だったか!!）
ホッとする胸
湧きかえる血汐
顔を見合せ
ニタッと微笑み
さて——俺は之から逃げねばならない。
×××の移転だ、手伝ってくれ

行過ぎ
又戻り
窓から洩れるニブイ光に眼を伏せて、耳を澄ませ
（大丈夫だ！

奴は男だ！
　一寸やソットで吐くものか！）
ソーッと二階へ這上入る

かき廻し
ホゼリ廻り
片っ端から火鉢の中へ
ムクムクと煙が上り
炎が赤いプリントを舐め
（おお　もう十一時だ！）
表を通るウドン屋の鈴

（誰だ！）
無言で眼を光らせて
××を掴んで唾液をのむ
ミシミシ昇り来る段梯子を――
（おお　お前も無事か！）
（奴はやられた　××地区で――）
ズタズタに引裂かれた学生服
頭髪を汗みどろに振り乱して――

焼く　包む　縛る
俺と奴とは汗みどろだ
あいつ！

あいつ！
ガンバるだろうか？
表を過ぎる靴音に耳を尖らせ
明放った窓から外を見渡す
遠く　黒く　遥かに続く瓦の波
湯屋の煙突がホノ赤く　火の粉を散らせて――

（×されたって――）
（シメようと　どうしようと――）
誓って別れたあいつの額は黒く明るく輝いていたっけ
××　××　×る
畜生！　××でも吐いてはならねえぞ
あいつ！
あいつよ！
ガンバってくれ！
後の仕事は引受けたぞ！

芝　浦

――芝浦製作所の兄妹に寄す――

村田達夫

1

芝浦は動いている
生きている
クレエンはゴツゴツの翼を拡げ
煙突・
煙突・煙突・
煙突・煙突・煙突・・・・・
コンクリートの分厚い壁
モーターと、ベルトと、截断機と、ピストンの震えを包み、それは永々と這っている
ムクムクと吹き上る煙
湧き、せり上げ、のしかかり
それは空に充ち、空に拡がり、空は真黒い晴
(ピクピクと空気は動いてるじゃないか) そこに芝浦を走る生産の脈搏!
お、芝浦は動いている、生きている!

2

ベルトの蔭に油差しの健の眼が仲間へ向けて鋭く光る
すすけた窓硝子の外を横切って走るあいつ
(お、あの女ッ子は「運搬」の伝令じゃないか!
凄いぞ、しっかりやってくれ、モーターの職場は引受けた)
首切り・単価切下反対の××××××、よし動く芝浦の××・××へ!

見ろ、製作所には千三百の仲間のつきぬ恨みがたぎっている
指令・第四号
今日はサボ
コンクリの工場を覆って、明十三日は職場をあげて××・××の歌だ!

3

芝浦は煤けている、動かない
煙突のコンクリートは汚れている、そして煙りが止って冷えている。巨大で間の抜けた怪物だ
ピストンは動かず、シャフトは冷え
だが、汐鳴りみたいな喚声が聞えるだろう
いま、芝浦は春。空の煤煙は吹き飛ばされ、
太陽はカッと照らす!
その下で、芝浦の工場には地鳴りがする
おお、ゼネ・ストを闘う千三百の仲間たち!
地鳴りは怒りの荒くれた塊、それは兄妹たちの胸を貫き恨みをつなぎ、芝浦千三百の仲間を結びつけては捲き起るのだ
いつ、誰がおれたちの口を塞ぐか
いつ、誰がおれたちの歌を奪うか
一日一日を闘いに叩き込み、生き抜くおれたちは労働者芝浦にひそむ鉄の動脈!
奪ってみろ、塞いでみろ、明日はさらに延びるのだ!

4

「芝浦製作所の兄妹を援けろ！」
自転車のペダルを踏むのも、もどかしい
（糞ッ、芝浦の兄妹が起ったんだ！）
おお、負かしてなるか！　どうして黙って居られよう
見ろ！　この×を。
×××れては翻えるおれたちのこの旗！
おお、関東消費組合聯盟の×××！

5

配られた状袋に米を入れる手
若い手だ、だが中指が一本足りない
夜業で噛み切られたこの指！
あれから一年——一日一日、暮しは苦しくなり鼻ッ糞ほ
　どの賃金はへらされたが、四本指の動く限り、おおい
　つも、おれの思いは起ち上る仲間たちの×いの上に
（よし、芝浦の兄妹を援けろ！）
手は手をつなぐ、指は指に組み合う
聯盟の旗の行くところ、四本指の手が、爪の剝げた手が
　泥の染みこんだゴツイ手が組む、握る
おお　労働者と農民の強い握手だ！

6

（だが燃え上った怒りは外された
解雇通知を突ッ返し死ぬまでと起った××・××。それ
　が十五日で売られてしまった。
涙が引吊って頬を這っている。
ピキピキとしたあの娘の顔も暗く怒っている。
ダラ幹・
ダラ幹・
それが骨をしめつける
それが肉をぎりぎりとつき刺す
冷えていた煙突を仰げば煙りが出ている——
（それを見ていると、堪えてた涙がどっと来るんだよ。）
（お可笑いじゃないか、ナニヒトツ通らねい白紙の解決
　だって！）
煙突を仰ぎ、歯ぎしりをして、ピキピキとしたあの娘の
　頭には考えが走る
——ダラ幹を蹴って戦え！　お、あのビラは×××云っ
　てたっけ。
（鳥みたいにすばしこい若者だったよ！）
あの娘の瞳がキッとなる
唾を吐き、煙突に尻を向け、歩き出したあの娘の姿はサ
　ッソウだ！

7

煤煙は空になびき、空にあふれ
ピストンは車輪のように動いている
曇って晴天の芝浦はピクピクと空気が震え
動いている
生きている

デンタンよ!

姉川茂安

「すげえなあ……」
二人のインテリがすげえなあと感心している。
ハハハハハ……すげえだろう……
「×××××　×××出ろ!」
これはまっ赤な　××デンタンだ!
四五人の労働者が　タンを見い見い議論して行く……
一人のサラリイが一寸横目して
肩をすくめて行く
ハハハハハ……心の中で高らかに俺は笑う
おれのはったデンタン……
まだ工場の塀に確り獅子がみついているんだ……

デンタンよ!
おれのはったデンタンよ!
恋人のようにおれはお前にみ入る
オルグのように　親しみを感ずる
お前はおれたちの××に似ているのだ

——右の隅をむしられ、下を破られ
中をつきさられても尚、確りしがみ附いて
与えられた×××ろうとする
はがるれば又その上にはられ、ぬりつぶさるれば
又横にはられる
そして突かれ破られ雨にさらされて、
尚しがみ附き乍ら自分の××××ろうとする——
全くお前はおれたちの××のようだ
デンタンよ!
おれのはったデンタンよ!
おれは今更ながらお前にのみ入る
　恋人のように　オルグのように……

ゆうべたんはりを命ぜられたおれは
お前に××を与えた!
おれが労働者として
おれらの××××するように
デンタンよ!
おれのはったデンタンよ!

除草機

桜井徳太郎

頭の上では太陽が
真黒く焼付けている
汗——汗——汗
にじみでる
ひたいの脂
真黒く焦げる皮膚
盛り上るこぶしの肉——肉
カ——カ——カ
大股に強く踏ん張っては
グッと押し
また押す除草機
太い骨と
太い血管と
からみ付き、もぎはなされ
縮かまり引伸され
真黒く盛上る
奴が何だ、手めいが何だ
歩一歩又一歩
頭が焦げ目がくらみ
腕がはれ足がむくみ
真黒に痩せる農夫

橋

杉沼秀七

奴らの橋
奴らの岩木川
曽つては幾人かの死を思いとどまらせた橋
多くの百姓と　多くの荷車を休ませた橋
橋は誰よりも百姓たちの苦しみを見てきた
津軽の土百姓が水枯れで苦しんだ夏も
立入禁止の立札を打倒して共同刈取をした日をも
警察と差押え人夫が共同刈取の稲束をすっかり持って行
　った日をも
その他　多くの小作争議を凝っとみてきた橋だ
窶れた百姓親娘(おやこ)が
毎日安い藥工品と野菜を背負って通うた橋

常に百姓の苦しみと悲しみを見せつけてる橋
立禁反対ビラを貼って
消防夫に村の青年らがなぐられたのもこの橋
地主と役人と芸者を乗せた自動車が通る橋
小作争議をぶち毀して引上げた奴等たちの橋
村の『立禁反対演説会』で
模範青年たちが検挙される朝に
——行って来るよ!
　と百姓たちに笑ったのもこの橋の上だ

この橋は奴等の橋だ
校長の橋
坊主の橋
消防夫の橋
地主の橋
弊察の橋だ!
その奴らの橋と別れる日がきた
俺だちが「無新」と「赤旗」の配付で
今日!
この橋を渡って
縛られ屈辱をうけて引立られて行く俺たちではあるが数
　年後　渡り帰るときは
赤旗を先頭にして声高らかにインタナショナルを歌って
来る俺たちだ

その時から
その日から
橋は俺だちのものだ!
嬃れも苦しみもない百姓親娘が通る橋だ
百姓たちが喜びと笑いの顔で渡る橋だ
俺たちの橋
俺たちの岩木川

百姓たちの橋だ

若いやもめ

森山啓

何という目に会ってしまったことだ
お前さん!……なきがらよ!
だが、もう
うわの空では考えまい
呼んでお呉れ!　お前さんのなきがら
妾のこころのさ穴から叫んでおくれ
どんなおもいでもこの背をぶっておくれ!

春には織布部の姉妹づれで
むかしわたしらは
お前さんのところへ出かけて行ったのだ
大股でこの河岸を喋りながら
貧しい晴れ着を見せるために
そして処女の
あの早咲きのバラを見せるために
わたしの身には北陸の野良の風がまつわっていた
引き抜かれた野いちごのように
故郷の野っぱらを慕っていた
だが摘ませる気があったろうか
暗い工場の柵のなかで
育ったわたしらのいちごを
お前さんらの仲間のほかの者に！
たくましい胸、技術のある労働者
わたしに読み書きを教えたひと
胸から胸へじかに心をつたえたひと
鍛冶工
あけすけで、はげしい気性の若者
お前さんよ！
おおお前さんよ！　そうしてわたし達は結びあったのだ
何か大きな
私らみんなのあの、消すことの出来なかった希望によって

どんなに大きなしあわせを持っていたことか
短い日々に苦労な暮しに
どんなに沢山の情愛をお前さんは注いだことだろう
おお、お前さんよ
そしてどんなにやすやすと奴らは
このたった一つの幸福をも
仕末つけてしまったことだろう！
あるだけのわたしの愛を胸におさめ
あるだけのわたしの恐れを—背嚢にたたき込んで
戦地へお前さんは出かけて行ったのだ。
そうして落付かぬ毎日
空洞のような毎日
ふいに羽ばたく予感と、何度となくそれを追っぱらった
妾の希望にむかって
お前さんの骨壺が
物をいいに帰って来た
わたしは覚えている、あの一時間を、どこをどうして歩いていたかを知らなかったあの一時間を
そしてお前さんは
お前さんの父親にただ一つのことをくり返していっていた
「お父っあんこそ、気をつけにゃあかん！」
同じようにわたしに
桜が咲く頃に会えると……

過去の　さまざまな
沢山のことが折りかさなってわたしたちの眼の前に揺れていた
お前さんの顔は
どちらかといえば暗く
お前さんの口は黙りがちであった
お前さんはほとんど黙り勝であった
そして見送る時
駅前の広場に、旗を持って待っていた
誰かが喋っていただろうか
女たちは男たちと喋っていたのを覚えている。そして女たちは子供らをなだめていたのを覚えている。
そして女たちは子供らをなだめていたのを
けれどもそこには　まぎれもなく
大きな沈黙が
ただ沈黙が坐っていたのを
そして風が吹き荒れていた、何千人の女たちと父親の上に、子供たちのおふくろの上に
ラッパの声がひびいて来た
それは、りんりんと、さむざむとひびいた
わたしは爪立ちした——見迎えた
それからお前さんのお父っあんを偸み見た
——その顔は同じ方を見てこわばっていた
誰かが赤ん坊に云っていた

「さよなら云え、や……」
万歳の声がみだれて湧きあがった
靴音が、あの大きな沈黙を押し付けてひびいてきた
そして
なぜわたしは
万歳を叫ぶことができなんだのか
おお　わたしのかけがえのないひとだったお前さんよ！
そしてみんな、あの鉄砲をかついだ労働者と百姓の若衆
みじめな生活とむごい仕打ちのなかでいつも
何か偉大なものを、求めずに居られなかった男たちよ
偉大なもののために甘んじて死ぬことを知っていたお前さんたち
だが　なぜ別れぎわに
あの決心と雄々しさの蔭から
それこそほんものの心を見せて黙りこくっていたのか
そして
あの汽車の窓からのり出して、お前さんよ！
お前さんもまた最後の笑顔で帽子を振ったのだ
死を怖れる者ではない！　そのことを見せるために！
すすり泣きと万歳とあの愛と絶望の嵐の中に
動き出す汽車の窓から
両の脚に力が抜け
うなだれて　わたしは広場の人波にもまれていた

颪はごうごう荒れていた、わたしらの上に、わたしと、
　わたしの肩に皺のよった手をかけていたお前さんの父
　親の上に何千と云う人波の上に、いつまでも。
恐ろしい孤独の中で
工場で
わたしは不安と希望をたてよこに織った
そして経糸はよく切れたのだ
私は格落品をつくり部長にはこっぴどく小突かれた
わたしのコップに巻きついた不安は
骨壺が物を云いに来るまで
無くならなかったのだ
いま　すべてのことの意味を考えながら
わたしは工場の門の方へ歩んで行く
そしてなおただ一つの考えが
ひた押しに胸に迫って来る
見す見す、ほんとに、見す見す
お前さんらの生命を
奴らに軽くあしらわせてしまったと云うことが。
あんなによく、みんなは知っていたではないか
すべてのやり方で奴らは搾取する
そしてどんなに奴らが云いくるめようと
これは奴らのための戦争だと……
事実、お前さんが
いつでも肩をたたいて話しかけることの出来る支那の労
　働者と百姓に向って
若者たちの
同じような希望に向って
同じように偉大なものを求めている魂に向って
どうして×をぶっ放すことが出来ただろう！
また事実お前さんは自分で云いさえしていたではないか
工場で打つ同じ鞭が
わたしらを戦争へ逐いやるのだと
あの別れぎわに
お前さんの押しかくした沈黙こそ
じかにそれを話していたのだ……
もう物を云えぬ亡きがら！　そうして絶叫していながら
！
わたしを、どんなことでも出来るしっかり者に仕立てて
　おくれ！
わたしらの持ち前の、偉大な望みに向って起て！　犬死
　をくり返すなと
あえない最後をもって叫んでいるお前さんよ！
すべてのことは鞭でもって
わたしを前へ歩かせる
亭主を×われた女工　綿ほこりを被ったやもめ
わたしらの組織、大部隊のために働こう！
未だ芽を出さぬ白楊の下を
工場の門へ向って歩いてゆく……

あの三人について

久木仁吉

おれはふいてもふいても涙が出るのだ
おれはその事を新聞で知った
爆弾を身につけて死んで行った三人
悲壮に勇敢に死んで行った三人
その三人が三人ながら
思うに大金持ではなかっただろうよ
おれはその三人の事をきいて涙が出た
三人は死んだ火花のように
知らないのは仕方がないのだが
おれが知らせなかったような責任を感ずる
その人達は勇敢なのだ一本気で
その人達は質朴で単純なのだ
知らなかったのだ誰の為に死んだかを
知らせたかった
知らせねばならなかったのだ
卑怯者の百人にむつかしい事を教えるより
勇敢な質朴な彼等にやさしい事を教えたかった

そうだ、もっと呼びかけろ！　もっと　もっと
そこへ行く仲間達に
何も知らないでゆく数千の仲間達に！

示威(デモ)へ

北山雅子

きりきりと澄み切った空気を
胸いっぱいに吸い込み、吐き出し
今朝はまた
なんと、こみ上げるような朝映けのいろ。

ちちいろの靄を透かし、足許から
眼のとどく限り、はろばろと、ひろがる青田
俺は心を急(せ)き急き、駄馬の手綱(た)をひく
――ドウヨ――
早く草を刈って終わんと
今日の示威(デモ)におくれるぞ。

昨夜のうちに砥(と)いでおいた鎌だ
露に散らして、よく切れる

むッーと胸にくる草いきれ
刈り――束にし――籠に入れる。

駄馬は、
脚を揃え、さらさらと尾を振る
ごつごつの駄馬も肥料代の抵当だ
何も彼も
ほんに何も彼も奪われた俺達
俺達の親しい源作は
選挙闘争の時に、ショピかれたまま――四カ月間
今になっても帰って来ない
それをいいことにして
総本部では除名した、
だが、あのひと源さは気にもしないだろう
――輝やかしい除名だ――と
広いおでこを叩いてるだろう。

振り返れば
モリモリと歯を鳴らして草を噛む駄馬
駄馬も先にはあのひとと
毎朝のように草刈りに来たものだが
（だがそれがなんだろう）
奪われたのはあのひと一人でもなし
俺ひとりのあのひとでもないのに、

今朝はいろいろのことを考える。
俺はせっせと草を刈る
せめて駄馬だけは饑じい目に合わせまいと
今日一日分の草を刈る
今日こそは
全農の娘の意気を見せる日
婦人部は残らず動員しよう
俺達のデモは葬式行列じゃない。
野良着で、ワラジばきのこの足で
とッ、とッと襲撃だ、
ほれ、あの革命歌をうたうのだ。

さっ、さっさっ鎌はよく走る
抱えた草が胸を濡らす
――さァいいぞ
駄馬の頸をポンと叩いて帰りは早い
俺は前垂れの端をつかみ
ぐい、ぐい手綱をひいて急ぎ
さァ、示威へ！

デスマスクに添えて

松田解子

このひとは「イ×××ドー」
このひとは党のひと
わたしらにその手、その足、その顔さえしらさないで
ただただわたしらに闘うことを教えた
このひとは闘ったひと
闘ったがために鎖と搾衣で
わたしらを搾取し圧制し、生活の切なさでしめあげる
××の手下に——殺されたひと
×××ギ×ー

ああ、このひとにつながる血筋が
デスマスク刷った「赤旗」に
ああ、わたしらの血筋が
いつよくなるとも知れぬ生活(くらし)の中で
あなたの死に顔はまっすぐに照らす火
あなたの盛り上った唇の中に凍る歯は
わたしらにその鎖を噛み切らすはげまし
イ×タ×ド×
わたしら貧乏人(プロレタリア)はあなたにちかい
わたしらに搾られている者はあなたに捧げる
××を
××をもって

靴下の穴其他

浦野敬

疲れてかえる眼のまえに動いているバスの女車掌の靴下の穴

さんざん搾られたあげく賃銀がもらえないとは公娼よりもひどい（賃金不拂問題）

がっちり腕くめぬかなしさを胸にたたんで働きに出る（五月一日の朝）

ぐっとさしだした腕にしっかり組ついて一緒に闘い抜こう

晴れ渡る五月の空の下蔭で働く意識が今日は強い

今日と明日との間

井上鎧三

社民のダラ幹どもの落選！　落選！　大衆がいつまでも盲目であると思うか（総選挙二首）

大山の得票の増す毎に揚る歓声！　俺の一票もあの中にあるんだ

官吏減俸を攻撃したその口で賃銀値下げを弁解している（武藤山治）

一日の命の糧を四割も減らして働けというのか飢餓と疲労で死ねというのか

就職苦難

土田秀雄

就職を頼んでいる友に思うことずばりと云えぬあわれさに居る

世の仕組みがどうであろうとも生活の道を求めねばならぬあがきのはげしさ

失業者の群をつらぬきどす黒く流るる力の不気味な動き

時事即詠

内山秦一

大山氏の安否気づかい走りいしが街かどに児とぶつかりにけり

労農の大山いま優勢なりとう電光ニュース生けるが如し

最左翼の大山郁夫勝てりとうビラ貼られたり夕べの街に

病父

山本萌

地所をまきあげられ　今また　肉体（からだ）まで搾られようとするのか　病父（ちち）よ

なにもかも宿命だと言ってた病父（ちち）は　今　死にたくないと　やっと言うだけ

宿命なんて　病父（ちち）よ　この貧苦と病苦の原因（もと）をしっかり

探ってみろ

（以上歌集「ラ・パラボール」より昭和六年一月刊）

被告入廷

矢代東村

おれ達の指導者ら
そしていま、おれ達の被告ら。
傍聴席からは
立ちあがり
手をあげ
名を呼ぶものもある。

手錠のまま
ぐいと編笠をつきあげて
はいるなり、いちいち
元気な挨拶。

そばの同志とは
手錠のまま堅い握手をする。
いまでは、法廷でより外に
会えない被告ら。

丹野せつ子は
女の被告だ。
この中での、たった一人の女の被告だ、
おれ達の被告だ

どの被告も
みんな確信にみちた顔。
その顔から、じかに
胸に来るもの。

是枝がすわると
すぐ市川が立つ徳田が立つ
応援にいとまがない
この闘争ぶり。

「アジ・プロはあらゆる機会に」を
この公判からして、その機会の
一つだということを
はっきり知らせる。

（以上雑誌「詩歌」昭和六年十一月号）

○

旗。
旗。
旗。
万歳！
万歳！
わけの分らない亢奮の中に
立ってゆく汽車

万歳！
万歳！
今日もこの声に送られて、
何百人かの兵士はいま立つ。

見送りのおかみさんなんだ。
汽車が動くと
背中の子供に呼びかけて
わずかに笑う。

走り出した

汽車の窓から、一番さきに
顔をひっこめた兵士が、
考えさせるもの。

見ていて
急にあつくなってくる目頭を、
ごまかそうとしても
どうにもならない。

送る人も
送られる人も、まるで狂気(きちがい)だが、
狂気でない人のあるのを
誰か否めよう。

（以上、昭和七年二月号「詩歌」）

片貌

太田林次郎

労働者の威力を見ろ、ガッチリした肉体と腕の交錯！

（メーデー相撲、二首）

土俵、弾力ある肉体が組み合って職工等の威嚇的な示唆

工場街

正田長一郎

どぶの匂になれきった女達の高話だ、ポッチリ五燭燈がともった

横なぐりの激しい雨！ 閉塞工場の門が倒れかかっている

生活断片

正田良

祕かに時計を進ませる職工のつきつめた気持に考え込んでしまう

気弱い男が黙って働いている工場！ メーデーの空がどんより曇って

農民の顔

長谷川俊雄

百姓であることを強く意識しながら、昂然、朝明けの町を歩く

きりきり骨が痛むほど働いてはたらいてあえぐ農民、俺達

死んでも田畑を守り続けるという祖父の気持は笑い去れない

（以上、歌集「前衛」より昭和八年一月号）

ガス社外エスト

坪野哲久

炎天に頭たたかれ
タンクの上、
生死(いきしに)賭けてたたかう俺達。

江東の屋根屋根畳まり
起き伏すところ、
ガスタンクは聳え立つ！
ふてぶてしく

真夏の
天日ふりそそぐガスタンク
生活(くらし)守るおれらのここは城砦(とりで)だ！

タンクの上
まなこを熱く凝(こら)しみよ、
煤煙沈む南葛の空に。

おれら見はるかすタンクの上、
東京の街波の涯(はて)に
真紅にゆらぎ落ち沈む太陽！

（以上「短歌評論」昭和九年二月号）

春

石井光

編笠をかぶれば

二月三日

梅田順三

肩もうずもれて、
あたらしき笠の草の香すなり。

天を飛ぶ
オートジャイロというものに、
思わず鉄窓にしがみつきたる。

今朝もまた
紙石盤の日を消して、
今日の日にちを書き入れにけり。

赤土をひと足ふめば
編笠をしみ通りくる
春のぬくもり。

護送車のカーテンを上げようと
思えども
手錠の腕は自由にならず。

追懐

青野谷夫

だらけた生活に
今日の判決が鞭となる
心に沁みつ
きびしく
いたく

雪降りの気緩(ゆる)みも済まなく
判決重き人等に
こころの
いたみ

判決重く
自分の怒り
身に沁みて
ふつふつと沸き

呉淞(ウースン)の
少年隊の花と散りし
斉威堂は十六歳なりし。

君とともに
六歳（むとせ）の間寝起きせし、
破れ畳のなつかしきかな。

骨無きか
しるしなきかと残塁の
かけら押し分けて逍遥（さまよ）い歩けり。

折れ朽ちし
旧式銃を紀念（かたみ）とし、
持ち帰る肩の重くもあるかな。

十六の
肩には重きこの銃よ、
病がちなりし君をし思えば

（以上「短歌評論」昭和九年三月号）

啄木を思いつつ

石井光

啄木の持てる真実を
知るまでには、
牢にも入らねばならざりしなり。

キリストを
マルクス批判に用いおる
大学の先生はらくなものならむ。

真実のわが行動を
知れる友、
この国に一人（ひとり）ありき、共に囚われき。

することのひとつひとつに
癖となりて、
屈辱のあと骨に滲みてあり。

麻縄の
痛みを膝に感じつつ
東海道線を送られにけり。

むちに抗す

西原正春

みぞれ降る朝の鋪道に曳かれつつ晴々と鳴らす口笛の音
！
この留置場に若きローザを吾れみたりセンイの同志の赤き唇。
中本さん——そっと小声に呼びてみる微かに笑う頬の蒼白き。

白い嵐

川崎むつを

痛さではない、息の根のとまる切なさだ。手をもって遂に股をかばった
廊下の壁にふらつく軀ささえながらブタ箱に又追立てられる
一斉に注がれる同志のうれいの眼だ、大丈夫だと笑いを作ってみせる

私の生活から

泉春枝

ばくはつしたい破裂したいと思いながらどうすることも出来ない私。
封建的な父親を持つ私はすべてに苦心さんたんしている
！
岩をくだくダイナマイトの音が私のウップンを晴らして消えた。

ある朝

渡辺順三

白々とわが吐く息は流れたり
縛られてゆく
街の朝あけ。

うしろ手に縛られて
街をひかれゆく、
われは頭をあげて歩めり。

両の手に
縄の痛みを感じながら
負けまいとして顔をあげている。

（以上「短歌評論」昭和九年六月号）

栗林一石路

働く気になれねえぎくぎく鎌を磨ぎすます
稲の花ざかりの村中が錆びついているような夕日だ
見ろきゃつらの戦争で黒い血をはく煙突だ
わっさり風がゆれてゆくみんな同志の作った麦だ

神代藤平

がっちり電柱に噛りついて八月一日を闘いぬいたビラだ
まだ寝くされている街の横ッ面に貼られてゆく伝単

横山林二

夜あけの風をついて田圃をかためた旗だ鎌だ
東、西、南、北から田圃をまもりにかけつけた兄弟の手の鎌
鎌がものいうか奴らの足が田圃荒すか

米林米翁

はりきってるぞ新しい世界の青空だ
夜明けだ朗らかに機械をまわそう
真赤な旗がどしりどしりやってくる

戸塚宮吉

聯絡（レポ）待つ間嵐の来る空を見る

清内路二

兄弟、黙ってその活字を拾え「帝、国、主、義、戦、争、反、対」と

時田繁二

壁から壁へ俺たちの歌が、俺たちのいきが五月一日だ

木の芽綻びかけて四十九日の同志が出て来た

村井千代

野風よソヴェートの話がはずむ妾達のピクニック

闘争を誓い合う野が真青に晴れている

紡積工場に出来てく組織をおもえば太陽が明るい

神代藤平・丸木進合作

ダメだとがなってビクともしねえ四千の面魂だ

又号外賣が来たガリ版に闘いの言葉を刻む

阪川志郎

朝の空気を破ってメーデー歌、軌道を占頭し街に溢れる

泪橋へ！子供をオブったおカミさん達も街に街に溢れ出るのだ

原田龍夫

戦争へ戦争へ空から爆音を降らせるぞ今日も

風間光作

ブッコレお膳に親子五人が坐って飯だ障子の破れから見える

俺の反抗はシャツの油のように洗ってもおちやしない

鍛冶正

暗い納屋にみなぎる春を組合再建に集っている

野良着のまんま集ってがっちり八・一のビラ刷ってる

冴山路

土地を農民に！そうだ稲もすくすく伸びベエ

さし出す弁当軽々と受取ってオイラ工場に闘争に

宇野輝夫

海外へ八銭で売る米を二十五銭で食わねばならぬ俺達には職がない

逢阪薊

又壁の工場地帯図にカマとハンマがふえていた

いい試練だったとブタ箱から出て来た元気のいい顔だ

綾木紅潮

踊の太鼓、どこに農村不景がある（かというように）

一農余治

生きて帰れねえ訳があるんだ、お母ァよ！戦争反対
おい！殺された兄弟、戦争はブルジョアのスポーツだと
よ
お国の為だとお母ァよ！息子が死んでも涙も出させない
桑の葉っぱむしり取って、でっかい手で恋をしていた

関 せん子

赤いマークが胸に光るぞ、妾達ピケだ胸はりきって

黒 木 哲

「戦争をやめろ」「パンをよこせ」とガリガリ鉄筆を握
ってはなさぬ君だ

橋 本 夢 道

八月一日反戦デモに押しかける兄弟輝しい顔だ
だだっぴろい芝生を、土地が泣くぞという母だ

北 野 三 郎

たっしゃで留も武も早く軍隊さ引揚げて来うよ

藤 田 啓 二

見ろ前衛の波が支那へ××へ押しよせてきた

森 秀 男

秋風や今日もあぶれてまた帰り

秋立つや質草もなき失業者

太田良吉

野分すや争議づかれの十ヵ村

北城子

秋風や血に染められし組合旗

江口渙

燕よ今年も来たか俺は組合のプリント切ってる

失名

今に俺たちの世にして見せるとサクサク稲刈る

××××にするまでは死なねえといってた父よ

鍛冶正

日向ぼっこのあぶれた仲間よどこを見つめる

康雄

追われた工場の塀に投げつけた雪(ゆき)の塊り

FY生

解説

野間　宏

一

この巻には一九三一年（昭和六年）一一月に日本プロレタリア文化連盟（コップ）が結成されてから、一九三四年（昭和九年）三月に解散するまでの期間とその後の同年末までの運動を取扱うことになっている。この期間は資本主義が戦後の相対的安定期から矛盾の激化する第三期にはいる時期であり、それにともなって支配階級は戦争を遂行するために労農運動、革命運動に対して徹底的に弾圧を加えてくる時期である。これにたいして革命運動はこの弾圧をおしかえし、力をひろげるために全力をつくして運動を大衆化するということを課題とした時期である。もちろんプロレタリア文学運動も革命運動の一翼として、この新しい課題を前にして文学芸術をひろく大衆のものにしようとして努力をかさねたのである。

しかし弾圧は文化運動のなかにもきびしくおしよせ、多くの犠牲者をださなければならなかった。何よりもまずこれまでのナップの方針とそれにもとづいて展開された運動の成果と欠陥とがはっきり評価されなければならなかった。そして文学芸術を大衆のものにし職場に根をおいたものにしようとする新しいコップの方針が急いで実現されなければならなかった。時代の動き、矛盾の激発、発展ははげしか

ったので、何よりも速度を必要とした。しかしそれは相ついでおこった指導者達の検挙とそれによって生れた組織の混乱のために、十分実を結ぶというまでにはいかなかった。しかも改正された治安維持法によって文学芸術活動そのものも、いよいよ非合法的なところにおいやられてしまうということになり、ただでさえ狭い作品の発表場所も一層せまくなり、それにともなって収入の道はとだえ、プロレタリア文学の作家たちの生活は、困難をきわめてくる。そこに家庭生活と文学運動の間のひらきがはっきりと生れてきて、ひろく作家同盟の組織内に動揺が起ってくることになるのである。

一九三三年二月二〇日地下にあって非合法活動をつづけていた小林多喜二は、築地署に逮捕され、凶悪なごう問をうけてついに虐殺されるにいたったが、この事件が全体にあたえた衝撃は大きかった。さらにまた一九三三年六月、獄中にあった共産党の最高指導者、佐野学、鍋山貞親達が転向声明を発表したが、これが運動に及ぼした影響はまた大きかった。蔵原惟人、小林多喜二、宮本顕治、西沢隆二等少数の人たちをのぞいては、プロレタリア文学者の多くは転向して行くのである。そしてここに日本独特な現象である転向問題、転向文学が生れてくる。もちろんこれはコップの解散ということとかさなっている。このような状態のなかで、ついにコップ結成の目標となっていた芸術の大衆化は、十分実現されることなく、中途で放置されることとなるのである。それればかりではなく、さらに組織的に文学芸術の活動をすすめて行くという、プロレタリア文学運動本来の考え方も、次第に失われはじめて行く。もちろんこのようなことになったのは、余りにもはげしい弾圧によるが、それまでのプロレタリア文学芸術運動の運動方針、組織方針、その文学理論にふくまれていた欠陥に原因がなかったとはいえない。それ故に次第に運動が動揺をつづけるなかで、これまでの運動方針、文学理論に対する再検討が多くの人たちの頭にのぼりはじめる。社会主義リアリズムの問題が、出されてくる。しかしはっきりと共産党の指導の下に革命運動とかたく結びついて前進したソヴエトの新しい文学によって生みだされた社会主義リ

アリズムが、このような集団組織を失った文学によって正しくうけ入れられるということは、考えられないことである。もちろんこれまで集団的に創作活動を考えてきた人たちが、組織を失ってばらばらになり、一人一人となるなかで、これまではできなかった芸術に対する深い反省をするということはありえたといえる。そして、これまで十分とらえることのできなかった芸術の特殊性が科学的に明にされはじめたということは否定できないことである。しかしばらばらになった作家たちは文学勉強と作品活動にとじこもり、一人一人が孤立して自分の文学をまもるという傾向がつよくなり、このために革命運動の一翼として、イデオロギーのたたかいをになう文学芸術運動という考えは、次第に失われて行く。支配階級の軍国主義イデオロギーはついにこの上をのりこえて戦争讃美をすすめるのである。

二

まずこの時代の政治経済的な情勢を簡単に描くことにしよう。

一九三一年九月一八日、満州の奉天の北郊、柳条溝に爆発事件が起った。爆発は満州鉄道線路附近でおこったが、鉄道にたいする損害はほとんどなかった。しかし日本軍はこの爆発事件をきっかけにして、満州駐屯の中国軍部隊を攻撃し、南満州を占領した。

井上晴丸、宇佐美誠次郎氏の『日本資本主義の構造』によれば、一九二九年(昭和四年)一〇月アメリカの恐慌ははじまり、全世界の経済を不況のどん底におとし入れて行ったが、これこそ資本主義の全般的危機における相対的安定期のおわったことを意味するのである。ここから戦争と革命の第三期がひろがる。

一九二七年に開始する第三期とは野呂栄太郎の規定によると「戦後資本主義の第三期たる現段階は、

資本主義の一時的、相対的均衡の裡に胚胎せる一切の矛盾を急速に成熟し、帝国主義の国際的並に国内的諸対立の決定的に尖鋭化する時期である。それは、「不可避的に帝国主義戦争に、最大の階級衝突に、決定的な資本主義国における新しき革命的躍進の展開期に、そして植民地諸国における反帝国主義的革命に導く。」のである。そして日本帝国主義は、その「決定的な資本主義諸国の一として、資本主義的な世界体制の最も弱い一環を成している」のである。この大恐慌が日本にも及んできたとき、世界資本主義体制の最も弱い一環である日本に資本主義の矛盾ははげしくなり、戦争と革命のたたかいはけわしくなって行く。

日本の資本主義は半封建的な諸関係をふくみ、国内の市場はこの上なく狭いので、脆弱な地盤の上にきずかれているといわれるが、このために第一次大戦後の資本主義の全般的危機における相対的安定も、きわめてよわかったとされている。それ故に他の国のように社会的安定をみることはできなかった。野呂栄太郎も次のように書いている。「日本資本主義は、その上向的発展にも拘らず、否その故に却って、厳密な意味においては、未だ第二期の一時的、相対的安定——それが主として為替相場の安定に反映した所の——をさえ恢復することなく、常に半恐慌状態を続けている。」日本に於てはすでに一九二七年に金融恐慌が起り、多くの銀行に取付騒ぎがでている。金融恐慌は震災手形の不渡りを契機として爆発し、十五銀行以下多くの銀行の取付さわぎを起した。有名な鈴木商店の破産と鈴木商店にばく大な融資をしていた台湾銀行が危険にひんした。このとき国家は日銀特別融通及損失補償法と台湾金融機関融資法を定め、巨額の救済資金を貸出し、銀行を救済した。「これを機会に銀行の一大整理集中の過程が進行し五大銀行（三井、三菱、安田、住友、第一）の制覇が確立すると共に、産業資本に対する銀行の支配力が異常に増大した。財閥を中心とする金融資本体制がここに格段の整備をみた」のである。もちろんこれらの救済資金は民衆の苦しい生活のなかから取立てられた税によっている。労資の対立がこ

の上なくはげしくなって行くのも当然のことである。この危機をきりぬけるのに、戦争と外国に対する侵略によろうとする軍国主義的な考えが、ようやく力を得てくる。もちろんこの危機は、日本の植民地における民族資本と民族解放運動の発展によって、激化されているのであり、それ故に外国にたいする侵略ということのなかには、半植民地中国における民族解放運動をおしつぶそうという要求がふくまれているのである。満州を征服しようという野望は次第に大きくふくれ上ってくる。

一九二九年末のアメリカの恐慌は、日本のアメリカ貿易に大きな打撃をあたえ、生糸の輸出はとまり、国内の購買力はなくなり、経済不況が日本全体を見舞った。その結果商品の価格は著しく低下し、その生産高も同じく減少した。もちろん独占資本はこれを労働者、国民の上におしつけてきりぬけようとし、賃金を引下げ、産業合理化を行った。さらに生産制限を行い、ひろく資本家間の協定をすすめ、カルテルを設定した。この間銀行資本の全産業資本の支配は全くはなはだしいものだった。また独占資本は国家権力をも支配し、自分の利益をまもるために国家権力を行使させるようになって行った。

この恐慌は決して工業部門にかぎらなかった。農業の面でも大きな打撃をあたえた。先ず生糸の輸出が不可能になったので繭価は非常に下落し、農家の損害は大きかった。その損害はほとんど生産農家の上におわされ、多くの農家が破滅の底におとされた。ところが一九三〇年の秋、米の収穫予想量が六千六百万石をこえると発表されるや米価はたちまち低落し、豊作飢饉がはじまった。一九三一年には東北、北海道は凶作にみまわれ、さらに一九三二年にも凶作はつづき、農業恐慌は慢性的農業恐慌となっていった。農産物価格は、工業生産物のようにカルテルが行われないから、つねに工業生産物よりも下落がはなはだしく、そのために鋏状価格差が大きくなり、農民は全く悲惨な生活におち入らなければならなかった。このために起ったストライキ、小作争議は非常な数に上った。「争議件数は一九二八年（昭和三）の一〇二一から一九三一年（昭和六）の二四五六（戦前最高）に倍増し、参加人員も同期間に十万

から十五万へと増大し、一九二九—三〇年（昭和四—五）とひき続き再三東京市電争議（二万三千人参加）横浜ドック、鐘紡、東洋モス争議と歴史的な大争議、また蟹工船エトロフ丸事件などを記録し、闘争は弾圧（東京市電争議には警視総監調停出馬、催涙ガス使用）をはねとばし、鐘紡のごとき温情的大家族主義の職場をもまきこみ、労働組合への組織率は向上し、革命的な労働組合、とくに全協の影響力の拡大となって行った。」（『危機における日本資主義の構造』）しかしこのような昂揚は決して労働者のみにおわるものではなく、農民、さらに中小企業家やサラリーマン、小市民も同じように立ち上っていた。生活をまもるたたかいが、借家人組合運動、電気、ガス料金引下運動などをとおしてすすめられた。

　生産制限は一九三一年さらに拡大され、首切は軽工業から重工業へとうつって行った。それ故にストライキも軽工業に於けるよりも重工業の方がはるかに増大し、その範囲も拡大されているのである。

三

　このような情勢にありながら、日本共産党を中心とする革命勢力が、この労農運動を十分に前進させ、さらに政治的に組織し、支配階級に大きな攻撃をすることができるほどきたえ上げることのできなかったのはなぜだろうか。それは、三・一五、四・一六とつづけて行われた共産党に対する弾圧によって、すぐれた指導者を大量にうばわれ、一九三〇年にいたって党の活動は弱いものとなってしまったところに原因がある。革命的な労働組合はその指導者たちの分派思想と分派政策のために、分裂をおこしている。しかしこのように打撃をうけた共産党も、急速に恢復し、はげしい弾圧のなかで勢力をととのえ、大衆のなかにその力をひろげ、成長していった。それは一九三〇年の終りのことである。これ以後党はその影響力をひろく労働運動内にもつにいたった。さらにプロフィンテルン第五回大会の決定に

よって組織的な大衆活動を展開し、工場、職場に細胞をつくることを目標にし、それに成功したのである。それまで幾度か分裂をつづけた労働運動にも統一の気運が起ってきた。全国大衆党、労農党、社会民衆党の一部の人たちが、全国労農大衆党を作ったのは一九三一年七月のことであった。しかしこれは全く結合の弱い合体にすぎず、また権力と正面からぶつかる力をもちはしなかった。そして支配階級の侵略の陰謀は着々と進行していった。もちろん共産党を中心とする革命勢力は支配階級の戦争準備にたいするたたかいを開始した。しかしこれを未然にふせぎ、戦争を防止するための大きな反撃にでるという政治的な力は、労働者階級にはなお十分そなわってはいなかった。しかも共産党内部に於ても、日本の天皇制に対する評価のあやまりがあり、それは一九三一年の政治テーゼ草案となってあらわれた。この政治テーゼ草案は、日本に於ける天皇制を過小評価し、日本に社会主義革命の前提条件が急速に成熟しつつあるという情勢の分析の上にたって、来るべき革命の性質は、ブルジョア民主主義的任務を広汎に抱擁するプロレタリア革命であるという、革命の展望をだしているのである。しかしこのような革命の展望によっては、軍国主義を強化し、侵略戦争にのりだそうとし、満洲事変の陰謀をくわだてつつあった日本の天皇制権力との広汎なたたかいがみちびきえないことは、当然のことであった。この誤謬は一九三二年発表された三二年テーゼ「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」によって正されることとなったが、このような日本の情勢に対する分析、その天皇制の過小評価は、プロレタリア文化運動にも、影響を及ぼさないわけにはいかなかったといえる。

日本共産党は一九二七年七月、コミンテルンで決定された「日本問題に関するテーゼ」によって新しく活動を開始した。このテーゼによって党はその戦略戦術を具体的に明確にうちたてることができたのである。一九二七年は第三期のはじまった年であり、帝国主義戦争こそは反帝国主義革命を目標とする党にとってもっとも重大な問題であり、日本帝国主義の問題はまた緊切焦眉の問題であった。このテー

ゼによって日本の革命は具体的な展望、コースをもつことができた。二七年テーゼは、日本の革命の目標について、「日本に於けるブルジョア民主主義革命は強行的速度を以て社会主義革命に転化するであろう」という意味の規定をおこなっている。そしてこれは「三二年テーゼ」に通じる正しさを根本的にそなえているといえる。しかしこの日本の革命的戦略を変更しようという企てが当時あり、ついに三一年政治テーゼ草案となってあらわれたのである。しかしそれは当時の理論的水準に制約されたところである。三一年政治テーゼ草案の誤りは一九三二年七月二日「赤旗」特別号にのせられた「日本の情勢と日本共産党の任務」によって正される。一九三二年五月コミテルンの発表した、「日本の情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」こそは日本の革命の戦略戦術を明確に示し、これまで日本の革命運動内部にあった誤謬、天皇制の評価のあやまりと農業革命の過小評価のあやまりを克服した。一九三二年六月二四日日本共産党中央委員会は「日本の情勢と日本共産党の任務」の発表に当って次のように声明している。「……この巻頭論文は我々が昨年発表した『政治テーゼ草案』に対する重大なる批判を行っている。この意見は決してこの論文で始めて行われたわけではない。既に『インターナショナル』又は特別のパンフレットとして発表された同志達の論文の中にも表われていたものである。それがコミンテルン機関紙の巻頭論文として発表されたのは指導部の決定的意見であることを意味する。従ってこの見解に対する我々の態度は明白である。最高指導部の決定には忠実に服従する」

「三二テーゼ」の当面せる革命の性質のところには、「日本共産党は、国内における階級の力関係、ならびに日本において当面する革命の本質と任務に関して正しい、明瞭な思想をもたねばならぬ。党はこれらの根本的問題に関して党の列伍内にあるあやまれる思想を改めねばならぬ。当面の時期における国内階級の力関係、日本における来るべき革命の性質と任務は、封建制の異常に強大な諸要素と独占資本主義のいちじるしく進んだ発展との結合であるところの、日本の支配体制の特殊性を顧慮し分析せず

しては正当に評価しえない。」とかかれている。テーゼは日本の支配体制の第一の主要構成部分を天皇制、第二を地主的土地所有、第三を独占資本主義と規定し、この三つの根本的な要素よりなる支配権力とたたかう当面の革命は社会主義革命への強行的転化の傾向をもつブルジョア民主主義革命であると決定した。それ故に天皇主義的国家機構を粉砕することこそ日本における革命の主要任務の第一であって、それ故に日本革命の当面の段階の主要任務は第一に天皇制の廃止、第二に大地主の土地私有の廃止、第三に七時間労働制の確立なのである。

このテーゼは満州事変以後独占資本の危機をすくうにない手として表面にあらわれてきた天皇制、天皇制軍部官僚と徹底的にたたかうことを示しており、支配階級のくわだてた侵略の陰謀、満州事変の苦い体験の上にたって、さらに着々とすすめられる戦争、——中日戦争、第二次世界大戦にたいして全力をあげてたたかうことこそ日本の革命運動の任務であることを明にしているのである。このテーゼによって日本共産党を中心とする革命運動は、その目標をはっきりと定め、度々の弾圧にもかかわらず、全力をつくしてたたかうことができたのである。

四

満州事変は恐慌による危機を戦争と侵略によって解決しようとする日本帝国主義の打開策であった。日本軍国主義の支配はここに最初の第一歩をふみだしたのである。支配権力はこれによって危機の打開をはかり、中国に広汎にひろがった革命運動をおさえようとしたのであるが、危機は一応のばすことができたとはいえ、さらに矛盾は激化し、中国に於ける反日帝運動はいよいよ大きくなって行った。そしてついに日本は世界に於て孤立し、中日戦争、太平洋戦争と泥沼の道をふみこんで行くことになるので

ある。

恐慌による危機を戦争によって打開しようという考えをもって、満州侵略を計画したのは軍部を中心とするファシストたちであるが、一九三〇年陸軍の中堅将校を中心に、国家社会主義を実現し、満州問題を解決する目標をもって桜会という結社がつくられている。桜会のメンバーは民間の国家主義者とさらに結び、一九三一年三月クーデターによって、陸軍大臣宇垣一成内閣をつくり満州侵略にすすむ陰謀をすすめた（三月事件）が、彼等は満州事変以後、さらに同年一〇月クーデターを計画し、失敗に終っている。しかしその後血盟団事件（一九三二年二月）五・一五事件（一九三二年五月）二・二六事件（一九三六年二月）等へ発展して行くのである。

一九三二年には上海事変が起される。これは陸軍の満州事変に刺戟されて海軍が起したものである。しかし中国軍のはげしい抵抗に出会い、さらに大部隊を送ったが、侵略の成果をあげることができず、失敗に終ってしまった。

満州事変から中日戦争までの期間は、独占資本の国家独占資本へ移行して行く時期である。満州事変によって日本の資本主義は恐慌からぬけだすようにみえた。国際的にはダンピング政策をとり、国内的には軍需品を公債により調達する政策をとった。このため国際的には通商上に於てもいよいよ孤立し、国内的には軍需インフレーションが進行して行った。軍需生産を担当する重工業部門はにわかに大きくなって行った。そしてこれらの軍需生産を受持つ資本の利益のために、国家は重要事業統制法、日本製鉄会社法等をつくり経済統制を行いはじめるのである。

このようなかで労働者の生活はどうであったかといえば、軍需インフレによって、いくらか失業者の数を減じたとはいえ、その生活は実質賃金の低下によって、少しもよくはならなかった。しかもこの時期の雇用の特徴は「臨時工」雇用であり、これによって低賃金と労働時間の延長をもたらしたのであ

る。また農村に於ては農業恐慌はひきつづき尾をひき、危機はさらに尖鋭な形をとってせまってくる。

このような情勢の下に労働者階級の帝国主義戦争反対の闘争は、ようやくはげしくなって行った。満州事変以後社会民主主義政党はこの上なく動揺し、社会民衆党は満州事変を支持して国家社会主義の方向にすすもうとするものと、社会民主主義をまもりつづけようとするものの二つに分裂した。全国労農大衆党は帝国主義戦争に反対し、即時撤兵、対支内政絶対非干渉を政府に対し要求した。しかしそのたたかいは具体的に行われることはなかった。これらの政党の活動範囲はいよいよせばめられてくる。そのなかで社会民衆党は分裂を起したが、単一無産政党の樹立をめざして、社会民衆党と全国労農党が合同し、社会大衆党を結成した。しかし社会大衆党はその改良主義の立場によって、ほんとうに労働者階級の戦争反対の要求を十分とりあげるということはできなかった。

労働者階級の反帝国主義戦争の闘争をみちびくことができたのは共産党であった。党の指導した反戦闘争はじつにするどい形をとって行った。三二年七月には中央に軍事部をおき、小型雑誌「兵士の友」と「高いマスト」を発刊して、軍艦内に細胞（軍艦長門、榛名、山城）をつくり、じつに活潑な活動を行った。この影響により日本軍隊内には戦争を拒否し武装解除されて、内地に送りかえされる兵隊がでるほどであった。

労働者階級の闘争はさらに大きくひろがろうとしたが、上海事変に際しては中国の労働者階級を中心とする反帝国主義侵略のたたかいと結合することができたのである。これらのたたかいはまた中小企業の労働者のなかにもおしすすめられた。臨時工の労働条件をたたかいとる運動もひろがろうとした。農村に於ては小作争議がひろく起されたが、それは労働者の闘争とともに、支配階級にたいする大きな打撃となった。農村に於ける土地闘争は貧農だけではなく、中農層にまで及び、統一的な形が全体として生れでようとしたのである。そしてそれは弾圧によって労働運動の高まりが沈まってからも、いよいよ

はげしいものになって行った。
このような情勢の下に農民の困窮をすくい社会改革をめざす急進ファシズム運動もまた起ってきた。これは軍部と結合して運動をすすめようとするものであって、満州事変後急速にたかまった。しかし五・一五事件以後、一九三三年以降には沈滞し、日本のファシズムは全く軍部を中心として、新官僚勢力をあわせながら、前進して行くのである。

この時期に国家権力は経済に対する統制にのりだしはじめたが、さらに文化思想に対しても統制を行った。国民精神総動員の体制は着々ととのえられて行ったのである。これは一九三二年一〇月から翌年の始めにかけて共産党幹部に対する検挙が行われ、党が大きな打撃をうけ、革命運動が守勢になりはじめてから、いよいよ露骨になっていった。思想弾圧、言論弾圧は強化され、社会主義、共産主義思想にかぎらず、あらゆる自由主義的な言論さえも禁止の対象となった。プロレタリア文化運動の中心組織である日本プロレタリア文化連盟も、官憲のはげしい弾圧をつづけさまにうけなければならなかった。一九三三年京大に滝川事件が起った。滝川教授の著書『刑法読本』が赤化思想であるというので、文相鳩山一郎が辞職を要求し、これにたいし法学部教授会、学生たちは大学の自治、学問の自由をまもって立ち上ったのである。しかしいよいよはげしくなるファシズムの文化弾圧をくいとめるということはできなかった。学問の自由は次第に失われて行くほかなかった。共産党はこのようななかで、多くの困難にうちかち、軍に対する献金反対のたたかい、米よこせのたたかい、戦争反対のたたかいをつづけていった。しかしもはやそれは文化運動とのつながりをもつことはできなくなって行った。

五

全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）を解体して、日本プロレタリア文化連盟（コップ）を結成しようという、プロレタリア文化運動の新しい組織方針は、一九三一年六月「ナップ」に発表された蔵原惟人の『プロレタリア芸術運動の組織問題』にはじめて明にされた。一九三〇年八月モスコオでプロフィンテルン第五回大会がひらかれ「プロレタリア文化および教育組織の役割と任務に関するテーゼ」が決定された。この決定は資本主義の全般的危機の第三期に入って、資本家階級の労働者階級に対する攻撃がたんに政治及び経済戦線ばかりでなく、文化戦線に於ても激化されるにあたって、社会ファシズムのイデオロギー攻勢とたたかうためのプロレタリアートの文化、教育活動の基本方針となるものであった。イデオロギー闘争もまた国際的な階級闘争の一環として考えられ、たたかわれなければならないことが明にされ、その活動の組織形態と方法が示されたのである。

一九三一年日本に帰ってきた蔵原惟人はこの方針に従ってプロレタリア文化運動と労働組合運動とをかたく結合させることによって、これまでの文化運動の街頭的な面を克服し、ほんとうに文学運動を労働者階級のものにしようとしたのである。

プロフィンテルン第五回大会のアジ・プロ会議の決議、「プロレタリア文化＝及び教育の諸組織の役割と任務」は第四回大会以来、「プロレタリア文化、及教育の諸組織に於て革命的反対派の影響が著しく成長したこと」を指摘している。「プロフィンテルン所属員とは、彼等の勢力を集中したという意味に於て、また社会ファシスト的指導者どもに対する闘争に於て統一戦線の設立に関して若干の成果をあげた。彼等はまたその国の××的プロレタリアートが当面している一般政治的諸任務と文化＝及び教育の諸組織とをより密接に結合させることを果した。」のである。「しかしそれにもかかわらず社会ファシスト的指導下にある諸組織内の独立の、××的な文化＝及び教育の諸組織と××的な労働組合反対派の諸勢力を過重評価しようとするならば、それは誤りだろう。それらのものにはなお大きな諸欠陥がこびり

ついている。欠陥の最も重要なものは次の通りである。それらの活動に於て大衆を目あてにすることが欠けている。プロレタリアートの階級闘争と歩調をあわせていない。諸経営と何等の接触を持っていない。企業家諸団体に対する闘争が弱い。労働者階級の独自のイニシアチーブを利用することを理解していない。その活動には相互的競争の諸要素が存在している。特にスポーツ組織にそれが多い。それらは××的労働組合及労働組合反対派と何等の直接な密接な結合を持っていない。それらの活動は男女労働者の日常の困窮及直接の生活要求と結合されていない。」

このように決議はなお文化教育活動がプロレタリアートの階級闘争と歩調をあわせていないことを指摘している。それではほんとうに社会ファシストの組織する文化反動と十分たたかい、それを打ち破ることはできないのである。

文化反動に対する闘争の組織形態と方法は何だろうか。決議は次のようにいっている。「革命的政治大衆教育の領域に於てプロレタリア文化＝及び教育諸組織に課された任務は、ただ革命的労働組合及び労働組合反対派、の指導の下にのみ遂行することができる。故に労働組合とプロレタリア文化＝及び教育諸組織との指導機関に相互に代表を送りあうことが最も重要である。なおその上革命的労働組合は、そのカンパの遂行に際してもまた日常的な労働組合宣伝煽動に於てもプロレタリア文化及教育の諸組織をとり入れねばならない。プロレタリア文化＝及教育諸組織の活動の主要内容をなすものは、次の諸任務でなければならない。aプロレタリアートのすべての実際的政治経済的諸任務の組織的な解説、b文化反動に対する闘争への大衆の動員、c男女労働者の日常の文化及び生活要求の観察、この目的のために革命的文化及教育諸組織は改良主義的諸組織内の反対派と協同して、革命的プロレタリアートの諸任務に適応して、社会ファシスト及び企業家の労働者階級の余暇への『配慮』に対抗して、文化的休養と娯楽との独自の諸形式を完成せねばならない。

活動は絶対的に各国の特殊事情に基いて建設さるべきである。労働者階級の上層のためのものときめられている改良主義『文化クラブ』とは反対に、革命的『文化活動』は最も広汎な労働者大衆を捉えるべきである。プロレタリア文化諸組織は革命的労働組合と労働組合反対派の組合員獲得に対する活動領域となるべきである。それの活動の方法と形式は、政治的・文化的水準に応じて個々の労働者の群にあてはめられねばならない。高度の技術的発展をもち、多年の革命的運動をもち、すべての労働者が初歩的教育を修得している諸国と読み書きできぬものの、割合の高い後進国とでは、別の活動形式が必要である。しかしいかなる場合に於ても、労働者の独自のイニシアチーブがその活動の土台石とならなければならない。」

六

蔵原惟人はこの国際的な方針を日本に具体化した。蔵原惟人はナップに執筆した二つの文章『プロレタリア芸術運動の組織問題』（一九三一、六月）『芸術運動の組織問題再論』（一九三一、八月）によって日本に於ける文化運動がいかに組織されるべきかを論じているが、これはナップの自己批判であり、その上にたってプロレタリア文化運動の前進をはかろうとしたものであった。この文章の重点は次の点にある。

「ナップ所属の各同盟は、昨年の春の大会に於いて一斉に『共産主義芸術の確立』『芸術運動のボルシェヴィキー化』の新しい方針を採用した。そしてそれは全く正しかった。何となれば、わが国の共産主義運動の、従って又それに従属する芸術運動の基本的任務は、ブルジョアジーとプロレタリアートとの決定的闘争を前にして、労働者階級の多数をその影響下に獲得することであり、そしてそれは、唯労働

者階級の中に於ける、ブルジョアジーの手先である社会ファシスト（芸術運動にあってはその芸術）との無慈悲的な闘争によってのみ初めて可能であるからである。しかし方針の問題は常に組織の問題である。我々がもし芸術活動の方向のみをボルシェヴィキー化し共産主義化して、組織を問題としないならば、我々の影響は唯イデオロギー的影響にのみ止まるであろう。だが我々にとってイデオロギー的影響は、それが組織的影響となって初めてその実践的意義を獲得するのである。この意味に於いて、昨年の春、芸術運動のボルシェヴィキー化の方針が採用されながら、それが直ちに組織の問題とならなかったところに、全体としては正しいところの方針の一面性、中途半端性があったといわなければならない。」

蔵原惟人はナップの方針、社会民主主義と徹底的にたたかい共産主義芸術を確立するという方針の正しさを改めて確認し、日本の芸術運動が、企業の労働者に基礎を有しない点を明にし、企業内に文化組織をつくって行くにあたって、次のように示すのである。「凡そ企業内に於ける総ての文化組織は、これをプロレタリア文化団体の立場から見るならば、ブルジョア及社会ファシスト的文化と闘争して労働者の間に真実のプロレタリア文化を普及せしめると共に労働者自身の中から文化領域に於ける働き手を獲得するという任務を有するものであるが、これを運動全体の見地から見るならば、プロレタリアートの基本的組織（党及び組合）の政治的および組織的影響を労働者の間に拡大し、その指導の下に労働者を動員する為の補助機関でなければならない。」

蔵原惟人はこのようにして職場に労働組合との密接な連絡の下に企業中に労働者自身の文学グループ、演劇グループ、美術、映画、音楽グループ等を組織し、所属の同盟員がこれらのグループを指導してゆくことを主張する。そしてこれらのグループの任務は一は、ブルジョア及び社会ファシスト的芸術の影響下にある労働者を、プロレタリア芸術の影響下に獲得すること、二は何らかの芸術的技術をもっている労働者に対する技術的、イデオロギー的指導なのである。

ナップは企業内に於ける芸術活動を唯「持ち込み」としてのみ理解してきたが、労働者自身の組織を企業内に作ることこそ重要なのである。これによって従来作家同盟内で論議されてきた「作家と生活」の問題も自ら解決される。またプロレタリア芸術そのものに確固たる労働者的基礎を与え、労働者自身の中から作家芸術家をつくりだすことも可能になる。この企業内の芸術組織は芸術的組織であると同時に常に政治的組織であって、その芸術的任務はその政治的任務と切り離して考えることはできないし、企業内に於ける芸術活動は全体としての共産主義運動の政治的任務と結びついてこそ始めてその全き意義を獲得するのである。もちろんこのような組織はまた農村に於いて農業労働者及び貧農小作人の間に持たれなければならないものである。蔵原惟人はこのように説き、最後にナップそのものの組織について明にし、ここに日本プロレタリア文化連盟の構想が明にされるのである。

「今日までわが国のプロレタリア文化運動は芸術を中心に発達してきた。併し文化運動には他の極めて重要な部門がある。主なるものだけでも、反宗教、スポーツ、ラジオ、教育、科学、エスペラント等を挙げることが出来る。そしてその中でも、スポーツ、教育科学、エスペラント及び反宗教は不十分ながら既にその組織をもっている。で、プロレタリア文化運動が真にこの国の共産主義運動の一翼として活動し得る為には、是非共それらを統一する全国的中心が作られなければならない。」この文化団体の中心が日本プロレタリア文化連盟なのである。この文化連盟こそは政治闘争、経済闘争と離れたところに、「プロレタリア文化」を建設しようとする非政治主義、文化主義を克服し、ほんとうにたたかうプロレタリア文化を創造するための組織なのである

七

ナップはこの提案にしたがって、七月一二日、芸術団体に科学団体を加え、文化連盟の結成を決定し、ナップ加盟団体のほかに、プロレタリア科学研究所、新興教育研究所、新興医師連盟、無産者産児制限同盟、日本戦闘的無神論者同盟、日本プロレタリア・エスペランチスト同盟が加わって、八月二〇日より懇談会、準備会をひらいて、一〇月七日、各団体より選出した正式中央協議員を決定し、一一月一二日ナップを解散、一一月二七日日本プロレタリア文化連盟を創立したのである。

中央協議員

中野重治、壺井繁治、中条百合子、小林多喜二、岡本唐貴、大月源二、村山知義、土方与志、小野宮吉、佐々元十、岩崎昶、貴司山治、土井栄二、福田上一、山本正夫、武藤丸楠、牧島五郎、永田広志佐野袈裟美、寺島一夫、風早八十二、小川信一その他二十九名である。名誉協議員としてゴルキー、ミュンツェンベルグ、マイケル・ゴールド、バルビュス、片山潜、魯迅等がおされている。

この日本プロレタリア文化連盟の考えは、一九三一年はじめにだされていたが、この結成をうながしたのは満州事変に突入した日本軍国主義の前進である。文化運動はここに国際的な方針に従うことによって統一的中央部をつくり、すすんで行くファシズムとたたかう体制をととのえたのである。

ナップ解散と同時に、その出版社としてあった戦旗社も一二月戦旗終刊号をだして解散し、コップは新に機関誌『プロレタリア文化』を一九三一年一二月より創刊したが、この一二月には中国に於ても中国左翼文化連盟が結成されている。コップはさらに一九三二年一月「働く婦人」二月「大衆の友」を創刊、婦人、労働大衆の啓蒙運動をはじめ、専門活動家と大衆との結合を具体的に実践したのである。それと同時に参加盟団体では、その専門の機関誌を創刊した。作家同盟の機関誌は「プロレタリア文学」であり、日本プロレタリア劇場同盟の機関誌は「プロット」であり、日本プロレタリア美術同盟の機関誌は「プロレタリア美術」である。日本プロレタリア文化連盟は、一、ブルジョアジーの文化反動政策と

の闘争。二、ブルジョア・イデオロギーとの闘争。三、労働者、農民、其の他の勤労者の日常的文化的生活的欲求の充足。四、文化教育施設のブルジョア的独占との闘争。五、植民地、半植民地に於ける帝国主義文化支配との闘争。六、ソヴェート社会主義文化の擁護。七、文化活動のための労働者幹部の養成等これらの主要任務を遂行するために、次の基本的任務を決定している。

一　ブルジョアジー、ファシスト、及び社会ファシストによる文化反動との闘争

二　労働者、農民、その他の勤労者の政治的経済的任務の系統的啓蒙

三　労働者、農民、その他の勤労者の文化的生活欲求の充足

四　マルクス＝レーニン主義の上に立つプロレタリア文化の確立

このようにして「コップ」は国際プロレタリアートの当面の課題を自分の課題としてにない、日本のプロレタリア文化運動を統一し、たたかう文化の創造と文化のたたかいを全国的におしすすめたのである。

コップの成果は大体次の三つにあるといわれている。

一、従来の文化運動がともすると街頭的、セクト的になりがちであったのを、企業・農村にサークル組織をつくることによって、広汎な大衆と結びつき、イデオロギー的影響を組織的に確保した。ここから従来少なかった労働者農民出身の新しい作家たちも生れてきたのである。このことは重要なことである。それはプロレタリア文学の作家たちに希望をあたえることとなった。労農通信員の活動はまたこの時期にもっとも活潑になったといえる。

二、文化理論、文化闘争の思想の確立。プロレタリア文化運動に於ける党派性の確立。

三、出版活動の増大。

「プロレタリア文化」「大衆の友」「働く婦人」「文学新聞」「プロレタリア文学」等の出版物が増大しその発行部数は一時一六万に達した。

さらに重大なことは日本プロレタリア文化運動が直接に国際プロレタリア文学運動と結合することができたということである。日本プロレタリア作家同盟は一九三二年二月国際革命作家同盟（モルプ）に加入、その日本支部となった。日本プロレタリア演劇同盟は国際労働者演劇同盟の日本支部となった。この文化運動の発展にあたっては、日本共産党の文化指導が大きな役割をはたした。党は各文化団体内にフラクションを組織し、その活動を通じて活潑な指導を行った。

八

このようなナップのコップへの発展の過程のなかで、プロレタリア歌人同盟は一九三二年一月第三回大会をひらいて解体を決議し作家同盟へ解消、プロレタリア詩人会は三月大会をひらいて解体を決議し作家同盟へ解消した。そしてコップの文化闘争は、これまで分散していた力を集中して、この上なく大きくひろがろうとした。

しかしこのような文化運動の発展は、権力の注目するところとなり圧迫は次第につよまってきた。刊行物は発売するやただちに禁止され、映画演劇の上演もさしとめられ、集会禁止もしばしば行われたがついに一九三二年三月二四日、二六日の大弾圧となった。そしてそれはさらに六月末までつづけられた。検挙総数は四百人、そのうちに作家同盟百人、科学同盟五〇人に及んだ。このとき検挙された作家は山田清三郎、窪川鶴次郎、壺井繁治、蔵原惟人、中野重治、村山知義、宮本百合子、平田小六等である。このため作家同盟は第五回大会を四月二二日—二四日にひらく予定であったが、延期しなければならなくなった。検挙をまぬがれたのは小林多喜二だった。小林多喜二は、逮捕をのがれて非合法活動にはいっていた宮本顕治、杉本良吉等とともに、各団体に協力してコップの再建とその活動に全力をつく

した。

そのコップ再建の活動は、弾圧直後すぐはじめられ、四月「われらのグラフ」（コップ）「われらの科学」（プロ科）を創刊、さらにコップ第一次革命競争を計画し、再建のための団体間の相互競争が行われた。

革命競争の内容は

一　新同盟員の獲得
二　サークルの拡大
三　出版物の発行部数及配布網の拡大
四、通信員の増大等であった

第一期は、三二年四月一六日より八月一日までであった。第二期は九月四日より一一月七日まで、第三期は一九三三年一月一二日より五月一日までであった。

先ず「暴圧を蹴って文化連盟を守れ」の方針を中央協議会で決定、再建運動をつづけ、それは次第に成果をおさめてきたが、政府の圧迫はゆるめられるということはなく、弾圧は益々つよくなるばかりであった。作家同盟はこのようななかに五月一一日第五回大会をひらいたが、ただちに解散を命じられ川口浩、徳永直、池田寿夫、貴司山治、松井圭子、後藤郁子が検挙された。同盟員、傍聴者、全大衆は「日本プロレタリア文化連盟万歳」「同盟解散絶対反対」を叫んで、デモにうつりだした。江口渙委員長を先頭に同志達を奪還せよと大衆デモを組織し、築地署へおしかける途中、江口委員長外七名を奪われたが、大衆の抗議によって奪い返している。大会はこうして解散したが、すでにこれまでの闘争によって生れた新方針、「一九三一年度に於ける運動の方向転換を、一九三二年度の闘争の中に正しく発展せしめ、組織活動、教育活動、創作活動の弁証法的統一によって運動のレーニン的段階を建設するため

の」新方針は決定されていた。このとき同盟員は三一三、支部二一、影響下のサークル二六。（四五〇〇名）機関誌「プロレタリア文学」七千、「文学新聞」二万五千である。
コップ結成後、機関誌「プロレタリア文学」の創刊以来の目標は、先ず第一に作家同盟に結集するプロレタリア作家を絶えず指導し、文学に於けるボルシェヴィキ的党派性の確保のためにたたかって行くことである。それは具体的には組織の問題と創作方法の問題を統一して解決して行くということであった。第二は今迄閑却されていたブルジョア・ファシズム及社会ファシズムの文学に対する闘争をすることであり、第三には最近殊に活潑になって来た通信員活動を組織化し、それと密接に結びつくことによって大衆のイニシアチーヴによる実習的な編集を行うことであった。そしてここに組織問題と創作方法の問題を、互に相関連している問題として解決して行こうとする努力が生れてくるのである。
もちろんこの提案は蔵原惟人の「芸術運動の組織問題再論」によってなされたのであるが、さらに「プロレタリア文学」（一月号）に「創作方法の問題について二、三」という題で川口浩によって取り上げられ、さらにまた「組織活動と創作方法の弁証法」という題で小林多喜二によって論じられている。そしてここに、あらゆる問題を組織の問題のなかにうつして、そこで具体的に解決しなければ、正しい解決は得ることができないとする新しい文化運動の中心的な考えがある。これまでの文学運動に於ては文学運動のボルシェヴィキ化の方針を組織の問題に移すことができなかった。そして専ら創作方法の問題だけに没頭した。しかしそのようなやり方では創作方法の問題をも正しい解決に導くことはできなかった。そして川口浩は次のように論じている
「先ず第一に我々は、それまで我々の創作方法として認められてきたプロレタリア・リアリズム論及びこれを裏づける文学（芸術）上の諸理論に対して、なんらの闘争も行わなかった。反対に『プロレタリア・リアリズムの貫徹』という曖昧な妥協的標語（第二回大会に於ける）によって、批判の任務を全

く放棄してしまった。このことは更に『芸術大衆化に関する決議』の中にもそっくり引きつがれた。我我はプロレタリア文学の『卑俗化』の理論と闘争したが従来のプロレタリア・リアリズムの理論に対しては、なんらの闘争をも行わなかった。」「だが、我々が新たな段階の見地から、深刻な自己批判を展開しなかったことの誤りは、単にそれだけのものとしては留まらなかった。それはプロレタリア文学の内容の問題は既に解決した。残された問題はただ形式の問題だけである。というかの如き印象を与え、それによってその後に於ける一連の形式主義偏向―内容と形式との分裂的理解、内容を離れての新形式の探究への道を開いた。まずその例は『文学形式に関する討論』や作品批評等に於て見られたと思う。次いで昨年の終頃から作品の固定化、一様化、類型化の事実が見られるや、階級的規定を含まない作品の多様化という標語が掲げられ、創作的実践に於ては『主題の積極性』を欠いた作品が多くあらわれるようになった。」このように論じて川口浩は革命的観点、革命的世界観、唯物弁証法的な見方を取りかえし、それによって創作方法を正しいものにして行かなければならないと主張する。この考えの中心点は、世界観、創作方法、組織活動の統一ということである。

　この考えがどのように具体化されるかということは小林多喜二が徳永直のプロレタリア大衆向長篇小説の提案に対して行った批判、『「文学の党派性」確立のために』にはっきりあらわれている。そしてこれらの問題は作家同盟の第五回大会の小林多喜二の報告『プロレタリア文学運動の当面の諸情勢及びその立ち遅れ」克服のために』(「大会議事録」)のなかにくわしく取扱われている。そしてこれは新しい文化理論、蔵原惟人の『プロレタリアートと文化の問題』宮本顕治の『政治と芸術』とともに、日本のプロレタリア文学運動をみちびく、すぐれた理論的指針であったということができる。

九

その最初の現在の社会情勢の分析ならびにそれに対するプロレタリア文学運動の戦略、及びそれ従に属する作家同盟の任務についての一般的な指示については、藏原惟人の考えとほとんどかわるところがないので略するが、いまその報告の示している作家同盟のぶつかっているいろいろな困難とその解決策について取上げてみると、先ず創作に於ける理論と作品活動の間のギャップである。

「このギャップを生んだ客観的主観的困難の主なるものは、第一にこの問題も又我々の組織上の発展をまたずには単独に発展することが出来ないという点にかかっている。然るに我々の全運動（殊に組織活動）はその過渡期に当面している。既に述べたように、我々の方法、＝世界観の獲得、その芸術的概括は教科書の中からの勉強によっては得られない。作品活動も従って我が作家たちが組織の中で、プロレタリアートの日常的、革命的実践に正しく参加することの中から得られる。……第二に、企業経営内及び農村に於けるサークルで、作品を取りあげての具体的批評活動が系統的になされていない。特定の選ばれた、職場を離れた専門家にのみ、その批評が委されている現状が即刻改められなければならない。大衆の面前での中での（勿論我々の専門批評家をも含めての）批評活動が、我が作家たちのうちに現れている観念的傾向の最も手厳しい批判となるであろう。……第三の点は、組織の中での闘争の経験を持つ企業内の最も近代的なタイプとしての労働者作家の比率を、我が作家同盟がまだ極めて不充分にしか（否、殆ど）持っていないことと結びついている。プロレタリア文学の建設者として、これらの作家の獲得の重要なことは云うをまたない。我々は獲得しなければならない作家を特に労働者出身の作家という風に云うだけでは充分ではない。殊に多くの労働者はブルジョアジーの反動文化のもとにさらされて

いる関係上、封建的な卑俗な現実主義的傾向を持っている。然しそれらはただプロレタリアートの組織の中で、その闘争の中で訓練されることによって、新しい型（タイプ）の労働者たり得る。……——これと同時に云えることは（丁度その裏返しとして）小ブルジョア出身の作家は、己れ自らを組織の中の活動に結びつけ、その名状すべからざる困難な闘争の過程で、種々な挾雑物を発展的にふるい落さなければならない。この両方のことがなされなかったために、（その両方のことがなされるためには矢張り新しい労働者作家の獲得が前面に押し出されなければならないのだが）創作方法上の獲得が作家にとって具体的なものとならなかったのである。

最後の点は、我々の作家たちの、政治的、経済的情勢に対するマルクス・レーニン主義的観点の不充分さと、従ってそこから何時でも起る客観情勢への後からの「追い掛け」ということが原因に数えられる。このことは殊に最近の戦争とファシズムを取扱った同盟員及同盟員外からの沢山の作品のなかに共通にあらわれている。——この点でも、我々の作家たちはプロレタリアートの前衛に劣らぬ、否それと同じ政治的教養の達成に進まなくてはならぬ。」

次に、組織活動の報告のところで、注意すべきことは、次の「ブルジョア文学組織内に於ける『反対派』活動に対して今迄殆ど方針が樹てられていなかった」という指摘である。「これからうける弱さは、例えば『文戦』の分裂の際にあらわれている。我々は彼等のうちに反対派を残すことによって、外からの攻撃と共に内から彼等を壊滅させなければならなかった。この『反対派』組織の問題については、それぞれのブルジョア文学組織の特殊性の誤らない調査、それに従っての屈伸性ある具体的方針の樹立、更に反対派活動がその中で解消するのではなしに、活動の独自性が保たれるよう考慮されなければならない。」

一〇

このような方針に従って、作品活動はどのようにはたされただろうか。まず小説からみるならば、小林多喜二の『転形期の人々』『沼尻村』『地区の人々』『党生活者』等があげられなければならない。『転形期の人々』はナップの一九三一年一〇月号より発表され、それをうけて「プロレタリア文学」に連載されたものである。この作品と他の二作によって、小林多喜二は理論と創作活動のギャップを、おいつめたということができる。彼こそはコップ結成の方針、その基本的任務をのこるところなくはたしたたかいつくした作家である。またこの新しい方針にしたがって橋本英吉は『地底の英雄』(『改造』一月)を書き、立野信之は『春』(「プロレタリア文学」一月—五月)を書き、窪川いね子は『何をなすべきか』(中央公論」三月)を書き、須井一は『踊る』(「プロレタリア文学」四月)藤森成吉は『争う二つのもの』(「改造」六月)を書いている。

しかし弾圧はひきつづき行われ、検挙は職場やその他のサークル内部にも波及して行った。そして次第に文化活動そのものがすみずみまで監視をうけ、すすめることが困難になって行った。このような引きつづく弾圧のなかに、作家同盟員のなかには右翼的偏向が生れて来る。そして今後右翼的偏向とのたたかいが、重要な課題となる。すでに四月末出獄した林房雄は、新しい長篇小説『青年』にとりかかり、七月には『文学のために』(「改造」)という獄中での感想を発表し、つづいて『作家として』(「新潮」)を書いて、政治と文学の問題をめぐって、これまでのプロレタリア文学運動にたいする疑問を提出している。しかし林房雄の提出した問題は必ずしも林房雄一人にあった問題ではなく、創作活動を政治方針に統一する点で多くの作家はむしろ困難を感じ、苦しんでいたのである。この点についは立野信之の小

説『友情』などに明にされているところである。作家同盟では六月に「右翼的危険との闘争に関する決議」(三月常任中央委員会決議)をさらに徹底することを決定したが、後期に於てはこの右翼的偏向に対するたたかいをきびしく実践しなければならなかった。それをおしすすめたのは、小林多喜二、宮本顕治、中条百合子等であった。

宮本顕治は『政治と芸術・政治の優位性の問題』により、小林多喜二は『右翼的偏向の諸問題』により、敗北主義とたたかった。中条百合子は『一連の非プロレタリア作品』により、右翼的偏向をもった作品をきびしく批判し、自分の作品として、『一九三二年春』を発表した。しかしいよいよはげしくなる弾圧の下にくずれはじめた作家同盟の結合を再びもとにとりもどすということはできなかった。これらの指導部を中心にした指導的な理論も、必ずしも政治と芸術の関係を十分明にすることが出来はしなかった。蔵原惟人の芸術論にすでにあらわれている芸術の本質についての追求の不十分さが、小林多喜二にも宮本顕治にもそのままうけつがれていたからである。それ故に一人々々の作家の芸術上の苦しみ、芸術創造上の困難は、これらの人たちに十分くみとられることはなかったのである。これと同じ問題ではないが、同種の問題が宮本百合子の藤森成吉の『亀のチャーリー』加賀耿二の『樹のない村』『幼き合唱』等の批判のなかにもみられるのである。そして作家同盟の指導部と同盟員との間は次第にはなれて行くこととなる。

一九三三年二月二〇日小林多喜二は築地署に検挙され虐殺される。このとき労農葬は全国的に行われ、「プロレタリア文化」「プロレタリア文学」「文学新聞」「大衆の友」「働く婦人」等が抗議特集をだし、コップは二月二〇日を文化デーと定め、最後まで労働者解放のため、階級闘争を放棄することなく英雄的にたたかった小林多喜二を記念して小林賞を設定した。さらに作家同盟常任中央委員会は「右翼的偏向との闘争に関する決議」を四月に発表し、全員が結束して全力をつくしてたたかいを前進させ

ようとした。しかしそれはさらに強化されて行く弾圧の前に長くはつづかなかった。その上ソヴェート文学に於ける創作方法の問題に関する討論に於て「唯物弁証法的創作方法」というスローガンに誤謬があったこと、ソヴェート文学は社会主義リアリズムによってはじめて正しい発展を示すということが明にされ、この報道が日本にもたらされるようになって以来、同盟員のうちにさらに動揺はひろがって行った。それはこれまでのプロレタリア文学の理論にたいする疑いを深め、指導部不信の声をあげさせたのである。

創作方法に於ける「弁証法的唯物論」というスローガンは何故誤っていたのか。その歴史的・実践的意義はどうか。さらにでは作家同盟のとるべき芸術的方法とは何か。これらの問題がソヴェート同盟で一年間にわたって行われてきた討論の成果を十分摂取して、明にされなければならないという要求が各所におこってきた。そして日本に於ても川口浩、徳永直、森山啓、長谷川一郎等の間で、この問題をめぐって討論が行われはじめたが、その解決をみることはできなかった。既にばらばらになりはじめた文学者たちは単独で同盟からはなれて、これについての自分の意見をだしはじめた。

この間に佐野学、鍋山貞親が転向声明書を発表し、それはプロレタリア文化運動に大きな影響をあたえることとなった。コップ常任中央協議会ではただちに「ファシスト佐野、鍋山等の裏切りに際して声明す」という檄文を発表した。しかしそれはコップ内の動揺をすべておさめるということはできなかった。これによって転向にみちびかれるものも、次第にでるようになって行った。

二

一九三三年後半にいたり、作家同盟内に於て、政治と文学とを切りはなし、ただ作品活動のなかに於

て自分を深めようとする傾向が強く生れてきた。九月徳永直は「創作方法の新転換」を発表し、従来の創作方法上のスローガンと批評の観念的にしてまたは極左的な傾向にたいする不信と反撥とをばくはつさせたのである。これに対して鹿地亘と大場文夫は、徳永直を「転落者」「攪乱者」としてきびしく批判し、大場文夫は佐野、鍋山を補うものなどとさえのしっている。また林房雄は『プロレタリア文学の再出発』(「改造」一〇月)を書き「現在の日本プロレタリア作家同盟はその名前にも拘らず作家の同盟ではない。半作家、半政治家の集合体である。だから文学団体としても政治団体としても役に立たない。」といい切る。作家同盟は林房雄のいう、幹部と反幹部、指導部と作家側との対立を外部にたいしてもかくすことができないほどになってきたのである。プロレタリア文学の衰弱ということは一九三二年来批評家、ジャーナリズムに於ていわれてきたことであるが、もはやそれを認めないわけにはいかなくなってきた。

さらに近く治安維持法が改められるという気運が起りつつあった。国体変革と私有財産否認に対して従来は同一の制裁をもって臨んでいたが、それを別個の取扱いにし、国体変革にたいしては死刑をもってのぞむというのである。それにつづいて新聞紙法及び出版法もまた改められることとなり、作家同盟の組織も同盟員も全く合法的存在でなくなってしまうという問題が起ってきたのである。しかしこの問題に対して指導部はほとんど解決策をもっていないといってよかった。一二月に作家同盟は「当面の諸問題について大衆的討論を組織せよ」という号外をだして、あらゆる困難な問題を全員の力で解決しようとはかったが、その解決策が生れるということはなかった。すでに一一月には宮本顕治は検挙されていた。

このような状態のなかで鹿地亘は、「文学運動の新たなる段階のために」と題するパンフレットをだし、これまでのプロレタリア文学運動全体にわたっての自己批判を行い、そのセクト主義と政治主義的

欠陥を指摘した。そしてそれは蔵原惟人の指導理論を批判し、芸術運動の独自性を改めて強調しているのである。さらにその文章は蔵原惟人の理論によって、社会民主主義者と闘争し、社会民主主義の影響下にあった作家たちを排撃してきたことにたいして自己批判し、すすんで行くファシズムの前に日本の全文学者が一致してあたるべきであり、そのためにこれまでの文学運動を根底から考え直さなければならないという新しい考えを示している。しかしこの提案は組織的になされたとはいえなかった。そしてこの文章はむしろ同盟解散の緒となったのである。

一九三四年三月一二日ついに作家同盟は解体声明を発表した。三月二八日美術家同盟は同じように解体声明を発表、五月には「プロレタリア文学」は終刊となった。七月プロット解体決議、一二月末文化連盟所属団体は、プロキノ、科学同盟、プロフォト、戦無等六団体約四三〇、未解体団体員（ナルプ、美術同盟、プロット）約一五〇名であった。

その後再建運動はつづけられたが、次々とつづく弾圧によってそれもついに壊滅させられてしまうのである。

この間一九三三年六月雑誌「文化集団」が発刊され、一九三四年三月「文学評論」が創刊され、作家同盟とは別個に新しい創作方法の検討が行われたが、「文化集団」は社会主義リアリズムの紹介に役立ち、「文学評論」は作家同盟解散後の文学活動の拠りどころとなった。このようにコップ及作家同盟はたたかいに破れて解散した。もちろんこれは世界に類のない天皇制権力による弾圧に原因がある。全力をつくしてたたかいその前に破れたのである。しかし日本プロレタリア文化運動にその責任がないなどということはできない。以下に於てその内部に於ける原因をさぐりだし明にしようと思う。

日本プロレタリア文学年表VI

日本近代文学研究所

一九三二年（昭和七年）

作品（『』内は發表誌・紙、刊は単行本）

浪曼的（武田麟太郎）『新潮』1
彼女たち（平林たい子）〃
鋪道（中条百合子）『婦人之友』1—4
のんきな患者（梶井基次郎）『中央公論』1
地底の英雄（橋本英吉）『改造』1
雑誌「戦旗」を中心とするプロレタリア文化運動の発展（山田清三郎）『プロ文化』1—4、9
春（立野信之）『プロ文学』1—5、
未組織工場（徳永直）『改造』2
ファッショ（〃）『中央公論』2
明治以後の婦人作家論（窪川鶴次郎）〃
ブルジョア的文学組織に対する活動について（中野重治）『プロ文学』2
前哨（黒島伝治）〃
『平林初之輔遺稿集』（平林初之輔）

文学運動および関係事件

『プロレタリア文学』（作家同盟機関誌）**創刊** 1
『プロット』『プロレタリア美術』『働く婦人』創刊 1
プロレタリア歌人同盟第三回大会、作家同盟への解消を決議 1・17
山田、鹿地、池田、小川 検挙さる 1・23
ラップ批評家会議第一回（モスクワ）1・25—29
『大衆の友』創刊 2
作家同盟モルプ加盟、国際革命作家同盟日本支部となる（略称ナルプ）2
ナルプ東京支部主催プロレタリア文学講習会開かる 2・12—20
コップ内に朝鮮協議会設置さる 2
プロレタリア図書館コップ加盟 2
『われらの世界』（戦無機関誌）創刊 3

社会的事件、外国関係等

議会解散 1・21
スペインに革命起る 1・21
上海事変勃発 1・29
共産党吉田吉市を立候補せしむ 2
総選挙 2・20
クーシネン「日本帝国主義と日本革命の性質」を報告 3・2
「満洲国」成立 3・5
地下鉄スト全協の指導下に闘われ勝利す 3
失業者闘争活潑になる 3
『第二無新』廃刊され『赤旗』に統合 3
全協第一回拡大中央委開催され機構

平凡社刊 2
何をなすべきか（窪川稲子）『中央公論』 3
部署（長沢佑）『プロ文学』 3
プロレタリア文学の一方向（徳永直）『中央公論』 3
『一九三三年版・日本プロレタリア創作集』（作家同盟編） ナルプ出版部刊 3
プロレタリア文学に於ける立遅れと退却の克服へ（宮本顕治）『プロ文学』 4
過去の反戦文学の批判と今後の方向（池田寿夫） 〃
大会を通じて同盟の発展を見る（山田清三郎） 〃
ブルジョア文学の新たなる段階に面して（窪川鶴次郎） 〃
新しき段階に立つラップ（十二月総会におけるアウエルバッハの報告） 〃
志村夏江（村山知義）『プロ文学』作品増刊号 4
詩・間島パルチザンの歌（槇村浩） 〃
監房細胞・後篇（鈴木清） 〃
村のあらまし話（中野重治）『中央

『小さい同志』（コップ） 創刊 3
『コギト』 創刊
『プロレタリア詩』（二、三月合併号・全十二冊）終刊 3
ナルプ常中委「右翼的危険との闘争に関する決議」（プロ文学・四月号）を発表 3・11
汎太平洋挨拶週間開催さる 3・6—18
プロレタリア詩人会ナルプへ解消 3・13
コップへ大弾圧始まる 3・24
波多野、平田、小椋、山田（二四日）、窪川、壺井、小野、小川、河野（二六日）、蔵原、中野、村山、生江（四月四日）、中条（七日）、以後六月末に至るまで松山、大月、今野、片岡宮木、戸台ら検挙（総数四百名、内ナルプ百科同五〇）逃れた宮本、小林、杉本らは地下に潜入。
『われらのグラフ』（コップ）創刊 4
『われらの科学』（プロ科） 創刊 4
コップ第一次革命競争（八月一日まで） 4・16
目標―一、新同盟員の獲得、二、サークルの拡大、三、出版物の発行部数及び配布網の拡大、四、各種刊行物の通信員の拡大、五、プロレタリアートの各種カンパニヤへの同盟員並びにサークル員の動員数の拡大、六、同盟費納入率の向上、七、犠牲者救済活動、八、

活動ともに強化す 4
『赤旗』 六九号より活版印刷実現 4
全協中央常任松原スパイとして摘発さる 5
五・一五事件 5・15
斎藤内閣成立 5・26
三二年テーゼ発表さる（ドイツ版『インプレコール』） 5・30
『政治テーゼ草案』のプロレタリア革命の戦略徹底的に批判され、当面の革命を「社会の主義革命への強行的転化の傾向をもつブルジョア民主主義革命」と規定し、天皇制打倒、大土地所有の廃止、七時間労働制の実現を主要任務として指示する他、反戦闘争の強化、労農同盟の強化、プロレタリア・ヘゲモニーの強化を強調
『歴史科学』 創刊 5
『日本資本主義発達史講座』（全八巻岩波書店刊）の刊行始まる 5—33・8
共産党中委「日本問題に関する新テーゼ発表に際し同志諸君に告ぐ」を発表 6・28
警視庁に特高警察部新設さる 6・29

公論』4
農民副業読本（立野信之）〃
馬鹿（高田保）〃
沼尻村（小林多喜二）『改造』4—5
文学の党派性確立のために（〃）『新潮』4
母たちのために（立野信之）『文芸春秋』4
『創作方法に於ける唯物弁証法のための闘争』（プロ科訳編）ナルプ出版部刊 4
「大衆文学形式」の提唱を自己批判する（徳永直）『プロ文学』5
反対派（高見順）〃
フランス・ブルジョア及びプロレタリア文学（恩田五郎（淀野隆三））〃
転落（平林たい子）『中央公論』5
作家のために（林房雄）『東京朝日』5
踊る（須井一）『プロ文学』6
笑いながら—出てきたあいさつ（林房雄）〃
貨物船（堀田昇一）『プロ文学』6—7
争う二つのもの（藤森成吉）『改造』6
低迷（武田麟太郎）〃

コップ五千円基金募集、九、中央協議会に対する報告の正確さ並に迅速さ。
ソヴェト共産党決議「文学・芸術団体の再組織について」発表さる。
ラップ・ウォアップ解散 4・23
コップ中協「暴圧を蹴って文化連盟を守れ」（檄）を発表、コップへの弾圧続く 4・28
ナウカ社創立 4
『女人芸術』廃刊 5
『プロキノ』（同盟機関誌）創刊 5
『ウリトンム』（コップ朝鮮協議会）創刊 5
ナルプ第五回大会（築地小劇場）5・11
解散を命ぜられ川口、橋本、徳永、猪野、貴司、池田、松井圭子、細田源吉ら検挙さる。中委一般報告「プロレタリア文学運動の当面の諸状勢及びその『立ち遅れ』克服のために」（小林多喜二起草）。創作活動、理論的批評的活動、組織活動、機関誌等に関する副報告。決議「プロレタリア文学運動当面の任務」「立ち遅れの克服と日和見主義に対する闘争について」その他。組織の実情—同盟員三一三名支部・支部二一、サークル約二六〇（四千五百名）、『プロ文学』部数七千、『文学新聞』二万五千（最高）。
プロキノ第四回大会解散を命ぜらる 5・16
ナルプ教育部「創作活動に於ける立

社会大衆党結成 7
全協土建本部平安名常孝をプロヴァカートルとして摘発 7
『三二年テーゼ』赤旗特別号として翻訳公表さる 7・10
国民精神文化研究所設立 8
国際反戦会議（アムステルダム）8
全協第一回中央委員会開かれ君主制打倒を綱領にかかげることを決定 9
川崎第百銀行事件（スパイによるいわゆる銀行ギャング事件）起る 10
岩田義道虐殺さる 10
共産党の各組織弾圧さる。（熱海事件）10・10
全協内に君主制打倒のスローガンを取り下げよという意見強まる 10
共産党中央部公判判決 10・29
岩田義道労農葬 12・4
革命組織への弾圧いよいよ激化 12
共産党中央部再び破壊され、一時潰滅。偽『赤旗』事件起る 12・24

日本三文オペラ（〃）『中央公論』6
『プロレタリア詩の諸問題』（中野重治編）叢文閣刊 6
『プロレタリアートと文化の問題』（**蔵原惟人**）鐵塔書院刊 6
ソヴェート同盟に於ける文学団体の再組織の問題（上田進）『プロ文学』7
ソヴェート文学理論及び文学批評の現状（〃）『マルクス・レーニン主義芸術学研究』7
一九三二年の春（一部分）（中条百合子）『改造』7
文学のために（林房雄）〃
『上海』（横光利一）改造社刊 7
新たなる段階と革命的農民文学に対する再認識（鈴木清）『プロ文学』8
青年（**林房雄**）**『中央公論』**8—9
亀のチャーリー（**藤森成吉**）**『改造』**9
追われる人々（**張赫宙**）〃
火は飛ぶ（徳永直）『中央公論』9
銃後（〃）『日本国民』9
作家として（林房雄）『新潮』9
同志林房雄の近業について（亀井勝一郎）『プロ文学』10
林の「青年」を中心に（徳永直）〃

遅れの克服について」「右翼的危険との闘争に関する決議を徹底せよ」（プロ文学5）を発表 5
労農芸術家連盟解体 5・15
コップ第一回拡中協解散を命ぜられ（築地小劇場）六百名抗議デモ 6・19
労農文化連盟結成大会 6・19
金子、青野、鶴田、伊藤、高津正道らによる旧労芸を中心とする文化団体の協議会。
中条百合子ら釈放 6・25
コップ・帝国主義戦争打倒の文化闘争週間（八月一日まで）7・1
『プロレタリア美術』終刊 7
左翼芸術家同盟創立大会 7・3
『文戦』廃刊 7
労農文学同盟創立大会 7・14
コップ「労農文化連盟に対する声明」（プロ文化・八月号）7・20
『文学時代』終刊 7
中央公論募集の壁小説入選発表（同誌）8
『大阪の旗』（ナルプ大阪支部機関誌）創刊 8
『科学開拓者』（プロ科機関誌）創刊（十月第五号まで）8
『近代生活』終刊 8
労農文学同盟分裂 8・4
葉山、前田河、岩藤ら脱退してプロレタリア

幼き合唱（須井一）『改造』10
政治と芸術・政治の優位性に関する問題（野沢徹〔宮本顕治〕）『プロ文化』10—33・1
乃木大将（林房雄）『改造』10
樹のない村（須井一）『中央公論』10
女の一生（山本有三）『朝日新聞』10—
軍需工場（沢本鶴一〔大江賢次〕）『プロ文学』11—12
革命十五周年を迎えるソヴェート文学（上田進）『プロ文学』11
抗夫傷害日記（橋本英吉）『改造』11
マキシム・ゴーリキイの教訓（亀井勝一郎）『マルクス・レーニン主義芸術学研究』11
『芸術論』（蔵原惟人）**中央公論社刊**11
『史的唯物論より見たる短歌史近代』（渡辺順三）改造社刊12
右翼的偏向の諸問題（堀英之助〔小林多喜二〕）**『プロ文学』**12—
文学に関する感想（中条百合子）『プロ文学』12
若い息子（野上弥生子）『中央公論』12

作家倶楽部を創立。（残留組はのち左翼芸術家同盟を合同）
『プロット』（八・九月合併号・全九冊）終刊9
『レフト』（労農文学同盟機関誌）創刊9
コップ・第二次革命競争（十一月七日まで）9・4
第一段階（九月五日より九月末迄）満州事変一週年記念日を中心に反戦闘争を実践、第二段階（十月一日より十四日迄）渡政デーを中心に白色テロル軍事的警察的支配反対、第三段階（十月十五日より十一月七日迄）ソヴェート文化のアジプロ、反ソヴェート・デマの粉砕。
『文学新聞』の政治主義に対し批判起る9
唯物論研究会創立10・23
岡邦雄、戸坂潤、服部之総、三木清らによる（会員一五〇名）
ナルプ常中委「創作活動並びに批評活動についての大衆討論に関する決議」（プロ文学・十一月号）を発表10
コップ常中協「創立一週年記念に際しての闘争宣言」（プロ文化・十一、十二月合併号）を発表10・24
全ソ作家同盟組織委員会第一回総会開かる（モスクワ）10・29—11・13
『唯物論研究』（唯研機関誌）創刊11
十二月末のナルプの実情
同盟員三二四名、支部支準、三〇、役員・江口、橋本、鹿地、秀島、立野、亀井、坂井、山田、川口、中条、上野

一九三三年（昭和八年）

一九三二年の春（中条百合子）『**プロ文学**』1―2
吼える轡笛（鈴木清）『プロ文学』1
労働者源三（須井一）『改造』1
『**清水焼風景**』（〃）**改造社刊** 1
青い寝室（林房雄）『婦人公論』1
文学サークル（徳永直）『中央公論』1
一連の非プロレタリア的作品（**中条百合子**）『**プロ文学**』1
『プロレタリア文学概論』（川口浩）白揚社刊 1
『芸術批判の方法論』（山岸又一）〃
救農工事（平林たい子）『改造』2
作家への手紙（林房雄）〃
ソヴェト文学の近況（上田進）『プロ文学』2
ソヴェート同盟に於ける芸術団体再組織の本質的意義（白浜黻〔杉本良吉〕）『プロ文化』2
『葉山嘉樹全集』（葉山嘉樹）改造社刊 2
『**レーニン主義文学闘争への道**』（**宮本顕治**）木星社刊 2
釜ヶ崎（武田麟太郎）『中央公論』3

『**プロレタリア演劇**』（プロット機関誌）再刊 1
『**労農文学**』（プロレタリア作家倶楽部機関誌）創刊 1
プロレタリア科学研究所解散・プロレタリア科学同盟創立、結成宣言を発表 1・3
コップ第三次革命競争（メーデーまで）1・15
全ソ作家同盟組織委員会第二回総会開かる（**モスクワ**）2・12
小林多喜二検挙、築地警察署において虐殺さる 2・20
小林多喜二労農葬（築地小劇場解散検束）全国に行わる 3・15
『プロ文化』『プロ文学』『文学新聞』『大衆の友』『働く婦人』『赤旗』等が虐殺抗議・追悼特集号を発行。コップは二月二十日を文化デーと定め、小林賞の設定を発表
ナルプ常中委「右翼的偏向との闘争に関する決議」（プロ文化・四月、プロ文学・四、五月合併号）を発表 3
『農民の旗』（ナルプ）創刊 3
『短歌評論』（短歌評論社）創刊 4
渡辺順三、坪野哲久、矢代東村らに

日本共産党山本正美（アレキセーフ）を中心に中央再建 1
河上肇・大塚金之助検挙さる1・11
1
ヒットラー政権獲得 1・30
左翼組織に右翼敗北主義的傾向現われはじむ 2
全日本婦選大会開かる 2・18
ドイツ共産党弾圧さる 2・28
全協中央部再建 3
アメリカに金融恐慌はじまる 3
メーデー準備に全労統一全国会議等をふくむ統一戦線形態の委員会部分的に組織さる 4
大阪で愛国労働団体勤労祭開かる 4・29
分裂メーデー第十四回メーデー5・1
全協中央は客観状勢主体的条件の有利を強調すれど、活動はしだいに弱化の兆を示す 5
京大・滝川事件 5
共産党中央部弾圧で破壊され、野呂栄太郎らにより再建さる 5

地区の人々（小林多喜二）『改造』3
転換時代（党生活者）（〃）『中央公論』4―5
モルヒネ（堀田昇一）〃 4
同志小林の業績の評価に寄せて（中条百合子）『プロ文化』4
『日和見主義に対する闘争』（小林多喜二）コップ出版部刊 4
『小林多喜二全集・二巻』（小林多喜二）ナルプ出版部刊 4
前進のために（中条百合子）『プロ文学』4・5合併号
『地区の人々』（小林多喜二）改造社刊 5
『転形期の人々』（〃）国際書院刊 5
製鉄起業祭（金親清）『中央公論』6
『蔵原惟人書簡集』（蔵原惟人）ナルプ出版部刊 6
『五稜郭血書』（久保栄）プロット出版部刊 7
文学作品の価値に関する一連の諸問題覚え書（高瀬太郎（本多秋五））『マルクス・レーニン主義芸術学研究』7
農民文学の現状（本庄陸男）〃
主として「良心的」小市民作家の傾よる

『われらの科学』終刊 4
『科学新聞』（科学同盟）創刊 4
『コップ』（コップ中央機関誌・新聞型四頁）創刊、部数五千、以後『プロ文化』は理論機関誌となる 4
『大衆の友』（三巻四号）終刊 5
『プロレタリア演劇』終刊 5
『文化集団』創刊、長谷川進、秀島武らによる 6
ナルプ第六回大会（実質は拡中委）開かる 6・5
中心的任務「反戦闘争の革命的展開と大衆的闘争への転換の達成」。スローガン「理論的及創造的活動に於ける党派性の貫徹・革命的農民文学同伴者文学、革命的民族文学のプロレタリア的誘導、封建的ブルジョア文学、ファシズム文學の打倒、軍事的警察的天皇制テロル反対、コップ、ナルプ並に一切の階級的政治犯人の即時釈放」等。同盟員七百、支部支準二九
この頃、片岡鉄兵ナルプを脱退
コップ第二回拡中協（築地小劇場）解散検束 6・18
この時、十一団体、地協約二十、所属員二千（？）、「コップ当面の任務」（プロ文化六月号）を発表す。
杉本良吉検挙さる 7・7
『プロット』再刊 8
『京大俳句』創刊号

佐野・鍋山転向を声明 6・9
反ナチス、ファッショ粉砕同盟結成 6・17
世界反戦大会（パリ。日本では片山潜出席）6・10―11
共産主義者の転向続出し、既決三五・八%、未決三〇・三%に達す 7月末
学芸自由同盟結成 7
神奈川で上海反戦大会支持神奈川地方委員会結成（二七工場）7
三田村・高橋転向を声明 7・6
総同盟ストライキ統制規約制定 8・4
全協本部第二回拡大開催を計画し、君主制打倒の綱領撤回を決定 9
極東反戦大会（上海）9・30
全協日食政策の徹底的自己批判を訴う。これにより日食は刷同的傾向と批判され内部対立へ発展の萌し 10
共産党中央委員野呂栄太郎逮捕さる 11
片山潜歿す 11・5

向について（阪井徳三）〃
本郷村善九郎（江馬修）『中央公論』7
飯場で（松田解子）〃 8
芸術評価の問題（蔵原惟人獄中書簡）〃
子（貴司山治）『改造』8
市井事（武田麟太郎）〃
風雨強かるべし（広津和郎）『中外商業紙』8―
創作方法上の新転換（徳永直）『中央公論』9
臨終の田中正造（木下尚江）〃
『社会主義的リアリズムの問題』（外村史郎編訳） 文化集団社刊 9
プロレタリア文学の再出発（林房雄）『改造』10
進路（窪川いね子）『中央公論』10
ナルプに対する希望（徳永直）『新潮』10
文化サークル活動に対する懐疑的、清算主義的傾向の決算（山崎利一〔宮本顕治〕）『プロ文化』10
文化・芸術運動の当面する新たなる諸任務（滝沢俊太・佐々木信）『プロ文化』11

『ウリトンム』『働く婦人』（八・九月終刊
治安維持法改悪宣伝され、ナルプその他に広汎な動揺起る 8
徳永の「創作方法上の新転換」を中心にナルプ内に対立激化し、ほとんど組織としての機能を失う 9
『プロレタリア文学』（二巻六号全二十冊）**終刊** 10
『文学新聞』終刊
コップ常中協「最近のわが文化運動に於ける右翼日和見主義的傾向並びに極左的偏向に対する闘争について檄す」（『プロ文化十一月号）を発表 10・中旬
コップ・アジ・プロ部「社会主義的レアリズムの組織的解決に関する方策」（『プロ文化十一月号）を発表し、「批評家会議」の招集を決定 10
『文学界』『行動』創刊 10
創作方法に関する第一回批評家会議開かれるも出席者は動員されたメンバーの半数以下（「報告・討論」『プロ文化・十二月号）11
窪川保釈出所す 11
藤森成吉ナルプを脱退 11

小畑、大泉スパイとして摘発され査問さる（「赤色リンチ事件」）12
宮本顕治捕わる 12
共産党中央破壊さる 12

U新聞年代記（上司小剣）『中央公論』11 出郷（貴司山治）〃

文化・芸術運動の基本的方向の歪曲に抗して（山崎利一）『プロ文化』11—12

一つの提案（林房雄）『文化集団』11

社会主義リアリズムの問題について（中条百合子）〃

囚われた大地（平田小六）『**文化集団**』11—34・5

『芸術上のレアリズムと唯物論哲学』（森山啓）文化集団社刊 11

一転機に立つ文学運動（山田清三郎）『人物評論』11

ネオ・ヒューマニズムの問題と文学（三木清）『文芸』11

『**文学運動の新たなる段階のために**』（鹿地亘）国際書院刊 12

文学は復興する（林房雄）『文学界』12

肉体（本庄陸男）〃

プロレタリア文学の急転向（橋本英吉）『文芸春秋』12

この頃、徳永直、渡辺順三もナルプを脱退

宮本顕治検挙さる 11・25

『文芸』創刊 11

勝本帰国（以後軟禁状態）11・29

『プロット』『映画クラブ』終刊 12

『唯研ニュース』創刊 12

ナルプ「作家同盟当面の諸問題について大衆討論を組織せよ」（プロ文学号外）**を発行** 12

当時の役員、常中委長、山田、各部長鹿地、亀井、淀野、川口、長谷川阪井、江口、立野、中条、佐野獄夫

一九三四年（昭和九年）

小説の一家（**中条百合子**）『**文芸**』1
没落後（佐々木一夫）『文学界』1
「文学界」について（林房雄）〃
文学再建の意志（〃）『東京朝日』1
作家とリアリズム（〃）『新潮』2
プロレタリア文学の新段階（山田清三郎）『文学建設者』2
主体的リアリズムの問題（長谷川一郎）『人物評論』2
世紀病（藤沢桓夫）『中央公論』2
『**日本プロレタリア文学運動の方向転換のために**』（**鹿地亘**）**ナルプ出版部刊** 2
『**文学のために**』（**林房雄**）**ナウカ社刊** 2
『青年』（〃）中央公論社刊 3
作家的良心の所在（亀井勝一郎）『文学評論』3
創作理論に関する断片（**森山啓**）〃

『新文戦』（第二次労芸機関誌）創刊 1
『読書』創刊（『何を読むべきか改題）白楊社、岩村三千夫らによる、九月まで 1
プロレタリア美術家同盟解散決議さる 2・19
中条百合子検挙さる 1
『プロレタリア科学』（六巻二号）終刊 2
『文学建設者』創刊 山田、鹿地、藤森らが執筆 2
プロット新方針「プロ演劇の不振を如何に打開するか」を発表 2・3
労農芸術家連盟創立 2・4
プロレタリア作家倶楽部、左翼芸術家同盟の合同、書記長・金子、委員・前田河、金子、伊藤、檜六郎他
ナルプ拡中委新方針、新組織形態、解散宣言を決定 2・22
今後の組織形態としては、イ、各支部を独立した文化団体とし各地区には独立した文化サークルとする、ロ、専門別文学研究団体を作り夫々機関紙を設け、それを中心にしたグループを作る、ハ、各団体は従来のナルプの綱領に拘泥せぬ各々独自の綱領を作る
プロキノ第五回大会非合法で行わる 2・26

共産党党員再登録開始 1
共産党の全協再組織方針に全協中央反対し対立激化 1
フランスにゼネスト 2・12
共産党全協中央の小高らを除名しその辞任を要求 2
野呂栄太郎警察にて死亡させられる 2・19
全協本部反対派共産党指導下に江東地区拡大協議会を開催し内部対立は組織的対立と化す 3
共産党△△××細胞会議の名による党中央委に対する反対派的活動はじまる 3
治安維持法改悪案衆議院で可決さる 3・16
反帝同盟大検挙 3

『**文学評論**』**創刊**(**ナウカ社**) 徳永、渡辺、森山、らによる、部数三千―五千 3
『**詩精神**』**創刊**(**前奏社**) **森山**、**上野小熊**、**北川冬彦らが執筆** 3
『**関西文学**』 創刊、ナルプ大阪支部員が中心 3
ナルプ解体声明を発表、二月二十二日付、モルプ支部、作家同盟第三回拡大中央委員会の名による 3・12

日本プロレタリア文学大系　6　定価一二〇〇円

一九五四年十一月三十日　第一版発行
一九六九年　六　月十五日　第三刷発行

編者代表　野間　宏
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京　八四一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

全9巻　第7回配本